

茨城県教育財団文化財調査報告第250集

村松白根遺跡 1

大強度陽子加速器施設事業に伴う
埋蔵文化財調査報告書 I

(上巻)

平成 17 年 3 月

日本原子力研究所
高エネルギー加速器研究機構
財団法人茨城県教育財団

茨城県教育財団文化財調査報告第250集

むら まつ しら ね
村松白根遺跡 1

大強度陽子加速器施設事業に伴う
埋蔵文化財調査報告書 I

(上巻)

平成 17 年 3 月

日本原子力研究所
高エネルギー加速器研究機構
財団法人茨城県教育財団



遺跡遠景（昭30.6）

写真提供：独立行政法人国立病院機構茨城東病院



上空より（平16.2）

写真提供：日本原子力研究所東海研究所

序

日本原子力研究所と高エネルギー加速器研究機構は、平成18年度末の完成を目指して、加速した陽子から生み出される二次粒子を利用して、様々な分野で最先端の研究を行うための施設である大強度陽子加速器施設（J-PARC）の建設を東海村村松白根地区において進めています。

この事業予定地内には埋蔵文化財包蔵地である村松白根遺跡が所在します。

財団法人茨城県教育財団は、日本原子力研究所と高エネルギー加速器研究機構から埋蔵文化財の発掘調査について委託を受け、平成15年4月から平成16年3月まで発掘調査を実施しました。

本書は、村松白根遺跡の調査成果を収録したものです。本書が学術的な研究資料としてはもとより、郷土の歴史に対する理解を深め、ひいては教育・文化の向上の一助として御活用いただければ幸いです。

なお、発掘調査から報告書の刊行に至るまで、委託者である日本原子力研究所と高エネルギー加速器研究機構から多大な御協力を賜りましたことに対し、厚く御礼申し上げます。

また、茨城県教育委員会、東海村教育委員会をはじめ、関係各位からいただいた御指導、御協力に対し、感謝申し上げます。

平成17年3月

財団法人 茨城県教育財団

理事長 齋藤 佳郎

例 言

- 1 本書は、日本原子力研究所及び高エネルギー加速器研究機構の委託により、財団法人茨城県教育財団が平成15年度に発掘調査を実施した、茨城県那珂郡東海村村松白根146番地の25ほかに所在する村松白根遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査期間及び整理期間は、以下のとおりである。
調査 平成15年4月1日～平成16年3月31日
整理 平成16年4月1日～平成17年3月31日
- 3 発掘調査は、調査課長川井正一のもと、以下の者が担当した。
首席調査員兼第2班長 鯉 渕 和 彦
首席調査員 荒 井 保 雄
主任調査員 飯 島 一 生
主任調査員 後 藤 一 成
主任調査員 皆 川 修
主任調査員 芳 賀 友 博
主任調査員 寺 内 久 永
- 4 整理及び本書の執筆・編集は、整理第二課長鶴見貞雄のもと、主任調査員芳賀友博が平成16年4月1日～平成17年3月31日まで執筆・編集、主任調査員寺内久永が平成16年4月1日～9月30日、平成17年2月1日～3月31日まで執筆を担当した。執筆分担は、以下のとおりである。
芳 賀 例言・凡例・抄録、第2章第1・2節、第3章第1・2・3節1, 2, 4, 5 (1) (3) (4) (5) (6) (9) (10), 第4節1, 2 (1) (2) (3), 3
寺 内 第1章第1・2節、第3章第3節3 (1) (2), 5 (2) (7) (8), 第4節2 (4) (5)
- 5 本書の作成にあたり、中・近世における製塩跡の文献史料については東海村文化財審議委員の佐藤次男氏、炭素年代測定については名古屋大学助手の小田寛貴氏、人骨・獣骨の同定については国立歴史民俗博物館考古研究部教授の西本豊弘氏、貝集積地と貝の分類についてはひたちなか市文化・スポーツ振興公社所長の鈴木素行氏、中世の生産遺跡と出土遺物については国立歴史民俗博物館考古研究部助教授の小野正敏氏、古銭については堺市立埋蔵文化財センター学芸員の嶋谷和彦氏、金属製品のX線撮影については財団法人とちぎ生涯学習文化財団栃木県埋蔵文化財センター主査車塚哲久氏にご指導いただいた。
- 6 出土遺物の自然科学分析はパリノ・サーヴェイ株式会社、枝銭の成分分析と鉛同位体比測定は、国立歴史民俗博物館情報資料研究部助教授の齋藤努氏、助手小瀬戸恵美氏に依頼した。成果は付章として巻末に掲載した。

凡 例

1 地区設定は、日本平面直角座標第IX系座標を準拠し、 $X = +50,120\text{m}$ 、 $Y = +68,760\text{m}$ の交点を基準点(A 1 a1)とした。なお、この原点は、世界測地系による基準点である。

この基準点を基に遺跡範囲内を東西・南北各々40m四方の大調査区を分割し、さらに、この大調査区を東西・南北に各々10等分し、4m四方の小調査区を設定した。

大調査区の名称は、アルファベットと算用数字を用い、北から南へA、B、C…、西から東へ1、2、3…とし、「A 1 区」、「B 2 区」のように呼称した。さらに小調査区は、北から南へa、b、c…j、西から東へ1、2、3…0とし、名称は、大調査区の名称を冠して「A 1 a1区」、「B 2 b2区」のように呼称した。

2 土層観察と遺物における色調の判定には、『新版標準土色帖』(小山正忠・竹原秀雄編著 日本色研事業株式会社)を使用した。

3 実測図・一覧表・遺物観察表等で使用した記号は次のとおりである。

遺構 SH—釜屋 SN—鹹水槽・粘土貼土坑 SI・SB—建物跡 SK—土坑 HK—整地面

SD—溝跡・土樋 SM—貝集積地 SX—不明遺構 P—柱穴 Pg—ピット群

遺物 P—土器・陶器 TP—拓本記録土器 DP—土製品 Q—石器・石製品 M—金属製品・古銭

G—ガラス製品 B—骨角製品・貝加工品 T—瓦

土層 K—攪乱

(1) 釜屋とは竈を築き鹹水(濃い塩水)を火で煮詰めて塩を作るための建屋をいう。釜屋の中央部には竈、その周囲や屋外に鹹水槽が位置する。釜屋に伴うと判断される屋外鹹水槽は同じ製塩区域の中で報告した。

(2) 建物跡は黒色土を中心に構築された締まりのある平坦な面と炉跡、それに伴う規則的に配列された柱穴、その生活面から遺物が検出された範囲とした。住居と掘立柱建物の性格をもつ。





(3) 整地面は黒色土を主体とする盛土によって構築された締まりのある平坦な面と、それに伴う遺物が検出された範囲である。

4 遺構・遺物実測図の作成方法については、次のとおりである。

(1) 遺構全体図は500分の1、製塩区域は200分の1、遺構は80分の1、または120分の1に縮尺して掲載した。

(2) 遺物は原則として3分の1の縮尺にした。種類や大きさにより異なる場合がある。

(3) 遺構及び遺物の実測図中の表示は次のとおりである。

	灰・施釉・褐色砂		黒色土・油煙・煤
	火床面・焼砂・貝付着		粘土・炭化材
●土器・拓本記録土器	○土製品	□石器・石製品	
△金属製品・古銭	▲瓦	■骨角製品	
☆ガラス製品	★貝加工品		

(4) 当遺跡から検出された遺構の土層解説は、色調、含有物の種類と量、粘性、締まり具合などを観点にし、下記のように番号化した。

1は砂A層	5 Y 7/2	灰白色	貝殻片微量で白砂が主体である層
2は砂B層	5 Y 4/2	灰オリーブ色	炭化粒子・貝・黒色土B微量で砂質層
3は黒A層	5 Y 2/1	黒	炭化物・炭化粒子・貝が少量、灰が微量含まれ、黒色土と混ぜて作られた層で、主に当遺跡では遺構の構築に使用された層
4は黒B層	5 Y 3/2	オリーブ黒	炭化物・炭化粒子・灰が微量に含まれた黒色の砂質層
5は黒C層			上記の黒A層と黒B層が混じるが、含有割合は黒A層が上回る層
6は黒D層			上記の黒A層と黒B層が混じるが、含有割合は黒B層が上回る層
7は粘土層	5 Y 5/3	灰オリーブ	粘土ブロック多量、炭化粒子・黒Aが少量、炭化物が微量に含まれ、主に、鹹水槽や粘土貼土坑などの遺構を構築する際に使用された層
8は焼砂層			
9は灰層			
10は暗褐色土層			暗褐色土と山砂を混ぜ合わせた層で釜屋の構築などに使用された層

(5) 模式図については、調査で確認された段階を示したものである。

(6) 遺構平面図の黒色土層の表示は、煩雑になるおそれがあるため省略した。

5 一覧表・遺物観察表の表記は次のとおりである。

(1) 位置は遺構の占める小調査区範囲を表示した。

(2) 標高は遺構確認面のレベルを記した。

(3) 計測値の単位は、cm, gで示した。なお、現存値は()で、推定値は[]を付して示した。

(4) 遺物観察表の備考の欄は、残存率や写真図版番号等、その他必要と思われる事項を記した。

(5) 遺物番号については通し番号とし、挿図、観察表、写真図版に記した番号は同一とした。

(6) 釜屋跡・建物跡・整地面の「主軸方向・長軸方向」は現存する形状や柱穴の配列等から主・長軸を判断し、その主軸または長軸が座標北からみて、どの方向にどれだけ振れているかを角度で表示した。

(例 N-10°-E)

(7) 規模の欄の深さは、遺構確認面から火床または底面までの計測値を記した。

(8) 平面形は現存している形状(鹹水槽は上端面)で判断し表記した。

(9) 人骨の推定年齢については、以下のように区分した。

新生児：生後1～4週間	乳児：0～1歳	幼児：2～5歳	少年：6～12歳
若年：13～19歳	壮年：20～39歳	熟年：40～59歳	老年：60歳以上

抄 録

ふりがな	むらまつしらねいせき							
書名	村松白根遺跡1							
副書名	大強度陽子加速器施設事業に伴う埋蔵文化財調査報告書							
巻次	I							
シリーズ名	茨城県教育財団文化財調査報告							
シリーズ番号	第250集							
著者名	芳賀友博 寺内久永							
編集機関	財団法人 茨城県教育財団							
所在地	〒310-0911 茨城県水戸市見和1丁目356番地の2 TEL 029-225-6587							
発行機関	財団法人 茨城県教育財団							
所在地	〒310-0911 茨城県水戸市見和1丁目356番地の2 TEL 029-225-6587							
発行日	2005(平成17)年3月25日							
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード	北緯	東経	標高	調査期間	調査面積	調査原因
むらまつしらねいせき 村松白根遺跡	いばらきけん なかぐん 茨城県那珂郡 とうかいむらむらまつしら 東海村村松白 ね 根146番地の 25ほか	08341 — 174	36度 26分 58秒	140度 36分 07秒	4 ～ 10 m	20030401 ～ 20040331	32,060m ²	大強度陽子 加速器施設 事業に伴う 事前調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
村松白根遺跡	製塩跡	中世	釜屋跡	21軒	土師質土器(皿・内耳鍋),	中世後半以降の大規模な製塩跡を中心とする生産遺跡である。それに伴うと考えられる建物跡、畝状遺構、墓跡等を確認した。 また、土師質土器、中国製碗・皿、古瀬戸等の陶磁器のほか1,700枚を超える古銭や枝銭も出土しており、製塩と集落の様相を明らかにするための貴重な資料といえる。また、永樂銭の枝銭は本邦初の出土である。		
			鹹水槽	195基	陶磁器, 金属製品(火打金・釘・耳金・吊金具・小刀), 古銭, 石製品(五輪塔・宝篋印塔), 砥石, 人骨			
	集落跡	中世	土樋	2条	土師質土器(皿・内耳鍋・香炉), 陶磁器(甕・灰釉丸皿・折縁皿・播鉢・青磁碗・白磁碗・染付皿・天目茶碗), 金属製品(火打金・釘・小刀・斧・鉄鍋), 古銭(枝銭を含む), 石製品(硯), 石器(石臼・茶臼・石鍋・火打石), 骨角製品(斧・サイコロ), 人骨, 獣骨			
			製塩跡に組み込まれない鹹水槽	109基				
			土坑	3基				
			建物跡	38軒				
			整地面	33か所				
			畝状遺構	1か所				
			土壇墓	109基				
			土壇	7基				
			土坑	732基				
			溝跡	3条				
			貝集積地	47か所				
			集石	6か所				
			遺物集中地点	1か所				
			埋納遺構	1か所				
			ピット群	1か所				
			不明遺構	14か所				

目 次

— 上 卷 —

序	
例 言	
凡 例	
抄 録	
目 次	
第1章 調査経緯	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査経過	1
第2章 位置と環境	2
第1節 地理的環境	2
第2節 歴史的環境	2
第3章 調査の成果	7
第1節 調査の概要	7
第2節 基本層序	7
第3節 遺構と遺物	9
1 製塩区域	9
(1) 製塩跡	9
(2) 製塩跡に組み込まれない鹹水槽	111
2 建物跡	128
3 墓域	299
(1) 土墳墓	299
(2) 土壇(動物の埋葬)	361
4 畝状遺構	368

— 下 卷 —

5 その他の遺構と遺物	371
(1) 整地面	371
(2) 貝集積地	420
(3) 溝跡	431
(4) 土坑	432
(5) ピット群	460
(6) 集石	464
(7) 遺物集中地点	467
(8) 埋納遺構	470
(9) 不明遺構	494
(10) その他の出土遺物	507
第4節 まとめ	544
付 章	567
写真図版	
付 図	

第1章 調査経緯

第1節 調査に至る経緯

日本原子力研究所と文部科学省高エネルギー加速器研究機構は、大強度陽子加速器施設の建設を進めている。平成14年1月25日、日本原子力研究所東海研究所長は、茨城県教育委員会教育長に対して、大強度陽子加速器施設建設地内における埋蔵文化財の所在の有無及び取扱いについて照会した。これを受けて茨城県教育委員会は、平成14年2月4・5日に現地踏査を、平成14年2月25・26・28日、7月30・31日、9月17日、11月26日～29日、12月5・6・12・13日、平成15年2月4・5・7・12・17・18日に試掘調査を実施し、遺跡の所在を確認した。平成14年12月17日、茨城県教育委員会教育長は、日本原子力研究所東海研究所長あてに、事業地内に村松白根遺跡が存在する旨回答した。

平成15年1月21日、日本原子力研究所東海研究所長は、茨城県教育委員会教育長に対して、文化財保護法57条の3第1項の規定に基づき、土木工事等のための埋蔵文化財包蔵地の発掘について通知した。茨城県教育委員会教育長は、計画変更が困難であることから、記録保存のための発掘調査が必要であると判断し、平成15年2月4日、日本原子力研究所東海研究所長あてに、工事着手前に発掘調査を実施するよう通知した。

平成15年2月24日、高エネルギー加速器研究機構長、日本原子力研究所東海研究所長は、茨城県教育委員会教育長に対して大強度陽子加速器施設建設に係る埋蔵文化財発掘調査の実施について協議した。平成15年2月26日、茨城県教育委員会教育長は高エネルギー加速器研究機構長、日本原子力研究所東海研究所長あてに、村松白根遺跡について発掘調査の範囲及び面積等について回答し、併せて、埋蔵文化財の調査機関として財団法人茨城県教育財団を紹介した。

財団法人茨城県教育財団は、日本原子力研究所東海研究所長から埋蔵文化財発掘調査事業について委託を受け、平成15年4月1日から平成16年3月31日まで発掘調査を実施することとなった。

第2節 調査経過

調査は、平成15年4月1日から平成16年3月31日まで実施した。その概要を表で記載する。

工程	月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
調査準備		■											
表砂除去		■											
遺構調査		■											
遺物洗浄 注記 写真整理		■											
補足調査 撤収													■

今回の調査では、遺構確認面の下層に何層もの遺構面が存在するので、遺構確認面の試掘を行い遺構面の数の把握を行った。そして、最下層の遺構面を調査するまで重機を使用して表砂除去を行った。

なお、調査期間中、新たな埋蔵文化財の発見があり、試掘調査とその後の協議が行われた。その結果、本遺跡に属するものであることが確認され、調査区の再構成が行われた。

第2章 位置と環境

第1節 地理的環境

村松白根遺跡は、那珂郡東海村村松白根146番地の25ほかに所在し、新川下流左岸の砂丘上に位置する。

遺跡の位置する砂丘は那珂台地の東部に広がり、南は那珂川、北は久慈川に挟まれて南北に延びている。東海村の海岸線は、昔から「千々乱風」の伝説や、かつて久慈川河口を北に曲げた「向渚」と呼ばれる砂嘴を発達させるほど砂の供給が多い。この砂は那珂川などが上流から運んできたもので、北上する沿岸流によってさらに運ばれ、阿字ヶ浦から東海村の海岸に堆積し、砂丘を形成している。東海村の砂丘は比較的薄く堆積している台地上の砂丘と、厚く堆積している海岸寄りの海岸砂丘に分けることができる。この海岸砂丘には、村内の内陸側に位置する砂丘と海岸側に位置する二列の砂丘が確認できる。内陸側の砂丘の基底ができた時代は、今から約3,000～4,000年前にさかのぼると推定される。その後、海が退き始め、ほぼ現在の海水準になると、沖合に砂州が姿を現した後、砂が供給されながら発達し、海岸側の砂丘が形成されたといわれている¹⁾。海岸砂丘の大部分は、大正2年以来の砂防林植栽事業で松林になり砂丘は固定されたが、汀線付近の新しい砂丘は今でも砂が移動している。

第2節 歴史的環境

現在のところ、中道前東遺跡〈2〉^{なかもちまえひがし}、八幡後遺跡〈3〉^{やはたうしろ}から旧石器時代の剥片が採集されているが、明確な形で遺跡は発見されていない。

縄文時代の遺跡は早期から晩期までほぼ全時期に亘って確認されており、当地域が早くから生活の舞台として利用されていたことがわかる。特に、阿漕ヶ浦や真崎浦、細浦は入り江となって穏やかな内湾を形成し、魚介類などの食糧獲得の重要なエリアであった。これらの内湾の周辺には真崎貝塚〈4〉^{まさき}や御所内貝塚〈5〉^{ごしょうち}、平原貝塚群〈6〉^{ひばら}などが位置している。その他、久慈川右岸の南西に谷が入り込んだ台地縁辺部に石神外宿貝塚〈7〉^{いしがみとじゆく}、後期は堀ノ外遺跡〈8〉^{ほりのそと}や東中宿A遺跡〈9〉^{ひがしなかじゆく}がある。

弥生時代の遺跡は、他の時代の遺跡と複合している場合が多く、弥生時代の遺跡自体はそれほど広い面積を有していない。発掘調査された遺跡としては、須和間遺跡〈10〉^{すわま}や部原北遺跡〈11〉^{ぶはらきた}及び部原遺跡〈12〉^{ぶはら}が挙げられる。部原北遺跡の住居構成などから、弥生時代の集落構成はそれほど大きなものではなく、村内全域には小規模な集落が点在していたものと考えられる。

村内の古墳群は舟塚古墳群〈13〉^{ふなづか}、真崎古墳群〈14〉^{まさき}、須和間古墳群〈15〉^{すわま}、下ノ諏訪古墳群〈16〉^{しものすわ}、白方古墳群〈17〉^{しらかた}、石神外宿古墳群〈18〉^{いしがみとじゆく}、中道前古墳群〈19〉^{なかもちまえ}、二軒茶屋古墳群〈20〉^{にけんぢや}の8か所が確認されている。

これらの古墳群は、大きく久慈川流域、細浦沿岸、真崎浦沿岸の3地区に多く分布している。古墳の中には埴輪を有するものが多く、ほとんどの古墳から円筒埴輪の出土が確認されている。

須和間古墳群周辺に位置する権現山古墳（前方後円墳、全長87m）〈21〉^{ごんげんやま}や別当山古墳（円墳、直径60m）〈22〉^{べつとうやま}が古い段階の古墳とされ、出土した埴輪から古墳時代中期に編年されている。また、最近調査が行われた愛宕山古墳（円墳、直径25m）〈23〉^{あたごやま}も出土遺物や埋葬形態から、古墳時代中期に位置付けされている²⁾。

さらに古墳時代後期になると、舟塚古墳群や真崎古墳群、白方古墳群が形成され、その中でも、舟塚1号

墳、^{ぶはら}部原古墳〈24〉、白方古墳群などが調査されている。舟塚1号墳から出土した「手甲をつけた男子埴輪」と核燃料サイクル開発機構東海事業所造成中に出土した「武人埴輪」は、当時の生活や葬送儀礼にかかわる貴重な資料として注目される。村内の古墳群の形成時期を概略的に見ると、権現山古墳の築造後に舟塚古墳群や中道前古墳群などにも墓域が移り、新しい墓域として勢力が分散した結果と推測される。

奈良・平安時代の遺跡は、^{おちやの}小澤野 A 遺跡〈25〉、^{いしほむこう}石橋向遺跡〈26〉がある。各時代と同じように久慈川右岸の台地上や細浦、真崎浦沿岸に集中する傾向がある。確認された遺構や出土遺物などから、この地域は陸奥の蝦夷征伐に関わる兵士や物質の輸送などとも関連し、常陸国府から陸奥へ通じる陸上交通及び海上交通の重要な地域であったと考えられる。

中世は、主として佐竹氏の支配下であった。佐竹氏は太田城や城下への物質の輸送に久慈川などの舟運を利用していたと思われる。現在の照沼と村松の間には、真崎浦という入り江が広がっており、佐竹氏は早くから真崎浦や村松・白方なども水上交通の要衝としてこの地を注目していたのである。当時、都から東国への航路は、伊勢湾の大湊から武蔵国の品川に寄港、そこから鹿島、那珂湊を経て村松の港に着くこともできたのである。こうした、海上交通の要地だったので、佐竹氏は義重の三男義澄の子義連を真崎の地におくり、義連は真崎三郎と称し、真崎浦に突き出した半島に^{まさきじょう}真崎城〈27〉を構え、入り江に出入りする船の監視や沿岸漁民を支配した。その後真崎城を拠点として南北朝の動乱期や戦国時代には、佐竹氏に従って各地を転戦して活躍し、佐竹一門のなかでも有力な一族に成長した。

1492年佐竹・山入氏の争乱である佐竹の乱の和議が成立すると、横領された佐竹領の調査書類である「^{おかもとけぶんしょ}岡本家文書」(1493年)が作成された。その中の「当乱相違地注文写」によると、佐竹領の侵略を最も激しく行ったひとりに^{いしがみじょう}石神城〈28〉主の小野崎氏が挙げられる。小野崎氏は、秀郷流藤原氏の一流が太田郷に来住し、小野崎氏を名乗ったことにはじまる。小野崎とは、現在の地名でいうと常陸太田市端竜町で、水にも恵まれ早くから開発の進行した地域であった。小野崎道盛は小野崎城を築き、その子道長は佐竹昌義に臣従し、佐竹氏に仕えることとなった。そののち、子孫が石神、額田を拠点として居住した。

また、「当乱相違地注文写」の中に、「村松塩竈まさき違乱」との記述がある。それによると佐竹氏は塩浜の地を源頼朝によって取り上げられ、それにかかわる製塩の地を北茨城や高萩の海岸地域に設けたが、1485年の磐城常陸の佐竹領内への侵略によって、磐城氏に割譲してしまった。そのため残った村松の塩竈の果たす役割は大きかったが、その塩竈も真崎氏が横領してしまったことが示されている。その後、真崎・小野崎両氏は1602年の佐竹氏の秋田移封に伴って、当地方を去って秋田へ移ることになる。

『日本塩業体系』には、村松浜の農民十七人が役所に差し出した請負手形について書かれている。生産方法や生産額は明らかになっていないが、農民十七人が共同で運上金上納を目的として製塩を行っており、自家消費ではなく、販売を目的として製塩を行っていることがわかる。

東海村の照沼・村松、ひたちなか市の馬渡・長砂・磯崎・阿字ヶ浦といった海岸沿いの村々に語り継がれている「千々乱風」の伝説がある。それによると、江戸時代の初期ごろに大風が吹き続け、これらの村々が砂に埋められて住めなくなり、その地を捨てて、集落ごとほかの土地へ移住したとされている。

「^{むらまつこくぞうどうしよぞうぶんしょ}村松虚空蔵堂所蔵文書」(1623年)の中には、村松浜の居屋敷が大風で砂に埋められて迷惑しているため、大神宮領内へ移住させてほしいと百姓十七名が連書している。それに対して、移住を承認した代官は書状を差し出し、村松虚空蔵堂の領内に移っても、水戸藩へ納める年貢役と塩竈役は、間違いなく勤めることを請け負うことが記されていたという。移住する以前の集落や、どこに移住していったかについても様々に伝えられているが、確定できるだけの史料がなく、不明な部分も多い。南へ約3 km に位置する^{きわだ}沢田遺跡の発掘調査が行

われ、直接集落の跡を示す遺構は確認されていないが、中世末から明治時代初めにかけての大規模な揚浜式製塩所跡や人間や家畜を埋葬した跡が確認されている³⁾。近世になると、関東の行徳と瀬戸内の赤穂を始めとするいわゆる十州塩が全国的に流通するようになり、水戸藩は、製塩技術をより発達した西国から導入しようと試みた。『塩録』によれば、平磯（ひたちなか市）に製塩場を築き、平磯、前浜の村民に技術を習得させようとしたがあまり成功せず、この計画を立てた白石氏が去ってしまった。その後、『塩録』の著者となる石川氏が受け継ぎ、次第にきれいな塩ができるようになったと言われている。しかし、何分にも益が少なく、そのうえ製塩をする地勢ではないという理由から、製塩場を廃し製塩を止めるに至ったとされている。

また、水戸藩は藩内にある海岸線に面した村落ごとに、砂浜に造られた塩釜数などの調査を行っている。調査内容は、生産高、釜数、生産者などの項目で、すべて一工（塩釜の単位）ごとであった。寛政年間の調査結果では、照沼村より前浜村（阿字ヶ浦）が盛んであったが、塩釜経営の実態は非常に不安定であったとされている。また、塩釜経営も共同経営の場合が多いが、必ずしも同一人によるものではなく、年によって入れ替わることも少なくなかったようである。しかし、これらの調査結果が確認できるのは東海村内の村落では照沼村のみで、村松村では中世から製塩が行われていたにもかかわらず、残念ながらその実態は明らかになっていない。

註)

- 1) 東海村の自然調査会『東海村の自然』東海村教育委員会 1994年
- 2) 飯島一生「愛宕山古墳 一般県道日立東海線道路改良工事地内埋蔵文化財調査報告書」『茨城県教育財団文化財調査報告』第177集（財）茨城県教育財団 2001年3月
- 3) 中根節男「沢田遺跡 常陸那珂港関係埋蔵文化財調査報告書1」『茨城県教育財団文化財調査報告』第52集（財）茨城県教育財団 1989年3月
 鯉淵和彦・新井聡「沢田遺跡 常陸那珂港関係埋蔵文化財調査報告書2」『茨城県教育財団文化財調査報告』第77集（財）茨城県教育財団 1991年3月
 後藤哲也「沢田遺跡 一般県道水戸那珂湊線道路改良工事地内埋蔵文化財調査報告書」『茨城県教育財団文化財調査報告』第95集（財）茨城県教育財団 1995年3月
 川又清明「沢田遺跡 国営常陸海浜公園整備事業に伴う埋蔵文化財調査報告書」『茨城県教育財団文化財調査報告』第115集（財）茨城県教育財団 1996年3月
 眞崎紀雄「沢田遺跡 国営常陸海浜公園整備事業に伴う埋蔵文化財調査報告書2」『茨城県教育財団文化財調査報告』第161集（財）茨城県教育財団 1999年3月

参考文献

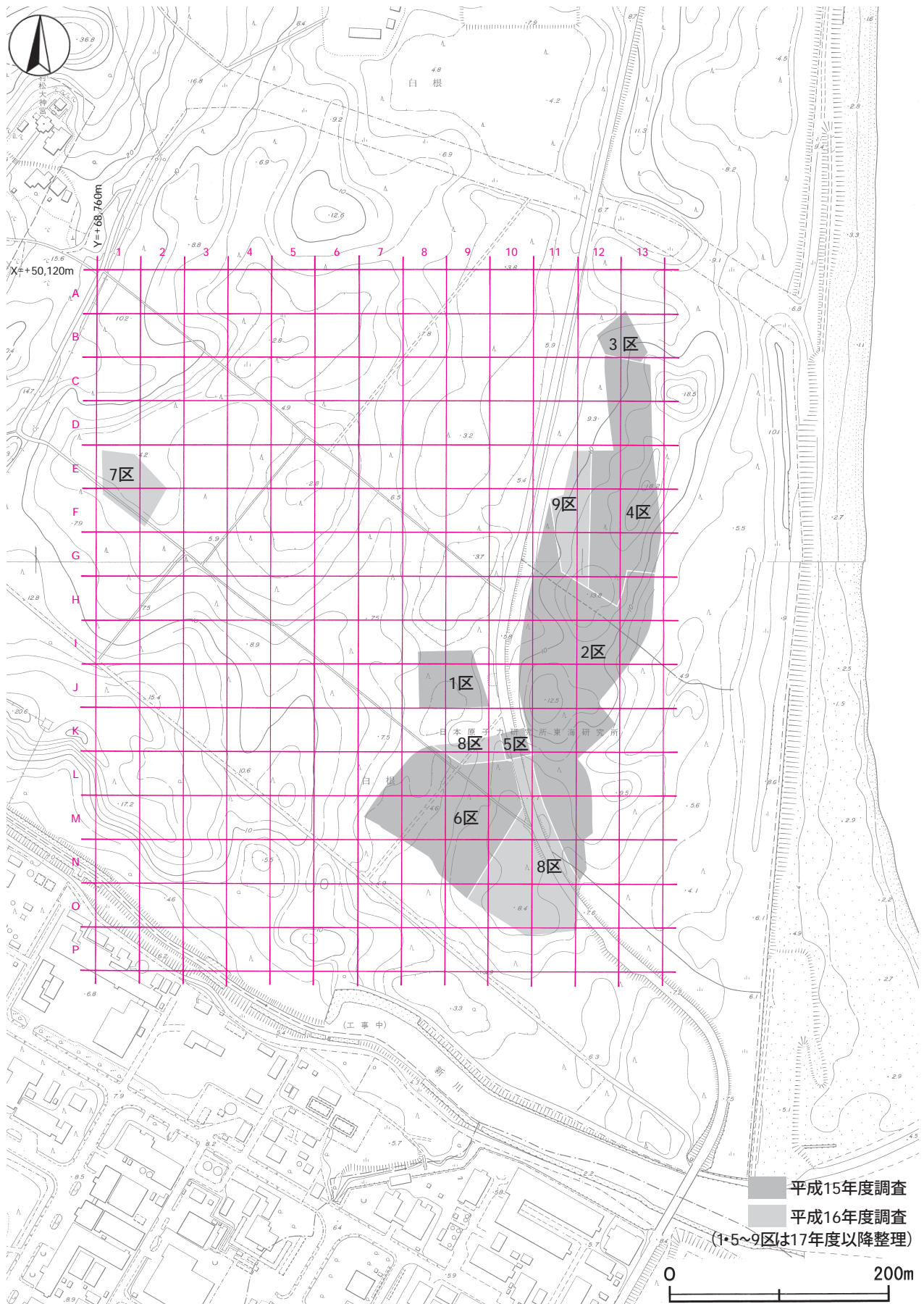
- ・茨城県教育庁文化課『茨城県遺跡地図（地名表編）（地図編）』茨城県教育委員会 2001年3月
- ・東海村史編さん委員会『東海村史 通史編』東海村教育委員会 1992年
- ・茨城大学人文学部史学第六研究室『東海村の遺跡』東海村教育委員会 1986年
- ・東海村史編さん委員会『村の歴史と群像』東海村教育委員会 1991年3月

表1 村松白根遺跡周辺遺跡一覧表

番号	遺跡名	時代							番号	遺跡名	時代								
		旧石器	縄文	弥生	古墳	奈・平	中世	近世			旧石器	縄文	弥生	古墳	奈・平	中世	近世		
①	村松白根遺跡							○		15	須和間古墳群					○			
2	中道前東遺跡	○						○	○	16	下ノ諏訪古墳群					○			
3	八幡後遺跡	○	○						○	17	白方古墳群					○			
4	真崎貝塚		○					○		18	石神外宿古墳群					○			
5	御所内貝塚		○		○					19	中道前古墳群					○			
6	平原貝塚群		○							20	二軒茶屋古墳群					○			
7	石神外宿貝塚		○							21	権現山古墳					○			
8	堀ノ外遺跡		○	○	○					22	別当山古墳					○			
9	東中宿A遺跡		○	○	○	○	○			23	愛宕山古墳					○			
10	須和間遺跡			○	○					24	部原古墳					○			
11	部原北遺跡			○	○					25	小澤野A遺跡					○	○		
12	部原遺跡		○	○						26	石橋向遺跡						○		
13	舟塚古墳群					○				27	真崎城跡							○	
14	真崎古墳群					○				28	石神城跡							○	



第1図 村松白根遺跡周辺遺跡位置図



第2図 村松白根遺跡調査区設定図

第3章 調査の成果

第1節 調査の概要

村松白根遺跡は、十三詣で有名な村松虚空蔵堂の東約0.6kmの日本原子力研究所東海研究所敷地内に位置している。調査範囲は、大強度陽子加速器施設建設予定地内に南北に広がっている。遺構は、標高4mから標高10mの砂質土層の中で検出されている。

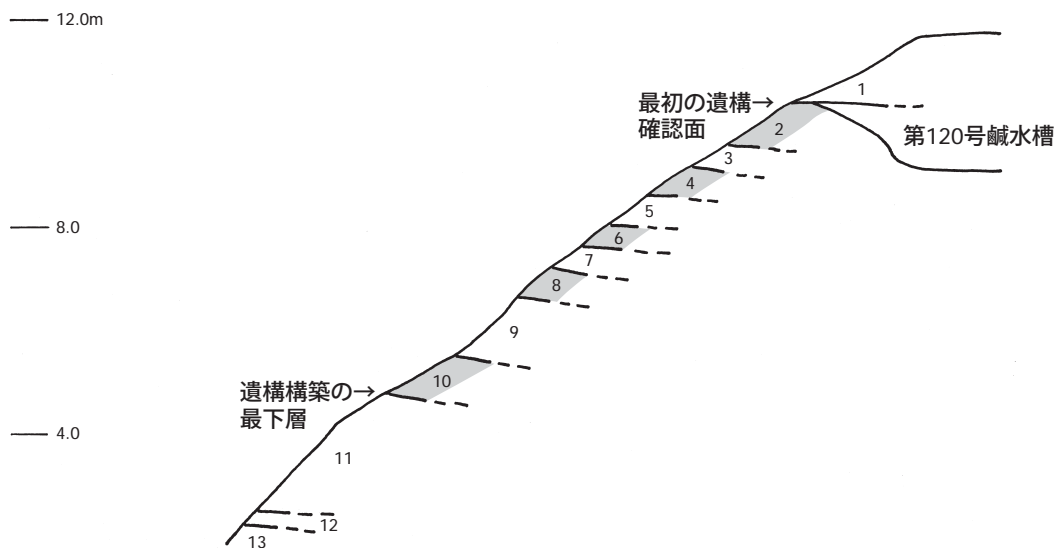
調査区は便宜上、1～9区に分けた(第2図)。今回報告するのは、2～4区の32,060m²である。調査の結果、中世後半以降の大規模な製塩跡と、それに伴うと考えられる建物跡、畝状遺構、土壇墓等が検出されていることから、製塩にかかわった人々が生活していた集落跡であることが判明した。

遺構は、釜屋跡21軒、鹹水槽304基、建物跡38軒、整地面33か所、畝状遺構1か所、溝跡3条、貝集積地47か所、集石6か所、土坑732基、土壇墓109基、土壇7基、遺物集中地点1か所、埋納遺構1か所などが確認されている。

遺物は、遺物収納コンテナ(60×40×20cm)で52箱分出土しており、土師質土器(内耳鍋・皿・香炉)、陶磁器(甕・灰釉丸皿・折縁皿・播鉢・青磁碗・白磁碗・染付皿・天目茶碗)、金属製品(火打金・釘・耳金・吊金具・小札・小刀・切羽・筭・鉄鍋・分銅)、古銭(枝銭を含む)、石器(砥石・石臼・石鍋)、石製品(硯・五輪塔・宝篋印塔)、骨角製品(サイコロ・筭)、人骨、獣骨(鯨・犬・馬)などである。

第2節 基本層序

当遺跡は砂丘上に黒色土を主体とした盛土を生活面とし、そこに釜屋や建物を構築している。したがって、砂層と盛土の堆積状況が明確な調査4区の東部(F13b9区)において、最初の遺構確認面から最下の遺構確認面までの土層観察を行った(第3図)。以下土層の解説を行う。



第3図 基本土層図

第1・3・9・11・13層は細砂や礫混り砂を主体とし貝殻片を含む砂層である。粘性・締まりはともに弱い。層厚は主に40～50cmで、層厚が220cmになるものもある。これらは自然堆積したものと考えられる。

第2・4・6・8・10層是那珂台地地表層を構成する火山灰土層最上部の黒ボク土を主体に炭化物や灰、貝殻片を混入させた黒色土層である。粘性は普通で締まりは強い。これらの黒色土は釜屋や建物の構築用土として利用されている。層厚は50～100cmである。なお、第2層の上面で最初の遺構が確認された。

第5・7層は炭化物・粒子や灰を含む砂質土層である。粘性・締まりはともに普通である。主体は石英・長石であるが、黒色を呈する安山岩の岩石片などが多く混在している。層厚は40～45cmである。

第12層は、細砂を主体とした褐色の砂層である。粘性・締まりはともに弱い。層厚は20～30cmである。なお、この層以下からは遺構が確認されていない。

第3節 遺構と遺物

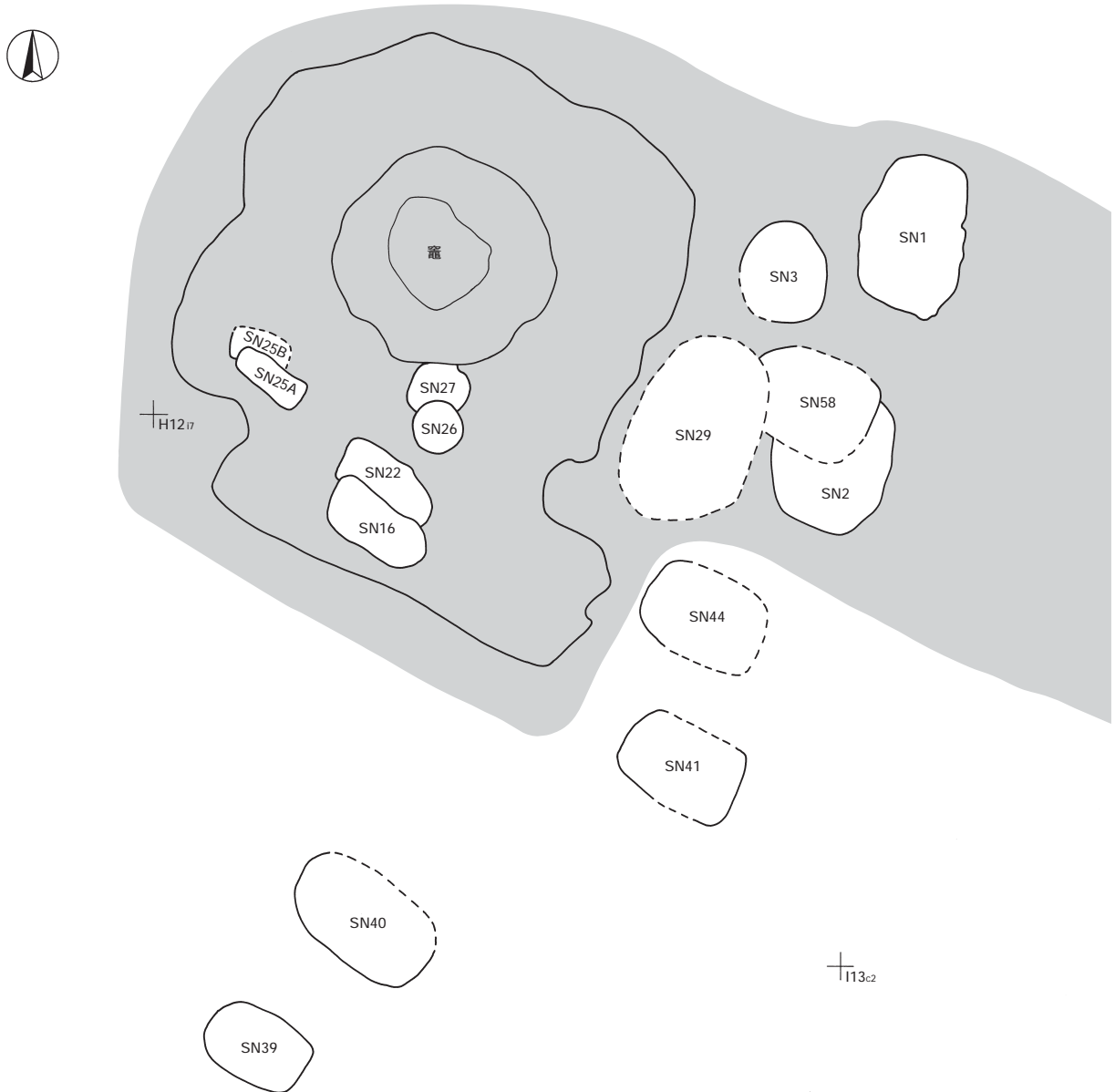
1 製塩区域

今回の調査で、製塩跡21か所を確認した。製塩跡の遺構としては釜屋、屋内・外鹹水槽、土樋等があり、これらを製塩にかかわる施設のセットとしてとらえた。釜屋は濃い塩水を竈で煮詰めて塩の結晶を取り出す施設で、釜屋内には竈、屋内鹹水槽がある。鹹水槽は濃い塩水を集めるためのものである。土樋は鹹水を屋外鹹水槽から屋内鹹水槽へ送り込むためのものである。また、配置・主軸・重複から判断して、同じ釜屋に伴うと推測された屋外鹹水槽は、同じ製塩跡の中で報告することとした。以下、遺構と遺物について記述する。

(1) 製塩跡

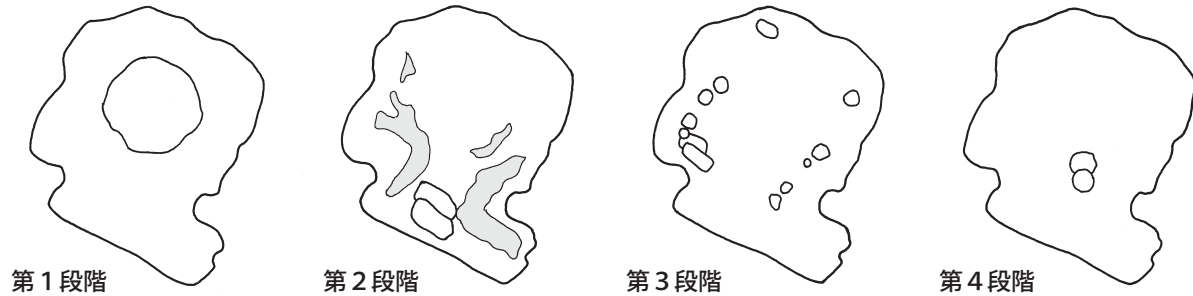
第1号製塩跡（第4～9図）

位置 調査区中央部 H12h9区の標高8.4mの砂丘上に位置している。東に第2号製塩跡が確認されている。



第4図 第1号製塩区域

- 確認状況** 第1段階 砂をおよそ2.4m 除去した標高8.4m から、釜屋と竈の範囲が確認された。
- 第2段階 約20cm 黒色土を除去すると、釜屋内から灰と第16号鹹水槽、第16号鹹水槽の下層から第22号鹹水槽が検出された。
- 第3段階 約20cm 黒色土を除去すると、第25A・B号鹹水槽、P 1～P10が検出された。
- 第4段階 釜屋内の南東部の黒色土中から、第26・27号鹹水槽が検出された。



規模と構造 製塩跡の範囲は南北軸32m、東西軸24m である。製塩跡は釜屋、屋外鹹水槽（第1～3・29・39～41・44・58号鹹水槽）で、釜屋は竈、屋内鹹水槽（第16・22・25A・B～27号鹹水槽）で構成されている。屋内鹹水槽は釜屋内の南部、屋外鹹水槽は製塩跡内の南部から東部にかけて位置する。

釜屋 2区 SH－1（第5図） 長軸約15m、短軸約13m の長方形で、主軸方向はN－38°－E である。釜屋は30～60cm ほどの黒色土を貼り付けて構築されている。壁際は30～50cm ほどの黒色土を貼り付け、その外側には山砂と暗褐色土を混ぜ合わせたものを版築状に積み重ねている。

長径6.2m、短径6.1m の円形で、中央部に位置している。作業面からの深さは120cm で、底面は皿状を呈している。厚さ10～60cm の黒色土を貼り付けて構築されている。底面は2面の黒色面が確認されており、上部と下部の黒色面の間には約20cm の砂層が入っている。

土層断面図中、第3層は釜屋を構築した黒色土A層である。第1層は最終作業面と初期作業面の間に堆積した層である。第10層は釜屋を構築する際、山砂と暗褐色土を版築状に積み重ねた層である。

ピットは10か所である。P 1～P 6は深さ65～80cm で、最終作業面の柱穴である。P 8は深さ35cm と浅いが、その他のピットは深さ50～100cm で、初期作業に上屋を支えた柱穴と考えられる。

屋内鹹水槽（第5・6図）は釜屋壁の上面から砂をおよそ1.2m 除去した標高7.4m から、第16号鹹水槽を検出した。第16号鹹水槽の下層からは第22号鹹水槽、南部には第25A号鹹水槽が確認され、第25A号鹹水槽の下層から第25B号鹹水槽が検出された。また、竈の南壁際の黒色中からは第26・27号鹹水槽が検出された。

第1層は砂A層を主体とした自然堆積の層である。第3・7層は鹹水槽を構築した黒色土A層と粘土層である。

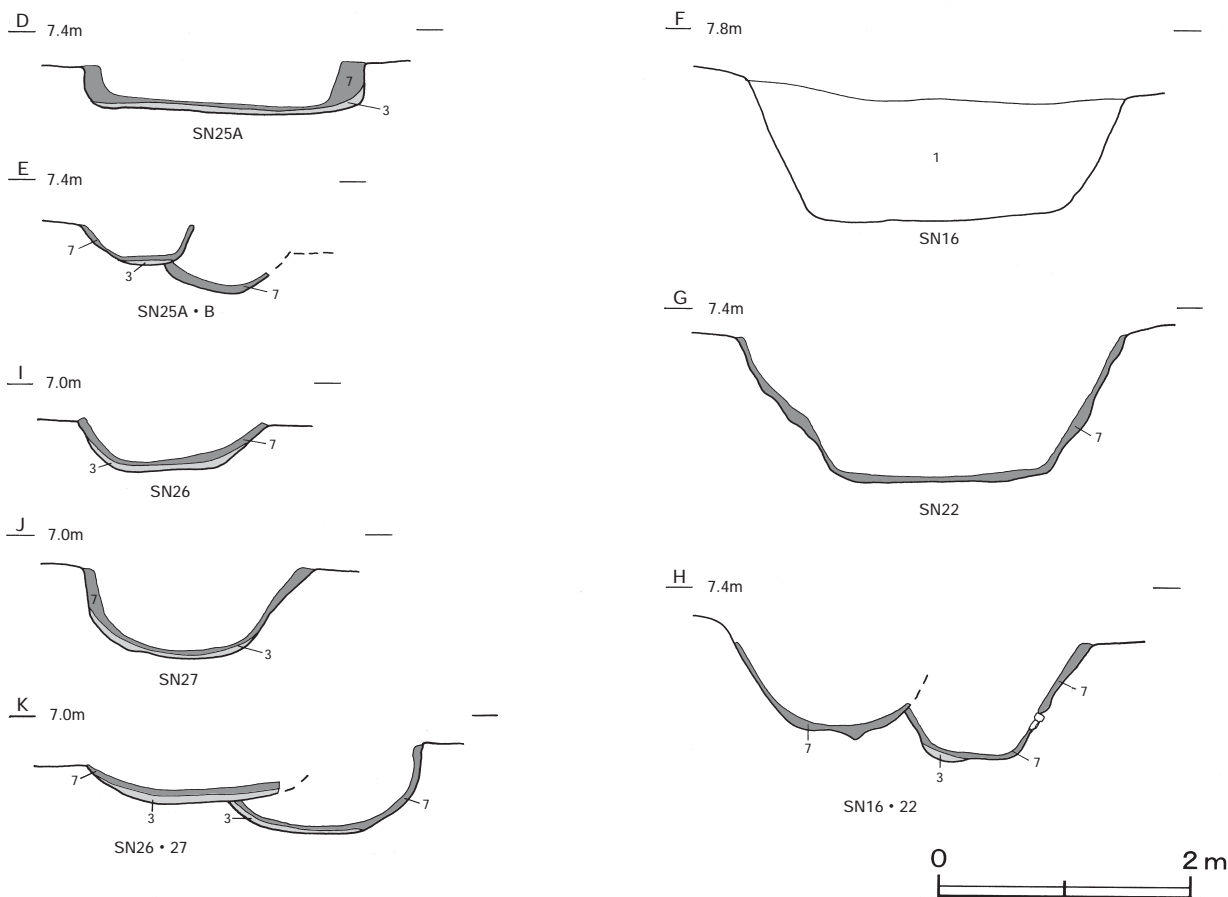
屋外鹹水槽（第7～9図） 砂をおよそ2.4m ほど除去した標高9 m から、第1号釜屋の東部に広がる第1・2・3・29号鹹水槽を検出した。また、第1号釜屋の東南部の下層から、東西を主軸とする第39～41・44・58号鹹水槽が検出された。

第1層は砂A層を主体とした自然堆積の層である。第3・4層は黒色土主体の層で、粘土ブロックが混じり、鹹水槽を埋め戻した人為堆積の層と考えられる。

遺物出土状況 竈内から瓦片2点（平瓦）、第1・2号鹹水槽から炭化材が出土しただけである。炭化材は釜屋が焼失した際、釜屋の構築材などが流れ込んだものと考えられる。



第5図 第1号製塩跡実測図



第6図 第1号製塩跡屋内鹹水槽土層図

第1号製塩跡屋内鹹水槽一覧表

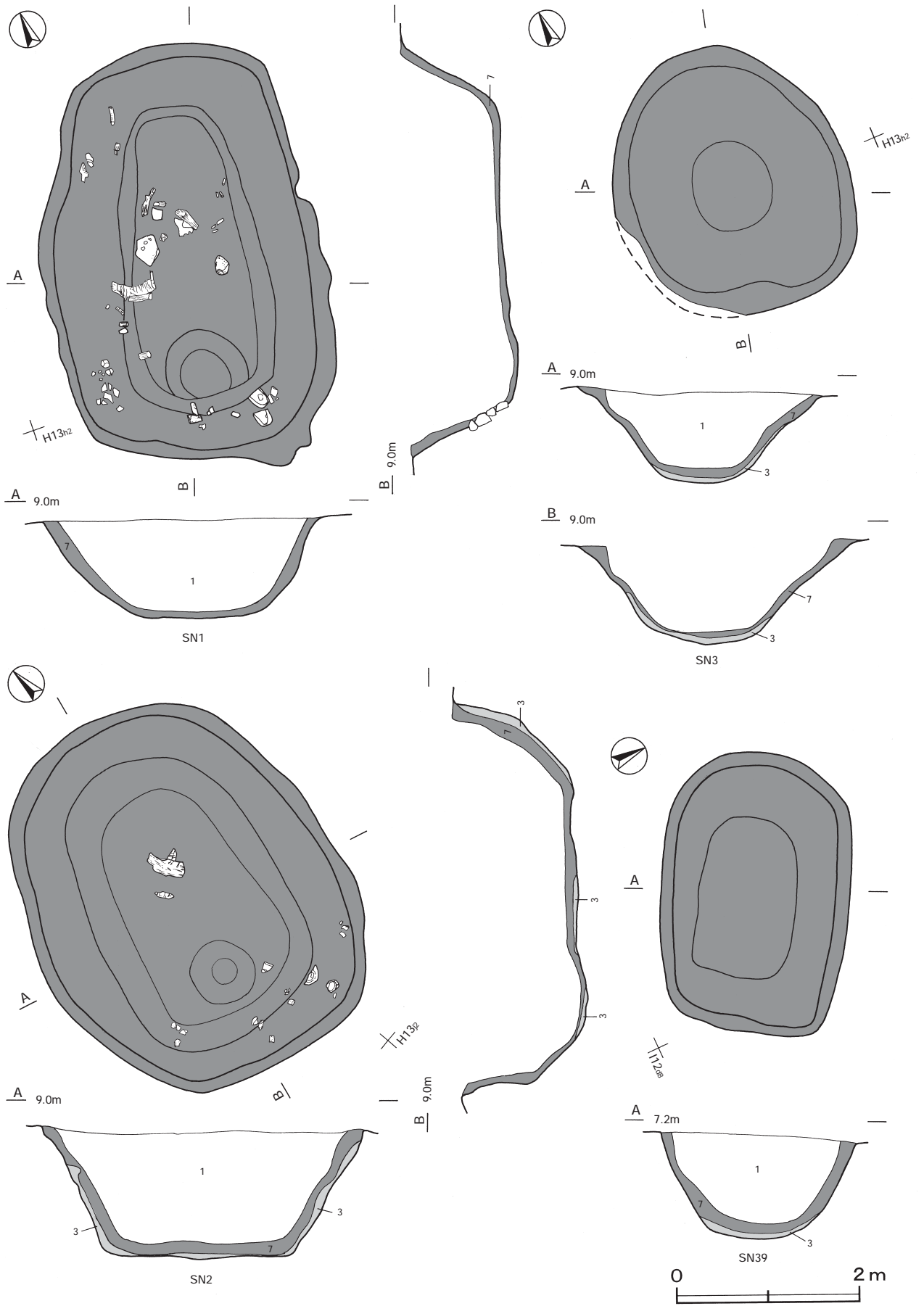
遺構番号	位置	長軸(径)方向	規模(m)			形状	黒色土厚(cm)	粘土厚(cm)	壁面	床面	出土遺物	備考
			長軸(径)	短軸(径)	深さ							
16	H12i8	N-50° -W	3.3	1.5	1.0	楕円形	—	4~10	外傾	平坦	—	
22	H12i8	N-53° -W	3.0	1.6	1.1	楕円形	4	4~10	外傾	平坦	—	
25A	H12h7	N-47° -W	2.2	0.8	0.6	隅丸長方形	2~4	4~20	外傾	平坦	—	
25B	H12h7	N-68° -W	(1.7)	(0.9)	(0.3)	[隅丸長方形]	—	3~8	傾斜	[皿状]	—	
26	H12i9	N-22° -E	1.6	1.5	0.3	円形	2~6	2~6	傾斜	皿状	—	
27	H12h9	N-65° -E	1.9	1.6	0.6	楕円形	2~4	2~10	外傾	皿状	—	

所見 釜屋跡や鹹水槽の規模から、当遺跡内において最大規模の製塩跡と推測される。土層から最低2時期の操業が考えられる。屋内鹹水槽を造り替える際、釜屋の南壁も南へ拡張している。また、釜屋内の最終操業面から焼砂範囲が広く確認されていることから、本釜屋は焼失したと推測される。

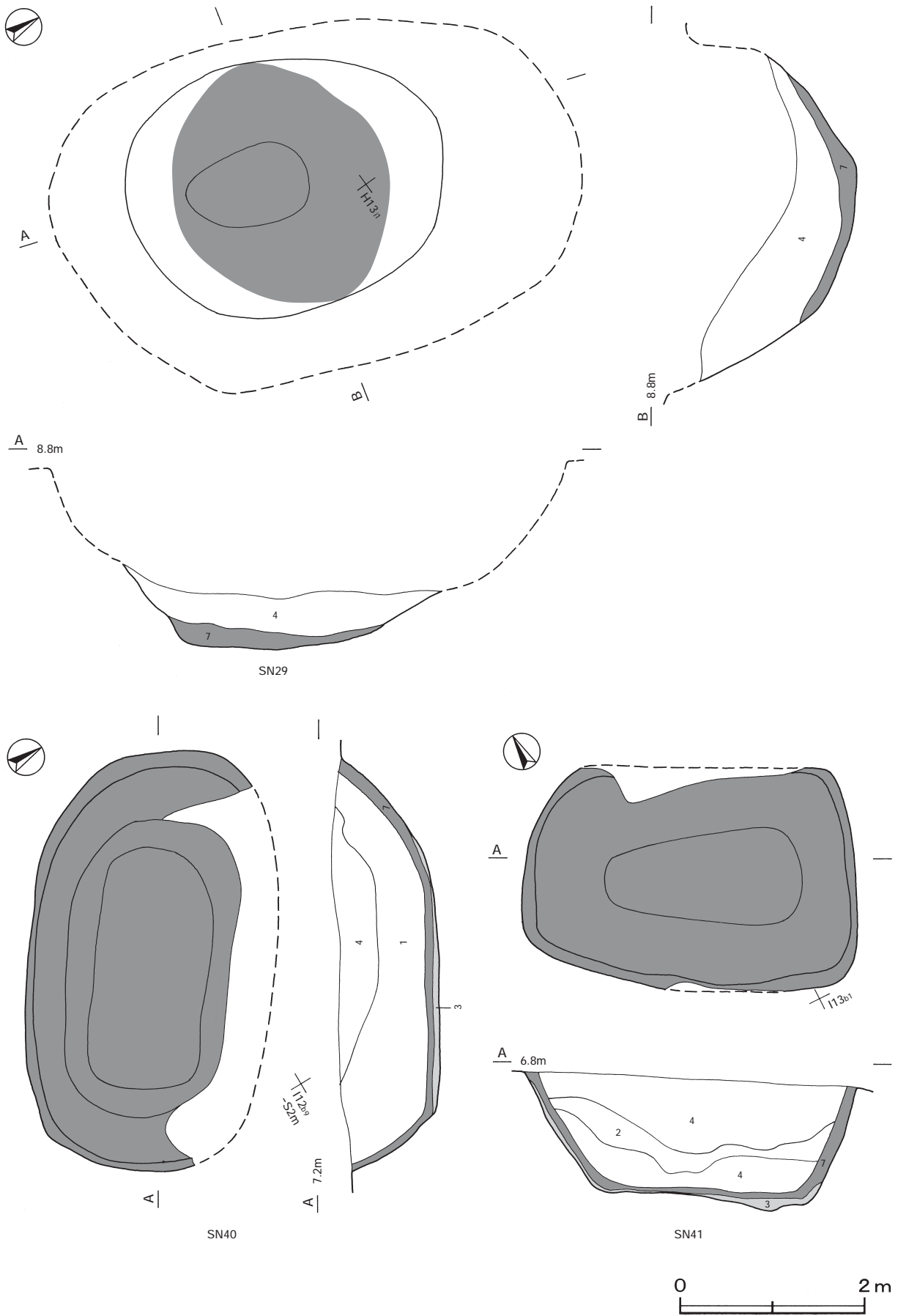
屋内鹹水槽は6基検出され、出土状況から第16・25A号鹹水槽が最終操業、第22・25B号鹹水槽が初期操業に伴うものである。第26・27号鹹水槽は、第22・25B号鹹水槽が機能する以前に構築されていたと考えられる。

屋外鹹水槽は9基検出され、出土状況から第1・2・3・29号鹹水槽が最終操業に伴い、南北を主軸にしたがって釜屋の東部に位置する。第39~41・44・58号鹹水槽は初期操業に伴うものである。屋外鹹水槽は、大量の鹹水に耐えることができるよう構築材の粘土が厚く貼られている。また、南東部の足掛け石はいずれも海岸線側の中段に組み込まれている。

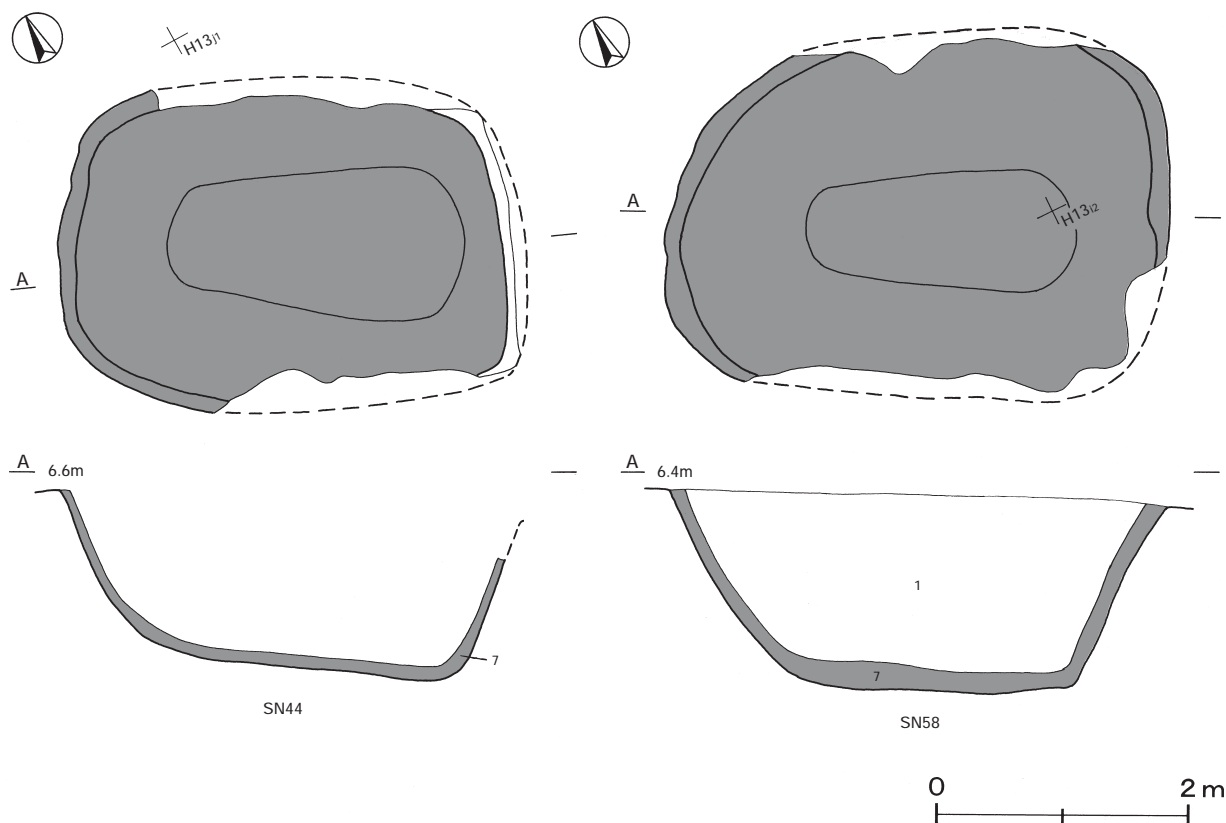
西に隣接する第2号製塩跡も大規模な鹹水槽を有することから、両跡ともほぼ時期を同じくして大規模に製塩が営まれていたと推測される。時期は、出土遺物が少なく明確にすることができない。



第7図 第1号製塩跡屋外鹹水槽実測図(1)



第8図 第1号製塩跡屋外鹹水槽実測図(2)



第9図 第1号製塩跡屋外鹹水槽実測図(3)

第1号製塩跡屋外鹹水槽一覧表

遺構番号	位置	長軸(径)方向	規模(m)			形状	黒色土厚(cm)	粘土厚(cm)	壁面	床面	出土遺物	備考
			長軸(径)	短軸(径)	深さ							
1	H13g2	N-18°-E	4.5	3.0	1.0	長方形	-	4~15	外傾	平坦	炭化材	
2	H13i1	N-21°-E	4.2	3.4	1.3	長方形	1~12	6~16	外傾	緩い起状	炭化材	
3	H13g1	N-3°-E	3.0	2.6	1.0	楕円形	2~6	1~13	外傾	平坦	-	
29	H12i0	N-23°-E	(3.5)	(2.7)	[1.4]	[楕円形]	-	2~25	緩斜	緩い起状	-	
39	I12c7	N-58°-W	3.0	2.0	0.9	楕円形	3~7	5~16	外傾	皿状	-	
40	I12b8	N-51°-W	4.5	(2.2)	0.9	楕円形	2~8	6~14	外傾	平坦	-	
41	I12a0	N-62°-W	3.6	2.4	1.2	隅丸長方形	1~12	2~13	外傾	緩い起状	-	
44	H12j0	N-61°-W	[3.7]	[2.7]	1.2	隅丸長方形	-	2~10	外傾	平坦	-	
58	H13h1	N-68°-W	4.0	[3.0]	1.4	隅丸長方形	-	9~20	外傾	平坦	-	

第2号製塩跡(第10~17図)

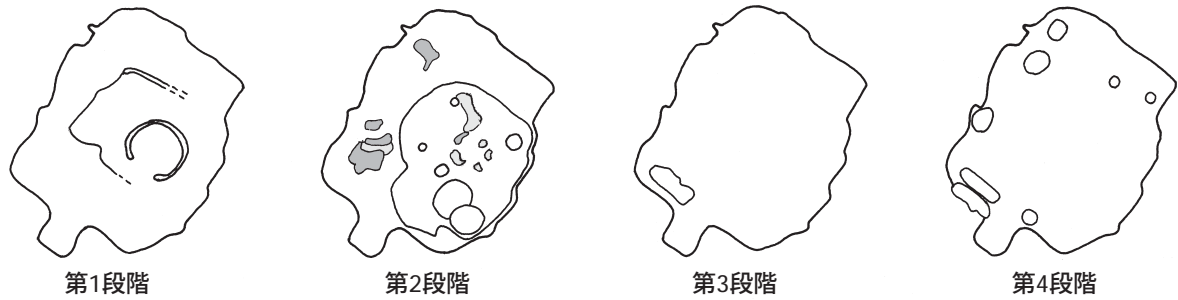
位置 調査区中央部 I13b4区 の標高8.5m の砂丘上に位置している。西に第1号製塩跡が確認されている。

確認状況 第1段階 遺構確認面の標高8.5m から B号釜屋と A・B号竈の範囲が確認された。

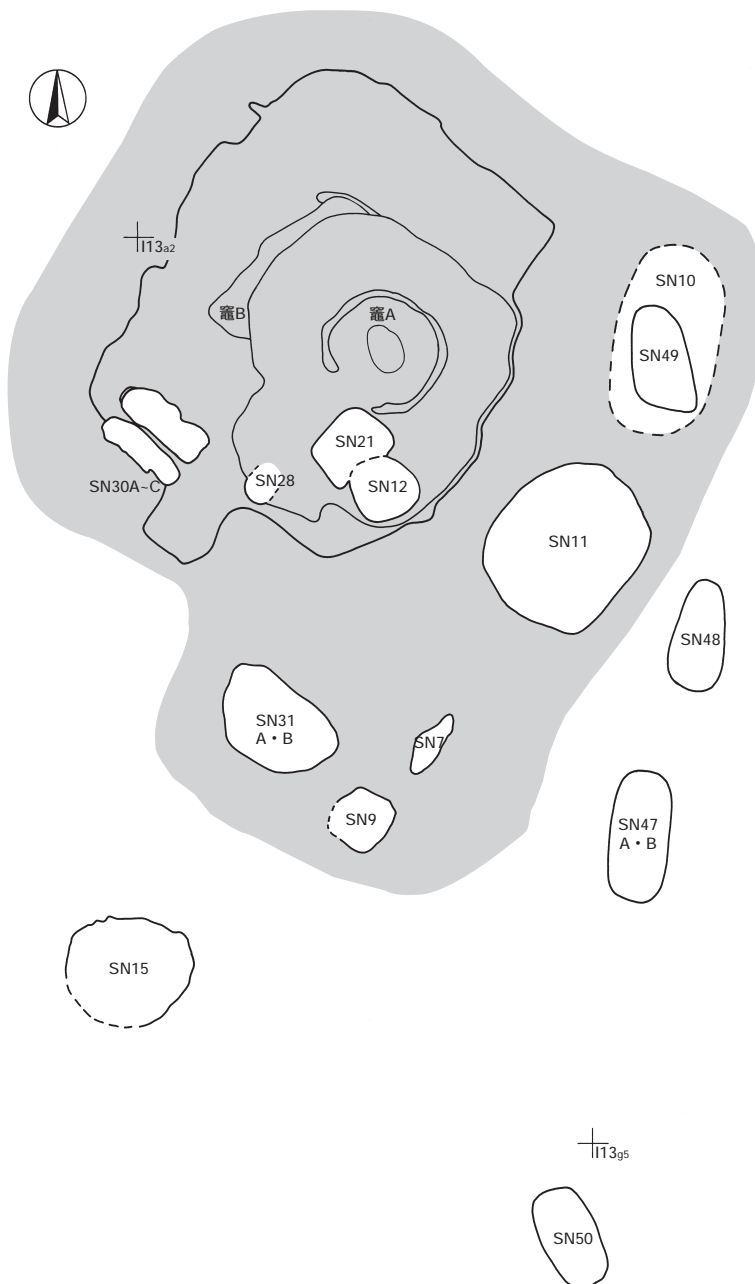
第2段階 土層から、A号釜屋の範囲と A・B号竈の新旧関係が判明する。南東部から第12・21号鹹水槽、P1~P4、西部から焼砂が検出された。

第3段階 南西壁際から第30A号鹹水槽が検出された。

第4段階 第30A号鹹水槽の下層から第30B・C号鹹水槽、釜屋南部の黒色土面から第28号鹹水槽、P5~P9が検出された。



規模と構造 製塩跡の範囲は南北25m, 東西軸18mである。製塩跡はA・B号釜屋, 屋外鹹水槽(第7・9・10・11・15・31A・31B・47A・47B～50号鹹水槽)で, 釜屋は竈2基, 屋内鹹水槽(第12・21・28・30A・30B・30C号鹹水槽)で構成されている。屋内鹹水槽は釜屋内の南部, 屋外鹹水槽は製塩跡内の南部から東部にかけて位置する。



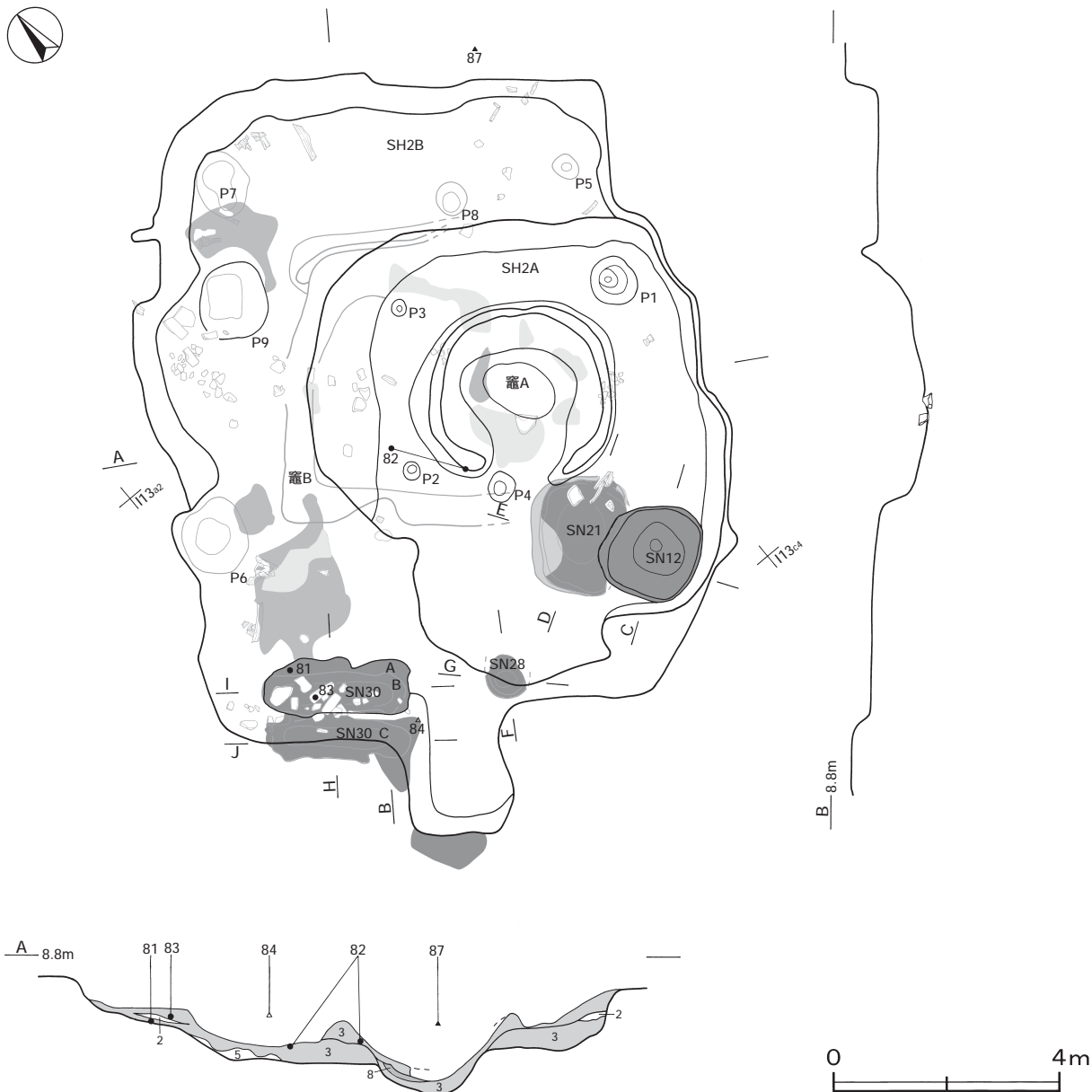
第10図 第2号製塩区域

釜屋2区SH-2A・B(第11図) A号釜屋は, 長軸約8.2m, 短軸約7.2mの不定形で, 主軸方向はN-44°-Eである。釜屋は5~20cmの黑色土を貼り付けて構築されている。B号釜屋は, 長軸約13.5m, 短軸約10mの長方形で, 南部には張り出し部をもつ。主軸方向はN-44°-Eである。釜屋は10~45cmの黑色土を貼り付けて構築されている。

A号竈は長径3.6m, 短径3.2mの楕円形で, 作業面からの深さは80cmである。底面は皿状を呈している。厚さ10~15cmの黑色土を貼り付けて構築されている。底面は2面の黑色面が確認されており, 上部と下部の黑色面の間には約10cmの焼砂層が入っている。B号竈は, 長軸5.1m, 短軸3.5mの長方形と推定され, 作業面からの深さは現況で80cmである。底面は皿状と推測される。厚さ10~26cmの黑色土を貼り付けて構築されている。

土層断面図中, 第3・5層はA・B号釜屋を構築した黑色土A層, 第8層はA号竈が再構築される前に堆積した焼砂層である。

ピットは9か所である。P1~P4は深さ60~80cmで, A号釜屋に伴う最終



第11図 第2号製塩跡実測図

作業面の柱穴、P 5～P 9は深さ50～100cmで、B号釜屋の柱穴と考えられる。

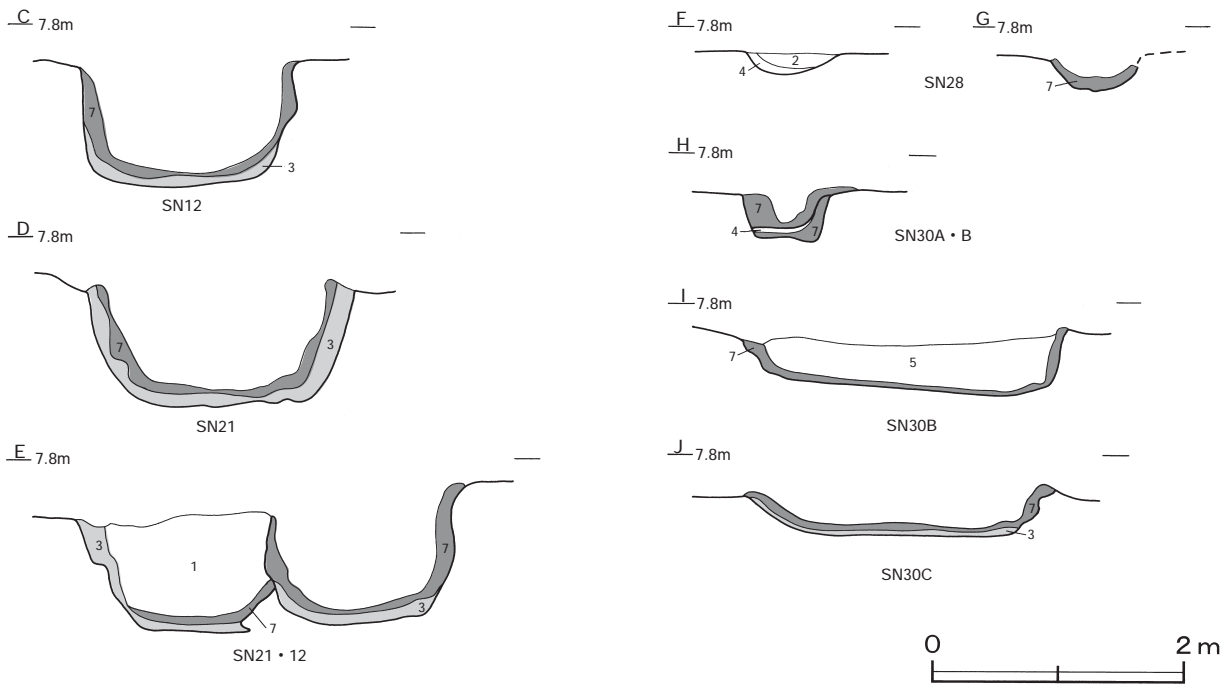
屋内鹹水槽（第11・12図）は釜屋内の黒色面と同じ標高7.7mから、第12号鹹水槽が確認された。さらに、第12号鹹水槽の下層から第21号鹹水槽、南西部には第30A号鹹水槽が確認され、下層から第30B・C号鹹水槽が検出された。第28号鹹水槽は釜屋内の南部の黒色土中から検出された。

第1層は砂A層で自然堆積の層、第4・5層は黒色土B・C層で鹹水槽が埋め戻された層である。

屋外鹹水槽（第13～15図） 遺構確認面と同じ標高8mから第10・11・31号鹹水槽、さらに南西へ約3mの位置から第7・9・15号鹹水槽、北東部にかけて約20cm砂を除去すると、第47～50号鹹水槽が検出された。

第1・3層はA号釜屋を構築した黒色土A層、第3・4層はB号釜屋を構築した黒色土A・B層である。

遺物出土状況 土師質土器11点、(皿類5, 内耳鍋5, 鉢1), 金属製品3点(耳金1, 古銭2), 瓦片1点(軒丸瓦)が釜屋内から出土している。耳金1点が出土しているが、竈での使用を考えると相当の本数が必要であり、釜屋廃絶後に遺棄されたものか埋土とともに混入したものである。釜屋内の黒色土中からは、貝を加工した漆喰の塊が出土している。



第12図 第2号製塩跡屋内鹹水槽土層図

第2号製塩跡屋内鹹水槽一覧表

遺構番号	位置	長軸(径)方向	規模(m)			形状	黒色土厚(cm)	粘土厚(cm)	壁面	床面	出土遺物	備考
			長軸(径)	短軸(径)	深さ							
12	I13b3	N-57° -E	1.7	1.6	0.9	隅丸長方形	3~14	3~12	垂直	平坦	—	
21	I13b3	N-46° -E	2.0	1.6	0.8	長方形	3~14	3~16	垂直	平坦	—	
28	I13b2	N-29° -E	0.7	0.7	0.2	隅丸長方形	—	4~8	垂直	平坦	—	
30A	I13b2	N-52° -W	2.5	0.9	0.3	不定形	—	4~22	垂直	平坦	土錘	
30B	I13b2	N-52° -W	2.5	0.7	0.3	不定形	—	3~14	垂直	平坦	古銭	
30C	I13b2	N-35° -W	2.4	0.7	0.3	不定形	2~8	2~8	垂直	平坦	瓦片	

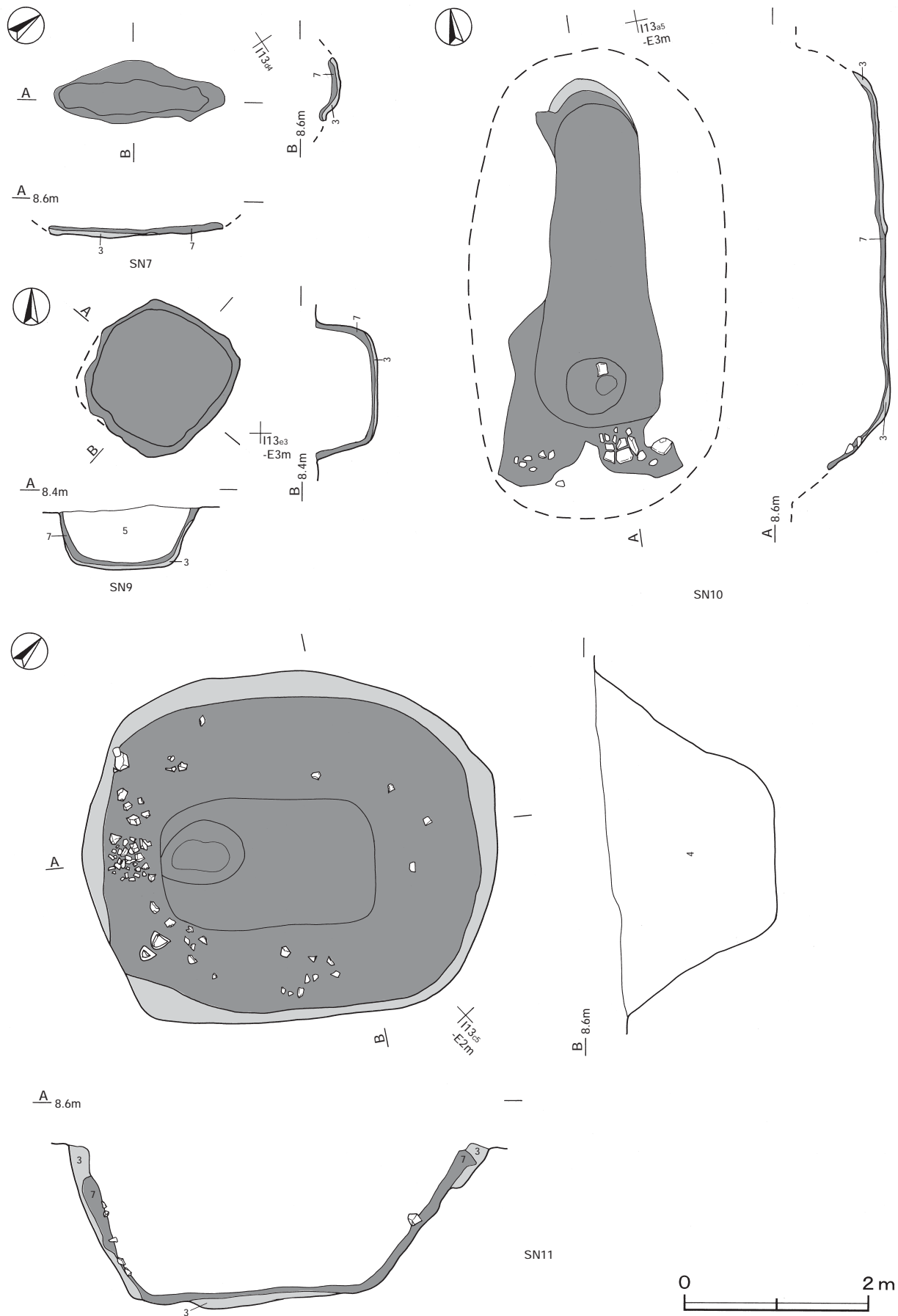
第30号鹹水槽からは土製品1点(土錘)、金属製品1点(古銭)、瓦片1点(平瓦)、第50号鹹水槽からは土師質土器片1点(播鉢)が出土している。第10号鹹水槽から土師質土器片7点(皿)、金属製品1点(古銭)が出土している。

所見 本跡は釜屋の土層断面から大きく二時期の操業が考えられる。第2 A号釜屋はB号釜屋を掘り込んで構築されている。なお、A号竈は一回の造り替えが行われている。

屋内鹹水槽は6基検出され、出土状況から第12・30A号鹹水槽が最終操業、第21・30B・C号鹹水槽が第1次操業に伴うものである。第28号鹹水槽は第21号鹹水槽の前段階の鹹水槽であると考えられるが、第2号竈に近すぎており、伴うものか判断しがたい。また、第30A～C号鹹水槽は釜屋内の南西部に位置し、規模と形状とも西側に位置する第1号釜屋跡と類似する。

屋外鹹水槽は10基検出され、出土状況から第7・9・10・11・15・31号鹹水槽が最終操業に伴い、製塩跡内の北東を中心に4基位置する。第10・11号鹹水槽は大規模であると推測される。第11号鹹水槽は大量の鹹水を貯めることができ、そのため構築材の粘土は厚く貼られている。

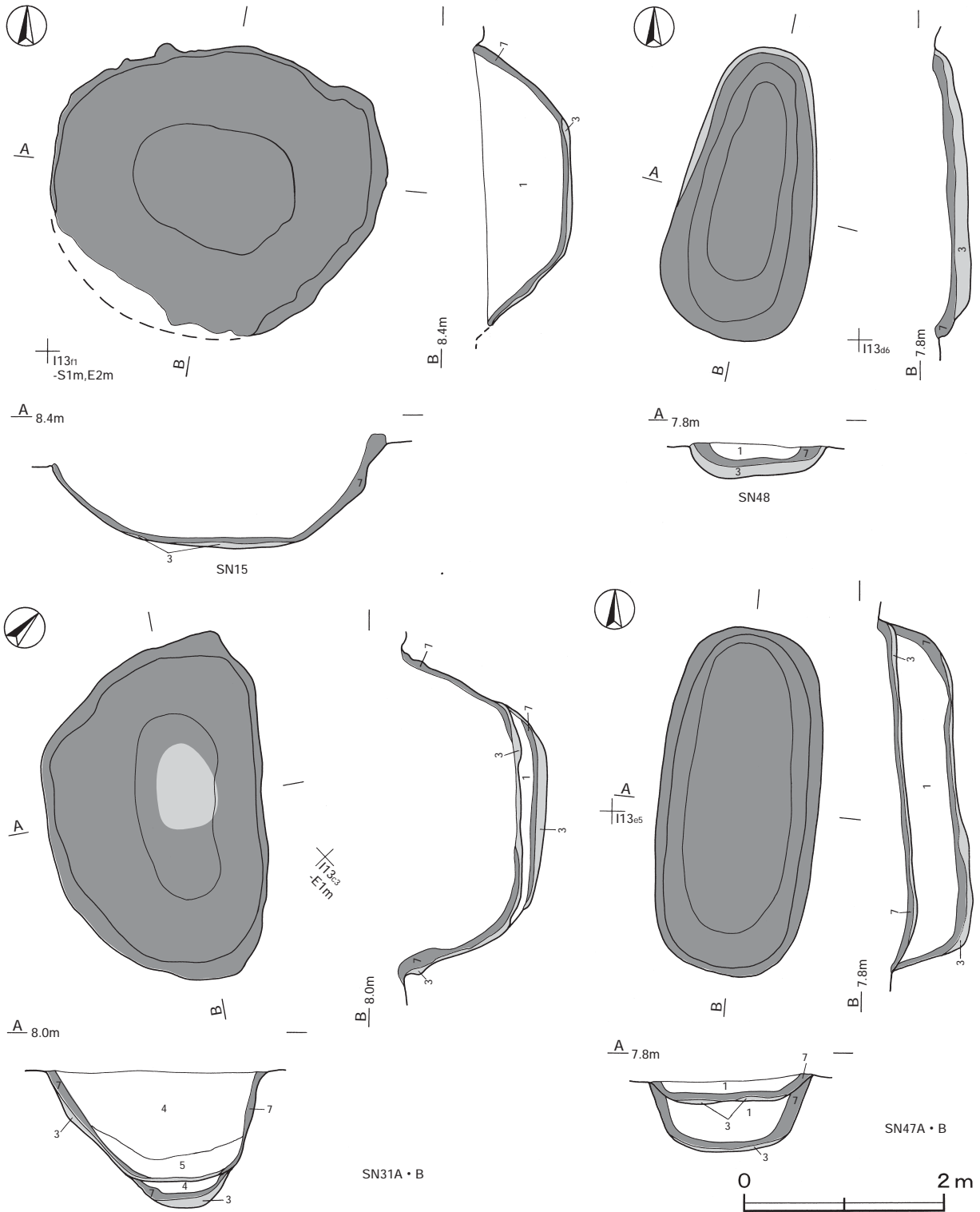
時期は出土遺物が少なく明確にすることができないが、第1号製塩跡と同様、最初の遺構確認面に構築されていることから、当遺跡内での最終段階の製塩跡と考えられる。



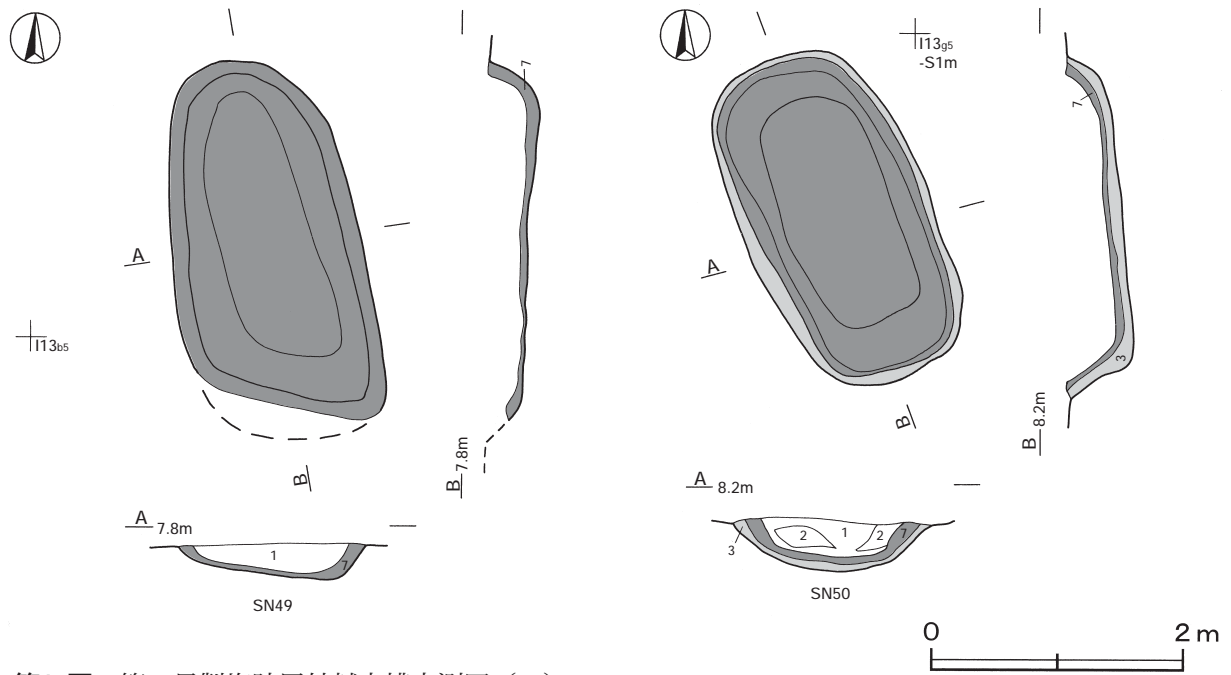
第13図 第2号製塩跡屋外鹹水槽実測図(1)

第2号製塩跡屋外鹹水槽一覽表

遺構 番号	位 置	長軸 (径) 方向	規模 (m)			形 状	黒色土厚 (cm)	粘土厚 (cm)	壁面	床面	出土遺物	備 考
			長軸 (径)	短軸 (径)	深さ							
7	I13d3	N-36° -E	(1.9)	(0.7)	0.1	[楕円形]	1~10	1~8	緩斜	平坦	-	
9	I13d3	N-30° -E	1.6	1.5	0.6	方 形	1~7	3~9	緩斜	平坦	-	
10	I13a5	N-12° -E	(4.4)	(1.6)	0.7	[楕円形]	2~6	1~6	緩斜	平坦	皿, 古銭	



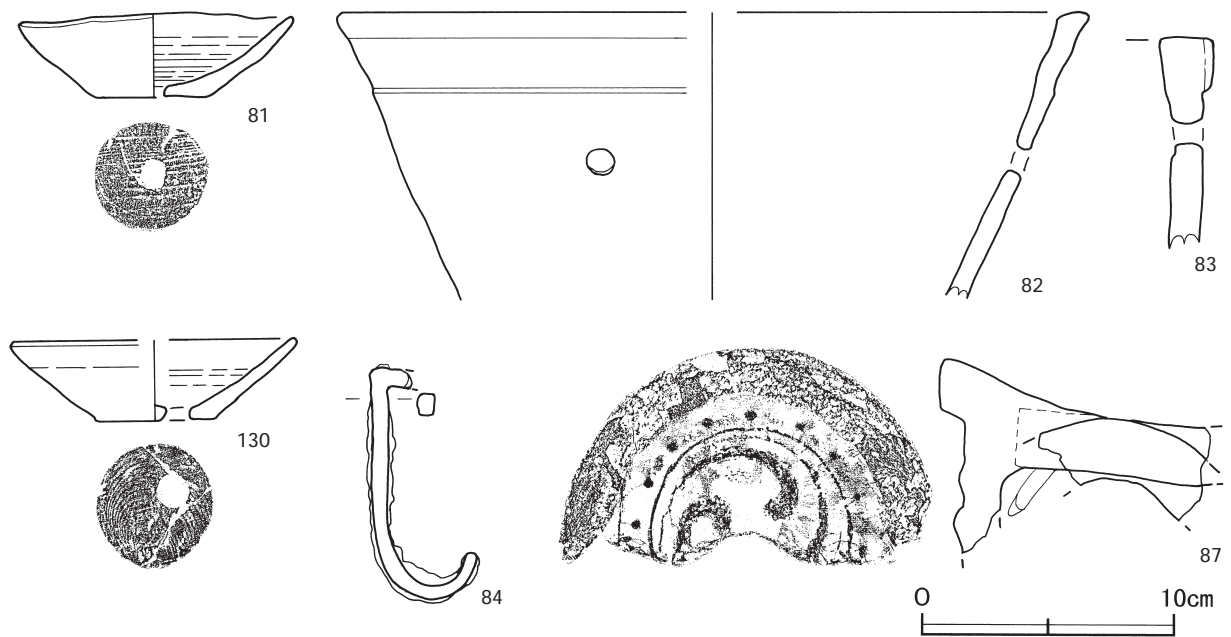
第14図 第2号製塩跡屋外鹹水槽実測図(2)



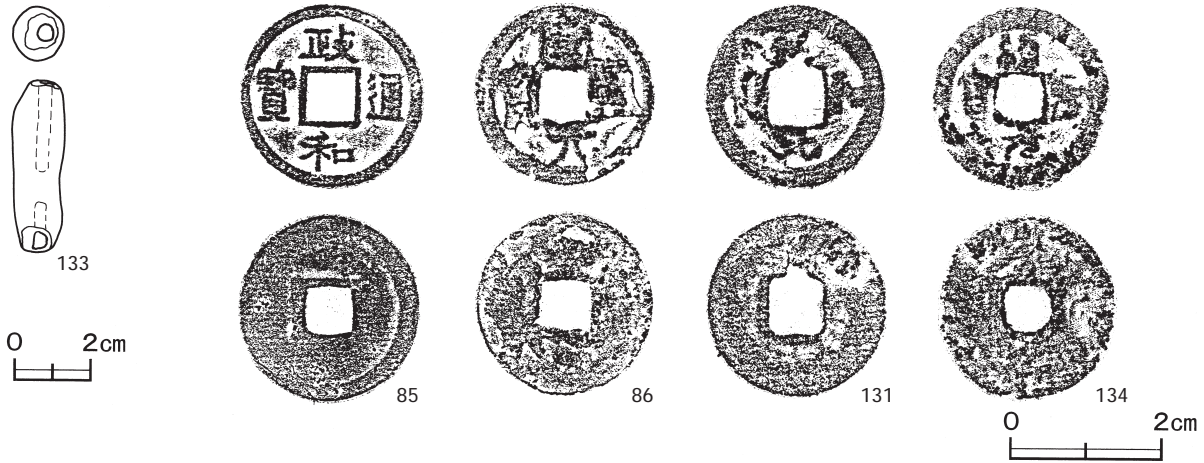
第15図 第2号製塩跡屋外鹹水槽実測図（3）

第2号製塩跡屋外鹹水槽一覽表

遺構番号	位置	長軸(径)方向	規模(m)			形状	黒色土厚(cm)	粘土厚(cm)	壁面	床面	出土遺物	備考
			長軸(径)	短軸(径)	深さ							
11	I13a4	N-40°-E	4.5	3.8	0.7	長方形	2~10	2~14	緩斜	平坦	-	
15	I13e1	N-24°-E	3.3	2.8	0.6~1.1	楕円形	2~4	2~18	緩斜	平坦	-	
31A	I13c2	N-52°-W	3.4	2.2	1	不整楕円形	4~6	2~10	外傾	平坦	-	
31B	I13c2	N-52°-W	3.4	2.2	1.2	不整楕円形	4~10	4~11	外傾	平坦	-	
47A	I13d5	N-6°-E	3.5	1.6	1.2	楕円形	2~4	2~12	緩斜	平坦	-	
47B	I13d5	N-6°-E	3.5	1.6	0.6~0.9	楕円形	2~8	2~16	緩斜	平坦	-	
48	H13a1	N-6°-E	2.9	1.4	0.04~0.2	楕円形	2~10	5~17	緩斜	平坦	-	
49	H13a2	N-10°-W	(2.8)	1.5	0.1~0.2	[楕円形]	1~12	2~10	外傾	平坦	-	
50	H13j4	N-20°-W	2.7	1.5	0.3~0.4	隅丸長方形	4~10	2~10	外傾	平坦	播鉢	



第16図 第2号製塩跡出土遺物実測図（1）



第17図 第2号製塩跡出土遺物実測図(2)

第2号製塩跡出土遺物観察表(第16・17図)

番号	器形	器質	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
81	小皿	土師質土器	10.9	3.2	4.4	雲母・赤色粒子	明赤褐	普通	底部回転糸切り, 底部中央に穿孔有り	南西部黒色土中	98% PL43
130	小皿	土師質土器	[11.2]	3.2	4.8	雲母・赤色粒子	灰黄褐	普通	底部回転糸切り, 底部穿孔有り	SN10内	60%
82	内耳鍋	土師質土器	[29.0]	(11.4)	—	石英・長石	明赤褐	普通	内・外面ナデ, 体部穿孔有り	中央部黒色土中	5%
83	火鉢	瓦質土器	—	(8.5)	—	石英・長石・雲母	橙	普通	体部上面に焼成前の穿孔有り	南西部黒色土中	5%

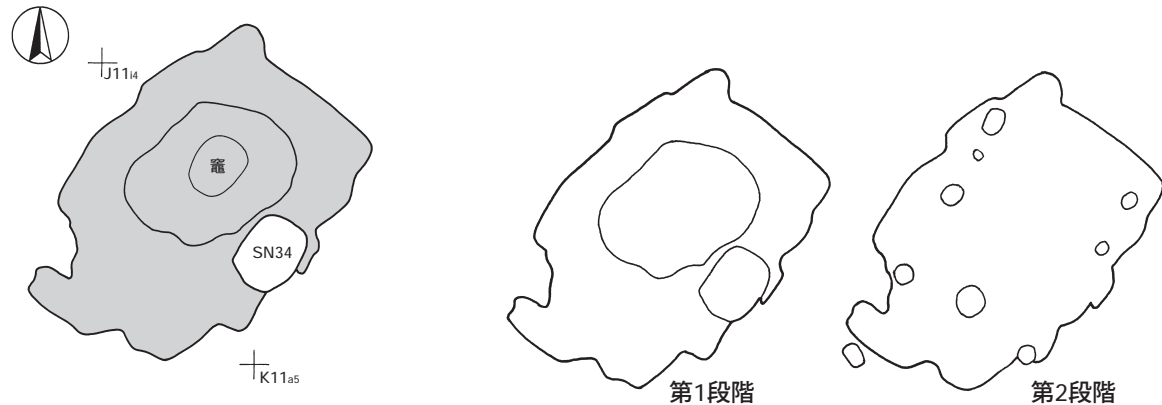
番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質(胎土)	特徴	出土位置	備考
133	環状土錘	4.4	1.3	0.35	7.7	長石	未貫通, 表面ナデ	SN30内	PL46
84	耳金	9.5	0.7	0.7	(33.9)	鉄	断面方形	南部黒色土中	PL51

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	胎土	特徴	出土位置	備考
87	軒丸瓦	(10.5)	(7.6)	2.3	(694.0)	長石	三つ巴紋, 凸面ヘラナデ, 凹面布目痕	北部黒色土面	

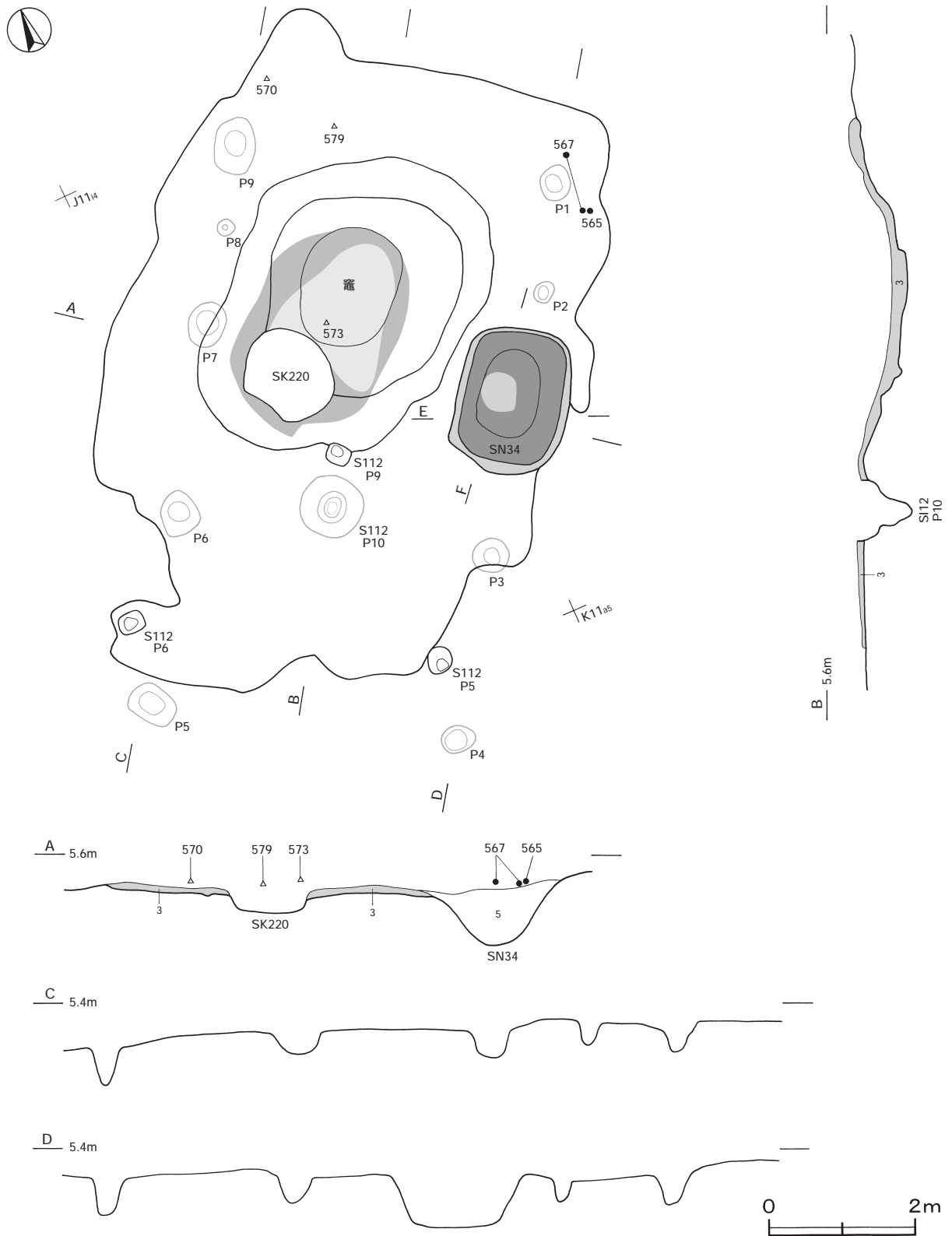
番号	銭名	径	孔径	厚さ	重さ	初鑄年	材質	特徴	出土位置	備考
85	政和通寶	2.44	0.62	0.08	3.22	1111	銅	分楮	覆土中	
86	開元通寶	2.40	0.64	0.13	2.48	621	銅	錆がひどい	覆土中	
131	至和元寶	2.43	0.77	0.08	(2.60)	1054	銅	行書, 欠け	SN10内	島銭カ
134	紹聖元寶	2.35	0.60	0.12	3.26	1094	銅	篆書, 錆がひどい	SN30内	

第3号製塩跡(第18~21図)

位置 調査区南部J11i4区の標高約5.2mの砂丘上に位置している。北東へ約20mの位置には、建物跡が確認されている。



第18図 第3号製塩区域



第19図 第3号製塩跡実測図

重複関係 第12号建物跡の西部を掘り込んで構築し、上層には第19号整地面が構築されている。なお、竈の南西部は第19号整地面に伴う第220号土坑に掘り込まれている。

確認状況 第1段階 砂を1.5m 除去した標高5.2m から、釜屋と竈の範囲、第34号鹹水槽が確認された。

第2段階 10cm 黒色土面を除去すると、P 1～P 9が検出された。

規模と構造 製塩跡の範囲は南北軸8.8m，東西軸6.1mである。製塩跡は釜屋だけが確認され，屋外鹹水槽は確認されていない。釜屋は竈，屋内鹹水槽（第34号鹹水槽）で構成されており，屋内鹹水槽は釜屋内の南東部に位置している。

釜屋 2区 SH-3（第19図） 黑色土の範囲は，長軸約9.8m，短軸約6.5mの不定形で，主軸方向はN-37°-Eである。釜屋は厚さ5~10cmの黑色土を貼り付けて構築されている。

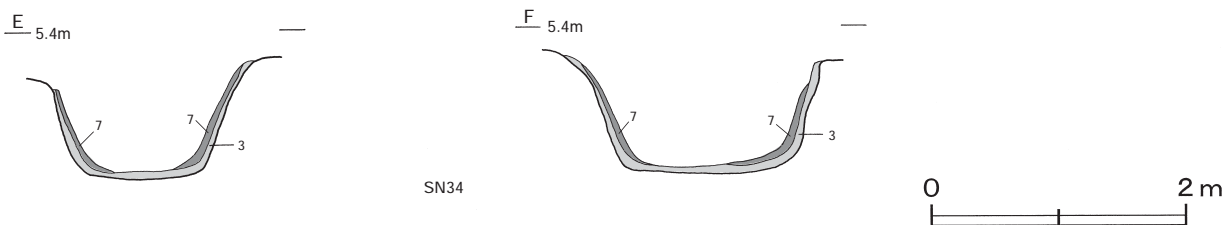
竈は長径4.6m，短径3.5mの楕円形で，釜屋の中央部に位置している。作業面からの深さは50cmで，底面が皿状を呈している。厚さ5~20cmの黑色土を貼り付けて構築されている。底面からは焼砂と灰が検出されている。

土層断面図中，第3層は釜屋を構築した黑色土A層である。

ピットは9か所である。P1~P9は深さ30~50cmで，釜屋の上屋を支えた柱穴と考えられる。

屋内鹹水槽（第19・20図）は，釜屋壁上面の黑色面から表砂をおよそ1.5mほど除去した標高5.2mから検出された。

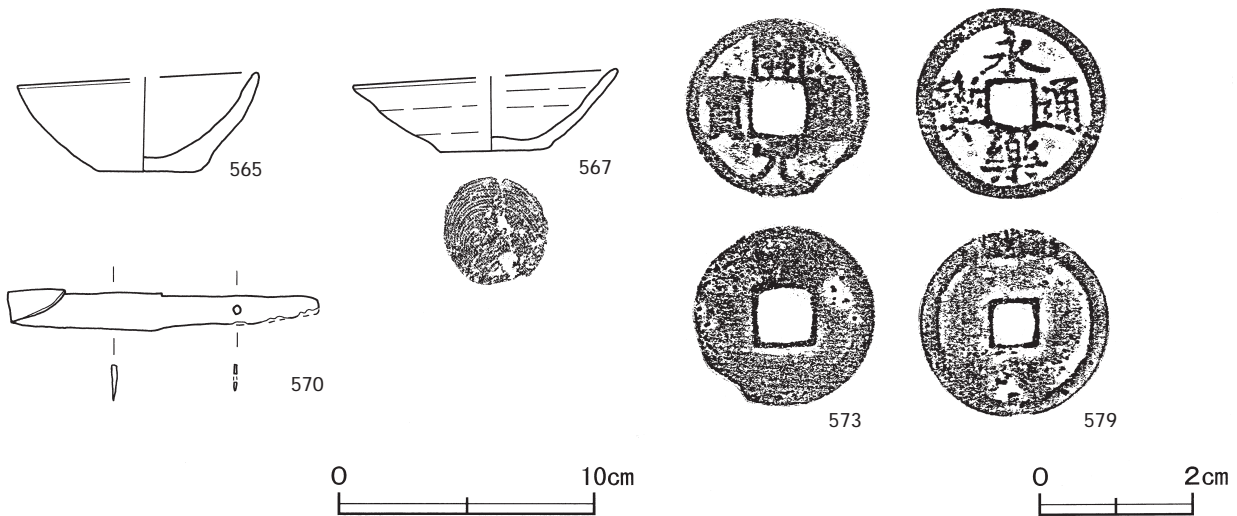
第5層は，第19号整地面を構築する際に鹹水槽が埋め戻された層である。第3・7層は，鹹水槽を構築した



第20図 第3号製塩跡屋内鹹水槽土層図

第3号製塩跡屋内鹹水槽一覧表

遺構番号	位置	長軸(径)方向	規模(m)			形状	黑色土厚(cm)	粘土厚(cm)	壁面	床面	出土遺物	備考
			長軸(径)	短軸(径)	深さ							
34	J11j5	N-39°-E	2.0	1.6	0.9~1.0	隅丸長方形	2~6	2~6	外傾	平坦	-	



第21図 第3号製塩跡出土遺物実測図

黒色土 A 層と粘土層である。

遺物出土状況 土師質土器片 2 点（皿），金属製品 3 点（刀子 1，古銭 2）が出土している。565・567は北東部の操業面，570・579は北西部の覆土中，573は中央部の覆土中からそれぞれ出土している。573は「開元通寶」，579は「永樂通寶」である。

所見 本製塩跡は構築範囲が狭く，屋内鹹水槽も 1 基であることから，小規模に操業されていたか大量生産を行わない初期段階の製塩跡と推測される。

第 3 号製塩跡出土遺物観察表（第21図）

番号	器形	器質	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
565	皿	土師質土器	[9.5]	4.0	4.0	雲母	にぶい橙	普通	底部回転糸切り	北東黒色土面	70%
567	皿	土師質土器	[10.4]	4.3	4.3	雲母	にぶい橙	普通	底部回転糸切り	北東黒色土面	60%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
570	刀子	(12.2)	1.5	0.2	(22.9)	鉄	刀身部屈曲，目釘孔有り	北部覆土中	

番号	銭名	径	孔径	厚さ	重さ	初铸年	材質	特徴	出土位置	備考
573	開元通寶	2.40	0.68	0.11	(2.96)	621	銅	真書，欠け，背上「口」カ	中央部覆土中	
579	永樂通寶	2.52	0.56	0.13	3.32	1408	銅	真書	北部黒色土面	

第 4 号製塩跡（第22～26図）

位置 調査区中央部 H13c2区の標高約5.5～6.0m の砂丘上に位置している。

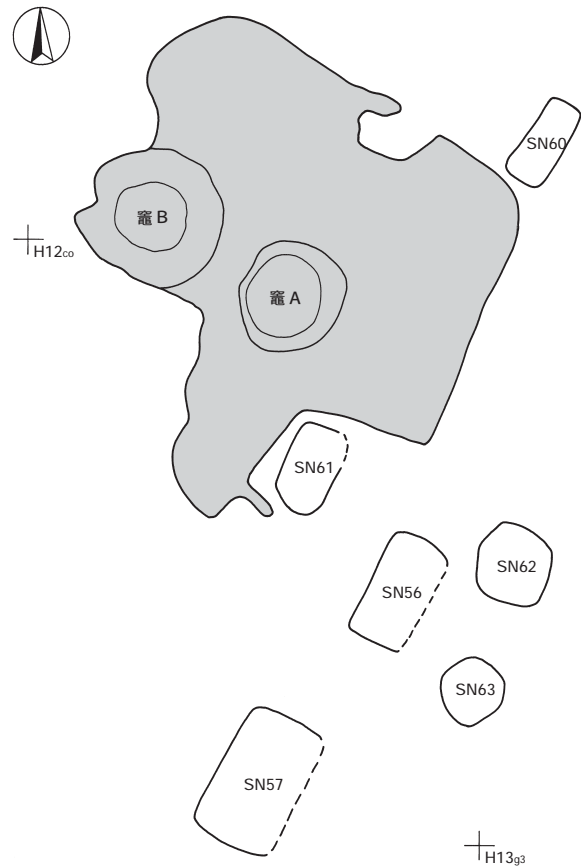
確認状況 第 1 段階 表砂をおよそ6.0～6.5m 除去した標高5.5～5.9m から，釜屋と竈 2 基の範囲が確認された。

第 2 段階 釜屋内の北部から焼砂が検出された。土層から A 号竈が新しいことが判明した。

第 3 段階 黒色土面を除去すると，P1～P15が検出された。

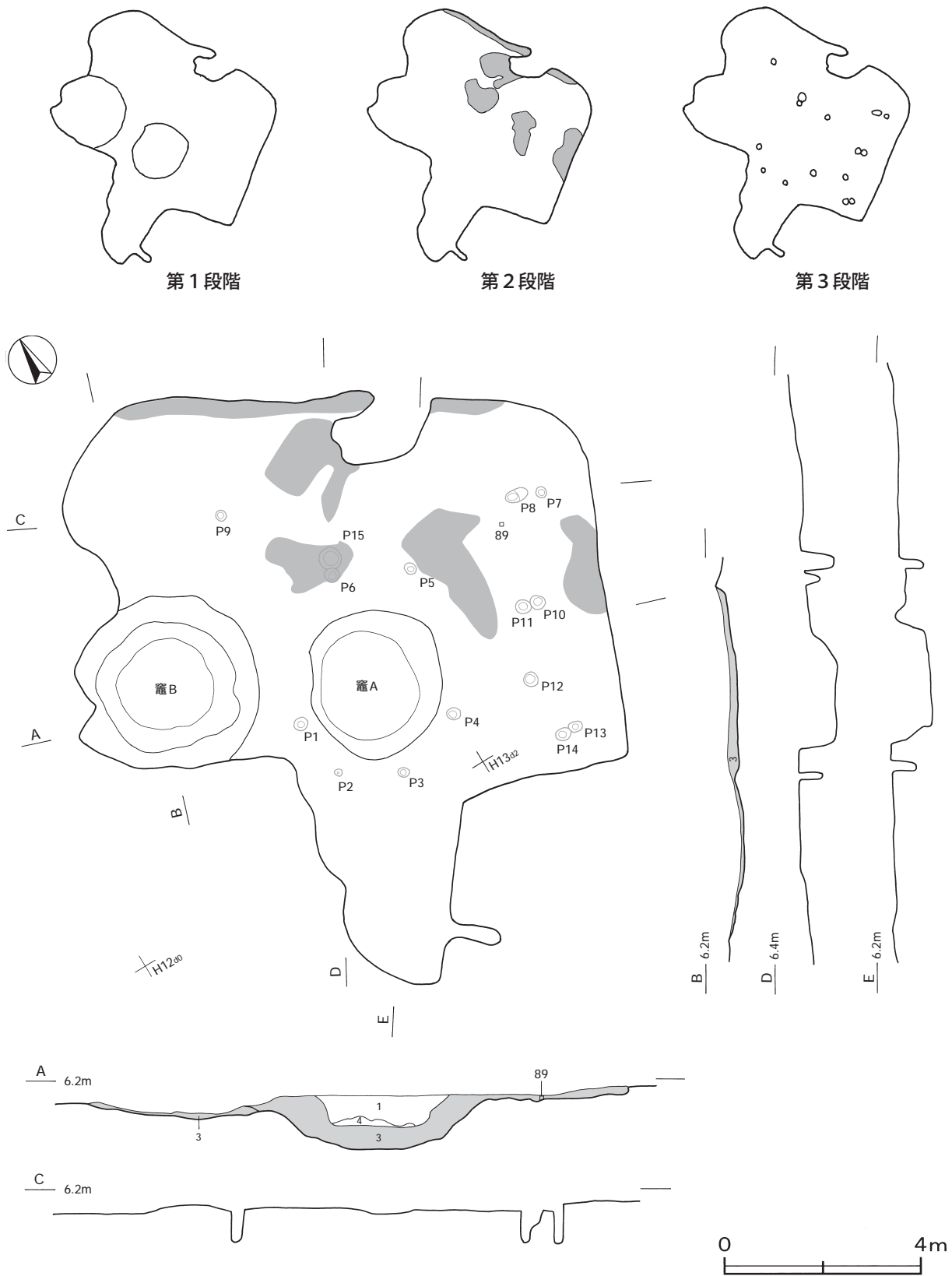
規模と構造 製塩跡の範囲は南北軸13m，東西軸12m である。製塩跡は第 4 号釜屋跡，屋外鹹水槽（第56・57・60～63号鹹水槽）で，釜屋は竈 2 基だけが検出された。屋外鹹水槽は製塩跡内の南東部を中心に位置している。

釜屋 2 区 SH - 4（第23図） 南北軸11.8m，東西軸10.7m の不定形で，残存している黒色土から主軸方向は N - 29° - E と推測される。釜屋は10～18cm の黒色土を貼り付けて構築されている。



第22図 第 4 号製塩区域

A号竈は長径3m、短径2.6mの楕円形で、釜屋内の中央部に位置している。作業面からの深さは60cmで、底面は平坦である。厚さ10~18cmの黒色土を貼り付けて構築されている。B号竈は長径3.8m、短径3.5mの円



第23図 第4号製塩跡実測図

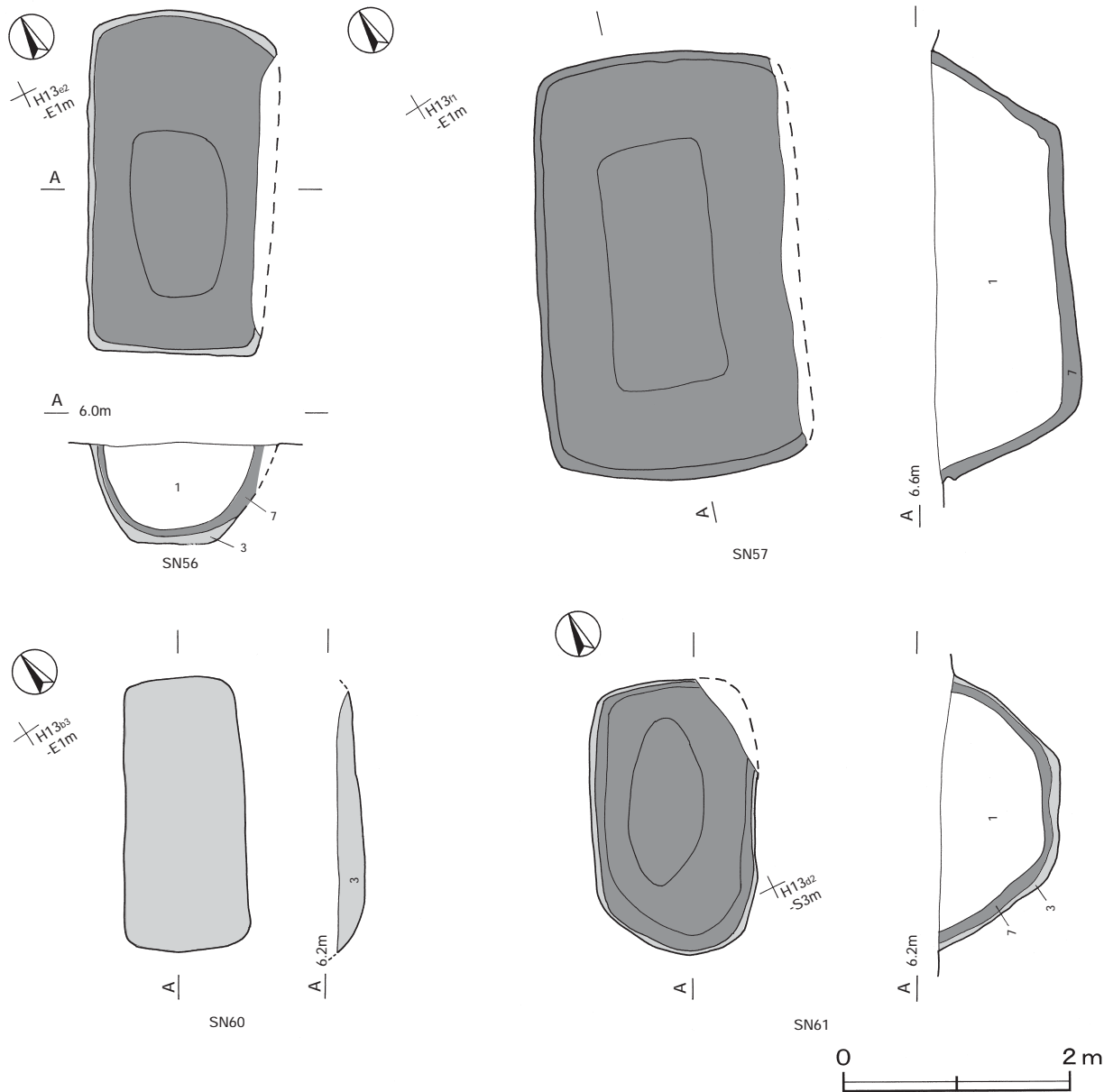
形で釜屋内の西部に位置している。作業面からの深さは25cmで、底面は皿状を呈している。厚さ5～10cmの黒色土を貼り付けて構築されている。

土層断面図中、第1・4層は竈内に堆積した覆土で、第1層は砂A層を主体とした自然堆積の層、第4層は黒色土B層である。第3層は釜屋を構築した黒色土A層である。

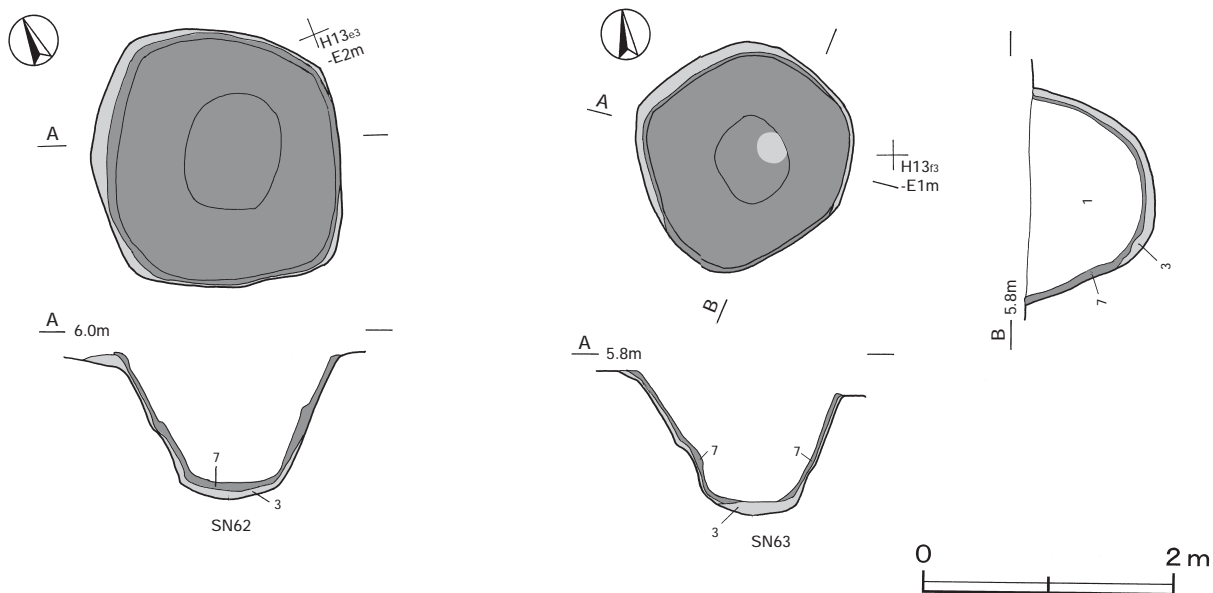
ピットは15か所である。P6は深さ30cmとやや浅いが、他は深さ40～90cmである。P1～P6は竈周辺で確認されていることから、上屋を支える柱穴の可能性はある。その他のピットは性格不明である。

屋外鹹水槽（第24・25図） 表砂をおよそ6.5m除去した標高5.5mの製塩跡内の南東部から第56・57・61号鹹水槽、北東部から第60号鹹水槽、さらに砂を20cm除去した南東部から第62・63号鹹水槽が検出された。

第1層は砂A層主体の自然堆積の層で、堆積状況から短期間で埋没したものと考えられる。第3・7層は鹹水槽を構築した黒色土A層と粘土層である。



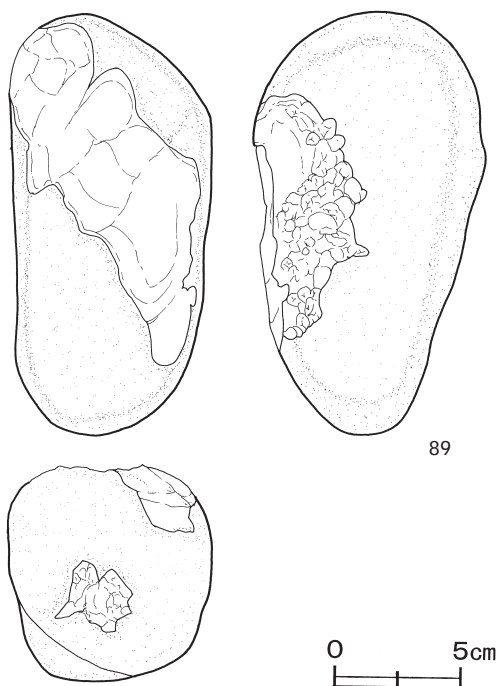
第24図 第4号製塩跡屋外鹹水槽実測図（1）



第25図 第4号製塩跡屋外鹹水槽実測図(2)

第4号製塩跡屋外鹹水槽一覧表

遺構 番号	位 置	長軸(径) 方向	規模(m)			形 状	黒色土厚 (cm)	粘土厚 (cm)	壁面	床面	出土遺物	備 考
			長軸(径)	短軸(径)	深さ							
56	H13e2	N-28° -E	3.1	(1.5)	0.8	隅丸長方形	2~12	4~17	外傾	平坦	-	
57	H13f1	N-32° -E	3.7	(2.1)	1.1	隅丸長方形	-	5~17	外傾	平坦	-	
60	H13b3	N-32° -E	(2.4)	(1.1)	-	隅丸長方形	12~22	-	不明	不明	-	
61	H13d1	N-27° -E	2.4	1.5	0.9	隅丸長方形	2~10	4~11	外傾	平坦	-	
62	H13e3	N-20° -E	2.0	2.0	1.0	隅丸長方形	2~11	2~6	外傾	平坦	-	
63	H13e2	N-53° -E	1.7	1.7	1.0	円 形	2~10	1~8	外傾	平坦	-	



第26図 第4号製塩跡出土遺物実測図

遺物出土状況 石器1点(敲石)が、釜屋内の北東部の黒色土中から出土しただけである。

所見 土層から二時期の操業が考えられる。B号竈が初期操業で、A号竈が最終操業であると考えられる。釜屋内の壁部に立ち上がりをもたない点で、他の釜屋との相違が見られる。

屋外鹹水槽は6基検出された。検出状況から最終作業に伴う第56・57・60・61号鹹水槽は、ほぼ北東に主軸を傾けながら位置しており、その中でも第56・57号鹹水槽は大規模である。

最終操業面の不特定の場所から焼砂が検出されていることから、本釜屋跡は焼失したものと推測される。焼失し操業が打ち切られたのか、廃絶後に焼失したかは不明である。時期は、出土遺物が少なく明確にすることができない。

第4号製塩跡出土遺物観察表（第26図）

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
89	敲石	16.6	8.1	8.6	1,580	砂岩	加工痕・殴打痕有り，一部火熱痕	北東部黒色土中	PL47

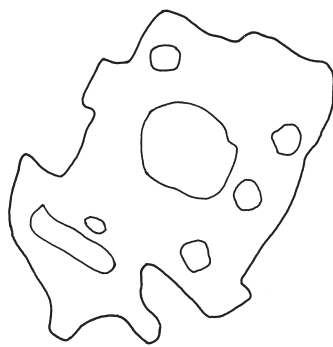
第5号製塩跡（第27～37図）

位置 調査区中央部 G12f7区の標高約8.2mの砂丘上に位置している。東には第6号製塩跡が確認されている。

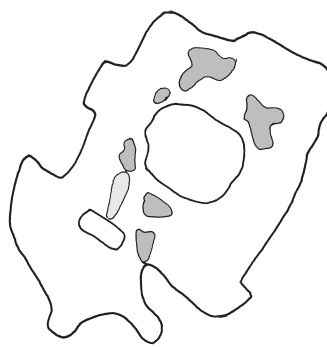
確認状況 第1段階 表砂をおよそ3.8m除去した標高8.2mから，暗褐色土で区画された黒色土の範囲とA号竈，釜屋南西部から第2号土坑，P1～P5が検出された。

第2段階 10cm黒色土を除去すると，B号竈，第9号鹹水槽，第二次操業面から焼砂，灰が検出された。

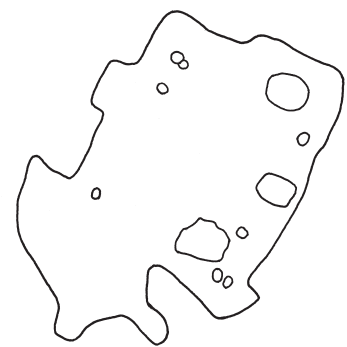
第3段階 10cm黒色土を除去すると，釜屋の東部の黒色土中から第14・16・17号鹹水槽，P6～P13が検出された。



第1段階



第2段階



第3段階

規模と構造 製塩跡の範囲は南北軸37m，東西軸18mである。製塩跡は釜屋，屋外鹹水槽（第6・8・13・18～25・40・67～71号鹹水槽）で，釜屋は竈2基，屋内鹹水槽（第9・14・16・17号鹹水槽）で構成されている。屋内鹹水槽は釜屋内の南東部，屋外鹹水槽は製塩跡内の北部から東部にかけて位置している。南西部には第2号土坑（4区）が構築されている。

釜屋 4区 SH-1（第28図）長軸約15.2m，短軸約11.1mの不定形で，北東部と南西部で大きな張り出し部もっている。主軸方向はN-32°-Eである。釜屋は厚さ10～60cmの黒色土を貼り付けて構築されている。壁際は50cmほど黒色土を貼り付け，その外側には山砂と暗褐色土を混ぜ合わせたものを版築状に積み重ねている。

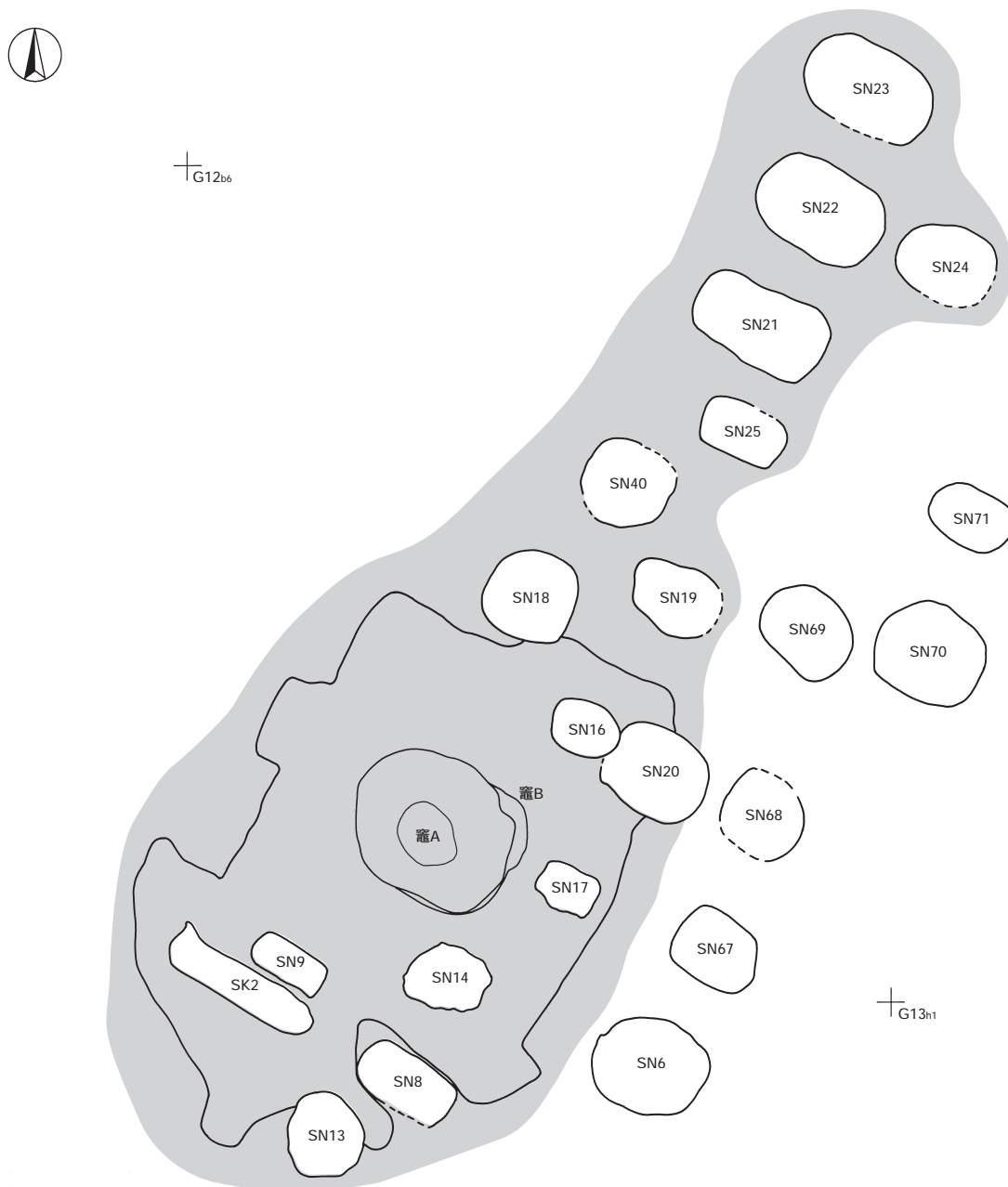
竈A号は長径4.8m，短径4mの楕円形で，釜屋内の中央部に位置している。操業面からの深さは50～60cmで，底面は平坦である。A号竈は厚さ最大で90cmの黒色土を貼り付けて構築されている。B号竈は長径4.9m，短径4mの楕円形である。B号竈は厚さ12～60cmの黒色土を貼り付けて構築されている。底面は3面の黒色面が確認されており，第1次面と第2次面の黒色土層の間には約20cmの灰層が入っている。

土層断面図中，第3層は釜屋を構築した黒色土A層である。竈の第1次面と第2次面の黒色土層の間には，焼砂層である第9層が入り，この層を境に最終操業面と第二次操業面に分けることができる。また，第二次操業面と第三次操業面の黒色土層の間にも砂A層が確認でき，この層を境に初期操業面と第二次操業面に分けることができる。第10層は釜屋を構築する際，暗褐色土と山砂を版築状に積み重ねた土層である。

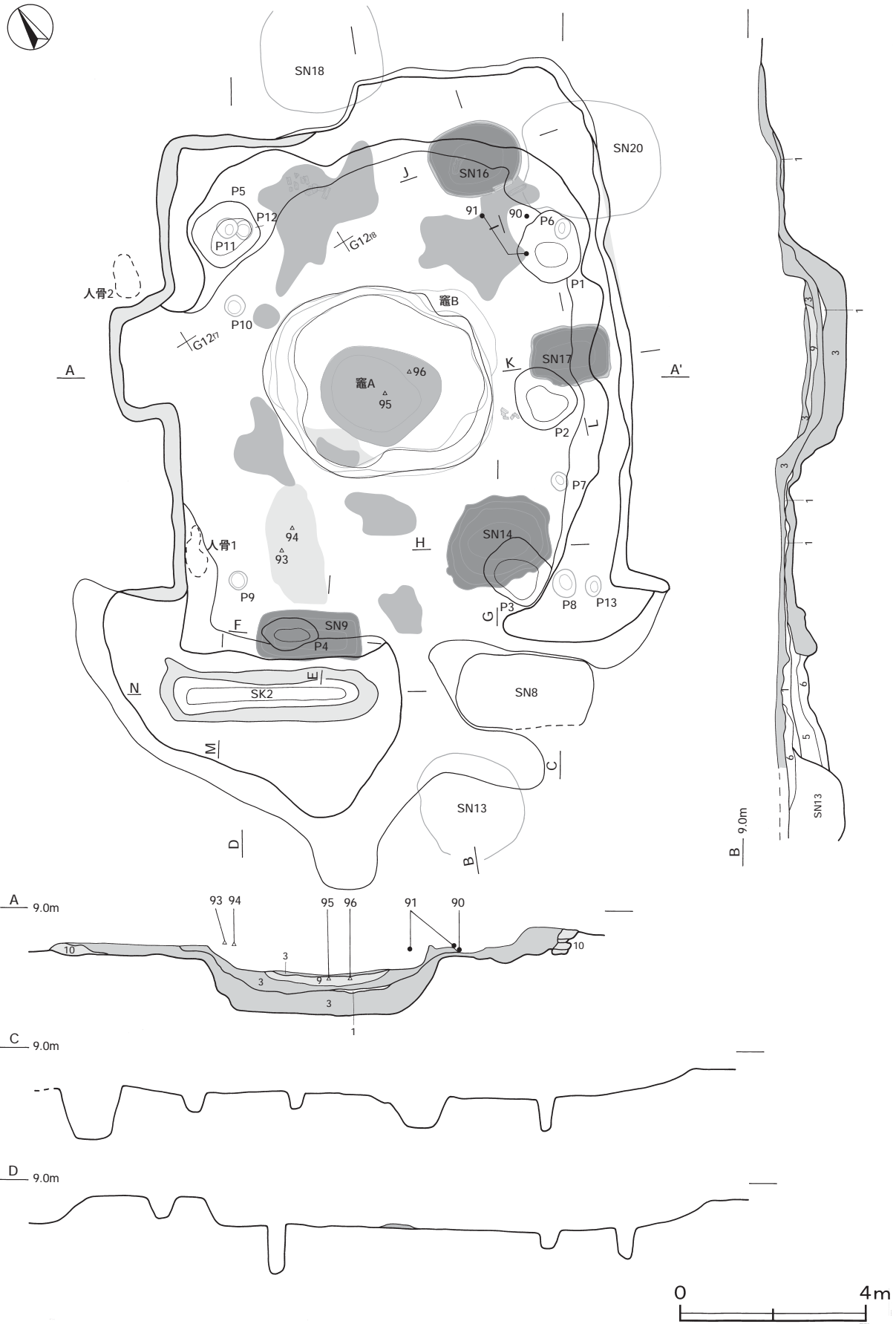
ピットは13か所である。P 1～P 5は深さ60～80cmと深いが、調査の第1段階で確認されており、最終作業面に伴う柱穴と考えられる。また、P 7・P 8・P10の深さはいずれも40cm、P 6・P 9・P11は深さ70・100・70cmで、初期・二次作業面に伴う柱穴と考えられる。

屋内鹹水槽（第28・29図）は釜屋の最終作業面から10cm 黒色土を除去したところ、釜屋内の南西部から第9号鹹水槽、竈の南東部から第14号鹹水槽を確認した。さらに、釜屋内の北部の黒色土中からは第16・17号鹹水槽が検出された。

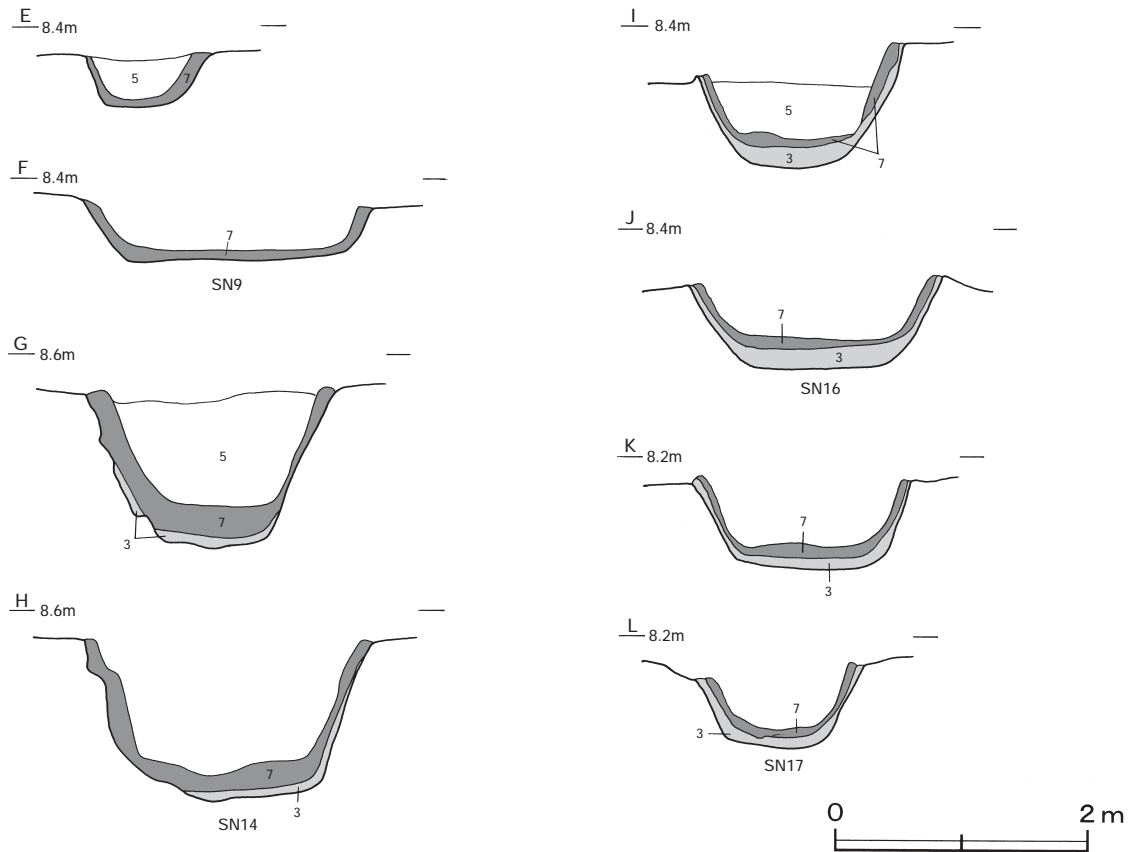
第5層は第9・14・16号鹹水槽を埋め戻した黒色土C層である。また、第3・7層は鹹水槽を構築した黒色土A層と粘土層である。



第27図 第5号製塩区域



第28図 第5号製塩跡実測図



第29図 第5号製塩跡屋内鹹水槽土層図

第5号製塩跡屋内鹹水槽一覧表

遺構 番号	位 置	長軸(径)方向	規模 (m)			形 状	黒色土厚 (cm)	粘土厚 (cm)	壁面	床面	出土遺物	備 考
			長軸(径)	短軸(径)	深さ							
9	G12g6	N-56° -W	2.2	1.0	0.4	隅丸長方形	—	4~12	緩斜	平坦	—	
14	G12g7	N-65° -W	2.2	2.0	1.1	不 定 形	1~8	4~24	外傾	平坦	皿	
16	G12f8	N-65° -W	2.0	1.6	0.7	楕 円 形	2~18	2~10	外傾	平坦	—	
17	G12g8	N-63° -W	1.7	1.3	0.7	隅丸長方形	3~10	3~12	外傾	平坦	—	

屋外鹹水槽(第31~35図) 表砂をおよそ3m除去した標高9mの製塩跡の北東部に広がる黒色土面から、第20~25号鹹水槽、釜屋内の南部から第8・13号鹹水槽、さらに釜屋の北壁際の黒色土中から第18~20号鹹水槽、製塩跡の東部からは第67~71号鹹水槽が検出された。

第1層は砂A層を主体とした自然堆積の層で、短い期間で埋没したと推測される。第2・4層は鹹水槽が埋め戻された層である。また、第3・7層は鹹水槽を構築した黒色土A層と粘土層である。

土坑(第30図) 長径4.5m、短径約1mの隅丸長方形で、釜屋内の南西部の標高8.6mから確認された。壁は暗褐色土と山砂を版築状に積み重ねて構築されている。



第30図 第5号製塩跡土坑土層図

遺物出土状況 土師質土器6点(内耳鍋), 陶器2点(碗, 甕), 石器3点(紡錘車), 金属製品7点(吊金具4, 古銭2, 不明1), 骨片(人骨カ)が出土している。紡錘車は竈内覆土中からで, 埋土とともに混入したものである。吊金具は, 釜屋内の南西部作業面から出土しているが, 釜屋跡の廃絶後に遺棄されたものである。

第14号鹹水槽から磁器片1点(皿)が出土しているが, 埋土とともに混入したものである。

第20号鹹水槽から土師質土器片1点(内耳鍋), 第8・21号鹹水槽からそれぞれ人骨が出土している。

第8号鹹水槽から出土した人骨は, 鹹水槽の南西壁を掘り込んでおり, 釜屋廃絶後, 埋葬されたものと考えられる。

人骨1出土状況 4区SH-1②(第37図)

南西部の標高8.5mで確認されている。ほとんどの骨が損傷を受けたため, 残存している部分で記録した。埋葬の状況は大腿骨が北側で, 肋骨と歯が南側で確認されていることから, 南頭位での埋葬と推測される。

遺骸の特徴は, 歯4本, 上腕骨と肋骨, 大腿骨の一部が残存するだけである。残存している部分の大腿骨の長さは, 36.5cmである。歯は永久歯で, 切歯2本と大白歯2本という内訳である。性別は不明で, 成人と推測される。副葬品もなく埋葬の時期は不明であるが, 第5号釜屋構築後の埋葬であると推測される。

人骨2出土状況 4区SH-1③(第37図)

北西部の標高8.5mから確認されており, 北頭位北西面右側臥屈葬で埋葬されていた。性別は男性で, 年齢は熟年と推測される。ほぼ全身骨格が確認されたが, 腐朽が進んでいた。切歯4本, 犬歯3本, 小白歯8本, 大白歯11本が確認でき, 上顎下顎ともに第3大白歯まで萌出している。歯全体に著しい摩滅が認められる。副葬品もなく埋葬の時期は不明であるが, 第5号釜屋構築後の埋葬であると推測される。

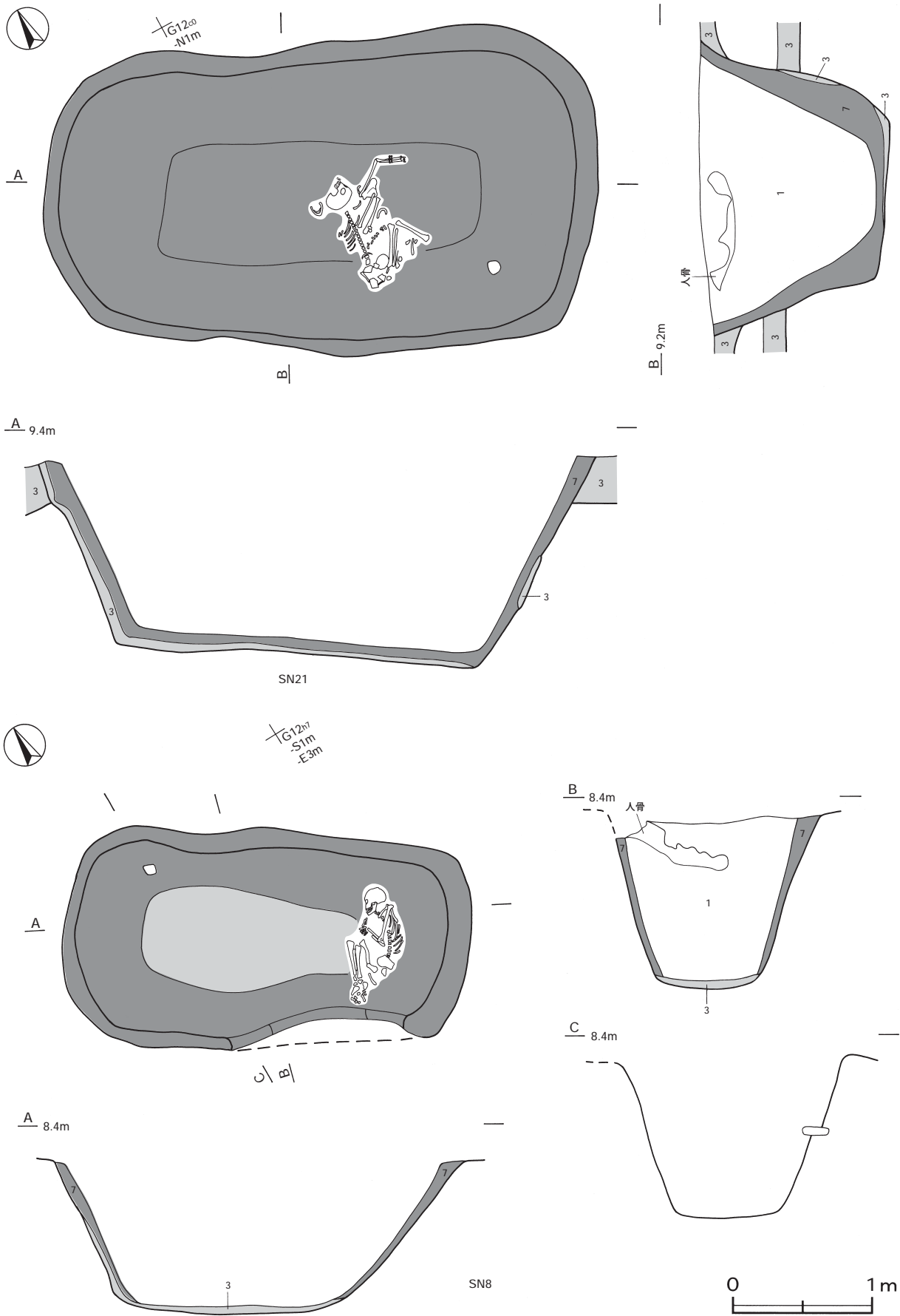
第8号鹹水槽人骨出土状況 4区SN-8(第31図)

北東頭位北西面右側臥屈葬で埋葬されており, 性別は女性で年齢は熟年と推測される。ほぼ全身骨格が確認され, 残存状態が良好である。頭蓋骨は薄く, 眼窩上隆起が弱い。下顎や四肢骨が細く, 骨盤の大坐骨切痕は鈍角である。歯は永久歯であり, 上顎下顎ともに第3大白歯まで萌出している。第3大白歯はすべて生前脱落し, その部分の歯槽骨が閉鎖している。下顎左側の第1大白歯も同様で, 歯槽骨が閉鎖している。歯列の乱れによりかみ合わせが悪く, 歯全体に磨耗が少ない。副葬品もなく, 埋葬の時期は不明であるが, 第8号鹹水槽構築後の埋葬であると推測される。

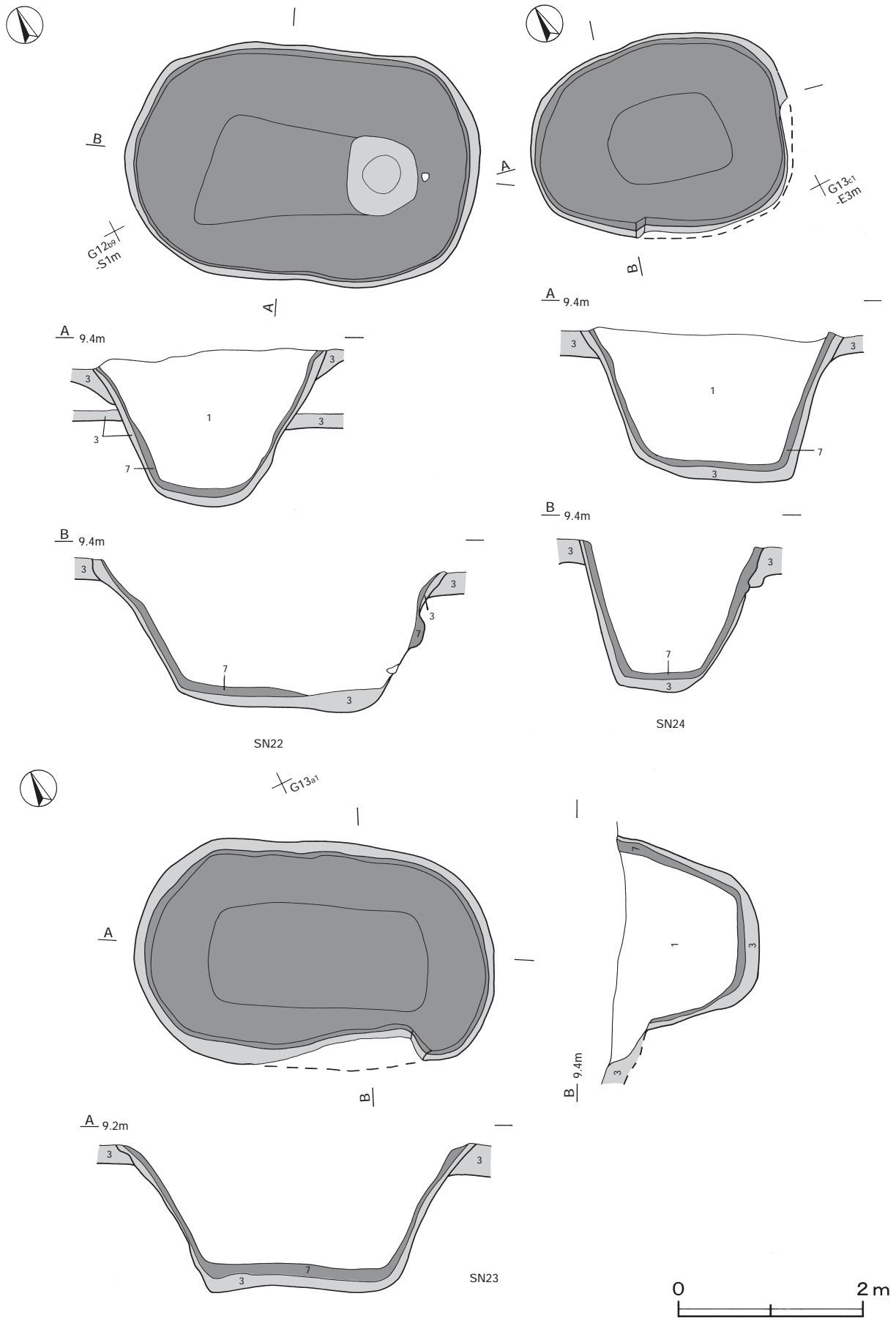
第21号鹹水槽人骨出土状況 4区SN-21(第31図)

北頭位東面左側臥屈葬で埋葬されており, 頭蓋骨が確認された人骨は性別不明で若年(15~16歳), 下顎と四肢骨が確認された人骨は女性で老年と推測される。頭蓋骨と下顎は, 確認した段階で図示したような状態で出土した。

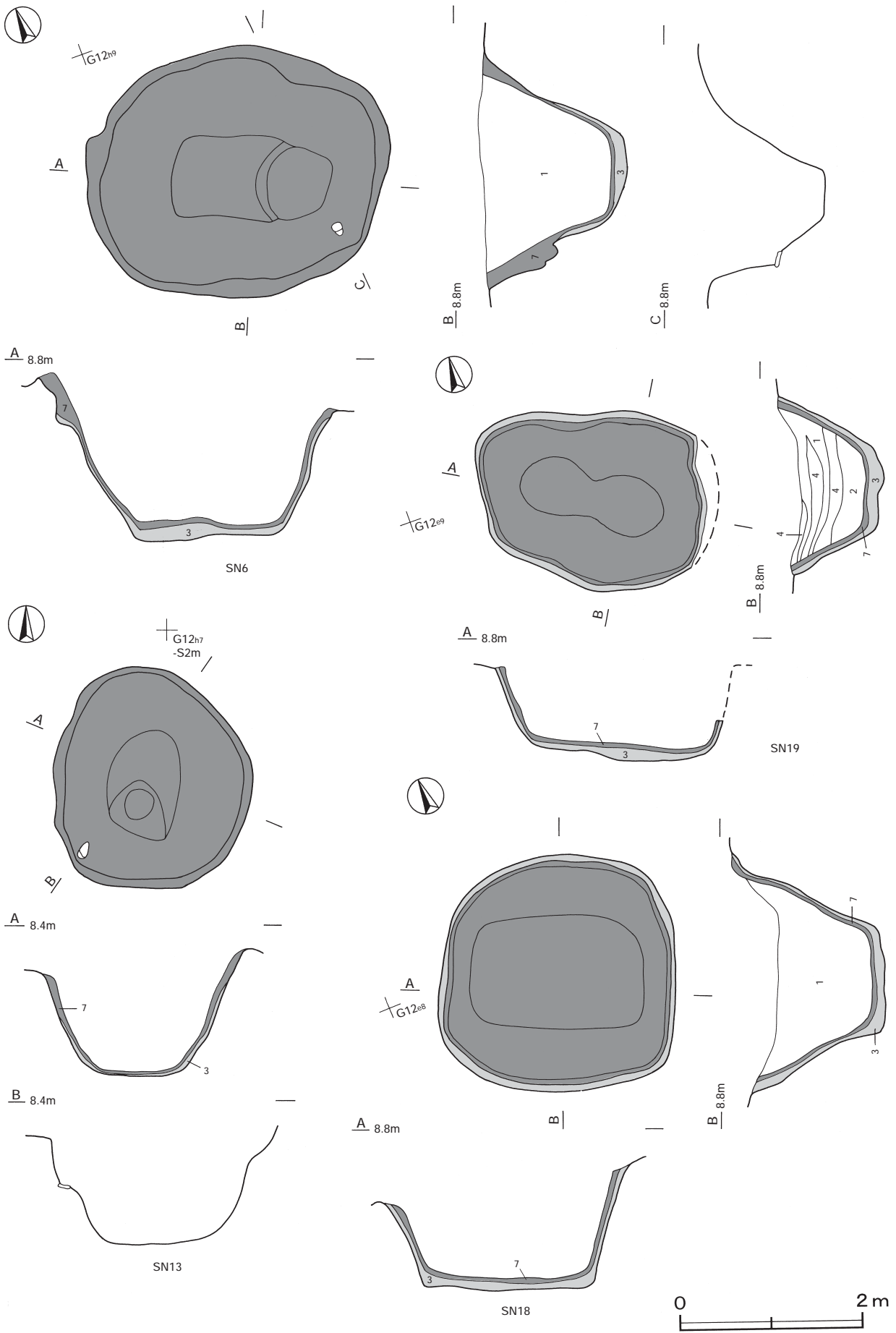
頭蓋骨が確認された個体は, 歯が永久歯であり, 上顎左側の第2大白歯が生前に脱落している。第3大白歯は未萌出である。下顎と四肢骨が確認された個体は, 頭蓋骨を除きほぼ1個体分が残存しており, 腐朽が進んでいる。下顎左右の第1大白歯は生前脱落し, 歯槽骨の閉鎖がみられる。大坐骨切痕は鈍角である。副葬品もなく, 埋葬の時期は不明であるが, 第21号鹹水槽構築後の埋葬であると推測される。2個体分の人骨が1個体として埋葬された理由については不明である。



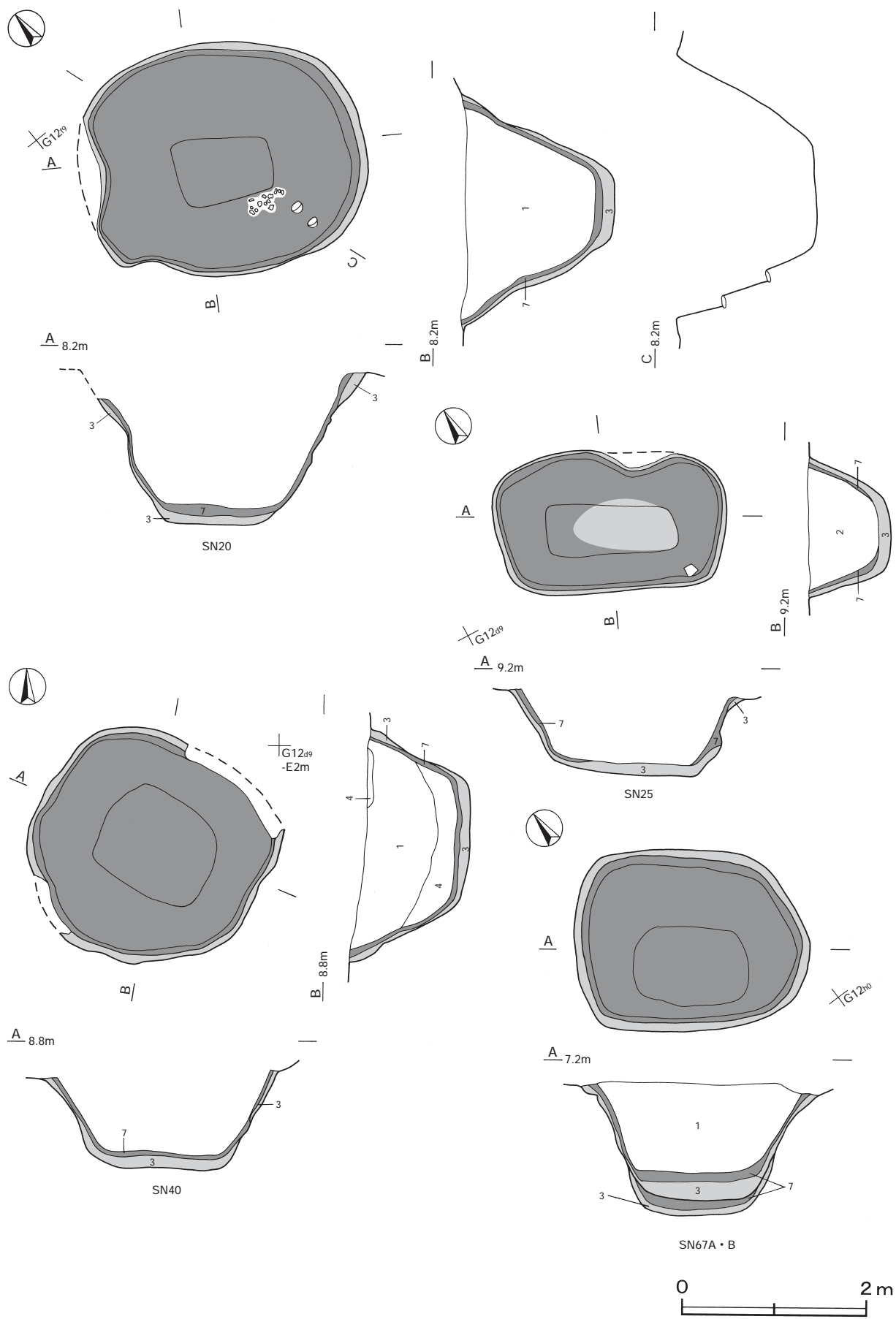
第31図 第5号製塩跡屋外鹹水槽・人骨出土状況実測図



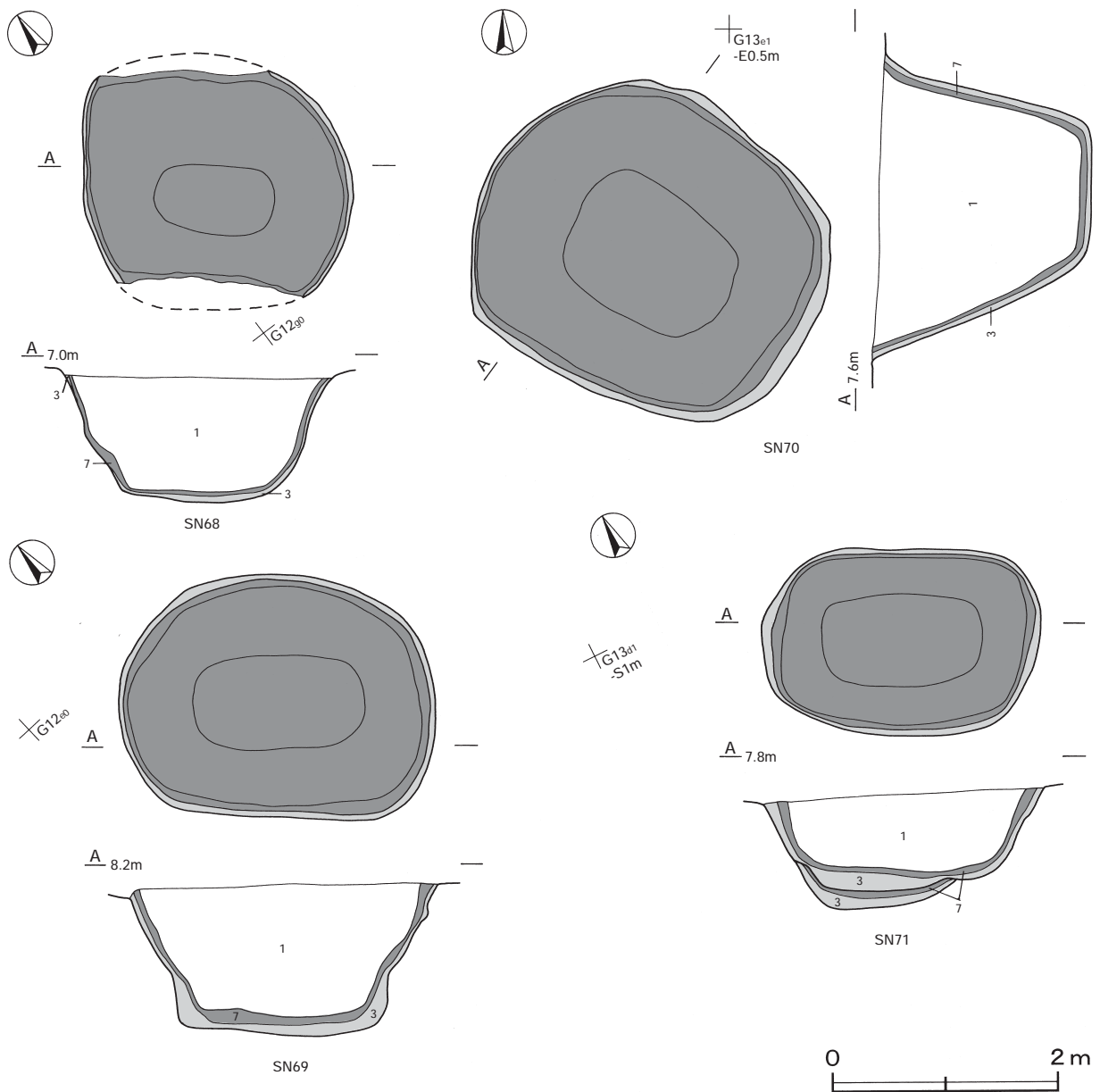
第32图 第5号製塩跡屋外鹹水槽実測図(1)



第33图 第5号製塩跡屋外鹹水槽実測図(2)



第34図 第5号製塩跡屋外鹹水槽実測図(3)

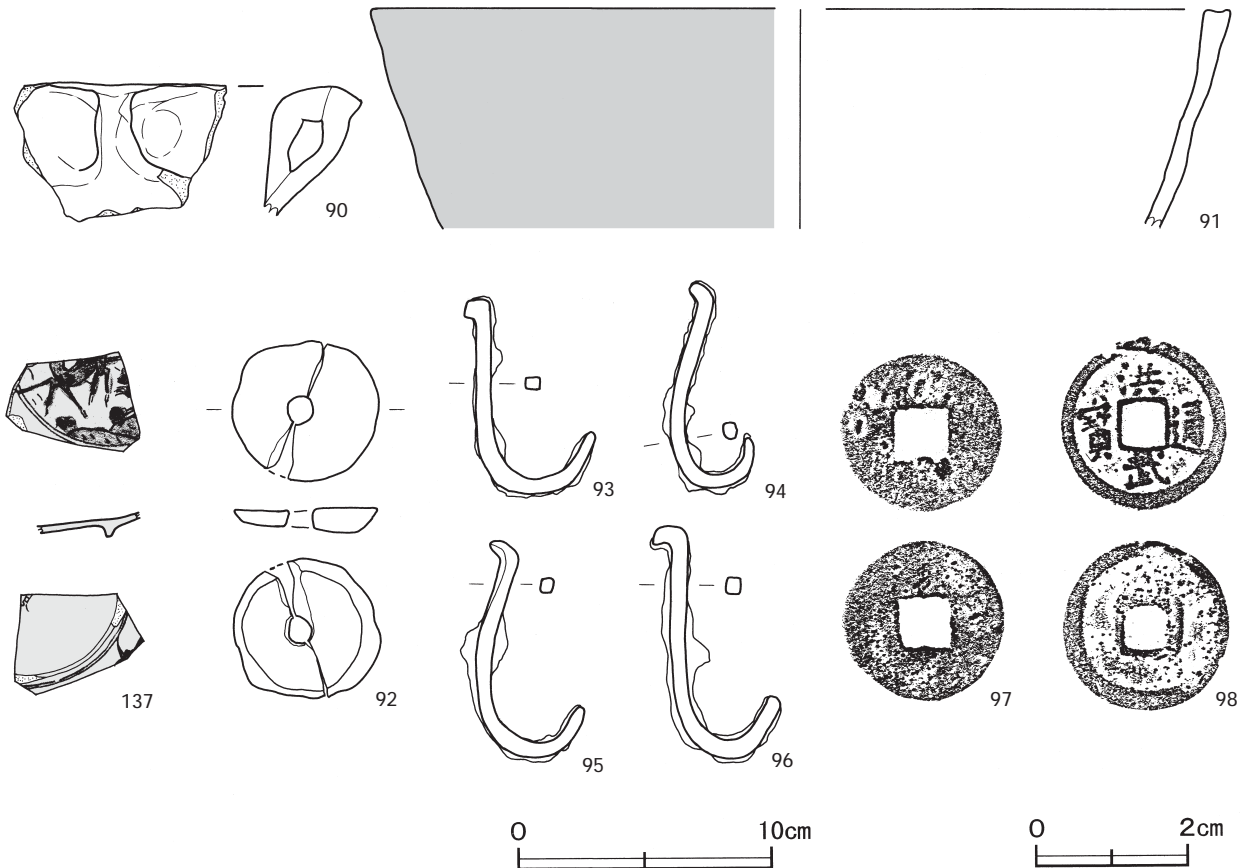


第35図 第5号製塩跡屋外鹹水槽実測図(4)

第5号製塩跡屋外鹹水槽一覽表

遺構 番号	位 置	長軸(径) 方向	規模(m)			形 状	黒色土厚 (cm)	粘土厚 (cm)	壁面	床面	出土遺物	備 考
			長軸(径)	短軸(径)	深さ							
6	G12h9	N-65° -W	3.2	2.7	1.4	楕 円 形	2~18	3~24	外傾	緩い起伏	-	
8	G12h7	N-53° -W	2.9	1.6	1.0	隅丸長方形	2~6	1~16	外傾	平 坦	人 骨	
13	G12h6	N-16° -W	2.5	2.3	1.2	不 定 形	1~3	3~7	外傾	平 坦	-	
18	G12e8	N-66° -W	2.6	2.6	1.4	隅丸方形	3~14	2~8	外傾	平 坦	-	
19	G12e9	N-61° -W	(2.5)	2.0	0.9	不 定 形	1~14	2~6	外傾	緩い起伏	-	
20	G12f9	N-34° -W	(2.9)	2.5	1.5	[楕 円 形]	1~12	2~12	外傾	平 坦	内平鍋	
21	G12c0	N-62° -W	4.0	2.3	1.3	隅丸長方形	2~7	5~28	外傾	平 坦	人 骨	
22	G12b9	N-56° -W	3.7	2.5	1.5	楕 円 形	1~22	1~10	緩斜	平 坦	-	
23	G12a0	N-61° -W	3.9	2.4	1.3	楕 円 形	1~16	1~15	外傾	平 坦	-	
24	G13b1	N-69° -W	2.8	(2.2)	1.4	[楕 円 形]	3~13	2~10	外傾	平 坦	-	
25	G12c9	N-67° -W	2.5	1.5	0.8	隅丸長方形	3~13	2~8	外傾	平 坦	-	
40	G12d9	N-67° -W	2.5	2.5	0.9	円 形	2~14	2~6	外傾	平 坦	-	

遺構 番号	位 置	長軸 (径) 方向	規模 (m)			形 状	黒色土厚 (cm)	粘土厚 (cm)	壁面	床面	出土遺物	備 考
			長軸 (径)	短軸 (径)	深さ							
67A	G12g9	N-52° -W	2.5	2.2	0.9	楕円形	2~20	2~12	外傾	平坦	—	
67B	G12g9	—	—	—	1.2	楕円形	2~8	2~12	外傾	平坦	—	
68	G12f0	N-53° -W	2.3	(1.8)	1.0	[楕円形]	1~6	2~8	外傾	平坦	—	
69	G12e0	N-47° -W	2.8	2.2	1.1	楕円形	2~17	2~12	外傾	平坦	—	
70	G13e1	N-60° -W	3.1	2.8	1.7	楕円形	4~6	4~6	外傾	平坦	—	
71A	G13d1	N-63° -W	2.5	1.6	0.7	楕円形	4~15	2~8	外傾	平坦	—	
71B	G13d1	—	—	—	0.9	—	4~14	2~4	外傾	平坦	—	



第36図 第5号製塩跡出土遺物実測図

第5号製塩跡出土遺物観察表 (第36図)

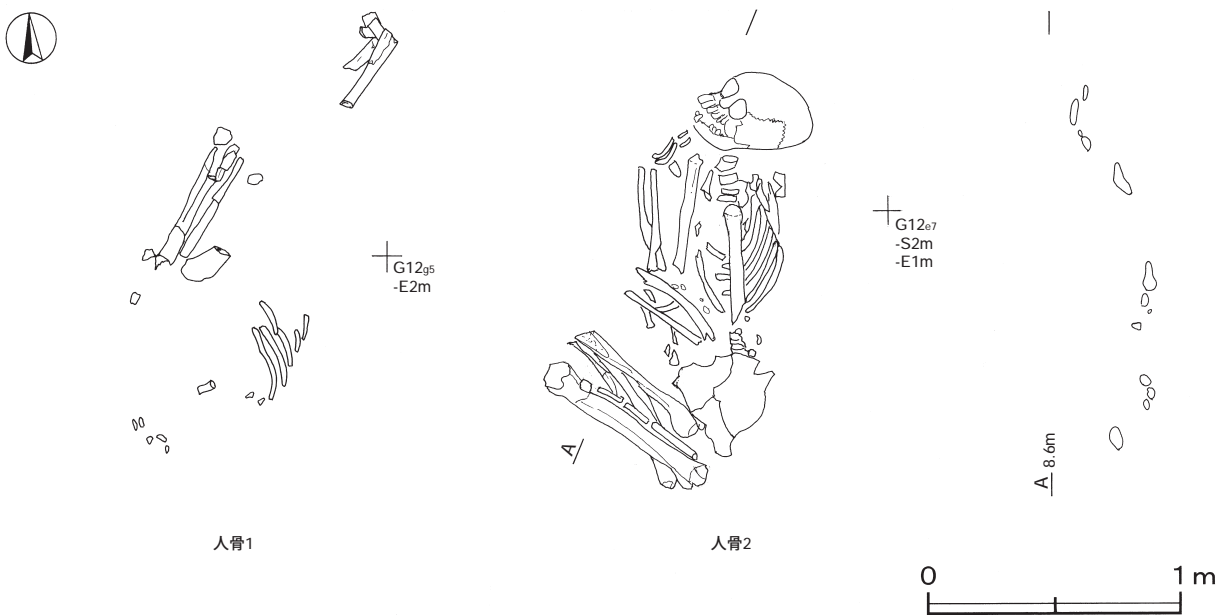
番号	器形	器質	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
90	内耳鍋	土師質土器	—	(5.2)	—	雲母	明赤褐	普通	口縁部横ナデ, 外面煤付着	北東部黒色土面	5%
91	内耳鍋	土師質土器	[33.9]	(18.7)	—	石英・長石・雲母	明赤褐	普通	口縁部横ナデ, 外面煤付着	北東部黒色土面	5%

番号	器形	器質	口径	器高	底径	胎土・色調	絵付・釉薬	文様・特徴	産地・年代	出土位置	備考
137	皿	磁器	—	(0.9)	[7.5]	灰白・灰白	染付・透明釉	鹿文	明代, 16世紀後半 (B1群)	SN14内	5% PL38

番号	器種	径	孔径	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
92	紡錘車	5.6	1.1	(0.9)	(34.4)	泥岩	片面穿孔, 一部欠損	籠内覆土中	PL46

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
93	吊金具	7.7	0.6	0.5	22.3	鉄	断面方形	南東部黒色土面	PL51
94	吊金具	8.5	0.6	0.6	19.3	鉄	断面方形カ	南東部黒色土面	PL51
95	吊金具	8.8	0.5	0.6	28.0	鉄	断面方形	竈内	PL51
96	吊金具	9.2	0.6	0.7	39.2	鉄	断面方形	竈内	PL51

番号	銭名	径	孔径	厚さ	重さ	初鑄年	材質	特徴	出土位置	備考
97	—	2.14	0.66	0.08	2.00	—	銅	無文銭	覆土中	
98	洪武通寶	2.22	0.56	0.09	(2.92)	1368	銅	真書	覆土中	



第37図 第5号製塩跡人骨1・2出土状況実測図

所見 土層から三時期の操業が考えられる。第一次操業面と第二次操業面は長く存続したと推測され、第三次操業面はわずかの期間で廃絶されたと推測される。第一次操業面から焼砂や炭化材が検出されていることから、第一次操業面は焼失したと推測される。

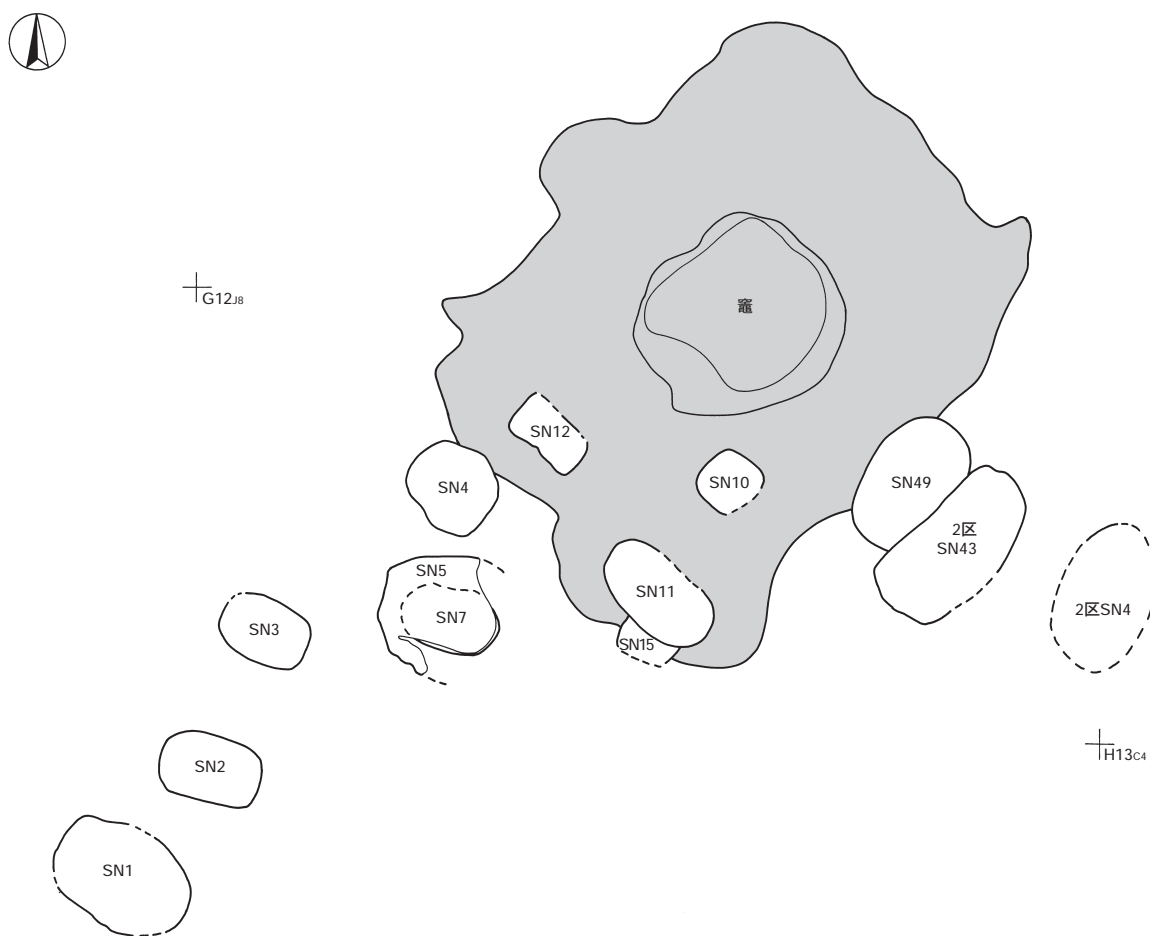
屋内鹹水槽は4基検出され、出土状況から第9・14・16・17号鹹水槽は第二次操業に伴うものである。

屋外鹹水槽は17基検出され、出土状況から第8・21～24号鹹水槽は第一次操業に伴い、主軸をほぼ同じにしなが製塩跡の北東部に位置している。規模と形状もほぼ同一で、深さも1mを超えており、これらが機能した時期は、大規模に製塩が営まれていた可能性が高い。また、屋外鹹水槽が北東に向かって構築されていることを考えると、東部に位置する第6号製塩跡が既に存在していた可能性が高い。

出土遺物は混入物が多く、時期を明確にすることができない。当遺跡内で最高地点に位置していることや釜屋の構築法を考えると、隣接する第1・2号製塩跡とあまり操業の時期差がなく存在した可能性が高い。

第6号製塩跡 (第38～43図)

位置 調査区中央部 G13j1区の標高約7.5mの砂丘上に位置している。

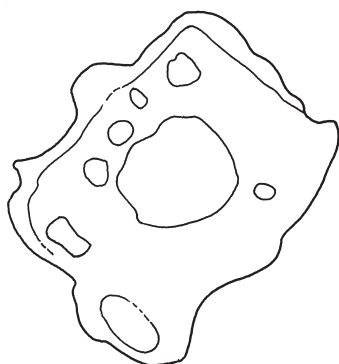


第38図 第6号製塩区域

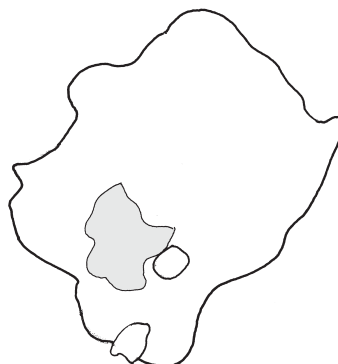
確認状況 第1段階 表砂をおよそ5 m 除去した標高7.5m から、暗褐色土で区画された釜屋と竈の範囲、第11・12号鹹水槽、P 1～P 5が検出された。

第2段階 第11号鹹水槽の下層から第15号鹹水槽、釜屋の南東部の黒色土中から第10号鹹水槽が検出された。釜屋の南部の第1次面からは灰が確認された。

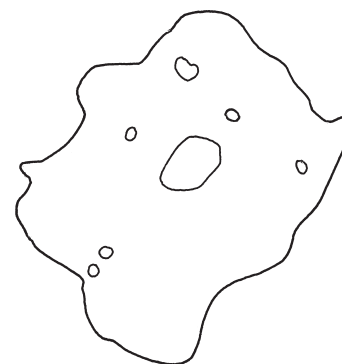
第3段階 20cm 黒色土を除去すると、B号竈、P 6～P11が検出された。



第1段階



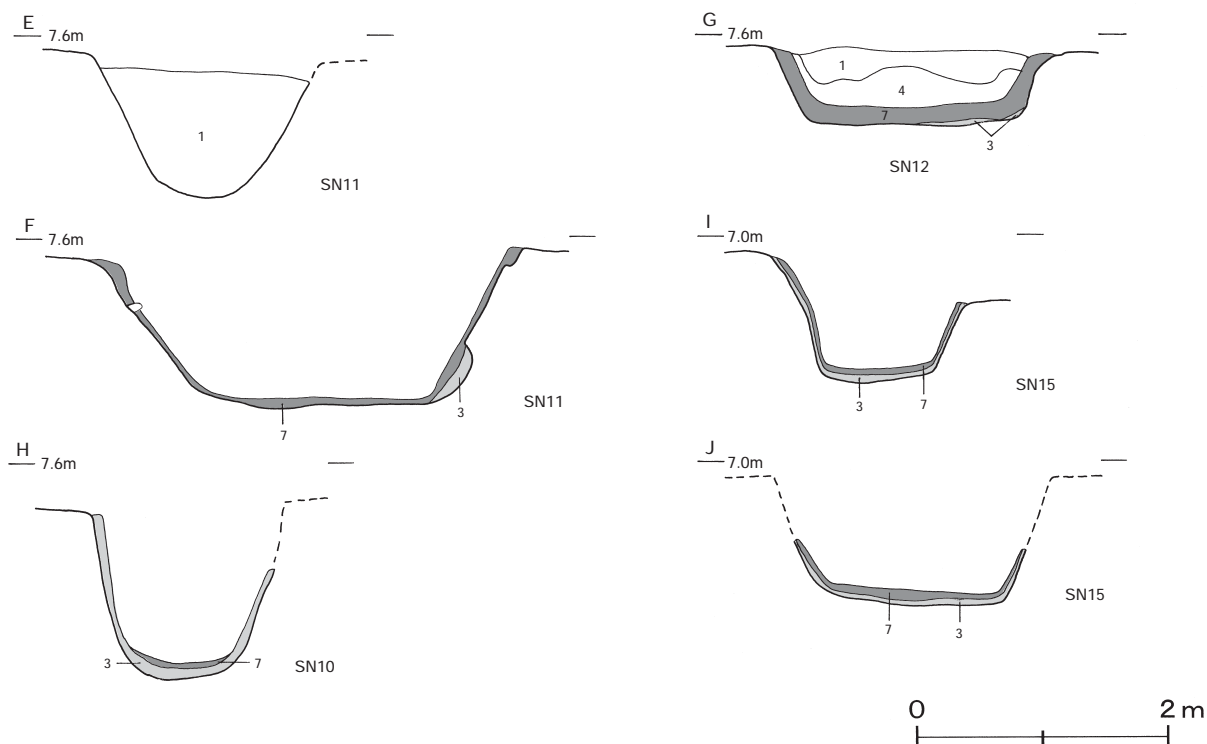
第2段階



第3段階



第39図 第6号製塩跡実測図



第40図 第6号製塩跡屋内鹹水槽土層図

第6号製塩跡屋内鹹水槽一覧表

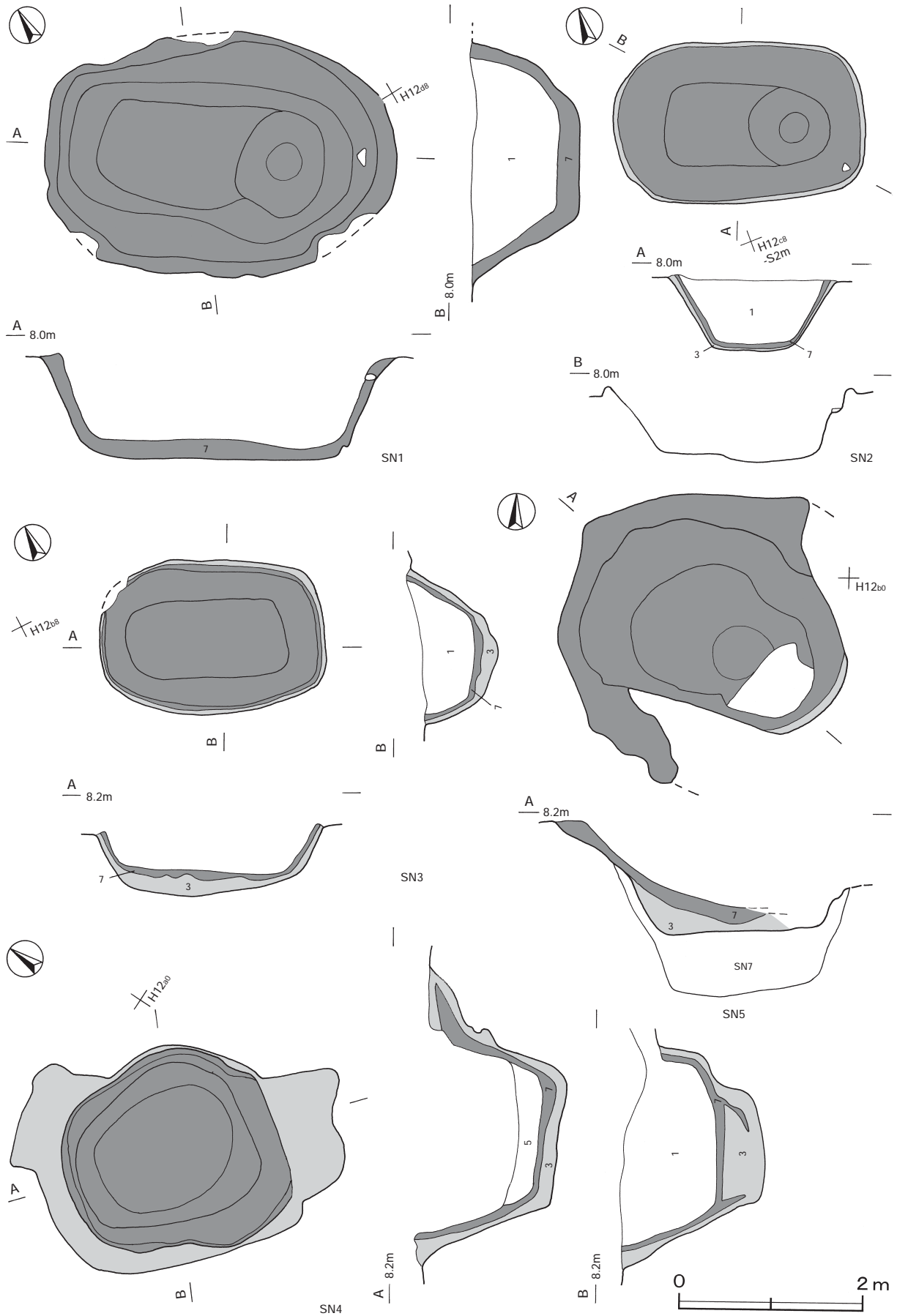
遺構 番号	位置	長軸(径)方向	規模(m)			形状	黒色土厚 (cm)	粘土厚 (cm)	壁面	床面	出土遺物	備考
			長軸(径)	短軸(径)	深さ							
10	H13a1	N-42°-E	1.6	(1.4)	1.2	方形	3~10	2~5	外傾	皿状	—	
11	H13b1	N-46°-W	3.4	(1.7)	1.2	楕円形	10	5~10	緩傾	平坦	—	
12	H13j0	N-45°-W	2.2	(0.9)	0.4	長方形	1~5	7~18	外傾	平坦	砥石, 礫など	
15	H13b1	N-25°-E	(1.8)	1.1	(0.8)	不定形	2~3	2~5	外傾	平坦	—	

規模と構造 製塩跡の範囲は南北軸24m, 東西軸30mである。製塩跡は釜屋, 屋外鹹水槽(第1~5・4(2区)・7・43(2区)・49号鹹水槽)で, 釜屋はA・B号竈, 屋内鹹水槽(第10~12・15号鹹水槽)で構成されている。屋内鹹水槽は釜屋内の南東部, 屋外鹹水槽は製塩跡内の南部と東部を中心に位置している。

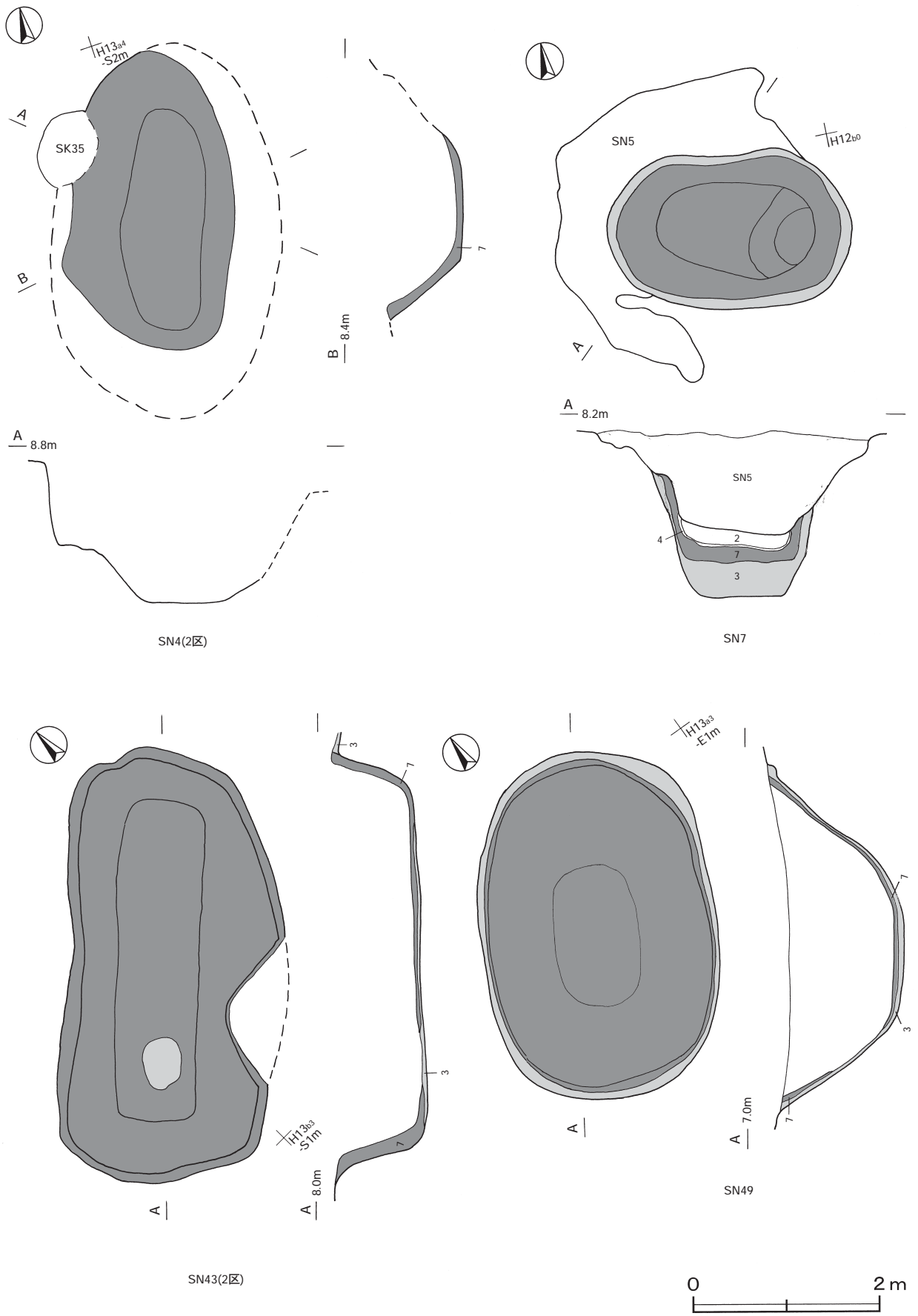
釜屋 4区SH-2(第39図) 長軸約15.3m, 短軸約12.6mの不定形で, 西部と南東部で張り出し部をもっている。主軸方向はN-28°-Wである。釜屋は厚さ10~30cmの黒色土を貼り付けて構築されている。釜屋の西部から北部にかけての壁際は, 山砂と暗褐色土を混ぜ合わせたものを版築状に積み重ねた層が確認されている。

A号竈は長軸5.5m, 短軸5mの不定形で, 釜屋内の中央部に位置している。操業面からの深さは80cmで, 底面が平坦である。厚さ10~15cmの黒色土を貼り付けて構築されている。B号竈は長径2.9m, 短径2.2mの楕円形である。B号竈は厚さ40~60cmの黒色土を貼り付けて構築されている。底面は2面の黒色面が確認されており, 上部と下部の黒色面の間には約10cmの砂層が入っている。

土層断面図中, 第3層は釜屋を構築した黒色土A層である。竈の黒色土層の間には砂A層が約15cm入っており, この層を境に第一次面である最終操業面と第二次面である初期操業面に分けることができる。第10層は釜屋を構築する際, 暗褐色土と山砂を版築状に積み重ねた層である。



第41図 第6号製塩跡屋外鹹水槽実測図(1)



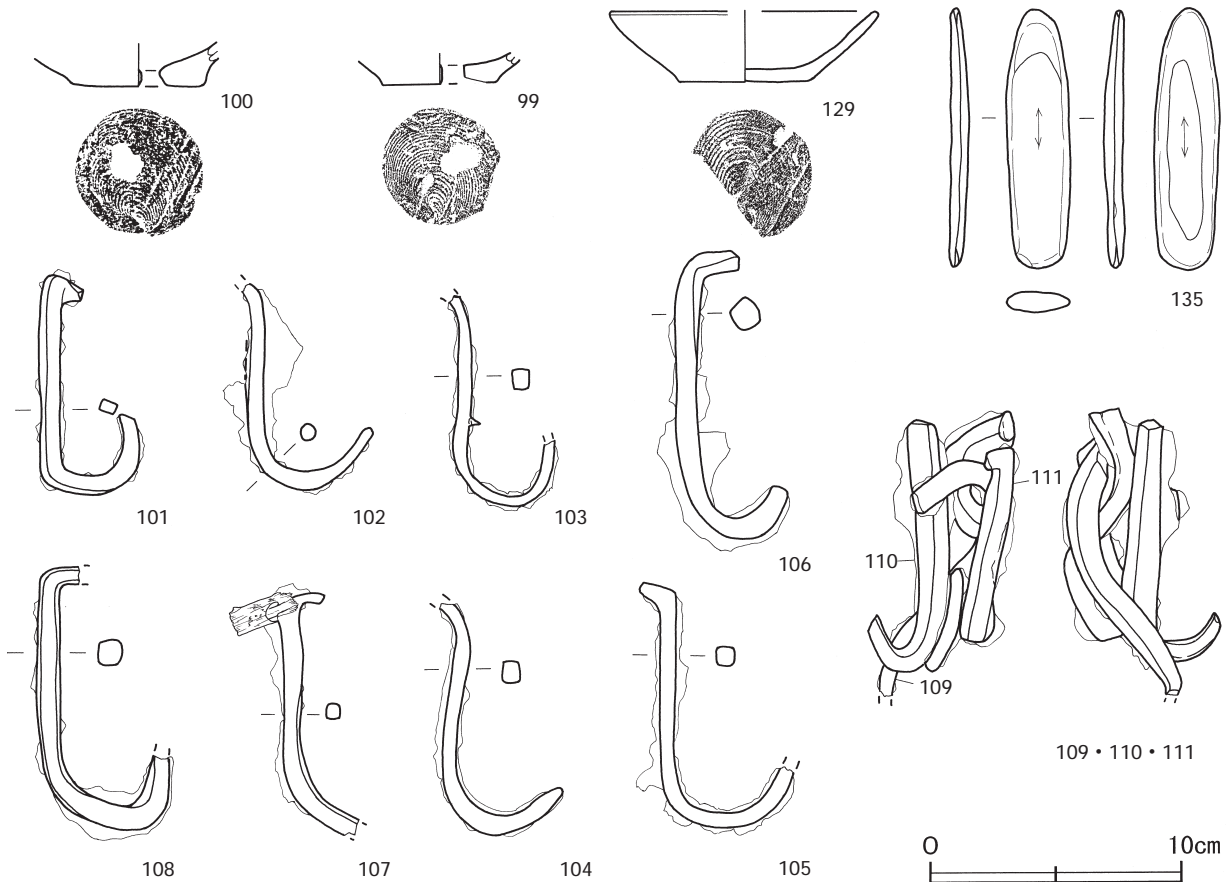
第42図 第6号製塩跡屋外鹹水槽実測図(2)

第6号製塩跡屋外鹹水槽一覧表

遺構 番号	位 置	長軸 (径) 方向	規模 (m)			形 状	黒色土厚 (cm)	粘土厚 (cm)	壁面	床面	出土遺物	備 考
			長軸 (径)	短軸 (径)	深さ							
1	H12c7	N-55° -W	3.8	2.6	0.9	楕 円 形	12~25	—	外傾	平坦	—	
2	H12c8	N-61° -W	2.7	1.7	0.7	楕 円 形	2~16	2~13	外傾	平坦	—	
3	H12b8	N-75° -W	2.4	1.7	0.5	楕 円 形	2~22	1~11	外傾	平坦	—	
4	H12a9	N-10° -E	(3.2)	(1.7)	1.2	[楕 円 形]	—	2~10	緩斜	平坦	皿, 挿鉢	2区
4	H12c7	N-39° -W	2.4	2.2	1.3	楕 円 形	2~30	—	外傾	平坦	—	
5	H12b9	N-47° -W	(3.4)	(3.1)	0.9	不 整 形	2~28	4~20	緩斜	平坦	—	
7	H12b9	N-73° -W	2.6	1.7	0.8	楕 円 形	3~40	2~16	緩斜	皿状	—	
43	H13a3	N-44° -E	4.7	2.3	0.9	隅丸長方形	2~5	1~20	外傾	平坦	—	2区
49	H13a2	N-31° -E	3.7	2.5	1.1	楕 円 形	1~12	1~8	緩斜	平坦	—	

ピットは11か所である。P 1～P 5は調査の第一段階で確認されており、第一次面である最終操業に伴う柱穴と考えられる。P 2は深さ90cmであるが、その他の深さは30～50cmである。P 6～P11は第一次操業面に伴う柱穴と考えられる。P11は深さ160cmと深いが、その他のピットは25～50cmである。

屋内鹹水槽（第40図）は釜屋壁の上面から表砂をおよそ50cm除去した標高7.5mから、第10・11・12号鹹水槽が確認された。第11号鹹水槽の下層からは第15号鹹水槽が検出された。



第43図 第6号製塩跡出土遺物実測図

第6号製塩跡出土遺物観察表（第43図）

番号	器形	器質	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
99	小皿	土師質土器	—	(1.2)	4.5	雲母・赤色粒子	橙	普通	底部回転糸切り，底部中央焼成後穿孔	北部黒色土面	20%
100	小皿	土師質土器	—	(1.8)	5.3	赤色粒子	橙	普通	底部回転糸切り，底部中央焼成後穿孔	西部黒色土中	20%
129	皿	土師質土器	[10.6]	2.9	5.2	雲母・赤色粒子	にぶい橙	普通	底部回転糸切り	2区SN4内	50%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
135	砥石	10.4	2.5	0.8	32.6	鉄	砥面2面	SN12内	
101	耳金	8.7	0.6	0.5	30.2	鉄	断面方形	北部覆土中	PL51
106	耳金	12.0	1.2	1.3	58.5	鉄	断面方形，一部石灰質付着	北部黒色土面	PL50
107	耳金	(10.0)	0.6	0.7	(35.5)	鉄	断面方形，一部木質付着	北西部黒色土面	PL50
108	耳金	(11.0)	0.9	1.0	(61.8)	鉄	断面方形，両端部欠損	北西部黒色土面	PL50
109	耳金								
110	耳金	—	—	—	(153.7)	鉄	断面方形カ，3点が錆により付着	北西部黒色土面	PL51
111	耳金								
102	吊金具	(8.3)	0.7	0.7	(34.6)	鉄	断面方形	東部黒色土中	PL51
103	吊金具	(8.6)	0.7	0.8	(26.0)	鉄	断面方形	覆土中	PL51
104	吊金具	(9.2)	0.8	0.9	(38.8)	鉄	断面方形	北部黒色土面	PL51
105	吊金具	(9.7)	0.8	0.8	(53.1)	鉄	断面方形	南西部覆土中	PL51

第1層は砂A層を主体とした自然堆積の層で，第11号鹹水槽は短い期間で埋没したことが想定される。第12号鹹水槽の底面には北面の崩れ落ちた層が堆積し，その後砂A層が堆積したと推測される。

屋外鹹水槽（第41・42図） 最初の遺構確認面と同じ標高7.8mの位置から，製塩跡の南部に広がる第1～5・7（4区）号鹹水槽が確認された。さらに製塩跡の東部の標高7.7mからは，第4（2区）・43（2区）・49（4区）号鹹水槽が検出されたが，第4・43号鹹水槽の残存状況は悪い。第4号鹹水槽は北西部を第35（4区）号土坑に掘り込まれている。

第1層は砂A層を主体とした自然堆積で，短い期間で埋没したことが想定される。また，第1層中には崩落した鹹水槽の構築土も確認できた。第5号鹹水槽は第7号鹹水槽の廃絶後，第3・7層である黒色土A層と粘土層で構築されたものと考えられる。

遺物出土状況 土師質土器3点（皿），金属製品14点（耳金7，吊金具6，不明1）が釜屋内の北西部の最終操業面を中心に出土している。皿はいずれも底部のみの出土で，中央には穿孔された跡がある。金属製品類は釜屋内で使用され，釜屋の廃絶後に遺棄されたものと考えられる。2795は漆喰で釜屋内の南部の黒色土面から出土している。不明金属製品1点，石器1点（砥石）は第12号鹹水槽，土師質土器片4点（皿3，播鉢1）は第4（2区）号鹹水槽の覆土中から出土している。

所見 土層から二時期の操業が考えられる。第一次操業面と第二次操業面は共通の面を使用し，竈部だけ再構築している。

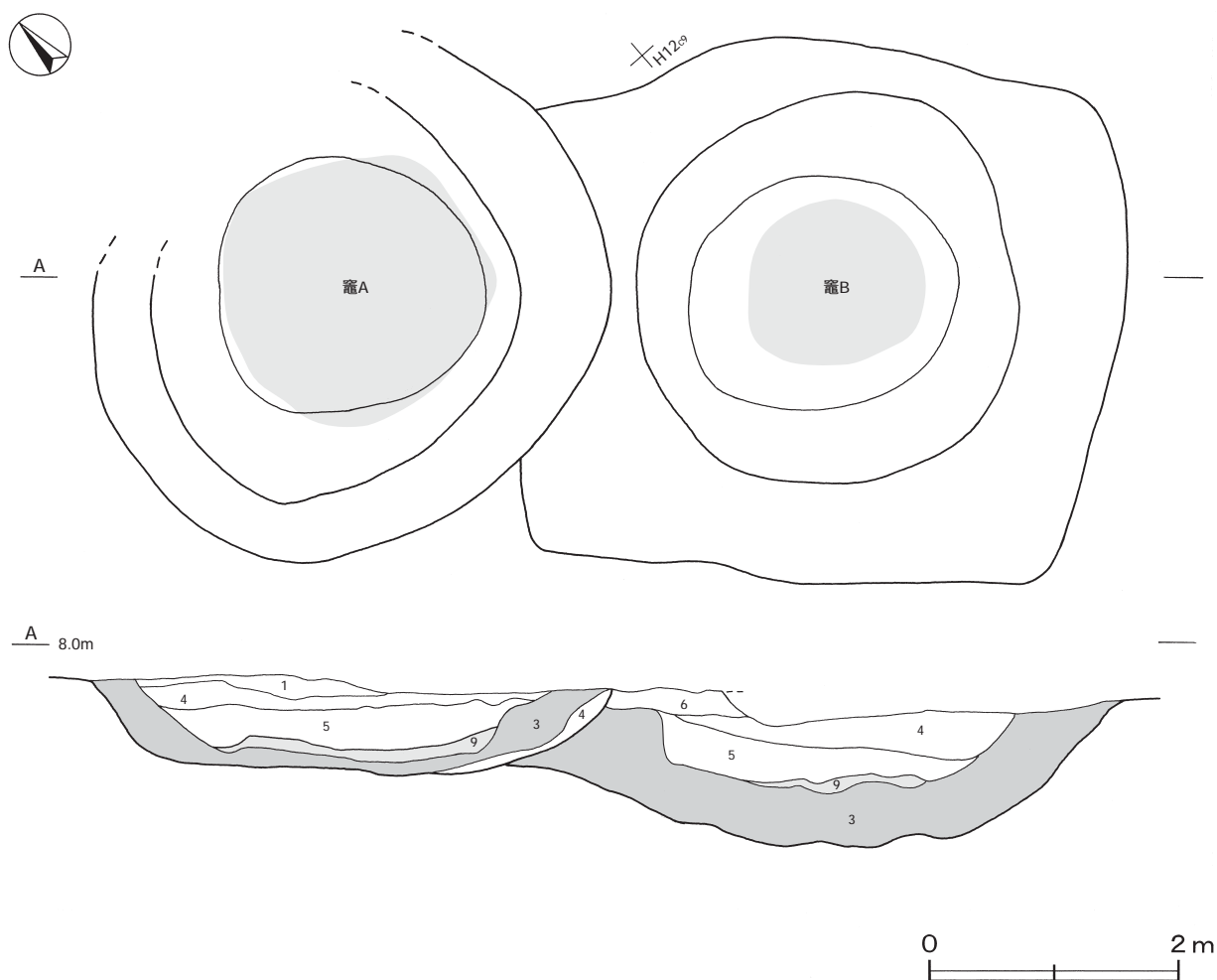
屋内鹹水槽は4基検出され，出土状況から第11・12号鹹水槽が最終操業，第10・15号鹹水槽が第一次操業に伴うものである。最終操業の第11・12号鹹水槽は，第10・15号鹹水槽を埋め戻して構築されている。

屋外鹹水槽は9基検出され、出土状況から第1～5・4（2区）号鹹水槽が最終操業で、第1～5号鹹水槽は規模・形状、主軸をほぼ同じにしながら製塩跡の南部に位置している。また、足掛け石はいずれも南東部の壁中段に組み込まれていることから、出入りは南東部から行われたと推測される。壁部の崩落が目立つことから、廃絶後しばらく経ってから砂に埋没したものと考えられる。第7・43（2区）・49号鹹水槽は第一次操業に伴うものである。

竈内からは遺棄された金属製品が多く出土しているが、鍋などの遺物は出土しておらず、塩を煮詰めた詳細については明らかではない。壁際を山砂と暗褐色土を混ぜ合わせた土で版築状に積み重ねる構築法は、西に位置する第5号製塩跡と同一の様相がうかがえる。時期は、出土遺物が少なく明確にすることができない。

第7号製塩跡（第44～47図）

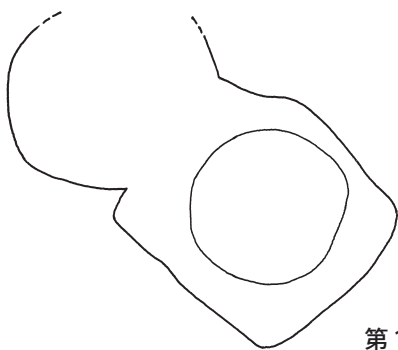
位置 調査区中央部 H12c8区の標高約7.6mの砂丘上に位置している。



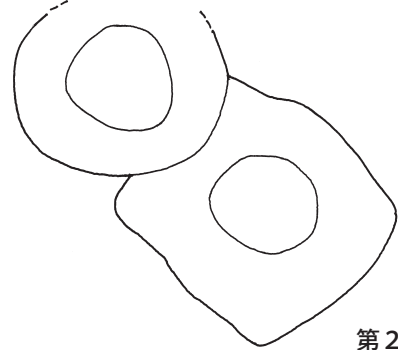
第44図 第7号製塩跡実測図

確認状況 第1段階 表砂をおよそ3.8m 除去した標高7.6m から、竈2基が確認されたため、A・B号とした。
釜屋範囲は確認できなかった。

第2段階 土層断面から、A号竈がB号竈廃絶後に構築されたことが判明した。



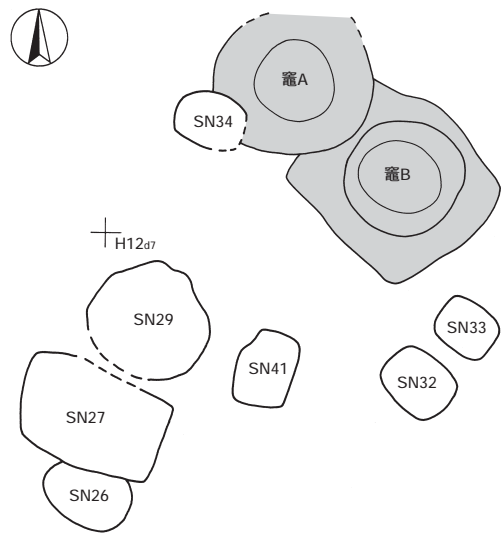
第1段階



第2段階

規模と構造 製塩跡の範囲は南北軸14m，東西軸13mである。製塩跡はA・B号竈，屋外鹹水槽（第26・27・29・32～34・41号鹹水槽）で，屋外鹹水槽はA・B号竈の東部と南部を中心に位置している。

釜屋 4区 SH - 3（第44図） 残存しているA・B号竈の黒色土の範囲は長軸8.2m，短軸4.3mである。A号竈は長径4.2m，短径3.0mの楕円形で，作業面からの深さは50cmである。底面は平坦である。厚さ10～30cmの黒色土を貼り付けて構築されている。B号竈はA号竈に掘り込まれており，残存部分から，径約3.1mだけ確認することができた。作業面からの深さは最大で60cmで，底面は皿状を呈している。厚さ30～50cmの黒色土を貼り付けて構築されている。



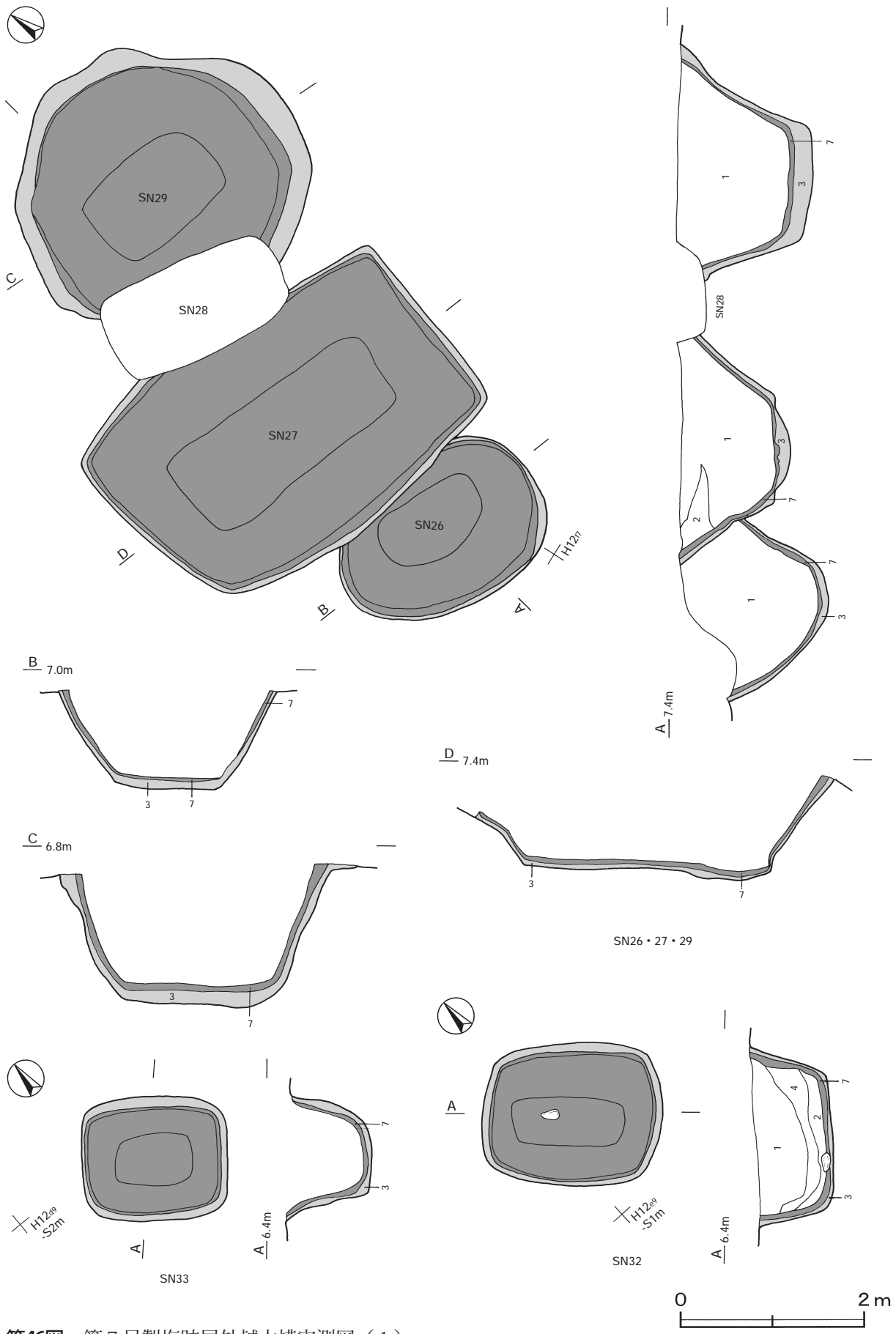
第45図 第7号製塩区域

A号竈の覆土は，第1層の砂A層と黒色土主体の第4～6層である。構築材が崩落した後，砂A層が堆積したものと考えられる。また，B号竈の覆土は黒色土層が主体で，A号竈を構築するために埋め戻した層である。それぞれ底面には厚さ10cmの灰層が確認されている。

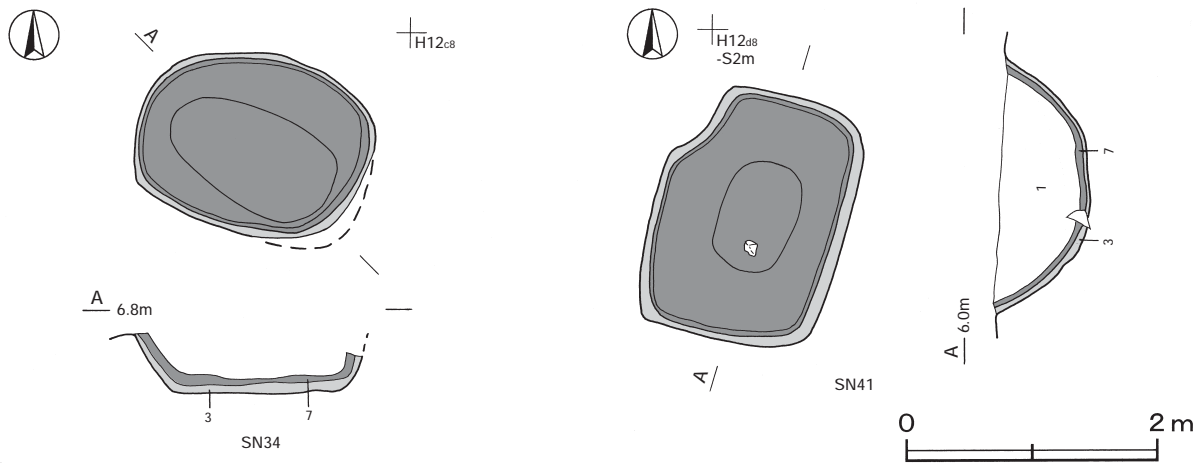
屋外鹹水槽（第46・47図） 表砂をおよそ4 m 除去した標高7.3m から，A・B号竈の南部に広がる第27・29号鹹水槽，さらに，第27号鹹水槽の南部の50cm 下層からは，第26号鹹水槽が検出された。また，B号竈の南東部の標高6.2m からは，第32・33・41号鹹水槽，A号竈の南西部の50cm 下層から第34号鹹水槽が検出された。

いずれも砂A層を主体とした自然堆積の層で，短い期間で埋没したものと考えられる。

所見 屋外鹹水槽は7基検出され，出土状況や主軸方向により，第26・32～34・41号鹹水槽が第一次操業であるB号竈，第27・29号鹹水槽が最終操業であるA号竈に伴う鹹水槽と考えられる。特に，A号竈は第34号鹹水槽の上層に構築されており，鹹水槽内の覆土は砂A層であることから，A号竈は第34号鹹水槽が自然に埋没した後，構築されたものと考えられる。このことから，A号竈はB号竈の廃絶後，しばらく経ってから構築したものと想定される。



第46図 第7号製塩跡屋外鹹水槽実測図(1)



第47図 第7号製塩跡屋外鹹水槽実測図（2）

第7号製塩跡屋外鹹水槽一覧表

遺構番号	位置	長軸(径)方向	規模(m)			形状	黒色土厚(cm)	粘土厚(cm)	壁面	床面	出土遺物	備考
			長軸(径)	短軸(径)	深さ							
26	H12e6	N-77° -W	2.4	1.6	1.4	楕円形	1~9	1~6	外傾	平坦	-	
27	H12e6	N-70° -W	4.0	2.6	1.0	長方形	1~15	2~8	緩斜	平坦	-	
29	H12d7	N-75° -W	3.3	3.0	1.3	不定形	1~20	2~8	外傾	平坦	-	
32	H12d9	N-48° -W	2.0	1.6	0.8	長方形	2~6	3~9	緩斜	平坦	-	
33	H12d9	N-52° -W	1.6	1.3	0.8	長方形	2~10	2~8	外傾	平坦	-	
34	H12c7	N-72° -W	1.9	1.4	0.4	楕円形	3~10	2~9	緩斜	緩い起伏	-	
41	H12d8	N-16° -E	2.0	1.6	0.6	長方形	2~6	1~7	緩斜	平坦	-	

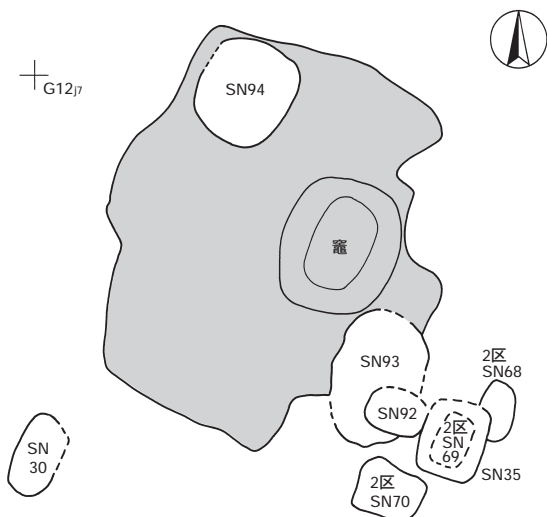
本製塩跡は竈2基が検出されただけで、周辺には釜屋を構築する黒色土面や上屋を支えた柱穴は検出されなかった。黒色土面をもたない釜屋は、当遺跡内では異例である。時期は、出土遺物がなく明確にすることができない。

第8号製塩跡（第48～53図）

位置 調査区中央部 H12a8区の標高約6.4mの砂丘上に位置している。



- 確認状況** 第1段階 表砂をおよそ5.4mほど除去した標高6.4mから、釜屋と竈の範囲が確認された。
- 第2段階 10cm表砂を除去すると、釜屋の北西部から第94号鹹水槽、南部の黒色土面から焼砂が検出された。
- 第3段階 黒色土面を丁寧に精査するとP1～P7、釜屋の西部からP8～P10が検出された。



規模と構造 製塩跡の範囲は南北軸13m、東西軸14mである。製塩跡は釜屋、屋外鹹水槽（第30・35・68～70（2区）・92・93号鹹水槽）で、釜屋は竈、屋内鹹水槽（第94号鹹水槽）で構成されている。屋内鹹水槽は釜屋内の北部、屋外鹹水槽は製塩跡内の南東部と西部に位置している。

第48図 第8号製塩区域

釜屋 4区 SH-5（第49図）長軸約10.5m、短軸約9.1mの不定形で、主軸方向はN-34°-Eである。東部に張り出し部をもち、西部には落ち込み部が認められる。釜屋は、厚さ10～20cmの黒色土を貼り付けて構築されている。

竈は長径3.6m、短径3.1mの楕円形で、釜屋内の中央やや東寄りに位置している。作業面からの深さは60cmで、底面は平坦である。厚さ50～90cmの黒色土を貼り付けて構築されて、西部を中心に灰が堆積している。

土層断面図中、第3層は釜屋を構築した黒色土A層である。第8層は西部の落ち込み部に堆積した焼砂層、第9層は竈内に堆積した灰層である。

ピットは10か所である。P2・P3は深さ87cm・100cm、その他は深さ40～75cmである。上屋を支えた柱穴の可能性はあるが、規則的には配列しない。P8～P10の北壁際には、焼失した柱材も検出された。

屋内鹹水槽（第50図）は、釜屋黒色土面と同じ標高6.3mから検出された。黒色土の厚さは10cm、粘土層の厚さは12cmである。

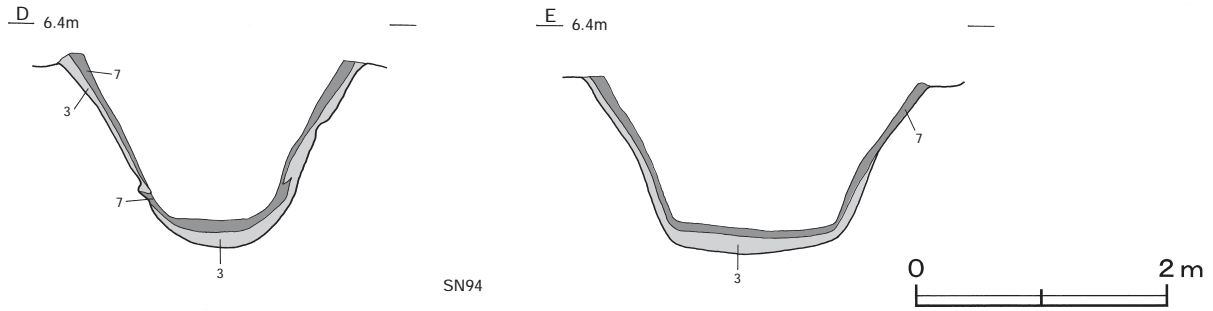
屋外鹹水槽（第51・52図）製塩跡の東南部の表砂をおよそ2.4m除去した標高6.6mから第35号鹹水槽、さらに砂を60cmほど除去した標高6.0mから第68～70（2区）号鹹水槽、さらに第92・93号鹹水槽が検出された。

第35・68・92・93号鹹水槽の覆土は砂A層を主体とした自然堆積の層であり、土層から廃絶後に短い期間で埋没したと推測される。第30・70（2区）号鹹水槽は黒色土を主体とした層が確認できることから、鹹水槽壁の崩落土か人為的に埋め戻された可能性が高い。

遺物出土状況 石器1点（石臼）が竈内、五輪塔（火輪部）が第35号鹹水槽内から出土している。いずれも廃絶後に砂A層の埋没とともに混入したものと考えられる。



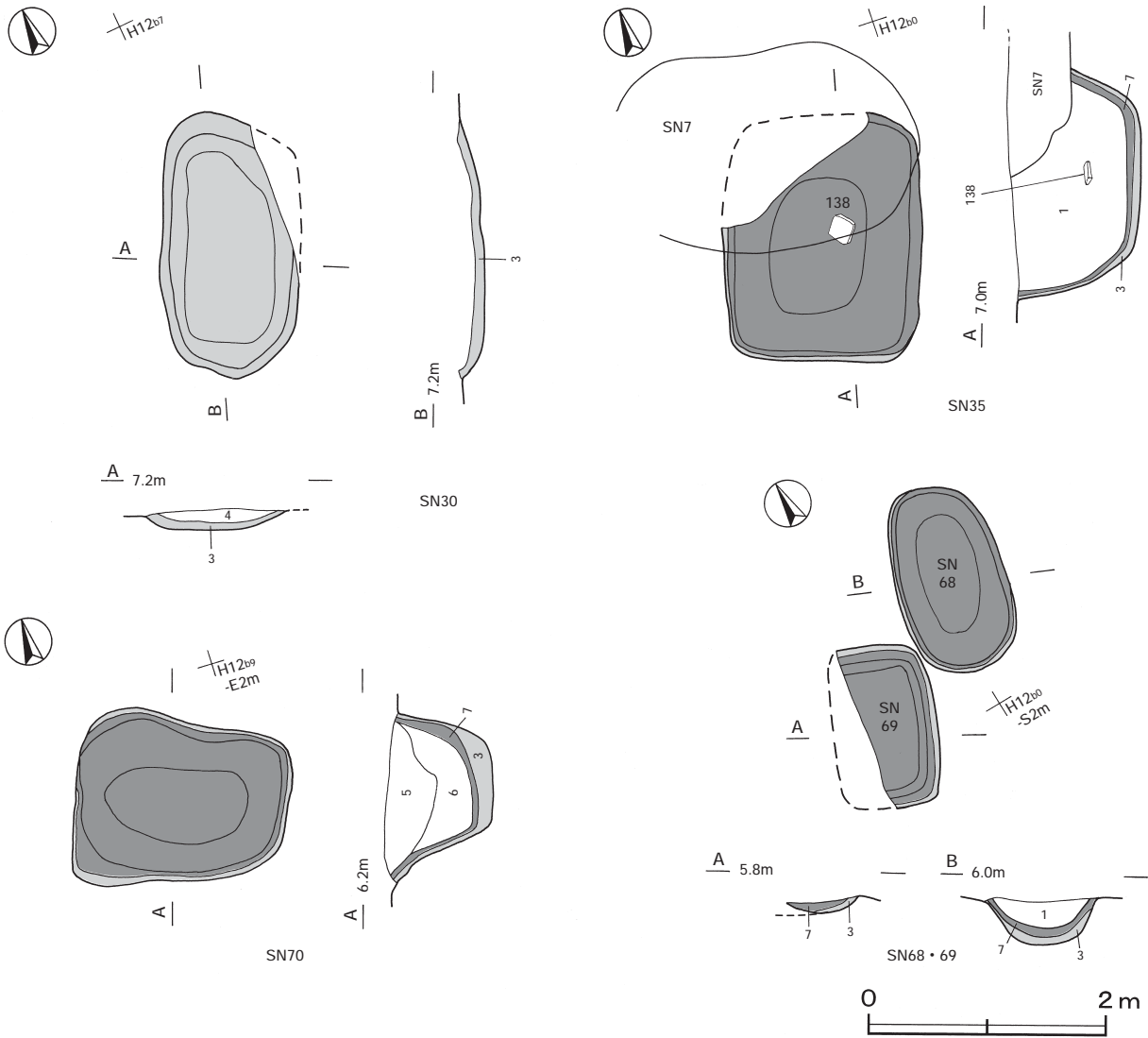
第49図 第8号製塩跡実測図



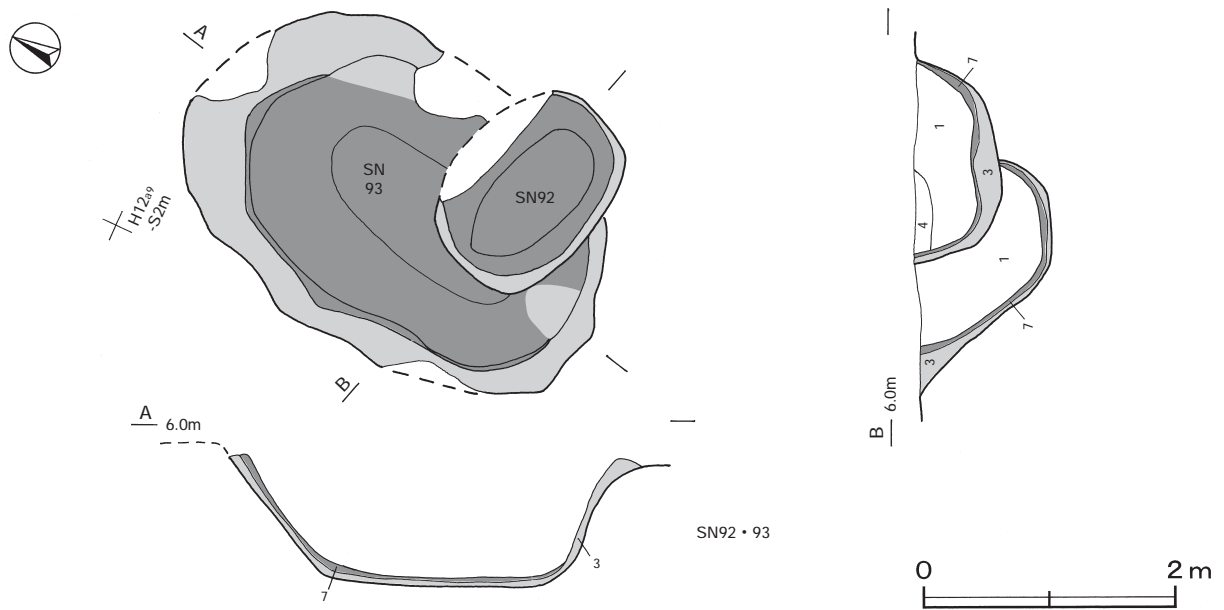
第50図 第8号製塩跡屋内鹹水槽土層図

第8号製塩跡屋内鹹水槽一覽表

遺構番号	位置	長軸(径)方向	規模(m)			形状	黒色土厚(cm)	粘土厚(cm)	壁面	床面	出土遺物	備考
			長軸(径)	短軸(径)	深さ							
94	G12j8	N-37°-E	2.8	2.4	1.3	楕円形	3~15	4~10	外傾	平坦	-	



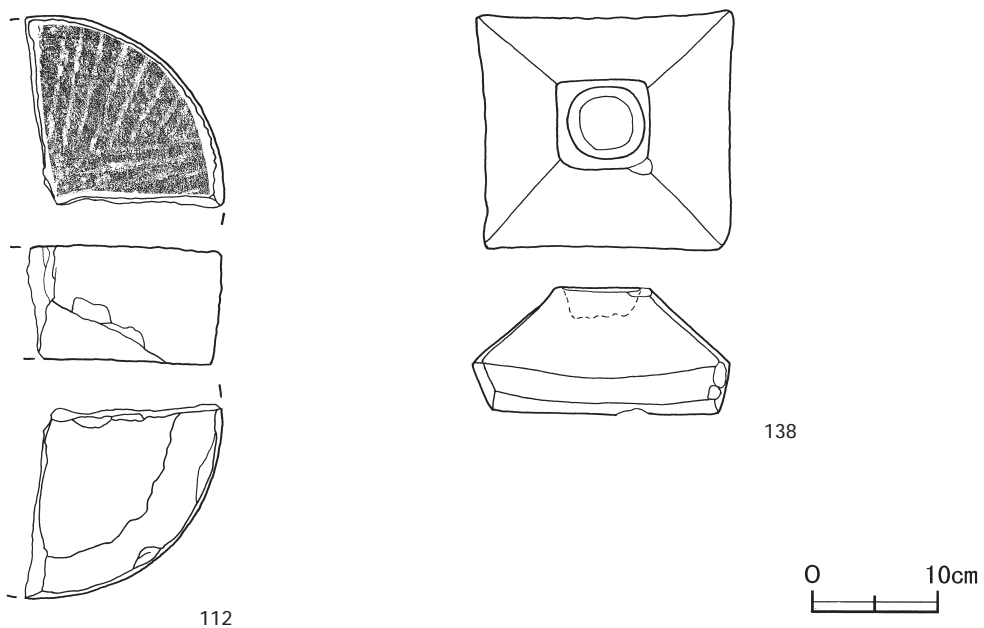
第51図 第8号製塩跡屋外鹹水槽実測図(1)



第52図 第8号製塩跡屋外鹹水槽実測図(2)

第8号製塩跡屋外鹹水槽一覽表

遺構 番号	位置	長軸(径)方向	規模(m)			形状	黒色土厚 (cm)	粘土厚 (cm)	壁面	床面	出土遺物	備考
			長軸(径)	短軸(径)	深さ							
30	H12b7	N-26° -E	2.2	1.2	0.1	[隅丸長方形]	4~10	—	緩斜	平坦	—	
35	H12b9	N-18° -E	2.1	1.7	1.0	[隅丸長方形]	1~6	1~6	外傾	平坦	五輪塔	
68	H12b0	N-15° -E	1.6	0.9	0.4	楕円形	7	6	緩斜	平坦	—	2区
69	H12b9	N-24° -E	1.4	(0.6)	(0.2)	[長方形]	2~10	6	緩斜	皿状	—	2区
70	H12b9	N-72° -E	1.8	1.4	0.7	不定形	13~20	3~10	外傾	平坦	—	2区
92	H12a9	N-75° -W	1.6	[1.2]	0.5	長方形	2~22	2~6	外傾	平坦	—	
93	H12a9	N-15° -E	3.7	2.3	1.0	楕円形	2~18	2~8	外傾	平坦	—	



第53図 第8号製塩跡出土遺物実測図

第8号製塩跡出土遺物観察表（第53図）

番号	器種	長さ(径)	幅(孔径)	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
112	石臼	[30.3]	—	9.4	(3,180)	砂岩	下臼, 6分画カ, 溝の摩耗が激しい	竈内	PL47
138	五輪塔	19.2	20.5	10.0	5,340	砂岩	火輪部	SN35内	PL48

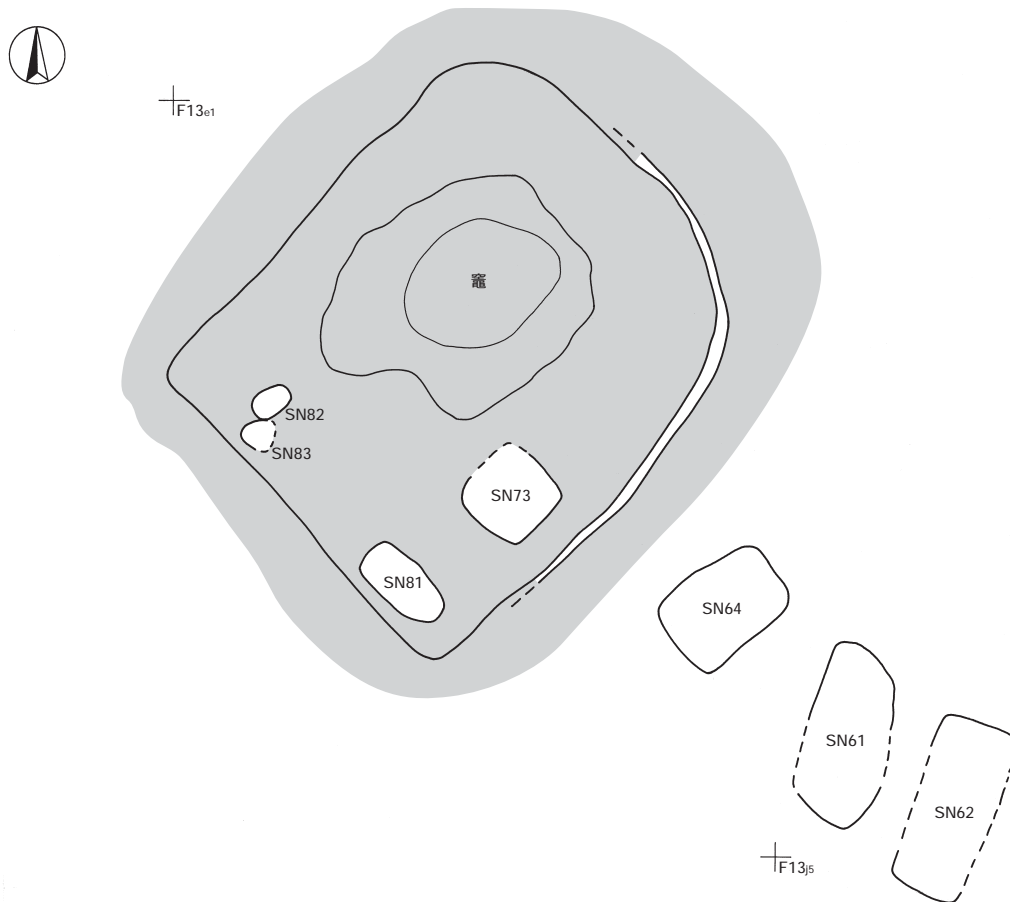
所見 出土位置や標高から、屋外鹹水槽は三時期の造り替えが想定できる。第一段階は第68・69・93号鹹水槽で、第69号鹹水槽は第68号鹹水槽を造り替えたものである。第二段階は第70・92号鹹水槽で、第70号鹹水槽は第92号鹹水槽を造り替えたものである。第三段階は第35号鹹水槽であるが、上層に構築された鹹水槽の重複を受けているため残存状況は悪い。

焼砂が釜屋の南部を中心に検出されていることから、廃絶後に焼失したと推測される。時期は、出土遺物が少なく明確にすることができない。

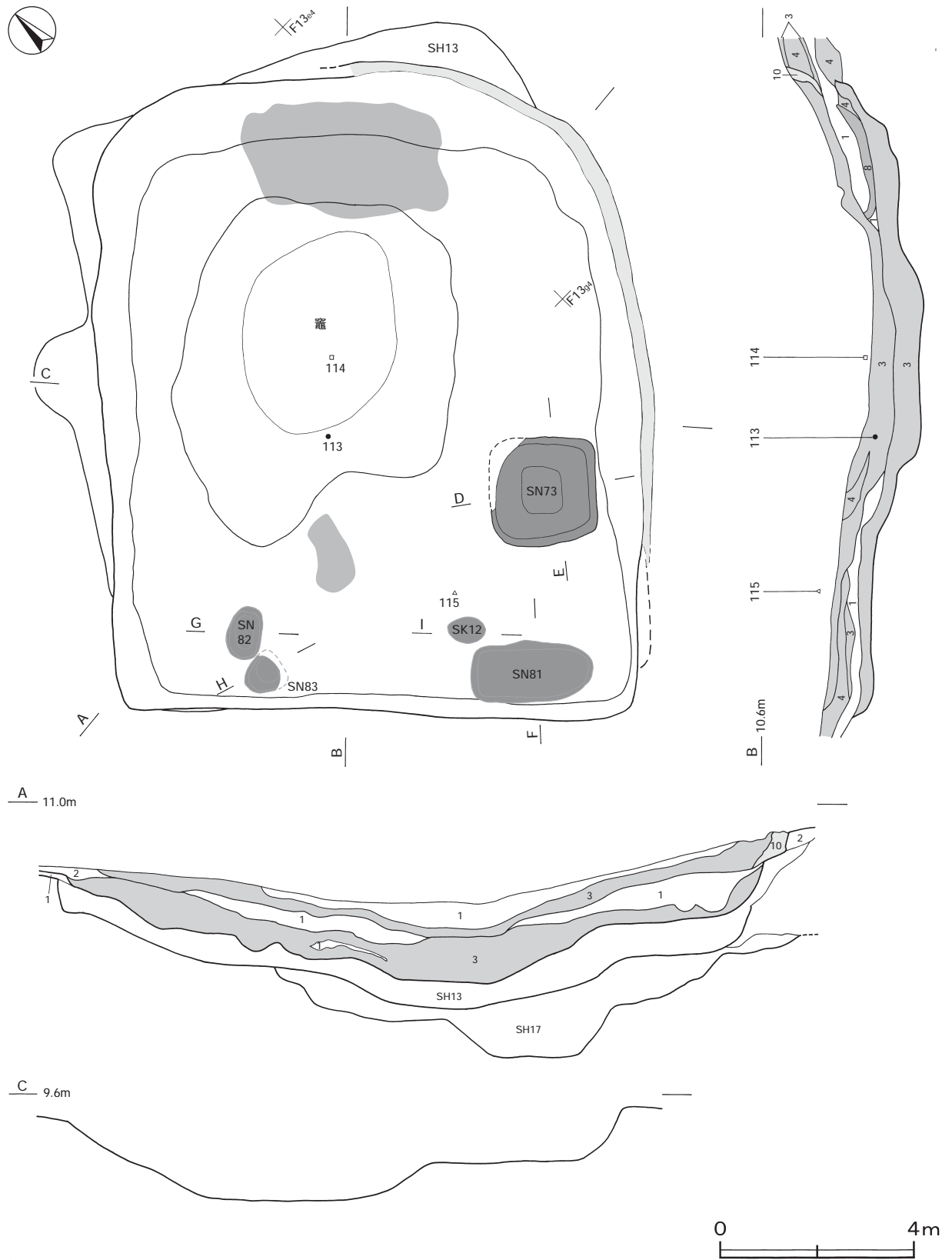
第9号製塩跡（第54～59図）

位置 調査区中央部 F13f2区の標高9.6～10.3mの砂丘上に位置している。

重複関係 第13・17号製塩跡の上層に構築されている。

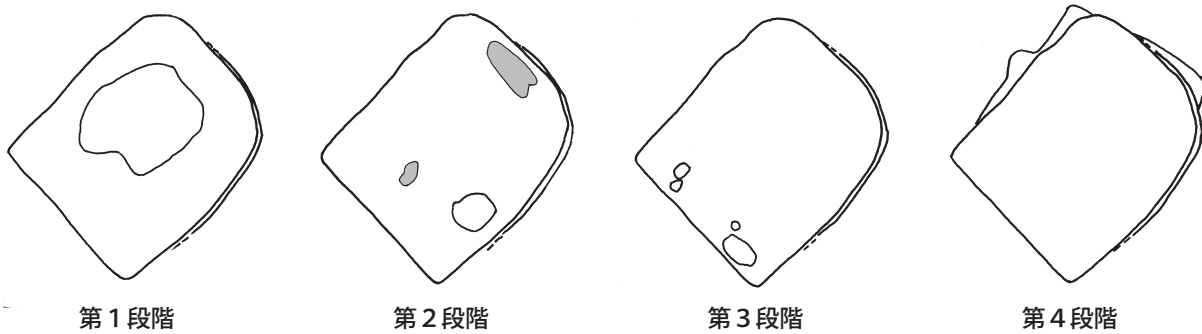


第54図 第9号製塩区域



第55図 第9号製塩跡実測図

- 確認状況**
- 第1段階 表砂をおよそ5.2m 除去した標高10.3m から、釜屋と竈の範囲の一部が確認された。
 - 第2段階 釜屋内の砂を50cm 除去すると焼砂、東部の作業面から第73号鹹水槽が確認された。
 - 第3段階 釜屋内の黒色土面を10cm 除去すると、第81～83号鹹水槽、第12号土坑が検出された。
 - 第4段階 土層から、下層に2基の釜屋が存在することが判明した。

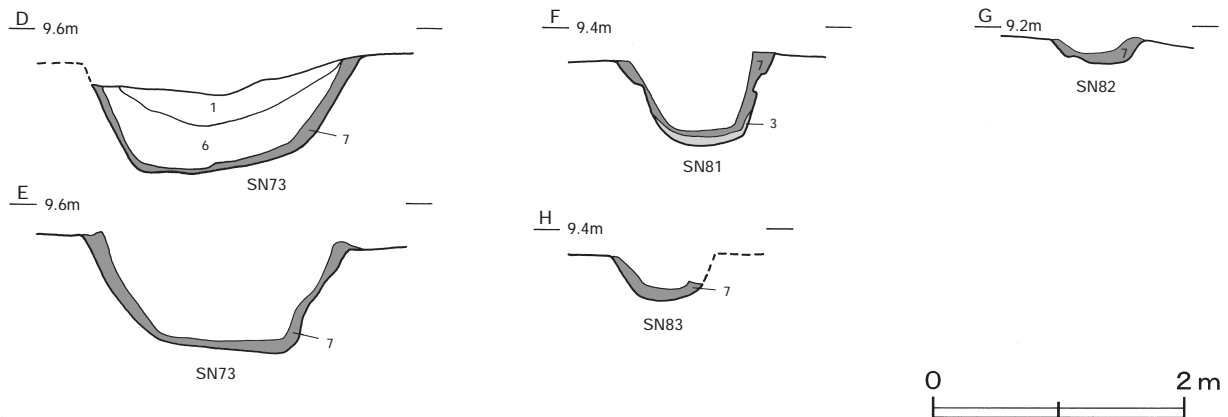


規模と構造 製塩跡の範囲は南北軸22m，東西軸24m である。製塩跡は釜屋，屋外鹹水槽（第61・62・64号鹹水槽）で，釜屋は竈，屋内鹹水槽（第73・81～83号鹹水槽）で構成されている。屋内鹹水槽は釜屋内の南部と東部，屋外鹹水槽は製塩跡内の東部を中心に位置している。

釜屋 4区 SH-6（第55図） 長軸13.1m，短軸約11.3m の長方形で，主軸方向はN-48°-E と考えられる。釜屋は最大で約100cm の黒色土を貼り付けて構築されている。北東部は全体的に南へ傾斜しており，壁際は山砂と暗褐色土を混ぜ合わせた版築状の層が確認された。

竈は長径7.2m，短径5.5m の不定形で，釜屋の中央部に位置する。作業面からの深さは50cm で，底面は皿状を呈している。黒色土の厚さは110cm である。底面には2面の黒色面が確認されている。

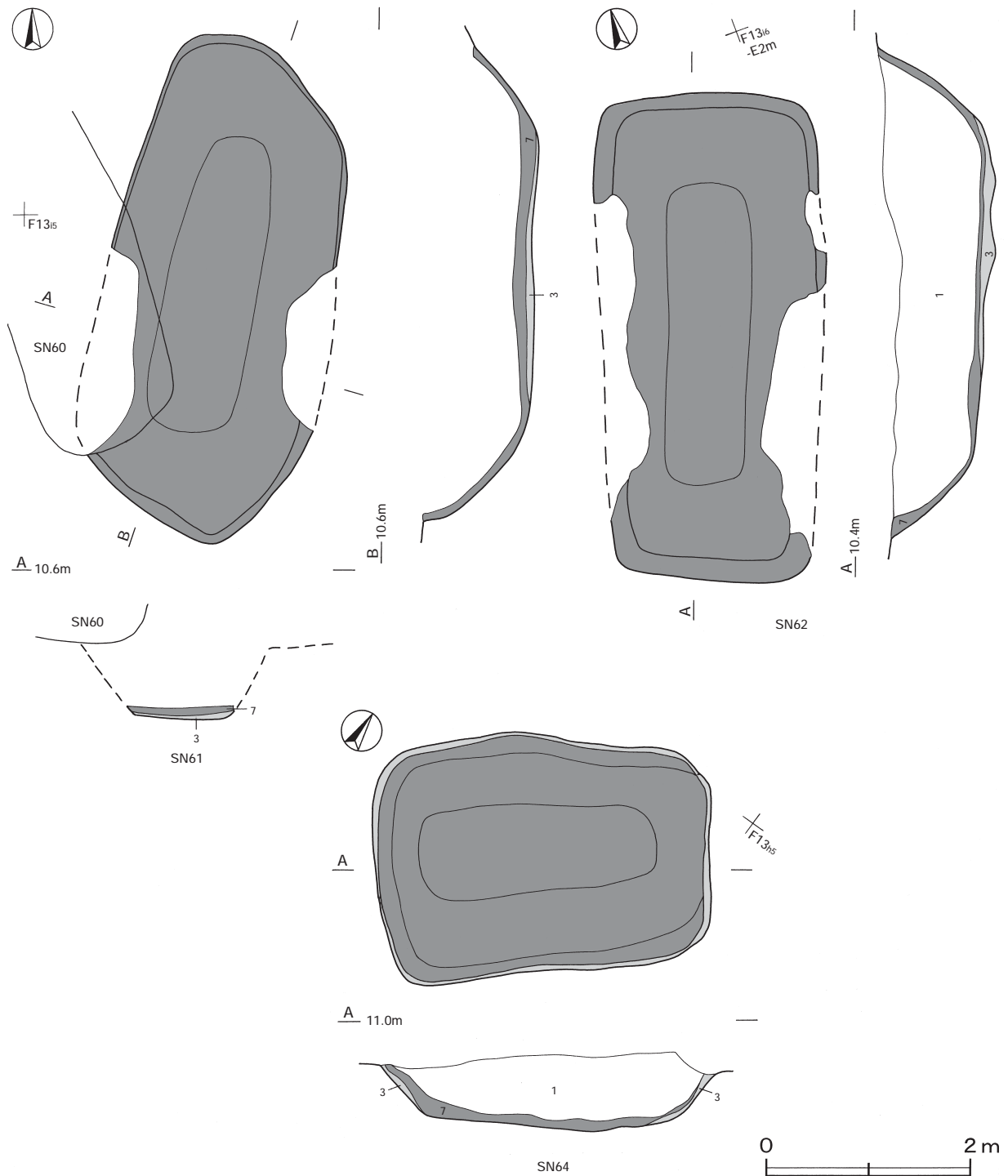
土層断面図中，第1層は竈の黒色土面に堆積した砂A層，第3層は釜屋を構築した黒色土A層である。黒色土A層間には，最大で厚さ50cm の砂A層が入っている。第10層は釜屋を構築する際，暗褐色土と山砂を版築状に積み重ねた層である。なお，下層に2基の釜屋（第13・17号製塩跡）が存在している。



第56図 第9号製塩跡屋内鹹水槽土層図

第9号製塩跡屋内鹹水槽一覧表

遺構 番号	位 置	長軸 (径) 方向	規模 (m)			形 状	黒色土厚 (cm)	粘土厚 (cm)	壁面	床面	出土遺物	備 考
			長軸 (径)	短軸 (径)	深さ							
73	F13g3	N-40° -W	2.2	2.2	0.8	正方形	-	3~8	外傾	平坦	皿	
81	F13h2	N-45° -W	2.5	1.4	0.6	長方形	2~8	2~14	外傾	平坦	-	
82	F13g1	N-53° -W	1.1	0.7	0.1	楕円形	-	6~12	外傾	平坦	-	
83	F13g1	N-70° -W	(0.7)	0.8	0.1	不定形	-	6~12	外傾	平坦	-	



第57図 第9号製塩跡屋外鹹水槽実測図

屋内鹹水槽（第56図）は釜屋内の標高9.4m から第73号鹹水槽，さらに黒色土を10cm 除去すると，第81～83号鹹水槽が検出されたが，第82・83号鹹水槽の残存状況は悪い。

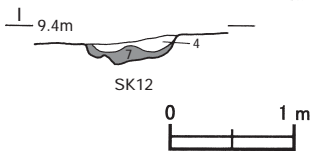
第73号鹹水槽中の第1層は砂A層を主体とした自然堆積の層であるが，下層には北西壁部の崩落土が堆積している。第3・7層は黒色土A層と粘土層で，鹹水槽を構築した層である。

屋外鹹水槽（第57図） 製塩跡内の東部の表砂をおよそ5m 除去した標高10.6m から第64号鹹水槽，さらに砂を50cm 除去した標高10.1m から，第61号鹹水槽が検出された。

第61・62号鹹水槽の覆土は，砂A層を主体とした自然堆積の層で，堆積状況から廃絶後，短い期間で埋没したと推測される。第64号鹹水槽は砂A層に黒色土が混じることから，鹹水槽の壁が崩落し堆積した可能性が高い。

第9号製塩跡屋外鹹水槽一覧表

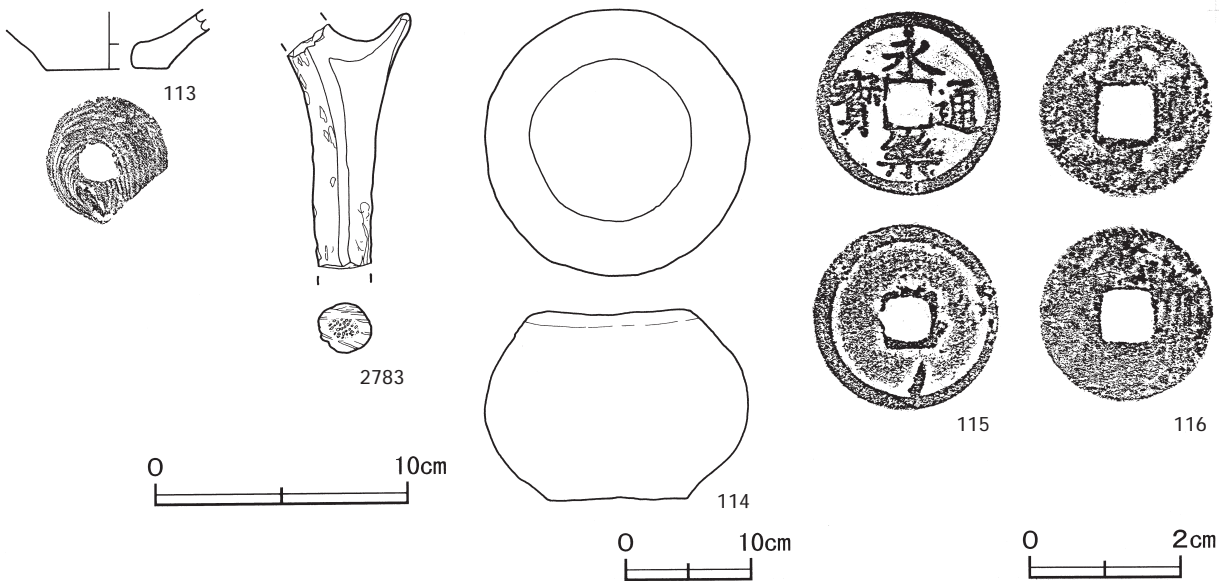
遺構番号	位置	長軸（径）方向	規模（m）			形状	黒色土厚（cm）	粘土厚（cm）	壁面	床面	出土遺物	備考
			長軸（径）	短軸（径）	深さ							
61	F13i5	N-17° -E	4.7	2.1	1.0	不定形	6	8	緩斜	平坦	—	
62	F13i6	N-23° -E	4.7	2.2	0.8	[長方形]	3~12	2~8	外傾	平坦	—	
64	F13h4	N-55° -E	3.2	2.3	0.6	長方形	—	3~18	外傾	凹凸	—	



土坑（第58図） 南部に位置し，粘土で構築されていたと推測される。底部だけの検出で，鹹水槽であった可能性が高い。

第58図 第9号製塩跡土坑土層図

遺物出土状況 土師質土器片9点（皿5，内耳鍋4），石器1点（五輪塔），金属製品2点（古銭）が出土している。五輪塔は水輪部で，火熱痕が認められる。竈内から出土しており，他から持ち込まれて使用され，そのまま遺棄されたと推測される。土師質土器片4点（皿）は第73号鹹水槽から出土している。



第59図 第9号製塩跡出土遺物実測図

第9号製塩跡出土遺物観察表（第59図）

番号	器形	器質	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
113	小皿	土師質土器	—	(2.3)	5.0	雲母・赤色粒子	橙	普通	底部回転糸切り，底部中央焼成後穿孔	竈内	40%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
114	五輪塔	21.2	21.0	15.1	8.680	砂岩	水輪部，火熱痕有り	竈内	PL48

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
2783	骨角未製品	(10.2)	2.1	2.0	(30)	鹿角	加工痕有り	覆土中	PL53

番号	銭名	径	孔径	厚さ	重さ	初鑄年	材質	特徴	出土位置	備考
115	永樂通寶	2.48	0.58	0.11	3.82	1408	銅	真書	南部覆土中	
116	□□□□	2.32	0.67	0.01	2.60	—	銅	判読不能，模鑄	覆土中	

所見 土層断面から二時期の操業が考えられ，黒色土A層の間の砂A層を境に下層を初期操業面，上層を最終操業面とする。最終操業面は初期操業面の廃絶後，しばらく期間が経ってから構築したと考えられる。

屋内鹹水槽は4基検出され，最終操業に伴う第73号鹹水槽は第81号鹹水槽を造り替えたものである。規模や形状は異なるが，屋内鹹水槽として果たした性格は同一と推測される。第82・83号鹹水槽は残存状態は良くないが，先に述べた第1・2号釜屋跡内の南西部に位置する屋内鹹水槽と形状が類似している。

屋外鹹水槽は3基検出され，第61・62号鹹水槽は壁部の崩落が目立つことから，廃絶後に鹹水がなくなり壁が崩落した後，まもなく埋没したものと考えられる。竈の造り替えに伴い，第64号鹹水槽が最終操業，第61・62号鹹水槽が初期操業に伴うものと想定される。第61号鹹水槽の南東コーナー部中段には足掛け石が2点あることを考えると，大規模な鹹水槽であると推測される。しかし，規模や出土標高を同じにする釜屋と比較すると，屋外鹹水槽の数が少なく，構造上の相違点が見られる。出土遺物は周囲からの流れ込みの可能性もあり，時期を明確にすることができない。

第10号製塩跡（第60～65図）

位置 調査区中央部F13i5区の標高9.7mの砂丘上に位置している。西側にはほぼ同じ標高で第9号釜屋跡が確認されている。

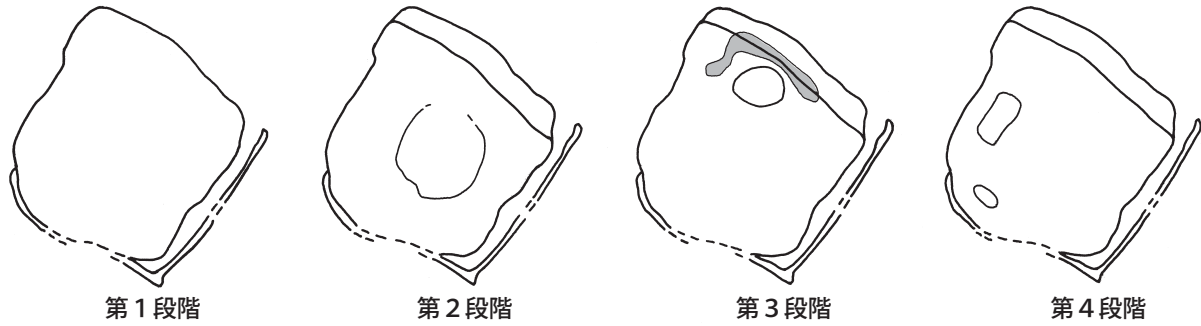
重複関係 釜屋の上層を第61・62・64号鹹水槽に掘り込まれている。

確認状況 第1段階 表砂をおよそ5.8m除去した標高10～10.4mから，南部の一部を除く釜屋壁部の周回部分と東部から南部の壁際にかけて山砂と暗褐色土を混ぜ合わせた版築状の層が確認された。

第2段階 釜屋内の砂を約30cm除去すると，竈1基と二つの北壁が確認された。

第3段階 土層から，北壁を南側に移動し再構築していることが判明した。また，再構築した壁の下層から竈1基・焼砂を検出し，A・B号とした。

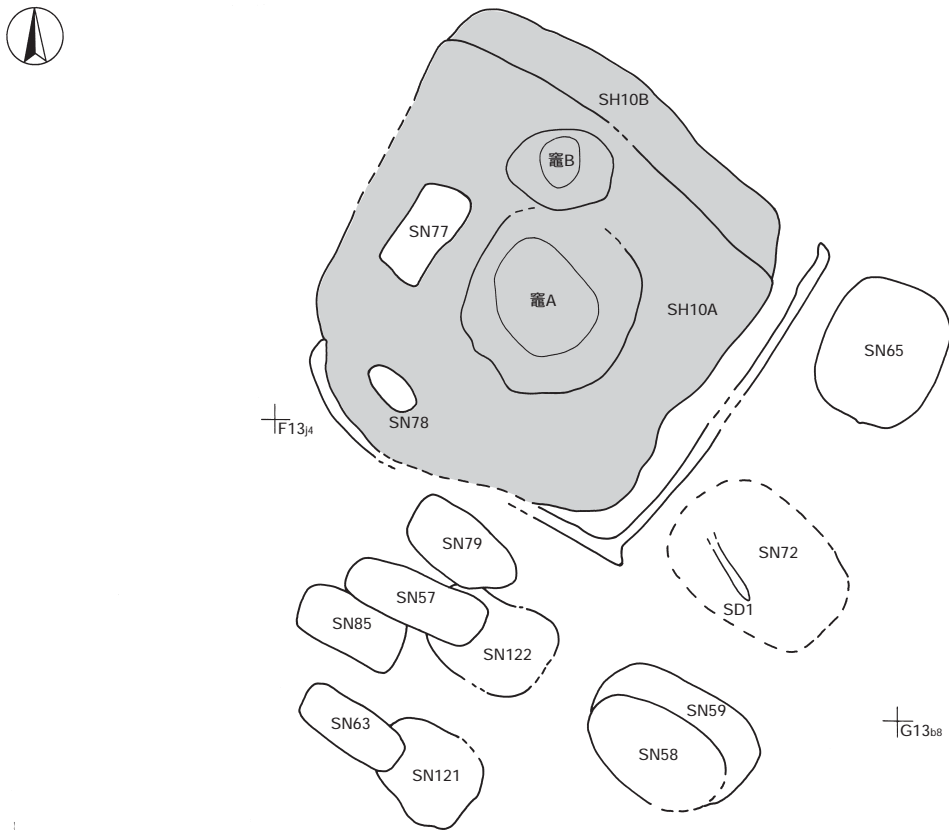
第4段階 釜屋内の黒色土を20cmほど除去し，黒色土中から第77・78号鹹水槽を検出した。



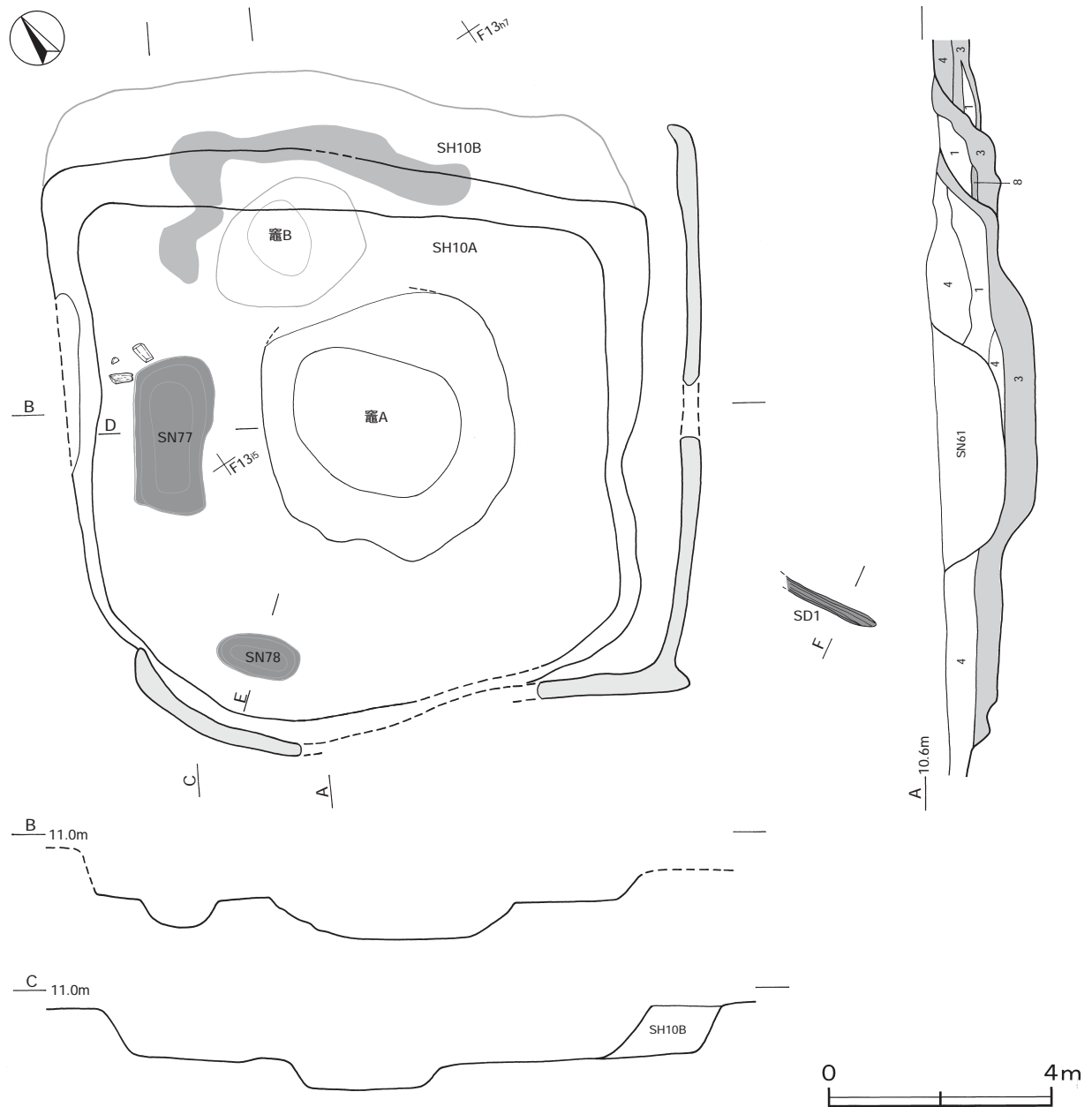
規模と構造 製塩跡の範囲は南北軸21m，東西軸18mである。本跡はA・B号釜屋，屋外鹹水槽（第57～59・63・65・72・79・85・121・122号鹹水槽），土樋（第1号土樋）で，釜屋は竈2基と屋内鹹水槽（第77・78号鹹水槽）で構成されている。屋内鹹水槽は釜屋内の南西部，屋外鹹水槽・土樋は製塩跡内の南東部を中心に位置している。

釜屋4区SH-7A・B（第61図） A号釜屋は長軸11.2m，短軸10.8mの長方形で，主軸方向はN-36°-Eである。釜屋は厚さ30cmの黒色土を貼り付けて構築されている。東部から南部の壁際にかけて山砂と暗褐色土を混ぜ合わせた版築状の層が確認された。B号釜屋はA号釜屋に掘り込まれているため，詳細については不明であるが，A号北壁はB号北壁から南へ約1.2m移動し造り替えられている。

A号竈は上層に第61号鹹水槽が構築されているため，一部が削平されている。残存部は一辺が約4.9mで，深さは20～40cmだけ確認された。底面は厚さ50cmの黒色土が残存している。B号竈は底面が残存しており，長径2.8m，短径2.1mだけ確認された。

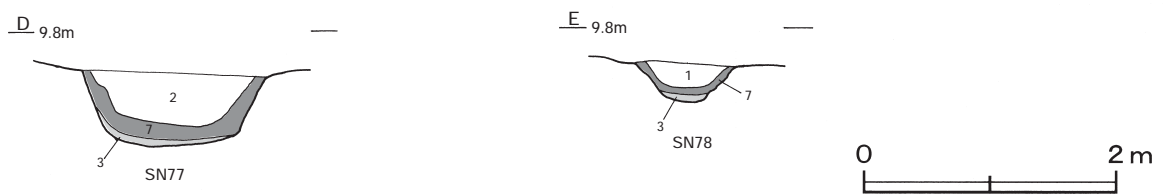


第60図 第10号製塩区域



第61図 第10号製塩跡実測図

土層断面図中、第4層は黒色土B層を主体とした層で、第61号鹹水槽を構築するために第10号釜屋跡を埋め戻した層、第3層は釜屋を構築した黒色土A層である。



第62図 第10号製塩跡屋内鹹水槽土層図

屋内鹹水槽（第62図）は黒色土面よりやや低い標高9.5mで、第77・78号鹹水槽が検出された。第2層は砂B層を主体とした層で、上層の第10A号釜屋を構築するために埋め戻した層である。第3・7層は黒色土A層と粘土層で、鹹水槽を構築した層である。

第10号製塩跡屋内鹹水槽一覧表

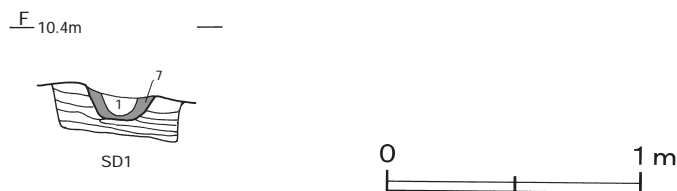
遺構番号	位置	長軸(径)方向	規模(m)			形状	黒色土厚(cm)	粘土厚(cm)	壁面	床面	出土遺物	備考
			長軸(径)	短軸(径)	深さ							
77	F13h4	N-55° -W	2.8	1.4	0.4	隅丸長方形	4	6~13	緩斜	平坦	-	
78	F13i4	N-43° -W	1.5	0.8	0.2	楕円形	6	6	緩斜	皿状	-	

屋外鹹水槽（第64・65図） 第10号釜屋から南東へ4mの標高約10mから第57~59・63号鹹水槽、標高約9.5mから第65・79・85号鹹水槽、さらに標高約8.0mからは第121・122号鹹水槽が検出された。第72号鹹水槽は底部だけが検出された。

第57~59・63号鹹水槽の覆土は砂A層を主体とした自然堆積の層で、廃絶後は短期間で埋没したものと想定される。第121・122号鹹水槽の覆土も砂A層であり、上層の第57・63・79号鹹水槽はこれらの鹹水槽が自然に埋没した後構築されたものと考えられる。第72号鹹水槽の残存状況が悪く、覆土中には構築土が確認できないことから、上層に位置する第1号土樋の構築土として再利用された可能性も考えられる。

土樋4区SD-1（第63図） 第10号釜屋から南東へ4mの標高約10mの位置で、粘土で構築された長さ約1.5mの溝を確認した。

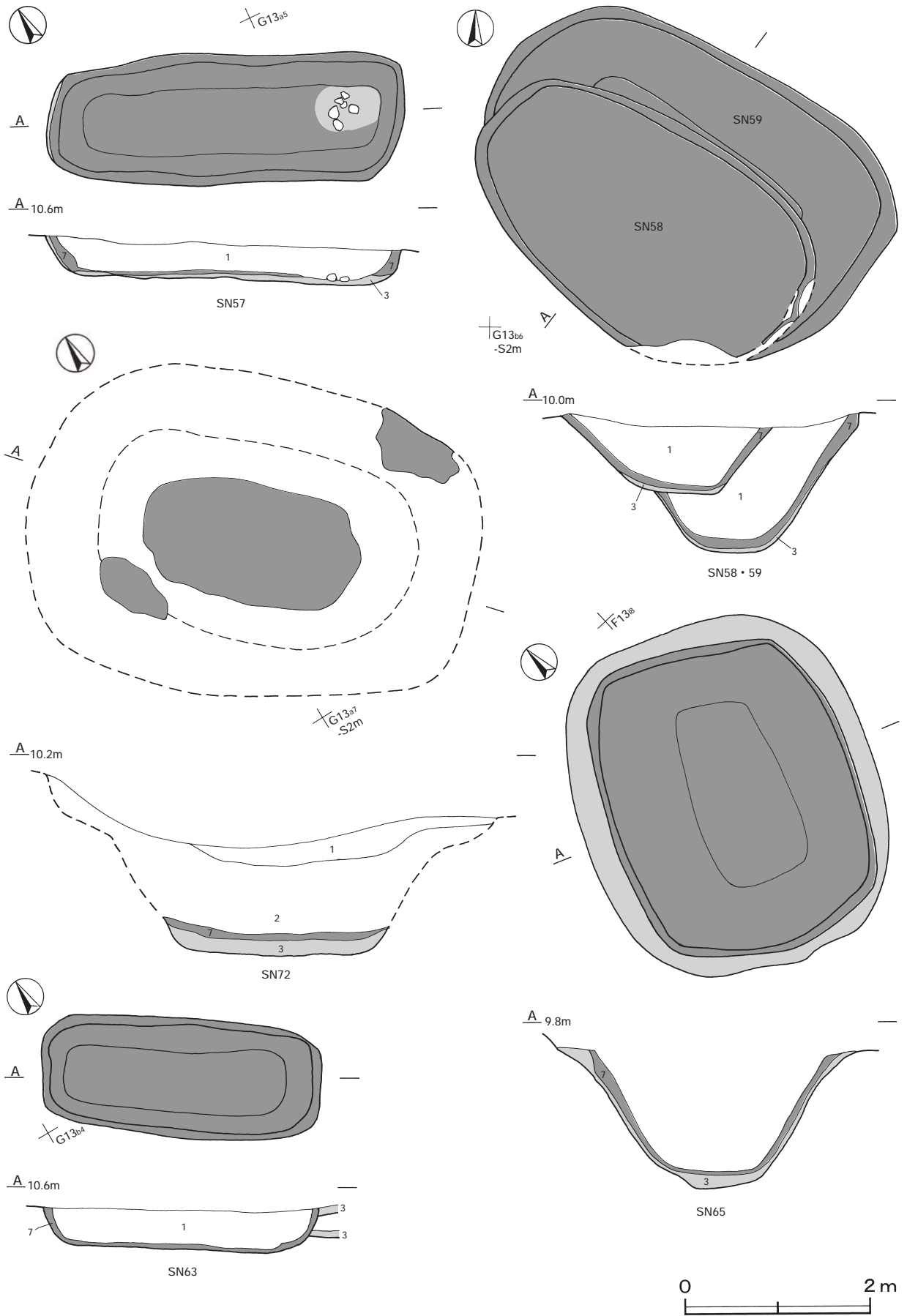
第1層は砂A層を主体とした自然堆積の層、第7層は粘土で構築した層である。下層には、粘土混じりの黒色土を版築状に貼った層が確認された。



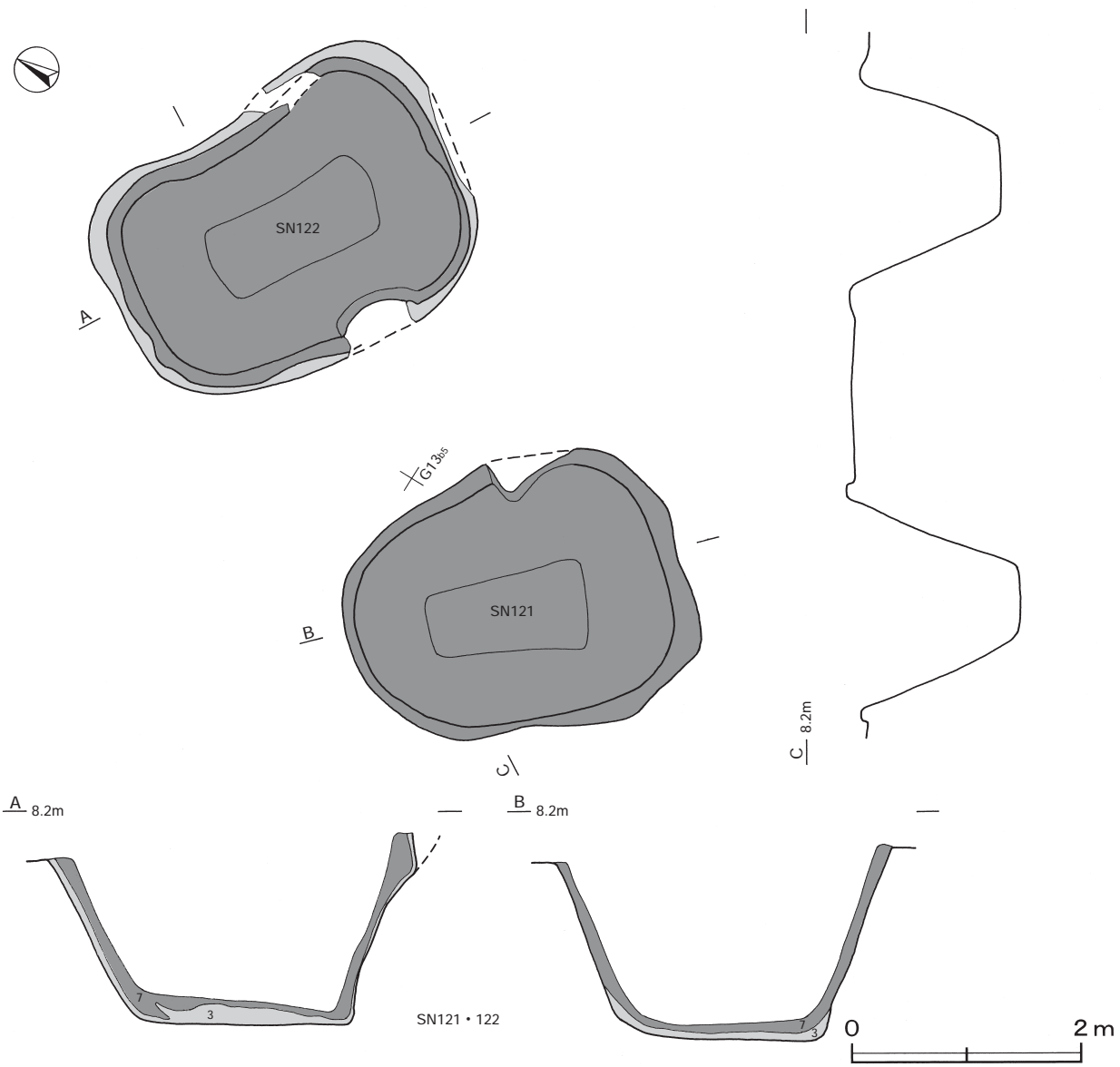
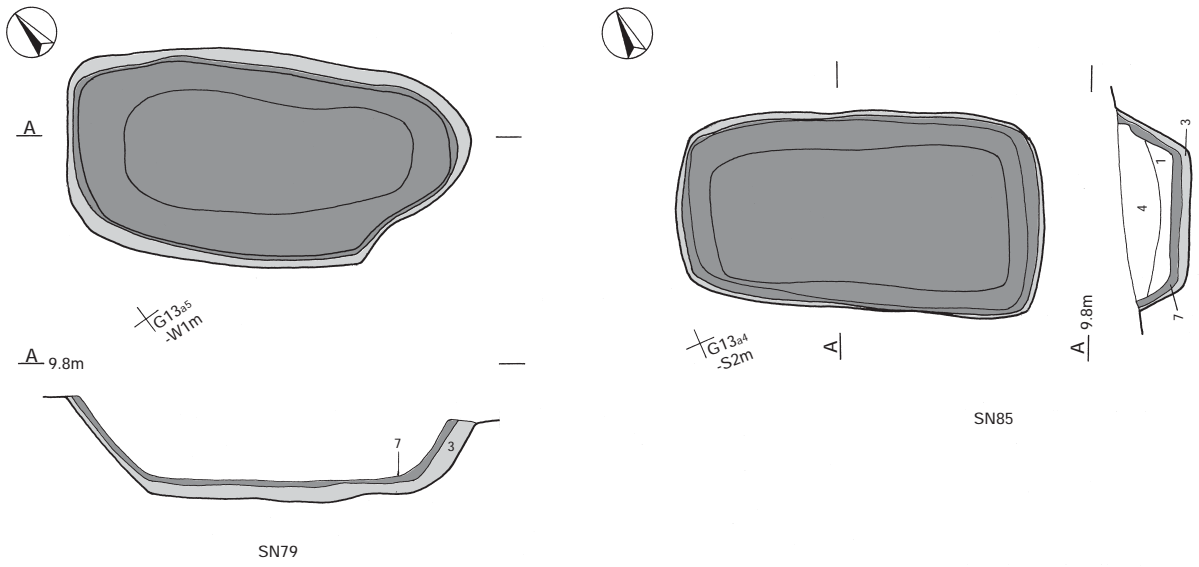
第63図 第10号製塩跡土樋土層図

遺物出土状況 土師質土器片21点（皿）が釜屋覆土中から出土しているが、すべて細片のため図示できない。
所見 釜屋は竈とともに造り替えられていることから、比較的長期間にわたって操業していたと考えられる。

屋内鹹水槽は2基である。第77・78号鹹水槽はA号釜屋の黒色土中より検出されていることから、第一次操業であるB号釜屋に伴うものと考えられる。なお、第77号鹹水槽は東部の一部が欠損しており、上層に位置する第61号鹹水槽を構築する際、掘り込まれたものである。最終操業であるA号釜屋に伴う屋内鹹水槽は検出されていない。



第64図 第10号製塩跡屋外鹹水槽実測図(1)



第65図 第10号製塩跡屋外鹹水槽実測図(2)

第10号製塩跡屋外鹹水槽一覧表

遺構 番号	位 置	長軸 (径) 方向	規模 (m)			形 状	黒色土厚 (cm)	粘土厚 (cm)	壁面	床面	出土遺物	備 考
			長軸 (径)	短軸 (径)	深さ							
57	G13a4	N-67° -E	3.8	1.4	0.3	長 方 形	2~10	2~12	外傾	平坦	—	
58	G13b6	N-53° -W	3.9	2.4	0.7	楕 円 形	5	5	緩斜	平坦	—	
59	G13a6	N-57° -W	4.5	2.5	1.2	不 定 形	2	12	緩斜	平坦	—	
63	G13b4	N-59° -W	3.0	1.3	0.4	長 方 形	—	6	外傾	平坦	—	
65	F13i7	N-25° -E	3.8	3.2	1.3	方 形	3~15	4~12	緩斜	皿状	—	
72	F13j6	N-40° -W	(2.4)	(1.3)	1.5	[隅丸長方形]	15	4~8	緩斜	平坦	—	
79	F13j5	N-66° -W	3.2	1.7	0.6	隅丸長方形	12	2~5	緩斜	平坦	—	
85	G13a4	N-39° -W	2.9	1.6	0.4	[長方形]	2~8	3~10	緩斜	平坦	—	
121	G13b4	N-48° -W	2.9	2.3	1.4	不 定 形	2~12	10	外傾	平坦	—	
122	G13a5	N-60° -W	3.2	2.2	1.3	不 定 形	2~18	5~20	外傾	平坦	—	

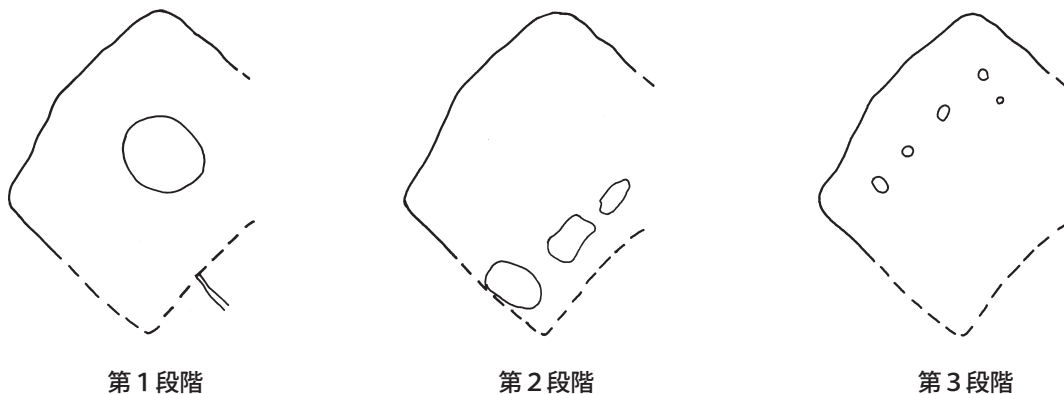
屋外鹹水槽は10基検出され、釜屋の造り替えにより二時期のグループが考えられる。第57~59・63・65・79・85号鹹水槽が最終操業であるA号釜屋に伴うものである。そのうち、第65・79・85号鹹水槽はA号釜屋の初期段階に使用されたと考えられる。第72・121・122号鹹水槽は第一次操業であるB号釜屋に伴うものである。第121・122号鹹水槽は南東コーナー一部中段に足掛け石が2点設置されており、残存状況が悪い第72号鹹水槽の規模や形状を想定すると、かなりの規模をもっていたものと考えられる。

土樋は1条検出され、釜屋の屋内鹹水槽に鹹水を送り込むための溝と考えられる。第9号釜屋跡に伴う屋外鹹水槽を構築する際、掘り込まれているため残存状況は悪く、鹹水槽間の連絡関係は不明である。

北西約5mに位置する第9号釜屋跡と主軸をほぼ同じくして確認されているが、標高は本跡の方が低い。上層には第9号釜屋跡の屋外鹹水槽が構築されていることから、本跡は第9号釜屋跡より以前に操業していたと推測される。時期は、出土遺物の多くが細片であるため明確にすることができない。

第11号製塩跡 (第66~70図)

位置 調査区中央部E13h8区の標高9.4~9.6mの砂丘上に位置している。製塩跡が確認された中で最北に位置する。下層には第12・19・20号製塩跡が構築されている。

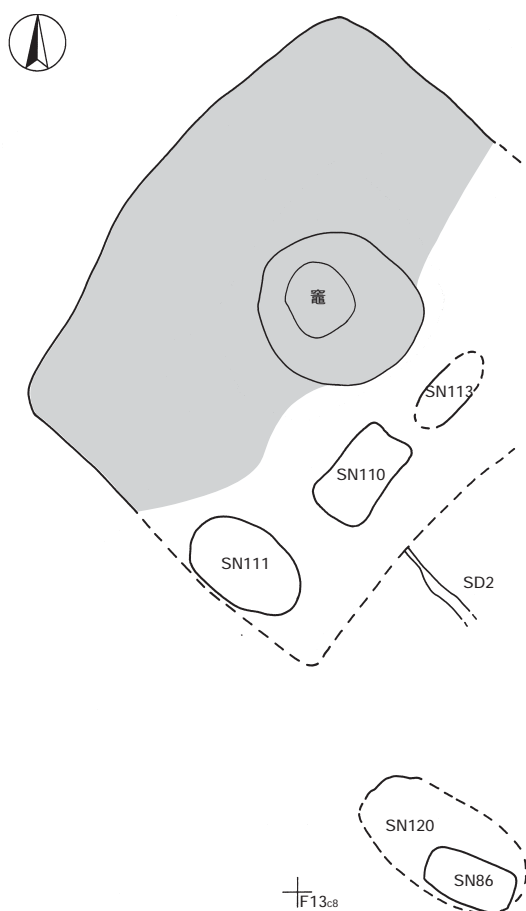


確認状況 第1段階 表砂をおよそ8m除去した標高9.6mの位置から、東部が調査区域外に延びる釜屋とその中心部に竈の範囲が確認された。

第2段階 釜屋内の砂を20cm 除去すると竈，東部と南部の作業面から第110・111・113号鹹水槽が検出された。

第3段階 釜屋内の黒色土面を10cm 除去すると，P 1～P 5が検出された。

規模と構造 東部が調査区域外に延びているため，製塩跡の範囲は南北軸24m，東西軸12m だけ確認された。第11号製塩跡は釜屋，屋外鹹水槽(第86・120号鹹水槽)，土樋(第2号土樋)で，釜屋は竈，屋内鹹水槽(第110・111・113号鹹水槽)で構成されている。屋内鹹水槽は釜屋内の南東部，屋外鹹水槽・土樋は製塩跡内の南東部を中心に位置している。



釜屋 4区 SH - 8 (第67図) 東部が調査区域外に延びているため，南北軸約13.7m，東西軸11.8m だけ確認できた。釜屋は厚さ12～60cm の黒色土を貼り付けて構築されている。全体的に竈に向かって傾斜しており，北西から南西にかけての壁際は山砂と暗褐色土を混ぜ合わせた版築状の層が確認された。

竈は長径4.4m，短径4 m の楕円形で，釜屋の中心部に位置している。作業面からの深さは90cm で，底面は皿状を呈している。黒色土の厚さは30～70cm である。

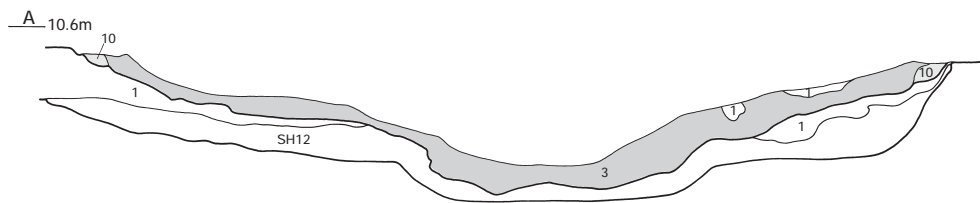
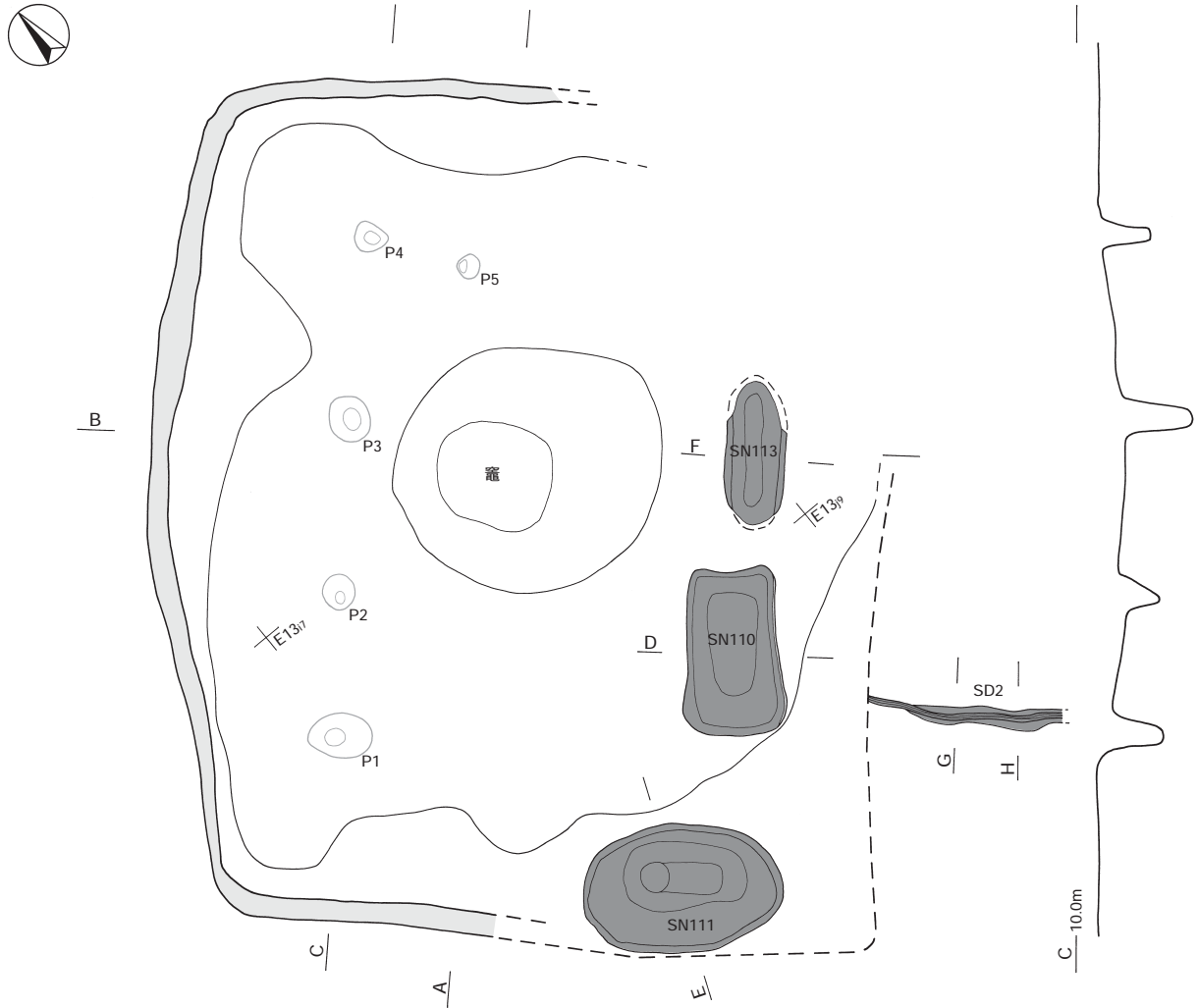
土層断面図中，第3層は釜屋を構築した黒色土A層である。第10層は釜屋を構築する際に暗褐色土と山砂を版築状に積み重ねた層である。なお，本跡の下層に1基の釜屋跡(第12号製塩跡)が存在する。

第66図 第11号製塩区域

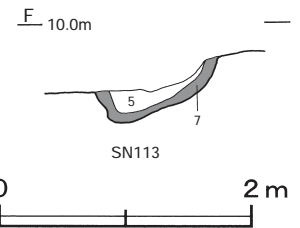
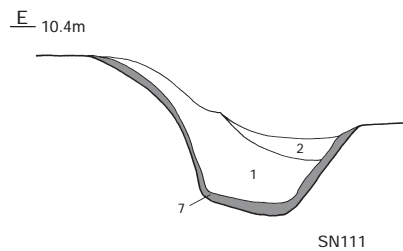
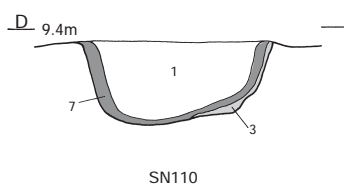
ピットは5か所である。P 3は深さ110cm と深く，その他は50～80cm である。P 1～P 4は西壁とほぼ平行に並んでいることから柱穴と考えられる。P 3・P 5は竈に近く，竈を構成する柱穴の可能性はある。

屋内鹹水槽(第68図)は南部の標高10.2m から第111号鹹水槽，東部の標高9.3m から第110号鹹水槽，9.8m から第113号鹹水槽が検出された。

第110・111号鹹水槽の覆土は砂A層を主体とした層で，廃絶後に自然堆積した層である。第113号鹹水槽は黒色土C層を主体とした層で，作業面をつくるために埋め戻された層である。



第67図 第11号製塩跡実測図



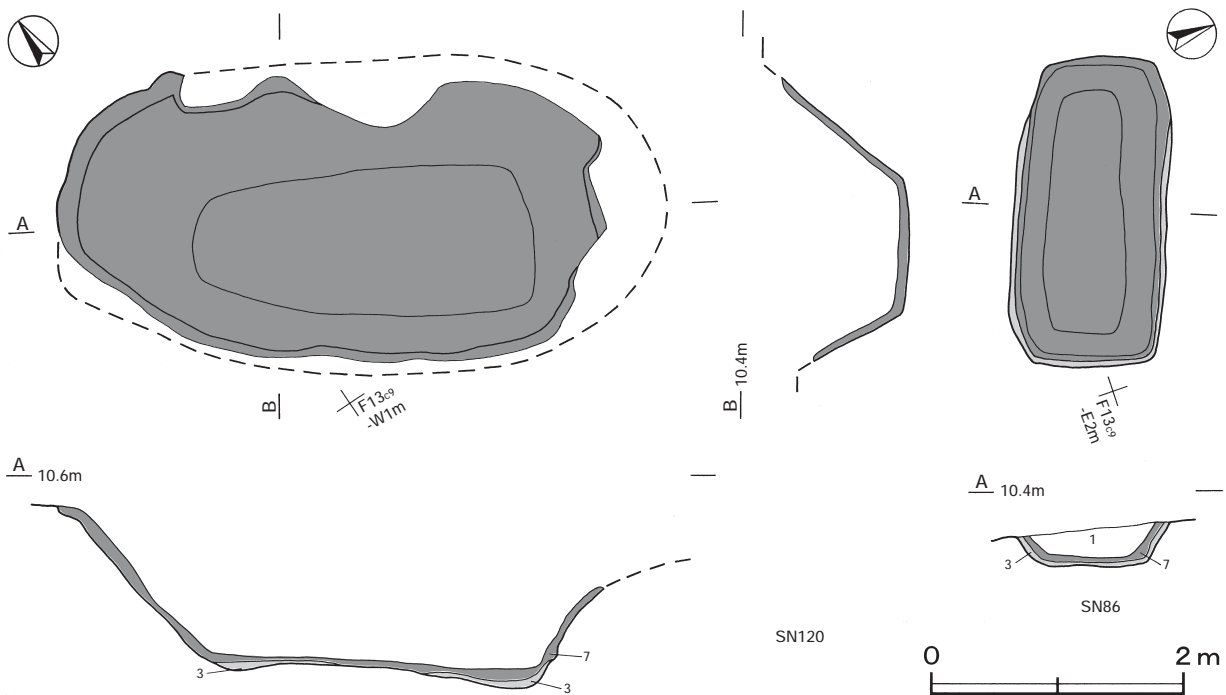
第68図 第11号製塩跡屋内鹹水槽土層図

第11号製塩跡屋内鹹水槽一覧表

遺構 番号	位 置	長軸(径) 方向	規模 (m)			形 状	黒色土厚 (cm)	粘土厚 (cm)	壁面	床面	出土遺物	備 考
			長軸(径)	短軸(径)	深さ							
110	E13j8	N-40° -E	2.7	1.4	0.6	長 方 形	2~4	4~10	緩斜	平 坦	-	
111	E13j7	N-50° -W	3.2	2.0	1.0	楕 円 形	-	4~10	緩斜	平 坦	-	
113	E13i8	N-42° -E	(2.3)	1.0	0.3	長楕円形	-	7	緩斜	緩い起伏	-	

屋外鹹水槽(第69図) 釜屋の南東部の表砂をおよそ7 m ほど除去した標高10.4m から第120号鹹水槽, さらに標高10.2m から第86号鹹水槽が検出された。

第86・120号鹹水槽の覆土は砂A層を主体とした自然堆積の層で, 廃絶後に短期間で埋没したものと想定される。



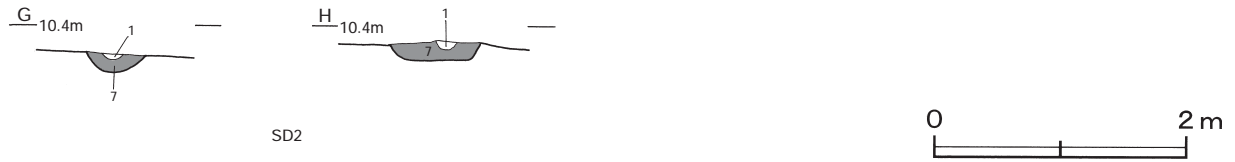
第69図 第11号製塩跡屋外鹹水槽実測図

第11号製塩跡屋外鹹水槽一覧表

遺構 番号	位 置	長軸(径) 方向	規模 (m)			形 状	黒色土厚 (cm)	粘土厚 (cm)	壁面	床面	出土遺物	備 考
			長軸(径)	短軸(径)	深さ							
86	E13b9	N-68° -W	2.5	1.2	0.2	隅丸長方形	2~5	4~9	外傾	平坦	-	
120	F13c8	N-52° -W	(4.3)	(2.2)	1.0	[楕円形]	3~7	10	緩斜	平坦	-	

土樋4区SD-2(第70図) 第11号釜屋から東の標高約10.2m の位置で, 粘土で構築された長さ約3 m の溝を確認した。

第1層は砂A層を主体とした自然堆積の層, 第7層は粘土で土樋を構築した層である。下層には, 第1号土樋と同じく粘土混じりの黒色土を版築状に貼った層が確認された。



第70図 第11号製塩跡土樋土層図

所見 第11号釜屋は規模から想定すると、大規模に操業していた可能性がある。釜屋の造り替えは見られない。

屋内鹹水槽は3基検出されている。第111号鹹水槽は最終段階で機能していたもので、底部西側には円形の窪みが確認できた。これは鹹水槽の底に溜まった泥水などを汲み出す際に粘土を削ってしまったものか、鹹水の落下に伴う圧力によってできたものと考えられる。北部は崩落してなくなっているが、かなり大規模な鹹水槽を推測することができる。第113号鹹水槽と規模や形状の似た鹹水槽は他跡にも見られるが、釜屋内の東部に配置している点では異例である。

屋外鹹水槽は2基検出されている。第120号鹹水槽は第86号鹹水槽の前段階で機能していたものと考えられる。壁部の崩落が目立つが、これは第86号鹹水槽の構築によるものか、砂の自然堆積によるものと考えられる。第86号鹹水槽は最終段階で機能していたもので、釜屋が調査区域外に延びていることから、この他にも屋外鹹水槽が存在するものと推測される。

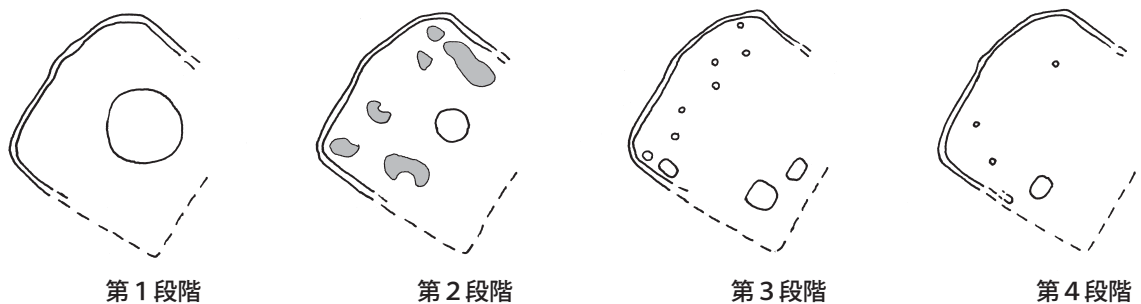
土樋は1条検出され、主軸方向を考えると、第11号釜屋の屋内鹹水槽(第110号鹹水槽)に鹹水を送り込むための溝と推測される。しかし、屋外鹹水槽が東部の調査区域外に広がっていることから、鹹水槽間の連絡関係は不明である。

鹹水槽は新旧関係が見られ、屋内鹹水槽では第111号鹹水槽、屋外鹹水槽では第86号鹹水槽が最終操業に伴う鹹水槽と考えられる。また、土樋を伴う製塩跡は本跡と第10号製塩跡であり、両跡は他にみられない製塩跡の形態である。時期は出土遺物がなく、明確にすることができないが、遺構確認面の最上層に構築されていることから、当遺跡内での最終段階の一つと考えられる。

第12号製塩跡 (第71～74図)

位置 調査区中央部 E13i8区の標高約9 mの砂丘上に位置している。上層には第11号製塩跡が確認されている。

重複関係 上層に第11号製塩跡、下層に第19・20号製塩跡が構築されている。



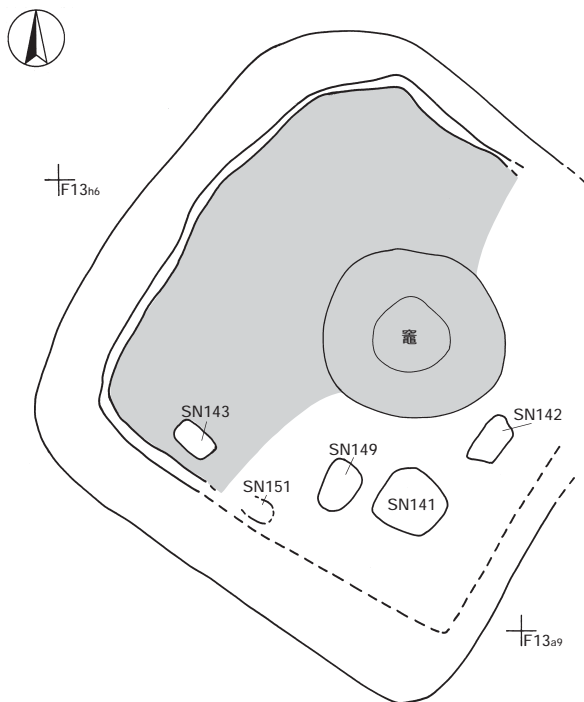
確認状況 第1段階 表砂をおよそ8m除去した標高9.1mから、東部が調査区域外に延びる釜屋と、その中心部に竈の範囲を確認した。西部には山砂と暗褐色土を混ぜ合わせた層が带状に確認された。

第2段階 釜屋内の砂を約10cm除去すると竈、西部の黒色土面から焼砂の広がりを確認した。

第3段階 黒色土面を精査すると、第141～143号鹹水槽とP1～P7が検出された。

第4段階 黒色土を約10cm除去すると、第149・151号鹹水槽、P8～P10が検出された。

規模と構造 東部が調査区域外に延びているため、製塩跡の範囲は南北軸18m、東西軸14mだけ確認された。本跡は釜屋だけが検出され、屋外鹹水槽は不明である。釜屋は竈、屋内鹹水槽（第141～143・149・151号鹹水槽）で構成されている。屋内鹹水槽は釜屋内の南東部を中心に位置している。



第71図 第12号製塩区域

ピットは10か所である。いずれも深さ20～40cmである。P1～P7は残存している西壁とほぼ平行に並んでいることから、上屋を支える柱穴と考えられる。P8～P10は黒色土面中から検出されており、性格は不明である。

屋内鹹水槽（第73図）は釜屋内の黒色土面の標高9.0mから第141～143・149号鹹水槽、さらに黒色土を10cm除去すると第151号鹹水槽が検出された。なお、第149・151号鹹水槽は残存状況が悪い。

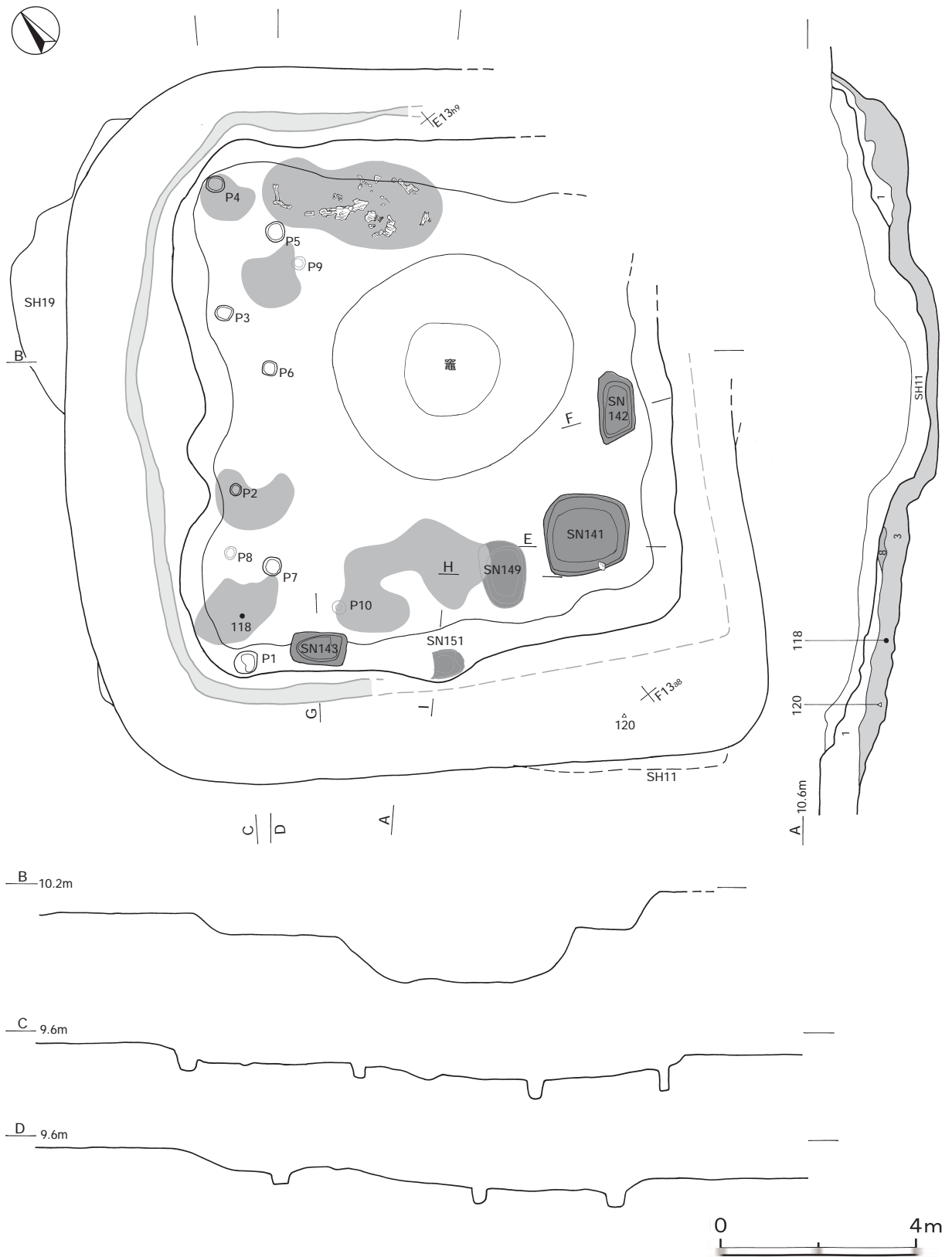
検出された屋内鹹水槽の覆土は、上層に位置する第11号製塩跡を構築するために埋め戻された黒色土が主体である。

遺物出土状況 土師質土器片11点（皿9、内耳鍋1、灯明皿1）、金属製品2点（吊金具、古銭）、丸瓦片1点が釜屋内から出土している。灯明皿は釜屋南西部の黒色土面上から出土し、底部中央部に穿孔後に釘カを挿しこんだ状態である。

釜屋4区SH-9（第72図） 東部が調査区域外に延びているため、南北軸約14.5m、東西軸13.8mだけ確認された。残存している西壁から、主軸方向はN-35°-Eと推測される。釜屋は厚さ40～80cmの黒色土を貼り付けて構築されている。全体的に中心部にむかって傾斜しており、北西部から南西壁際にかけて山砂と暗褐色土を混ぜ合わせた版築状の層が確認された。西部を中心に黒色土面から焼砂が検出された。

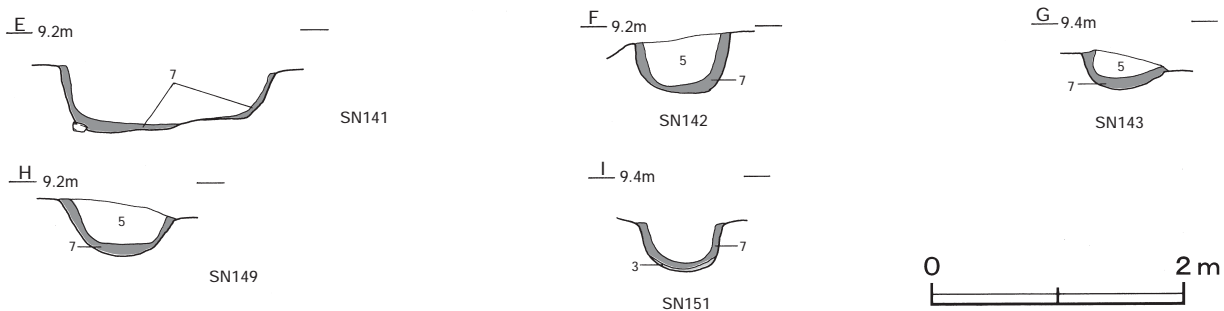
竈は径約5.0mの円形で釜屋の中心に位置すると考えられる。作業面からの深さは100cmである。底面は平坦で、黒色土の厚さは20～40cmである。

土層断面図中、第3層は釜屋を構築した黒色土A層で、壁付近には厚さ10～50cmの砂A層が入っている。この層を境に上層を第11号釜屋、下層を第12号釜屋とした。



第72図 第12号製塩跡実測図

所見 第11号製塩跡と同様に、釜屋や竈を造り替えながら大規模に操業していたと推測される。西部の黒色土面からは焼砂が広い範囲で確認された。焼失により操業が打ち切られたのか、廃絶後に焼失したのかは不明である。屋内鹹水槽の5基は上層に位置する第11号製塩跡を構築する際に削平されており、残存状況が悪い。



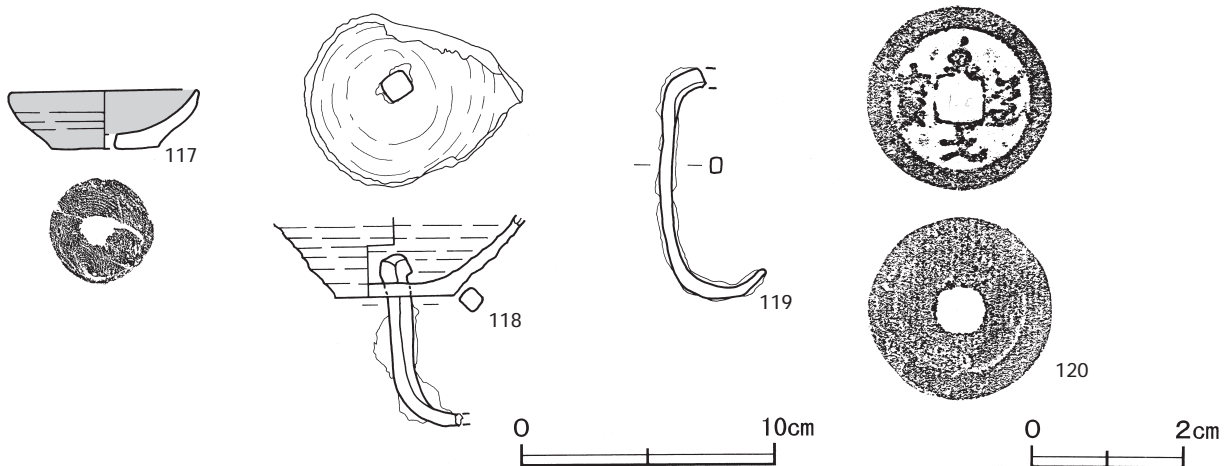
第73図 第12号製塩跡屋内鹹水槽土層図

第12号製塩跡屋内鹹水槽一覧表

遺構番号	位置	長軸(径) 方向	規模(m)			形状	黒色土厚(cm)	粘土厚(cm)	壁面	床面	出土遺物	備考
			長軸(径)	短軸(径)	深さ							
141	E13j8	N-53° -W	1.7	1.7	0.4	隅丸方形	-	1~8	外傾	緩い起伏	-	
142	E13i8	N-36° -E	1.4	0.7	0.3	不定形	-	8	外傾	皿状	-	
143	E13i6	N-47° -W	1.1	0.7	0.2	隅丸長方形	-	8	緩斜	皿状	-	
149	E13j7	N-36° -E	1.4	0.9	0.3	不定形	-	1~9	外傾	緩い起伏	-	
151	E13j7	N-57° -W	(0.6)	0.6	0.3	[楕円形]	1~5	4~8	緩斜	皿状	-	

検出状況から第141~143号鹹水槽が最終操業時、第149・151号鹹水槽は操業当初に構築されたものと考えられる。

当遺跡内では、底部が穿孔されている土師質土器の皿が多量に出土している。本跡から出土した皿からは油煙痕は確認できないが、灯明皿を支えた受皿で釜屋内の柱などに打ちつけたものと考えられる。灯明皿の出土により、釜屋内の操業が昼夜を通して行われたことが推測される。時期は、出土遺物が少なく明確にすることができない。



第74図 第12号製塩跡出土遺物実測図

第12号製塩跡出土遺物観察表 (第74図)

番号	器形	器質	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
117	小皿	土師質土器	7.3	2.4	4.2	雲母・赤色粒子	橙	普通	底部中央焼成後穿孔, 内外面油煙	覆土中	90% PL43
118	灯明皿	土師質土器	-	(3.2)	4.7	長石・雲母	明赤褐	普通	底部回転糸切り, 底部穿孔後, 金属製品の取り付け	南西部黒色土面	40% PL45 受皿カ

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
119	耳金	(9.1)	0.4	0.6	(19.9)	鉄	断面方形	覆土中	PL51

番号	銭名	径	孔径	厚さ	重さ	初铸年	材質	特徴	出土位置	備考
120	至道元寶	2.46	0.62	0.11	3.86	995	銅	草書	南部黒色土中	

第13号製塩跡（第75～79図）

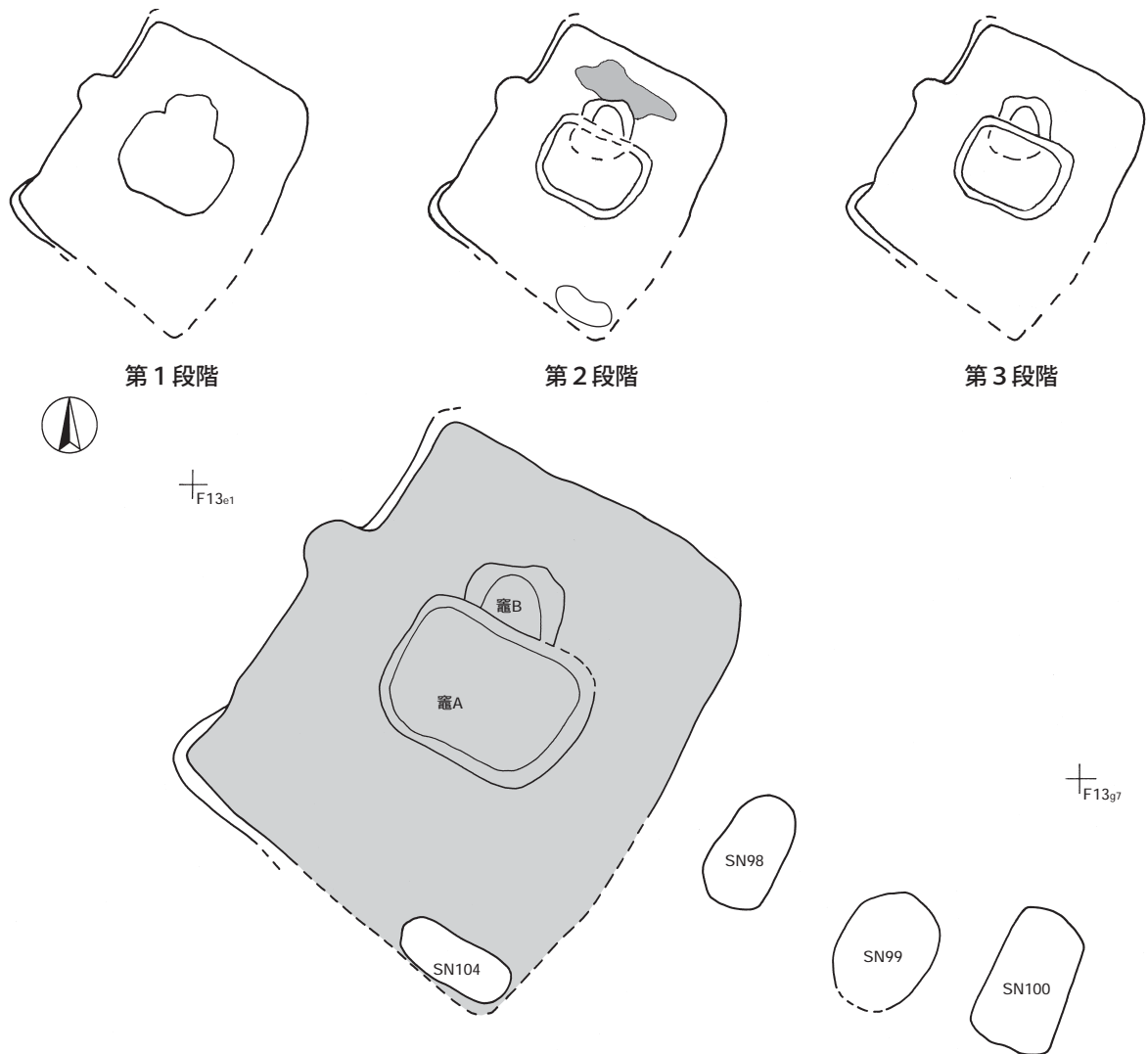
位置 調査区中央部 F13f2区の標高8.5mの砂丘上に位置している。上層には第9号製塩跡が確認されている。

重複関係 上層に第9号製塩跡，下層に第17号製塩跡が構築されている。

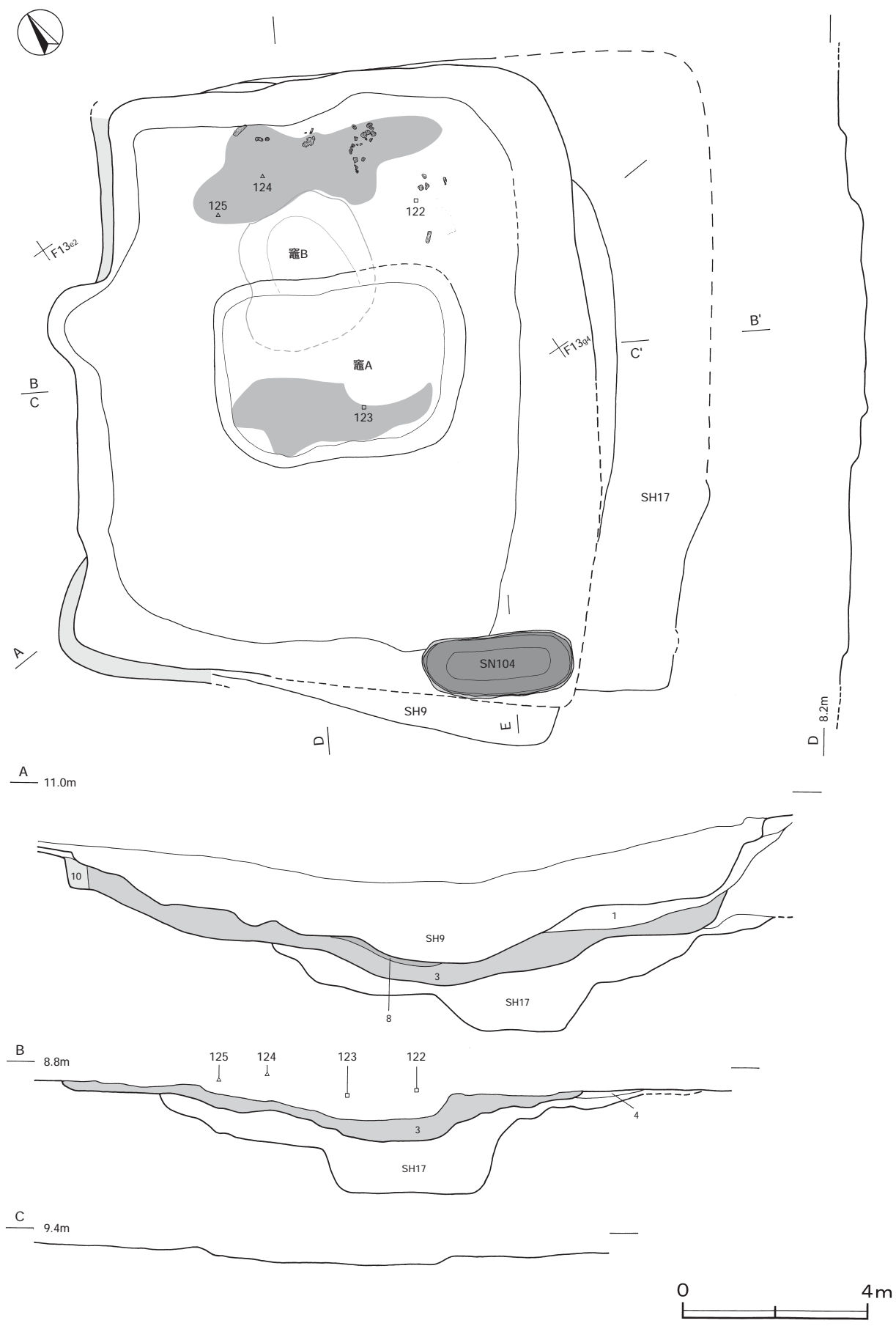
確認状況 第1段階 表砂をおよそ7m除去した標高9mの位置から，釜屋と竈の範囲が確認された。西壁際の一部では山砂と暗褐色土を混ぜ合わせた層が带状に確認された。

第2段階 釜屋内の表砂を50cm除去すると竈の範囲，南東部の黒色土面から第104号鹹水槽，釜屋内の北部の黒色土面から焼砂が検出された。

第3段階 土層から，A・B号竈が存在することが判明した。



第75図 第13号製塩区域



第76図 第13号製塩跡実測図

規模と構造 製塩跡の範囲は南北軸18m, 東西軸25mである。本跡は釜屋, 屋外鹹水槽 (第98~100号鹹水槽) で, 釜屋はA・B号竈, 屋内鹹水槽 (第104号鹹水槽) で構成されている。屋内鹹水槽は釜屋内の南東部, 屋外鹹水槽は製塩跡内の東部に位置している。

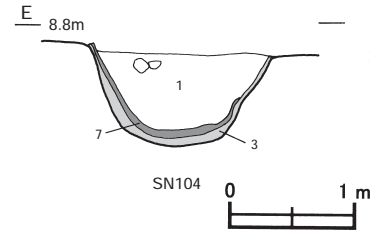
釜屋 4区 SH-10 (第76図) 長軸12.6m, 短軸約11.7mの長方形で, 主軸方向はN-33°-Eである。釜屋は最大で約60cmの黒色土を貼り付けて構築されている。全体的に中心部に向かって傾斜しており, 山砂と暗褐色土を混ぜ合わせた版築状の層が西壁際の一部で確認された。北部の黒色土面から, 焼砂と炭化材が広範囲にわたり検出された。

A号竈は長軸5.4m, 短軸4mの長方形で, 釜屋のほぼ中心に位置している。作業面からの深さは残存している部分で50cmである。底面は皿状を呈しており, 黒色土の厚さは40~50cmである。南部の底面からは焼砂が検出された。B号竈はA号竈に掘り込まれているため, 南北軸3m, 東西軸2.7mだけ確認できた。

第3層は釜屋を構築した黒色土A層である。土層断面から, A号竈はB号竈の廃絶後に造り替えたと考えられる。ピットは検出されていない。

第104号鹹水槽 (第77図) は, 釜屋内の黒色土面の標高8.6mから検出された。

第1層は砂A層を主体とした自然堆積の層で, 鹹水槽の構築材である粘土や黒色土も混入している。



第77図 第13号製塩跡屋内鹹水槽土層図

第13号製塩跡屋内鹹水槽一覧表

遺構番号	位置	長軸 (径) 方向	規模 (m)			形状	黒色土厚 (cm)	粘土厚 (cm)	壁面	床面	出土遺物	備考
			長軸 (径)	短軸 (径)	深さ							
104	F13h2	N-60°-W	3.2	1.4	0.6	楕円形	1~8	1~7	外傾	皿状	瓦片, 礫	

屋外鹹水槽 (第78図) 製塩跡内東部の標高約9mから, 第98~100号鹹水槽が検出された。3基とも釜屋の東部に並ぶように位置している。

第1層は砂A層, 第5層は黒色土C層で鹹水槽の構築土である黒色土が混じっている。第98・99号鹹水槽は廃絶後に砂A層が堆積し, その後鹹水槽の構築土が堆積したものと考えられる。

遺物出土状況 土師質土器片15点 (皿14, 内耳鍋1), 石器2点 (宝篋印塔, 砥石), 金属製品6点 (耳金) が釜屋内, 瓦片1点, 礫1点が第104号鹹水槽から出土している。宝篋印塔は竈内からで火熱痕が認められることから, 他所より持ち込まれて竈内で使用されたものと考えられる。耳金と判明できたものは6点出土しているが, 損傷が激しく図示できたのは1点だけである。皿は釜屋内の覆土中からで流れ込んだ可能性が高い。

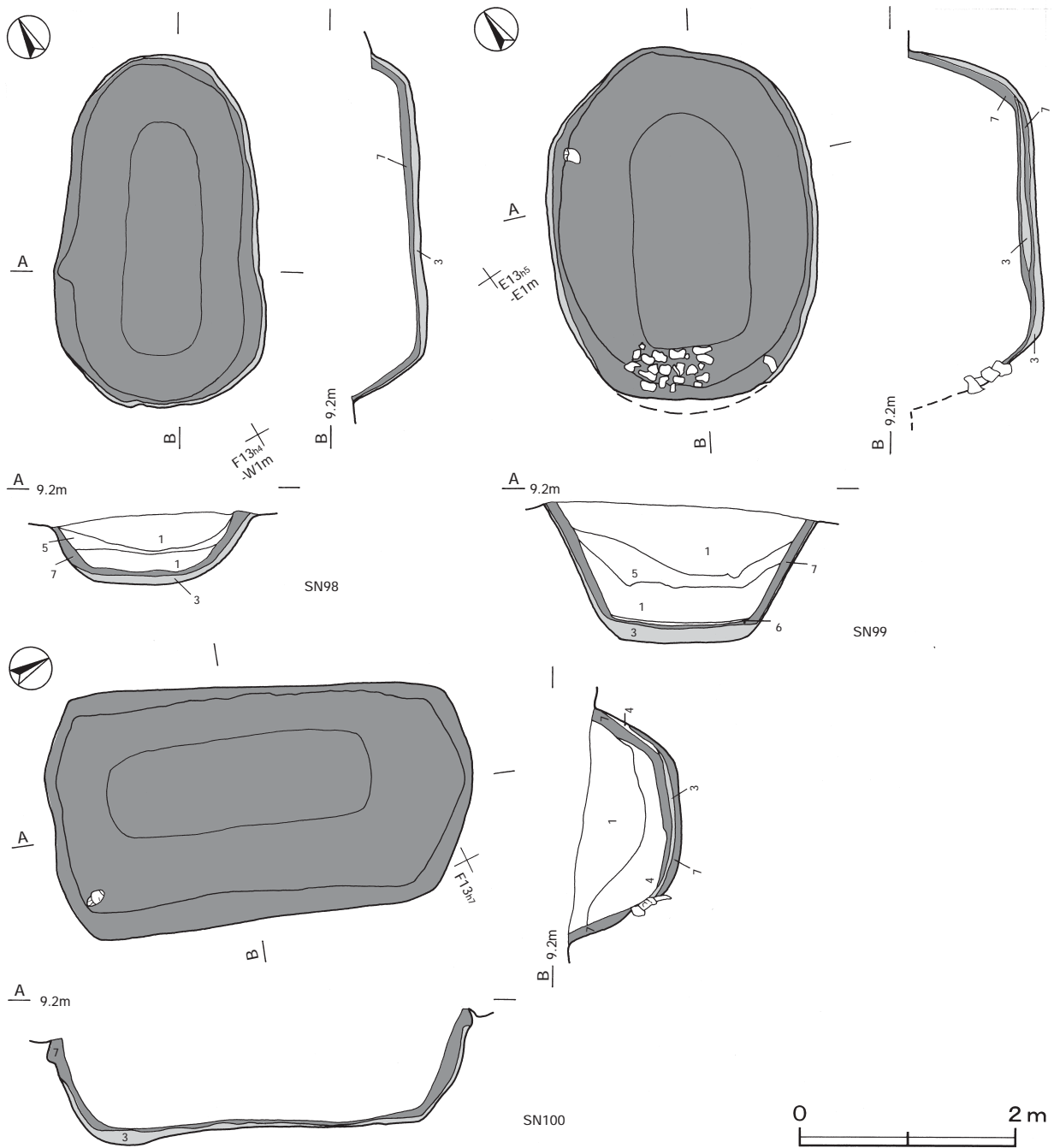
所見 竈の検出状況から大きく二回の操業が考えられる。A号竈はB号竈を拡大しながら, 操業が続けられたものと考えられる。

屋内鹹水槽は1基である。土層断面から鹹水槽の構築材が崩落した層も確認されており, 上層に位置する第9号製塩跡を構築するために削平されたものと考えられる。足掛け石と推測される礫も土層断面から確認できることから, 第104号鹹水槽はかなり大規模であったと想定される。

屋外鹹水槽は3基検出され, 最終操業まで機能していた可能性がある。いずれも南東部の壁面に足掛け石が貼り付けられ, 鹹水槽の出入りは南東部から行っていたと考えられる。第99号鹹水槽の南壁部には礫数点が粘土中に貼り付けており, 長期にわたり鹹水槽を機能させるために補修を行っていたと推測される。

竈は二回の造り替えが行われているが, 屋内・外鹹水槽には造り替えの様相は見受けられない。このことか

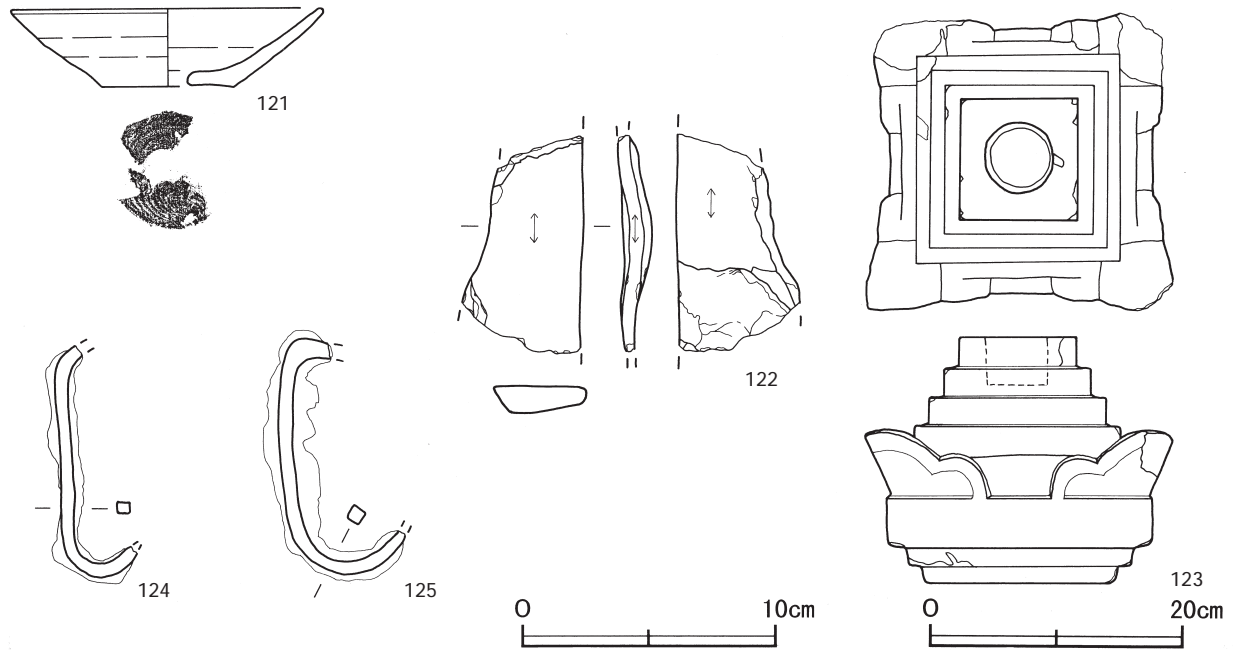
ら、鹹水槽は補修を行いながら長期的に機能させていたことが考えられる。北部の黒色土面からは、焼砂と釜屋の屋根材か壁材に使用されたと考えられる炭化材が出土している。これは北東へ約22mに位置する第19号製塩跡の検出状況と類似しており、両跡は同時期に操業し、廃絶も同様の方法で行われた可能性が高い。



第78図 第13号製塩跡屋外鹹水槽実測図

第13号製塩跡屋外鹹水槽一覧表

遺構番号	位置	長軸(径)方向	規模(m)			形状	黒色土厚(cm)	粘土厚(cm)	壁面	床面	出土遺物	備考
			長軸(径)	短軸(径)	深さ							
98	F13g4	N-31°-E	3.2	1.9	0.5	楕円形	2~9	2~10	外傾	平坦	-	
99	F13h5	N-31°-E	(3.3)	2.5	1.0	楕円形	2~14	2~11	外傾	平坦	-	
100	F13h6	N-21°-E	3.9	2.2	0.9	隅丸長方形	2~12	1~13	外傾	平坦	-	



第79図 第13号製塩跡出土遺物実測図

第13号製塩跡出土遺物観察表（第79図）

番号	器形	器質	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
121	皿	土師質土器	12.2	3.2	[5.2]	雲母・赤色粒子	にぶい橙	普通	底部回転糸切り，底部中央焼成後穿孔	覆土中	50%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
122	砥石	(8.6)	3.7	1.1	(55.5)	滑石	砥面3面	北部黒色土面	PL46
123	宝篋印塔	19.5	(24.5)	(23.5)	(12,300)	花崗岩	笠部，露盤四段，隅飾突起外反	竈内	PL48
124	耳金	(9.2)	0.5	0.5	(28.3)	鉄	断面方形	北部黒色土面	
125	耳金	(9.3)	0.5	0.6	(50.5)	鉄	断面方形	北部黒色土面	

第14号製塩跡（第80～85図）

位置 調査区中央部 G13f2区の標高5.7mの砂丘上に位置している。

重複関係 第106号鹹水槽に竈を掘り込まれている。

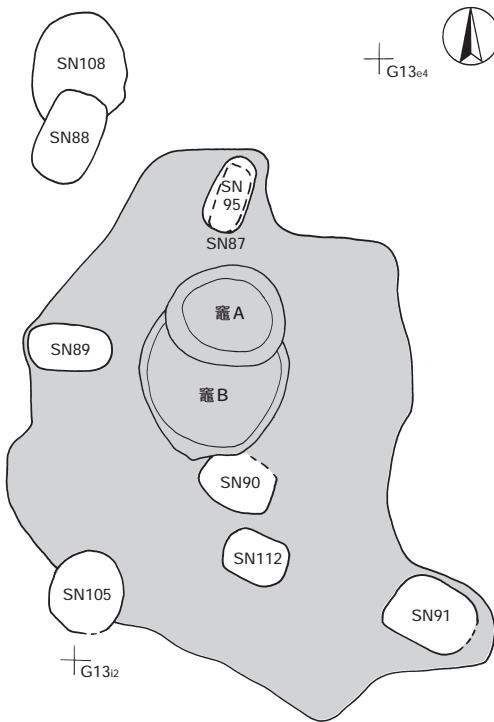


確認状況 第1段階 表砂をおよそ8m除去した標高5.7mの位置から，釜屋と竈，第87・89～91号鹹水槽が確認された。

第2段階 土層からA・B号竈が確認された。

第3段階 釜屋内の黒色土面を10cm除去すると、第95・105・112号鹹水槽、P1～P12が検出された。

規模と構造 製塩跡の範囲は南北軸19m、東西軸13mである。第14号製塩跡は釜屋、屋外鹹水槽（第88・108号鹹水槽）で、釜屋はA・B号竈、屋内鹹水槽（第87・89～91・95・105・112号鹹水槽）で構成されている。屋内鹹水槽は中央部と北西部、屋外鹹水槽は製塩跡内の北部に位置している。



第80図 第14号製塩区域

釜屋 4区 SH-11（第81図）南北軸14.1m、東西軸10.2mの不定形である。釜屋は、厚さ8～30cmの黒色土を貼り付けて構築されている。

A号竈は長径3.1m、短径2.7mの楕円形で北部に位置している。作業面からの深さは60cmで、底面は平坦である。黒色土の厚さは30～40cmである。B号竈はA号竈の南部に位置し、長径3.9m、短径2.3mだけが確認できた。残存部の黒色土の厚さは30cmである。釜屋に比べると竈内は黒色土をかなり厚く貼っている。A号竈内からは作業によって生じた灰が検出されている。

土層断面図中、第3層は釜屋を構築した黒色土A層である。黒色土A層間には最大で厚さ50cmの砂A層が入っている。この層を境に竈はA・B号に分けられる。

ピットは12か所である。P5は深さ25cmとやや浅いが、その他は40～70cmである。P1～P7はA号竈、P8～P12はB号竈の作業時のピットである。その中でも、P1～P4とP8～P10は作業時の上屋を支える柱穴と考えられる。そ

の他は補助的な柱穴と考えられるが、詳細は不明である。

屋内鹹水槽（第82・83図）は釜屋内黒色土面の標高5.8mから第87・89～91号鹹水槽、さらに標高5.4mから第105・112号鹹水槽が検出された。第95号鹹水槽は第87号鹹水槽の下層から検出された。

覆土は砂A層を主体とした自然堆積の層で、粘土や黒色土などの鹹水槽の構築土も混入している。第3・7層は黒色土A層と粘土層で、鹹水槽を構築した層である。

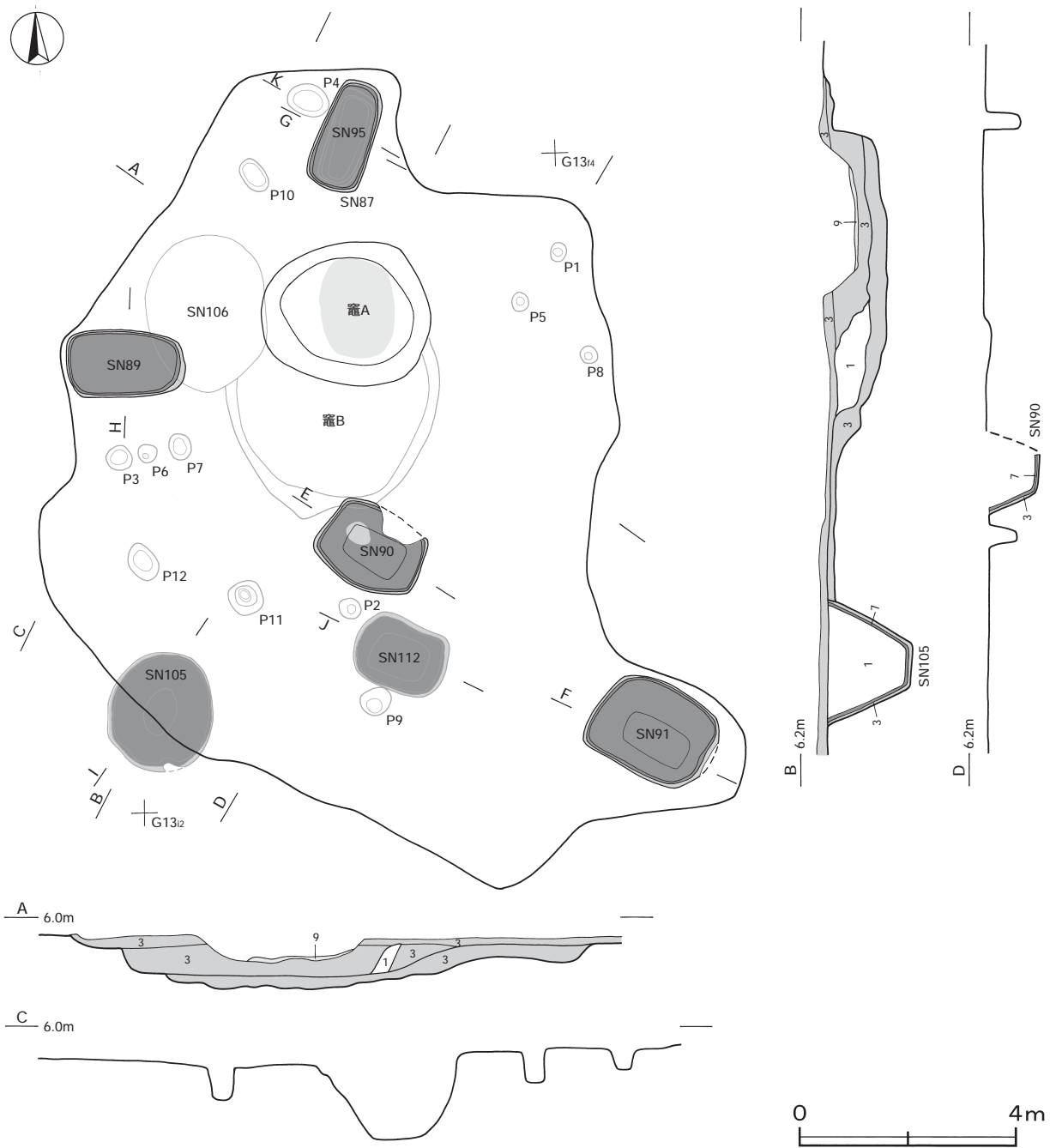
屋外鹹水槽（第84図）製塩跡内の北西部の標高6.5mから第88号鹹水槽、さらにその下層の標高5.2mから第108号鹹水槽が検出された。

第88号鹹水槽中の第5層は黒色土Aを主体とした層で、近辺に位置する他鹹水槽の崩落土が堆積した可能性が高い。第3・7層は黒色土A層と粘土層で鹹水槽を構築した層である。

遺物出土状況 金属製品1点（古銭）が第105号鹹水槽から出土している。

所見 竈の検出状況から、黒色土A層間の砂A層を境に下層が第一次作業面、上層が最終作業面と考えられる。最終作業は第一次作業が打ち切られた後、しばらく期間が経ってから行われたと考えられる。

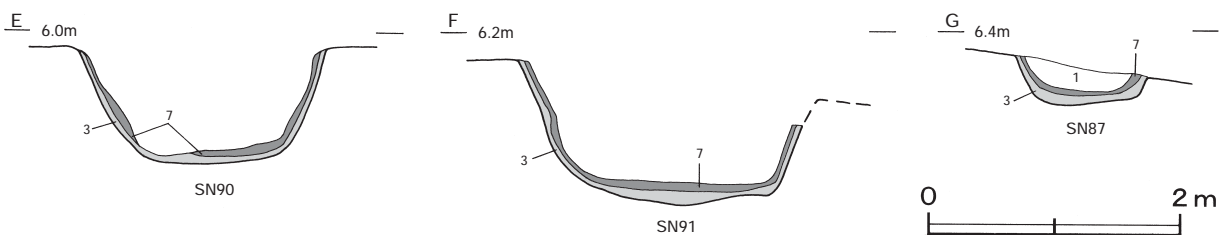
屋内鹹水槽は7基検出されており、検出状況から第87・89～91号鹹水槽が最終作業、第95・105・112号鹹水槽が第一次作業に伴うと考えられる。なお、第90号鹹水槽の西壁は火熱で赤変硬化しており、A号竈が機能を失った後、竈として一時転用された可能性がある。



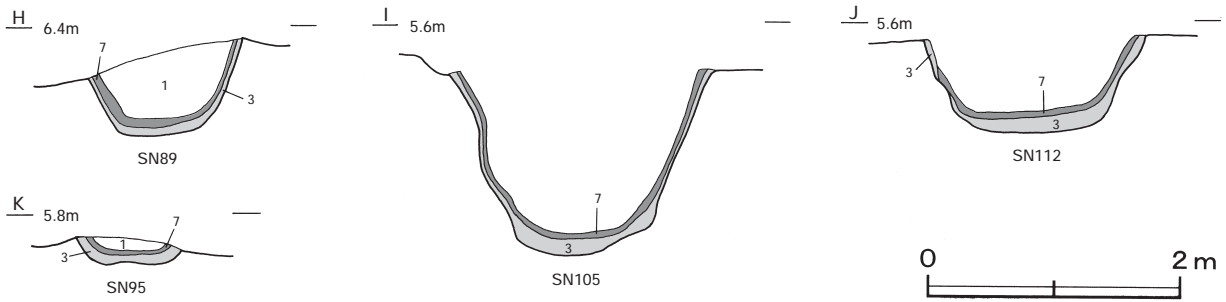
第81図 第14号製塩跡実測図

屋外鹹水槽は2基検出されている。検出状況から第88号鹹水槽が最終操業，第108号鹹水槽が第一次操業に伴うものと考えられる。

時期は，出土遺物もなく明確にすることができない。



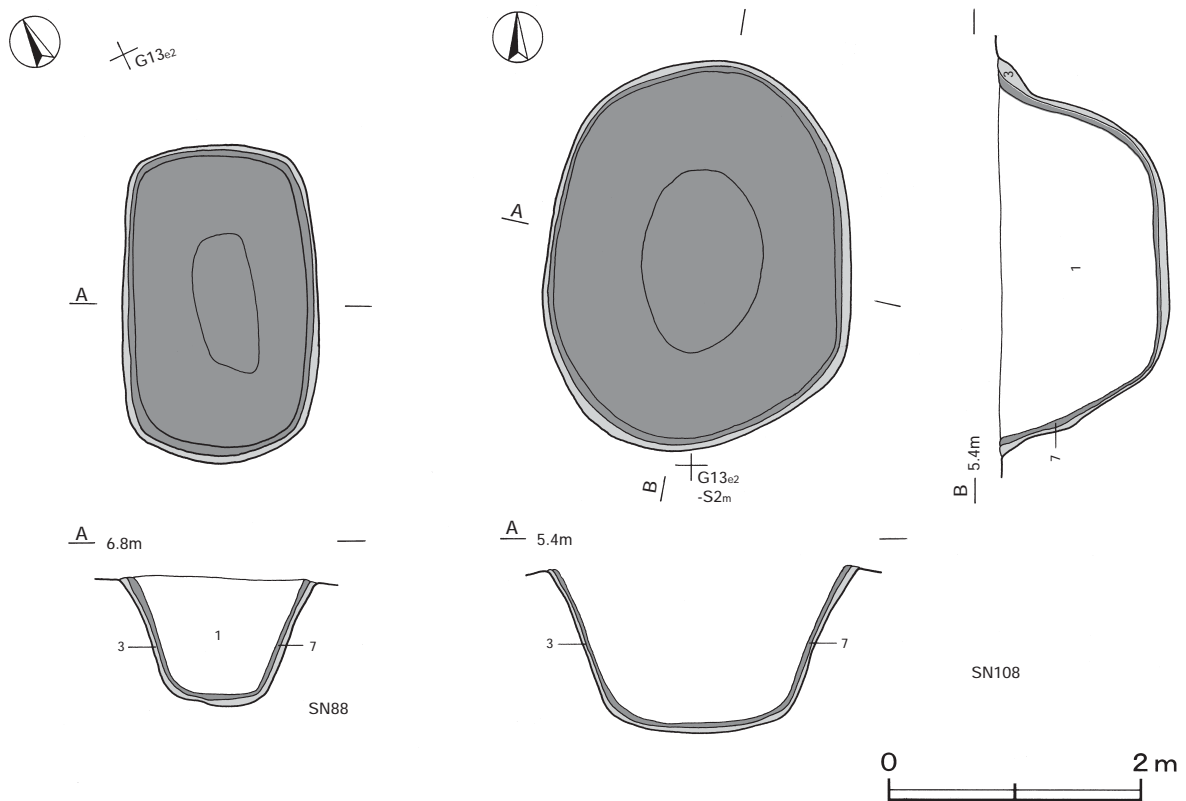
第82図 第14号製塩跡屋内鹹水槽土層図（1）



第83図 第14号製塩跡屋内鹹水槽土層図(2)

第14号製塩跡屋内鹹水槽一覽表

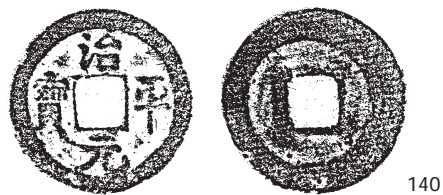
遺構番号	位置	長軸(径)方向	規模(m)			形状	黒色土厚(cm)	粘土厚(cm)	壁面	床面	出土遺物	備考
			長軸(径)	短軸(径)	深さ							
87	G13e3	N-20° -E	2.1	1.0	0.2	長方形	2~10	2~8	外傾	平坦	—	
89	G13f1	N-88° -W	2.2	1.2	0.5	長方形	1~8	2~10	緩斜	平坦	—	
90	G13g3	N-60° -W	2.0	1.5	0.8	長方形	1~8	2~6	緩斜	平坦	—	
91	G13h4	N-59° -W	[2.3]	1.6	0.9	長方形	4~12	2~6	緩斜	平坦	—	
95	G13e3	N-20° -E	1.8	0.7	0.1	長方形	4~10	2~8	緩斜	平坦	—	
105	G13h2	N-15° -E	2.2	2.0	1.3	楕円形	2~14	1~4	外傾	平坦	古銭	
112	G13h3	N-63° -W	1.7	1.3	0.6	長方形	1~12	1~4	緩斜	平坦	—	



第84図 第14号製塩跡屋外水槽実測図

第14号製塩跡屋外鹹水槽一覽表

遺構番号	位置	長軸(径)方向	規模(m)			形状	黒色土厚(cm)	粘土厚(cm)	壁面	床面	出土遺物	備考
			長軸(径)	短軸(径)	深さ							
88	G13e1	N-30° -E	2.5	1.5	0.9	長方形	4	4	外傾	平坦	—	
108	G13d2	N-0°	3.1	2.4	1.2	楕円形	4	4	緩斜	平坦	—	



第85図 第14号製塩跡出土遺物実測図

第14号製塩跡出土遺物観察表 (第85図)

番号	銭名	径	孔径	厚さ	重さ	初鑄年	材質	特徴	出土位置	備考
140	治平元寶	2.48	0.62	0.11	3.72	1064	銅	真書	SN105内	

第15号製塩跡 (第86~89図)

位置 調査区中央部F13h6区の標高7mの砂丘上に位置している。第18号製塩跡の北側に確認されている。

重複関係 釜屋南部を第18号製塩跡の釜屋、北部を第18号製塩跡の第125~127号鹹水槽に掘り込まれている。

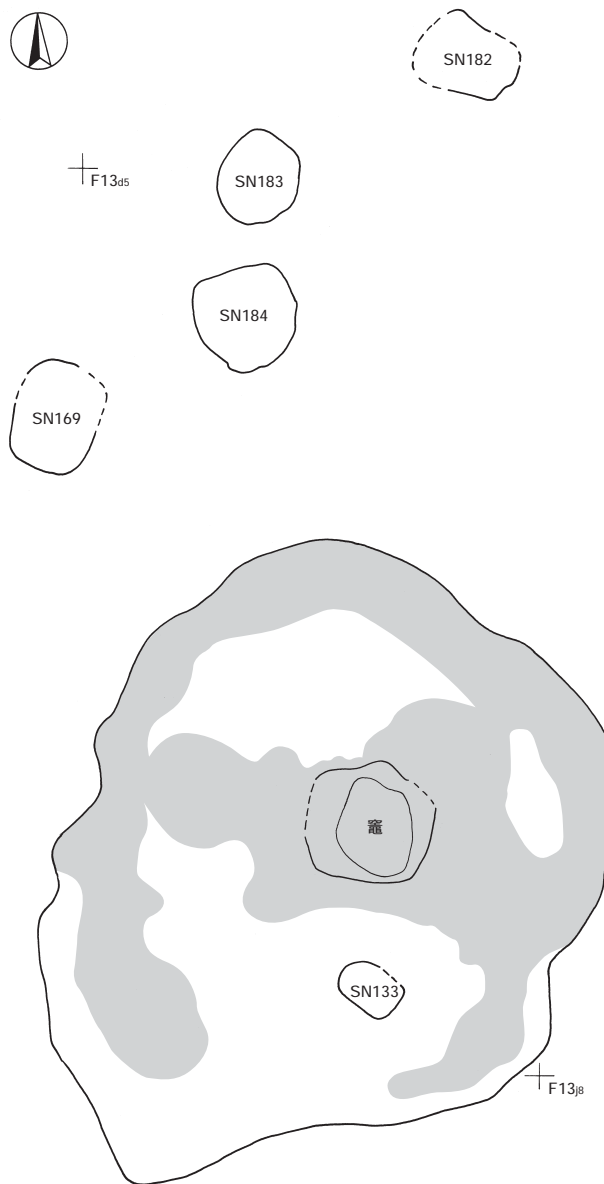
確認状況 第1段階 表砂をおよそ9.5m除去した標高7mの位置から、釜屋の黒色土の範囲が確認された。

第2段階 土層から釜屋と竈の範囲を確認した。

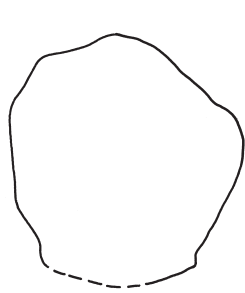
第3段階 釜屋内を精査すると、南東部の黒色土面から第133号鹹水槽、西部の黒色土面上から焼砂が確認された。第126号鹹水槽は竈を掘り込んでおり、本跡には伴わないと判断した。

規模と構造 製塩跡の範囲は南北軸31m、東西軸16mである。製塩跡は釜屋、屋外鹹水槽(第169・182~184A・B号鹹水槽)で、釜屋は竈、屋内鹹水槽(第133号鹹水槽)で構成されている。屋内鹹水槽は釜屋内の南部、屋外鹹水槽は製塩跡内の北部を中心に位置している。

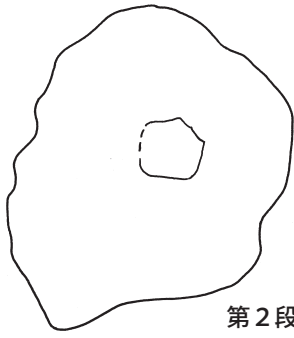
釜屋 4区SH-12(第87図) 長径約17.5m、短径約14.5mの不定形である。釜屋は厚さ5~40cmの黒色土を貼り付けて構築されている。また、黒色土は竈を中心に東西に広がり、全体的に黒色土A・Bを用いた盛土により構築されている。



第86図 第15号製塩区域



第1段階



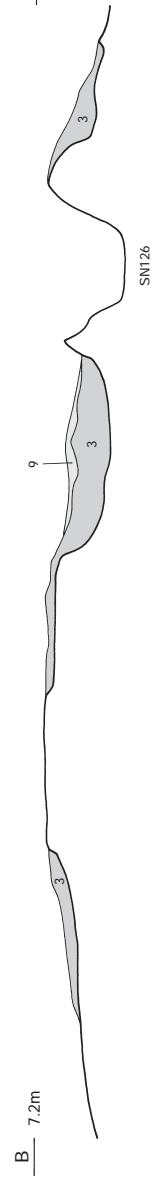
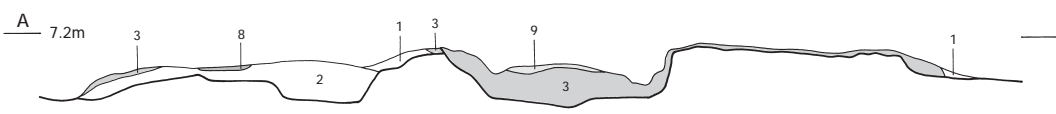
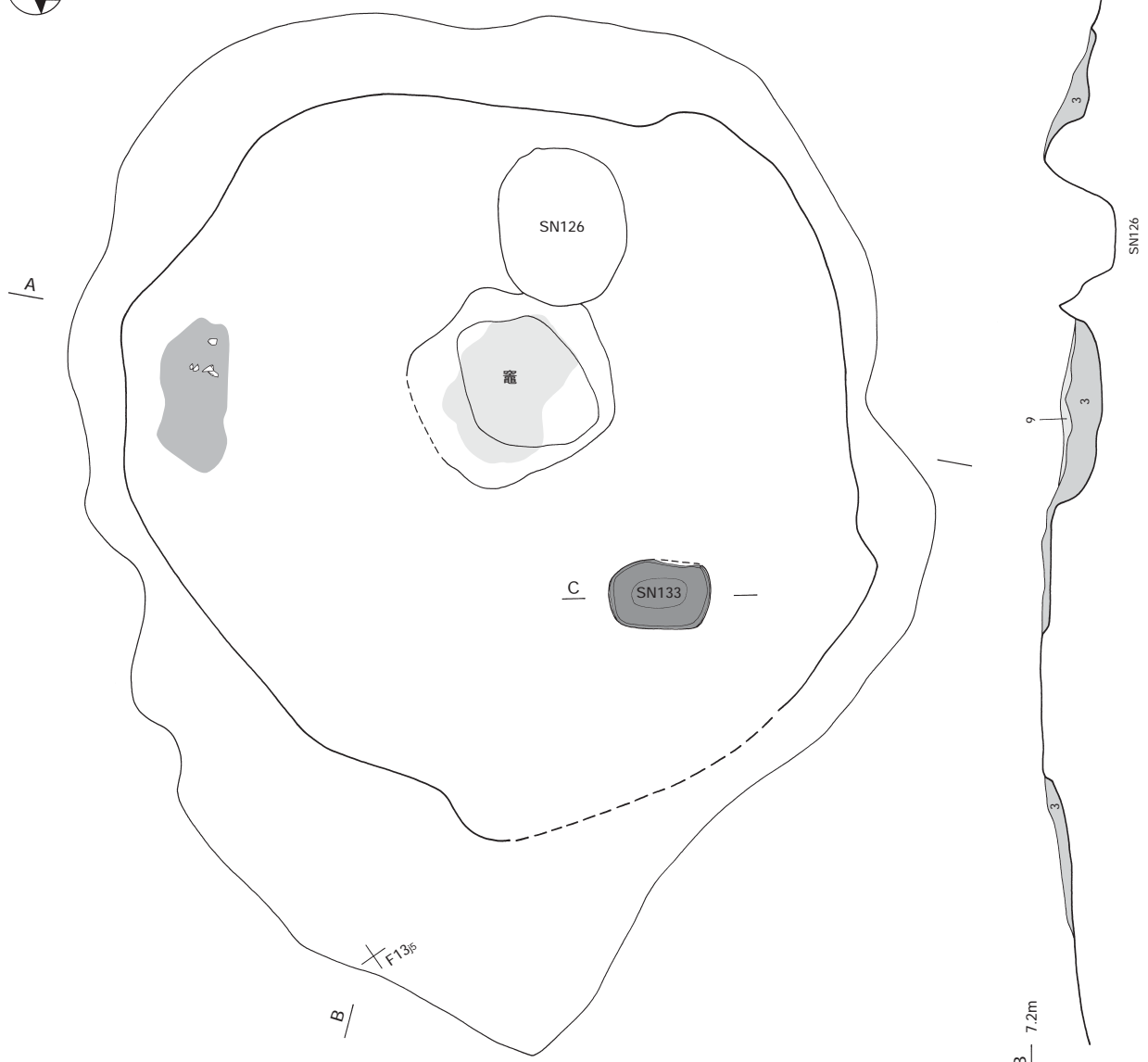
第2段階



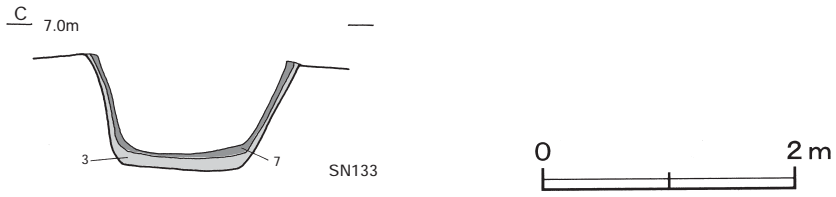
第3段階



F13⁹⁰



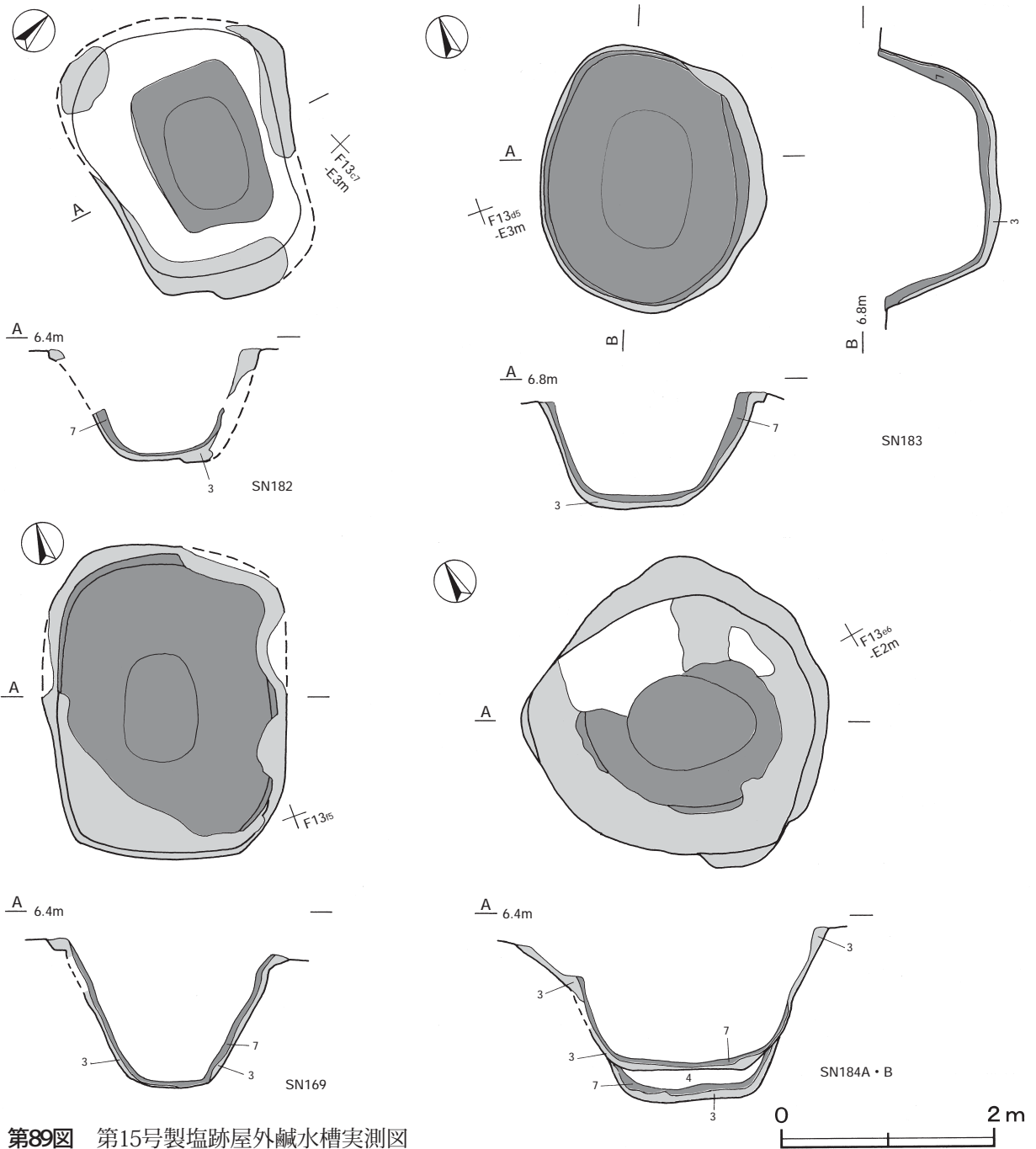
第87図 第15号製塩跡実測図



第88図 第15号製塩跡屋内鹹水槽土層図

第15号製塩跡屋内鹹水槽一覽表

遺構番号	位置	長軸(径)方向	規模(m)			形状	黒色土厚(cm)	粘土厚(cm)	壁面	床面	出土遺物	備考
			長軸(径)	短軸(径)	深さ							
133	F13i6	N-54° -W	1.7	1.2	0.7	隅丸長方形	1~11	1~7	外傾	平坦	-	



第89図 第15号製塩跡屋外鹹水槽実測図

第15号製塩跡屋外鹹水槽一覧表

遺構 番号	位 置	長軸 (径) 方向	規模 (m)			形 状	黒色土厚 (cm)	粘土厚 (cm)	壁面	床面	出土遺物	備 考
			長軸 (径)	短軸 (径)	深さ							
169	F13e4	N-22° -E	3.0	2.2	1.4	隅丸長方形	2~10	4~6	緩傾	平坦	—	
182	F13c7	N-15° -W	(2.6)	1.9	1.0	[不定形]	2~17	1~7	緩傾	皿状	皿	
183	F13d6	N-23° -E	2.5	2.1	0.9	楕 円 形	2~11	2~13	外傾	平坦	—	
184A	F13d6	N-58° -W	2.9	2.8	1.4	不 定 形	2~12	1~11	外傾	平坦	—	
184B	F13d6	N-58° -W	—	—	—	—	4~8	2~10	外傾	平坦	—	

竈は径3 mの不定形で、釜屋内の中心部に位置している。作業面からの深さは30~50cmで、底面は平坦である。黒色土の厚さは30~60cmである。底面には灰層が確認されている。

土層断面図中、第3層は釜屋を構築した黒色土A層である。西部の下層には黒色土B層が入っているが、大部分は白砂層である。

第133号鹹水槽（第88図）は、釜屋内の黒色土面とほぼ同じ標高6.9mから検出された。

第3・7層は黒色土A層と粘土層で、鹹水槽を構築した層である。黒色土A層は厚さ8 cm、粘土層は厚さ4 cmである。

屋外鹹水槽（第89図） 釜屋から北へ約8 mの標高6.6mから第183号鹹水槽、さらに黒色土を20~30cm除去すると第169・182・184A・B号鹹水槽が検出された。

第3・7層は黒色土A層と粘土層で、鹹水槽を構築した層である。第184A・B号鹹水槽は底面に黒色土A層と粘土層が2層確認できることから、造り替えている。

遺物出土状況 土師質土器片1点（皿）が第182号鹹水槽から出土しただけである。

所見 釜屋の土層断面や釜屋の検出状況から、黒色土の範囲を釜屋の範囲と捉えた。竈を中心に黒色土が確認されているが、これは第18号製塩跡に伴う屋外鹹水槽を構築した時のものである。

屋内鹹水槽は1基が検出されており、造り替えや補修痕は見当たらない。

屋外鹹水槽は4基が検出され、出土状況から最終の屋外鹹水槽を第183号鹹水槽、前段階を第169・182・184A・B号鹹水槽とした。

台地上に構築された釜屋で、釜屋内は一部に黒色土を用いて構築されている。南に位置する第18号製塩跡の屋外鹹水槽に竈が掘り込まれていることから、第18号製塩跡より以前に構築されていたものと考えられる。時期は、出土遺物が少なく不明である。

第16号製塩跡（第90~93図）

位置 調査区中央部 G13c6区の標高6.9mの砂丘上に位置している。第18号製塩跡の南に確認されている。

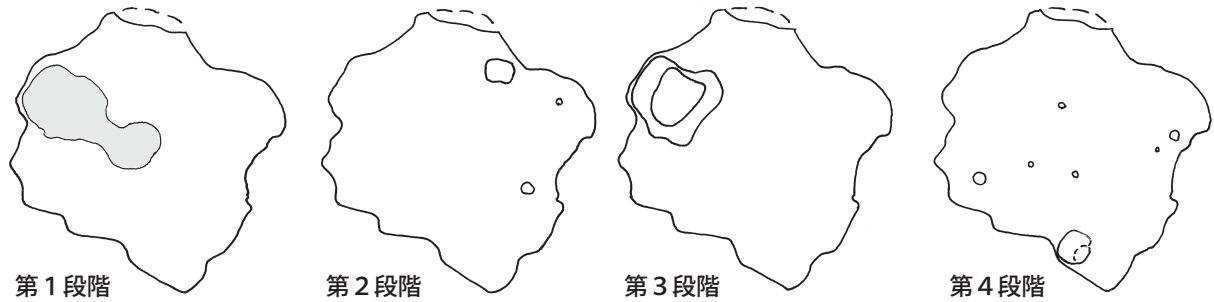
重複関係 第18号製塩跡の釜屋に掘り込まれている。

確認状況 第1段階 表砂をおよそ7.5m除去した標高7 mの位置から、釜屋と灰の範囲が確認された。

第2段階 釜屋内の砂を10cm除去すると北部の黒色土面から、第131号鹹水槽、P 1・P 2が確認された。

第3段階 土層から灰状の範囲の下層で竈を確認し、灰を除去し竈を検出する。

第4段階 釜屋内の黒色土を10cm除去すると、南部から第74・136号鹹水槽、P 3~P 8が検出された。



規模と構造 製塩跡の範囲は南北軸16.5m，東西軸13mである。製塩跡は釜屋，屋外鹹水槽（第75号鹹水槽）で，釜屋は竈，屋内鹹水槽（第74・131・136号鹹水槽）で構成されている。屋内鹹水槽は釜屋内の北部と南部，屋外鹹水槽は製塩跡内の南西部に位置している。

釜屋 4区 SH-13（第91図） 南北軸11.7m，東西軸10.4mの長方形である。釜屋は，最大で約100cmの黒色土を貼り付けて構築されている。東部に向かって全体的に傾斜しており，西部の竈上層面からは灰状の層が確認された。

竈は釜屋の西部に位置し，一辺が約3.6mの不定形である。作業面からの深さは50cmで，底面は皿状を呈している。黒色土の厚さは20～50cmで，竈上面には厚さ50cmの灰が堆積している。

土層断面図中，第3層は釜屋を構築した黒色土A層，第9層は灰層である。

ピットは8か所である。P 3・P 4が深さ80cmと90cmでやや深い，その後は50～60cmである。P 6～P 8は釜屋中央部の楕円形の落ち込みを囲む様に配する。その他のピットは規則的な配列が見られない。

屋内鹹水槽（第92図）は釜屋内の黒色土面とほぼ同じ標高6.8mから第131号鹹水槽，さらに黒色土を10cm除去すると第74号鹹水槽が検出された。第136号鹹水槽は第74号鹹水槽の下層より検出された。

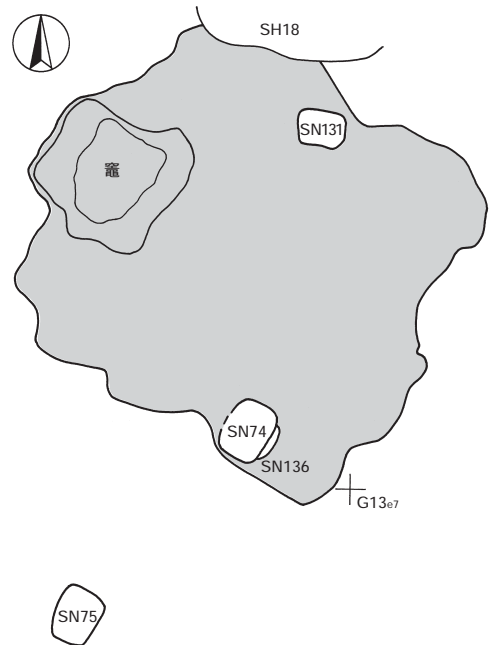
第131号鹹水槽の覆土は，砂A層を主体とした自然堆積の層である。第74号鹹水槽も砂A層であるが，炭化材を含む黒色土が中間に入っている。

屋外鹹水槽（第93図） 釜屋から南西へ5mの標高6.6mから，第75号鹹水槽の底部だけが検出された。覆土は砂A層を主体とした自然堆積の層である。

遺物出土状況 土師質土器片3点（内耳鍋2，鉢1），陶器片2点（甕），不明金属製品1点が釜屋内の覆土中から出土している。いずれも細片で，図示できるものはない。

所見 土層断面や検出状況から，東部はピットの外側，西部は竈までの黒色土の範囲を釜屋として捉えた。竈が釜屋の西部に構築されていることは異例であり，広範囲に堆積する竈上層の灰も廃絶と同時に残ったものか，運び込まれてきたものか不明である。

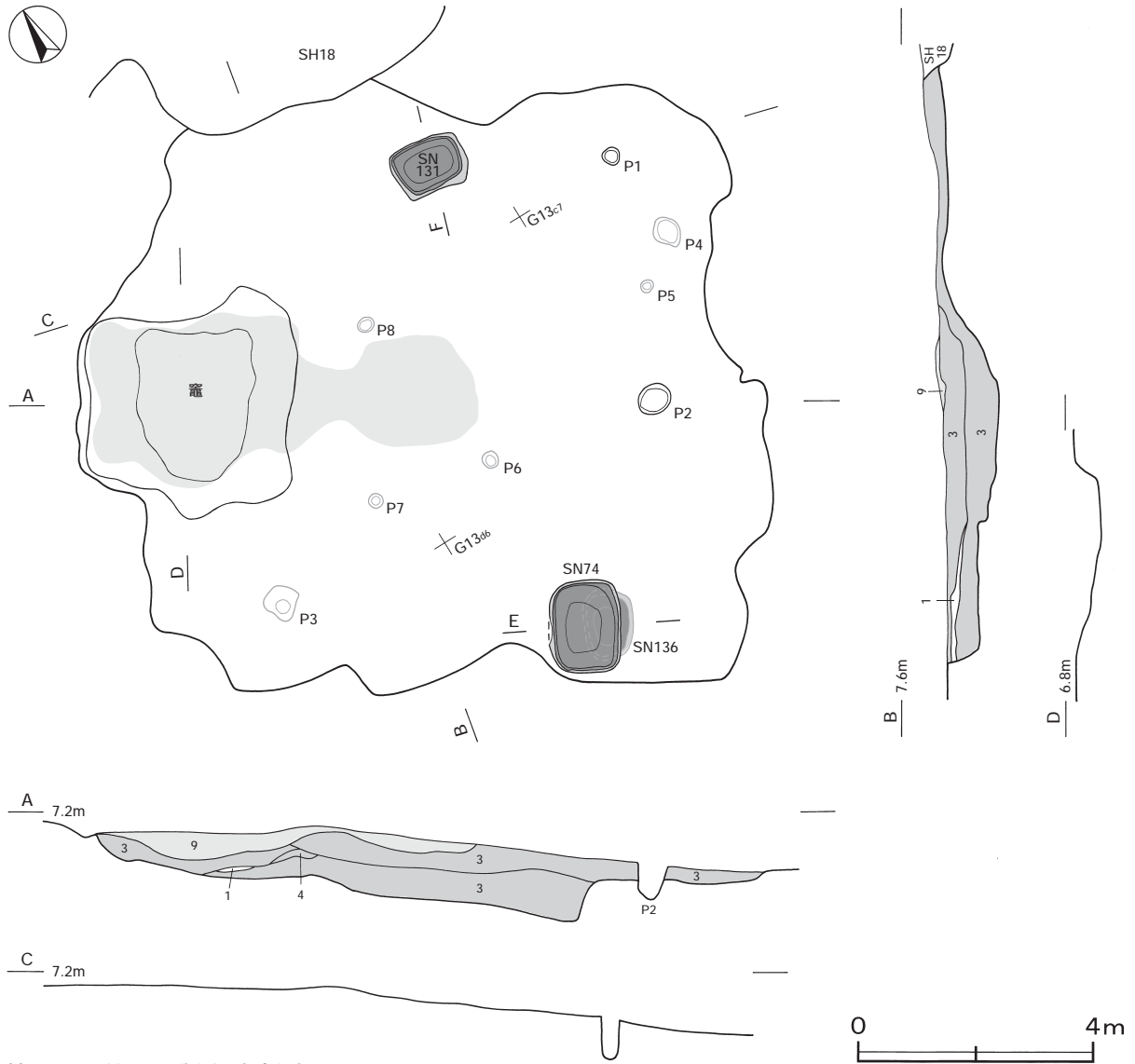
屋内鹹水槽は3基で，検出状況から第131号鹹水槽は最終操業，第74号鹹水槽は埋め戻されていることから第一次操業に伴うものと考えられる。なお，第74号鹹水槽は下層に位置する第136号鹹水槽を造り替えたものである。



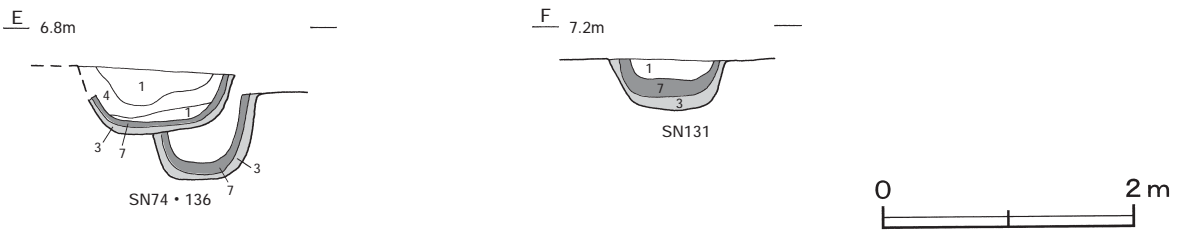
第90図 第16号製塩区域

屋外鹹水槽は1基で、第75号鹹水槽は底部だけの検出状況から考えると、規模はさらに大きいものと想定される。

第18号製塩跡の釜屋に掘り込まれていることから、第18号製塩跡より以前に構築されていたと考えられる。時期は、出土遺物が少ないことから不明である。



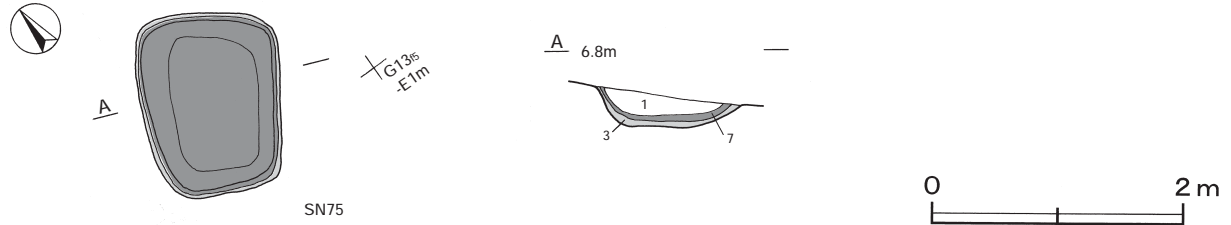
第91図 第16号製塩跡実測図



第92図 第16号製塩跡屋内鹹水槽土層図

第16号製塩跡屋内鹹水槽一覧表

遺構番号	位置	長軸(径)方向	規模(m)			形状	黒色土厚(cm)	粘土厚(cm)	壁面	床面	出土遺物	備考
			長軸(径)	短軸(径)	深さ							
74	G13d6	N-28° -E	1.6	1.2	0.4	隅丸長方形	3~6	2~6	外傾	平坦	—	
131	G13b6	N-80° -W	1.2	0.9	0.1	隅丸長方形	4~10	4~12	外傾	平坦	—	
136	G13d6	N-28° -E	(1.1)	(0.7)	0.5	[隅丸長方形]	4~6	5~10	外傾	平坦	—	



第93図 第16号製塩跡屋外鹹水槽実測図

第16号製塩跡屋外鹹水槽一覧表

遺構番号	位置	長軸(径)方向	規模(m)			形状	黒色土厚(cm)	粘土厚(cm)	壁面	床面	出土遺物	備考
			長軸(径)	短軸(径)	深さ							
75	G13e5	N-30° -E	1.4	1.1	0.1	長方形	2~5	2~5	緩斜	平坦	—	

第17号製塩跡 (第94~98図)

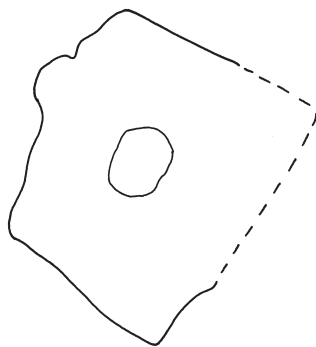
位置 調査区中央部 F13f3区の標高7~7.5mの砂丘上に位置している。上層には第9・13号製塩跡が確認されている。

重複関係 上層には第9・13号製塩跡が構築されている。

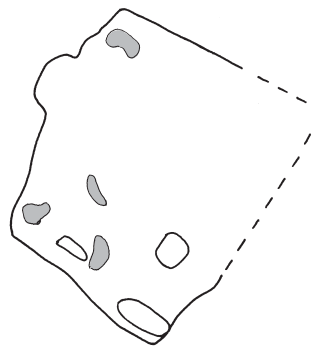
確認状況 第1段階 表砂をおよそ8.5m除去した標高7.5mの位置から、釜屋と竈が確認された。

第2段階 釜屋内の砂を50cm除去すると、南部の黒色土面から第144~146号鹹水槽、西部の黒色土面から焼砂が検出された。

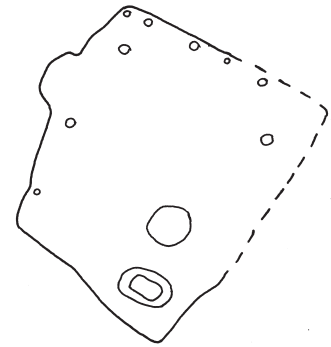
第3段階 釜屋内の黒色土面を約10cm除去すると、第147・150・152号鹹水槽、P1~P9が検出された。



第1段階



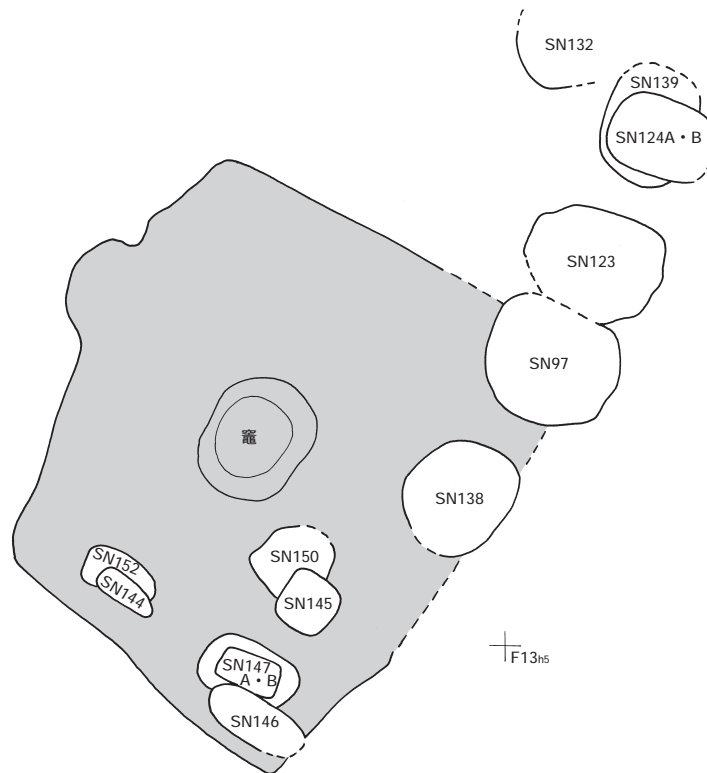
第2段階



第3段階



+F13a1



第94図 第17号製塩区域

規模と構造 製塩跡の範囲は南北軸20m，東西軸19mである。第17号製塩跡は釜屋，屋外鹹水槽（第97・123・124A・B・132・138・139号鹹水槽）で，釜屋は竈，屋内鹹水槽（第144～147A・B・150・152号鹹水槽）で構成されている。屋内鹹水槽は釜屋内の南東部，屋外鹹水槽は製塩跡内の北東部に位置している。

釜屋 4区 SH-14(第95図) 長軸約13.6m，短軸約12.8mの長方形で，残存している西壁から主軸方向はN-28°-Eと考えられる。釜屋は，厚さ30～50cmの黒色土を貼り付けて構築されている。北東部は黒色土の残存状況が悪く，西壁の中央には約1mの張り出し部をもっている。全体的に中心に向かって緩やかに傾斜している。

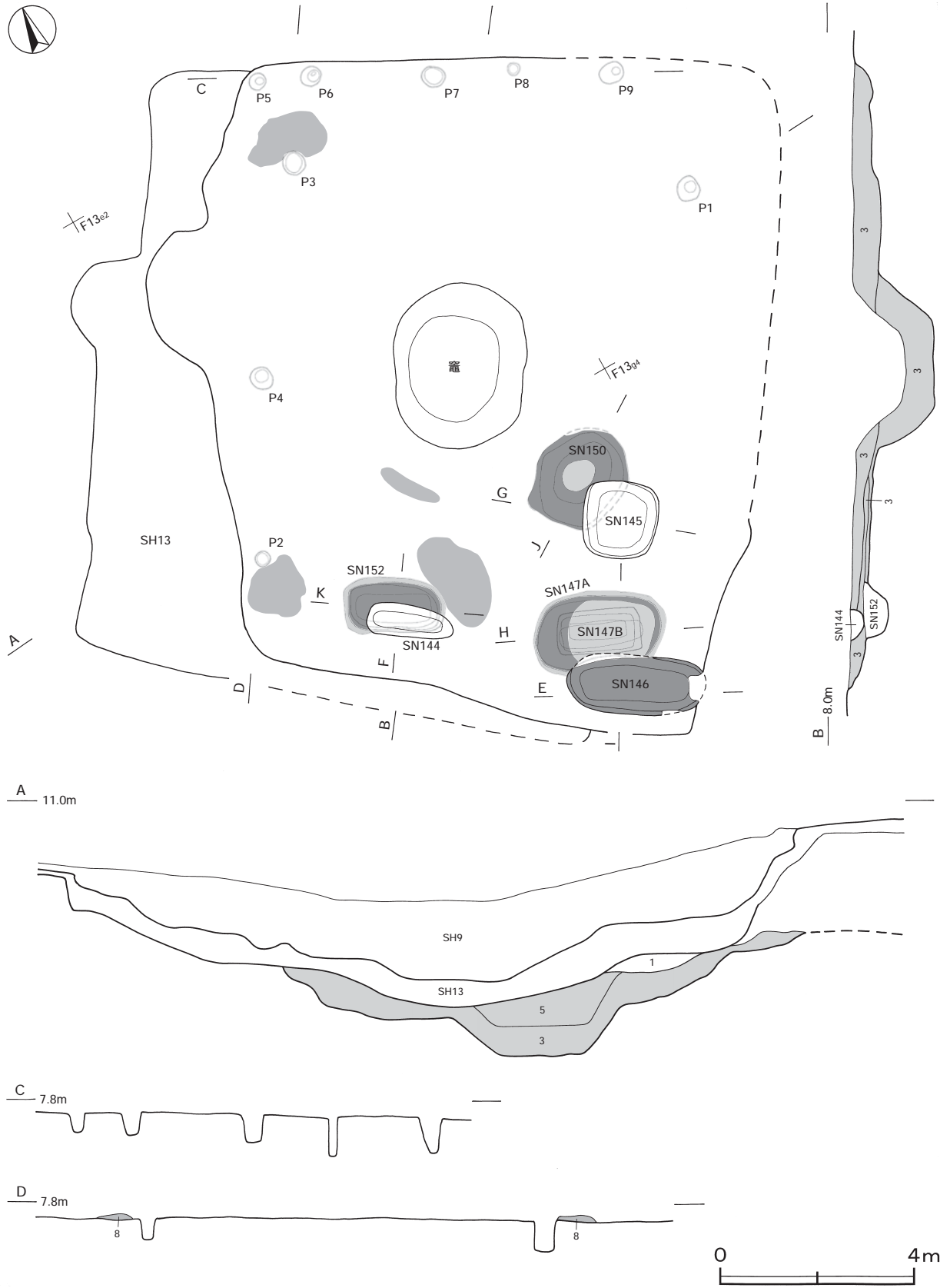
竈は長径3.4m，短径2.7mの楕円形で，釜屋中心部に位置している。残存している部分での深さは約100cmで，底面は平坦である。黒色土の厚さは60cmである。

土層断面図中，第3層は釜屋を構築した黒色土A層である。竈内には第13号製塩跡の釜屋を構築するために埋め戻された黒色土C層が入っている。なお，上層に2基の釜屋（第9・13号釜屋）が存在している。

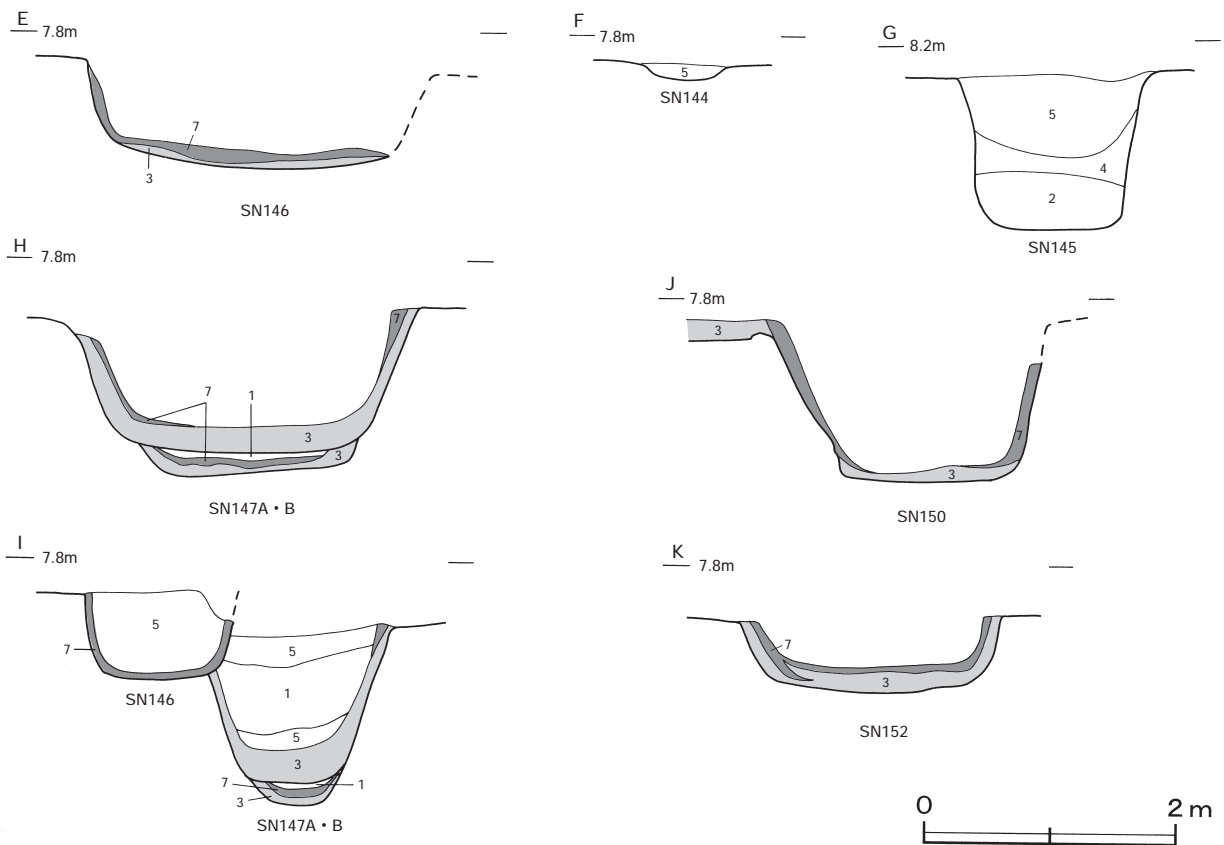
ピットは9か所である。P3は深さ127cmで，その他は40～84cmである。P1～P3は釜屋の上屋を支える柱穴，P5～P9は北壁際から検出されていることから，壁材などを支えた柱穴である可能性が高い。

屋内鹹水槽（第96図）は釜屋内の黒色土面の標高7.5mから第144～146・150号鹹水槽，さらに標高7.4mから第147A・B・152号鹹水槽が検出された。

第145・146号鹹水槽中の第3・5層は黒色土を主体とした層で，第13号製塩所を構築するために埋め戻された層である。



第95図 第17号製塩跡実測図



第96図 第17号製塩跡屋内鹹水槽土層図

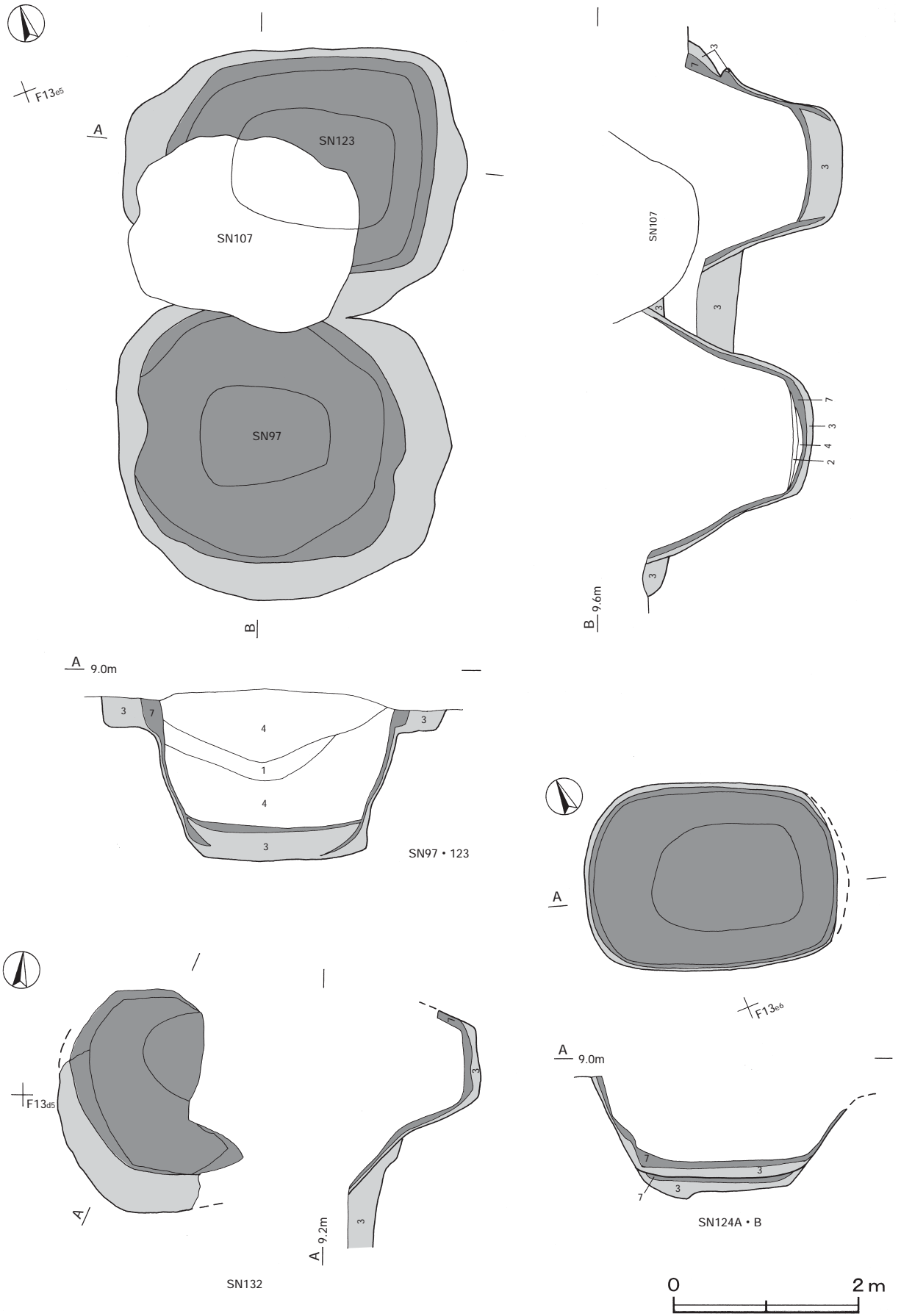
第17号製塩跡屋内鹹水槽一覧表

遺構 番号	位 置	長軸(径)方向	規模 (m)			形 状	黒色土厚 (cm)	粘土厚 (cm)	壁面	床面	出土遺物	備 考
			長軸(径)	短軸(径)	深さ							
144	F13g2	N-55° -W	1.8	0.7	0.2	隅丸長方形	不明	不明	—	皿状	—	
145	F13g3	N-32° -W	1.6	1.5	1.2	方 形	不明	不明	不明	不明	—	
146	F13h3	N-58° -E	(2.5)	1.2	0.7	[隅丸長方形]	2~6	2~10	外傾	平坦	—	
147A	F13h3	N-65° -E	2.7	1.6	0.9	隅丸長方形	6~22	2~10	外傾	平坦	炭化材	
147B	F13h3	N-64° -E	1.7	0.9	1.2	長 方 形	2~10	5~7	緩斜	平坦	炭化材	
150	F13g3	N-59° -W	2.1	1.7	1.1	不 定 形	4~12	3~10	外傾	平坦	—	
152	F13g2	N-62° -W	2.0	1.1	0.4	隅丸長方形	6~17	4~8	緩斜	平坦	—	

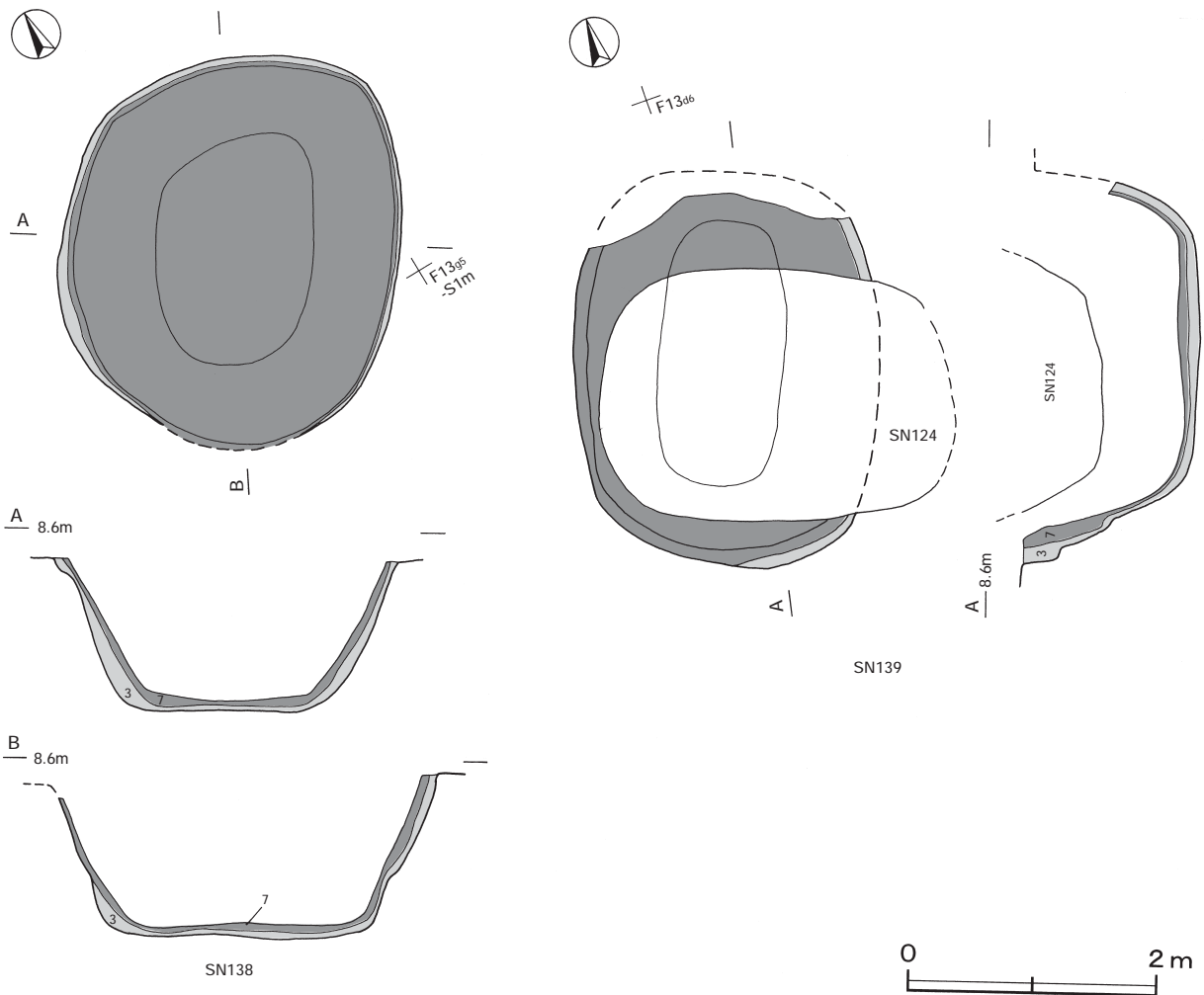
屋外鹹水槽（第97・98図） 製塩跡内の北東部の標高9.1mから第97号鹹水槽，標高8.9mから第123・124A・124B・132号鹹水槽，標高8.5mから第138・139号鹹水槽が検出された。第132号鹹水槽の残存状況は悪い。

第97・124A・B・132・138号鹹水槽内は砂A層を主体とした自然堆積の層で，短い期間で埋没したものと考えられる。第123・139号鹹水槽には，それぞれ上層に構築された鹹水槽を構築する際に埋め戻された黒色土層が入っている。

遺物出土状況 土師質土器片1点（内耳鍋），瓦片1点（軒丸瓦）が釜屋から出土している。出土遺物は細片のため，図示できるものはない。第147号鹹水槽から炭化材が出土しているが，釜屋の構築材か竈内で使用されたものが流れ込んだものである。



第97図 第17号製塩跡屋外鹹水槽実測図（1）



第98図 第17号製塩跡屋外鹹水槽実測図（2）

第17号製塩跡屋外鹹水槽一覧表

遺構 番号	位 置	長軸（径）方向	規模（m）			形 状	黒色土厚 （cm）	粘土厚 （cm）	壁面	床面	出土遺物	備 考
			長軸（径）	短軸（径）	深さ							
97	F13f5	N-35° -W	3.8	3.1	1.7	不 定 形	2~22	2~8	外傾	平坦	—	
123	F13e5	N-67° -W	3.7	3.0	1.2	不 定 形	1~33	2~16	外傾	平坦	—	
124A	F13d6	N-69° -W	2.7	2.0	0.8	[隅丸長方形]	1~11	2~16	緩斜	平坦	—	
124B	F13d6	N-69° -W	2.7	2.0	1.0	[隅丸長方形]	5~18	2~5	緩斜	平坦	—	
132	F13d5	N-89° -W	(1.4)	(2.4)	1.2	[長 方 形]	2~32	2~10	外傾	平坦	—	
138	F13g4	N-36° -E	3.1	2.7	1.1	楕 円 形	2~15	2~10	緩斜	平坦	—	
139	F13d5	N-21° -E	(3.0)	(2.4)	1.4	[隅丸長方形]	2~12	2~15	緩斜	平坦	—	

所見 検出状況から、釜屋は大規模に操業していたと考えられる。

屋内鹹水槽は7基検出され、出土状況から第144・146号鹹水槽が最終操業、第147A・B・150・152号鹹水槽が第一次操業に伴うもので、第152号から第144号、第150号から第145号、第147A・B号から第146号鹹水槽へそれぞれ造り替えを行っている。

屋外鹹水槽は6基検出され、出土状況から第97・124A・B・132号鹹水槽が最終操業、第123・138・139号鹹水槽が第一次操業に伴う鹹水槽と考えられる。第97・123号鹹水槽は近接しすぎていることから、第123号鹹水槽の廃絶後まもなく第97号鹹水槽を構築したものと考えられる。第123・124号鹹水槽の底面は粘土・黒色土層

を貼り直しており、補修をしながら長期間機能していたものと考えられる。

土層断面から、廃絶後まもなく第13号製塩跡が構築されたものと考えられる。鹹水槽の配置は変化するものの、釜屋はそれほど範囲を変えずに続けて構築をしていたことを考えると、三つの製塩跡（第9・13・17号製塩跡）は同一操業者が営んでいた可能性も考えられる。

第18号製塩跡（第99～102図）

位置 調査区中央部 G13a6区の標高7.6mの砂丘上に位置している。北に第15号製塩跡，南に第16号製塩跡が確認されている。

重複関係 第15・16号製塩跡の釜屋を掘り込んでいる。

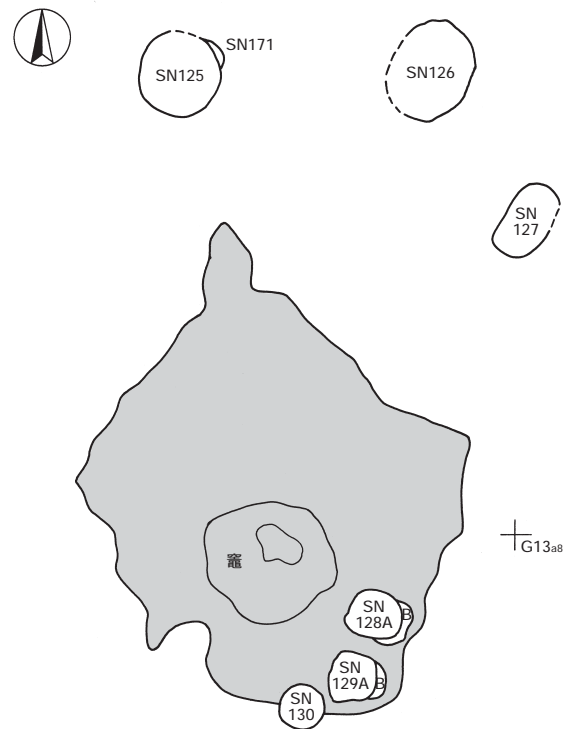
確認状況 第1段階 表砂をおよそ7m除去した標高7.6mの位置から，釜屋と竈が確認された。

第2段階 竈内の砂を除去すると焼土，釜屋内の黒色土を精査すると南東部の黒色土面から第128～130号鹹水槽が検出された。

第3段階 釜屋内の黒色土面を精査すると，P1～P9が検出された。

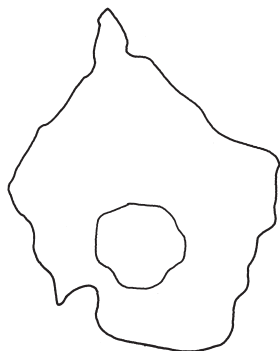
規模と構造 製塩跡の範囲は，南北軸19m，東西軸13mである。製塩跡は釜屋，屋外鹹水槽（第125～127・171号鹹水槽）で，釜屋は竈，屋内鹹水槽（第128～130号鹹水槽）で構成されている。屋内鹹水槽は釜屋内の南東部，屋外鹹水槽は製塩跡内の北部を中心に位置している。

釜屋 4区 SH-15（第100図） 南北軸12.4m，東西軸10.2mの不定形である。釜屋は厚さ10～20cmの黒色土を貼り付けて構築されている。

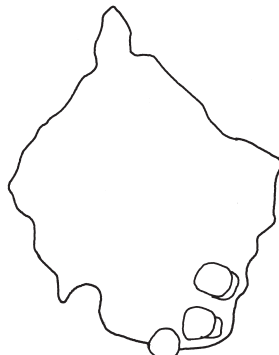


第99図 第18号製塩区域

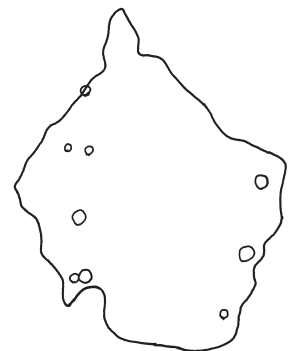
竈は長径3.7m，短径3.3mの楕円形で，作業面からの深さは50cmである。底面は皿状を呈し，黒色土の厚さは20～60cmである。



第1段階



第2段階



第3段階

土層断面図中、第3層は釜屋を構築した黒色土 A 層である。黒色土 A 層間には、最大で厚さ30cmの砂 A 層が入っている。この層を境に竈の造り替えが行われている。

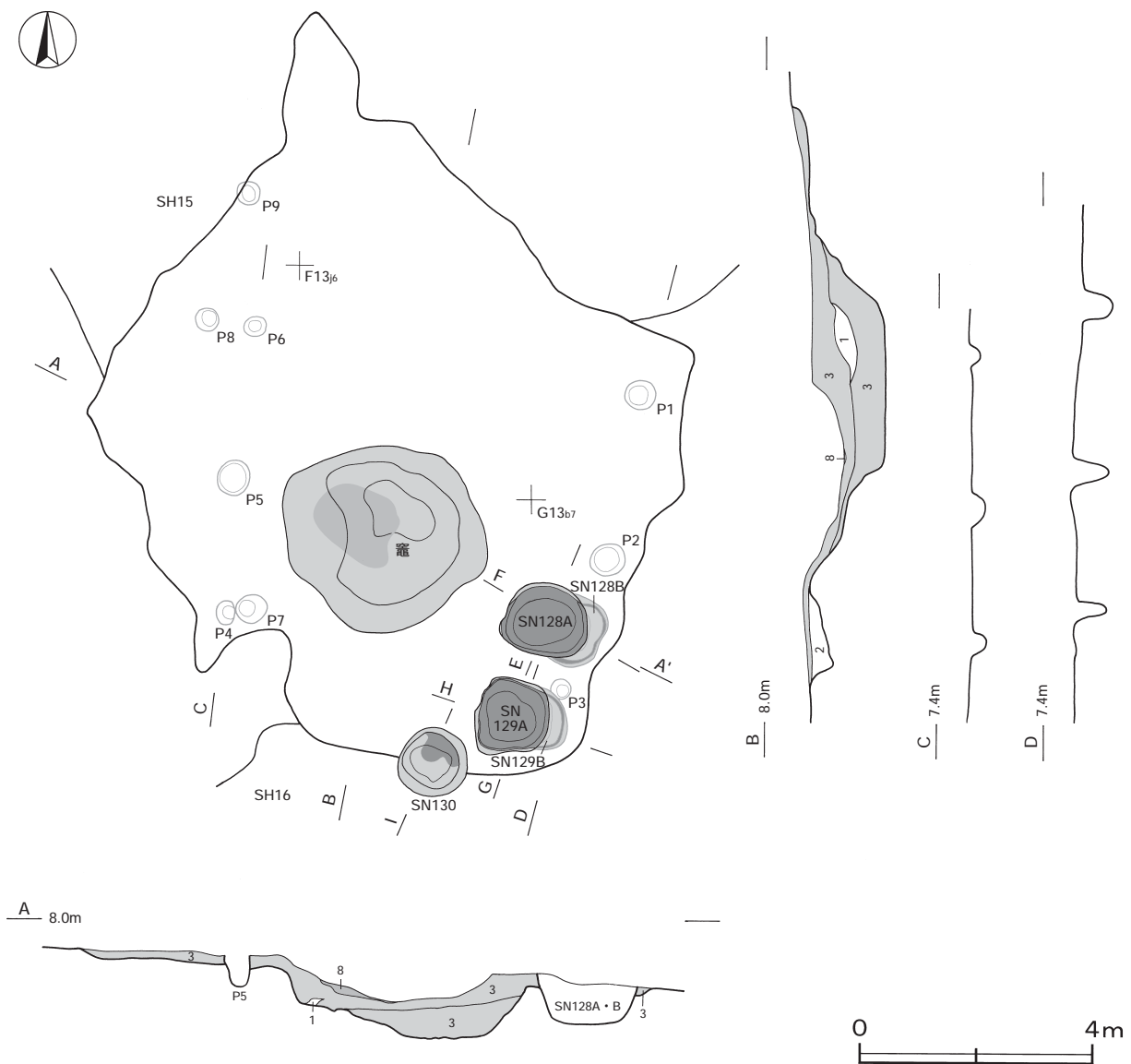
ピットは9か所である。P 5・P 6は深さ25cmと20cmでやや浅いが、その他は50～80cmである。P 1～P 6は、釜屋の上屋を支える柱穴の可能性が高い。P 7～P 9は性格不明である。

屋内鹹水槽(第101図)は標高6.9mの釜屋の黒色土面から第128～130号鹹水槽が検出された。第130号鹹水槽の残存状況は悪く、南部の粘土層は欠落していた。

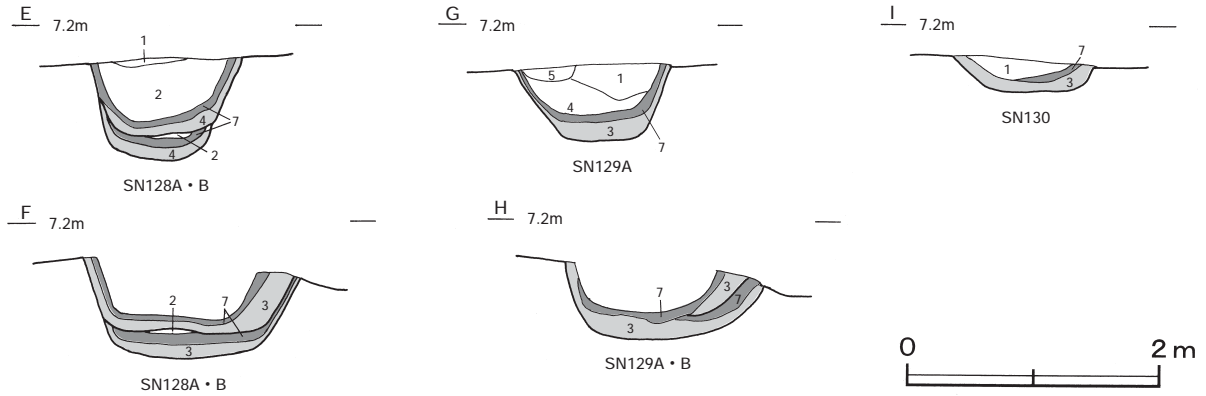
第3・7層は黒色土 A 層と粘土層で、鹹水槽を構築した層である。土層断面から第128・129号鹹水槽は造り替えられていることが読みとれ、新しい方からそれぞれ A・B 号とした。

屋外鹹水槽(第102図) 釜屋の北へ約4mの標高約7mから、第125～127・171号鹹水槽が検出された。

第3・7層は黒色土 A 層と粘土層で、鹹水槽を構築した層である。覆土はすべて白砂 A 層であり、廃絶後に短期間で埋没したものである。第125号鹹水槽の下層には、規模や形状が違った第171号鹹水槽が構築されている。



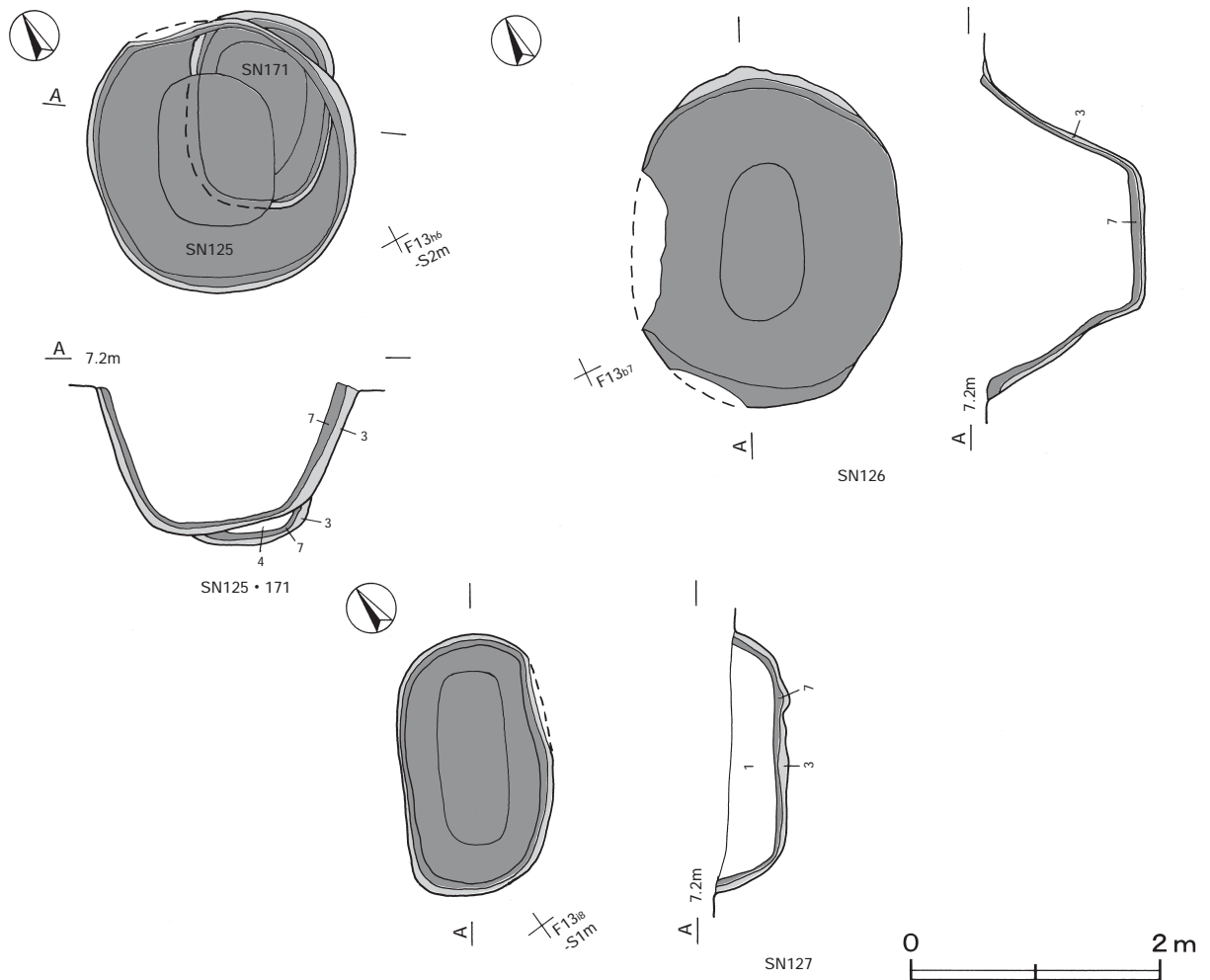
第100図 第18号製塩跡実測図



第101図 第18号製塩跡屋内鹹水槽土層図

第18号製塩跡屋内鹹水槽一覽表

遺構番号	位置	長軸(径)方向	規模(m)			形状	黒色土厚(cm)	粘土厚(cm)	壁面	床面	出土遺物	備考
			長軸(径)	短軸(径)	深さ							
128A	G13a7	N-74°-W	1.4	1.3	0.4	楕円形	1~6	1~4	外傾	平坦	-	
128B	G13a7	N-85°-W	1.2	(0.5)	0.5	不定形	2~9	1~7	外傾	平坦	-	
129A	G13a6	N-0°	1.3	1.3	0.4	不定形	5~17	2~6	外傾	平坦	-	
129B	G13a6	N-0°	1.0	(0.3)	0.3	-	2~22	1~10	外傾	平坦	-	
130	G13b6	N-40°-E	1.2	1.1	0.2	方形	2~14	2~4	外傾	平坦	-	



第102図 第18号製塩跡屋外鹹水槽実測図

第18号製塩跡屋外鹹水槽一覧表

遺構 番号	位 置	長軸(径) 方向	規模 (m)			形 状	黒色土厚 (cm)	粘土厚 (cm)	壁面	床面	出土遺物	備 考
			長軸(径)	短軸(径)	深さ							
125	F13h5	N-27° -E	2.2	2.1	1.1	円 形	1~10	1~6	外傾	平 坦	—	
126	F13g7	N-25° -E	2.7	2.0	1.2	楕 円 形	2~6	1~8	外傾	平 坦	—	
127	F13h8	N-31° -E	2.1	1.2	0.4	隅丸長方形	2~10	2~7	外傾	緩い起伏	—	
171	F13h5	N-36° -E	1.5	1.1	0.3	隅丸長方形	1~6	2~6	外傾	平 坦	—	

所見 釜屋は黒色土が不定形に広がり、竈の土層断面から大きく2回の操業が考えらる。竈は南側に移動し造り替えられている。土層断面図中、第4層を境に下層を第一次操業面、上層を第二次操業面とした。第二次操業面は、第一次操業面廃絶後に時間を空けずに再構築したものと考えられる。

屋内鹹水槽は3基で、出土状況から第128A・129A号鹹水槽が最終である第二次操業、第128B・129B・130号鹹水槽が第一次操業に伴うと考えられる。

屋外鹹水槽は4基で、出土状況から第125・126号鹹水槽は最終である第二次操業、第127・171号鹹水槽は第一次操業に伴うものと考えられる。第125号鹹水槽は第171号鹹水槽の上層に構築され、規模や形状も異なっている。

竈の造り替えに伴い、第128A・129A号屋内鹹水槽と第125・126号屋外鹹水槽が第二次操業、第128B・129B・130号屋内鹹水槽と第127・171号屋外鹹水槽が第一次操業に伴うものと考えられる。出土遺物がなく時期は不明であるが、屋外鹹水槽である第125～127号鹹水槽が北に位置する第15号製塩跡の釜屋、また南に位置する第16号製塩跡を掘り込んでいることから、第15・16号製塩所の廃絶後に存在していたものと考えられる。

第19号製塩跡 (第103～107図)

位置 調査区中央部 E13i7区の標高9 mの砂丘上に位置している。

重複関係 上層には第11・12号製塩跡、下層には第20号製塩跡が構築されている。

確認状況 第1段階 表砂をおよそ8 m除去した標高9 mの位置から、釜屋と炭化材を含む焼砂の範囲、西壁際では山砂と暗褐色土を混ぜ合わせた帯状の範囲が確認された。

第2段階 釜屋内の黒色土を精査すると、南部の黒色土面から第156・160号鹹水槽、西部の黒色土面からP1～P10が検出された。

第3段階 第156号鹹水槽の下層から4基、第160号鹹水槽の下層から4基の鹹水槽、東部の黒色土中から第158・159・175号鹹水槽が検出された。



第1段階



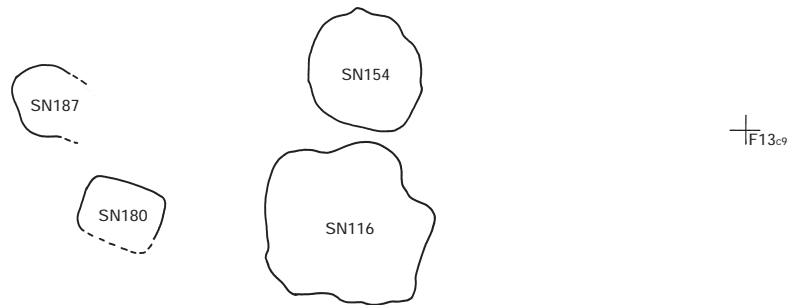
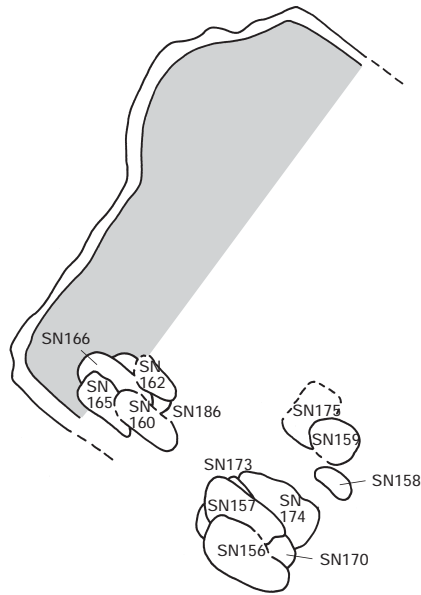
第2段階



第3段階



IF13h4



第103図 第19号製塩区域

規模と構造 東部が調査区域外に延びるため、製塩跡の範囲は南北軸29m、東西軸16mだけが確認された。第19号製塩跡は釜屋、屋外鹹水槽（第116・154・180・187号鹹水槽）で構成されている。釜屋には、屋内鹹水槽（第156～160・162・165・166・170・173～175・186号鹹水槽）が南部を中心に位置している。屋外鹹水槽は製塩跡内の南西部を中心に位置している。釜屋内の北東部は、重機による表砂除去のため削平されている。

釜屋 4区 SH-16（第104図） 東部が調査区域外に延びているため、釜屋を構築する黒色土の範囲は南北軸12m、東西軸4.3mだけ確認された。残存している西壁から、主軸方向はN-40°-Eと考えられる。黒色土の残存部分は厚さ40cmの黒色土を貼り付けて構築されている。西壁際は暗褐色土と山砂を混ぜ合わせた版築状の層が確認された。南西部の黒色土面に焼砂が広がり、その下層からは、釜屋の構築材と推測される炭化材が検出された。

土層断面図中、第3層は釜屋を構築した黒色土A層で、第10層は釜屋を構築した際暗褐色土と山砂を版築状に積み重ねた層である。

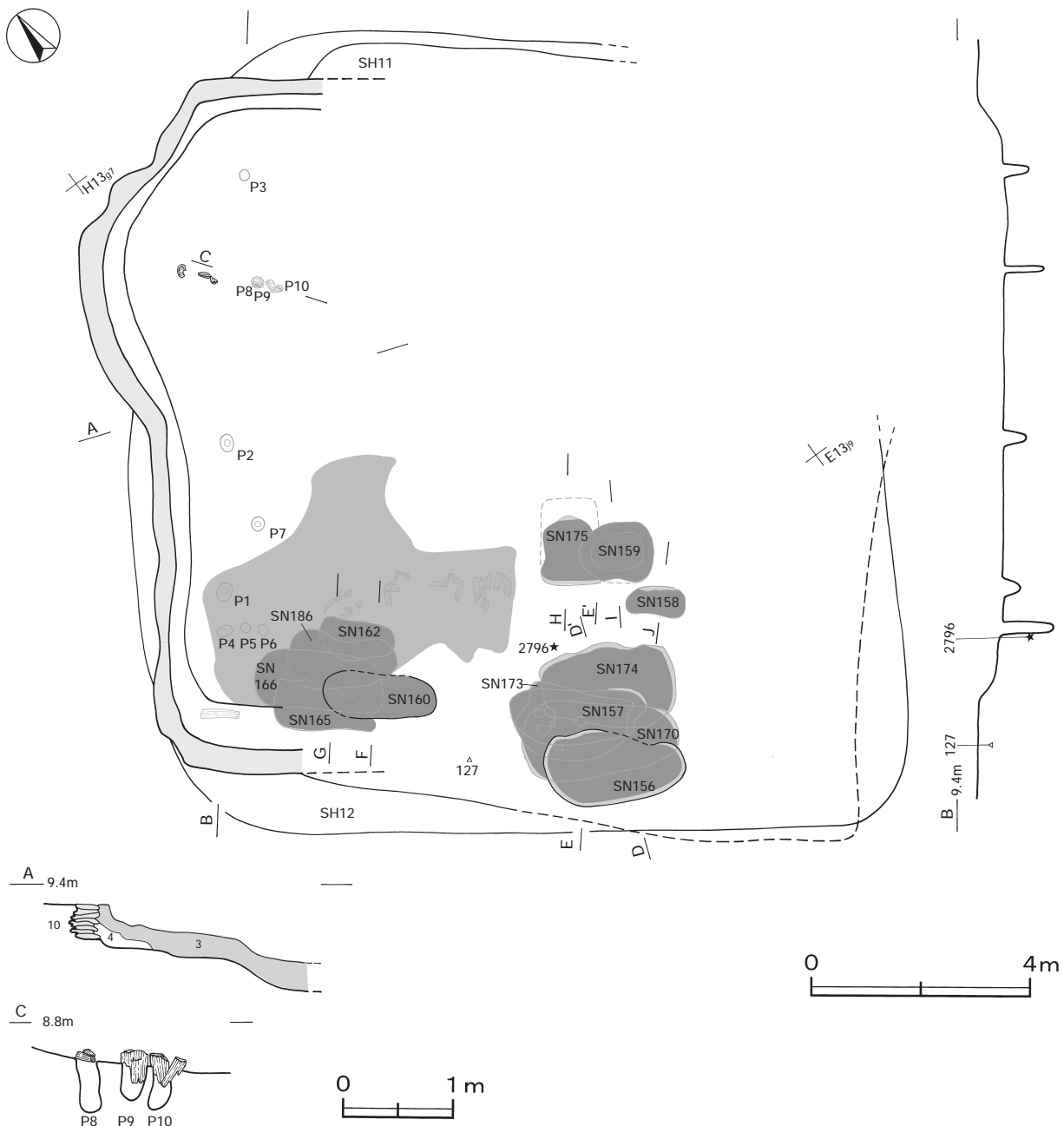
ピットは10か所である。P 4～P 6は深さ80～100cmとやや深いが、その他は35～70cmである。P 1～P 3は釜屋の上屋を支える柱穴、その他のピットは補助的な柱穴か壁を仕切るための柱穴の可能性が考えられる。

屋内鹹水槽(第105図)は釜屋内の南東部の標高8.9mから第156号鹹水槽を含む5基が、南西部の標高約8.9mからは第160号鹹水槽を含む5基が検出された。東部の黒色土中からは第158・159・175号鹹水槽が検出されたが、残存状況は悪い。

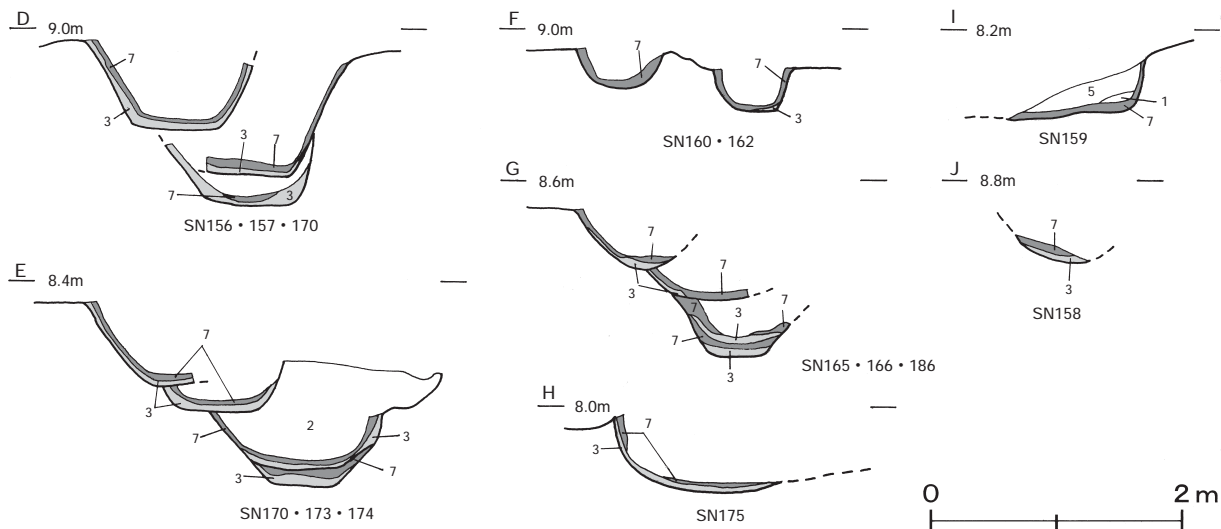
第156・160号鹹水槽は砂A層を主体とした自然堆積の層で、短期間で埋没されたものと考えられる。その他の鹹水槽内は、埋め戻された黒色土か構築土が崩落したものである可能性が高い。

屋外鹹水槽(第106図) 製塩跡内の南西部の標高9.6mから第116・154・180・187号鹹水槽が検出された。

第116号鹹水槽の土層断面からは、6回の造り替えを行ったことが確認できた。第180・187号鹹水槽内には崩落土か埋め戻され黒色土が白砂A層とともに堆積している。



第104図 第19号製塩跡実測図



第105図 第19号製塩跡屋内鹹水槽土層図

第19号製塩跡屋内鹹水槽一覽

遺構番号	位置	長軸(径)方向	規模(m)			形状	黒色土厚(cm)	粘土厚(cm)	壁面	床面	出土遺物	備考
			長軸(径)	短軸(径)	深さ							
156	E13j7	N-50° -W	2.6	1.4	0.6	楕円形	2~8	-	緩斜	平坦	-	
157	E13j7	N-52° -W	2.5	1.3	0.9	不定形	3~5	-	緩斜	平坦	-	
158	E13j8	N-42° -W	1.1	0.5	-	楕円形	1~4	-	-	皿状	-	
159	E13i7	N-39° -W	1.4	(1.0)	(0.4)	不定形	-	3~7	垂直	緩い起伏	-	
160	E13i6	N-50° -W	2.0	(0.7)	0.3	[楕円形]	-	4~8	緩斜	平坦	-	
162	E13i6	N-47° -W	[1.4]	0.7	(0.3)	[楕円形]	1~3	2~6	外傾	平坦	-	
165	E13i6	N-46° -W	[1.8]	1.0	0.4	[不定形]	1~6	2~3	緩斜	皿状	-	
166	E13i6	N-49° -W	[2.3]	1.0	(0.3)	[隅丸長方形]	2~3	2~6	緩斜	平坦	-	
170	E13j7	N-54° -W	2.8	1.4	(0.6)	不定形	2~4	2~4	緩斜	平坦	不明鉄製品	
173	E13j7	N-50° -W	2.0	1.1	(0.3)	不定形	4~7	2~4	外傾	平坦	-	
174	E13j7	N-58° -W	2.4	1.5	(0.4)	不定形	1~8	1~6	緩斜	平坦	-	
175	E13i7	N-58° -E	(1.2)	(1.0)	0.5	[長方形]	2~4	1~5	外傾	平坦	-	
186	E13i6	N-47° -W	2.0	1.1	(0.3)	不定形	2~6	2~14	緩斜	平坦	-	

遺物出土状況 土師質土器片3点(皿2, 内耳鍋1), 金属製品1点(古銭), 瓦片2点(軒丸瓦)が釜屋内の覆土中から出土している。不明鉄製品1点が第170号鹹水槽の覆土中から出土している。いずれも細片で図示できない。釜屋内からは漆喰の魂が出土している。

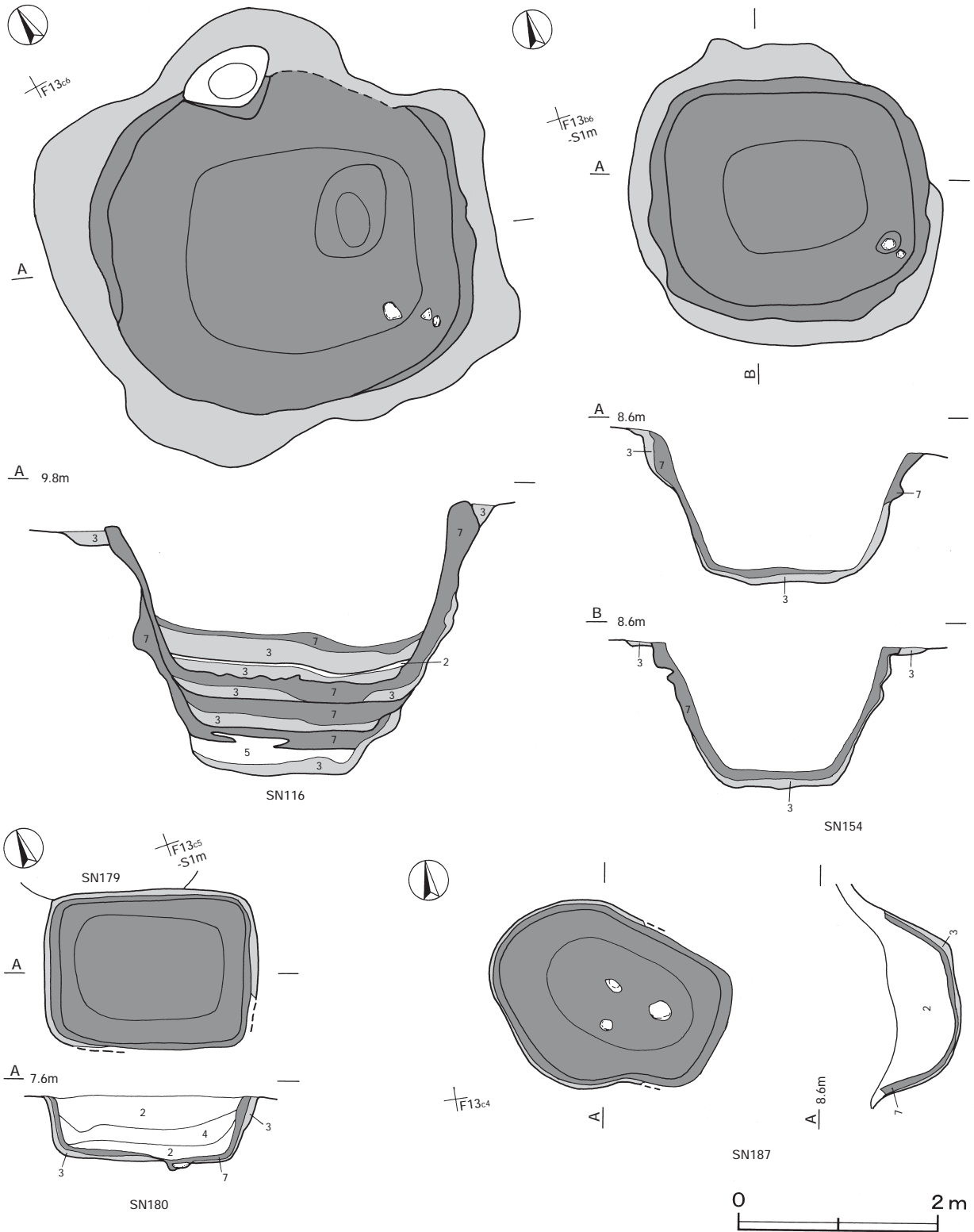
所見 屋内・外鹹水槽が何度も造り替えられていることを考えると, 釜屋は長期間操業していたと推測される。釜屋の黒色土面から広い範囲で焼砂や炭化材が検出されており, 焼失したものと考えられる。炭化材の中には, 釜屋の屋根か壁に使用したと思われる茅材も検出された。茅材が炭化材として検出された状況は, 南西へ約22mに位置する第13号製塩跡の釜屋と類似している。

屋内鹹水槽は10基検出されている。釜屋内の南東部に1基と南西部に隅丸長方形の鹹水槽を1基構築している点では, 第1・2・5・6号製塩跡と類似しているが, これほどの造り替えを行っている点では異例である。

屋外鹹水槽は4基検出されている。第116号鹹水槽は6回の造り替えが行われ, 底面には鹹水落下の圧力により形成されたと思われる楕円形の窪みが確認されている。第116号鹹水槽は, 最終段階まで使用されていたものと考えられる。第116・154号鹹水槽の南東部中段には, 鹹水を汲み上げる際の足掛け石が2点見られる。同様に, 第187号鹹水槽内からは礫片3点が出土しているが, 足掛け石が粘土の崩落とともに落下した可能性

がある。第180号鹹水槽の南東壁上にも礫1点が出土しており、第180・187号鹹水槽はかなりの深さがあったことが推測され、当初に構築された屋外鹹水槽であった可能性もある。

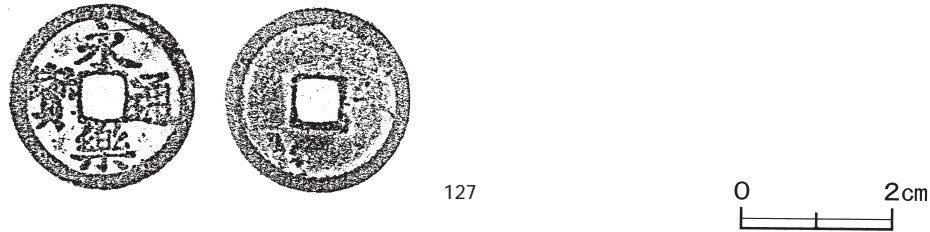
最終段階で使用されていた鹹水槽は、屋内では第156・160号鹹水槽、屋外では第116号鹹水槽である。その他は頻繁に造り替えが行われており、明確なグループ分けができない。時期は、出土遺物が少なく不明である。



第106図 第19号製塩跡屋外鹹水槽実測図

第19号製塩跡屋外鹹水槽一覧表

遺構番号	位置	長軸(径)方向	規模(m)			形状	黒色土厚(cm)	粘土厚(cm)	壁面	床面	出土遺物	備考
			長軸(径)	短軸(径)	深さ							
116	F13c6	N-44°-E	5.1	4.5	1.2	不定形	3~24	4~32	外傾	緩い起伏	-	
154	F13b6	N-69°-E	3.1	3.0	1.3	楕円形	2~10	2~16	外傾	平坦	-	
180	F13c4	N-73°-W	2.1	1.6	0.6	隅丸長方形	2~6	2~10	外傾	平坦	-	
187	F13b3	N-59°-W	2.4	1.8	0.7	不定形	2~8	2~8	外傾	平坦	-	



第107図 第19号製塩跡出土遺物実測図

第19号製塩跡出土遺物観察表(第107図)

番号	銭名	径	孔径	厚さ	重さ	初铸年	材質	特徴	出土位置	備考
127	永樂通寶	2.47	0.50	0.11	3.64	1408	銅	真書	南部黒色土中	

第20号製塩跡(第108~113図)

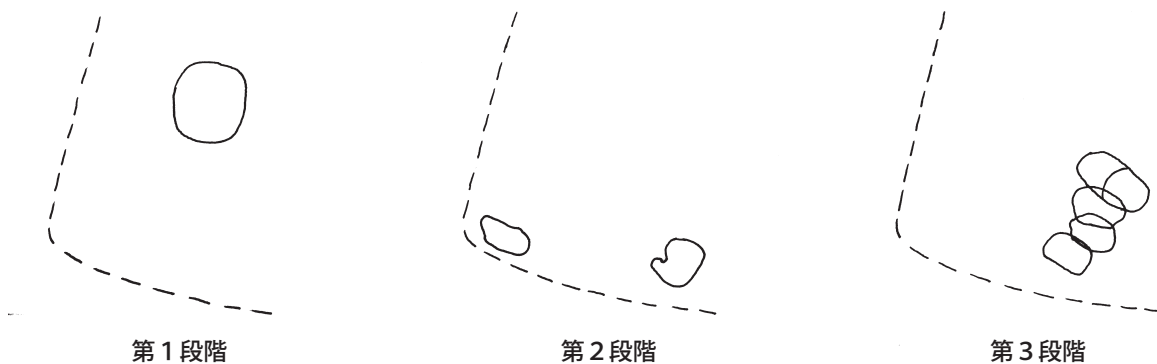
位置 調査区中央部 E13h7区の標高約7mの砂丘上に位置している。

重複関係 上層には第11・12・19号製塩跡が構築されている。

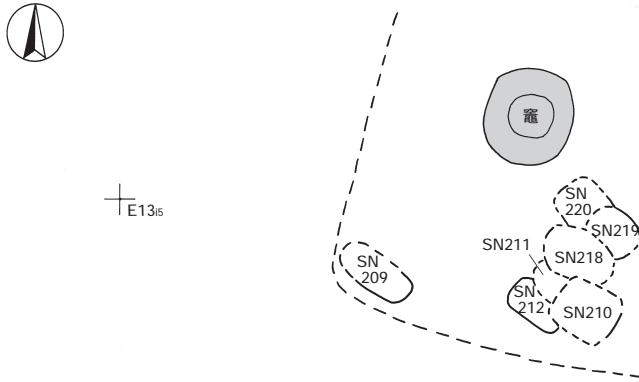
確認状況 第1段階 表砂をおよそ10m除去した標高7mの位置から、釜屋と竈の範囲が確認された。

第2段階 釜屋内の黒色土を精査すると南部の黒色土面から第209・210号鹹水槽が検出された。

第3段階 第210号鹹水槽の下層から5基の鹹水槽が検出された。



規模と構造 東部が調査区域外に延びているため、製塩跡の範囲は南北軸28m、東西軸17mだけ確認できた。製塩跡は釜屋、屋外鹹水槽(第177~179・181・185・200号鹹水槽)で、釜屋は竈、屋内鹹水槽(第209~212・218~220号鹹水槽)で構築されている。屋内鹹水槽は釜屋内の南東部、屋外鹹水槽は製塩跡内の南西部を中心に位置している。



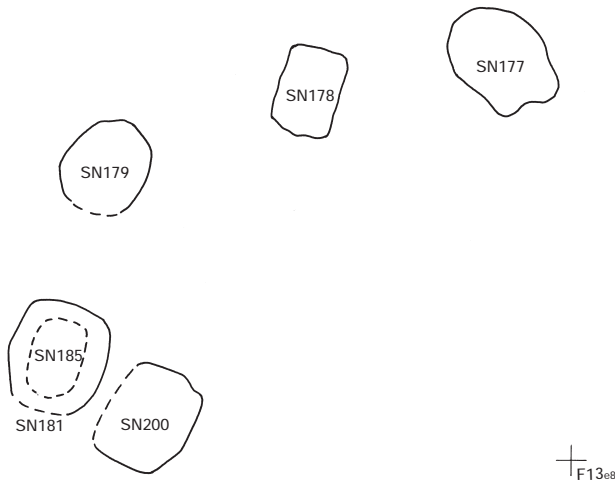
釜屋 4 区 SH-17 (第109図) 東部が調査区域外に延びているため、南北軸 7 m、東西軸 7.6m だけ確認できた。釜屋は、厚さ20cm の黒色土を貼り付けて構築されている。

竈は径2.5m の円形で、釜屋の中心に位置していると考えられる。作業面からの深さは20cm だけ確認できた。底面は平坦で、黒色土の厚さは80cm である。底面には二面の黒色面が確認されている。

土層断面図中、第3層は釜屋と竈を構築した黒色土A層である。黒色土A層間には、最大で厚さ15cm の砂A層が入っている。第4層は釜屋を構築する際、掘り方に埋土した層である。竈上層には最終段階での灰層が残っている。

屋内鹹水槽 (第110図) は釜屋内の南西部の標高7.6m から第209号、南東部の標高7.3m から第210号鹹水槽が検出された。第210号鹹水槽の下層からは第211・212・218~220号鹹水槽が検出されたが、残存状況は悪い。

第3・7層は黒色土A層と粘土層で、鹹水槽を構築した層である。鹹水槽内には埋め戻した黒色土が堆積している。



第108図 第20号製塩区域

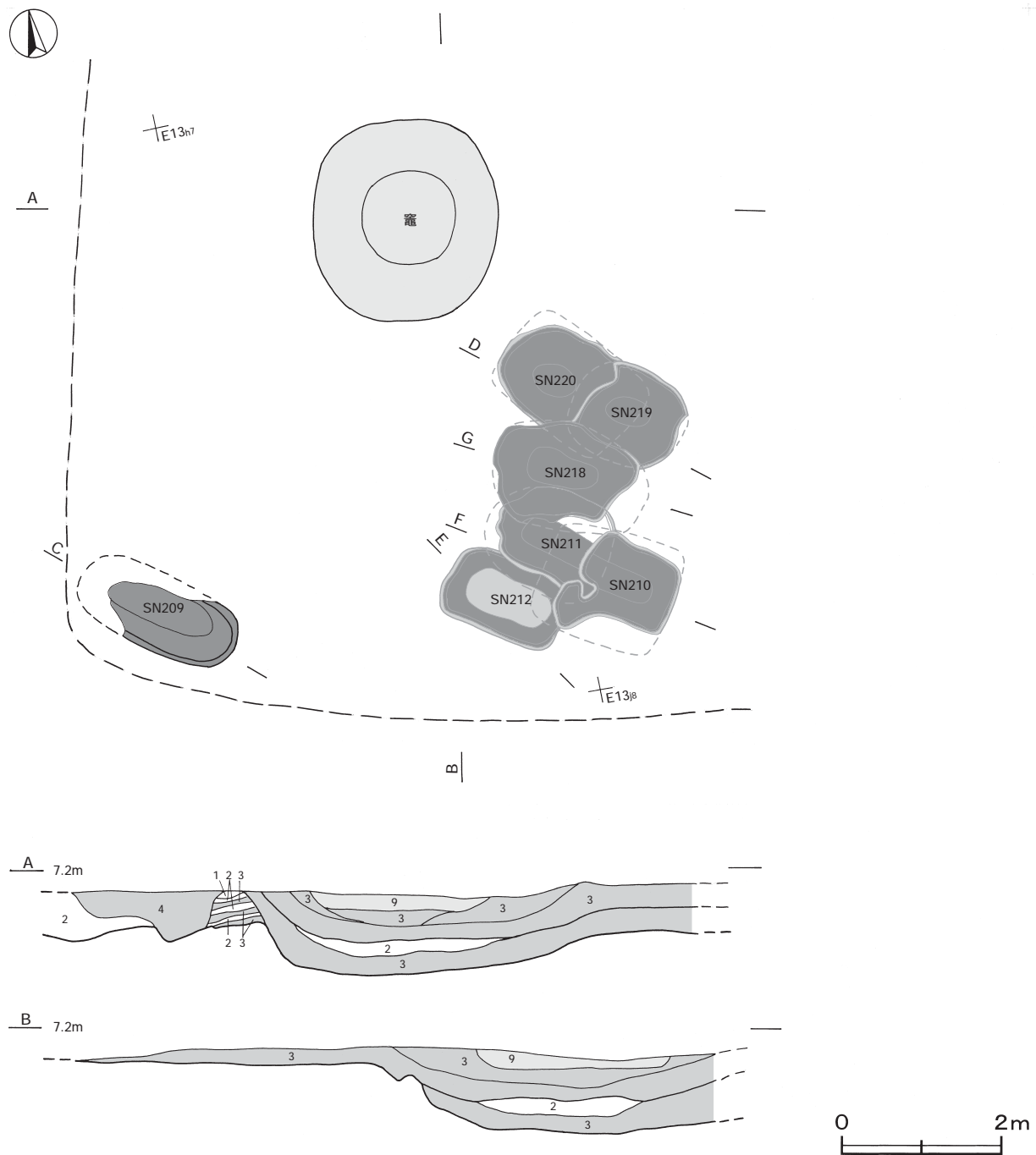
屋外鹹水槽 (第111・112図) 釜屋から南西へ約20m の標高7.3m から第181号、標高 7 m から第177~179・181・185・200号鹹水槽が検出された。第185号鹹水槽は第181号鹹水槽の下層から検出された。

屋外鹹水槽の覆土は砂A層を主体とした自然堆積の層で、廃絶後に短期間で埋没したと考えられる。第3・7層は黒色土A層と粘土層で、鹹水槽を構築した層である。

遺物出土状況 第18号鹹水槽の覆土中から、土師質土器片1点(内耳鍋)が出土している。

所見 釜屋全体の形状は確認できなかったが、屋内鹹水槽が頻繁に造り替えられていることから、釜屋は長期間操業していたと推測される。上層に位置する第11・12号製塩跡の釜屋と比較すると、壁を構築しない点が異なっている。操業では竈の土層断面から、黒色土A層間の砂A層を境に下層を第一次操業面、上層を第二次操業面とすることができる。

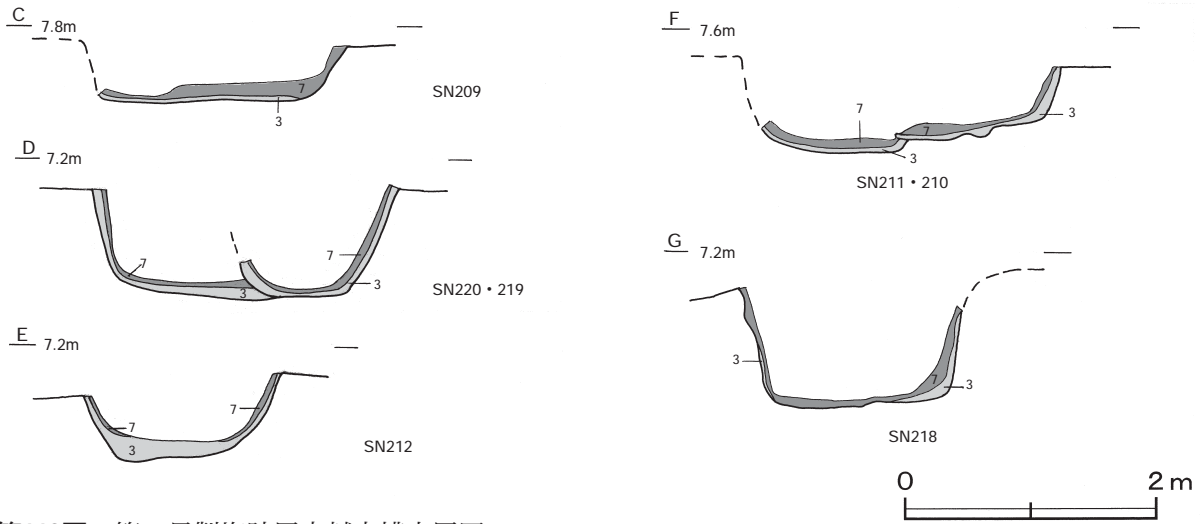
屋内鹹水槽は7基検出されており、特に南東部に位置する屋内鹹水槽は少しずつ場所を移動しながら造り替えており、上層に位置する第19号製塩跡の屋内鹹水槽と類似している。これらの検出状況は良くないが、規模や形状は類似している。



第109図 第20号製塩跡実測図

屋外鹹水槽は6基検出されている。いずれも大規模であったものと考えられ、中でも第177・181号鹹水槽は最終段階まで使用されていたと考えられる。第185号鹹水槽は第181号鹹水槽の前段階のもので、第178・179・200号鹹水槽もその中に含まれる。

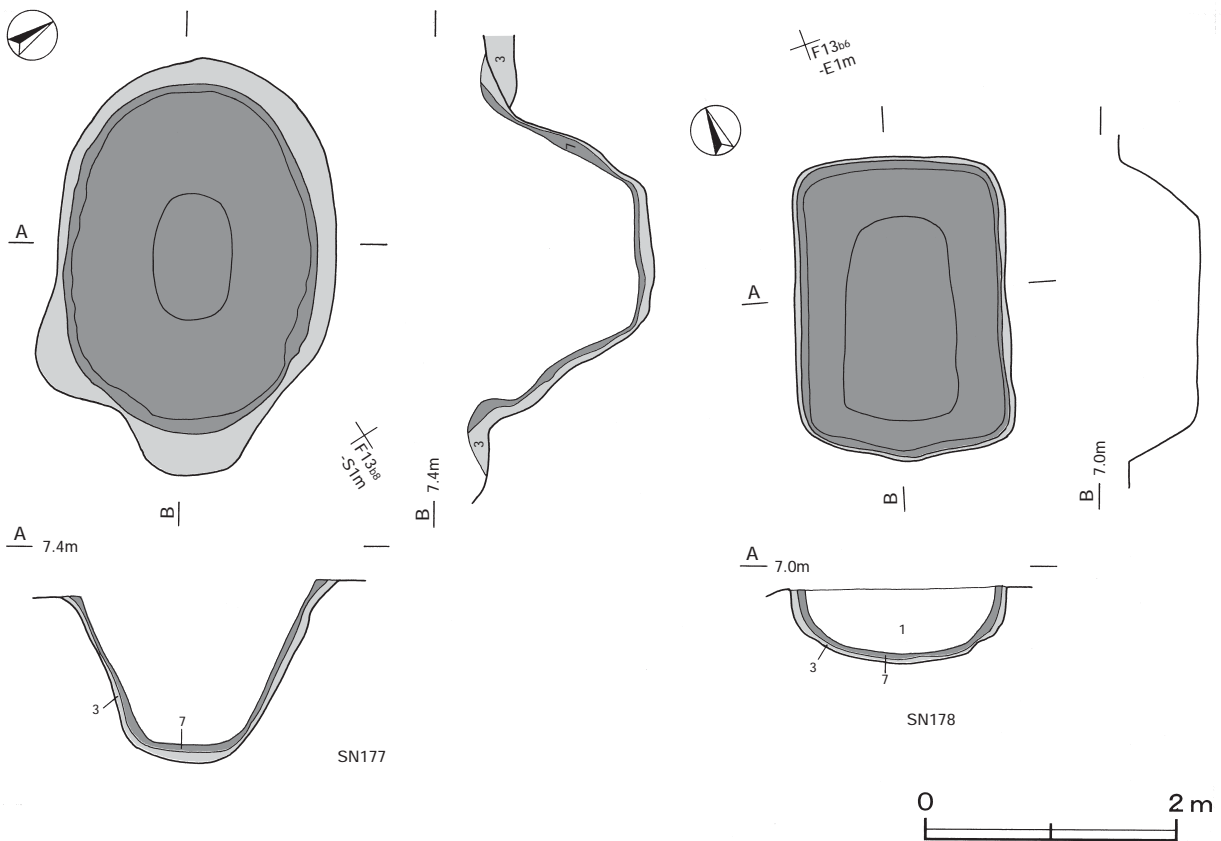
竈の造り替えとともに、最終操業として屋内鹹水槽の第209・210号、屋外鹹水槽の第177・181号、第一次操業は屋内鹹水槽の第211・212・218～220号、屋外鹹水槽の178・179・185・200号が使用されていたものと考えられる。屋内鹹水槽については、造り替えが頻繁で明確なグループ分けができない。屋外鹹水槽は釜屋から距離があるが、出土状況や位置から本製塩所とのセットとして捉えた。時期は、出土遺物もなく明確にすることができない。



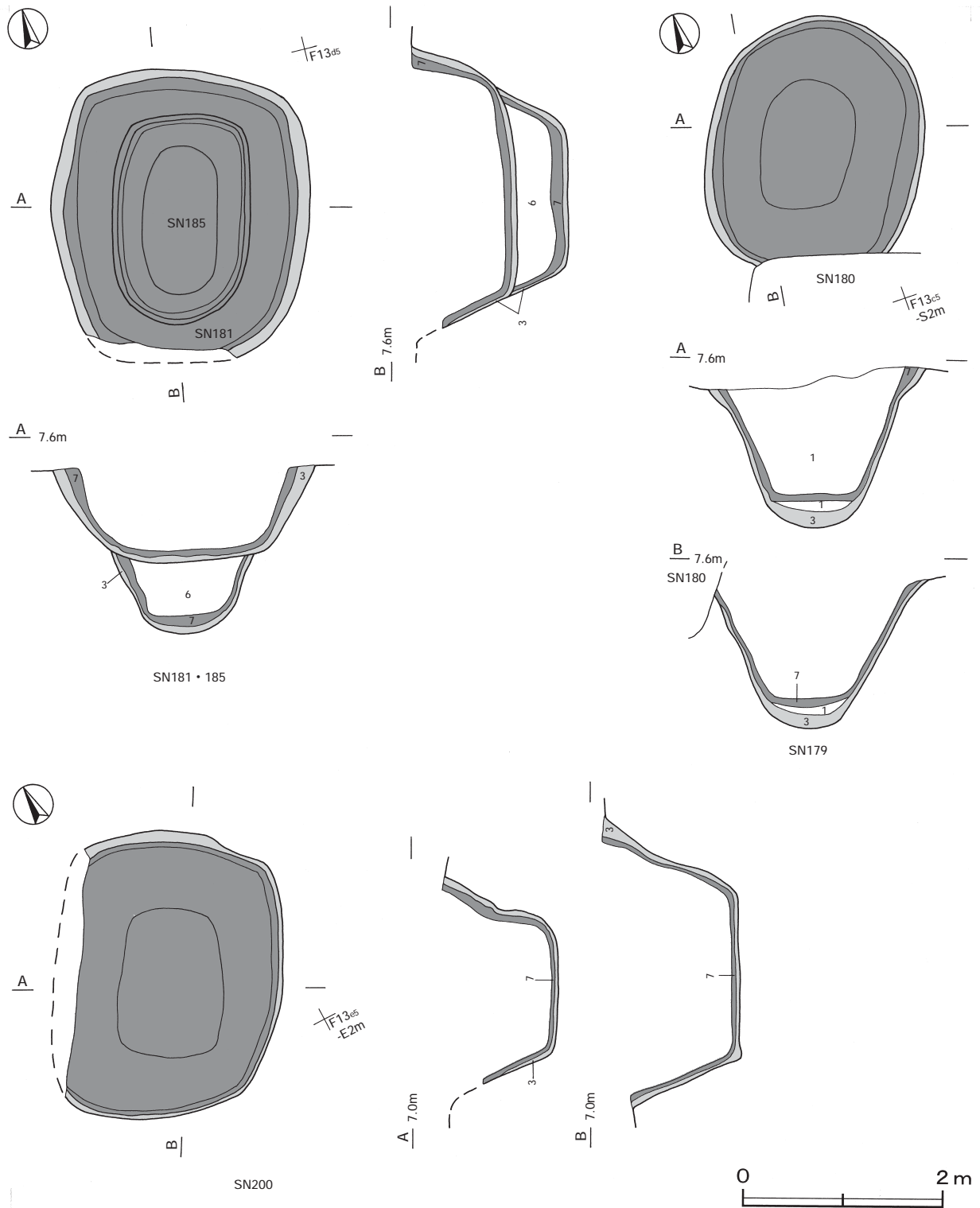
第110図 第20号製塩跡屋内鹹水槽土層図

第20号製塩跡屋内鹹水槽一覽表

遺構番号	位置	長軸(径)方向	規模(m)			形状	黒色土厚(cm)	粘土厚(cm)	壁面	床面	出土遺物	備考
			長軸(径)	短軸(径)	深さ							
209	E13i6	N-52° -W	(1.7)	0.9	0.4	[楕円形]	2~5	4~12	緩斜	平坦	-	
210	E13i8	N-59° -W	(1.2)	(1.1)	0.5	[長方形]	3~10	2~10	緩斜	平坦	-	
211	E13i7	N-58° -W	(1.2)	(1.1)	[0.7]	[方形]	4	10	-	平坦	-	
212	E13i7	N-55° -W	1.5	1.0	0.5	長方形	2~18	1~4	緩斜	平坦	-	
218	E13i8	N-60° -W	(1.6)	(1.3)	0.9	[楕円形]	1~8	1~8	外傾	平坦	-	
219	E13i8	N-49° -W	(1.2)	(1.1)	0.8	[楕円形]	4	4~6	緩斜	平坦	-	
220	E13i8	N-40° -W	(1.2)	1.3	0.8	[長方形]	2~5	2~6	外傾	平坦	-	



第111図 第20号製塩跡屋外鹹水槽実測図(1)

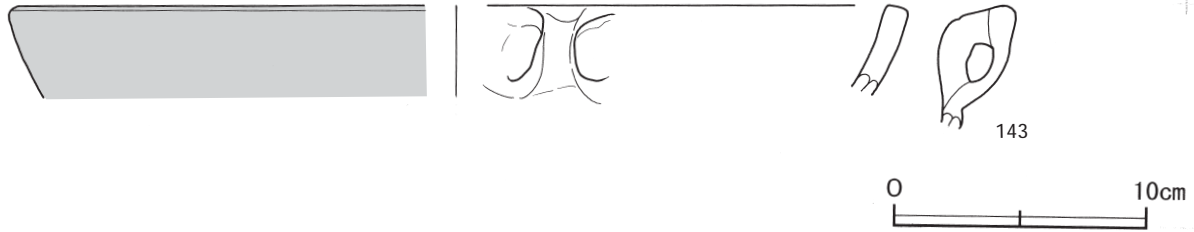


第112図 第20号製塩跡屋外鹹水槽実測図（2）

第20号製塩跡屋外鹹水槽一覽表

遺構 番号	位 置	長軸（径）方向	規模（m）			形 状	黒色土厚 （cm）	粘土厚 （cm）	壁面	床面	出土遺物	備 考
			長軸（径）	短軸（径）	深さ							
177	F13b7	N-50° -W	3.3	2.2	1.2	不 定 形	1~10	1~10	外傾	平坦	-	
178	F13b6	N-18° -E	2.4	1.7	0.5	隅丸長方形	2~8	2~6	緩斜	平坦	-	
179	F13c4	N-28° -E	(2.6)	2.3	1.1	[楕円形]	2~15	2~10	外傾	皿状	-	

遺構 番号	位 置	長軸 (径) 方向	規模 (m)			形 状	黒色土厚 (cm)	粘土厚 (cm)	壁面	床面	出土遺物	備 考
			長軸 (径)	短軸 (径)	深さ							
181	F13d4	N-14° -E	(2.8)	2.6	0.5	長 方 形	2~8	2~8	外傾	平坦	内耳鍋	
185	F13d4	N-16° -E	2.1	1.4	0.8	長 方 形	4~16	1~12	緩斜	皿状	-	
200	F13d5	N-30° -E	2.9	(2.0)	1.1	[隅丸長方形]	2~14	2~10	外傾	平坦	-	



第113図 第20号製塩跡出土遺物実測図

第20号製塩跡出土遺物観察表 (第113図)

番号	器 形	器 質	口 径	器 高	底 径	胎 土	色 調	焼成	手 法 の 特 徴	出土位置	備考
143	内耳鍋	土師質土器	[34.2]	(4.9)	-	雲母	明赤褐	普通	外面煤付着	SN181内	5%

第21号製塩跡 (第114~116図)

位置 調査区中央部 F13d6区を中心に、標高4.8mの砂丘上に位置している。

確認状況 第1段階 表砂をおよそ9m除去した標高約5mの位置から、釜屋と竈の範囲が確認された。

第2段階 土層から、竈2基の存在が明らかになる。釜屋内の砂を20cm除去すると南部の作業面から第227号鹹水槽と第226号鹹水槽の底部だけが検出された。

第3段階 釜屋内の黒色土面を10cm除去すると、P1~P4が検出された。



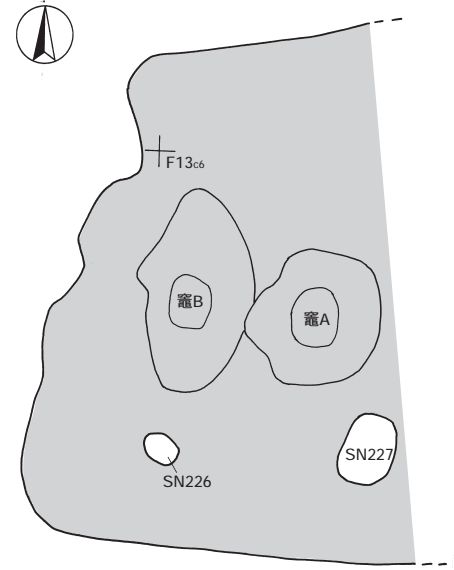
規模と構造 東部が調査区域外に延びているため、製塩跡の範囲は南北軸14m、東西軸10mだけが確認できた。製塩跡は釜屋だけである。釜屋は竈A・B号、屋内鹹水槽(第226・227号鹹水槽)で構成されている。屋内鹹水槽は釜屋内の南部に位置している。

釜屋4区SH-18(第115図) 東部が調査区域外に延びることから、南北軸14.2m、東西軸10.3mだけ確認できた。釜屋は、厚さ15~90cmの黒色土を貼り付けて構築されている。

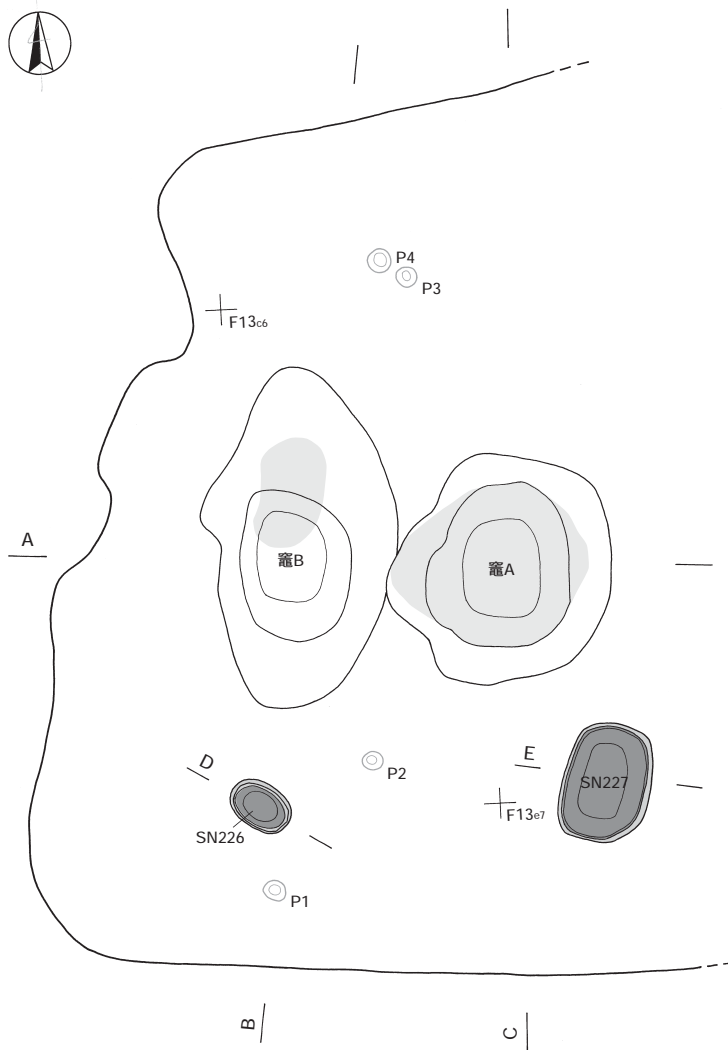
A号竈は長径3.6m、短径3.5mの不定形で釜屋の中心に位置している。作業面からの深さは90cmで、底面は皿状を呈している。厚さ30～50cmの黒色土を貼り付けて構築されている。灰層が約20cm確認できた。B号竈は長径5.4m、短径3.1mの不定形で、作業面からの深さは約40cmである。底面は皿状を呈している。厚さ20～30cmの黒色土を貼り付けて構築されている。

土層断面図中、第3・4層は釜屋を構築した黒色土層で、第21号竈内に堆積した第4層はA号竈を構築する際に埋め戻された層である。第9層はA号竈内に残された灰層である。

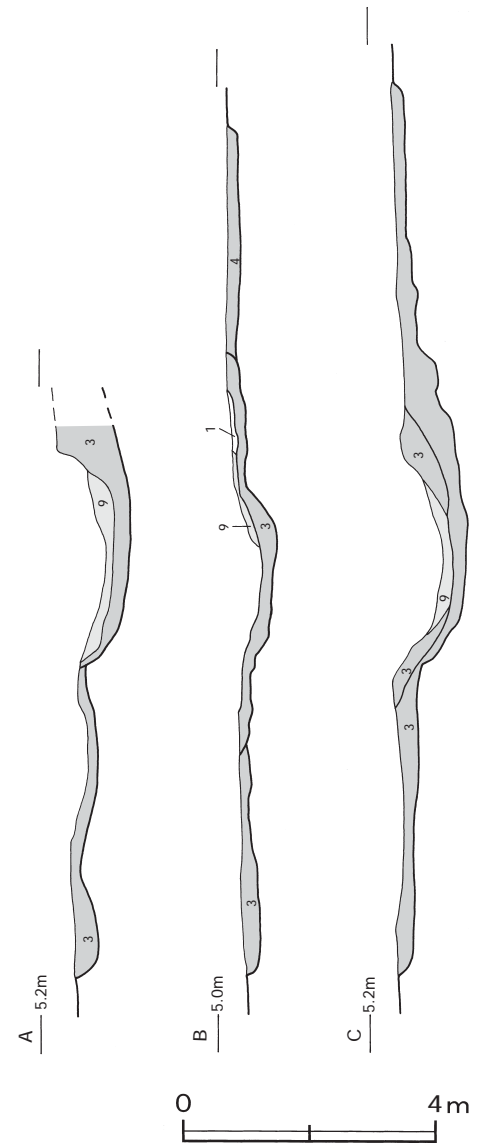
ピットは4か所である。深さ25～48cmで、本跡に伴う柱穴の一部と考えられるが、規則的な配置は見られない。



第114図 第21号製塩区域

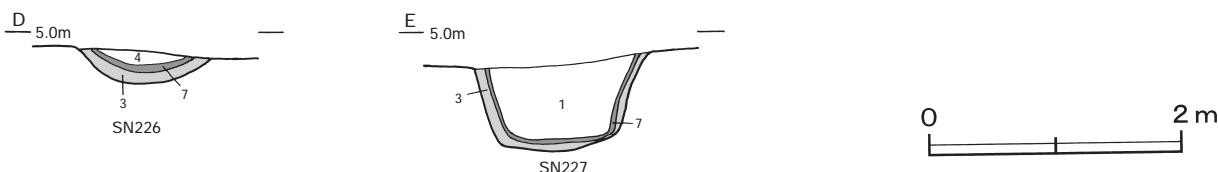


第115図 第21号製塩跡実測図



屋内鹹水槽（第116図）は、操業面である黒色土面の標高4.8mから第227号鹹水槽と第226号鹹水槽の底部だけが検出された。

第1層は砂A層を主体とした自然堆積の層、第3・7層は黒色土A層と粘土層で、鹹水槽を構築した層である。



第116図 第21号製塩跡屋内鹹水槽土層図

第21号製塩跡屋内鹹水槽一覧表

遺構番号	位置	長軸(径)方向	規模(m)			形状	黒色土厚(cm)	粘土厚(cm)	壁面	床面	出土遺物	備考
			長軸(径)	短軸(径)	深さ							
226	F13d6	N-58°-W	1.0	0.7	0.1	楕円形	6~10	4	外傾	皿状	-	
227	F13d7	N-20°-E	1.9	1.4	0.6	隅丸長方形	2~10	3	外傾	平坦	-	

所見 東部が調査区域外に延びているため、全体の様相は捉えることができなかった。B号竈は埋め戻され、A号竈内には焼砂層が残っていることから、B号竈が第一次操業、A号竈が最終操業と考えられる。A・B号竈の造り替えて、最終操業であるA号竈には第227号鹹水槽、第一次操業であるB号竈には第226号鹹水槽が伴うと考えられる。第226号鹹水槽は底部のみの検出であることを考えると、初期に存在していたものが、A号竈の構築により崩落したものと考えられる。B号竈からA号竈へ造り替えのための釜屋の構築範囲は土層断面で確認できないことから、ほぼ同規模のまま操業が続けられたものと考えられる。検出時の標高は5mほどと当遺跡内で低く、南西へ約180mに位置する第3号製塩跡と同様に規模もほぼ同じであることから、両跡は同時期に操業していた可能性が高い。

表2 製塩跡一覧表

番号	位置	主軸方向	標高	黒色土				竈				屋内施設	屋外施設	備考		
				範囲(最大値) 長軸(m)	短軸(m)	形状	厚さ(cm)	ピット	径(m)	形状	深さ(cm)				底面	黒色土厚(cm)
1	H12h9	N-38°-E	8.4	15.0	13.0	長方形	30~60	10	6.2×6.1	円形	120	皿状	10~60	SN16・22・25A・25B~27	SN1~3・29・39~41・44・58	
2	I13b4	N-44°-E	8.5	8.2	7.2	不定形	5~20	4	3.6×3.2	楕円形	80	皿状	30	SN12・30A	SN10・15・47A・B~50	SH2B→本跡
			8.5	13.5	10.0	長方形	10~45	5	5.1×(3.1)	長方形	80	皿状	10~20	SN21・28・30B・30C	SN7・9・11・31A・B	本跡→SH2A
3	J11i4	N-37°-E	5.1~5.4	8.8	6.1	長方形	5~10	9	4.6×3.5	楕円形	50	皿状	5~20	SN34	-	SI12→本跡→HK19
4	H13c2	N-29°-E	5.5~6.0	11.8	10.7	不定形	10~18	15	3.0×2.6	楕円形	60	平坦	10~18	-	SN56・57・60~63	
									3.8×3.5	円形	25	皿状	5~10	-	-	
5	G12f7	N-32°-E	8.2	15.2	11.1	不定形	10~60	13	4.8×4.0	楕円形	60	平坦	90	SN4・14・16・17, SK2	SN6・8・13・18~25・40・67~71	人骨1・2
									4.9×4.0	楕円形	80	平坦	12~60	-	-	
6	G13j1	N-28°-W	7.5	15.3	12.6	不定形	10~30	11	5.5×5.0	不定形	80	平坦	10~15	SN10~12・15	4区SN1~5・7・49, 2区のSN4・43, SK35	
									2.9×2.2	楕円形	110	平坦	40~60	-	-	

番号	位置	主軸方向	標高	黒色土					竈					屋内施設	屋外施設	備考	
				範囲(最大値)		形状	厚さ (cm)	ピット	径 (m)	形状	深さ (cm)	底面	黒色 土厚 (cm)				
				長軸 (m)	短軸 (m)												
7	H12c8	N-89°-E	7.6	—	—	—	—	—	4.2×(3.0)	楕円形	50	平坦	10~30	—	SN26・27・29・32~34・41		
	H12c8	N-48°-E	7.4	—	—	—	—	—	3.1×3.1	円形	60	皿状	30~50	—	—		
8	H12a8	N-34°-E	6.4	10.5	9.1	不定形	10~20	10	3.6×3.1	楕円形	60	平坦	50~90	SN94	SN30・35・68~70・92・93		
9	F13f2	N-48°-E	9.6~10.3	13.1	11.3	長方形	100	—	7.2×5.5	不定形	50	皿状	110	SN73	SN57・61・62・64	SH17→SH13→本跡	
														SN81~83, SK12	—		
10	F13i5	N-36°-E	9.7	10.8	11.2	長方形	30	—	4.9×4.9	円形	20~40	平坦	50	SN77・78	SN57~59・63・65・72・79・85・121・122, 第1号土樋		
	F13i5	N-35°-E	10.4	12.4	11.2	不明	38	—	2.9×2.1	楕円形	—	—	—	—	—	本跡→SH10A	
11	E13h8	N-36°-E	9.4~9.6	南北 13.7	東西 [11.8]	長方形	12~60	5	4.4×4.0	楕円形	90	皿状	30~70	SN110・111・113	SN86・120, 第2号土樋	SH12・19・20→本跡	
12	E13i8	N-35°-E	9.0	14.5	13.8	正方形	40~80	10	4.9×4.5	円形	100	平坦	20~40	SN141~143・149・151	—	SH19・20→本跡→SH11	
13	F13f2	N-33°-E	8.5	12.6	11.7	長方形	60	—	5.4×4.0	長方形 (50)	—	—	—	40~50	SN104	SN98~100	SH17→本跡→SH9
									[3.0]×2.7	不定形							—
14	G13f2	N-31°-E	5.7	14.1	10.2	不定形	8~30	12	3.1×2.7	楕円形	60	平坦	30~40	SN87・89~91・95・105・112	SN88・108	—	—
									3.9×(2.3)	—							
15	F13h6	N-34°-E	7.0	17.5	14.4	不定形	5~40	—	3.5×3.2	方形	30~50	平坦	30~60	SN133	SN169・182~184A・B	本跡→SH18・SN125~127	
16	G13c6	N-34°-E	6.9	11.7	10.4	長方形	10~100	8	3.6×3.6	不定形	50	皿状	20~50	SN74・131・136	SN75	本跡→SH18	
17	F13f3	N-28°-E	7.0~7.5	13.6	12.8	長方形	30~50	9	3.4×2.7	楕円形	100	平坦	60	SN144~147A・B・150・152	SN97・123・124A・B・132・138・139	本跡→SH9・13	
18	G13a6	N-0°	7.6	12.4	10.2	不定形	10~20	9	3.7×3.3	楕円形	50	皿状	20~60	SN128A・B・129A・B・130	SN125~127・171	SH15・16→本跡	
19	E13i7	N-40°-E	9.0	南北 12.6	東西 (4.3)	[長方形]	40	10	—	—	—	—	—	SN156~160・162・165・166・170・173~175・186	SN116・154・180・187	SH20→本跡→SH11・12	
20	E13h7	[N-19°-E]	7.0	南北 (7.0)	東西 (7.6)	不明	20	—	2.5×2.3	円形 (20)	平坦	80	SN209~212・218~220	SN177~179・181・185・200	本跡→SH11・12・19		
21	F13d6	N-5°-E	4.8	南北 14.2	東西 10.3	不明	15~90	4	3.6×3.5	円形	90	皿状	30~50	SN226・227	—	—	—
									5.4×3.1	楕円形							

(2) 製塩跡に組み込まれない鹹水槽

前項で報告した製塩跡に含まれる鹹水槽以外に、配置や主軸、標高などから前述した製塩跡に組み込むことができないものがある。この項では、4区で確認された鹹水槽群や人骨が出土した鹹水槽を取り上げて記述した。以下実測図と一覧表で記載し、出土遺物とともに掲載した。

4区鹹水槽群 (第117~131区)

位置 調査区中央部 F12f9~ G13b1区に位置している。

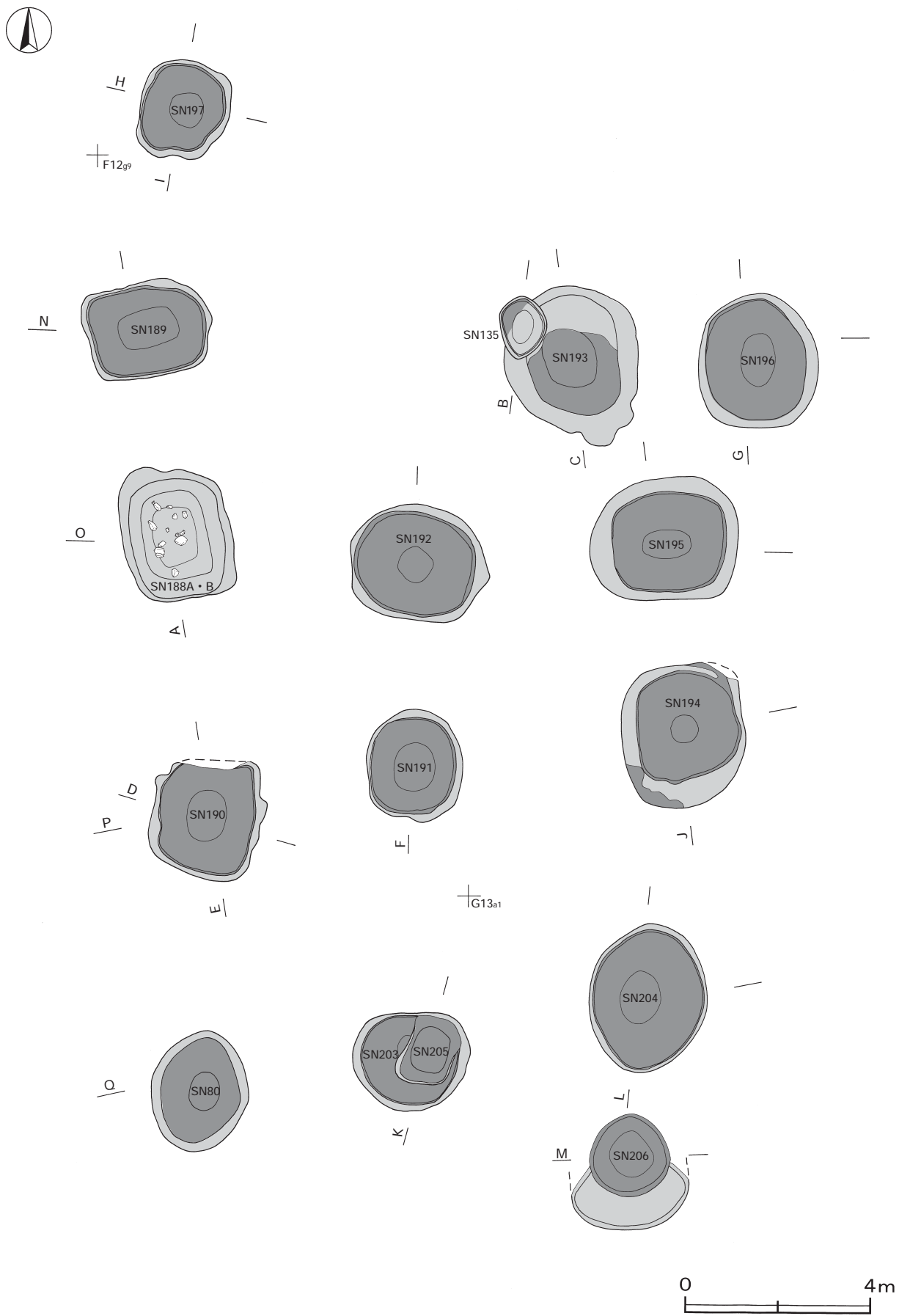
確認状況 表砂を3m除去し、標高約5mから16基の鹹水槽(第80・135・188A・B・197・203・204~206号)を確認した。

規模と施設 確認された範囲は南北25m、東西15mである。

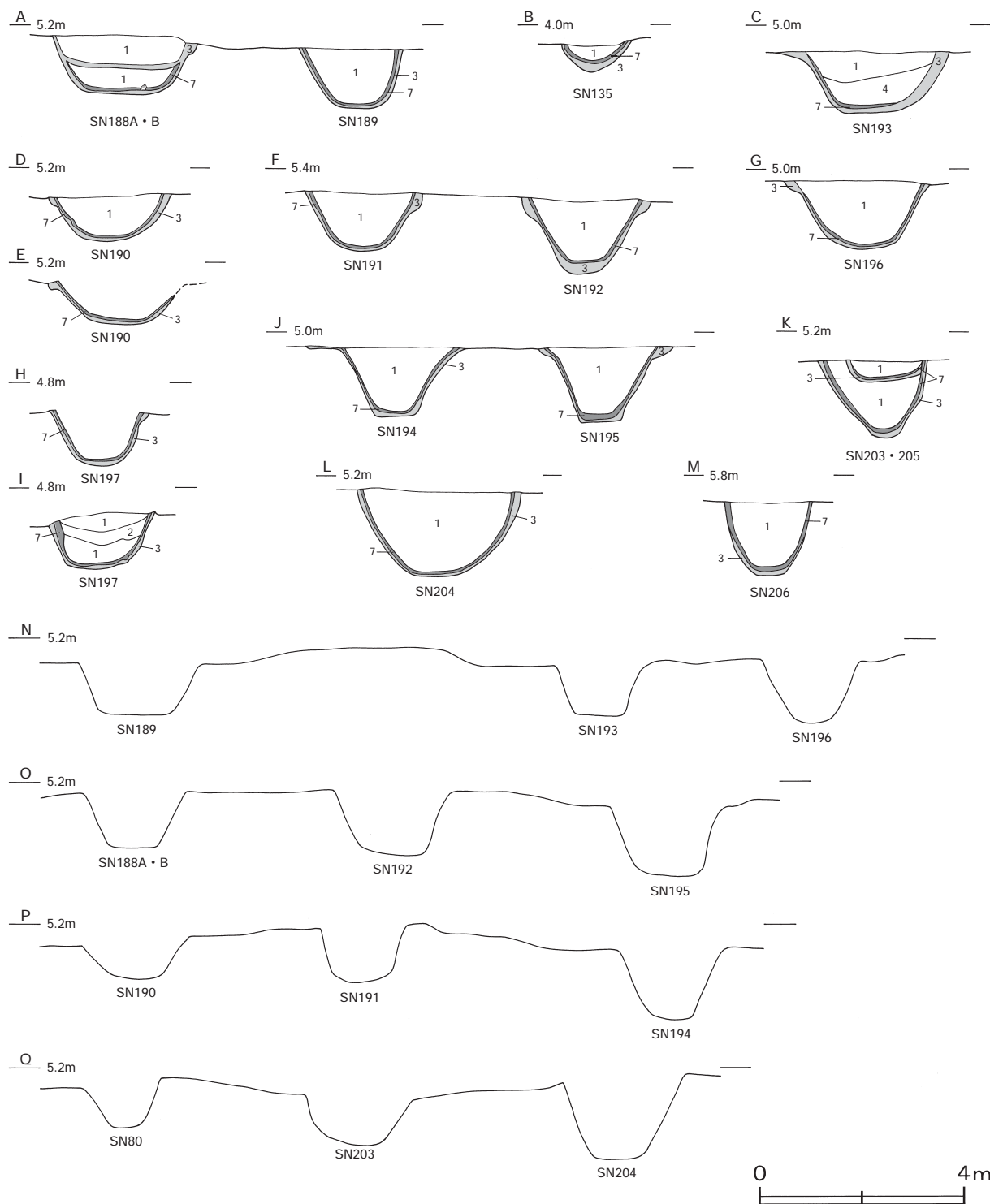
鹹水槽 (第117・118区) すべて長軸3m前後の隅丸長方形を呈し、厚さ約10cmの粘土と黒色土で構築されている。底面は平坦に造られているものが多く、皿状を呈している鹹水槽は少ない。長軸がほぼ南北軸となる鹹水槽は10基、東西軸となる鹹水槽は4基である。土層断面図から、第188・193号鹹水槽は造り替えが1回行われている。また、第188号鹹水槽の底面からは礫が出土している。

遺物出土状況 第192号鹹水槽から陶器片1点(甕)、第193号鹹水槽から陶器片1点(皿)、第206号鹹水槽から陶器片1点(甕)がそれぞれ出土している。すべて細片のため図示することはできなかった。

所見 同標高で隣接する製塩跡が確認されていないため、関係を捉えることができなかった。



第117图 4区鹹水槽群実測図



第118図 4区鹹水槽群土層・断面図

第168号鹹水槽 4区（第119図）

位置 調査区北部のF13e2で、第167号鹹水層の東側1.5mに位置している。

確認状況 表砂を9.9m除去後、第17号製塩跡の下層1.4mの標高6.1mで鹹水層を確認した。

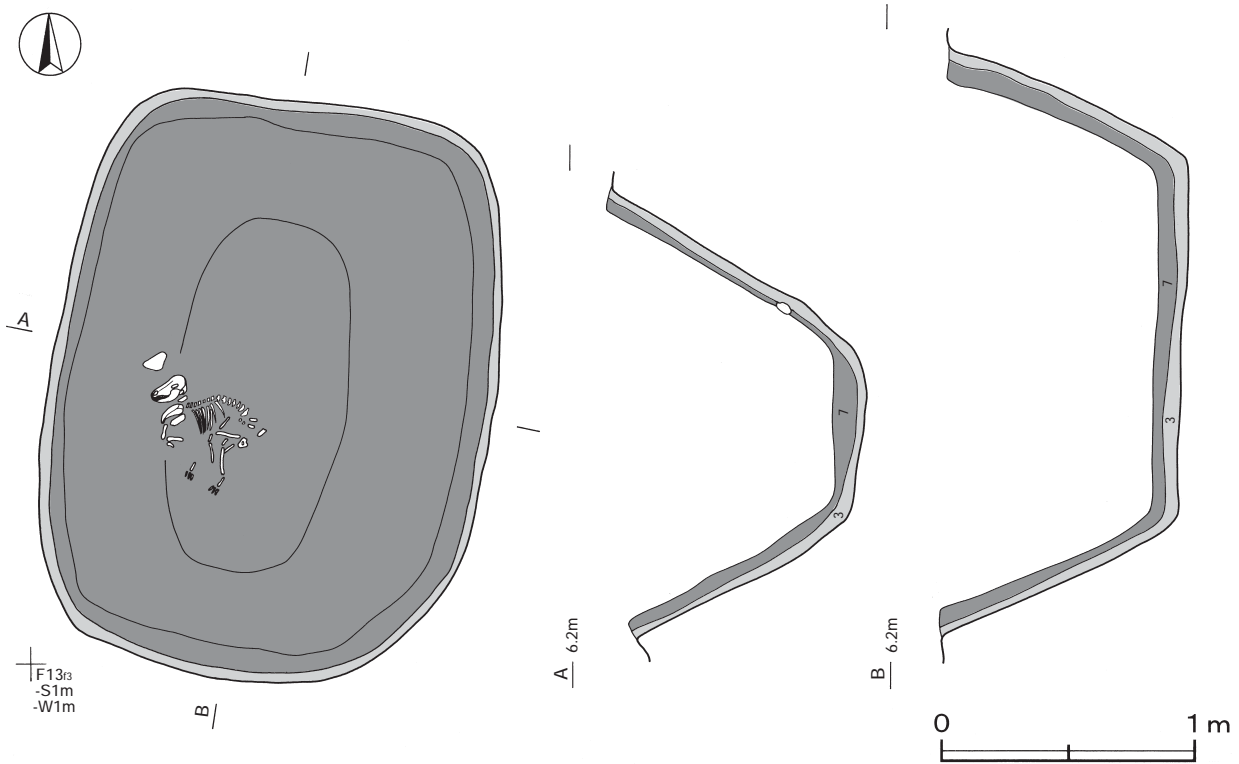
規模と形状 長軸2.3m、短軸1.8mの隅丸長方形で、深さは84cmである。長軸方向はN-12°-Eである。

遺物出土状況 犬の全身骨格が中央部上層から出土している。頭位は西方向で、前肢骨と後肢骨を南側に向け、椎骨を北側にした状態である。頭部付近から礫が出土した。

雌雄と年齢 不明 成犬

遺骸の特徴 ほぼ全身骨格が確認された。頭蓋骨の最大長は158.7mm で下顎骨の右側は120mm である。歯に歯周病が見られた。

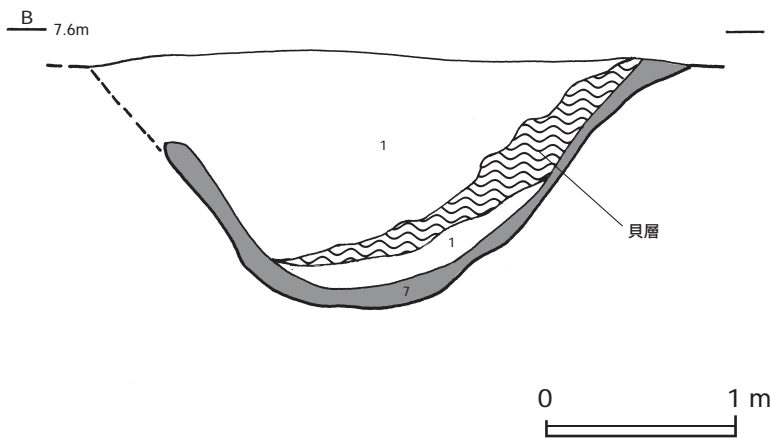
所見 犬の遺骸は、第168号鹹水層の廃絶時に埋め戻す際に埋葬されたものと考えられる。



第119図 第168号鹹水槽実測図

第38号鹹水槽 (第120・121図)

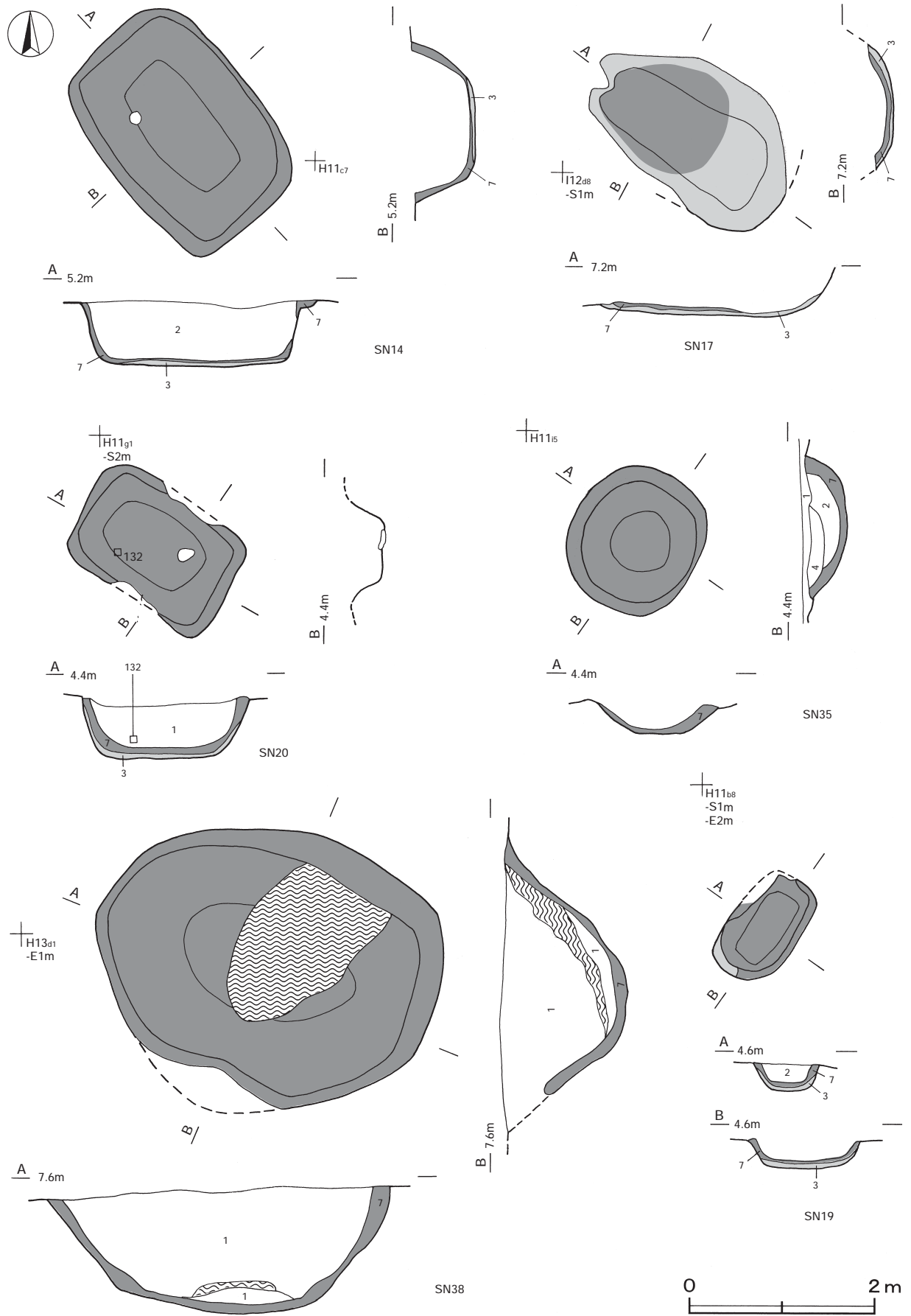
第38号鹹水槽から出土した貝種は、右表のとおりである。



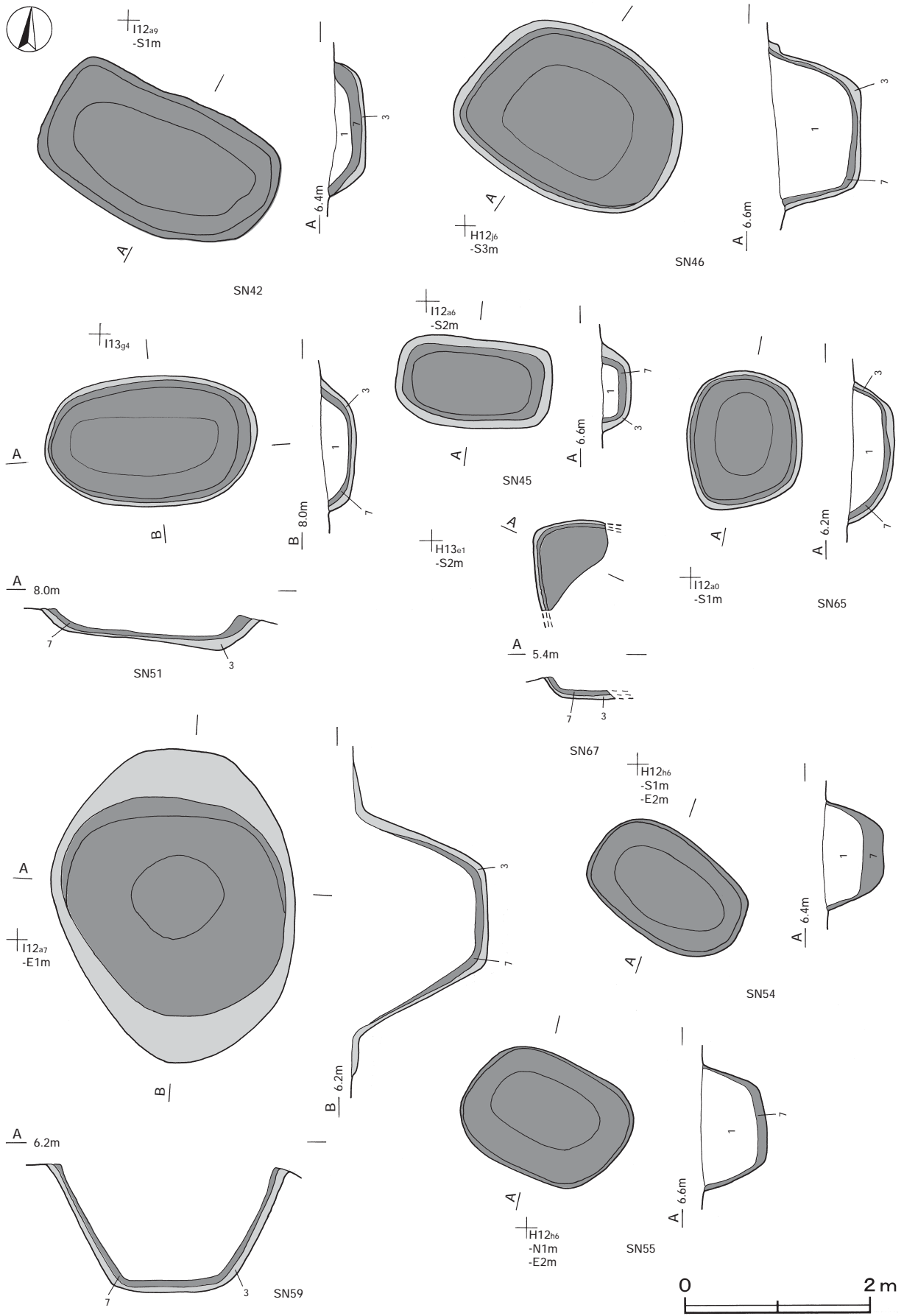
第38号鹹水槽出土貝種一覧表

No.	貝種	重さ (g)	比率	殻頂数
1	クボガイ	20	0.023	6
2	ウネレイシガ イダマシ	55	0.063	9
3	レイシガイ	130	0.149	15
4	イタボガキ属	86,720	99.6	
5	ウバガイ	140	0.161	5

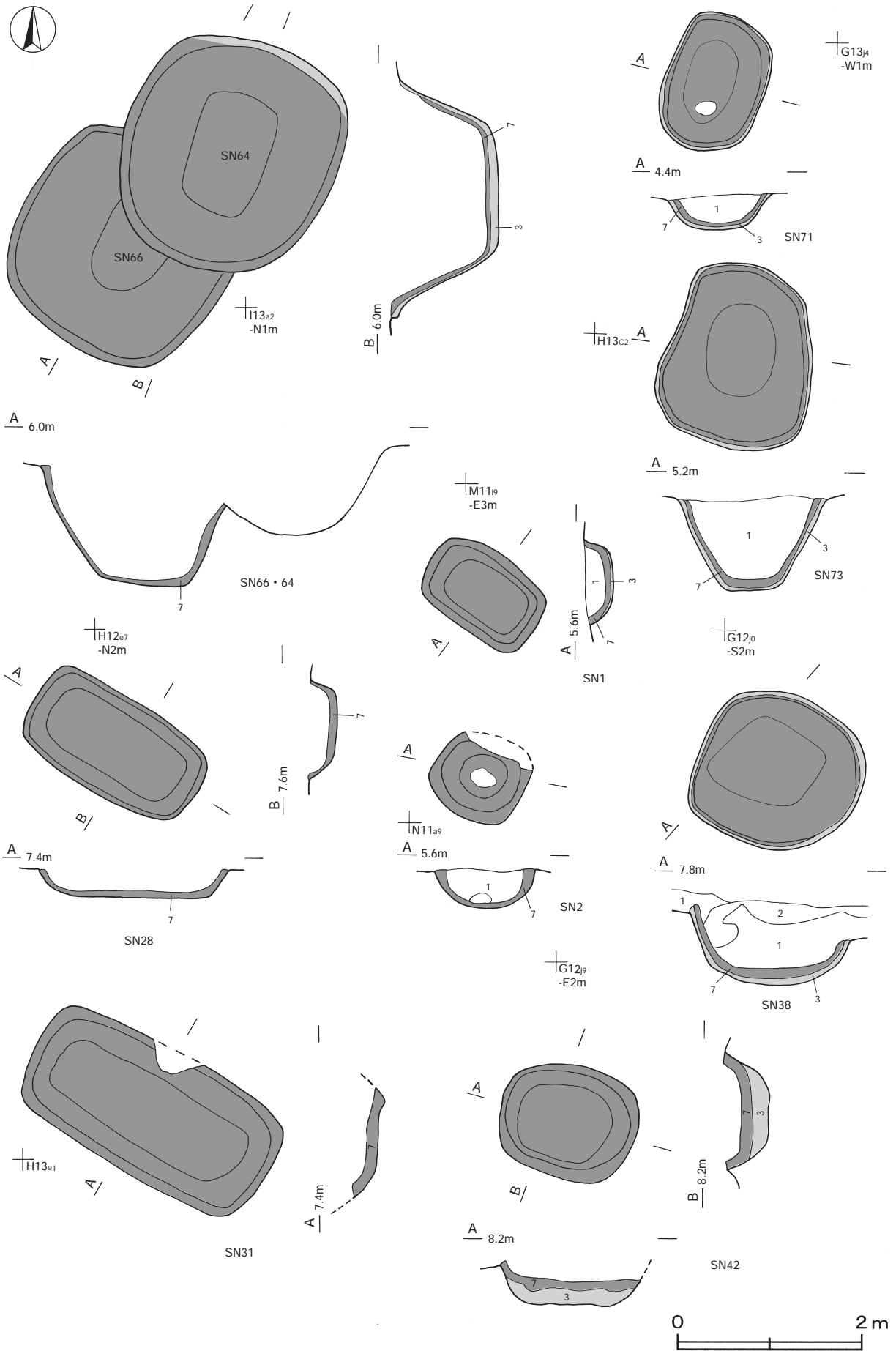
第120図 第38号鹹水槽貝出土状況図



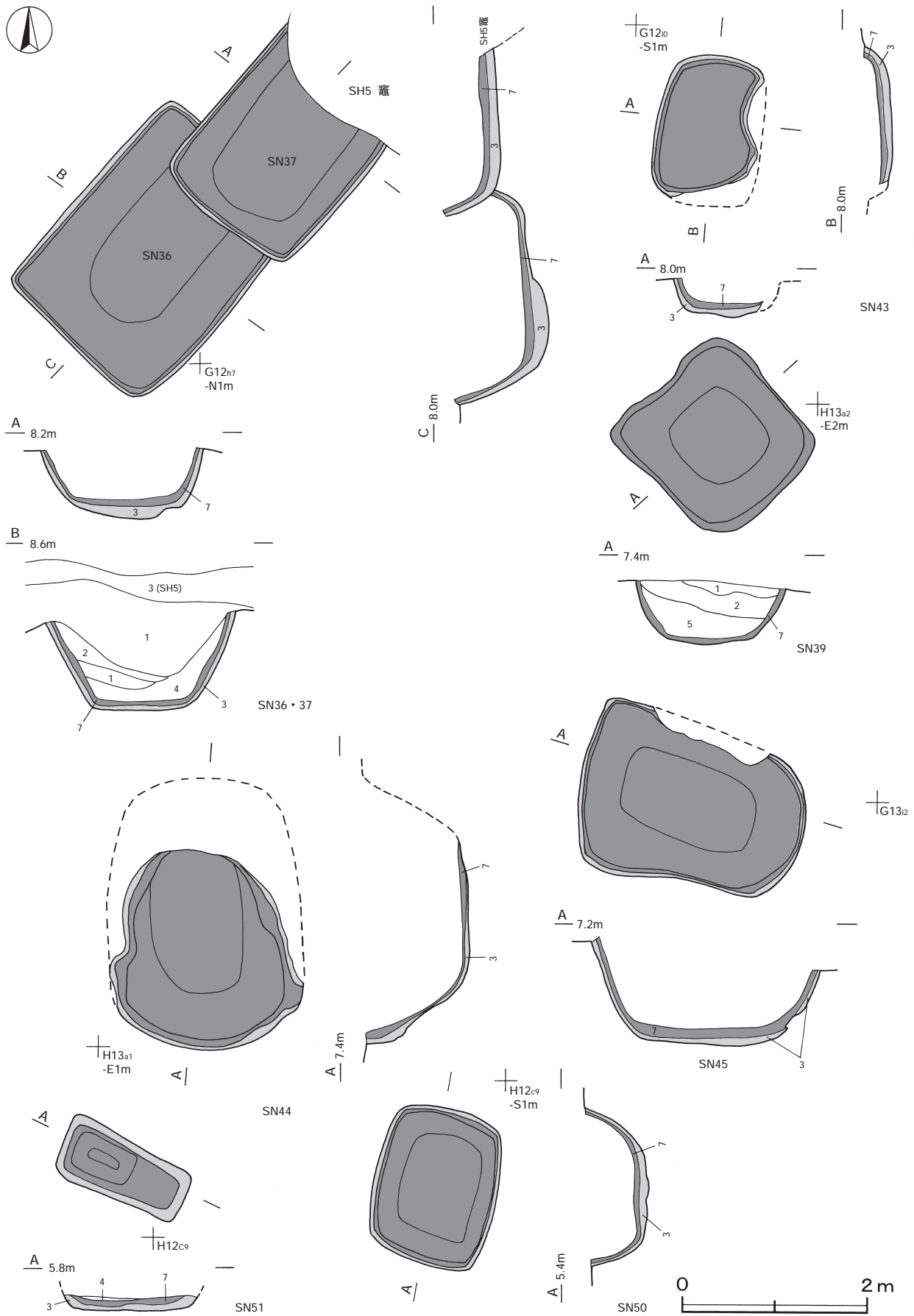
第121図 製塩跡に組み込まれない鹹水槽実測図（1）



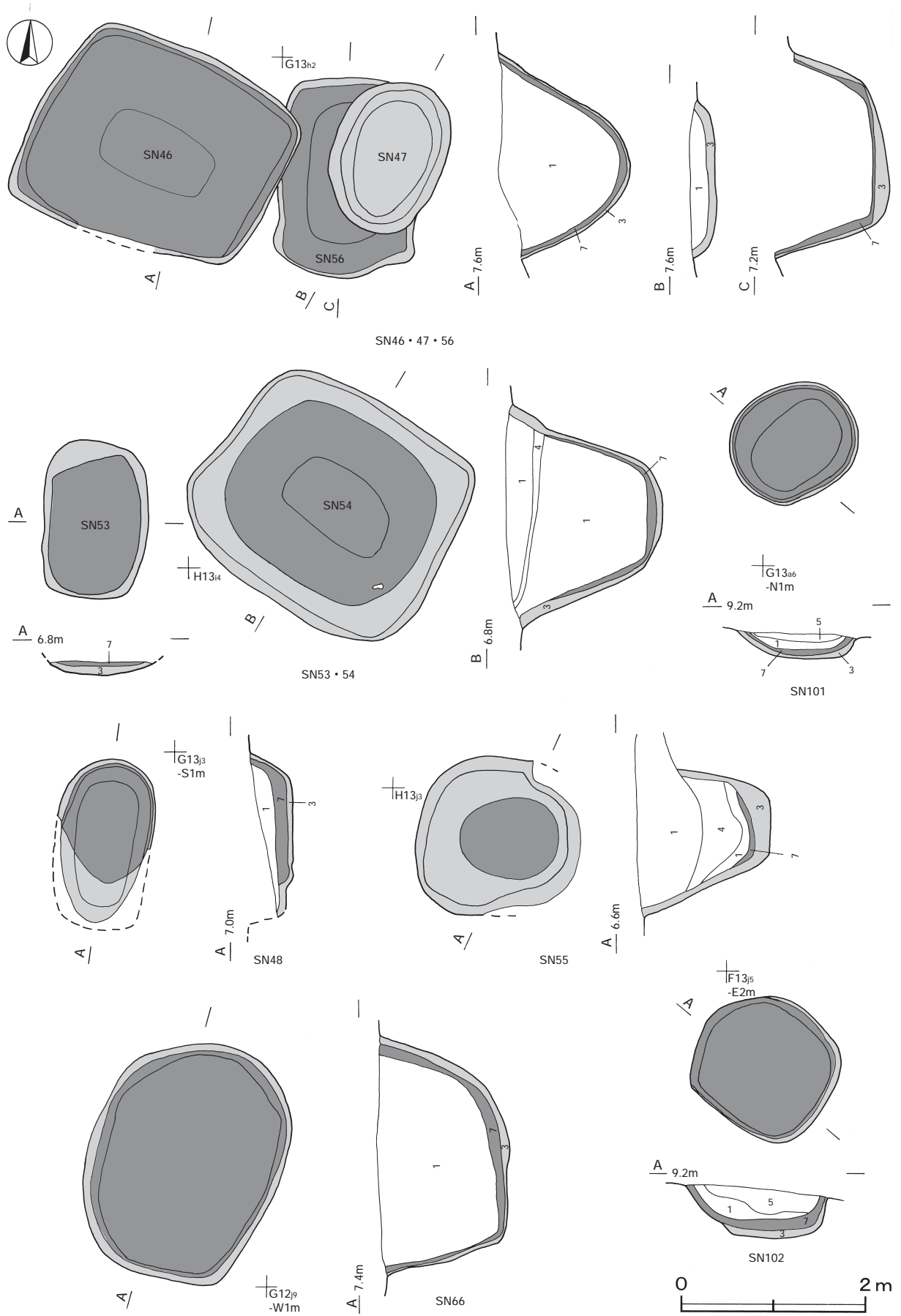
第122図 製塩跡に組み込まれない鹹水槽実測図(2)



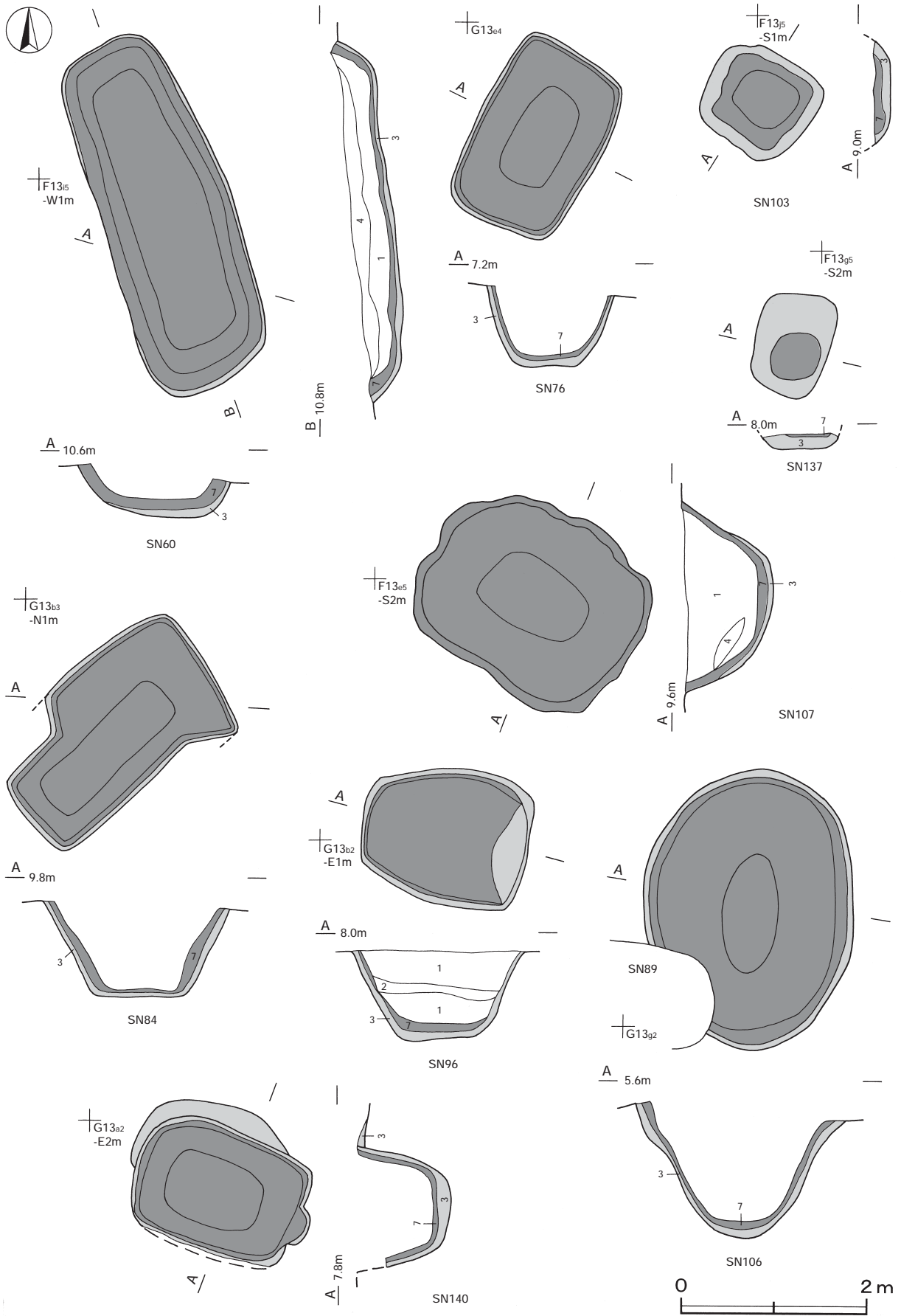
第123図 製塩跡に組み込まれない鹹水槽実測図(3)



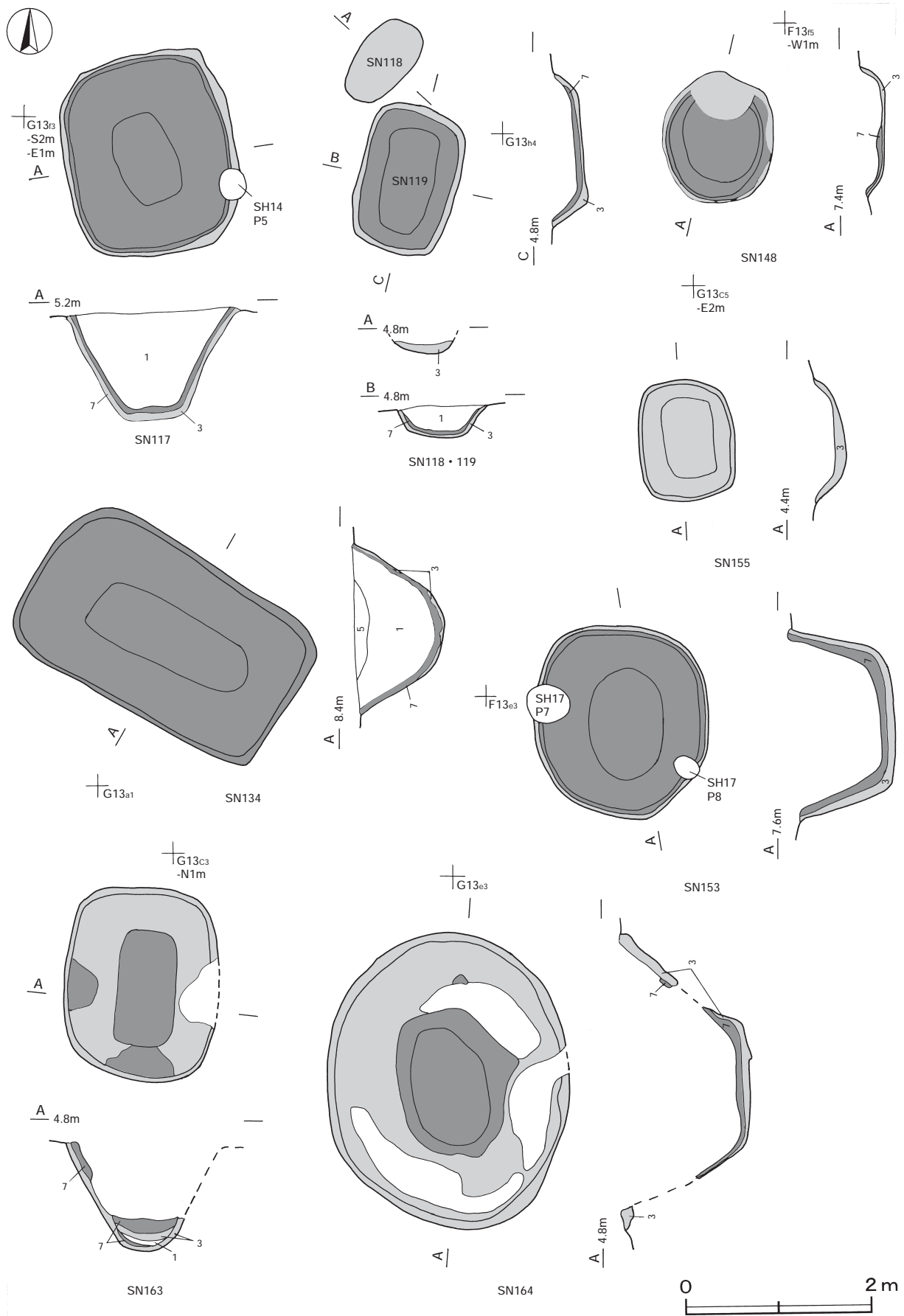
第124図 製塩跡に組み込まれない鹹水槽実測図(4)



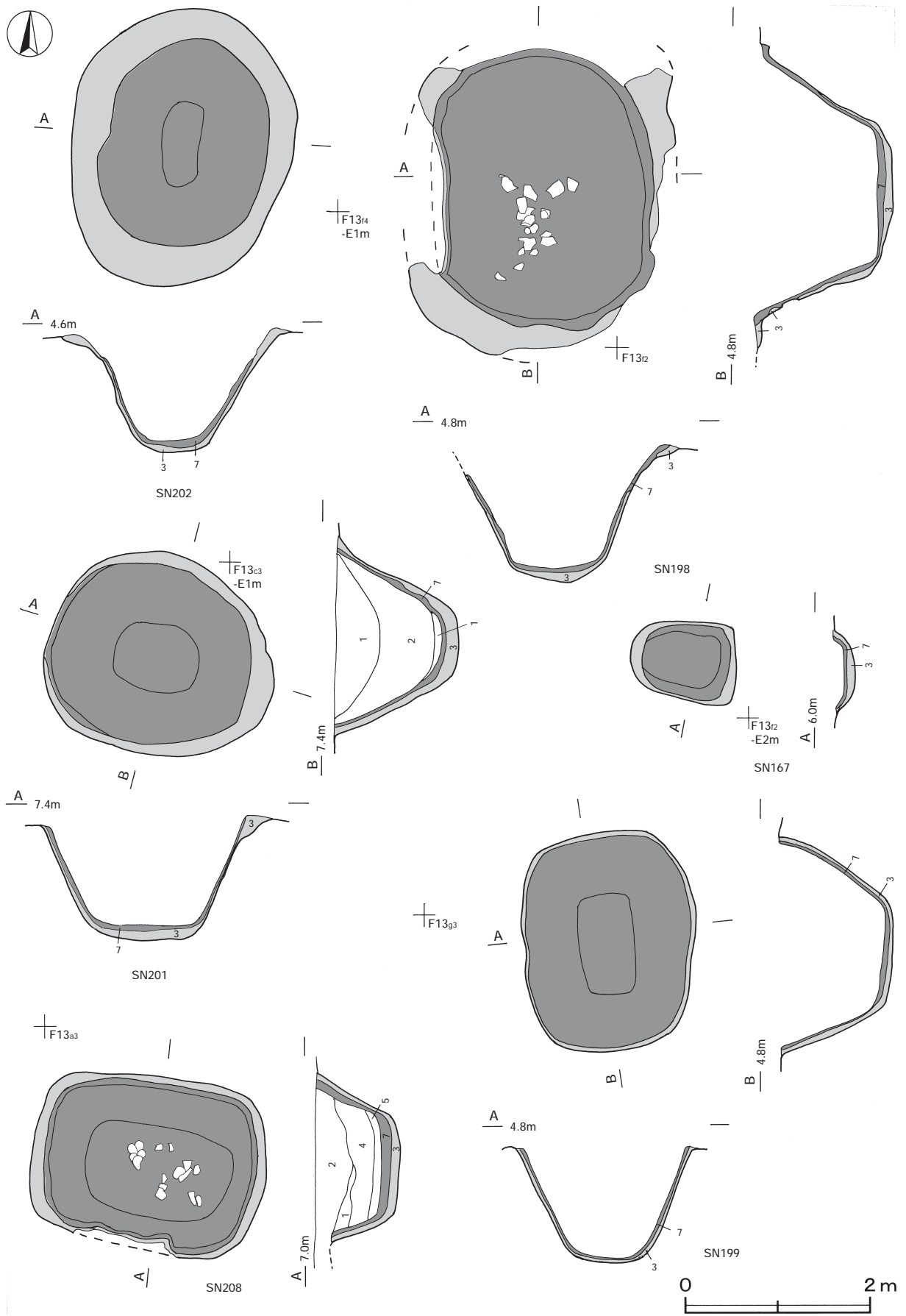
第125図 製塩跡に組み込まれない鹹水槽実測図（5）



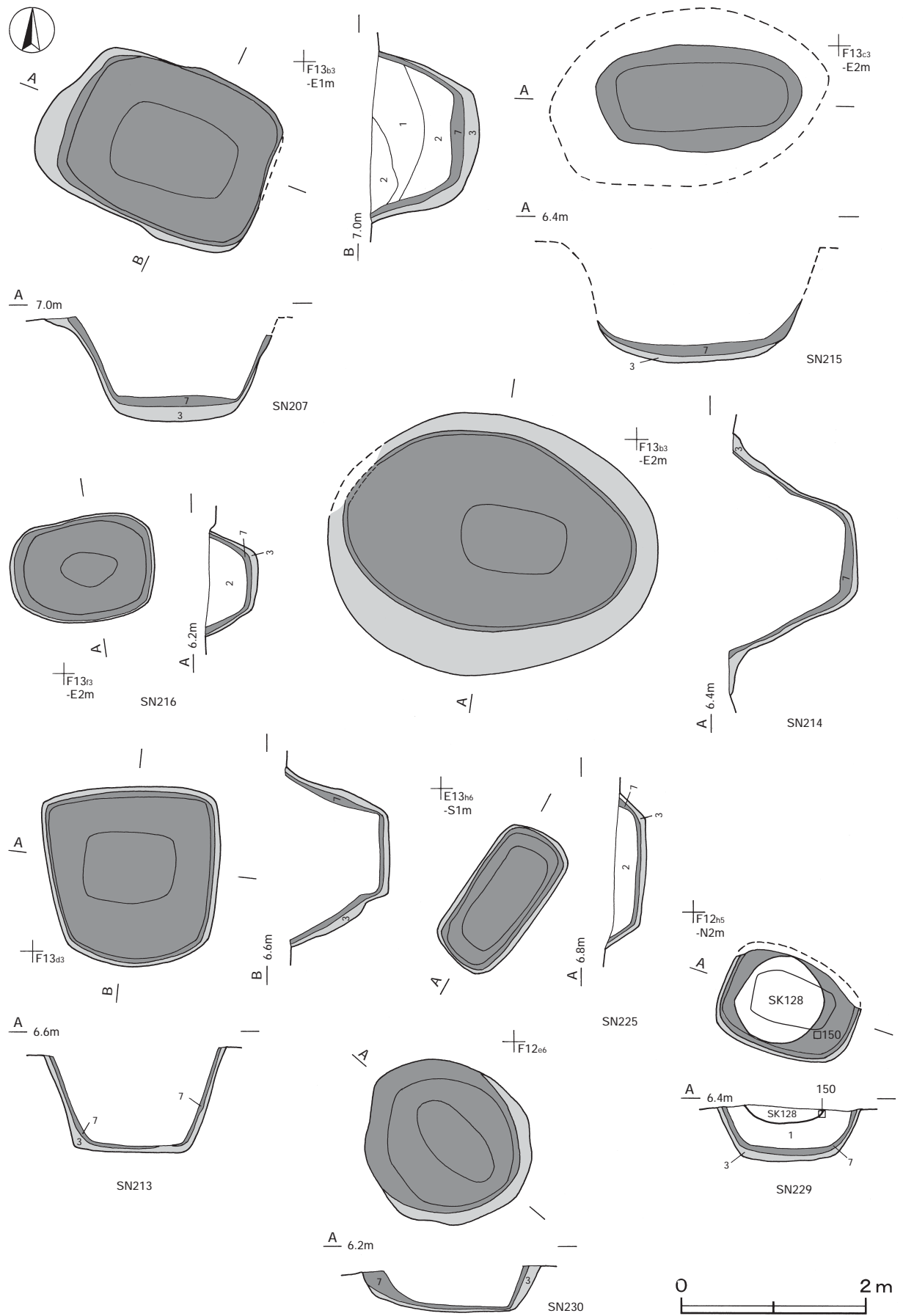
第126図 製塩跡に組み込まれない鹹水槽実測図 (6)



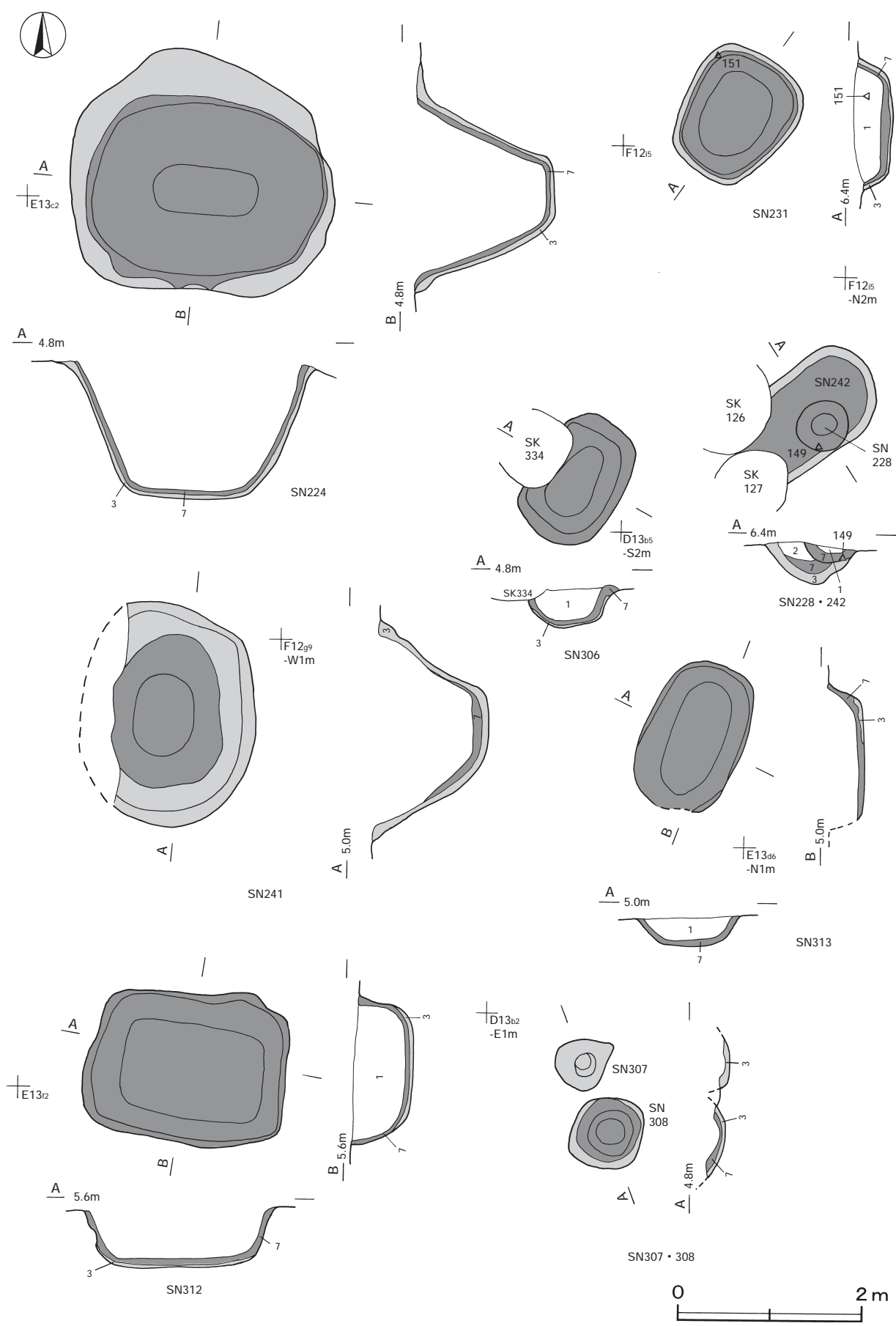
第127図 製塩跡に組み込まれない鹹水槽実測図 (7)



第128図 製塩跡に組み込まれない鹹水槽実測図 (8)



第129図 製塩跡に組み込まれない鹹水槽実測図（9）

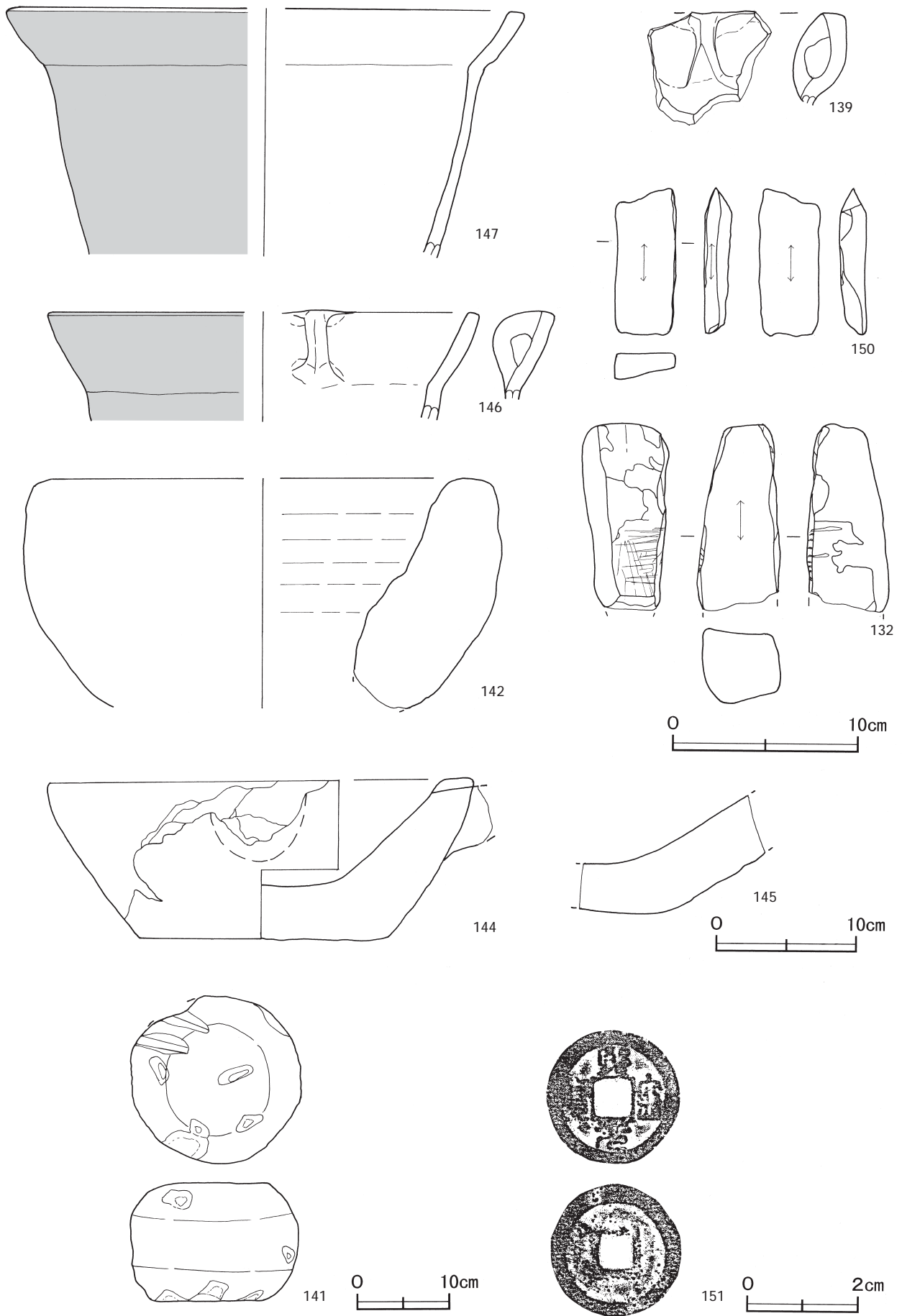


第130図 製塩跡に組み込まれない鹹水槽実測図 (10)

表3 製塩跡に組み込まれない鹹水槽一覧表

遺構番号	区	位置	標高	長軸方向	規模 (m)			形状	黒色土厚 (cm)	粘土厚 (cm)	断面形	壁面	床面	出土遺物	備考
					長軸	短軸	深さ								
SN5	2	F11c4	4.8	N-45°-W	1.8	1.3	0.3	隅丸長方形	1~5	4~10	—	外傾	平坦	—	計測値のみ
SN6	2	F11c4	4.9~5.0	N-51°-W	1.4	1.1	0.4	隅丸長方形	1~3	2~5	—	外傾	平坦	—	計測値のみ
SN8	2	H11c4	4.5~4.6	N-40°-E	1.4	1.3	0.7	正方形	—	8~25	逆台形	緩斜	皿状	—	計測値のみ
SN14	2	H11b6	4.9	N-39°-W	2.5	1.7	0.6	長方形	4	2~10	逆台形	外傾	平坦	—	
SN17	2	I12d8	6.7~6.9	N-50°-W	2.5	1.3	0.2	隅丸長方形	4~6	4~6	皿状	緩斜	平坦	—	
SN19	2	H11b8	4.4~4.5	N-35°-E	1.2	0.7	0.2	長方形	6	2~6	逆台形	外傾	平坦	—	
SN20	2	H11g1	4.2~4.4	N-55°-W	1.8	1.2	0.4	隅丸長方形	1~10	4~10	逆台形	緩斜	平坦	砥石	
SN35	2	H11i5	4.1	N-36°-E	1.6	1.4	0.3	楕円形	—	4~12	逆台形	緩斜	皿状	—	
SN38	2	I13d1	6.8~7.4	N-62°-W	3.7	2.7	1.2	不整楕円形	—	6~18	逆台形	緩斜	平坦	—	
SN42	2	I12a9	6.2~6.4	N-53°-W	2.6	1.4	0.4	隅丸長方形	3~7	12	逆台形	外傾	平坦	—	
SN45	2	I12a6	6.4	N-84°-W	1.7	0.8	0.3	隅丸長方形	4~6	6	逆台形	外傾	平坦	—	
SN46	2	H12j6	6.4~6.6	N-61°-W	(2.2)	1.9	0.9	楕円形	2~8	3~7	逆台形	外傾	平坦	—	
SN51	2	I13g4	7.6~7.7	N-88°-E	2.3	1.3	0.2	楕円形	1~8	1~16	皿状	緩斜	平坦	—	
SN54	2	H12h6	6.2	N-53°-W	1.8	1.1	0.7	楕円形	—	2~22	逆台形	外傾	平坦	内耳鍋	
SN55	2	H12g6	6.4	N-62°-W	1.8	1.3	0.7	楕円形	—	4~14	逆台形	外傾	平坦	—	
SN59	2	H12j7	5.9~6.0	N-6°-E	3.4	2.6	1.4	不整楕円形	2~9	2~9	逆台形	外傾	平坦	—	
SN64	2	H13j1	5.8	N-28°-E	2.5	2.3	1.0	隅丸方形	2~9	1~8	逆台形	外傾	平坦	—	SN66→本跡
SN65	2	H12j0	6.0	N-10°-E	1.5	1.2	0.4	隅丸長方形	4~8	4~6	逆台形	緩斜	平坦	—	
SN66	2	H13j1	5.6	N-57°-W	2.4	2.2	1.3	隅丸方形	3~4	—	逆台形	外傾	平坦	—	本跡→SN64
SN67	2	H13e1	5.2	N-5°-W	(0.9)	(0.8)	0.2	—	3~4	3~5	逆台形	外傾	平坦	—	
SN71	2	G13j3	4.2~4.3	N-14°-E	1.5	1.0	0.3	隅丸長方形	2~4	2~10	逆台形	緩斜	平坦	—	
SN72	2	H13a2	—	N-17°-W	1.1	(0.7)	—	—	—	—	—	—	—	—	計測値のみ
SN73	2	H13C2	4.9~5.0	N-4°-E	2.0	1.3	0.9	隅丸長方形	2~4	2~8	逆台形	外傾	平坦	—	
SN1	2B	M11i9	5.4~5.5	N-50°-W	1.4	0.9	0.2	隅丸長方形	2	5~8	皿状	緩斜	平坦	—	
SN2	2B	M11j9	5.5	N-50°-W	1.0	(0.8)	0.3	隅丸方形	—	5~12	逆台形	外傾	平坦	—	
SN28	4	H12d6	7.3	N-58°-W	2.0	1.1	0.2	隅丸長方形	—	2~11	逆台形	外傾緩斜	平坦	—	SN27・29→本跡
SN31	4	H13d1	7.0~7.1	N-61°-W	2.9	1.2	0.4	長方形	—	8~12	皿状	緩斜	平坦	—	
SN36	4	G12g6	7.8~7.9	N-40°-E	2.7	2.0	0.9	長方形	2~6	4~7	逆台形	外傾	平坦	—	本跡→SN37→SH5
SN37	4	G12g7	7.9~8.0	N-39°-E	(2.0)	1.7	0.6	[長方形]	1~16	3~9	逆台形	外傾	平坦	—	SN36→本跡→SH5
SN38	4	G12j0	7.4	N-67°-W	1.8	1.7	0.7	円形	2~8	6~10	逆台形	外傾	平坦	—	
SN39	4	H13a2	7.0~7.1	N-46°-W	(1.8)	(1.6)	—	方形	—	2~9	逆台形	緩斜	平坦	—	
SN42	4	G12j9	7.8~8.0	N-75°-W	1.5	1.2	0.2	隅丸長方形	16~18	12~14	逆台形	外傾	平坦	—	
SN43	4	G12i0	7.8	N-8°-E	(1.5)	1.1	0.3	[隅丸長方形]	4~8	3~6	—	緩斜	平坦	—	
SN44	4	G13j1	7.1	N-4°-W	(2.1)	(1.9)	1.0	[隅丸長方形]	1~11	1~10	[逆台形]	緩斜	平坦	—	
SN45	4	G13i1	6.7~7.1	N-77°-W	2.5	1.9	0.8	隅丸長方形	1~9	2~12	逆台形	外傾	平坦	—	
SN46	4	G13h1	7.2~7.4	N-64°-W	2.7	2.3	1.2	隅丸長方形	1~4	4~8	U字状	外傾	皿状	—	SN56→本跡
SN47	4	G13h2	7.3~7.4	N-20°-E	1.7	1.2	0.2	楕円形	7~10	—	皿状	緩斜	皿状	—	SN56→本跡
SN48	4	G13j2	6.8	N-7°-E	(1.8)	1.0	0.3	[長方形]	2~7	2~16	[逆台形]	緩斜	平坦	—	
SN50	4	H12c8	5.1	N-12°-E	1.7	1.3	0.5	隅丸長方形	1~10	2~6	逆台形	外傾	平坦	—	
SN51	4	H12b8	5.4~5.5	N-65°-W	1.4	0.7	0.1	隅丸長方形	3~10	2~7	皿状	緩斜	皿状	—	
SN52	4	G13h3	—	N-58°-W	1.5	1.3	—	不整長方形	—	—	—	—	—	—	計測値のみ
SN53	4	H13h3	6.4	N-1°-E	1.7	1.1	—	隅丸長方形	2~8	2~6	—	—	—	—	
SN54	4	H13h4	6.4~6.6	N-60°-W	2.9	2.5	1.5	隅丸長方形	2~10	2~8	逆台形	外傾	平坦	内耳鍋片	
SN55	4	H13j3	6.3~6.4	N-24°-E	1.9	(1.9)	1.2	—	4~24	1~6	逆台形	外傾	皿状	—	
SN56	4	G13h2	6.8~7.0	N-4°-E	2.2	1.7	1.0	隅丸長方形	2~16	2~10	逆台形	外傾	平坦	—	本跡→SN46・47
SN60	4	F13i5	10.3~10.7	N-19°-W	3.9	1.4	0.4	長方形	1~9	1~16	逆台形	緩斜	緩やかな起伏	—	
SN66	4	G12i8	7.1~7.2	N-22°-E	2.6	2.1	1.3	楕円形	1~10	2~12	逆台形	外傾	傾斜	—	
SN76	4	G13e4	6.8~7.0	N-27°-E	2.1	1.4	0.7	長方形	2~8	5	逆台形	外傾	平坦	—	
SN80	4	G12b9	4.8~5.0	N-5°-E	2.6	2.1	—	楕円形	—	—	—	—	—	—	SN群
SN84	4	G13a3	9.5	N-27°-E	(2.6)	(1.6)	1.0	[長方形]	2~5	5~15	逆台形	緩斜	平坦	—	
SN96	4	G13a2	7.7~7.9	N-78°-W	(1.8)	(1.5)	—	不整長方形	2~10	1~10	逆台形	外傾	平坦	—	
SN101	4	F13j6	8.8~8.9	N-61°-E	1.4	1.2	0.2	楕円形	4~7	3~4	逆台形	外傾緩斜	平坦	—	
SN102	4	F13j5	9.0~9.1	N-51°-W	(1.6)	(1.4)	—	方形	2~10	6~12	逆台形	外傾緩斜	平坦	—	
SN103	4	F13j5	8.8	N-56°-W	(1.2)	(1.1)	—	方形	5~10	6~10	—	—	—	—	
SN106	4	G13f2	5.2~5.4	N-4°-E	3.0	2.3	1.2	楕円形	5~12	3~8	U字状	外傾	皿状	—	本跡→SN89
SN107	4	F13e5	9.4~9.5	N-60°-W	2.4	2.0	1.0	不整長方形	3~6	4~8	皿状	緩斜	平坦	—	

遺構番号	区	位置	標高	長軸方向	規模 (m)			形状	黒色土厚 (cm)	粘土厚 (cm)	断面形	壁面	床面	出土遺物	備考
					長軸	短軸	深さ								
SN117	4	G13f3	5.1	N-9°-W	2.2	1.8	1.0	長方形	3~8	2~8	逆台形	外傾	平坦	—	本跡→SH14
SN118	4	G13g3	4.7	N-40°-E	(1.0)	(0.6)	—	楕円形	6~8	—	—	—	—	—	
SN119	4	G13h3	4.6~4.7	N-16°-E	1.6	1.1	0.2	長方形	2~10	1~5	逆台形	緩斜	平坦	—	
SN134	4	F13j1	8.3	N-58°-W	3.6	1.9	1.0	長方形	2~7	2~8	皿状	緩斜	皿状	—	
SN135	4	F13g1	3.6~3.7	N-5°-E	1.3	1.0	0.4	楕円形	2~18	2~4	皿状	緩斜	皿状	—	SN群
SN137	4	F13g4	7.9	N-18°-E	(1.1)	(0.8)	—	方形	10~17	2~4	—	—	—	—	
SN140	4	G13a2	7.3~7.6	N-70°-W	1.9	1.3	1.0	隅丸長方形	3~13	2~6	逆台形	外傾	平坦	—	
SN148	4	F13f4	7.1~7.2	N-13°-E	1.4	1.2	0.2	楕円形	2~7	2~5	逆台形	外傾	平坦	—	
SN153	4	F13e3	7.5	N-1°-W	2.1	1.9	1.1	楕円形	4~13	5~13	逆台形	外傾	平坦	—	本跡→SH17
SN155	4	G13c5	4.1	N-4°-W	1.3	1.1	0.3	隅丸長方形	2~13	—	逆台形	緩斜	平坦	—	
SN163	4	G13c3	4.5~4.6	N-6°-E	2.1	1.7	1.2	楕円形	2~18	5~18	逆台形	外傾 緩斜	平坦	—	
SN164	4	G13e3	4.6	N-10°-E	3.2	2.6	1.4	楕円形	2~17	2~14	逆台形	緩斜	平坦	—	
SN167	4	F13e2	5.8	N-82°-W	1.1	0.9	0.2	方形	4~10	2~7	逆台形	緩斜	平坦	—	
SN168	4	F13e2	6.1	N-12°-E	2.3	1.8	0.8	方形	2~5	2~11	逆台形	緩斜	皿状	—	
SN176	4	—	8.1~8.2	—	—	—	1.2	—	1~8	1~10	逆台形	外傾	平坦	五輪塔,石鍋	計測値のみ
SN188A	4	F12j9	5.0	N-9°-W	2.8	2.4	0.5	長方形	6~18	4~10	逆台形	外傾	平坦	—	SN群
SN188B	4	F12j9	5.0	N-9°-W	2.8	2.4	0.9	長方形	4~10	3~10	逆台形	外傾	平坦	—	SN群
SN189	4	F12g9	4.7~4.8	N-76°-E	2.7	2.0	1.1	長方形	5	2~5	逆台形	外傾	平坦	—	SN群
SN190	4	F12j9	4.8~4.9	N-7°-E	[2.5]	2.3	0.8	正方形	4~15	3	逆台形	緩斜	平坦	—	SN群
SN191	4	F12j0	5.1	N-0°	2.4	2.1	1.1	楕円形	4~19	3	皿状	外傾	皿状	—	SN群
SN192	4	F12i0	5.0	N-102°-E	3.1	2.5	1.2	楕円形	5~25	3	逆台形	外傾	平坦	甕	SN群
SN193	4	F13h1	4.7	N-0°	3.2	2.9	1.0	楕円形	8	5	逆台形	緩斜	平坦	—	SN群
SN194	4	F13j2	4.7	N-6°-W	3.1	2.7	1.3	楕円形	2~12	2	逆台形	外傾	平坦	—	SN群
SN195	4	F13i2	4.7	N-90°-E	3.2	2.6	1.3	長方形	2~20	3~12	逆台形	外傾	平坦	—	SN群
SN196	4	F13h2	4.7~4.8	N-0°	3.0	2.6	1.2	楕円形	3~20	5	皿状	外傾	皿状	—	SN群
SN197	4	F12f9	4.3~4.5	N-53°-E	2.3	2.0	0.9	楕円形	2~8	5~15	逆台形	外傾	平坦	—	SN群
SN198	4	F13e1	4.4~4.6	N-1°-E	(3.2)	(2.5)	(1.3)	[楕円形]	1~10	1~6	逆台形	外傾	平坦	石鍋片	
SN199	4	F13f3	4.6	N-4°-W	2.1	1.7	0.9	隅丸長方形	5	2	逆台形	外傾	平坦	—	
SN201	4	F13c3	7.2~7.3	N-77°-W	2.5	1.2	1.1	楕円形	1~15	1~7	皿状	外傾	皿状	—	
SN202	4	F13e3	4.5	N-11°-E	3.0	2.4	1.3	楕円形	5~8	4~9	逆台形	緩斜	平坦	—	
SN203	4	G12a0	4.6	N-90°-E	2.5	2.1	1.3	楕円形	5~10	2~6	皿状	外傾	皿状	—	SN群
SN204	4	G13a1	4.8~5.0	N-6°-E	3.2	2.4	1.3	楕円形	2~15	2~6	逆台形	外傾	平坦	—	SN群
SN205	4	G12a0	4.6	N-24°-E	1.4	1.1	0.4	長方形	2~7	2	逆台形	外傾	平坦	—	SN群
SN206	4	G13b1	5.4~5.5	N-0°	2.5	1.7	1.3	不定形	2~10	2~16	逆台形	外傾	平坦	甕	SN群
SN207	4	F13b2	6.6~6.9	N-70°-W	2.6	1.9	1.0	隅丸長方形	2~17	3~15	逆台形	外傾	平坦	—	
SN208	4	F13a3	6.9	N-80°-W	2.5	1.9	0.7	隅丸長方形	1~10	3~13	逆台形	外傾	平坦	—	
SN213	4	F13c3	6.4	N-1°-W	1.9	1.9	1.1	不整形	3~7	4	逆台形	外傾	平坦	—	
SN214	4	F13b3	6.2	N-80°-W	3.6	2.9	1.4	楕円形	2~8	2~11	逆台形	緩斜	平坦	内耳鍋片	
SN215	4	F13c3	6.0~6.1	N-84°-E	[3.1]	[1.9]	[1.3]	[楕円形]	5	13	逆台形	外傾	平坦	—	
SN216	4	F13e3	6.0~6.1	N-86°-E	1.5	1.2	0.5	隅丸長方形	3~7	4	逆台形	外傾 緩斜	平坦	—	
SN224	4	E13b2	4.6	N-6°-E	2.9	2.5	1.5	不定形	2~4	7	逆台形	外傾	平坦	—	
SN225	4	E13h6	6.4	N-33°-E	1.7	0.8	0.4	隅丸長方形	4~6	4	逆台形	緩斜	平坦	—	
SN228	4	F12h4	6.3	N-49°-E	0.6	0.6	0.1	円形	—	6~12	皿状	緩斜	皿状	—	SN242→本跡
SN229	4	F12g5	6.3	N-73°-W	1.5	(1.1)	0.4	[隅丸長方形]	2~8	4~8	逆台形	外傾	平坦	砥石	本跡→SK128
SN230	4	F12e5	5.9~6.0	N-51°-W	1.9	1.7	0.4	不整円形	2~8	1~16	逆台形	外傾 緩斜	平坦	—	
SN231	4	F12h5	6.2~6.3	N-35°-E	1.4	1.2	0.3	隅丸長方形	1~4	2~8	逆台形	外傾	平坦	古銭	
SN241	4	F12g8	4.7~4.8	N-12°-E	(3.1)	(2.5)	—	[不整楕円形]	2~9	2~10	逆台形	緩斜	平坦	—	
SN242	4	F12h4	6.3	N-54°-E	(1.7)	1.0	0.2	[楕円形]	6~11	2~14	皿状	緩斜	皿状	—	本跡→SN228, SK126-127
SN306	4	D13b4	4.6	N-29°-E	1.5	1.0	0.4	隅丸長方形	1~3	2~6	逆台形	外傾 緩斜	平坦	—	本跡→SK334
SN307	4	D13b2	4.6	N-61°-E	(0.6)	(0.6)	—	円形	1~3	—	—	緩斜	平坦	—	
SN308	4	D13b2	4.4~4.5	N-61°-E	0.9	0.8	0.1	楕円形	1~4	1~7	皿状	緩斜	皿状	—	
SN312	4	E13e2	5.5	N-83°-W	2.2	1.6	0.7	隅丸長方形	1~3	4~7	逆台形	外傾	平坦	—	
SN313	4	E13c5	4.8~4.9	N-23°-E	1.7	1.1	0.3	楕円形	2~5	3~7	逆台形	外傾	平坦	—	



第131図 製塩跡に組み込まれない鹹水槽出土遺物実測図

製塩跡に組み込まれない鹹水槽出土遺物観察表（第131図）

番号	器形	器質	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
139	内耳鍋	土師質土器	—	(5.0)	—	石英	橙	普通	内・外面器面荒れ	SN54内	5%
146	内耳鍋	土師質土器	[22.6]	(6.0)	—	雲母	灰	普通	内・外面煤付着	SN214内	5%
147	内耳鍋	土師質土器	[28.0]	(13.4)	—	雲母	明赤褐	普通	内・外面ナデ，外面煤付着	SN214内	10%

番号	器種	口径	器高	底径	重量	材質	特徴	出土位置	備考
132	砥石	(10.1)	4.5	4.0	(278)	凝灰岩	砥面1面	SN20内	PL46
141	五輪塔	(18.0)	18.5	12.8	(3,520)	砂岩	水輪部	SN176内	
142	石鍋カ	(12.5)	[23.0]	—	(2,710)	砂岩	体部のみ	SN176内	
144	石鍋	11.6	(30.3)	18.0	(3,630)	砂岩	火熱痕有り，片口カ	SN198内	
145	石鍋	—	(8.3)	—	(1,200)	砂岩	底部から口縁部	SN198内	
150	砥石	3.3	1.4	8.0	54	凝灰岩	砥面4面	SN229内	

番号	銭名	径	孔径	厚さ	重さ	初铸年	材質	特徴	出土位置	備考
151	熙寧元寶	2.44	0.66	0.09	3.10	1068	銅	篆書	SN231内	

2 建物跡

今回の調査で建物跡38軒を確認した。ここでは、原則的に以下の条件を満たす遺構を建物跡として報告することにした。柱穴列のみ確認できた掘立柱建物跡についても建物跡に含め、ここで取り上げる。

- (1) 床面と考えられる黒色土を貼り付けた締まりのある平坦な面があるもの。遺構によっては、複数の生活面が認められることがある。
- (2) 上屋を想定できる柱穴が配されている。
- (3) 炉が設けられている。
- (4) 生活にかかわる遺物が出土している。
- (5) 遺跡が砂丘上にあることから(1)～(4)までの条件は満たさないが、調査段階で建物跡と判断することができたもの。

炉は黒色土で構築され、底面から焼砂が検出されたものである。土坑は建物跡の内・外に存在する。黒色土で構築されたものとそうでないものがある。その用途については不明である。柱穴や炉、遺物は黒色土の範囲外から検出されることもあり、本建物に伴うと判断したものはその遺構で報告した。実測図中、ピットを含め確認された面ごとに第1次面、第2次面に分けて記載したが、必ずしも生活面の数とは一致しない。ここで報告する建物跡の用途としては、生活の場、作業場、倉庫などが想定される。

なお、建物跡や後に報告する整地面に伴うと判断された貝集積地や集石は、同じ建物跡や整地面の項目中で報告するが、伴わないと判断された貝集積地や集石については、後の項目で報告する。

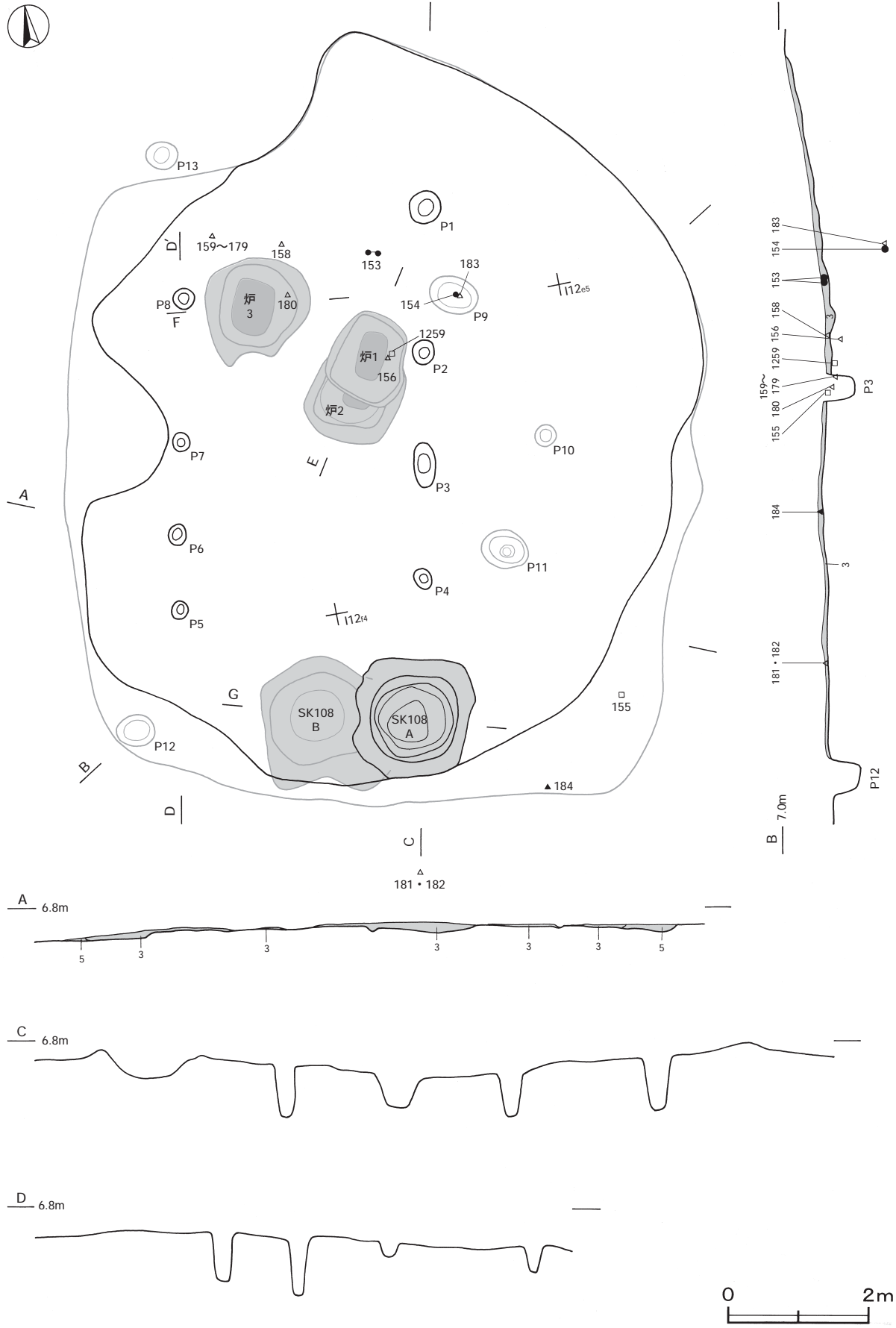
第1号建物跡 2区S I-1（第132～136図）

位置 調査区中央部 I12e4区を中心に位置している。西には第2号建物跡が確認されている。

確認状況 表砂を3.5m除去し、標高6.3mで黒色土面を確認した。上面はほぼ平坦であるが、北東部は緩やかに傾斜している。黒色土面から複数の炉と土坑、南北に並ぶ柱穴8か所が確認された。

規模と施設 黒色土の範囲は南北11m、東西9mの不定形である。しまりのある黒色土の周辺には、これらが流れ出した締まりのない黒色土が広がっている。本建物跡内には炉3基、土坑2基が構築されている。

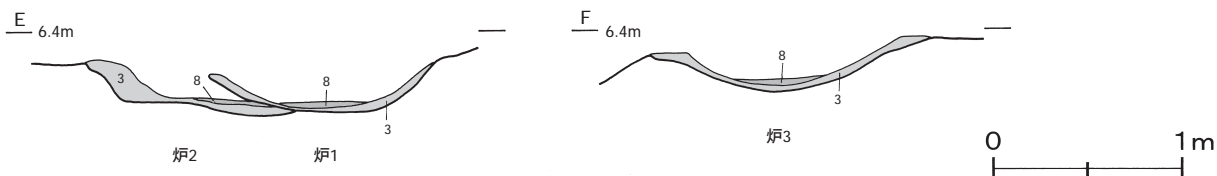
床 ほぼ平坦で、厚さ10cmの黒色土を貼り付けている。床面は主に黒色土A層で、第5層は黒色土C層である。



第132图 第1号建筑物迹实测图

炉（第133図） 3基とも中央部に位置しており，第1号炉は第2号炉の上部に造り替えたものである。第1～3号炉の底面からは，赤褐色の焼砂が検出されている。

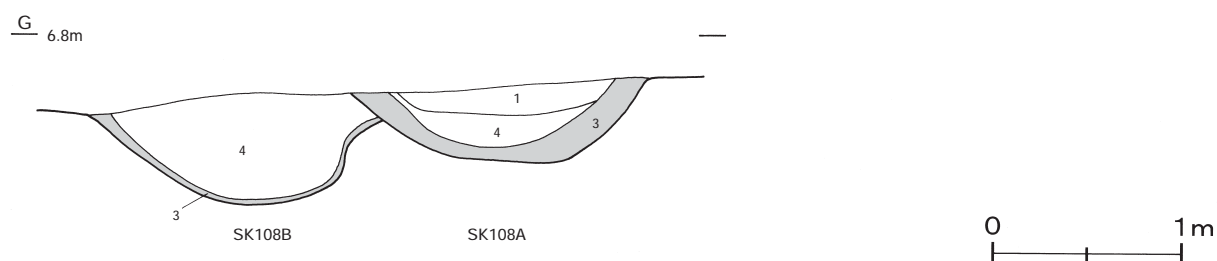
土層断面図中，第3層は炉を構築した黒色土 A 層である。黒色土の厚さは第1・3号炉の底部がやや薄く，第1号炉は最大で5 cm，第2号炉は15cm，第3号炉は7 cm である。



第133図 第1号建物跡炉土層図

ピット 13か所。P2・P8が深さ20・34cm とやや浅いが，その他のピットは深さ40～100cm である。P1～P8は3基の炉を囲み，南北を軸として配されていることから，上屋を支えた柱穴と考えられる。P9～P13は黒色土を除去した後に検出されていることから，柱穴の移動により黒色土で埋め戻された可能性が高い。

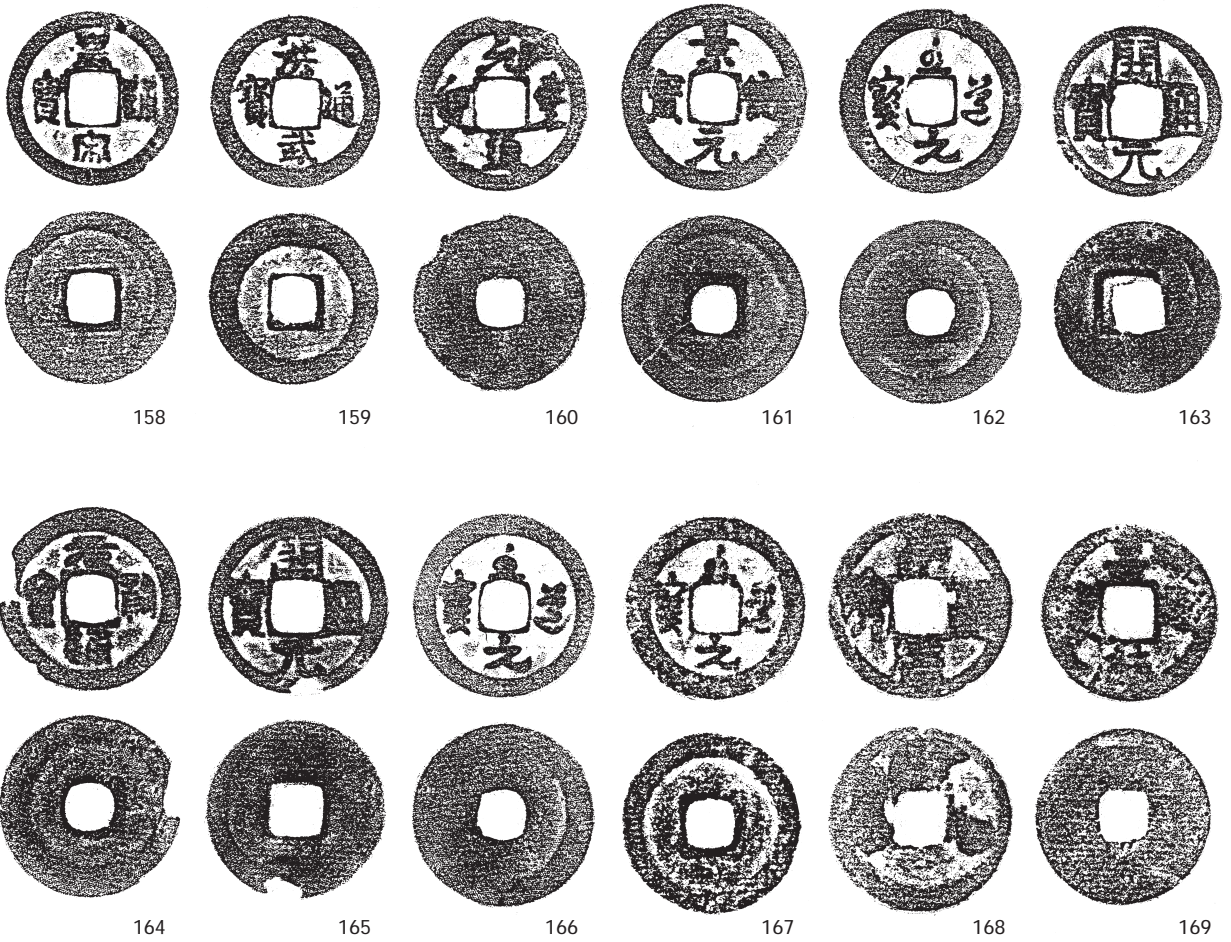
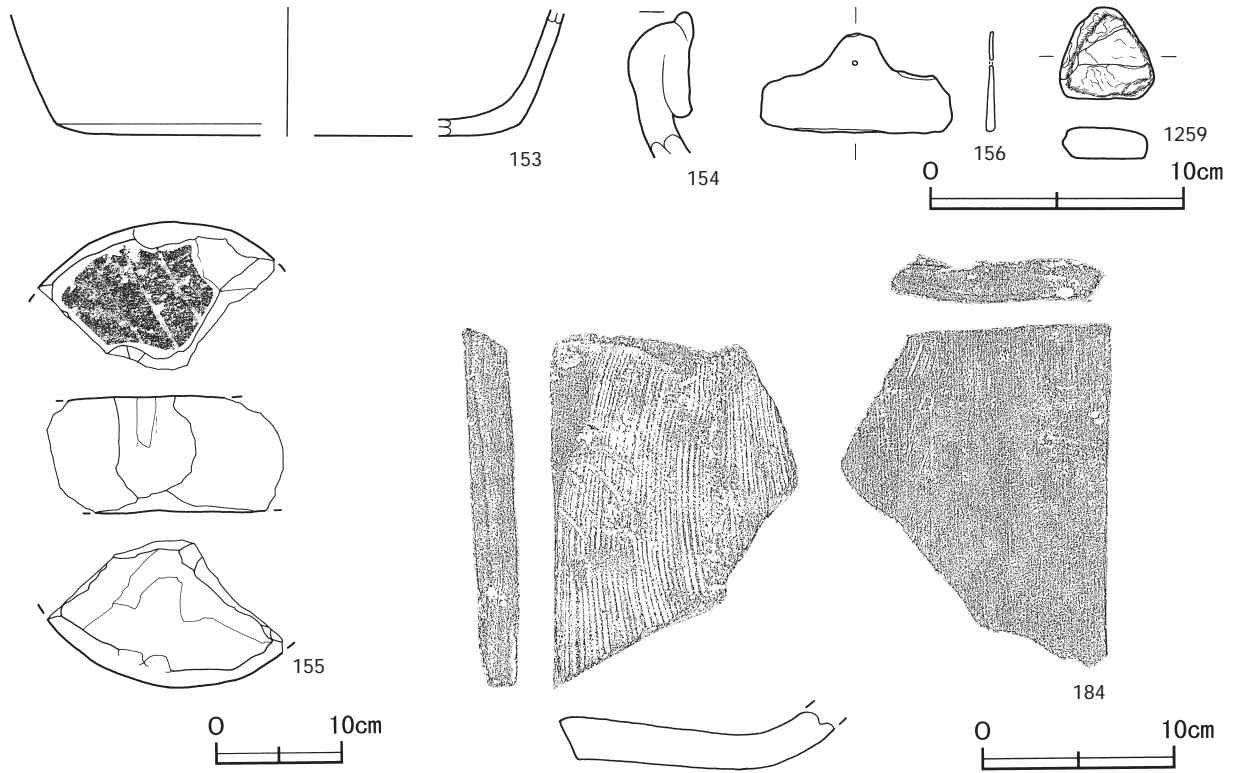
土坑（第134図） 2基とも南部に位置し，黒色土で構築されている。規模と形状が類似していることから，第108A号土坑は第108B号土坑を造り替えたものと判断した。第108A号土坑は砂を40cm掘り込み，厚さ6～15cmの黒色土を貼り付けて構築されている。第108B号土坑は砂を60cm掘り込み，厚さ2～8cmの黒色土を貼り付けて構築されている。



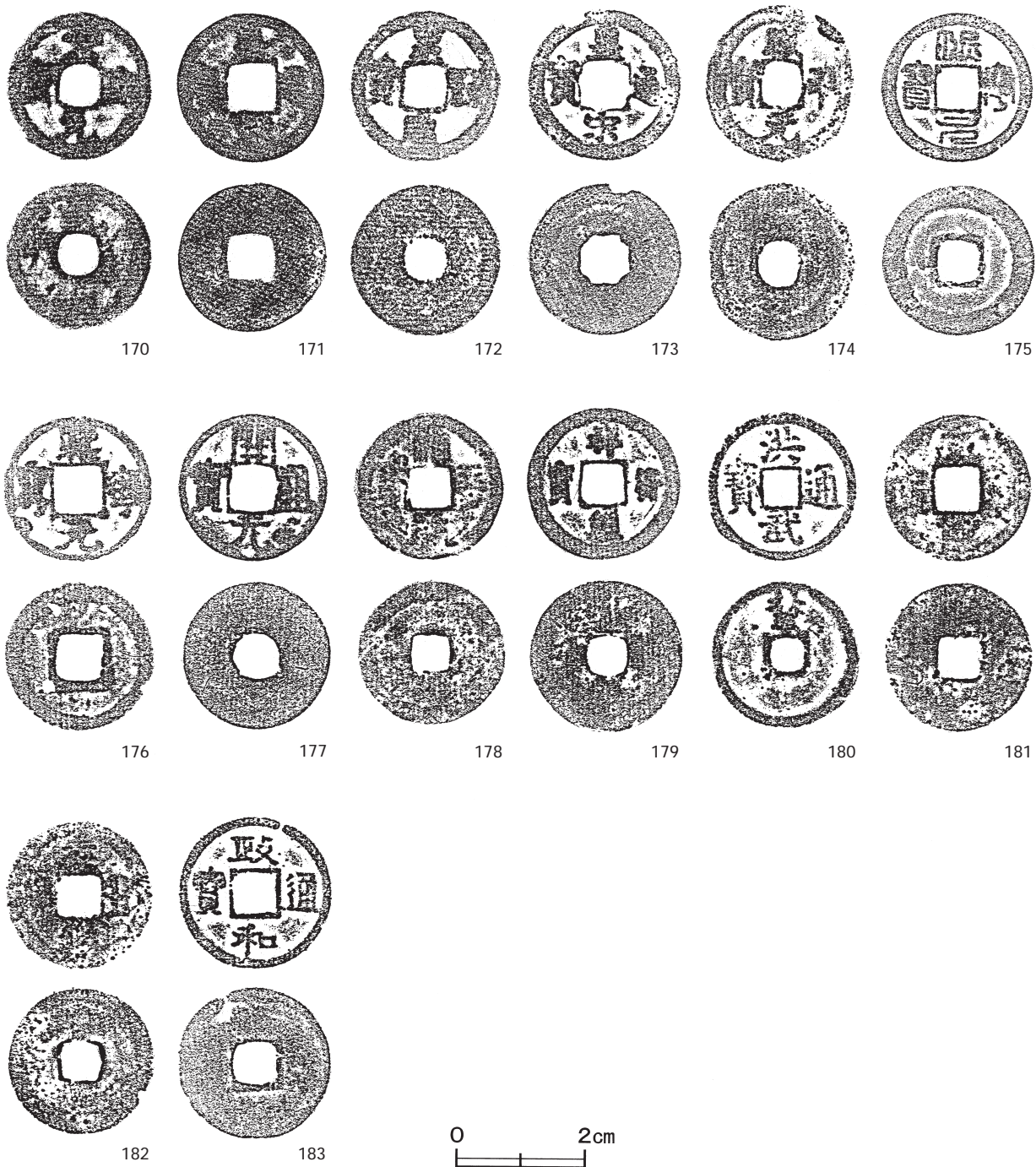
第134図 第1号建物跡土坑土層図

遺物出土状況 土師質土器片34点（皿31，内耳鍋3），陶器片1点（甕），石器2点（石臼，火打石），金属製品29点（火打金2，鏝1，古銭26），瓦片1点（平瓦）が出土している。181・182は南部砂層，153・155・158～179・184は黒色土中，180は黒色土面を除去した層，156・1259は第1号炉内，154・183はP9の覆土中から出土している。26枚の古銭はほとんどが黒色土中から出土しており，159～179は北西部の黒色土中から一括して出土している。火打金と火打石は第1号炉内から出土している。土師質土器片は細片のため図示できなかった。

所見 炉や土坑には造り替えが見られ，南北に並ぶピットも検出されていることから，建物跡と判断した。炉や土坑の検出状況から第1・2号炉，第108A号土坑が最終生活時に機能し，第3号炉，第108B号土坑が構築当初に機能していたものと考えられる。第1号炉内から出土している火打石と火打金は，セットで使用され炉内に遺棄されたものである。出土銭の銭文は不鮮明なものが多い。



第135図 第1号建物跡出土遺物実測図(1) [古銭は原寸大]



第136図 第1号建物跡出土遺物実測図(2)

第1号建物跡出土遺物観察表(第135・136図)

番号	器形	器質	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
153	内耳鍋	土師質土器	—	(5.1)	[18.4]	雲母	赤	普通	内・外面ナデ, 体外下端ヘラ削り	北部黒色土中	5%
番号	器形	器質	口径	器高	底径	胎土・色調	絵付・釉薬	文様・特徴	産地・年代	出土位置	備考
154	甕	陶器	—	(5.5)	—	石英・長石	—	口縁部のみ	常滑, 15C前半	P9内	9型式

番号	器種	長さ(径)	幅	厚さ	重量	材質(胎土)	特徴	出土位置	備考
155	石臼	[26.4]	—	9.2	(2,350)	安山岩	下臼	南部黒色土中	
1259	火打石	3.7	3.8	1.3	23.2	瑪瑙	摩滅の集中箇所有り	炉1内	
156	火打金	3.9	7.6	0.4	31.1	鉄	孔有り	炉1内	PL52
184	平瓦	(17.8)	(14.3)	2.1	(73.0)	長石・石英	1枚作り, 凹面ヘラケズリ凸面ナデ	南部黒色土中	10%

番号	銭名	径	孔径	厚さ	重さ	初鑄年	材質	特徴	出土位置	備考
158	皇宋通寶	2.30	0.66	0.04	(2.44)	1038	銅	真書	北西部黒色土中	
159	洪武通寶	2.28	0.59	0.10	3.06	1368	銅	真書	北西部黒色土中	
160	元豊通寶	2.32	0.68	0.10	(3.16)	1078	銅	行書, 欠け	北西部黒色土中	
161	景德元寶	2.48	0.61	0.09	3.36	1004	銅	真書, 割れ	北西部黒色土中	
162	至道元寶	2.46	0.60	0.08	3.62	995	銅	草書	北西部黒色土中	
163	開元通寶	2.27	0.66	0.12	3.40	621	銅	真書	北西部黒色土中	
164	元祐通寶	2.42	0.59	0.08	(2.94)	1086	銅	篆書, 欠け	北西部黒色土中	
165	開元通寶	2.36	0.67	0.07	(2.84)	621	銅	真書, 欠け	北西部黒色土中	
166	至道元寶	2.43	0.58	0.08	3.18	994	銅	草書	北西部黒色土中	
167	至道元寶	2.41	0.58	0.11	3.46	994	銅	草書	北西部黒色土中	
168	□□□□	2.48	0.64	0.08	3.12	—	銅	判読不能, 模鑄	北西部黒色土中	
169	嘉祐元寶	2.36	0.66	0.05	2.76	1056	銅	真書, 模鑄	北西部黒色土中	
170	□□元寶	2.30	0.61	0.07	2.60	—	銅	判読不能, 円孔, 模鑄	北西部黒色土中	
171	皇宋通寶	2.34	0.68	0.09	2.84	1038	銅	模鑄	北西部黒色土中	
172	皇宋通寶カ	2.41	0.57	0.11	3.54	1038	銅	真書, 模鑄	北西部黒色土中	
173	皇宋通寶	2.39	0.73	0.10	(3.52)	1038	銅	真書, 星形孔	北西部黒色土中	
174	咸平元寶	2.33	0.59	0.13	2.72	998	銅	真書, 円孔, 模鑄	北西部黒色土中	
175	熙寧元寶	2.38	0.61	0.13	3.96	1068	銅	篆書	北西部黒色土中	
176	熙寧元寶	2.33	0.73	0.07	2.58	1068	銅	真書	北西部黒色土中	
177	開元通寶	2.33	0.66	0.09	3.30	621	銅	真書, 円孔	北西部黒色土中	
178	治平元寶	2.34	0.63	0.09	2.84	1064	銅	篆書	北西部黒色土中	
179	祥符通寶	2.41	0.60	0.10	3.84	1008	銅	真書	北西部黒色土中	
180	洪武通寶	2.36	0.49	0.14	4.20	1368	銅	真書, 背上「北平」マ頭・重点通	炉3内	
181	□□□□	2.30	0.60	0.08	2.62	—	銅	判読不能, 模鑄	南部砂層	
182	元豊通寶	2.31	0.57	0.09	3.26	1048	銅	模鑄	南部砂層	
183	政和通寶	2.39	0.62	0.07	2.78	1111	銅	分楷, 割れ	P9内	

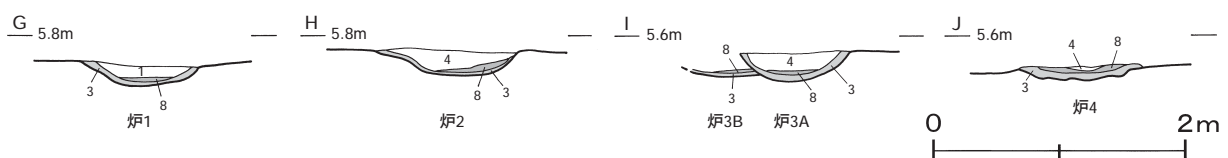
第2号建物跡 2区S I-2 (第137~145図)

位置 調査区中央部 I12e1区を中心に位置している。

確認状況 表砂を3m除去し、標高約5.5mから第1次面である黒色土面を確認した。上面はほぼ平坦で、複数の炉と南北に並ぶ柱穴7か所が確認された。さらに黒色土を5cm除去すると、第2次面が確認され、複数の土坑とピットが検出された。

規模と施設 第1次面の黒色土の範囲は南北10.5m、東西4mの南北に延びる不定形である。第2次面の黒色土の範囲は南北12m、東西9.6mの不定形で、炉5基、土坑8基が構築されている。

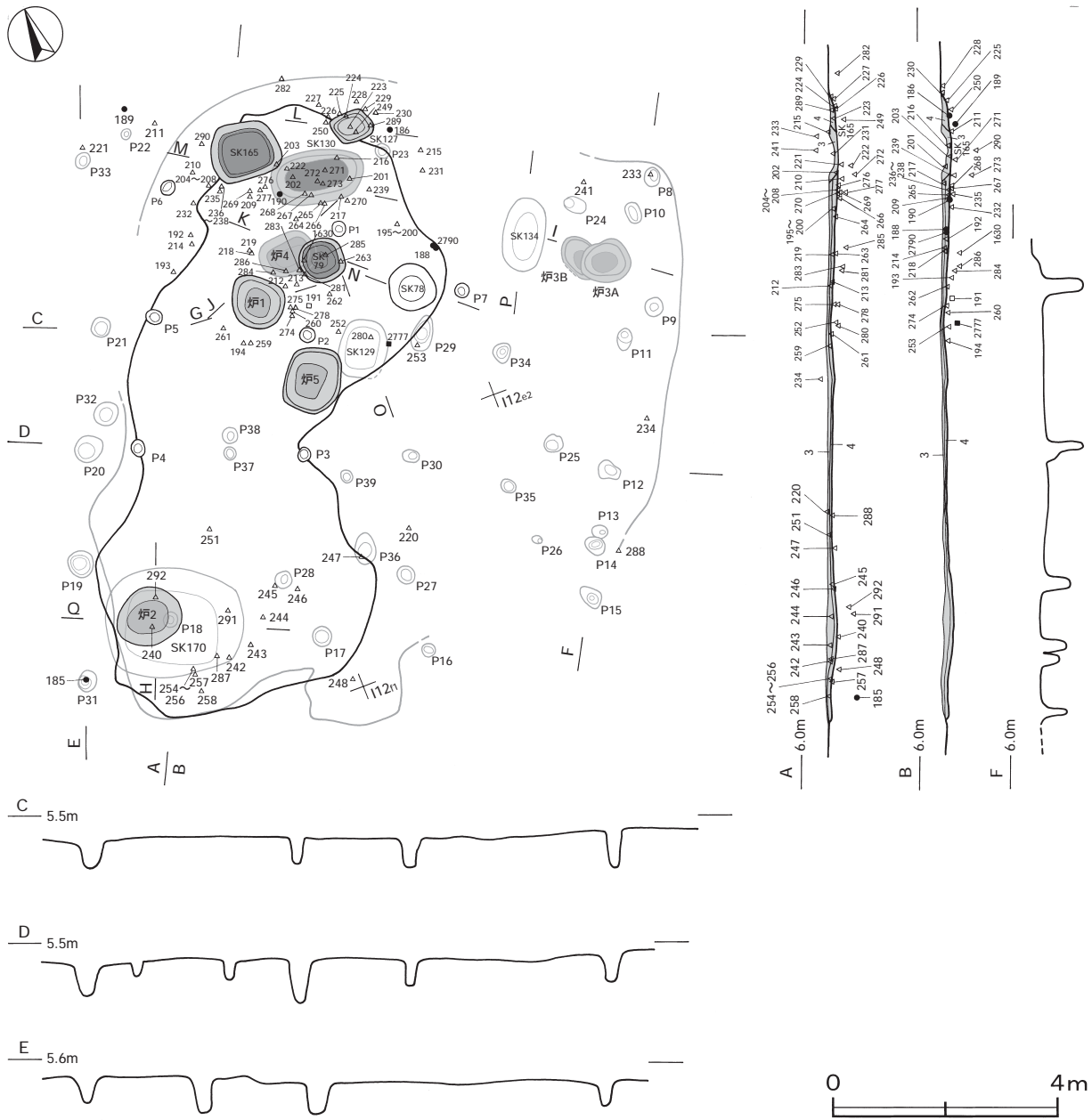
床 第1・2次面とも厚さ約4~6cmの黒色土を貼り付けている。土層断面図中、第3層は締めりのある黒色土A層、第4層は建物構築の際に整地した黒色土B層である。



第137図 第2号建物跡炉土層図

炉（第137図） 第1・4・5号炉は中央部，第2号炉は南西部，第3A・B号炉は東部に位置している。第4号炉は第79号土坑に掘り込まれており，第3A・B号炉はB号からA号炉へ造り替えが行われている。

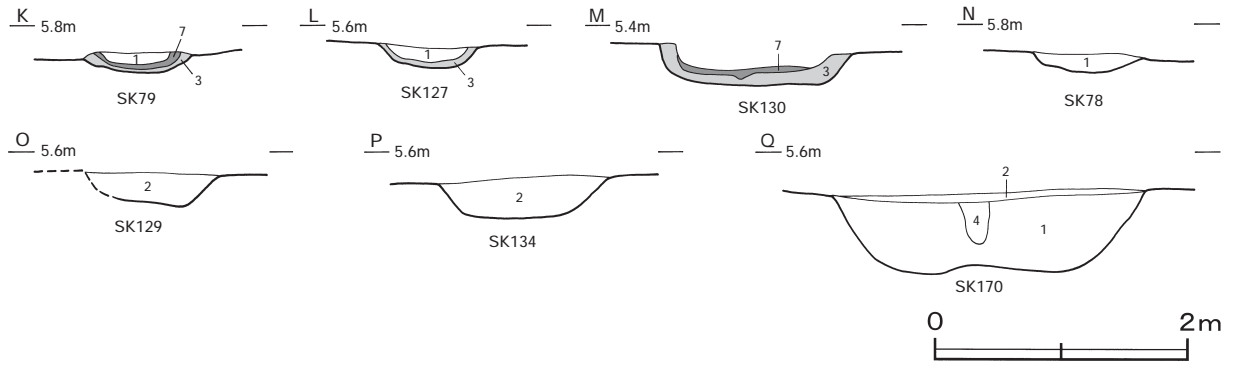
規模はほぼ同じで，第1・2号炉は厚さ2～7cm，第3・4号炉は厚さ3～8cmの黒色土で構築されている。



第138図 第2号建物跡実測図

ピット 39か所。深さは40～70cmで，上屋を支えた柱穴か間仕切のための柱穴と考えられる。

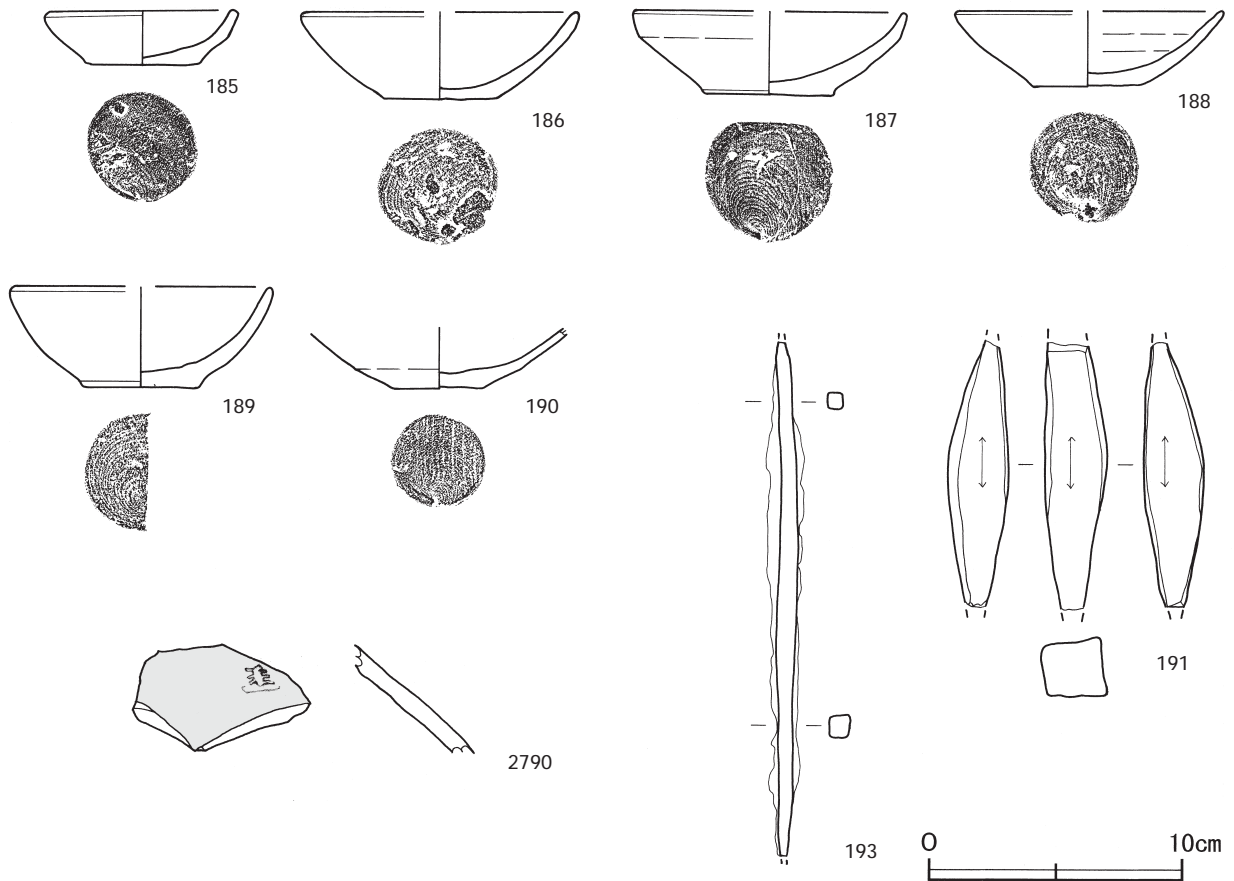
土坑（第139図） 黒色土で構築された第78・79・127・129・130・134・165号土坑は中央部，第170号土坑は南西部に位置している。黒色土で構築された土坑の中で，第130号土坑は隅丸長方形で底部に粘土層が確認されている。また，第79号土坑は第4号炉を掘り込んで構築されている。



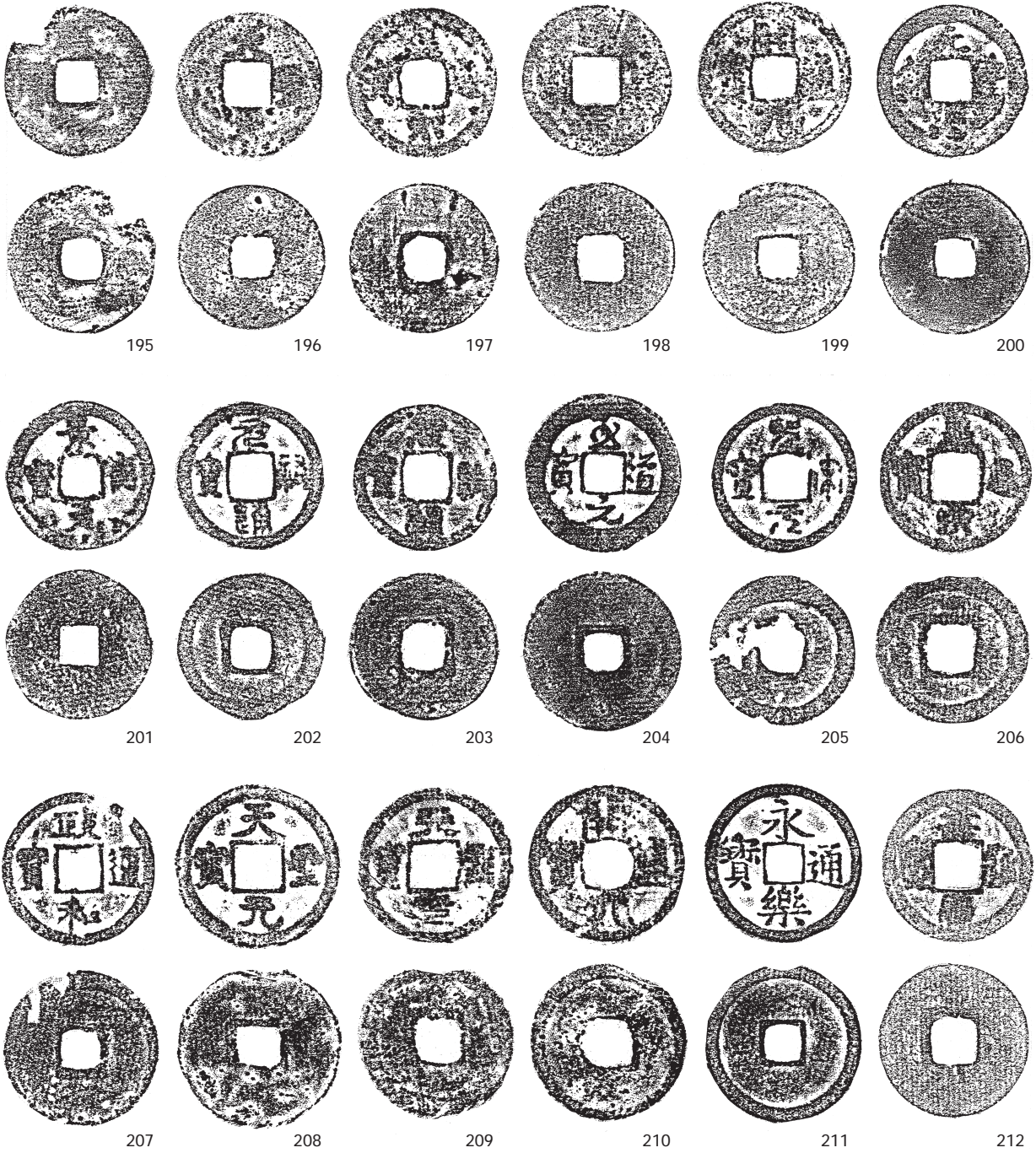
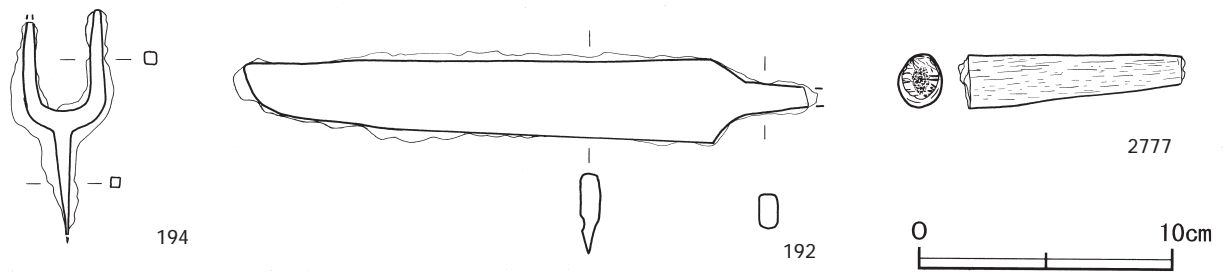
第139図 第2号建物跡土坑土層図

遺物出土状況 土師質土器片39点（皿38，内耳鍋1），陶器片1点（甕），石器1点（砥石），金属製品99点（古銭）が出土している。185はP31内，188・190は北部の黒色土中，186・189は北部の黒色土下の砂層から出土している。192は北西部の2次黒色土中から出土しており，刀身部の遺存も良い。古銭の多くは，中央部から北部にかけての黒色土面を除去した下層から出土している。267の「朝鮮通寶」は北部の黒色土を除去した砂層から出土している。

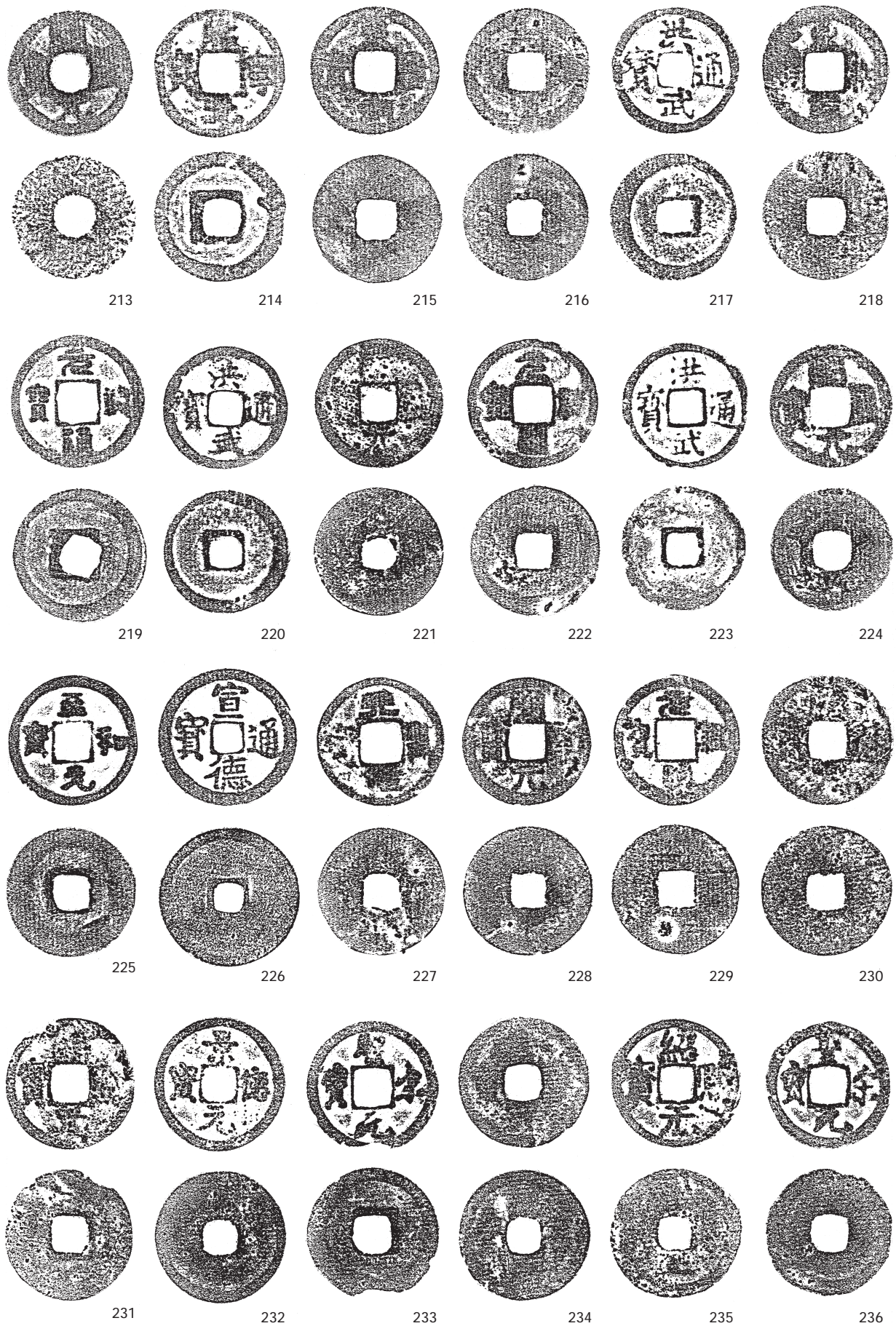
所見 土層や床面の検出状況から，2時期にわたって生活が営まれた建物と考えられ，特に，日常雑器類の出土が多い。古銭の多くが北部の黒色土下の砂層から出土しており，構築以前に遺棄されたか，意図的に蒔かれたものと推測される。中でも「宣徳通寶」は初鑄年が1433年と最も新しく，銭文も鮮明である。また，「朝鮮通寶」も1枚出土している。時期は，出土遺物から15世紀後半以降に構築されたものと考えられる。



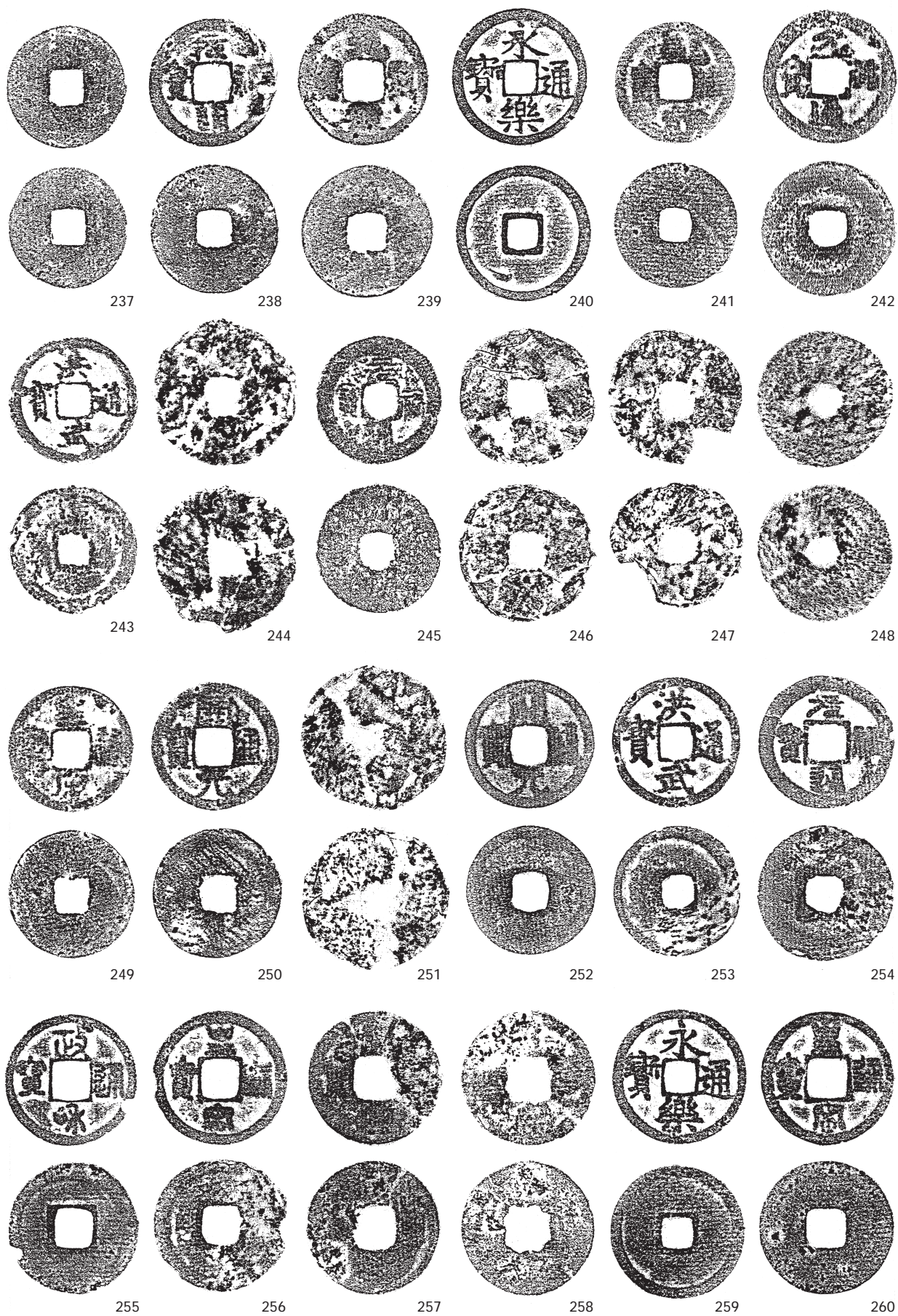
第140図 第2号建物跡出土遺物実測図（1）



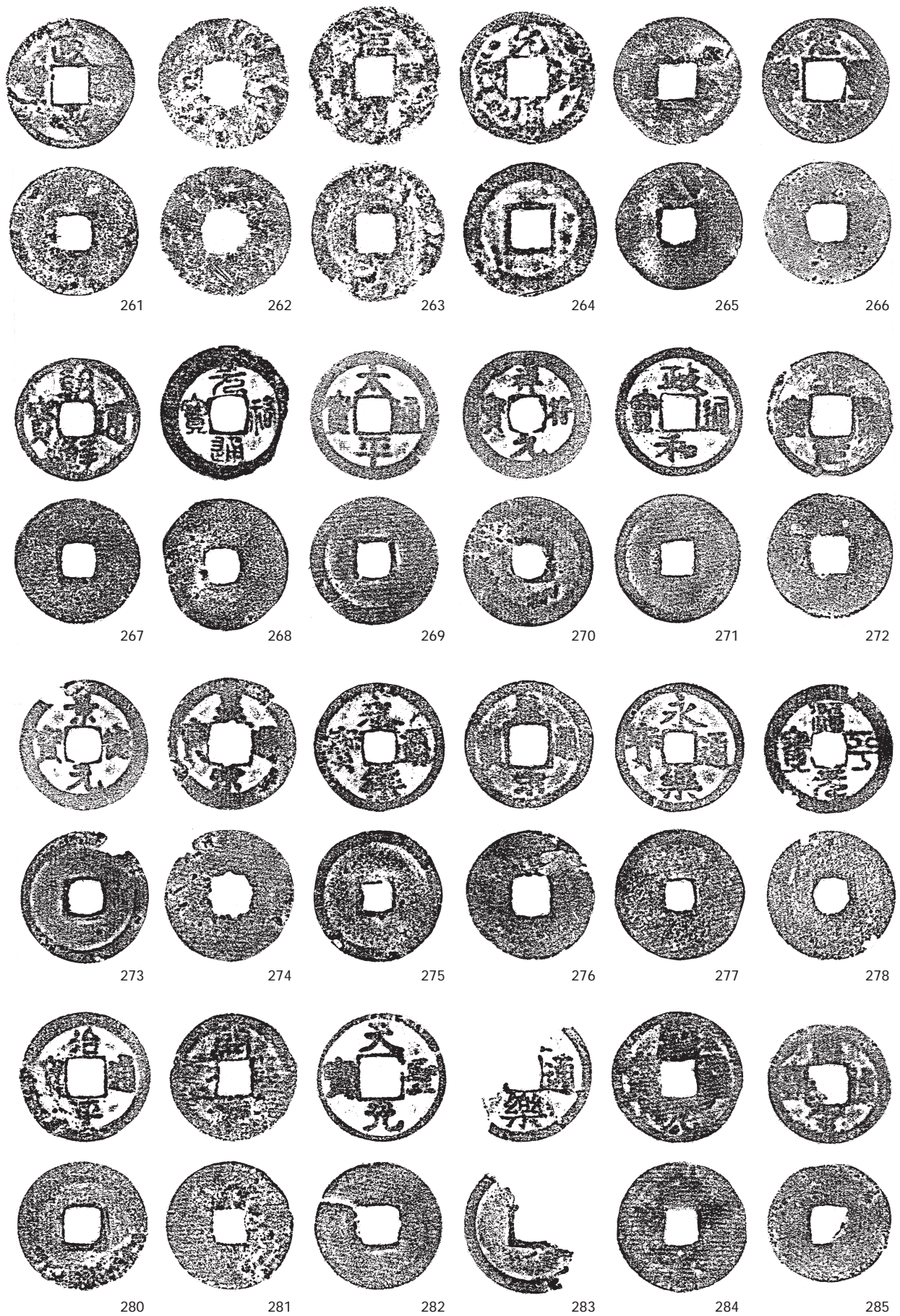
第141図 第2号建物跡出土遺物実測図(2) [古銭は原寸大]



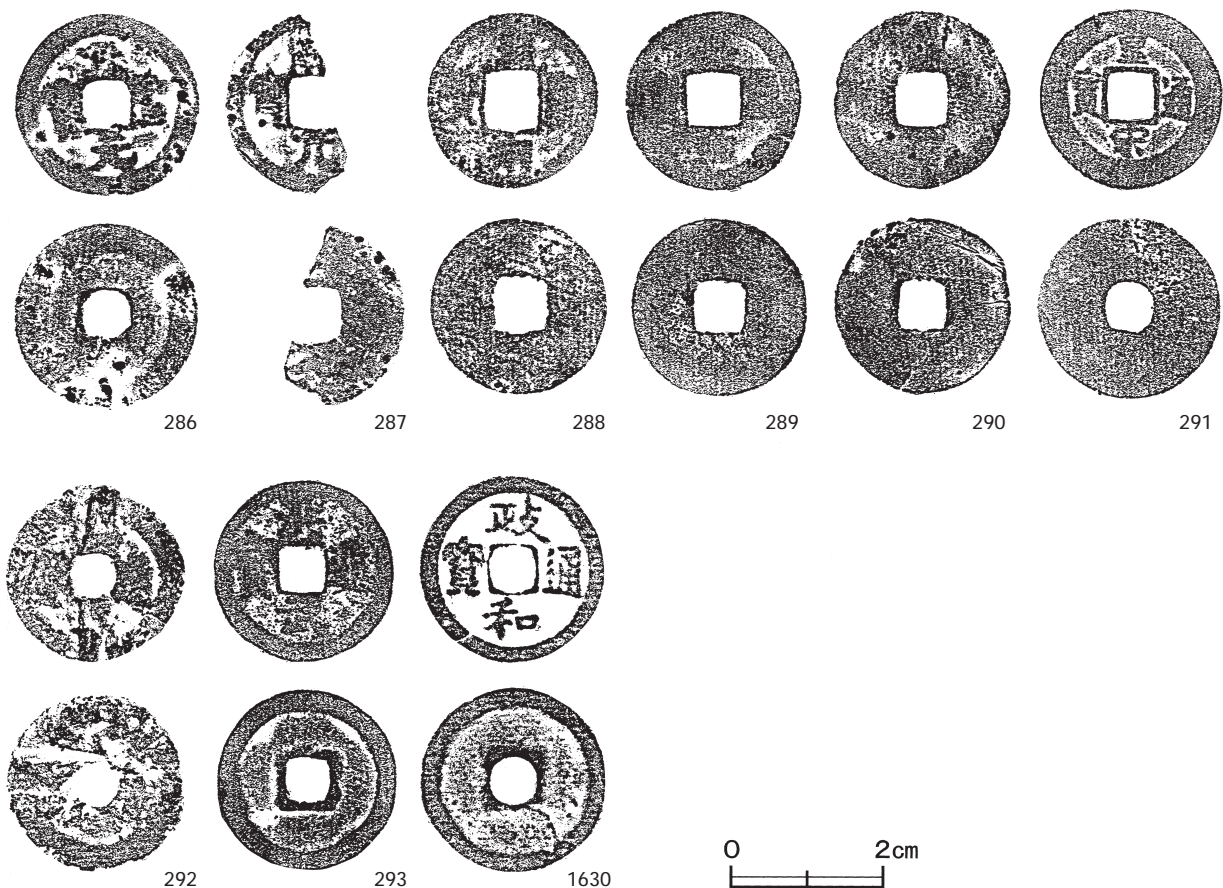
第142図 第2号建物跡出土遺物実測図(3) [古銭は原寸大]



第143図 第2号建物跡出土遺物実測図(4) [古銭は原寸大]



第144図 第2号建物跡出土遺物実測図(5) [古銭は原寸大]



第145図 第2号建物跡出土遺物実測図(6)

第2号建物跡出土遺物観察表(第140~145図)

番号	器形	器質	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
185	小皿	土師質土器	7.2	2.2	4.4	雲母	にぶい橙	普通	底部回転糸切り	P31内	100% PL40
186	皿	土師質土器	[10.6]	3.6	4.5	雲母・赤色粒子	にぶい黄橙	普通	底部回転糸切り	北部2次黒色土下	30%
187	皿	土師質土器	[10.6]	3.0	5.0	雲母・赤色粒子	にぶい黄橙	普通	底部回転糸切り	覆土中	30%
188	皿	土師質土器	[10.6]	3.0	4.4	雲母・赤色粒子	橙	普通	底部回転糸切り	北部2次黒色土中	60%
189	皿	土師質土器	[10.3]	4.0	4.6	雲母・赤色粒子	にぶい黄橙	普通	底部回転糸切り	北西部2次黒色土下	40%
190	皿	土師質土器	—	(2.5)	3.6	石英・雲母・赤色粒子	橙	普通	底部回転糸切り	北部2次黒色土中	60%

番号	器形	器質	口径	器高	底径	胎土・色調	絵付・釉薬	文様・特徴	産地・年代	出土位置	備考
2790	褐釉四耳壺	陶器	—	(4.2)	—	褐灰・暗褐	褐釉	スタンプ文有り	中国・南宋	北部2次黒色土中	5%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
191	砥石	(10.6)	2.5	2.4	(73.2)	砂岩	砥面3面, 両端部欠損, 断面方形	中央部2次黒色土下	
192	小刀	(22.2)	2.2	0.8	(142.6)	鉄	刀身部充存, 茎部欠損	北西部2次黒色土中	PL49
193	棒状金具	(20.6)	0.8	0.9	(72.1)	鉄	断面方形, 両端部欠損	北西部2次黒色土下	
194	箆	(8.7)	3.2	0.7	(29.2)	鉄	断面方形, 2本箆	中央部2次黒色土下	PL50
2777	骨角未製品	(9.0)	2.0	1.7	(23.2)	鹿角	小刀の柄部カ	中央部2次黒色土下	PL53

番号	銭名	径	孔径	厚さ	重さ	初铸年	材質	特徴	出土位置	備考
195	□□□□	2.37	0.69	0.10	(2.22)	—	銅	判読不能, 欠け, 模铸	北部2次黒色土中	
196	天聖元寶	2.29	0.67	0.08	2.48	1023	銅	篆書, 模铸	北部2次黒色土中	
197	皇宋通寶	2.39	0.68	0.11	2.94	1038	銅	真書, 模铸	北部2次黒色土中	
198	□□□□	2.36	0.09	0.09	3.10	—	銅	判読不能, 模铸	北部2次黒色土中	
199	開元通寶	2.40	0.65	0.10	(3.42)	621	銅	真書, 欠け	北部2次黒色土中	

番号	銭名	径	孔径	厚さ	重さ	初鑄年	材質	特徴	出土位置	備考
200	元豊通寶	2.38	0.59	0.05	2.24	1048	銅	判読不能, 模鑄	北部2次黒色土中	
201	景德元寶	2.37	0.52	0.10	2.82	1004	銅	真書	北部2次黒色土中	
202	元祐通寶	2.38	0.59	0.10	3.38	1086	銅	篆書	北部1次黒色土中	
203	元祐通寶	2.34	0.72	0.10	3.38	1086	銅	篆書, 模鑄	北部2次黒色土中	
204	至道元寶	2.52	0.64	0.10	3.80	995	銅	行書	北部2次黒色土中	
205	聖宋元寶	2.36	0.66	0.11	(3.10)	1101	銅	篆書, 欠け	北部2次黒色土中	
206	皇宋通寶	2.42	0.68	0.10	2.82	1038	銅	真書	北部2次黒色土中	
207	政和通寶	2.46	0.61	0.10	(2.90)	1111	銅	分楷, 欠け	北部2次黒色土中	
208	天聖元寶	2.61	0.70	0.12	3.58	1023	銅	真書	北部2次黒色土中	
209	天聖元寶	2.43	0.82	0.12	3.14	1023	銅	篆書, 錆がひどい	北部2次黒色土中	
210	開元通寶	2.47	0.68	0.10	2.70	621	銅	真書	北部2次黒色土中	
211	永樂通寶	2.48	0.62	0.12	(3.66)	1408	銅	真書, 欠け	北部2次黒色土中	
212	嘉祐元寶	2.42	0.71	0.08	2.64	1056	銅	篆書, 模鑄	北部2次黒色土中	
213	開元通寶	2.27	0.70	0.12	2.90	845	銅	真書, 円孔, 模鑄	北部2次黒色土中	
214	熙寧元寶	2.42	0.65	0.11	3.34	1068	銅	真書	北部2次黒色土中	
215	皇宋通寶	2.36	0.75	0.10	3.12	1038	銅	真書, 模鑄	北部1次黒色土面	
216	□□□□	2.27	0.64	0.11	2.70	—	銅	判読不能, 模鑄	北部2次黒色土中	
217	洪武通寶	2.34	0.60	0.12	2.40	1368	銅	真書, マ通・重点通	北部1次黒色土中	
218	至和元寶	2.35	0.66	0.13	2.60	1054	銅	篆書, 模鑄	北部2次黒色土中	
219	元祐通寶	2.47	0.75	0.11	3.48	1086	銅	篆書, 星形孔, 背錯范	北部2次黒色土中	
220	洪武通寶	2.30	0.60	0.14	4.00	1368	銅	真書	南部1次黒色土面	
221	開元通寶	2.37	0.63	0.08	2.74	621	銅	真書	北部2次黒色土中	
222	元符通寶 ^カ	2.40	0.71	0.11	3.42	1098	銅	篆書	北部2次黒色土中	
223	洪武通寶	2.27	0.60	0.13	(2.62)	1368	銅	真書, 欠け	北部2次黒色土中	
224	開元通寶	2.23	0.67	0.09	2.84	845	銅	真書, 模鑄	北部2次黒色土中	
225	至和元寶	2.42	0.66	0.14	4.00	1054	銅	真書	北部2次黒色土中	
226	宣徳通寶	2.53	0.47	0.12	3.44	1433	銅	真書	北部2次黒色土中	
227	天聖元寶	2.34	0.74	0.10	2.56	1023	銅	篆書	北部2次黒色土中	
228	開元通寶	2.35	0.68	0.10	2.72	621	銅	真書	北部2次黒色土下	
229	元祐通寶	2.39	0.68	0.11	2.82	1086	銅	篆書, 模鑄	北部2次黒色土中	
230	開元通寶	2.37	0.66	0.09	2.76	621	銅	模鑄	北部2次黒色土中	
231	開元通寶	2.37	0.70	0.10	(2.46)	621	銅	欠け, 模鑄	北部1次黒色土面	
232	景德元寶	2.43	0.65	0.09	2.46	1004	銅	真書	北西部2次黒色土中	
233	聖宋元寶	2.44	0.71	0.13	(2.98)	1101	銅	行書, 欠け	東部1次覆土中	
234	開元通寶	2.37	0.67	0.09	3.12	621	銅	模鑄	東部1次覆土中	
235	紹熙元寶	2.39	0.60	0.10	2.88	1190	銅	真書	北部2次黒色土下	
236	聖宋元寶	2.32	0.68	0.10	(2.80)	1101	銅	行書, 欠け	北部2次黒色土中	
237	—	2.24	0.68	0.09	2.18	—	銅	模鑄	北部2次黒色土中	
238	元符通寶	2.34	0.67	0.11	3.10	1098	銅	篆書, 模鑄	北部2次黒色土中	
239	□□□□	2.41	0.74	0.11	2.68	—	銅	判読不能	北部2次黒色土中	
240	永樂通寶	2.47	0.59	0.13	3.60	1408	銅	真書	南部2次黒色土中	
241	皇宋通寶	2.28	0.66	0.07	2.66	1038	銅	模鑄	東部1次覆土中	
242	元祐通寶	2.47	0.71	0.11	3.16	1086	銅	行書, 模鑄	南部2次黒色土中	
243	洪武通寶	2.38	0.61	0.12	2.36	1368	銅	真書, 背上「口」	南部1次黒色土中	
244	□□□□	2.58	0.62	0.29	(3.08)	—	銅	判読不能, 錆がひどい	南部1次黒色土中	
245	元通寶	2.35	0.63	0.11	2.54	1086	銅	篆書	南西部2次黒色土中	
246	□□□□	2.43	0.58	0.22	(2.86)	—	銅	判読不能, 錆がひどい	南部2次黒色土中	
247	—	2.39	0.55	0.27	(2.18)	—	銅	判読不能, 錆がひどい, 欠け	南部2次黒色土中	
248	—	2.45	0.53	0.10	2.02	—	銅	判読不能, 円孔, 模鑄	南部2次黒色土下	
249	皇宋通寶	2.31	0.66	0.13	2.60	1038	銅	篆書, 模鑄	北部2次黒色土下	
250	開元通寶	2.37	0.71	0.10	2.60	621	銅	真書	北部2次黒色土中	
251	—	2.55	0.69	0.46	(3.64)	—	銅	判読不能, 錆がひどい, 欠け	南部2次黒色土中	
252	開元通寶	2.40	0.62	0.11	3.14	621	銅	真書	中央部2次黒色土下	
253	洪武通寶	2.34	0.55	0.11	2.78	1368	銅	真書, マ通, 鑄造斑	中央部2次黒色土中	
254	元祐通寶	2.49	0.67	0.13	3.30	1086	銅	篆書	南部2次黒色土中	
255	政和通寶	2.42	0.68	0.13	(2.80)	1111	銅	篆書, 欠け	南部2次黒色土中	
256	皇宋通寶	2.44	0.69	0.12	(2.74)	1038	銅	篆書, 欠け	南部2次黒色土中	
257	—	2.44	0.77	0.13	2.98	—	銅	模鑄	南部2次黒色土中	
258	□□□□	2.44	0.77	0.10	2.36	—	銅	判読不能, 星形孔, 模鑄	南部2次黒色土中	

番号	銭名	径	孔径	厚さ	重さ	初鋳年	材質	特徴	出土位置	備考
259	永樂通寶	2.49	0.58	0.10	2.98	1408	銅	真書	北部2次黒色土中	
260	皇宋通寶	2.48	0.73	0.12	3.44	1038	銅	篆書	北部2次黒色土中	
261	政和通寶	2.40	0.62	0.14	3.90	1111	銅	分楷	北部2次黒色土中	
262	—	2.51	0.74	0.12	(2.96)	—	銅	判読不能, 錆がひどい, 欠け, 模鋳	北部2次黒色土中	
263	元□□寶	2.43	0.63	0.12	(3.04)	—	銅	篆書, 錆がひどい, 欠け	北部2次黒色土中	
264	元祐通寶	2.50	0.74	0.14	3.22	1086	銅	錆がひどい	北部2次黒色土中	
265	□□□□	2.07	0.57	0.11	2.68	—	銅	判読不能, 模鋳	北部2次黒色土中	
266	元豊通寶	2.35	0.75	0.12	2.96	1078	銅	篆書	北部2次黒色土中	
267	朝鮮通寶	2.32	0.62	0.15	3.54	1423	銅	真書	北部2次黒色土下	
268	元祐通寶	2.51	0.61	0.13	(3.48)	1086	銅	篆書	北部2次黒色土下	
269	太平通寶	2.41	0.67	0.12	2.86	976	銅	真書	北部2次黒色土中	
270	祥符元寶	2.40	0.67	0.12	2.86	1008	銅	真書, 円孔	北部2次黒色土中	
271	政和通寶	2.39	0.59	0.10	3.16	1111	銅	分楷	北部2次黒色土下	
272	天聖元寶	2.39	0.70	0.11	3.08	1023	銅	篆書, 模鋳	北部2次黒色土下	
273	景德元寶	2.41	0.64	0.13	(3.34)	1004	銅	真書, 欠け	北部2次黒色土下	
274	皇宋通寶	2.44	0.76	0.13	(3.26)	1038	銅	真書, 星形孔, 欠け	北部2次黒色土中	
275	永樂通寶	2.43	0.47	0.11	2.84	1408	銅	真書, 模鋳	北部2次黒色土中	
276	皇宋通寶	2.38	0.69	0.08	2.52	1038	銅	真書	北部2次黒色土中	
277	永樂通寶	2.43	0.56	0.11	2.52	1408	銅	真書, 模鋳	北部2次黒色土中	
278	治平元寶	2.42	0.58	0.09	(2.88)	1064	銅	篆書, 星形孔, 欠け	北部2次黒色土下	
280	治平通寶	2.42	0.66	0.12	3.58	1064	銅	真書	中央部2次黒色土下	
281	開元通寶	2.38	0.57	0.11	2.54	621	銅	真書, 錆がひどい	北部2次黒色土下	
282	天聖元寶	2.38	0.69	0.12	3.38	1023	銅	真書, 割れ	北部2次黒色土下	
283	□□通□	2.50	0.58	0.13	(1.74)	—	銅	真書, 欠け	北部2次黒色土下	
284	開元通寶	2.46	0.54	0.09	2.62	621	銅	判読不能, 模鋳	北部2次黒色土下	
285	皇宋通寶	2.28	0.71	0.08	2.38	1038	銅	判読不能, 模鋳, バリ残存	北部2次黒色土下	
286	天聖元寶	2.47	0.61	0.15	3.54	1023	銅	判読不能, 錆がひどい, 模鋳	北部2次黒色土下	
287	開元通寶	2.43	0.07	0.12	(1.22)	621	銅	判読不能, 欠け, 模鋳	南西部2次黒色土中	
288	皇宋通寶	2.39	0.77	0.10	2.88	1038	銅	真書	南部2次黒色土下	
289	嘉祐通寶	2.35	0.69	0.09	2.80	1056	銅	真書	SK127内	
290	—	2.38	0.61	0.12	3.00	—	銅	模鋳	北西部2次黒色土下	
291	皇宋通寶	2.44	0.60	0.10	3.58	1038	銅	真書	南部2次黒色土下	
292	□□□□	2.30	0.56	0.12	(3.14)	—	銅	判読不能, 円孔, 錆がひどい	南部2次黒色土下	
293	洪武通寶	2.40	0.52	0.10	3.16	1368	銅	真書	覆土中	
1630	政和通寶	2.47	0.61	0.11	3.34	1111	銅	分楷	SK79内	

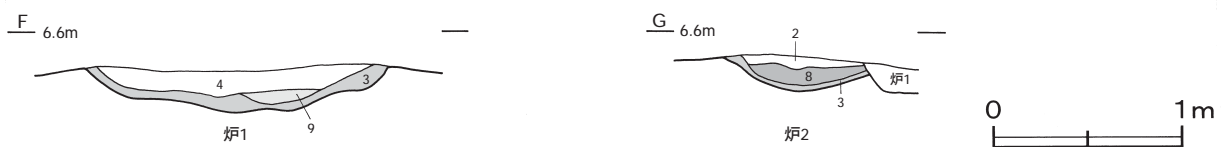
第3号建物跡 2区S I-3 (第146~149図)

位置 調査区中央部I12h1区を中心に位置している。北には第1・2・4・5号建物跡が確認されている。

確認状況 表砂を2.6m除去し、標高約6.4mで黒色土面を確認した。上面はほぼ平坦であるが、北西部は北に向かって緩やかに傾斜している。黒色土面から複数の炉跡と南北に並ぶ柱穴8か所が確認された。

規模と施設 黒色土の範囲は南北9.5m、東西7mの不定形である。しまりのある黒色土の周辺には、これらが流れ出した締まりのない黒色土が広がっている。炉2基、土坑1基が構築されている。

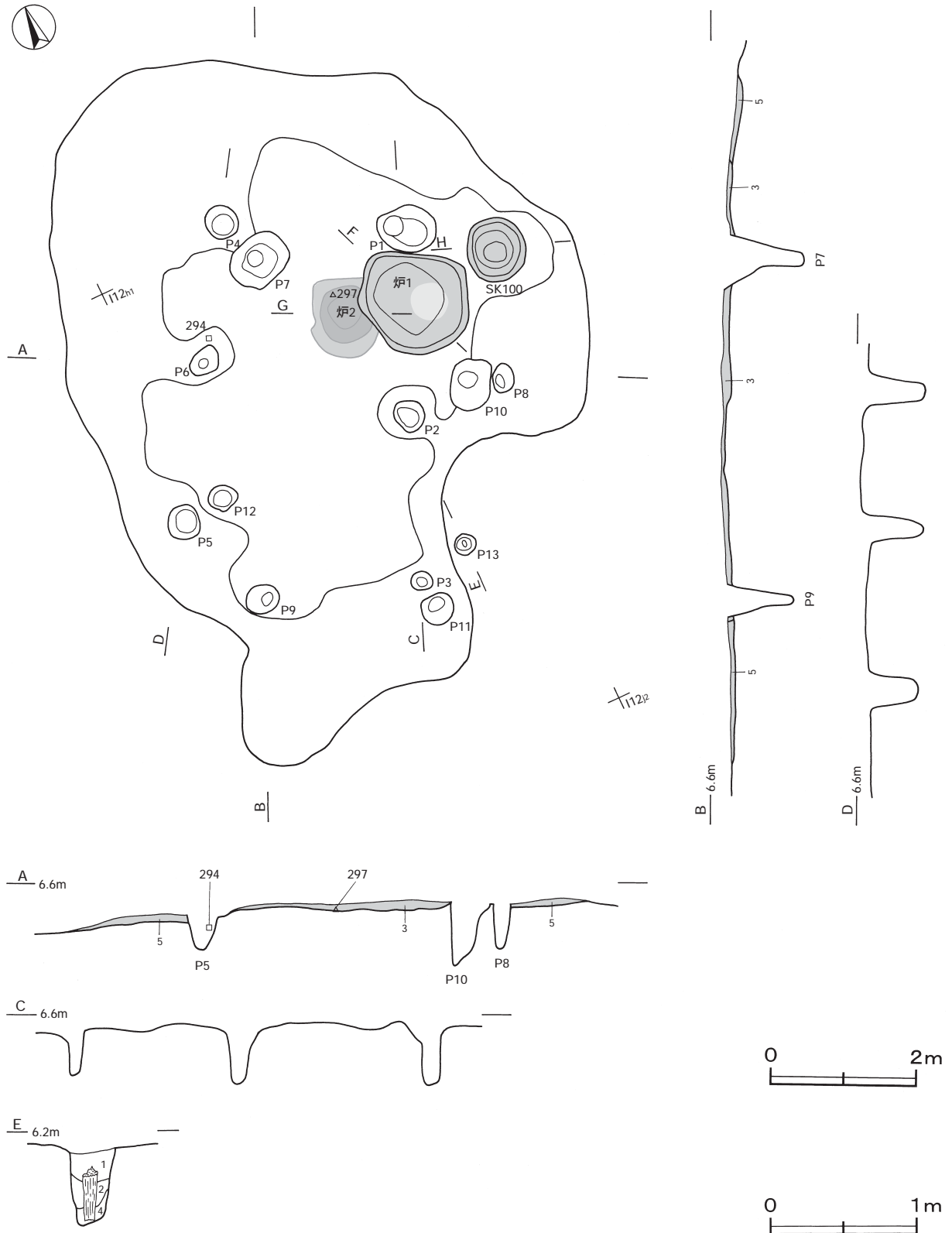
床 ほぼ平坦で厚さ4~12cmの黒色土を貼り付けている。土層断面図中、第3層は黒色土Aの層、第5層は黒色土が流れ出した層である。



第146図 第3号建物跡炉土層図

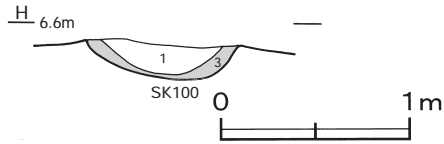
炉（第146図） 2基とも中央部やや東寄りに位置している。第1号炉は第2号炉を掘り込み、黒色土で構築されている。第1号炉から灰、第2号炉の底面から焼砂が検出されている。

土層断面図中、第3層は炉を構築した黒色土層である。第1号炉は厚さ4～10cm、第2号炉は厚さ2～5cmの黒色土を貼り付けて構築されている。



第147図 第3号建物跡実測図

ピット 13か所。P1～P6は深さ45～80cmで、南北を軸として配されていることから、上屋を支えた柱穴と考えられる。P7～P13は深さ42～80cmで、性格不明である。その中のP7・P9はもうひとつの軸線をもつ柱穴と考えたが、東部には対応する柱穴が検出できなかった。

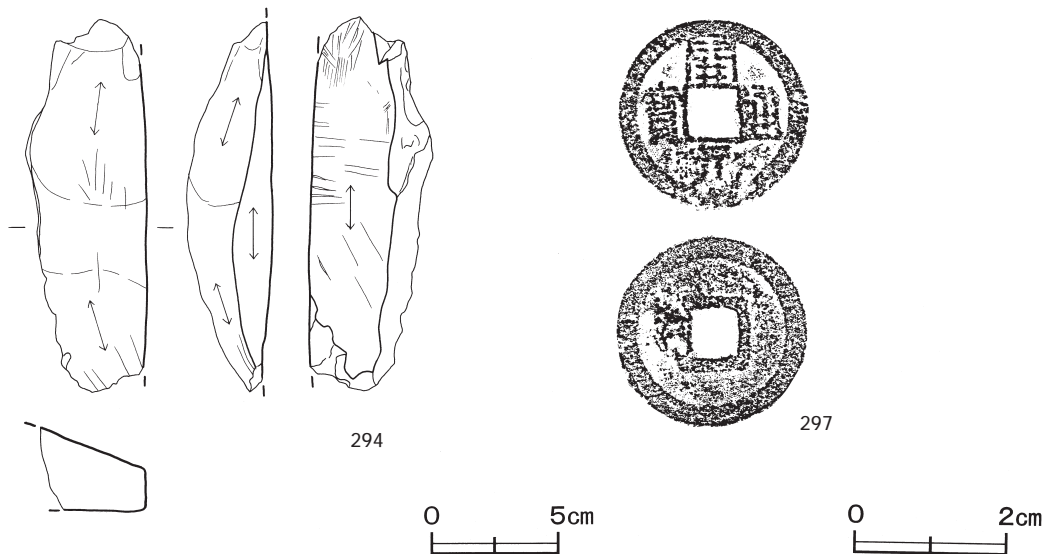


土坑（第148図） 北東部に位置している。砂を18cm掘り込み、厚さ2～7cmの黒色土を貼り付けて構築されている。

第148図 第3号建物跡土坑土層図

遺物出土状況 土師質土器片5点（皿），石器2点（石臼，砥石），金属製品5点（鋸カ1，古銭2，不明2）が出土している。297は「開元通寶」で第2号炉内の底面から出土している。294は西部の黒色土B層の下層から出土している。その他の出土遺物は細片であり、摩耗が激しいため図示できなかった。

所見 炉や柱穴が検出されたことから建物跡と判断した。北に位置する第2号建物跡と比較すると、黒色土範囲が狭く日常生活にかかわる出土遺物も少ない。このことから少人数で生活していたか、製塩にかかわる人々が一時的に休息をとった建物など、第1・2号建物跡とは違った性格が想定される。



第149図 第3号建物跡出土遺物実測図

第3号建物跡出土遺物観察表（第149図）

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考	
294	砥石	(14.7)	(4.8)	(3.3)	(202)	凝灰岩	砥面6面，擦痕有り	中央部黒色土下		
番号	銭名	径	孔径	厚さ	重さ	初鑄年	材質	特徴	出土位置	備考
297	開元通寶	2.55	0.72	0.14	3.26	621	銅	真書	炉2内	

第4号建物跡 2区S I-4 (第150~155図)

位置 調査区中央部 I11g9区を中心に位置している。北に第1・2・5号建物跡，東に第3号建物跡が確認されている。

確認状況 表砂を1.1~1.3m除去し，標高約5.7~5.9mで黒色土面を確認した。上面はほぼ平坦であり，土坑が確認された。

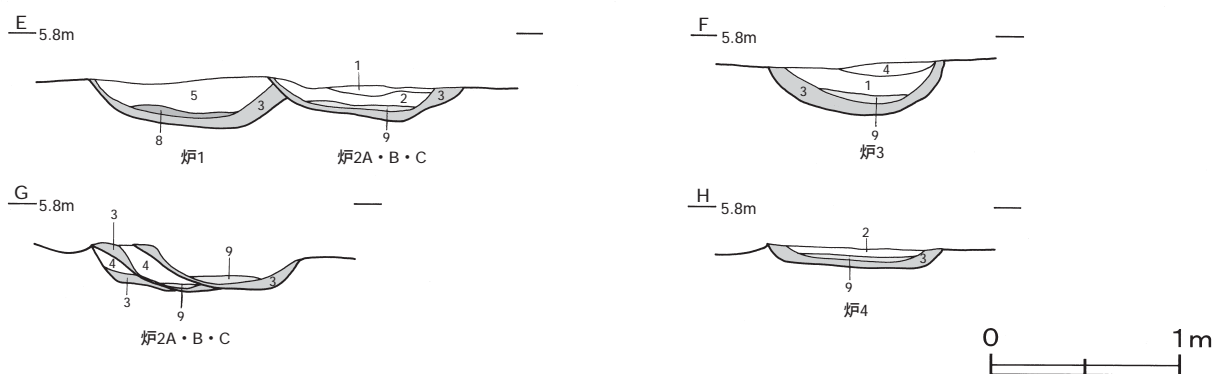
規模と施設 黒色土の範囲は南北11m，東西7mの不定形である。炉6基，土坑3基が構築され，また貝集積地2か所が確認された。



第150図 第4号建物跡実測図

床 第1次面と第2次面が確認できた。第1次面はほぼ平坦で、厚さ6～10cmの黒色土を貼り付けた床面である。下層には床面の基部をなす黒色土混じりの黒色土B層が確認された。第2次面もほぼ平坦で、厚さ10cmの黒色土を貼り付けた床面である。2次面の中央部には硬化した黒色土が確認できた。土層断面図中、第3層が第1・2次面、第4層は第1次面の基部をなす黒色土B層である。なお、第1次面の中央部は削平されており、図示できなかった。

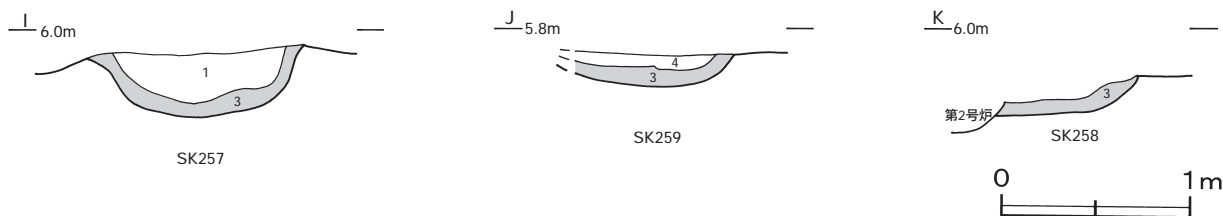
炉 (第151図) 6基とも中央部に位置している。土層断面図から第2号炉は第1号炉を掘り込み、2回の造り替えをしながら、継続的に使用されていたと考えられる。第2号炉は第259号土坑に掘り込まれ、第4号炉は第7号貝集積地の下層から検出されている。第1号炉は厚さ2～10cm、第2号炉は2～8cm、第3号炉は5～10cm、第4号炉は3～7cmの黒色土を貼り付けて構築されている。



第151図 第4号建物跡炉土層図

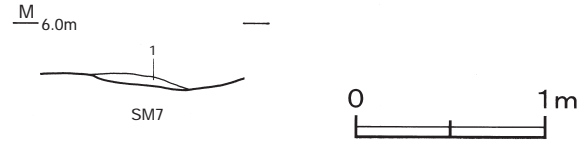
ピット 6か所。深さ25～45cmで、2次面で検出された。北東を軸として黒色土面に配されていることから、上屋を支えた柱穴と考えられる。

土坑 (第152図) 第257号土坑を除き、中央部に位置している。第257・259号土坑が第1次面、第258号土坑が第2次面から検出された。第257号土坑は厚さ5～12cm、第258号土坑は残存部で6～12cm、第259号土坑は7～10cmの黒色土を貼り付けて構築されている。



第152図 第4号建物跡土坑土層図

貝集積地 (第153図) 第7号貝集積地は中央に位置している。長軸1.3m、短軸0.7mの不定形で、貝層の厚さは最大で5cmである。第11号貝集積地は南部に位置している。長軸2.1m、短軸1.6mの不定形で、貝層の厚さは最大で6cmである。土師質土器片10点(小皿)、古銭2枚が出土している。



第153図 第4号建物跡貝集積地土層図

第7号貝集積地出土貝種一覧表

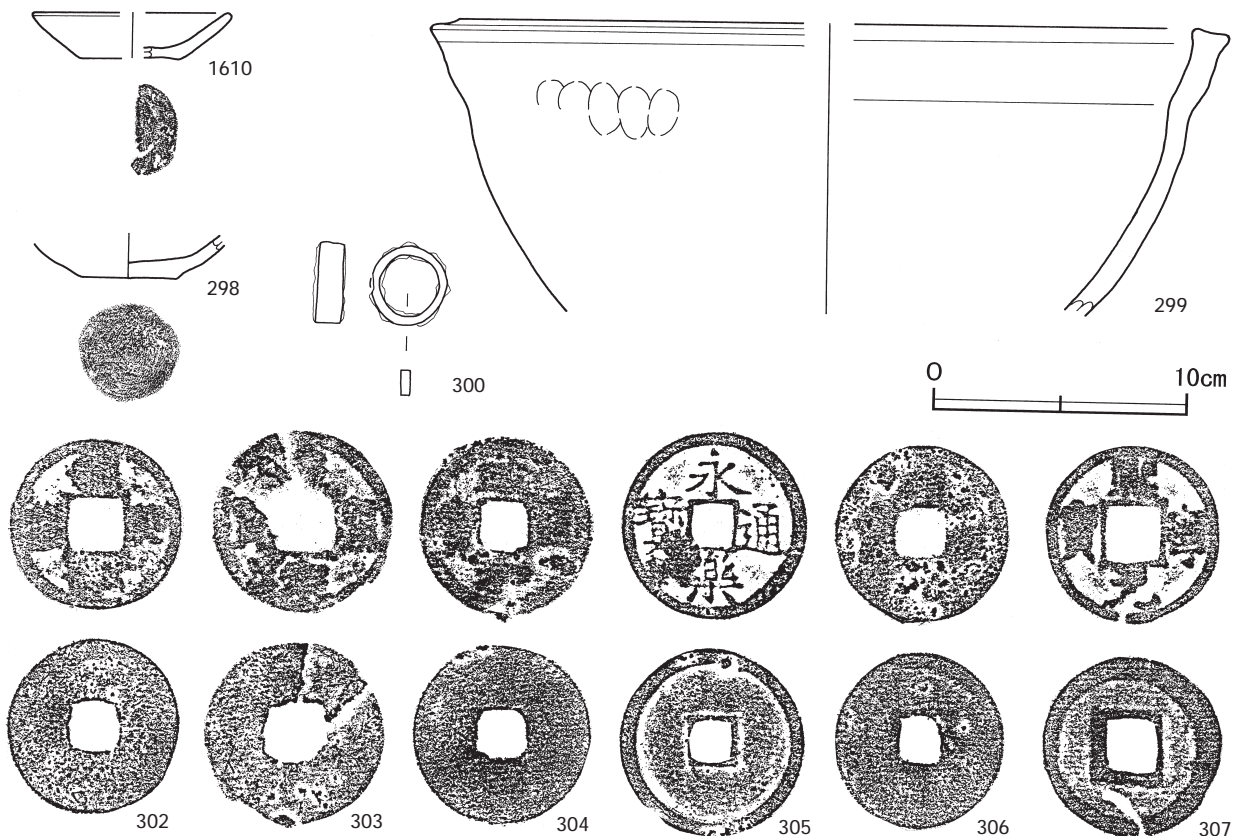
No.	貝種	重さ	比率	殻頂数	備考
1	ベンケイガイ	15.0	1.14	4	
2	マツカサガイ	5.0	0.38	6	淡水
3	シジミ属	5.0	0.38	6	淡水または汽水
4	コタマガイ	10.0	0.76	13	
5	サルボウガイ類	25.0	1.90		
6	イタボガキ属細片	15.0	1.14		
7	ウバガイ細片	1,240.0	94.30		

第11号貝集積地出土貝種一覧表

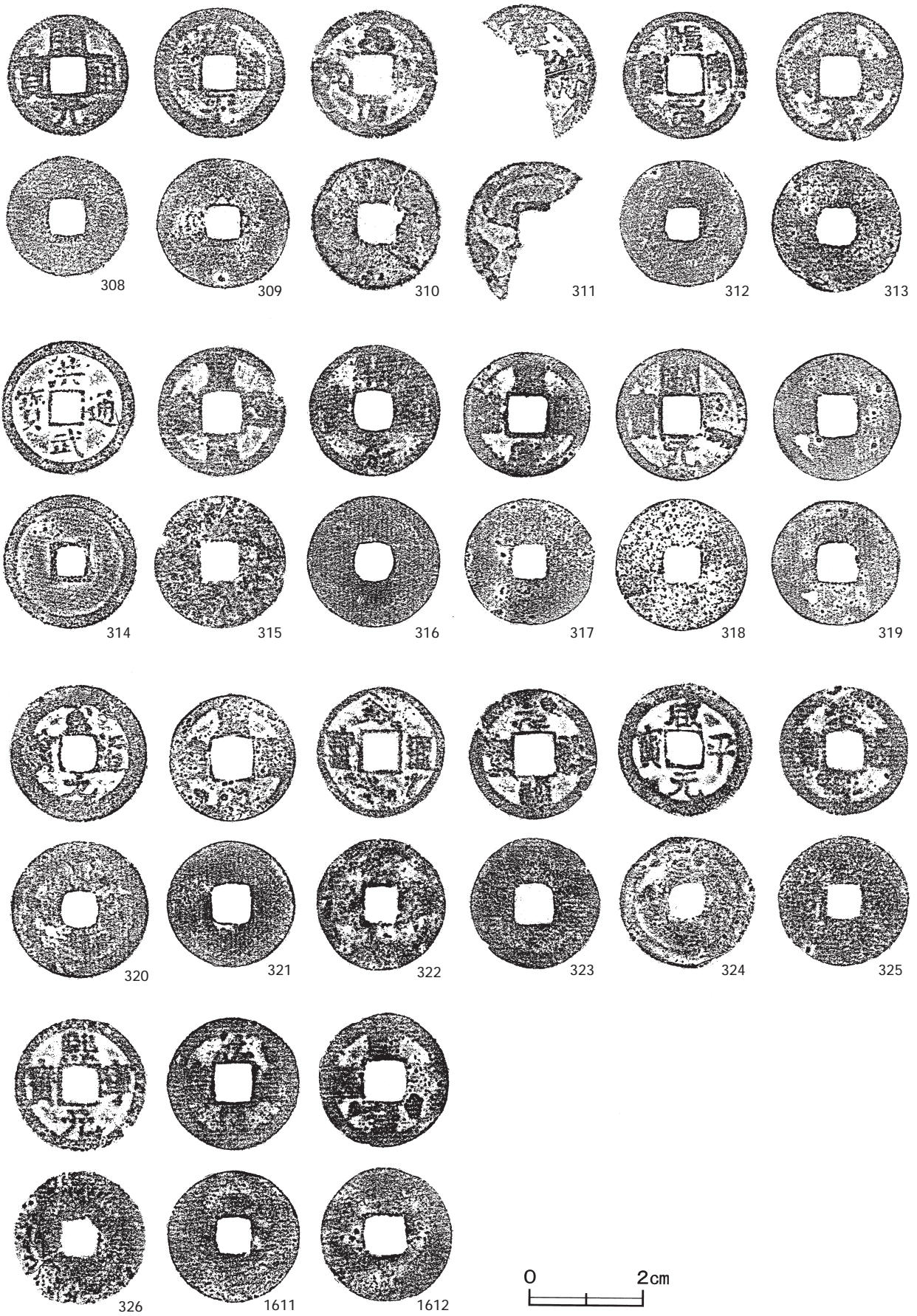
No.	貝種	重さ	比率	殻頂数	備考
1	コタマガイ	480.0	64.86	L=151 R=157	
2	コタマガイ細片	260.0	35.14		

遺物出土状況 土師質土器片46点（皿38，内耳鍋8），金属製品29点（古銭25，不明4），平瓦片3点が出土している。298・299は第2次面の黒色土中から出土している。299は第1次面の黒色土中から出土した破片と接合したものである。古銭25枚はほとんどが第2次面の黒色土の下層から散在して出土している。

所見 炉やピットが検出されたことから，建物跡と判断した。第2号炉は第259号土坑に掘り込まれているため，第2次面，第4号炉は第7号貝集積地の下層から検出されており，第2次面に伴う炉と判断した。炉は補修されているものが多く，継続的に生活が営まれた建物と考えられる。古銭は305の「永樂通寶」が初鑄年1408年と最も新しいが，洪武通寶を除くほとんどは銭文が不鮮明である。



第154図 第4号建物跡出土遺物実測図（1）[古銭は原寸大]



第155图 第4号建物跡出土遺物実測図(2)

第4号建物跡出土遺物観察表（第154・155図）

番号	器形	器質	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
298	小皿	土師質土器	—	(1.8)	4.0	雲母・赤色粒子	橙	普通	底部回転糸切り	中央部黒色土中	40%
1610	小皿	土師質土器	[7.8]	1.8	[3.9]	雲母	にぶい黄橙	普通	底部回転糸切り	SM11内	20%
299	内耳鍋	土師質土器	[29.0]	(11.5)	—	石英・雲母・赤色粒子	明赤褐	普通	内面ナデ、外面指頭痕	中央部黒色土中	20%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
300	環状金具	3.1	1.0	0.4	18.7	鉄	断面長方形	中央部2次黒色土下	

番号	銭名	径	孔径	厚さ	重さ	初铸年	材質	特徴	出土位置	備考
302	熙寧元寶	2.31	0.68	0.11	3.28	1068	銅	判読不能，模铸	北部黒色土中	
303	皇宋通寶	2.43	0.71	0.10	(2.46)	1038	銅	判読不能，割れ，模铸	北部黒色土中	
304	政和通寶	2.36	0.63	0.11	3.46	1111	銅	分楷，模铸	中央部黒色土中	
305	永樂通寶	2.50	0.56	0.11	3.60	1408	銅	真書	中央部黒色土下	
306	開元通寶	2.36	0.60	0.11	2.72	621	銅	模铸	北部黒色土中	
307	熙寧元寶	2.41	0.71	0.13	(3.62)	1068	銅	真書，割れ，铸造斑	中央部黒色土下	
308	開元通寶	2.21	0.61	0.10	2.06	621	銅	真書，模铸	北部黒色土中	
309	太平通寶	2.39	0.62	0.11	2.60	976	銅	真書	北部黒色土中	
310	□□□□	2.51	0.60	0.13	(1.58)	—	銅	判読不能，欠け	北部黒色土中	
311	元祐通寶	2.34	0.65	0.12	(2.80)	1086	銅	行書，欠け，模铸	北部黒色土中	
312	熙寧元寶	2.32	0.60	0.10	2.50	1068	銅	篆書	北部黒色土下	
313	熙寧元寶	2.38	0.63	0.13	3.66	1068	銅	真書，模铸	北部黒色土中	
314	洪武通寶	2.42	0.53	0.14	3.82	1368	銅	真書	北部黒色土下	
315	□□□□	2.40	0.70	0.13	2.92	—	銅	判読不能，模铸	北部黒色土下	
316	開元通寶	2.40	0.67	0.08	2.92	621	銅	真書	北部黒色土下	
317	皇宋通寶	2.33	0.61	0.13	3.28	1038	銅	篆書，模铸	北部黒色土下	
318	開元通寶	2.39	0.61	0.14	3.20	621	銅	真書	北部黒色土下	
319	—	2.33	0.75	0.08	2.40	—	銅	模铸	中央部黒色土中	
320	至道元寶	2.51	0.58	0.11	3.10	995	銅	行書	北部黒色土下	
321	皇宋通寶	2.31	0.68	0.12	2.68	1038	銅	篆書，模铸	北部黒色土下	
322	政和通寶	2.38	0.64	0.08	2.06	1111	銅	分楷	北部黒色土下	
323	元祐通寶	2.36	0.78	0.10	2.52	1086	銅	篆書	北部黒色土下	
324	咸平元寶	2.47	0.60	0.13	2.80	998	銅	真書	北部黒色土下	
325	□□□□	2.33	0.60	0.11	3.06	—	銅	判読不能，模铸	覆土中	
326	熙寧元寶	2.40	0.58	0.13	2.76	1068	銅	真書	覆土中	
1611	元豊通寶	2.40	0.66	0.12	3.26	—	銅	模铸	SM11内	
1612	□□□□	2.36	0.78	0.08	2.68	—	銅	判読不能，模铸	SM11内	

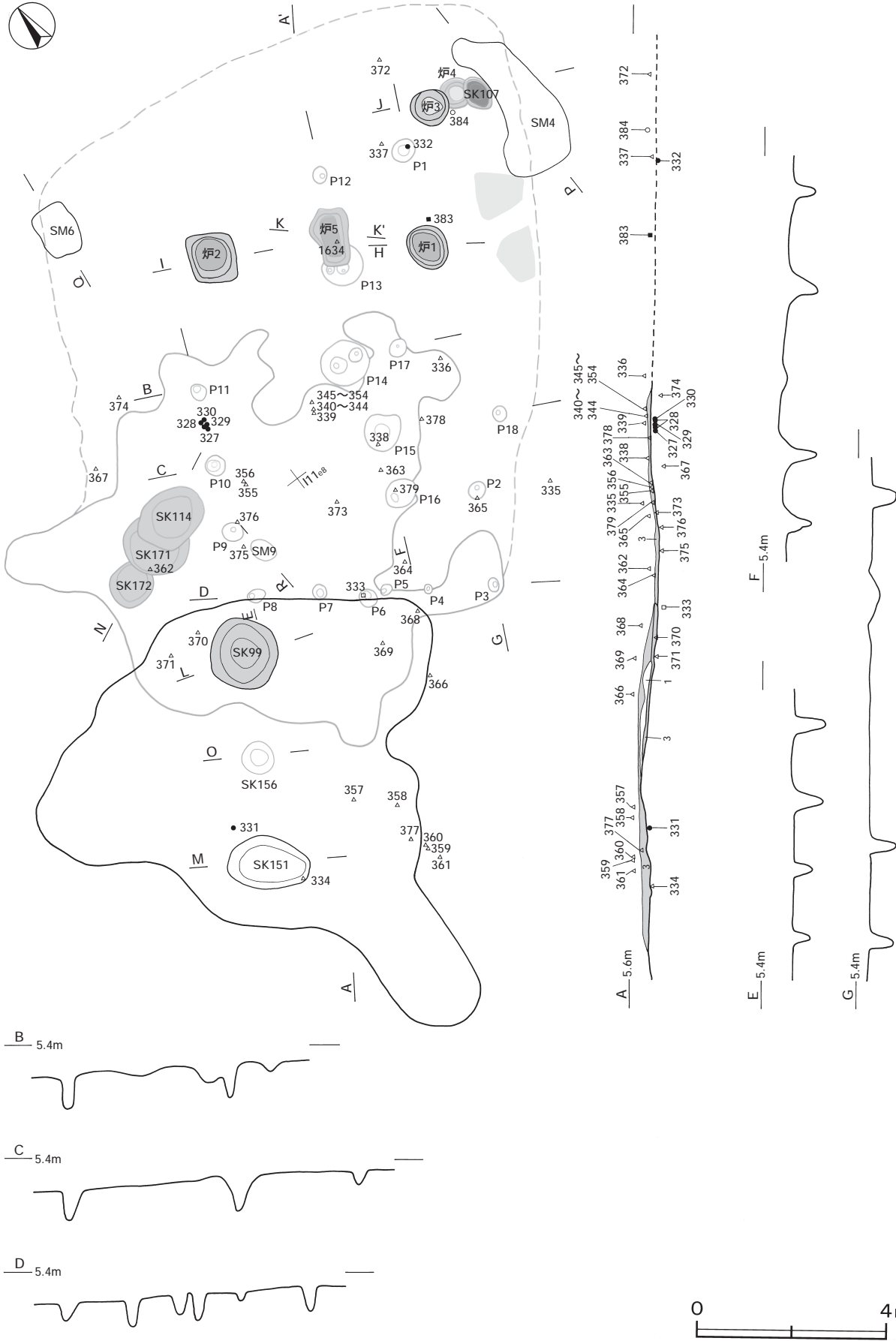
第5号建物跡 2区S I - 5（第156～163図）

位置 調査区中央部I11e8区を中心に位置している。

確認状況 表砂を1.5m除去し標高約5.4mから，第1次面である黒色土面を確認した。上面はほぼ平坦で，複数の土坑が確認された。さらに，下層の標高5.2mから第2次面である黒色土面が確認され，複数の土坑と多数のピット，焼砂の層が検出された。また，貝集積地は3か所が確認された。

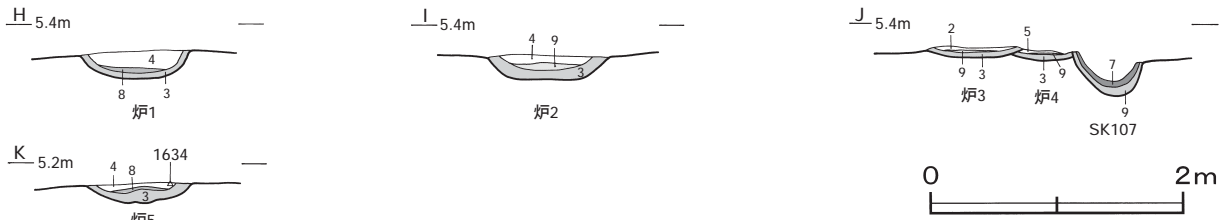
規模と施設 第1次面の黒色土の範囲は南北7m，東西8mの不定形である。第2次面の黒色土の残存の範囲は南北8m，東西8mの不定形である。炉5基，土坑7基が構築されている。

床 第1次面は厚さ12～14cm，第2次面は厚さ8～10cmの黒色土を貼り付けて構築されている。土層断面図中，第1次面の黒色土A層と第2次面との間には約10cmの砂層が入っている。



第156图 第5号建物跡実測図

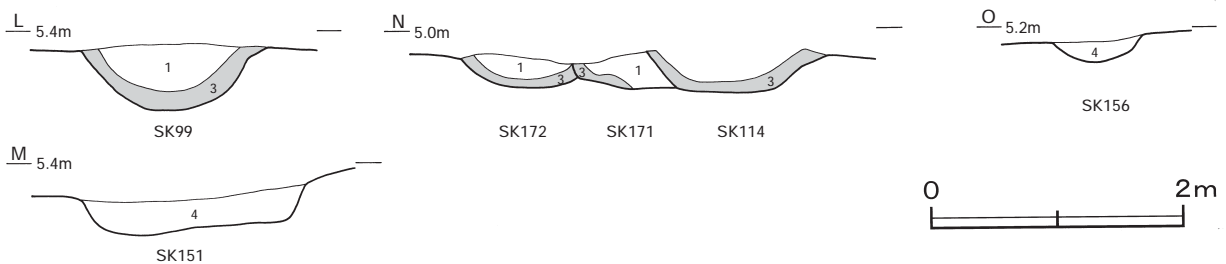
炉（第157図） 第1・2・5号炉は中央部，第3・4号炉は北東部に位置し，第3号炉は第4号炉を掘り込んで構築されている。第1号炉は厚さ5cm，第2・5号炉は厚さ10cmの黒色土を貼り付けて構築されている。第3・4号炉は残存状況が悪く，立ち上がり部は削平されている。底部は厚さ4cmの黒色土を貼り付けて構築されている。



第157図 第5号建物跡炉土層図

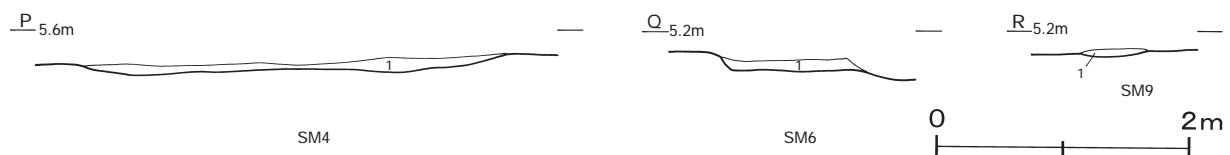
ピット 18か所。P4・P18は深さ20・25cmとやや浅いが，その他は深さ30～74cmである。上屋を支えた柱穴か間仕切りをした柱穴と考えられる。

土坑（第158図） 黒色土で構築された第99・107・114・171・172号土坑と第151・156号土坑がある。南部の第172号土坑はその後，第171・114号土坑へと造り替えが行われている。第107号土坑は底面に厚さ5cmの粘土層が確認された。第99号土坑は厚さ9～15cmの黒色土，第171・172・114号土坑は厚さ5～9cmの黒色土を貼り付けて構築されている。



第158図 第5号建物跡土坑土層図

貝集積地（第159図） 第4号貝集積地は北東部に位置し，長軸3.3m，短軸1.5mの不定形で，貝層の厚さは最大で12cmである。土師質土器片16点(Ⅲ)が貝とともに出土している。第6号貝集積地は北西部に位置し，長軸1.1m，短軸0.8mの長方形で，貝層の厚さは最大で8cmである。第9号貝集積地は中央部に位置し，長軸0.6m，短軸0.4mの不整楕円形で，貝層の厚さは最大で5cmである。土師質土器片2点(Ⅲ)が出土している。



第159図 第5号建物跡貝集積地土層図

遺物出土状況 土師質土器片84点(Ⅲ)，陶器片1点(Ⅲ)，磁器片2点(Ⅲ)，金属製品48点(古銭)，骨角製品1点(サイコロ)が出土している。327から330の土師質土器の皿は，西部の第2次面を除去した砂層からまとまって出土している。また，331は瀬戸・美濃産で南部の1次面下，332は景德鎮窯の製品で，P1内から出

土している。383・384は北部の砂層から出土しており、383は鹿角製である。334は毛抜であるが、片側が欠損している。333は上白でP6内から出土している。古銭は中央部の黒色土中から多く出土し、確認された中では「永樂通寶」が最新銭で、6枚出土している。

第4号貝集積地出土貝種一覧表

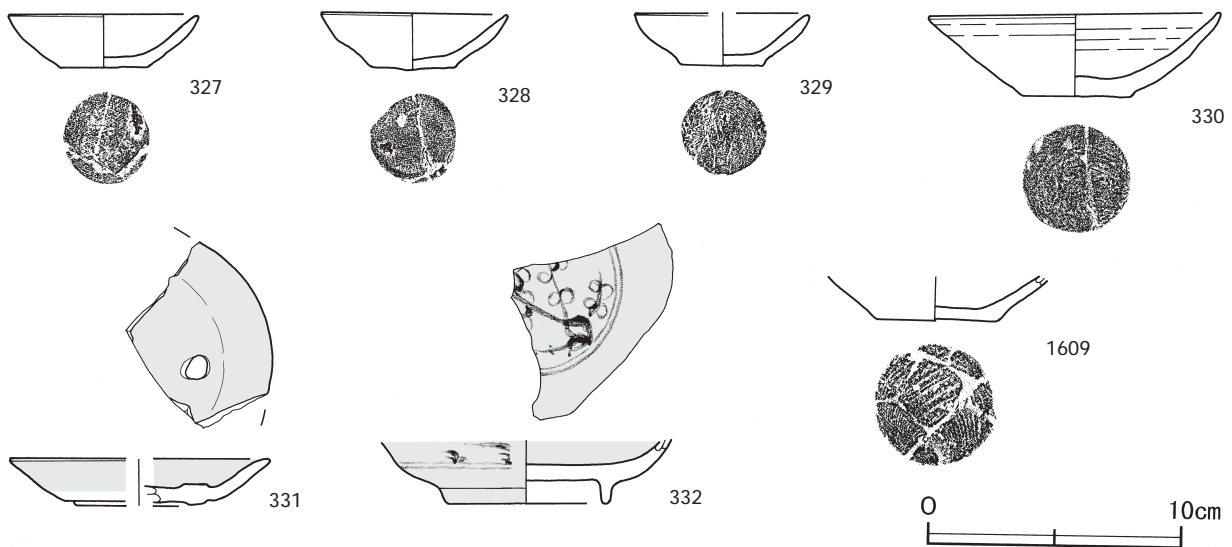
No.	貝種	重さ	比率	殻頂数	備考	No.	貝種	重さ	比率	殻頂数	備考
1	アワビ	65.0	1.33	1		8	コタマガイ	17.0	0.35		
2	サルボウガイ	33.0	0.67	9		9	ハマグリ	55.0	1.12	L=6 R=8	
3	ベンケイガイ	28.0	0.57	6			ウバガイ	1,300.0	26.52	L=30 R=23	
4	イタボガキ属	100.0	2.04			10	イタボガキ属細片	65.0	1.33		
5	マツカサガイ	22.0	0.45	17	淡水		13	ウバガイ細片	3,170.0	64.67	
6	シジミ属	7.0	0.14	L=4 R=3	淡水または汽水	11	その他	20.0	0.41		イガイ等の細片含む
7	アサリ	20.0	0.41	L=1 R=1							

第6号貝集積地出土貝種一覧表

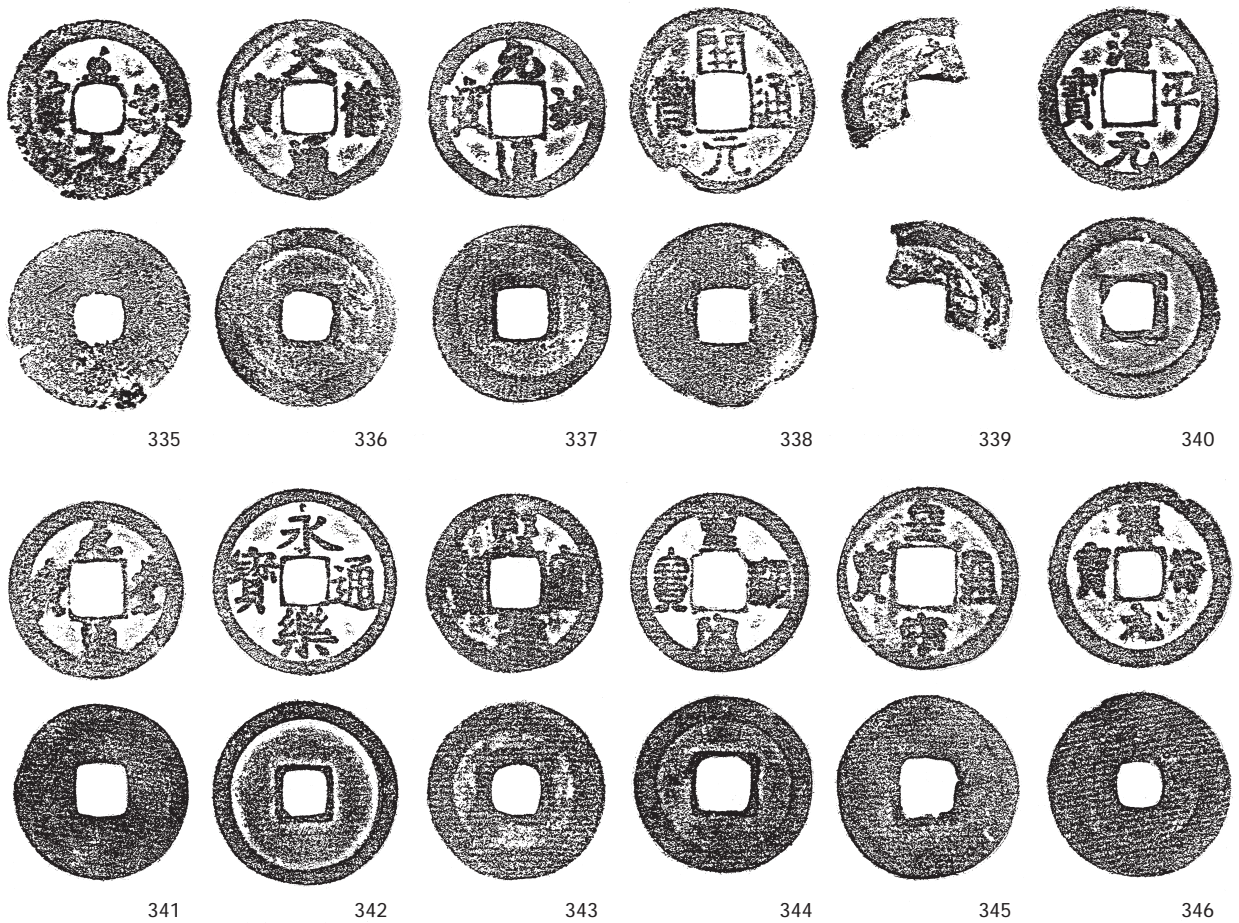
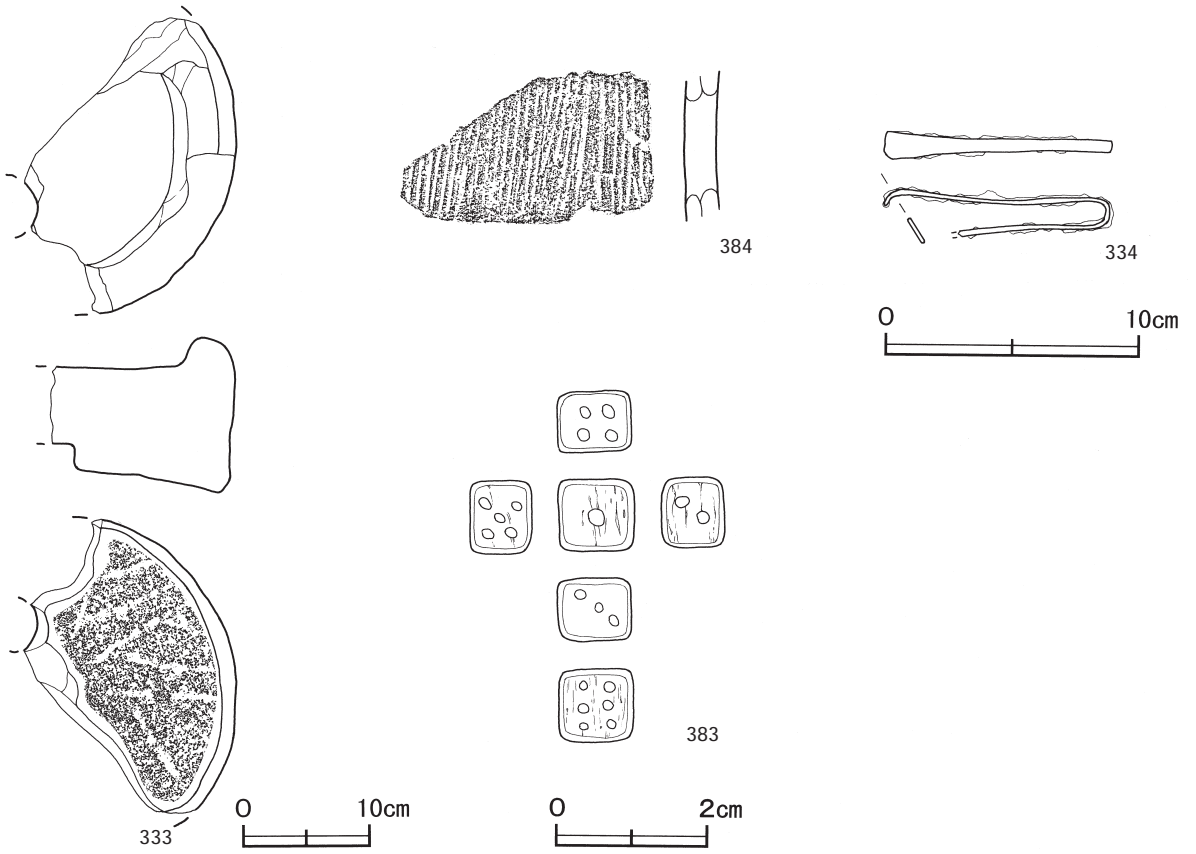
No.	貝種	重さ	比率	殻頂数	備考
1	オオタニシ	190.0	8.19	45	淡水 細片含む
2	マツカサガイ	2,130.0	91.81	1126	淡水 細片含む

第9号貝集積地出土貝種一覧表

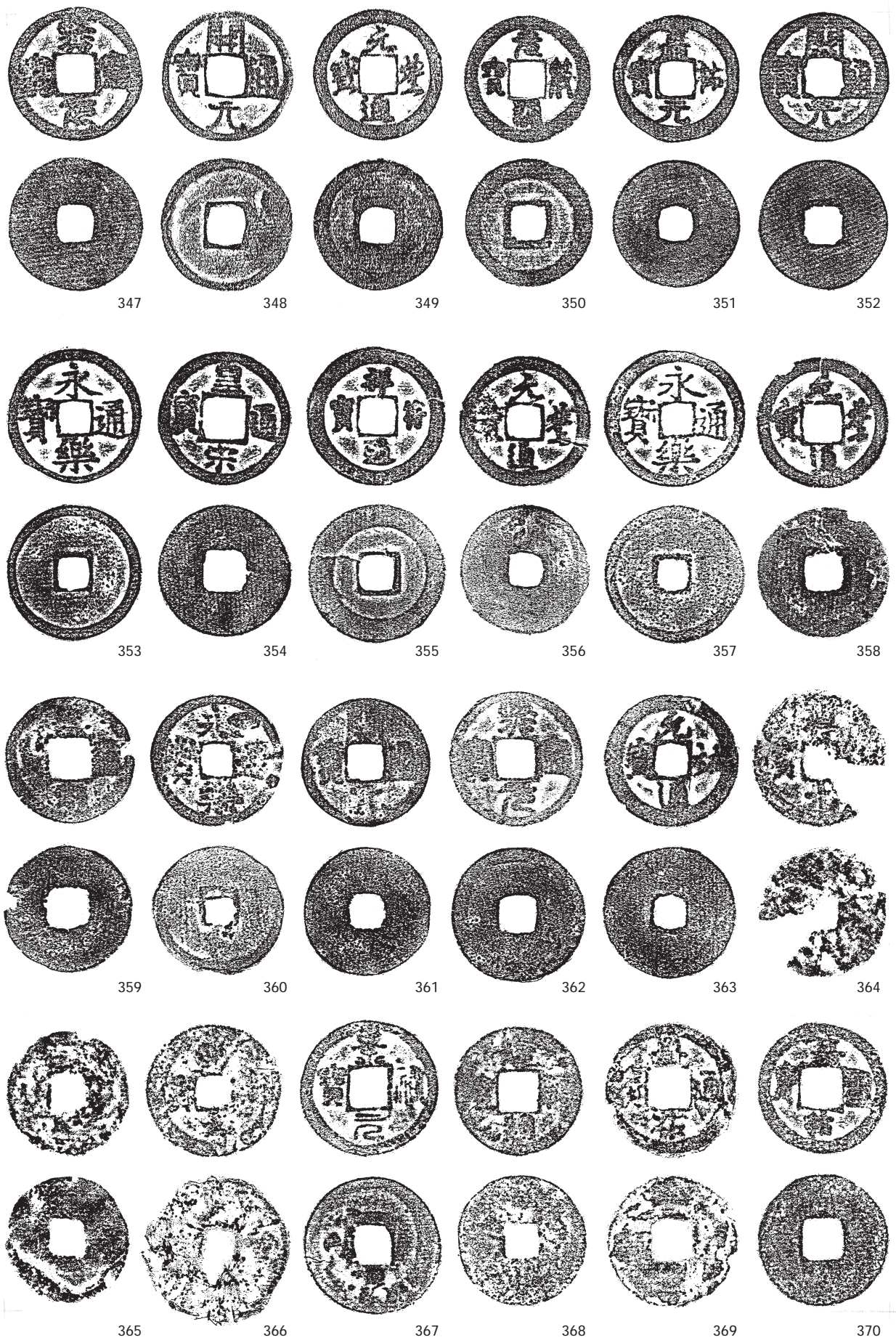
No.	貝種	重さ	比率	殻頂数	備考	No.	貝種	重さ	比率	殻頂数	備考
1	ベンケイガイ	10.0	0.20	2		5	イタボガキ属細片	40.0	0.80		
2	シジミ属	2.0	0.04	3	淡水または汽水	6	ウバガイ細片	2,760.0	55.38		焼けている
3	コタマガイ	1.0	0.02	8		7	ウバガイ細片	2,170.0	43.54		焼けていない
4	ハマグリ	1.0	0.02	3							



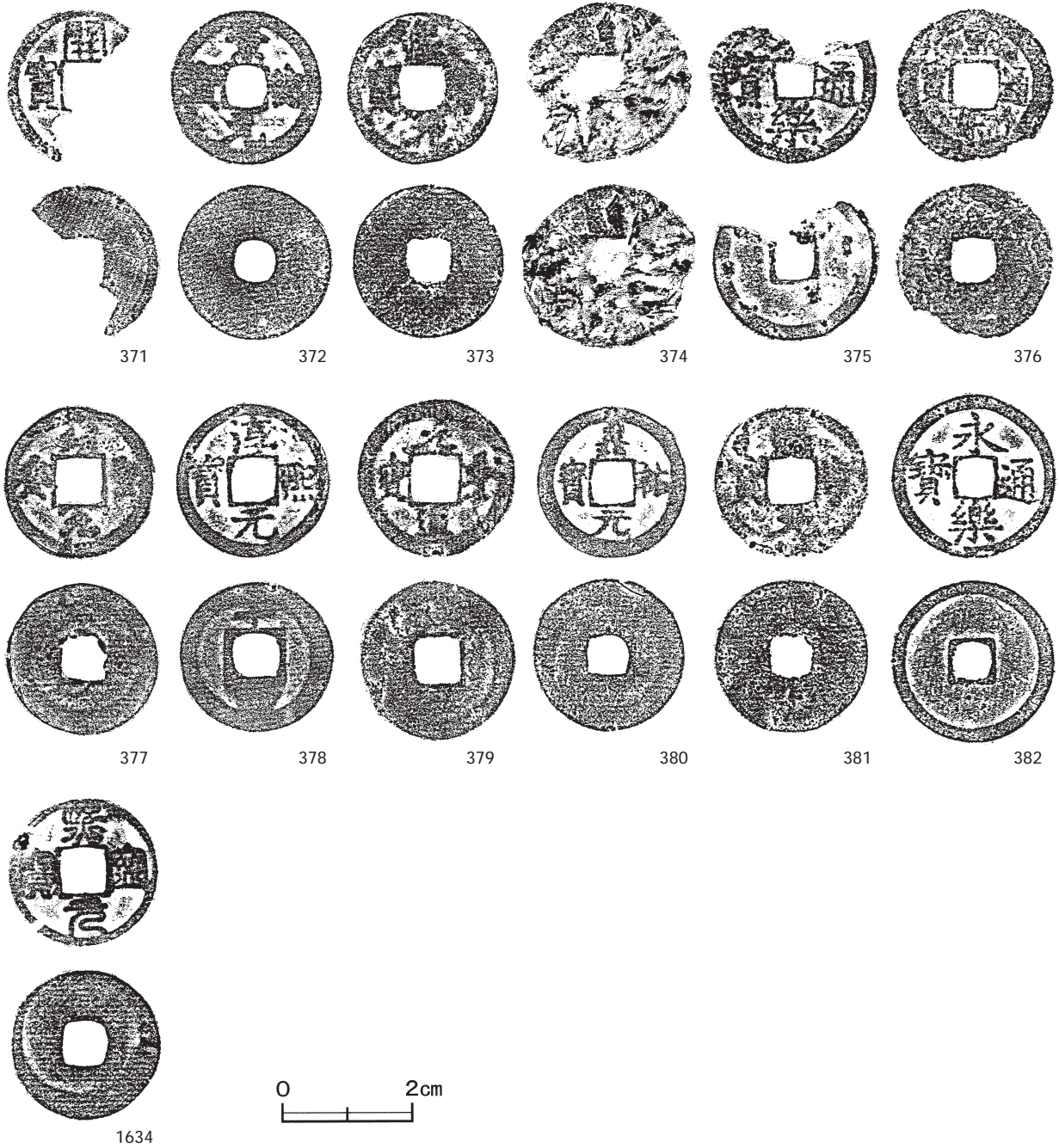
第160図 第5号建物跡出土遺物実測図(1)



第161図 第5号建物跡出土遺物実測図(2) [古銭は原寸大]



第162図 第5号建物跡出土遺物実測図(3) [古銭は原寸大]



第163図 第5号建物跡出土遺物実測図(4)

第5号建物跡出土遺物観察表(第160~163図)

番号	器形	器質	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
327	小皿	土師質土器	7.3	2.2	3.4	雲母・赤色粒子	にぶい橙	普通	底部回転糸切り	西部黒色土下	95%
328	小皿	土師質土器	7.3	2.3	3.3	雲母	にぶい橙	普通	底部回転糸切り後ナデ	西部黒色土下	80%
329	小皿	土師質土器	[6.8]	2.1	3.3	雲母	にぶい橙	普通	底部回転糸切り	西部黒色土下	25%
330	皿	土師質土器	11.4	3.3	4.4	雲母	にぶい橙	普通	底部回転糸切り	西部黒色土下	95%
1609	皿	土師質土器	—	(1.9)	4.9	雲母	にぶい黄橙	普通	底部回転糸切り	SM4内	30%

番号	器形	器質	口径	器高	底径	胎土・色調	絵付・釉薬	文様・特徴	産地・年代	出土位置	備考
331	縁袖小皿	陶器	[10.2]	1.9	[5.2]	灰白・浅黄	灰釉	トチン跡, 削り出し高台	瀬戸・美濃, 16C前半	南部黒色土下	25%
332	碗	磁器	—	(2.6)	6.6	灰白・灰白	染付・透明釉	梅月文	景德鎮窯, 15C中	P1内	20% B群

番号	器種	長さ(径)	幅(器高)	厚さ	重量	材質(胎土)	特徴	出土位置	備考
384	円筒埴輪	—	(5.9)	—	(110)	長石・石英	外面縦ハケ、内面ナデ	北部砂層	PL46
333	石白	(29.5)	(17.0)	12.2	(4,320)	砂岩	上白 すり合せ部不鮮明	P6内	
334	毛抜	9.1	1.2	0.2	(10.6)	鉄	片側先端部欠損	SK151内	PL51
383	サイコロ	0.98	0.98	0.83	1.4	鹿角	6面とも仕上げは丁寧	北部砂層	PL53

番号	銭名	径	孔径	厚さ	重さ	初鋳年	材質	特徴	出土位置	備考
335	至道元寶	2.42	0.59	0.10	(2.52)	995	銅	草書、割れ	東部砂層	
336	天禧通寶	2.46	0.63	0.12	3.38	1017	銅	真書	中央部砂層	
337	元祐通寶	2.39	0.65	0.10	2.88	1086	銅	行書	北部砂層	
338	開元通寶	2.48	0.68	0.11	(3.66)	621	銅	真書	中央部黒色土面	
339	□□□□	—	0.60	0.12	(1.02)	—	銅	判読不能、欠け	中央部砂層	
340	治平元寶	2.43	0.66	0.13	3.54	1064	銅	真書	中央部黒色土面	
341	元豊通寶	2.37	0.69	0.12	3.62	1078	銅	行書	中央部黒色土面	
342	永樂通寶	2.51	0.57	0.18	5.10	1408	銅	真書	中央部黒色土面	
343	熙寧元寶	2.41	0.58	0.12	3.90	1068	銅	篆書	中央部黒色土面	
344	皇宋通寶	2.40	0.70	0.09	2.62	1038	銅	篆書	中央部黒色土面	
345	皇宋通寶	2.43	0.75	0.12	3.48	1038	銅	真書	中央部黒色土面	
346	祥符元寶	2.49	0.63	0.15	4.30	1009	銅	真書	中央部黒色土面	
347	熙寧元寶	2.49	0.66	0.12	4.00	1008	銅	篆書	中央部黒色土面	
348	開元通寶	2.45	0.68	0.13	(3.76)	845	銅	真書	中央部黒色土面	
349	元豊通寶	2.43	0.66	0.13	3.88	1078	銅	行書	中央部黒色土面	
350	元符通寶	2.38	0.65	0.12	3.66	1098	銅	篆書	中央部黒色土面	
351	嘉祐元寶	2.38	0.59	0.13	4.40	1056	銅	真書	中央部黒色土面	
352	開元通寶	2.40	0.68	0.10	2.74	621	銅	真書、星形孔	中央部黒色土面	
353	永樂通寶	2.50	0.53	0.12	3.58	1408	銅	真書	中央部黒色土面	
354	皇宋通寶	2.46	0.74	0.10	3.18	1038	銅	真書	中央部黒色土面	
355	祥符元寶	2.56	0.65	0.10	3.12	1008	銅	真書、割れ	中央部黒色土中	
356	元豊通寶	2.39	0.63	0.10	2.80	1078	銅	行書	中央部黒色土中	
357	永樂通寶	2.53	0.59	0.14	4.12	1408	銅	篆書、模鋳	南部覆土中	
358	元豊通寶	2.40	0.71	0.11	(2.76)	1078	銅	行書、欠け	南部覆土中	
359	皇宋通寶	2.35	0.73	0.08	(2.10)	1038	銅	模鋳	南部砂層	
360	永樂通寶	2.42	0.51	0.12	4.18	1408	銅	真書、模鋳	南部砂層	
361	開元通寶	2.35	0.67	0.10	2.96	621	銅	真書	南部砂層	
362	熙寧元寶	2.49	0.71	0.12	3.66	1068	銅	篆書	西部覆土中	
363	元祐通寶	2.46	0.59	0.10	3.32	1086	銅	行書	中央部黒色土中	
364	□□□寶	2.36	0.59	0.13	(2.32)	—	銅	錆がひどく判読不能	中央部砂層	
365	—	2.25	0.61	0.10	2.08	—	銅	判読不能、模鋳	中央部覆土中	
366	□□□□	2.40	0.53	0.09	(2.40)	—	銅	錆がひどく判読不能	中央部砂層	
367	景祐元寶	2.52	0.71	0.10	3.46	1034	銅	篆書	西部砂層	
368	元豊通寶カ	2.35	0.69	0.12	3.76	1078	銅	篆書、模鋳	中央部覆土中	
369	嘉祐通寶	2.34	0.79	0.08	(1.86)	1056	銅	真書、模鋳	中央部覆土中	
370	嘉祐通寶	2.40	0.75	0.10	2.80	1056	銅	真書	中央部黒色土中	
371	開□□寶	2.41	0.65	0.10	(1.38)	—	銅	真書、欠け	西部黒色土中	
372	景德元寶	2.38	0.63	0.10	3.00	1004	銅	真書、円孔、模鋳	北部砂層	
373	熙寧元寶	2.34	0.68	0.10	2.40	1068	銅	真書、模鋳	中央部黒色土中	
374	□□□□	2.34	0.48	0.10	(2.86)	—	銅	錆がひどく判読不能	西部砂層	
375	□樂通寶	2.56	0.56	0.13	(3.06)	1408	銅	真書、欠け、模鋳、鋳造斑	中央部黒色土下	
376	皇宋通寶	2.40	0.66	0.08	(1.92)	1038	銅	真書、欠け	中央部黒色土下	
377	紹聖元寶	2.34	0.71	0.13	3.70	1094	銅	真書、模鋳	南部黒色土中	
378	淳熙元寶	2.32	0.67	0.11	2.72	1174	銅	真書、背「十四」	中央部砂層	
379	元豊通寶	2.44	0.74	0.11	3.10	1078	銅	真書	P16内	
380	嘉祐元寶	2.32	0.63	0.11	3.54	1056	銅	真書	覆土中	
381	熙寧元寶	2.33	0.68	0.10	3.20	1068	銅	真書、模鋳	覆土中	
382	永樂通寶	2.50	0.59	0.12	3.70	1408	銅	真書	覆土中	
1634	熙寧元寶	2.28	0.72	0.08	2.72	1068	銅	篆書	炉5内	

所見 第1次面は第2次面の南部に黒色土を貼り付けて構築されている。黒色土の範囲外から検出されている土坑は、黒色土面を構築せず機能したものと考え、本跡に伴うと判断した。第1次面からは炉やピットが検出

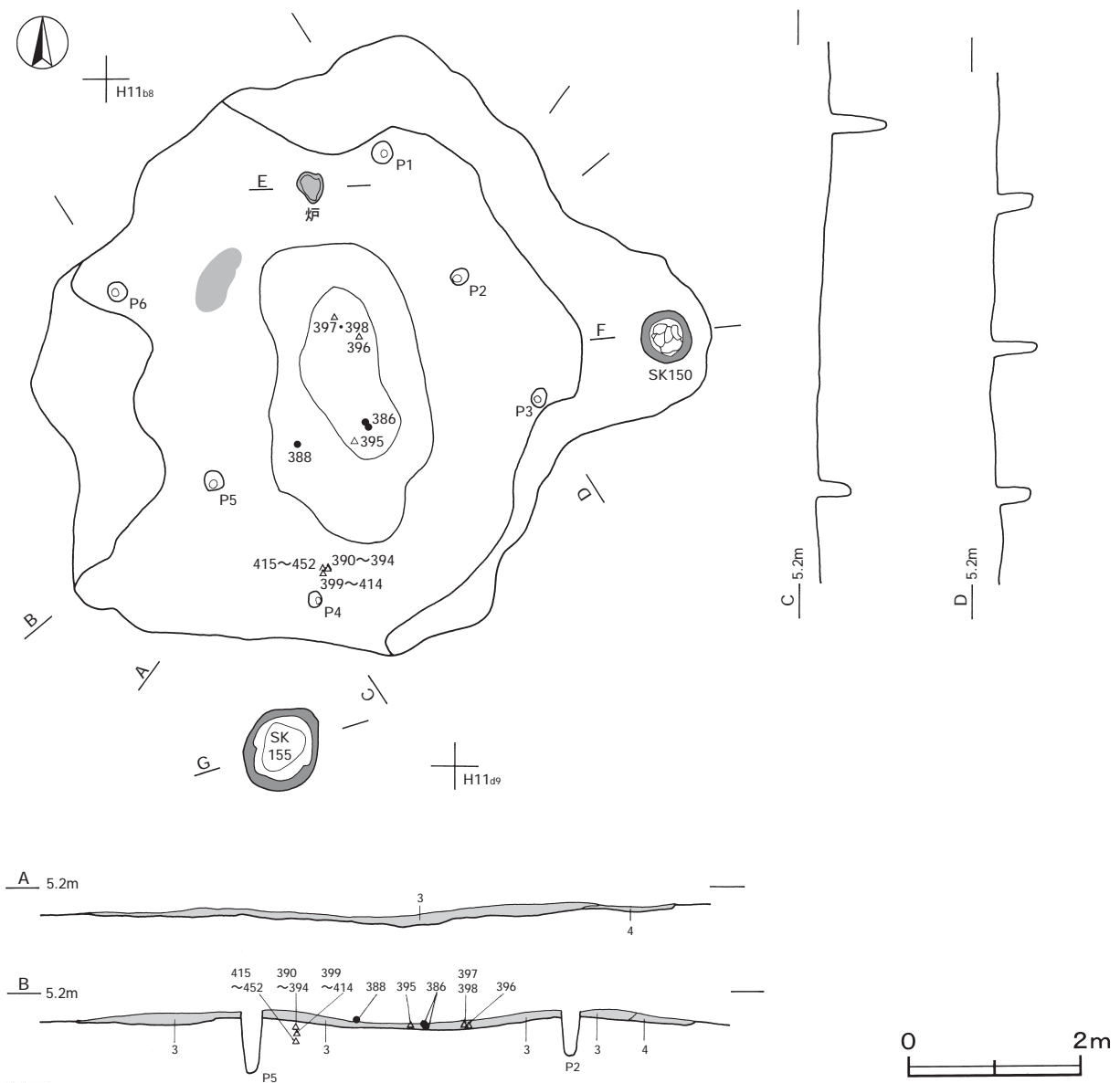
されておらず、出土遺物は第2次面や北部に集中していることから、主たる活動地点は第2次面の北部と想定した。また、黒色土中から円筒埴輪片が出土しており、当遺跡内で検出される黒色土が他地域から持ち込まれたことを示す貴重な資料となる。時期は、出土遺物から16世紀前半と考えられる。

第6号建物跡 2区S I-6 (第164~170図)

位置 調査区中央部 H11c8区を中心に位置している。

確認状況 表砂を3.5m除去し、標高約5.0mで黒色土面を確認した。上面の中心部はややくぼんでおり、炉跡と北西に並ぶ柱穴6か所が確認された。

規模と施設 黒色土の範囲は南北7m、東西7.9mの不定形である。黒色土の生活面は南北5.5m、東西5mの不定形である。炉1基、土坑2基が構築されている。



第164図 第6号建物跡実測図

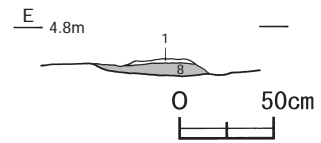
床 ほぼ平坦で、厚さ4～13cmの黒色土を貼り付けた床面と、周辺にはこれらが流れ出した締めりのない黒色土が広がっている。土層断面図中、第3層は硬化した黒色土A層、第4層は黒色土B層である。北西部から小範囲ではあるが焼砂が検出されている。

炉 (第165図) 当初焼砂範囲として捉えたが、赤変硬化したブロック状の焼土が検出されたため炉の底部と判断した。

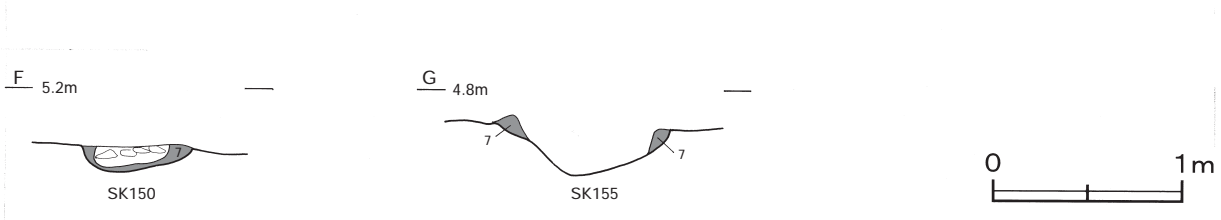
土層断面図中、第8層は焼土層で厚さ5cmである。

ピット 6か所。P5は深さ73cmとやや深いが、その他のピットは40～67cmである。中央の落ち込み部を囲むように配され、北西に軸線をもっていることから上屋を支えた柱穴と考えられる。

土坑 (第166図) 第150号土坑は東部、第155号土坑は南部に位置している。第150号土坑は厚さ1～10cmほどの粘土を貼り付けて構築されており、中礫が出土している。第155号土坑は上端部に粘土が貼り付けてある。



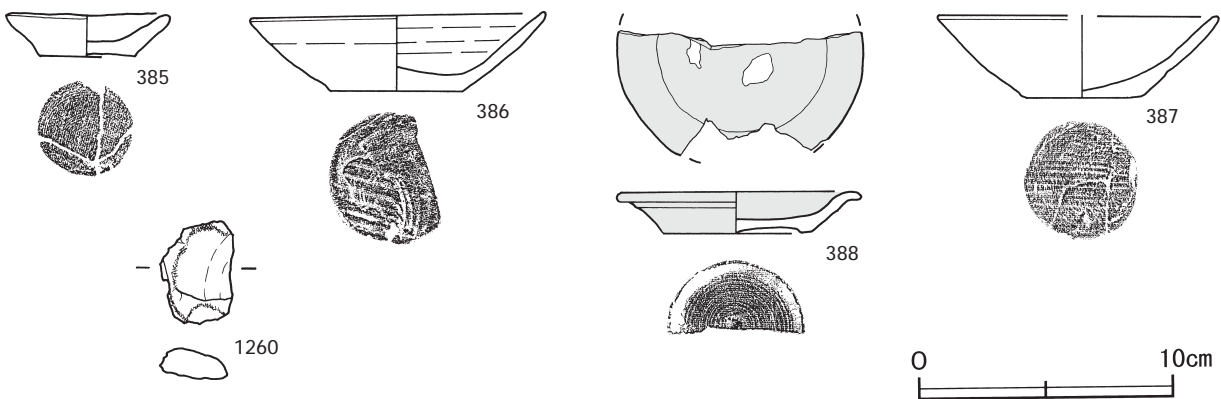
第165図 第6号建物跡炉土層図



第166図 第6号建物跡土坑土層図

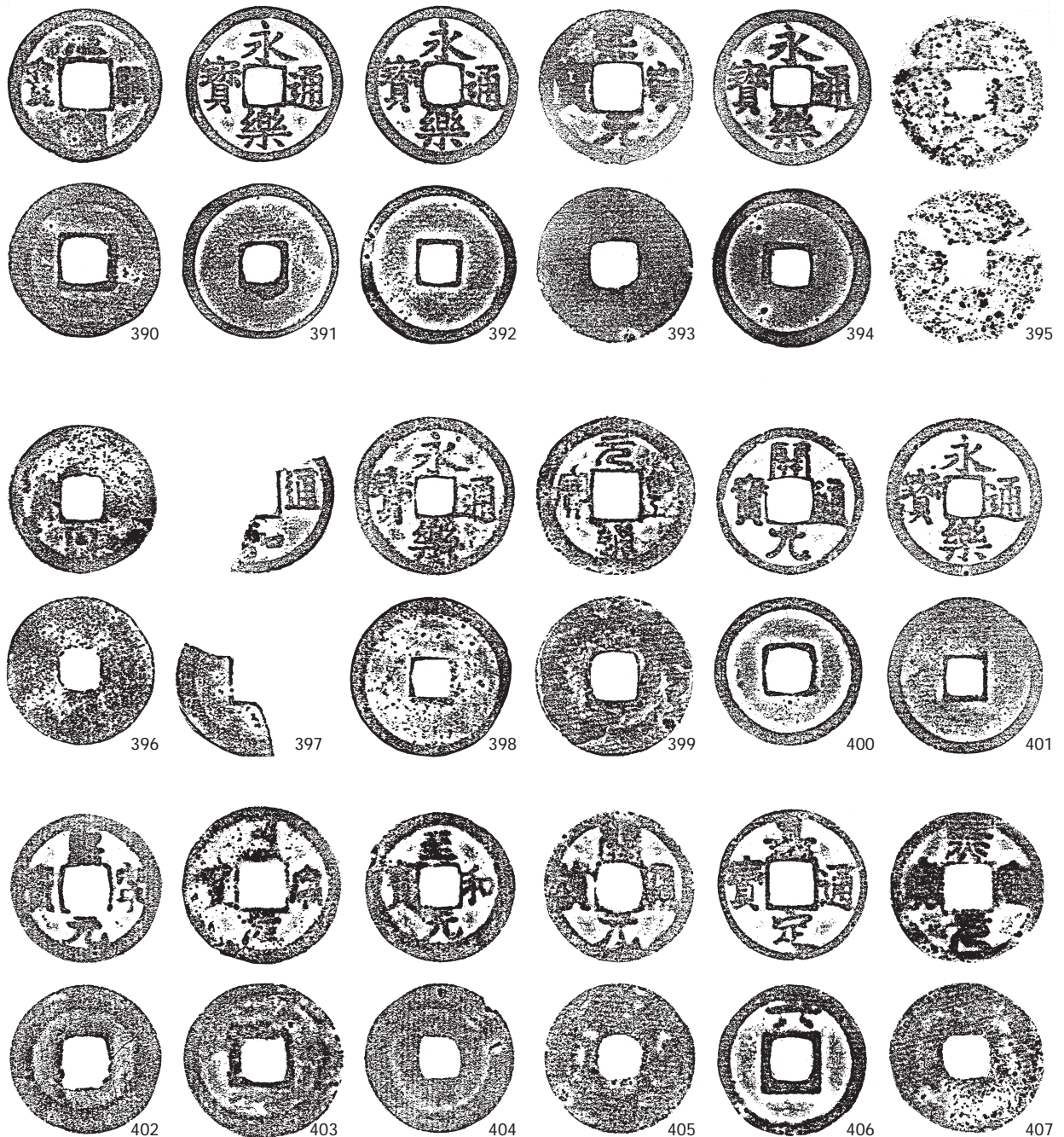
遺物出土状況 土師質土器片90点(皿81, 内耳鍋4, 播鉢5), 陶器片1点(皿), 石器2点(火打石), 金属製品65点(古銭62, 不明3)が中央部の黒色土中, 礫100点が第155号土坑から出土している。388は中央部の黒色土面, 386, 395・396は中央部の黒色土中, 390～394, 399～452は南部の黒色土を除去した下層から出土している。

388の鉄釉小皿は鉄釉が高台まで見られる。南部から出土した古銭は、黒色土を除去した下層からまとまって出土している。最も新しい「永樂通寶」は11枚出土しており、銭文も鮮明である。その他の古銭は銭文が潰れており、不鮮明のものが多い。

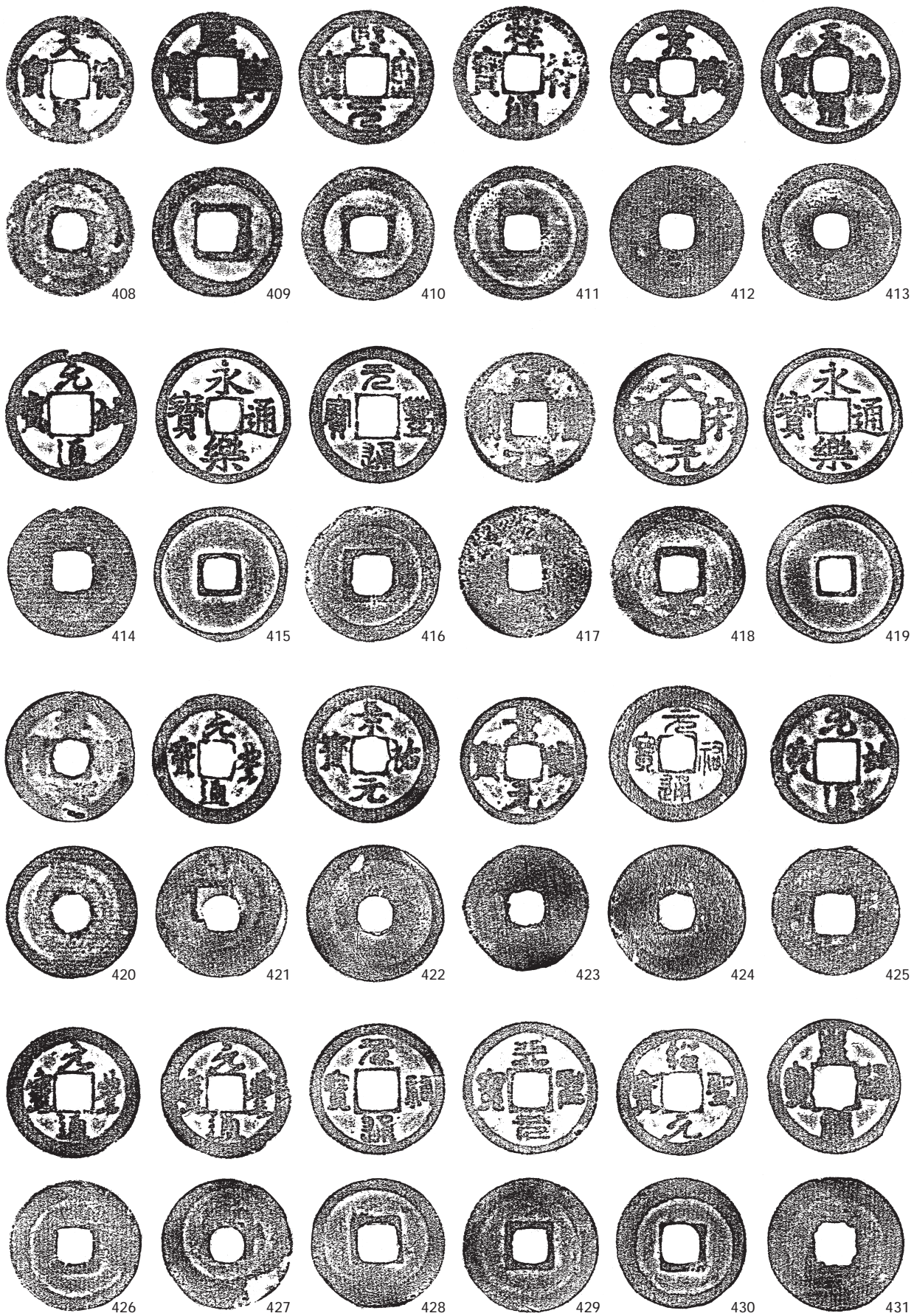


第167図 第6号建物跡出土遺物実測図(1)

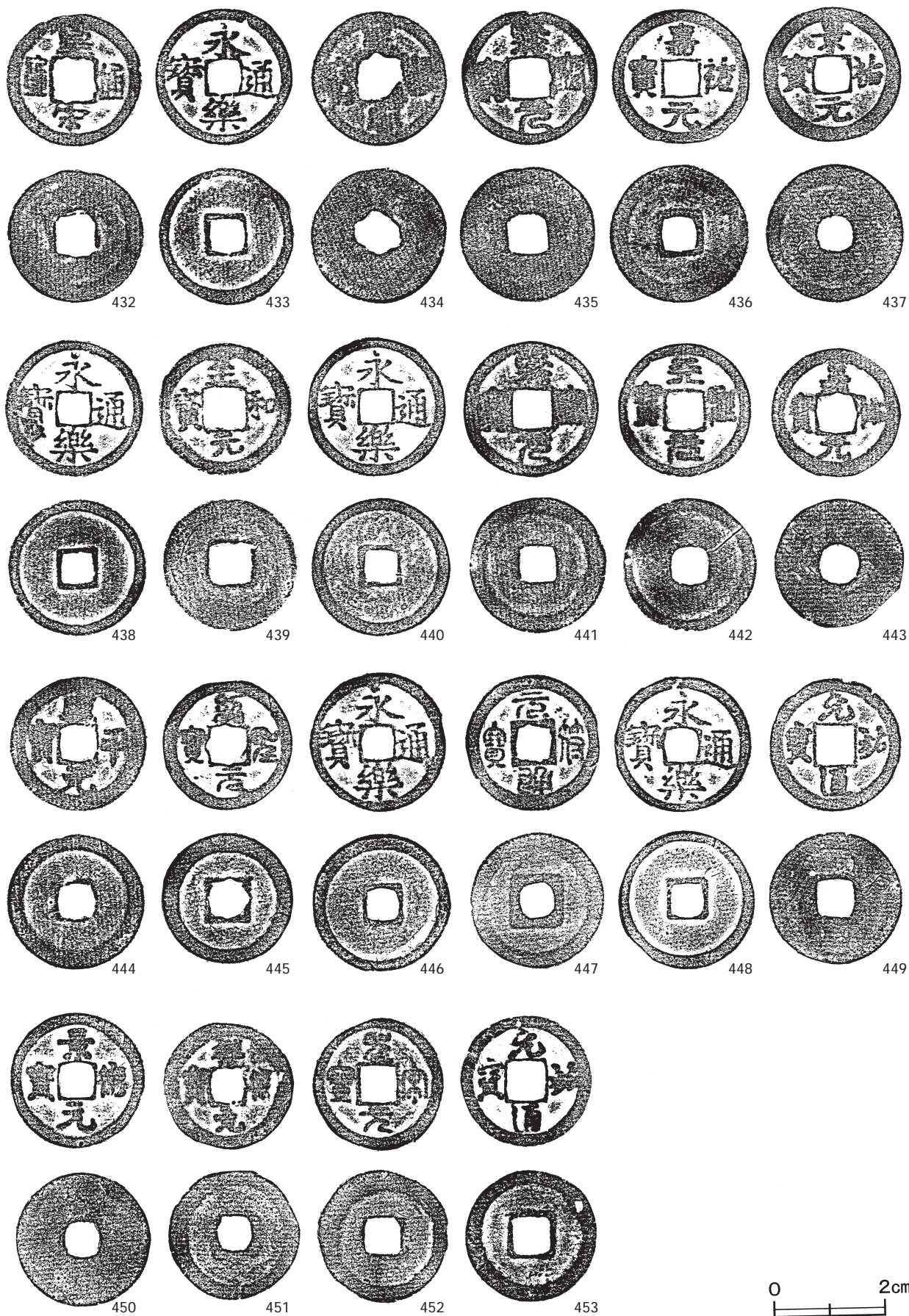
所見 中央部はくぼんでおり出土遺物が集中していることから、主たる活動地点は中央部と考えられる。炉の痕跡は確認されたが、黒色土を貼り付けて構築した土坑がなく、前述した生活の痕跡を残す建物跡とは内部施設の構成に違いが見られる。継続して生活が営まれていたとは考えにくく、一時的な生活の場か作業場であったものと考えられる。南部から出土した古銭は埋納銭か備蓄銭である可能性が高い。時期は出土した鉄釉小皿や古銭から、16世紀後半と考えられる。



第168図 第6号建物跡出土遺物実測図(2) [古銭は原寸大]



第169図 第6号建物跡出土遺物実測図(3) [古銭は原寸大]



第170図 第6号建物跡出土遺物実測図(4)

第6号建物跡出土遺物観察表（第167～170図）

番号	器形	器質	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
385	小皿	土師質土器	6.3	1.7	3.8	雲母・赤色粒子	灰 褐	普通	底部回転糸切り	覆土中	90% PL40
386	皿	土師質土器	11.5	3.2	5.3	雲母・赤色粒子	にぶい橙	普通	底部回転糸切り後ナデ	中央部黒色土中	50%
387	皿	土師質土器	[11.0]	3.3	4.6	雲母・赤色粒子	橙	普通	底部回転糸切り後ナデ	覆土中	60%

番号	器形	器質	口径	器高	底径	胎土・色調	絵付・釉薬	文様・特徴	産地・年代	出土位置	備考
388	鉄釉稜皿	陶器	9.7	1.7	5.8	灰白・暗赤褐	鉄釉	内外面施釉, 削り出し高台	瀬戸・美濃, 16C後半	中央部黒色土面	50% 大窯II期

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
1260	火打石	3.9	2.9	1.4	19.9	瑪瑙	摩滅の集中箇所有り	覆土中	PL54

番号	銭名	径	孔径	厚さ	重さ	初铸年	材質	特徴	出土位置	備考
390	元祐通寶	2.41	0.73	0.08	2.74	1086	銅	篆書	南部黒色土下	
391	永樂通寶	2.44	0.58	0.14	3.96	1408	銅	真書	南部黒色土下	
392	永樂通寶	2.46	0.57	0.14	4.00	1408	銅	真書	南部黒色土下	
393	熙寧元寶	2.40	0.76	0.10	3.14	1068	銅	真書	南部黒色土下	
394	永樂通寶	2.46	0.56	0.14	4.58	1408	銅	真書	南部黒色土下	
395	開元通寶	2.32	0.65	0.24	(2.38)	621	銅	真書, 錆がひどい, 割れ, 模铸	中央部黒色土中	
396	□□□□	2.32	0.64	0.09	2.34	—	銅	判読不能, 模铸	中央部黒色土中	
397	—	—	—	0.11	(1.18)	—	銅	真書, 欠け	中央部黒色土下	
398	永樂通寶	2.50	0.57	0.12	3.32	1408	銅	真書	中央部黒色土下	
399	元豐通寶	2.51	0.73	0.11	2.80	1078	銅	篆書	南部黒色土下	
400	開元通寶	2.31	0.68	0.10	2.50	621	銅	真書	南部黒色土下	
401	永樂通寶	2.46	0.54	0.11	3.68	1408	銅	真書	南部黒色土下	
402	熙寧元寶	2.36	0.71	0.12	3.12	1068	銅	真書	南部黒色土下	
403	熙寧元寶	2.48	0.67	0.14	4.78	1068	銅	篆書	南部黒色土下	
404	至和元寶	2.33	0.61	0.12	3.76	1054	銅	真書	南部黒色土下	
405	開元通寶	2.35	0.68	0.09	3.16	621	銅	真書	南部黒色土下	
406	嘉定通寶	2.36	0.69	0.12	2.84	1208	銅	真書, 背上「六」	南部黒色土下	
407	熙寧元寶	2.44	0.74	0.11	3.32	1068	銅	篆書	南部黒色土下	
408	天禧通寶	2.35	0.60	0.12	3.20	1017	銅	真書	南部黒色土下	
409	熙寧元寶	2.39	0.75	0.12	3.66	1068	銅	真書	南部黒色土下	
410	熙寧元寶	2.43	0.67	0.11	3.58	1068	銅	篆書	南部黒色土下	
411	祥符通寶	2.43	0.63	0.12	2.90	1008	銅	真書	南部黒色土下	
412	景德元寶	2.40	0.62	0.09	2.90	1004	銅	真書	南部黒色土下	
413	天禧通寶	2.50	0.66	0.09	3.32	1017	銅	真書	南部黒色土下	
414	元祐通寶	2.38	0.70	0.11	3.26	1086	銅	行書	南部黒色土下	
415	永樂通寶	2.43	0.57	0.13	3.92	1408	銅	真書	南部黒色土下	
416	元豐通寶	2.44	0.72	0.10	3.34	1078	銅	篆書	南部黒色土下	
417	正隆元寶	2.37	0.59	0.12	3.44	1157	銅	模铸	南部黒色土下	
418	大宋元寶	2.38	0.69	0.12	3.10	1225	銅	真書, 背下「元」	南部黒色土下	南宋
419	永樂通寶	2.45	0.57	0.12	3.22	1408	銅	真書	南部黒色土下	
420	祥符元寶	2.36	0.60	0.09	2.72	1008	銅	真書, 円孔, 模铸	南部黒色土下	
421	元豐通寶	2.35	0.62	0.10	3.18	1078	銅	行書, 背錯范	南部黒色土下	
422	景祐元寶	2.48	0.64	0.11	3.88	1034	銅	真書, 星形孔	南部黒色土下	
423	景德元寶	2.28	0.62	0.12	3.30	1004	銅	真書	南部黒色土下	
424	元祐通寶	2.45	0.65	0.10	3.40	1086	銅	篆書	南部黒色土下	
425	元祐通寶	2.31	0.77	0.04	2.18	1086	銅	行書	南部黒色土下	
426	元豐通寶	2.36	0.64	0.10	2.86	1078	銅	行書, 背錯范	南部黒色土下	
427	元豐通寶	2.39	0.62	0.12	3.90	1078	銅	行書	南部黒色土下	
428	元祐通寶	2.40	0.71	0.11	3.48	1086	銅	篆書	南部黒色土下	
429	天聖元寶	2.43	0.65	0.10	3.60	1023	銅	篆書	南部黒色土下	
430	紹聖元寶	2.34	0.67	0.10	2.84	1094	銅	行書	南部黒色土下	
431	皇宋通寶	2.48	0.78	0.11	3.88	1038	銅	篆書, 星形孔	南部黒色土下	
432	皇宋通寶	2.45	0.73	0.10	3.28	1038	銅	真書, 星形孔	南部黒色土下	
433	永樂通寶	2.48	0.59	0.13	3.76	1408	銅	真書	南部黒色土下	
434	皇宋通寶	2.46	0.81	0.08	3.02	1038	銅	篆書, 星形孔	南部黒色土下	

番号	銭名	径	孔径	厚さ	重さ	初铸年	材質	特徴	出土位置	備考
435	熙寧元寶	2.43	0.73	0.08	2.98	1068	銅	篆書	南部黒色土下	
436	嘉祐元寶	2.52	0.60	0.12	3.26	1056	銅	真書	南部黒色土下	
437	景祐元寶	2.47	0.60	0.07	2.78	1034	銅	真書	南部黒色土下	
438	永樂通寶	2.45	0.57	0.12	3.58	1408	銅	真書	南部黒色土下	
439	至和元寶	2.40	0.80	0.10	2.74	1054	銅	真書	南部黒色土下	
440	永樂通寶	2.49	0.60	0.18	5.10	1408	銅	真書	南部黒色土下	
441	熙寧元寶	2.47	0.70	0.12	4.50	1068	銅	篆書	南部黒色土下	
442	天聖元寶	2.41	0.72	0.11	3.08	1023	銅	篆書	南部黒色土下	
443	嘉祐元寶	2.33	0.69	0.09	(2.38)	1056	銅	真書	南部黒色土下	
444	咸平元寶	2.45	0.64	0.11	3.46	998	銅	真書	南部黒色土下	
445	紹聖元寶	2.36	0.71	0.12	3.54	1094	銅	篆書, 星形孔	南部黒色土下	
446	永樂通寶	2.48	0.57	0.11	3.10	1408	銅	真書	南部黒色土下	
447	元符通寶	2.43	0.62	0.14	4.44	1098	銅	篆書	南部黒色土下	
448	永樂通寶	2.47	0.62	0.17	3.78	1408	銅	真書	南部黒色土下	
449	元祐通寶	2.42	0.74	0.14	3.88	1086	銅	行書	南部黒色土下	
450	景德元寶	2.43	0.63	0.12	3.70	1004	銅	真書	南部黒色土下	
451	祥符元寶	2.37	0.58	0.11	3.42	1008	銅	真書	南部黒色土下	
452	聖宋元寶	2.39	0.63	0.13	3.64	1101	銅	篆書	南部黒色土下	
453	元祐通寶	2.38	0.72	0.13	2.36	1086	銅	行書	覆土中	

第7号建物跡 2区S I - 7 (第171~175図)

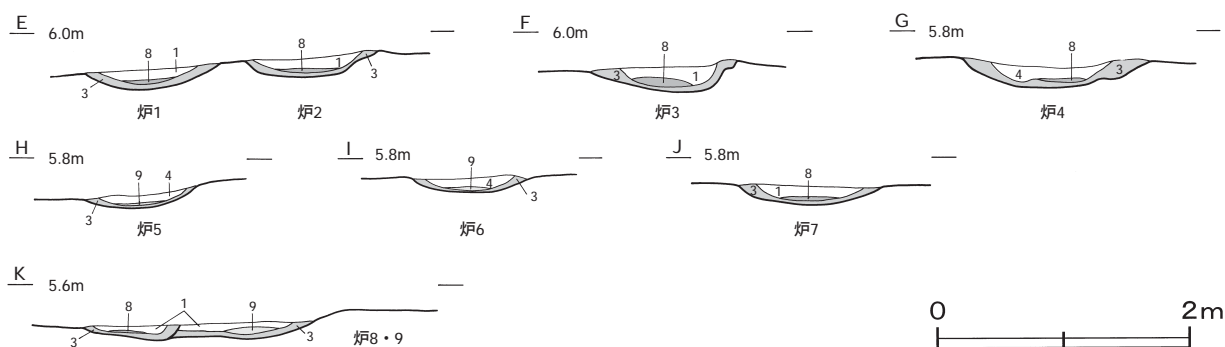
位置 調査区南部J11c8区を中心に位置している。

確認状況 表砂を1.5m除去し、標高約5.7~5.9mから黒色土面を確認した。上面は中央部がやや高く、複数の炉や土坑、貝集積地が確認された。また、黒色土を除去すると複数のピットが確認された。

規模と施設 黒色土の範囲は南北14m、東西12mの不定形である。北部と南部の黒色土面との間には約50cmの砂層が入っている。炉9基、土坑5基が構築されており、南部には3か所、北部には1か所の貝集積地が確認された。

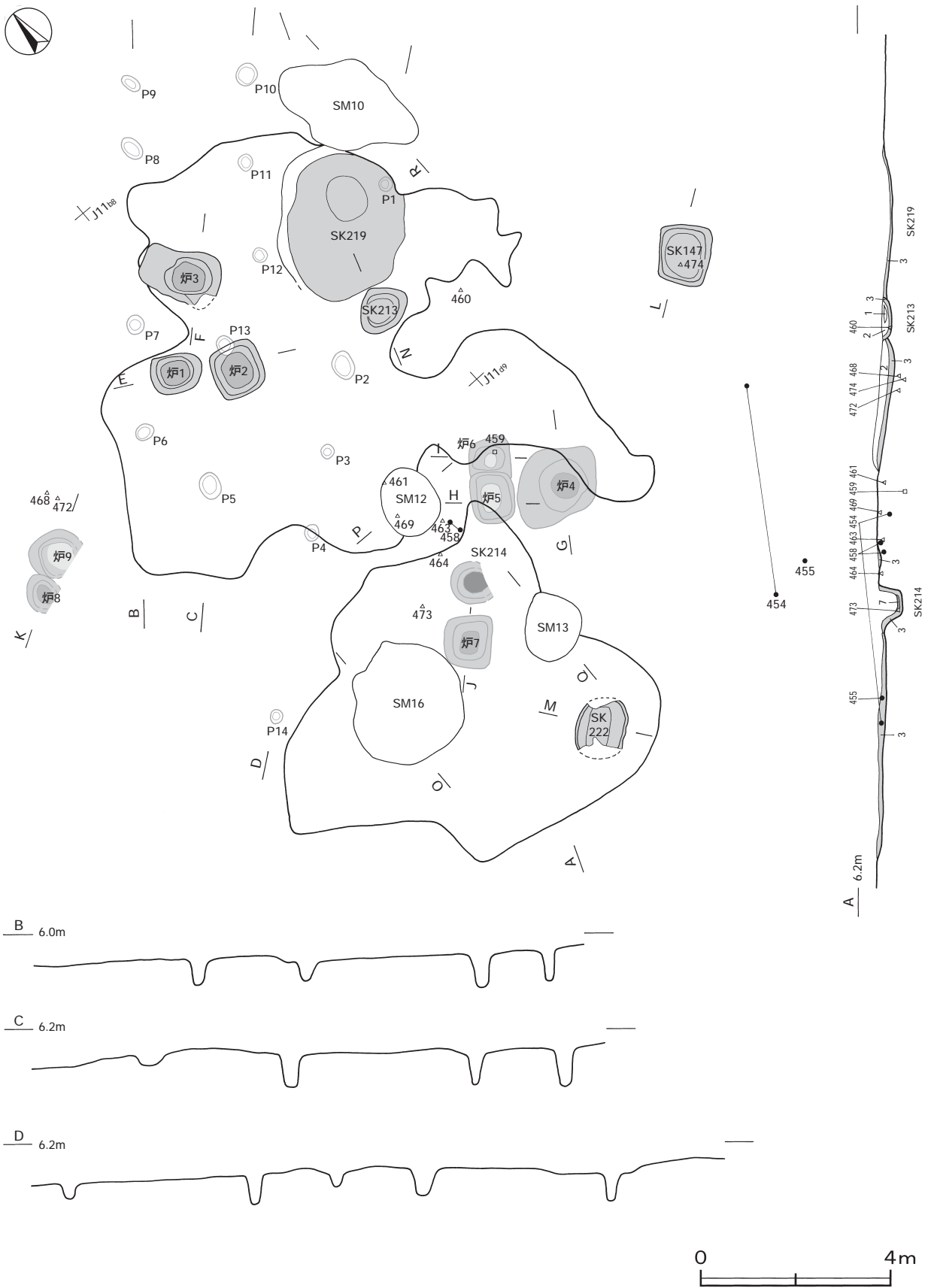
床 中央部がやや高いが、ほぼ平坦である。厚さ2~14cmの黒色土を貼り付けて構築されている。

炉 (第171図) 第1~3号炉は中央部、第4~7号炉は南東部、第8・9号炉は西部に位置している。第5号炉は第6号炉を掘り込んで構築されている。第1~3号炉は厚さ3~10cm、第4~9号炉は厚さ1~14cmの黒色土を貼り付けて構築されている。



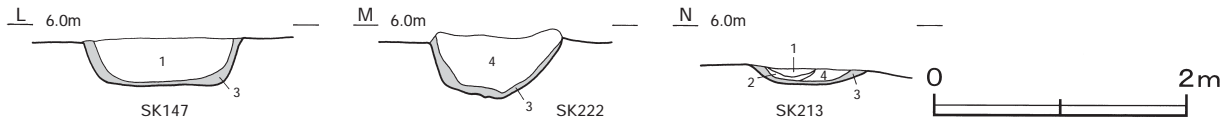
第171図 第7号建物跡炉土層図

ピット 14か所。P3・P5・P7は30・20・38cmとやや浅いが、その他は深さ50~76cmである。共に北東を軸として配されていることから、上屋を支えた柱穴と考えられる。



第172图 第7号建物跡実測図

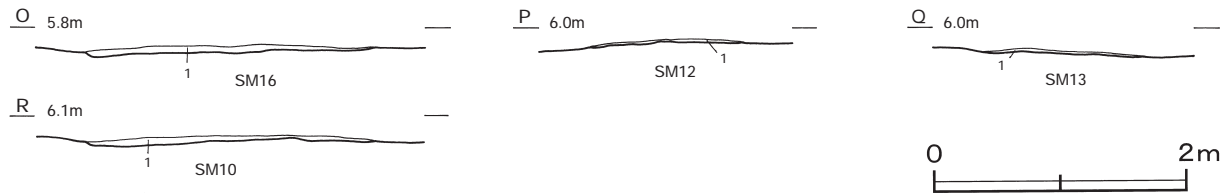
土坑（第173図） 黒色土で構築された第147・213・214・222号土坑と砂を掘り込んだ第219号土坑がある。北東部の第214号土坑は底面に粘土層が確認されている。



第173図 第7号建物跡土坑土層図

貝集積地(第174図) 第10号貝集積地は北部に位置し、長軸3.2m、短軸2mの不定形で、貝層の厚さは最大で6cmである。第12号貝集積地は中央部に位置し、長径1.5m、短径1.2mの楕円形で、貝層の厚さは最大で3cmである。第13号貝集積地は南部に位置し、長軸1.4m、短軸1.2mの不定形で、貝層の厚さは最大で3cmである。第16号貝集積地は南部に位置し、長軸2.6m、短軸2.3mの不定形で、貝層の厚さは最大で5cmである。

遺物出土状況 土師質土器片110点(皿108, 香炉1, 播鉢1), 陶器片3点(皿), 石器1点(砥石), 礫4点, 金



第174図 第7号建物跡貝集積地土層図

第10号貝集積地出土貝種一覧表

No.	貝種	重さ	比率	殻頂数	備考
1	オオタニシ	220.0	4.21	32	淡水
2	マツカサガイ	1,210.0	23.14		淡水
3	マツカサガイ細片	3,800.0	72.66		淡水 焼け多い

第13号貝集積地出土貝種一覧表

No.	貝種	重さ	比率	殻頂数	備考
1	オオタニシ	20.0	1.46	4	淡水
2	ツメタガイ	11.0	0.80	2	
3	マツカサガイ	30.0	2.19	11	淡水
4	シジミ属	5.0	0.36	7	淡水または汽水
5	アサリ	10.0	0.73	6	
6	コタマガイ	55.0	4.01	13	
7	ウバガイ	1,210.0	88.26	9	細片含む
8	イタボガキ属細片	30.0	2.19		

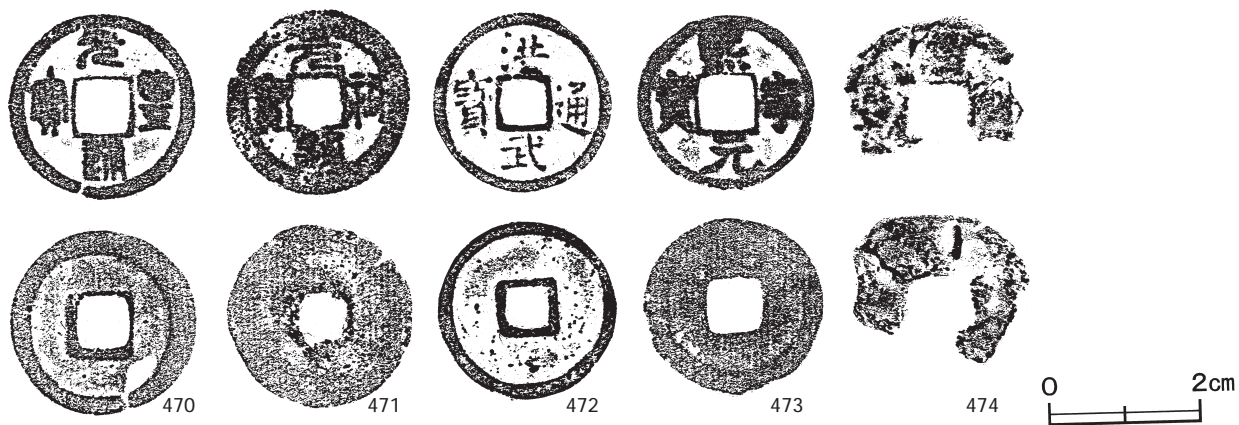
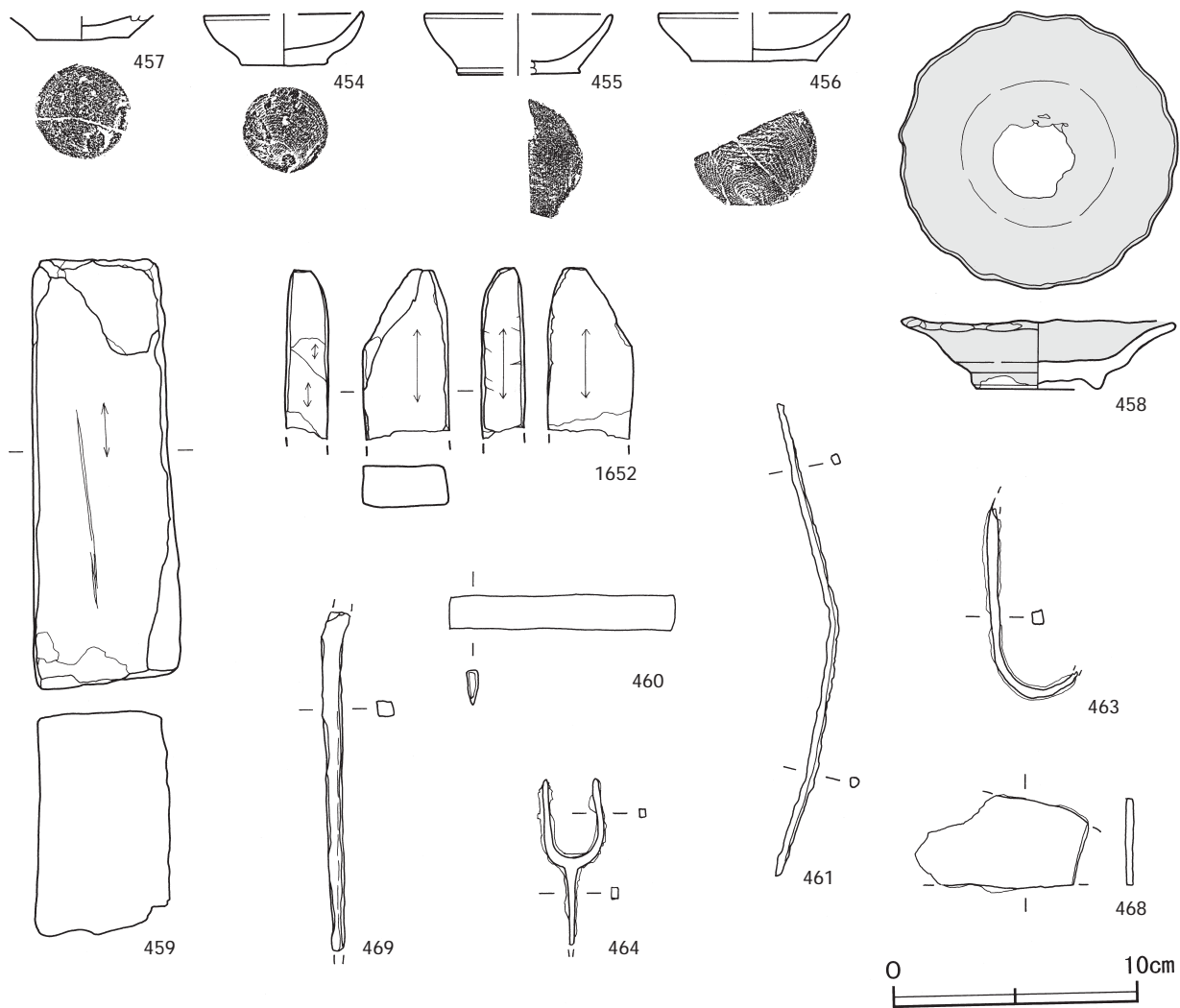
第12号貝集積地出土貝種一覧表

No.	貝種	重さ	比率	殻頂数	備考
1	マツカサガイ	290.0	62.37	237	淡水
2	ハマグリ	20.0	4.30	1	
3	ウバガイ	110.0	23.66	2	細片含む
4	イタボガキ属細片	45.0	9.68		

第16号貝集積地出土貝種一覧表表

No.	貝種	重さ	比率	殻頂数	備考	No.	貝種	重さ	比率	殻頂数	備考
1	ダンバイキサゴ	65.0	0.28	13		9	コタマガイ	380.0	1.63	58	
2	オオタニシ	45.0	0.19	8	淡水	10	チョウセンハマグリ	210.0	0.90	55	
3	ツメタガイ	105.0	0.45	31		11	ウチムラサキガイ	205.0	0.88		
4	サルボウガイ	130.0	0.56	37		12	ウバガイ	915.0	3.91	L=59 R=64	
5	ペンケイガイ	185.0	0.79	46		13	ウバガイ細片	16,980.0	72.65		
6	マツカサガイ	935.0	4.00		淡水	14	ウバガイ細片	3,080.0	13.18		
7	シジミ属	85.0	0.36	81	淡水または汽水	15	その他	50.0	0.21		アワビ, アカニシ, レイシ等
8	アサリ	2.0	0.01	2							

属製品6点(筭1, 古銭5)が出土している。454~457は小形品で, 456以外はナデによる2次調整が底部に施されている。459は第6号炉内から出土しており, 一部鉄が付着している。また, 461・463は中央部の砂層から出土しており, 461は中央部が緩やかに屈曲している。460・464・469は中央部, 468は西部の黒色土面を除去した砂層から出土している。



第175図 第7号建物跡出土遺物実測図

第7号建物跡出土遺物観察表（第175図）

番号	器形	器質	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
454	小皿	土師質土器	[6.4]	2.2	3.6	雲母・赤色粒子	にぶい橙	普通	底部回転糸切り	東部砂層	70%
455	小皿	土師質土器	[7.6]	2.6	[5.2]	雲母・赤色粒子	にぶい褐	普通	内外面ナデ	東部砂層	30%
456	小皿	土師質土器	[7.8]	2.0	5.2	雲母・赤色粒子	にぶい橙	普通	底部回転糸切り	覆土中	40%
457	小皿	土師質土器	—	(1.0)	3.8	雲母	にぶい褐	普通	底部回転糸切り	覆土中	40%

番号	器形	器質	口径	器高	底径	胎土・色調	絵付・釉薬	文様・特徴	産地・年代	出土位置	備考
458	青磁稜花皿	磁器	11.3	2.8	5.2	灰白・オリーブ灰	青磁釉	見込みに重ね積み痕	龍泉窯, 15C代	中央部黒色土下	100% PL37

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
459	砥石	23.4	7.9	12.2	4,280	砂岩	砥面1面, 一部鉄付着	炉6内	
1652	砥石	(7.0)	3.5	1.7	(64.6)	砂岩	砥面4面	SK222内	
460	小柄	9.3	1.4	0.4	7.9	銅	ほぼ歪み無し, 完存	中央部黒色土下	PL50
461	棒状金具	19.5	0.4	0.4	(9.3)	銅	断面方形, 中央屈曲	中央部砂層	
463	吊金具	(8.4)	0.4	0.6	(15.1)	鉄	断面方形, 下部U字状に屈曲	中央部砂層	
464	箆	(6.8)	2.6	0.4	(9.3)	鉄	断面方形, 2本箆, 柄部欠損	中央部黒色土下	PL50
468	火打金カ	(6.7)	3.6	0.3	(37.5)	鉄	片側欠損, 断面扁平	西部黒色土下	
469	筭カ	(14.0)	0.7	0.6	(33.0)	鉄	断面方形, 両端部欠損	中央部黒色土下	

番号	銭名	径	孔径	厚さ	重さ	初鑄年	材質	特徴	出土位置	備考
470	元豊通寶	2.47	0.68	0.12	3.12	1078	銅	篆書, 欠け, 鑄造斑	覆土中	
471	元祐通寶	2.46	0.68	0.12	3.34	1086	銅	篆書, 星形孔	覆土中	
472	洪武通寶	2.36	0.61	0.18	3.60	1368	銅	真書	西部砂層	
473	熙寧元寶	2.39	0.75	0.12	2.72	1068	銅	真書	南部黒色土下	
474	□□□□	—	0.72	0.15	(1.64)	—	銅	判読不能	SK147内	

所見 炉や柱穴が検出されており、日常雑器類も多く出土していることから、建物跡と判断した。黒色土の範囲外から検出された炉や土坑も、本跡に伴うものと判断した。これだけ多数の炉を有する建物跡は当遺跡内では異例である。

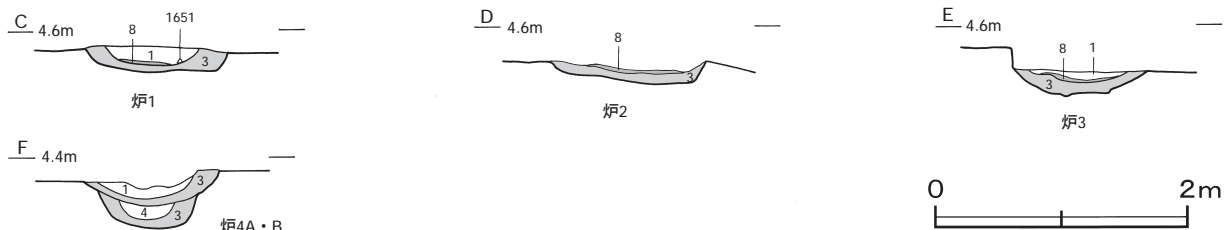
第8号建物跡 2区S I - 8（第176～181図）

位置 調査区南部J11b3区を中心に位置している。

確認状況 表砂を1.5m除去し、標高約4.5mから黒色土面を確認した。上面はほぼ平坦で、黒色土面の内外からは複数の炉と土坑が構築され、貝集積地も1か所確認された。

規模と施設 黒色土の範囲は南北13m、東西10mの不定形である。炉5基、土坑11基が構築されている。また、東部に貝集積地1か所が確認されている。

床 ほぼ平坦である。中央部付近では厚さ35cm、その他は厚さ10cmの黒色土A層を貼り付けて構築されている。南部の黒色土A層の間には、最大で約20cmの砂A層が入っている。



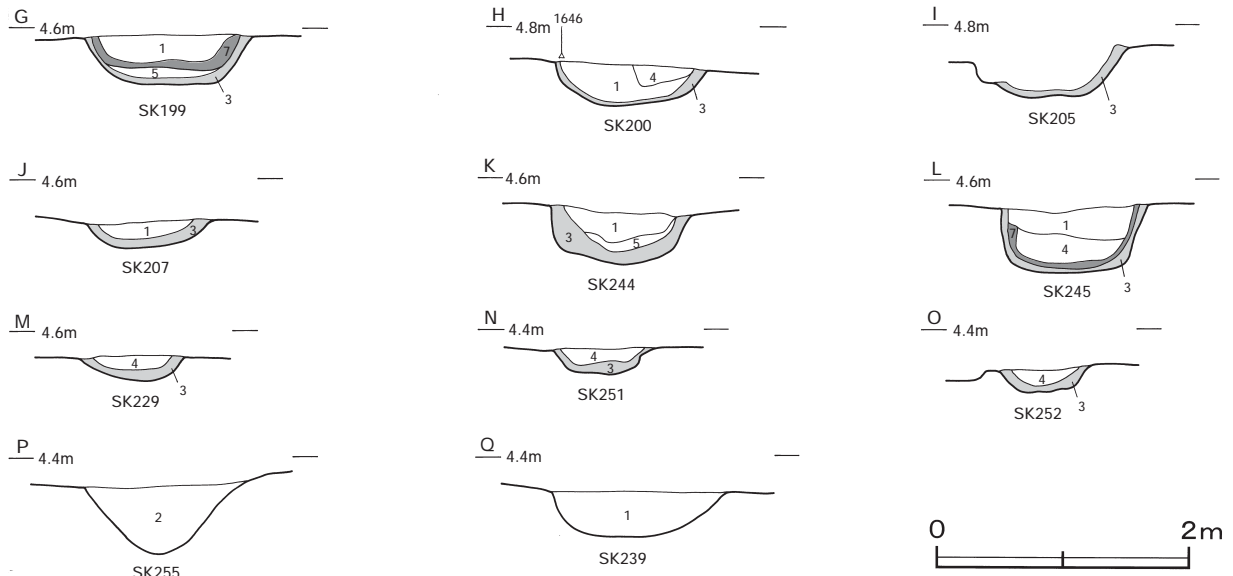
第176図 第8号建物跡炉土層図

炉（第176図） 第1・2号炉は西部，第3号炉は中央部，第4A・B号炉は北部に位置している。第1号炉は厚さ3～20cm，第3号炉は厚さ8～13cmの黒色土を貼り付けて構築されている。



第177図 第8号建物跡実測図

土坑（第178図） 黒色土で構築された第200・205・207・229・244・251・252号土坑と第239・255号土坑があり，黒色土面の西部と隣接する砂層に集中して構築されている。また，第199・245号土坑は粘土と黒色土で構築されている。



第178図 第8号建物跡土坑土層図

貝集積地（第179図） 東部に位置し長径1.7m，短径1.6mの円形で，貝層の厚さは最大で11cmである。

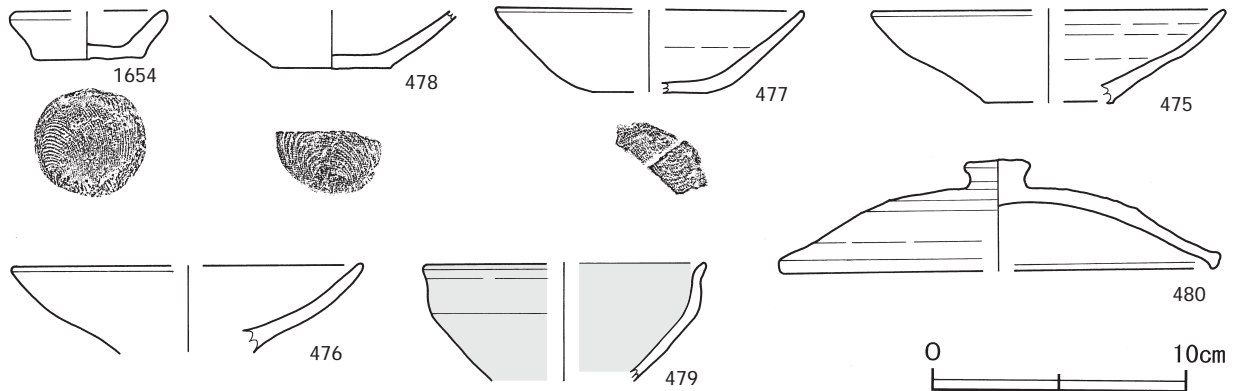


第179図 第8号建物跡貝集積地土層図

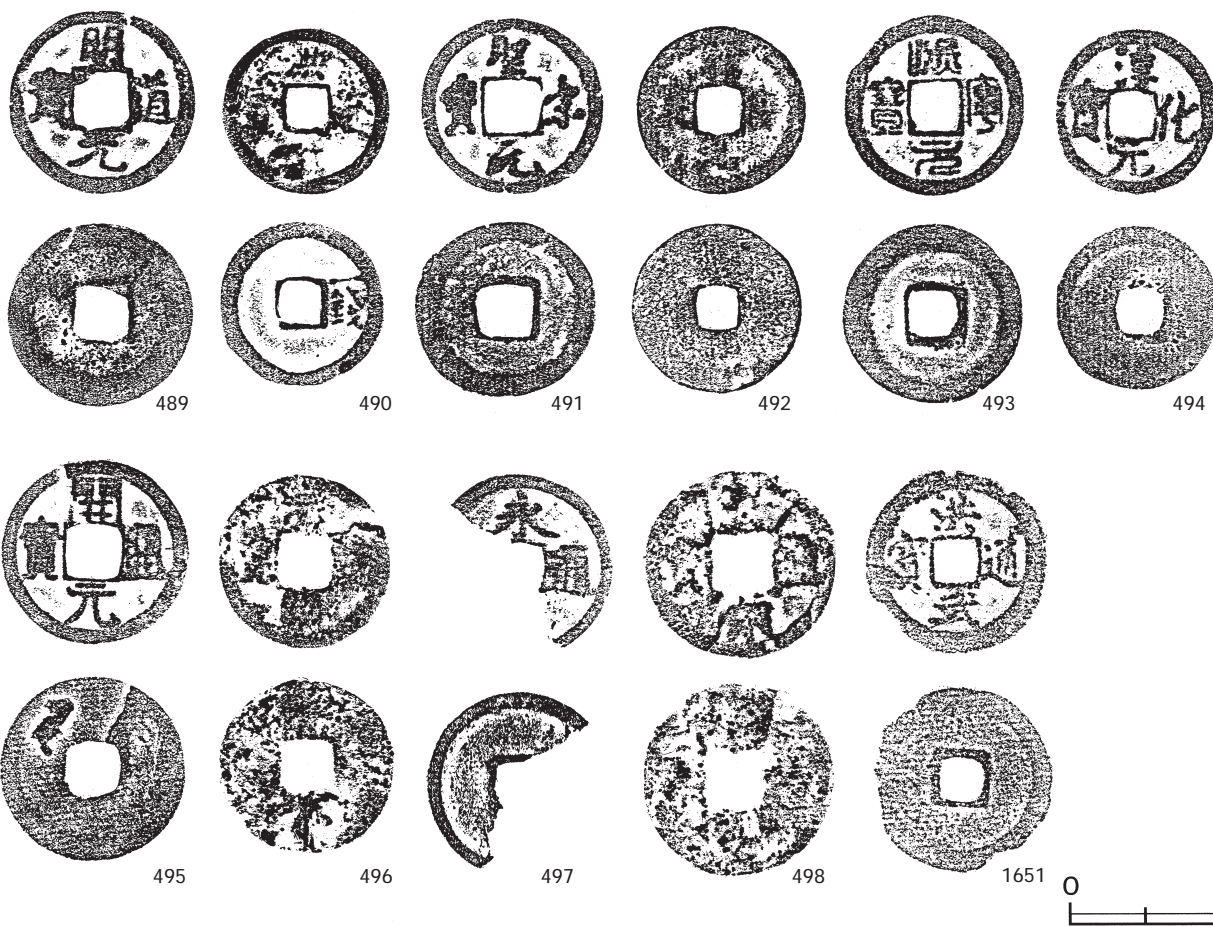
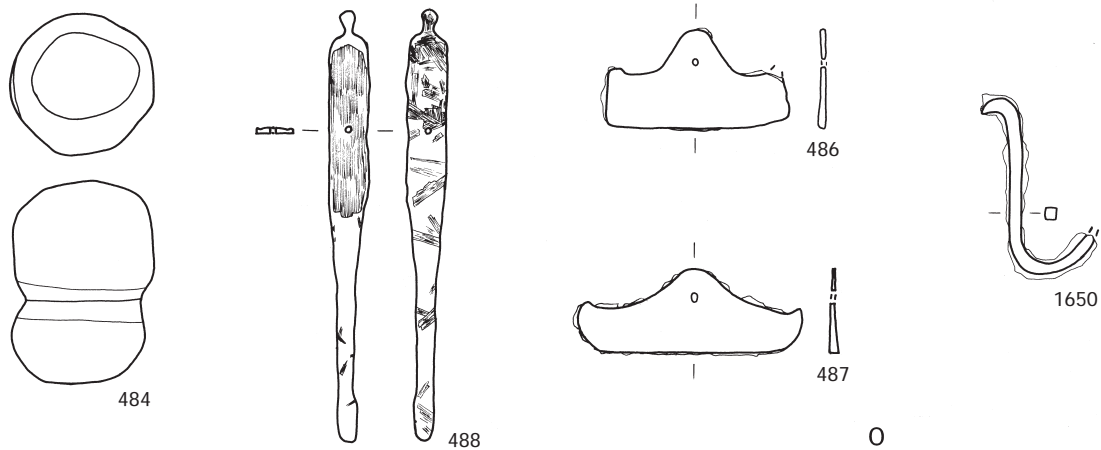
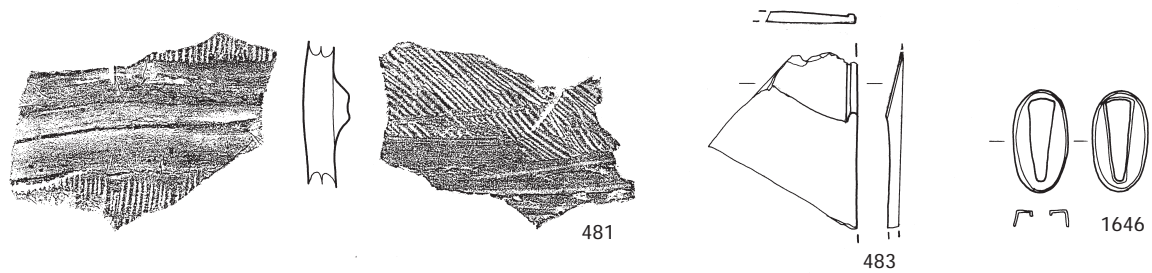
第19号貝集積地出土貝種一覧表

No.	貝種	重さ	比率	殻頂数	備考	No.	貝種	重さ	比率	殻頂数	備考
1	タニシ	5.0	0.08	3		6	ウバガイ	320.0	5.03	L=14 R=10	
2	サルボウガイ	40.0	0.63	5							
3	ベンケイガイ	55.0	0.86	4		7	イタボガキ属細片	260.0	4.08		
4	マツカサガイ	1,100.0	17.28		淡水	8	ウバガイ細片	4,560.0	71.64		
5	ハマグリ	25.0	0.39	7							

遺物出土状況 土師質土器片72点(皿71，内耳鍋1)，陶器片5点(皿1，碗2，甕2)，須恵器片1点(蓋)，土製品1点(円筒埴輪片)，石器・石製品5点(火打石3，五輪塔1，硯1)，金属製品14点(耳金1，火打金2，



第180図 第8号建物跡出土遺物実測図(1)



第181图 第8号建物跡出土遺物実測図(2)

筭1, 古銭10) が出土している。475・477・478・479は東部の黒色土中, 480は中央部の黒色土中から出土しており, 479は瀬戸・美濃産である。487は第4号炉, 1651は第1号炉から出土したものである。483・488はともに北部の黒色土中から出土しており, 488は布製のものに巻き付けられていたためか, 一部繊維が残っている。古銭は北部を中心に, 黒色土中から多く出土し, 497の「永樂通寶」が初鑄年1408年と最も新しい。

第8号建物跡出土遺物観察表 (第180・181図)

番号	器形	器質	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
478	小皿	土師質土器	—	(2.3)	5.6	雲母	にぶい橙	普通	底部回転糸切り	東部黒色土中	30%
1654	小皿	土師質土器	[6.2]	1.9	4.2	雲母	にぶい橙	普通	底部回転糸切り	炉3内	70%
475	皿	土師質土器	[13.8]	3.6	[5.1]	雲母・赤色粒子	にぶい橙	普通	内・外面ナデ	東部黒色土中	15%
476	皿	土師質土器	[13.8]	(3.4)	—	雲母・赤色粒子	にぶい橙	普通	内・外面ナデ	覆土中	20%
477	皿	土師質土器	[12.0]	3.3	[4.8]	雲母・赤色粒子	にぶい橙	普通	底部回転糸切り	東部黒色土中	20%
480	蓋	須恵器	[17.0]	4.4	—	石英・長石	灰	普通	天井部クロロナデ	中央部黒色土中	20%

番号	器形	器質	口径	器高	底径	胎土・色調	絵付・釉薬	文様・特徴	産地・年代	出土位置	備考
479	天目茶碗	陶器	[11.0]	(4.6)	—	灰白・黒	鉄釉	内・外面施釉	瀬戸・美濃, 16C後半	東部黒色土中	15%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質(胎土)	特徴	出土位置	備考
481	円筒埴輪	—	(5.9)	—	(130.0)	長石	外面縦ハケ後凸帯貼り付け, 内面縦ハケヘラナデ	北部黒色土下	PL46
483	硯	(7.0)	(3.6)	(0.5)	(21.9)	泥岩	陸部・堤一部残存	北部黒色土中	
484	五輪塔	(16.1)	11.3	11.2	(2,430)	砂岩	空風輪部, 一部風化	南部黒色土中	PL48
486	火打金	3.9	(7.5)	0.3	(22.0)	鉄	孔有り, 両端部やや上がる	北部黒色土下	PL52
487	火打金	3.0	9.0	0.7	37.9	鉄	孔有り, 両端部やや上がる	炉4 A・B内	PL52
488	筭	17.1	1.6	0.2	23.9	銅	魚子紋, 繊維質付着	北部黒色土中	PL54
1646	切羽	4.0	2.1	0.7	8.0	銅	大切羽楕円形状, 小切羽二等辺三角形	SK200内	PL49
1650	吊金具	7.1	4.4	0.5	13.9	鉄	断面方形	炉1内	

番号	銭名	径	孔径	厚さ	重さ	初鑄年	材質	特徴	出土位置	備考
489	明道元寶	2.49	0.70	0.11	2.94	1032	銅	真書	北部黒色土中	
490	洪武通寶	2.19	0.54	0.19	4.38	1368	銅	真書, 背右「一銭」	北部黒色土中	
491	聖宋元寶	2.43	0.74	0.11	2.58	1101	銅	行書	北部黒色土中	
492	□□□□	2.25	0.55	0.11	2.28	—	銅	判読不能, 模鑄	東部黒色土中	
493	熙寧元寶	2.39	0.60	0.12	3.18	1068	銅	篆書	北部黒色土下	
494	淳化元寶	2.18	0.58	0.09	2.08	990	銅	真書	東部黒色土中	
495	開元通寶	2.49	0.73	0.13	3.52	621	銅	真書	中央部黒色土下	
496	元□□寶	2.32	0.67	0.14	2.70	—	銅	判読不能, 模鑄	東部黒色土中	
497	永樂通寶	2.46	0.55	0.12	1.96	1408	銅	真書, 欠け, 模鑄	覆土中	
498	□□通寶	2.51	0.73	0.16	3.64	—	銅	判読不能, 模鑄	覆土中	
1651	洪武通寶	2.41	0.58	0.10	(3.18)	1368	銅	真書, 欠け	炉1内	

所見 炉や日常雑器類などが出土していることから建物跡と判断した。西部から検出された複数の炉や土坑は黒色土面の範囲外であるが, 黒色土を貼り付けない面で使用していた可能性が考えられ, 本跡に伴うと判断した。上屋が想定されるピットは幾度も黒色土を貼り付けているためか検出できなかった。出土遺物は黒色土面中から多く出土しており, 遺棄されたものと考えられる。時期は, 出土遺物から16世紀後半と考えられる。

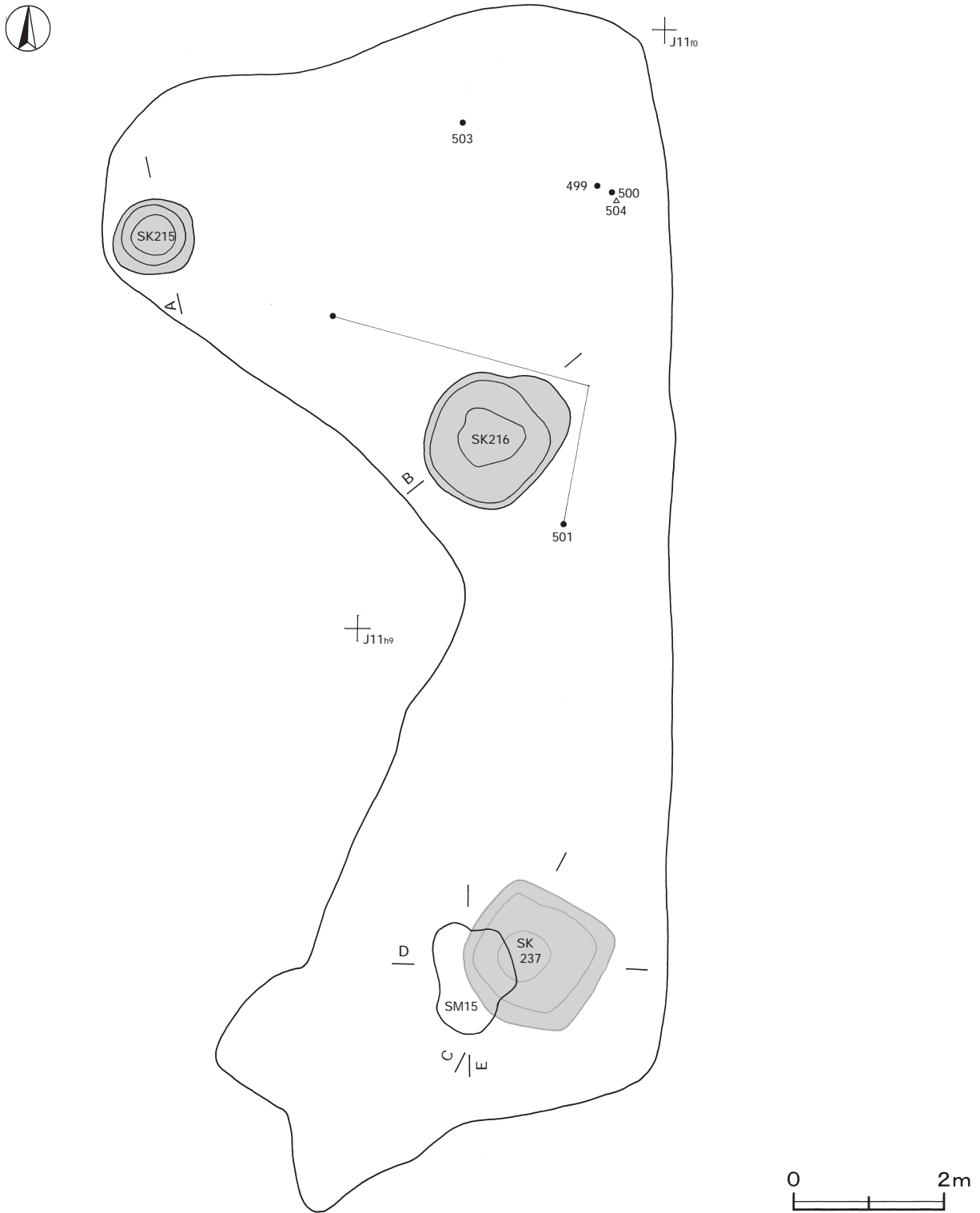
第9号建物跡 2区S I-9 (第182~185図)

位置 調査区南部J11h9区を中心に位置している。

確認状況 表砂を約2m除去し, 標高約6mで黒色土面を確認した。上面から複数の土坑が確認された。

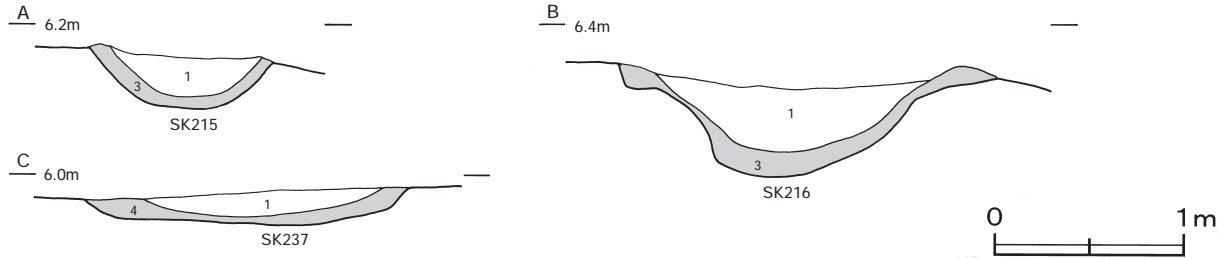
規模と施設 黒色土の範囲は南北16m、東西は最大で7.5mの不定形である。土坑3基が構築され、第237号土坑の上層から貝集積地1か所検出されている。

床 黒色土が構築された範囲を捉えたが、詳細は不明である。



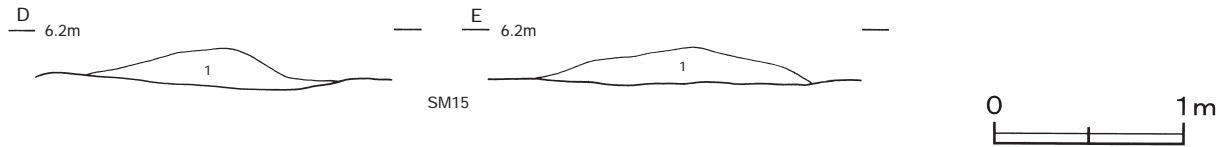
第182図 第9号建物跡実測図

土坑(第183図) 3基検出されている。第215号土坑は北西部に位置し、黒色土の厚さは5～8cmである。第216号土坑は中央部に位置し、黒色土の厚さが3～14cmである。第237号土坑は南部に位置し、黒色土の厚さが4～11cmである。第215・216・237号土坑の確認面からの掘り込みは、それぞれ24cm・45cm・14cmである。



第183図 第9号建物跡土坑土層図

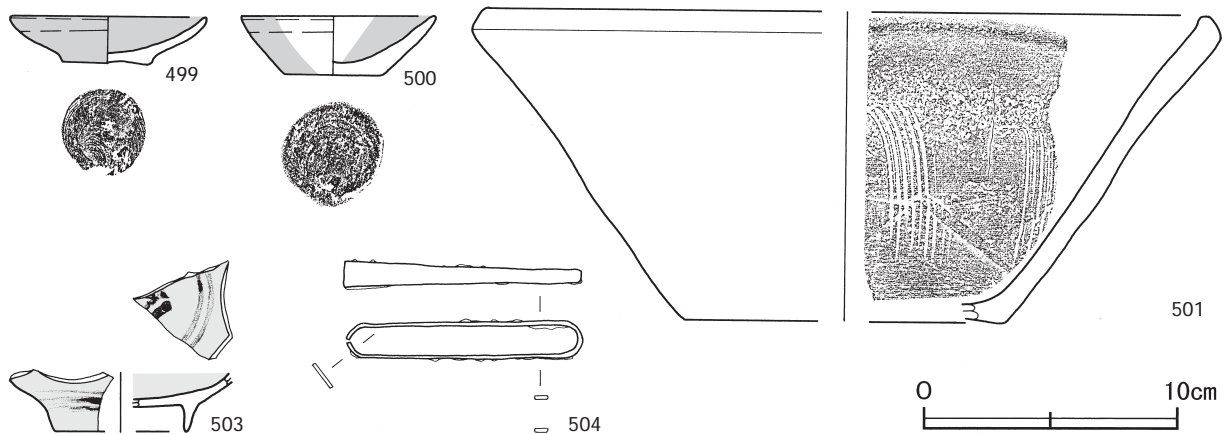
貝集積地(第184図) 南部に位置し、第237号土坑の上層から検出された。長軸1.5m、短軸1.1mの不定形を呈している。貝層の厚さは最大で21cmである。貝種はマツカサガイが主体である。



第184図 第9号建物跡貝集積地土層図

遺物出土状況 土師質土器片6点(皿3, 播鉢2, 鉢カ1), 磁器片1点(碗), 金属製品2点(毛抜, 不明)が北部から多く出土している。501は第216号土坑の北西部と南東部から出土した破片が接合したものである。499・500・504は北部から出土しており, 499の内・外面には油煙痕が認められる。504は毛抜で, 化粧用具の一部と考えられる。

所見 西部が削平されており炉や柱穴が検出されなかったが, 配置状況から西に位置する第10号建物跡にかかわる施設の可能性が考えられる。



第185図 第9号建物跡出土遺物実測図

第9号建物跡出土遺物観察表（第185図）

番号	器形	器質	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
499	小皿	土師質土器	7.8	1.9	3.4	長石	にぶい赤褐	普通	底部回転糸切り, 内外面油煙痕	北部	80% PL40
500	小皿	土師質土器	7.7	2.4	3.8	雲母	橙	普通	底部回転糸切り, 内外面煤付着	北部	98% PL40
501	播鉢	瓦質土器	[28.2]	12.2	[12.7]	雲母	褐灰	普通	6条1単位, 在地産カ	中央部	10%

番号	器形	器質	口径	器高	底径	胎土・色調	絵付・釉薬	文様・特徴	産地・年代	出土位置	備考
503	皿	磁器	—	(2.3)	[5.2]	灰白・灰白	染付・透明釉	見込み内「福」	明代, 15C中	北部	5%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
504	毛抜	9.4	1.0	0.2	11.1	鉄	残存良好, 先端部長方形	北部	PL51

第10号建物跡 2区S I-10（第186～189図）

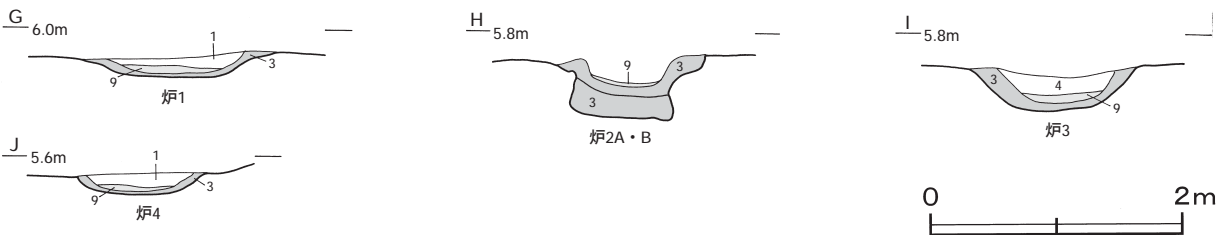
位置 調査区南部J11h7区を中心に位置している。

確認状況 表砂を1.5m除去し、標高5.8mから第1次面、標高5.5mから第2次面の黒色土面を確認した。上面はほぼ平坦であるが、全体的に皿状を呈している。黒色土面と西部の黒色土面からは、複数の炉と土坑が検出された。また、黒色土面を除去すると多数のピットと第3・4号土壙墓が確認された。

規模と施設 第1次面の黒色土の範囲は南北4.6m、東西7mの不定形、第2次面の黒色土の範囲は南北12m、東西10mの台形である。炉4基、土坑5基が構築されている。

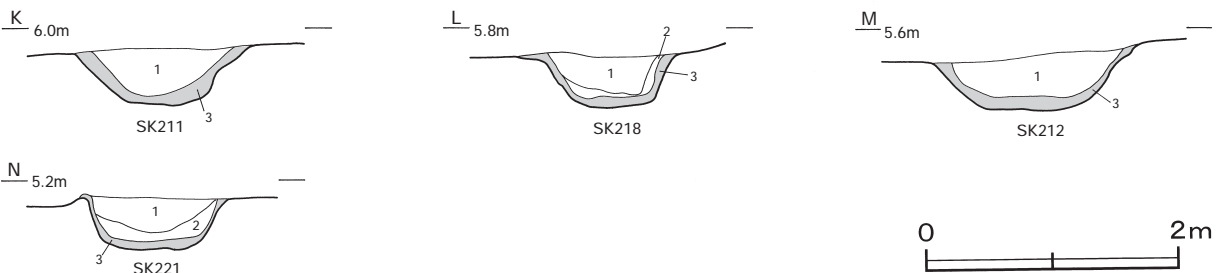
床 第1次面はほぼ平坦で、黒色土層は約5cmである。第2次面は皿状を呈し、第1次面の30cm下層に第2次面が構築されている。第1次面の黒色土の厚さは4～8cm、第2次面の黒色土の厚さは4～14cmである。第1次面と第2次面の黒色土間には約30cmの砂層が入っている。

炉（第186図） 第1～3号炉は中央部、第4号炉は北部に位置している。第1・4号炉は厚さ2～6cmと薄く、第2A・3号炉は厚さ5～14cm、第2B号炉は厚さ16～22cmの黒色土を貼り付けて構築されている。

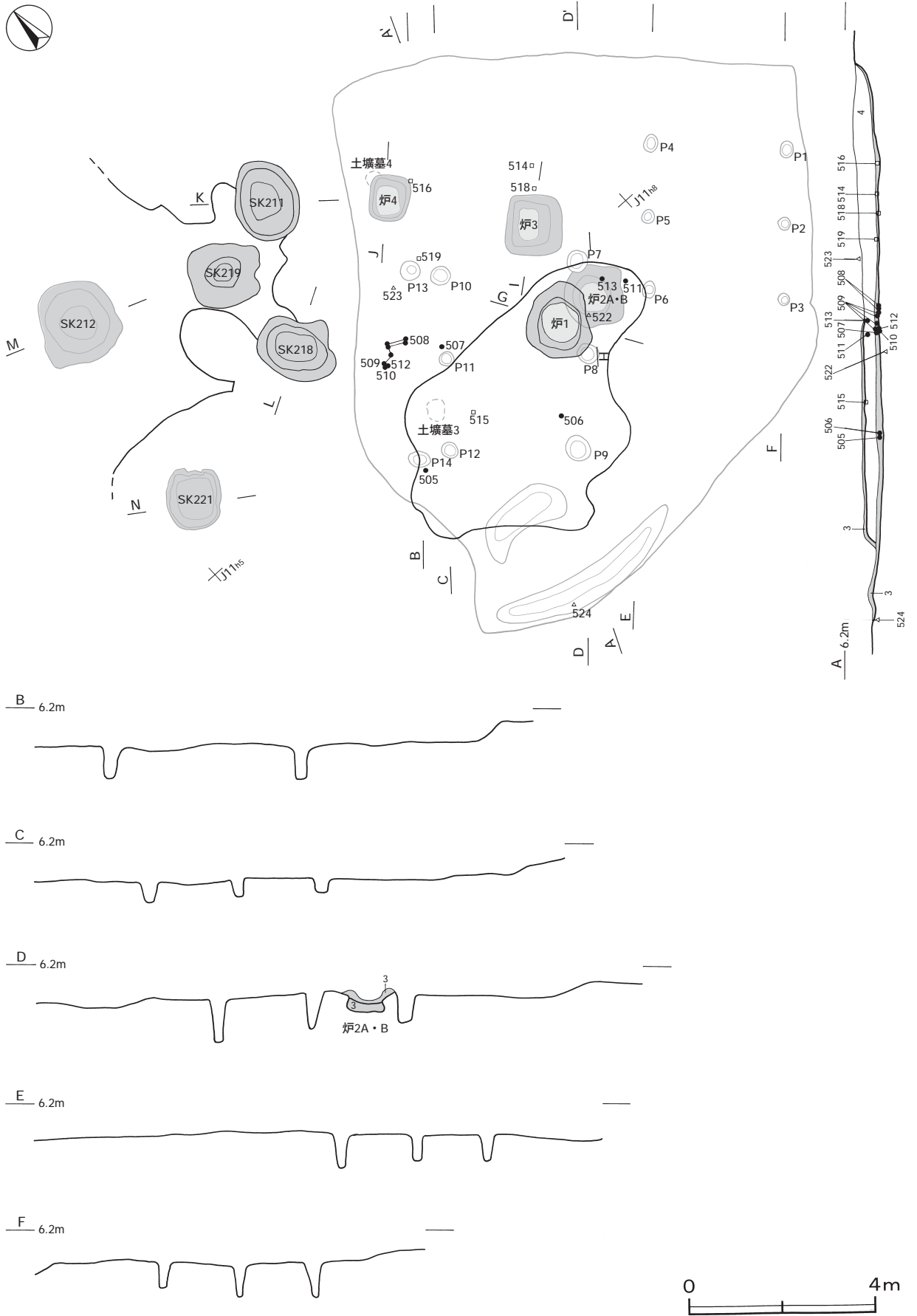


第186図 第10号建物跡炉土層図

ピット 14か所。P10が30cmとやや浅いが、その他は深さ45～90cmで上屋を支えた柱穴と考えられる。

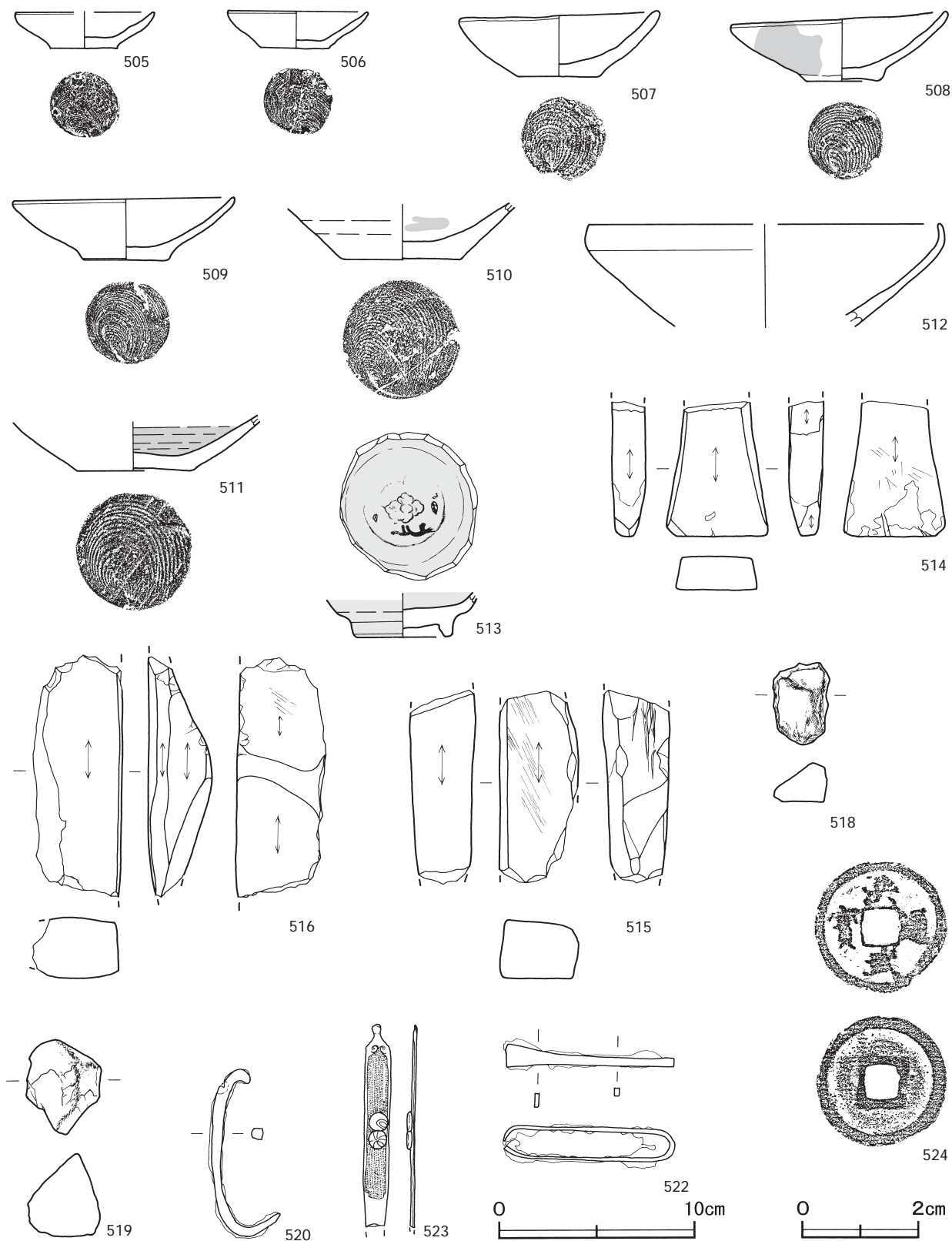


第187図 第10号建物跡土坑土層図



第188図 第10号建物跡実測図

土坑（第187図） 第211・212・218・219・221号土坑は西部に集中している。いずれも厚さ2～12cmの黒色土を貼り付けて構築されている。



第189図 第10号建物跡出土遺物実測図

遺物出土状況 土師質土器片159点(皿156, 内耳鍋3), 磁器片1点(碗), 石器7点(火打石2, 砥石5), 金属製品6点(毛抜1, 耳金2, 古銭1, 不明2)が出土している。505~510・512の皿と522の毛抜は第2次面の西部や中央部の黒色土中から出土している。513は龍泉窯系の青磁碗で, 第2次面覆土中から出土している。砥石と火打石は第2次面中から多く出土している。523の筭は筭部が欠損している。

第10号建物跡出土遺物観察表 (第189図)

番号	器形	器質	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
505	小皿	土師質土器	[7.0]	1.9	3.5	雲母・赤色粒子	にぶい橙	普通	底部回転糸切り	南西部2次黒色土中	60%
506	小皿	土師質土器	7.1	2.0	3.5	雲母・赤色粒子	にぶい橙	普通	底部回転糸切り	中央部2次黒色土中	90% PL40
507	皿	土師質土器	10.0	3.4	4.2	赤色粒子	にぶい橙	普通	底部回転糸切り, 内面器面荒れ	西部2次黒色土中	95% PL42
508	皿	土師質土器	11.0	3.6	3.6	石英	灰 褐	普通	底部回転糸切り, 外面煤付着	西部2次黒色土中	95% PL42
509	皿	土師質土器	11.4	3.3	4.3	長石・雲母	にぶい褐	普通	底部回転糸切り	西部2次黒色土中	70% PL42
510	皿	土師質土器	—	(2.9)	5.9	長石・赤色粒子	にぶい橙	普通	底部回転糸切り, 底部内面油煙痕	西部2次黒色土中	30%
511	皿	土師質土器	—	(2.8)	3.0	雲母・赤色粒子	にぶい橙	普通	底部回転糸切り, 内面油煙痕	中央部2次覆土中	40%
512	皿	土師質土器	[18.0]	(5.3)	—	長石	明 褐 灰	普通	内・外面ナデ	西部2次黒色土中	15%

番号	器形	器質	口径	器高	底径	胎土・色調	絵付・釉薬	文様・特徴	産地・年代	出土位置	備考
513	青磁碗	磁器	—	(2.3)	4.8	灰・オリブ灰	青磁釉	見込み花文	龍泉窯系, 14C後~15C前	中央部2次覆土中	30% PL39

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
514	砥石	(7.0)	5.2	1.8	(96.8)	凝灰岩	砥面4面, 断面四角形	北部2次黒色土中	
515	砥石	(9.9)	4.0	3.0	(204.0)	滑石	砥面2面, 調整面あり	中央部1次黒色土中	
516	砥石	(12.3)	(4.5)	3.3	(200.0)	砂岩	砥面5面, 傾きのある砥面あり	北西部2次黒色土中	
518	火打石	4.2	3.0	2.0	29.1	瑪瑙	摩滅の集中箇所有り	北部2次黒色土中	PL54
519	火打石	4.9	3.8	4.3	76.8	石英	摩滅の集中箇所有り	西部2次面	
520	耳金	8.6	0.6	0.6	19.3	鉄	断面方形カ, C字状に屈曲	覆土中	
522	毛抜	8.2	1.3	0.3	(15.9)	鉄	断面長方形, 完存	炉2内	PL51
523	筭	(10.4)	1.3	0.2	(21.2)	銅	筭部欠損, 魚子紋	西部2次覆土中	PL53

番号	銭名	径	孔径	厚さ	重さ	初铸年	材質	特徴	出土位置	備考
524	洪武通寶	2.28	0.59	0.13	(3.08)	1368	銅	真書	南部2次黒色土下	

所見 検出状況から, 第1・2号炉を中心にL字状に展開する曲屋的構造の建物と考えられる。西部からも炉や土坑が検出されているが, 黒色土面を構築せずに機能していた可能性もあることから, 本跡に伴うと判断した。周辺には建物跡が位置しており, 出土遺物や構造から中心的な建物であった可能性が高い。

第11号建物跡 2区S I-11 (第190~196図)

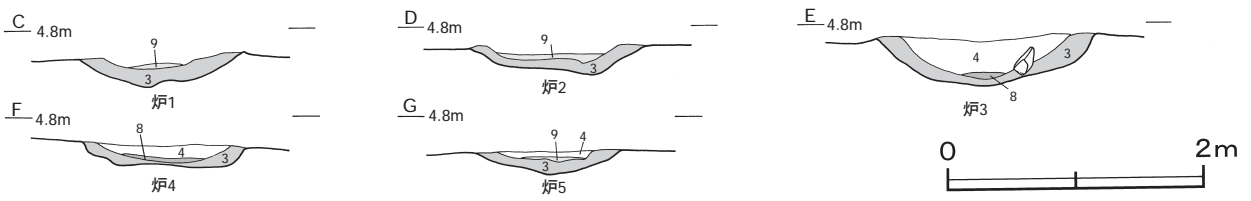
位置 調査区南部J11i2区を中心に位置している。

確認状況 表砂を1.5m除去し, 標高4.8~5.0mから黒色土面を確認した。上面はほぼ平坦で, 複数の炉と土坑が検出された。

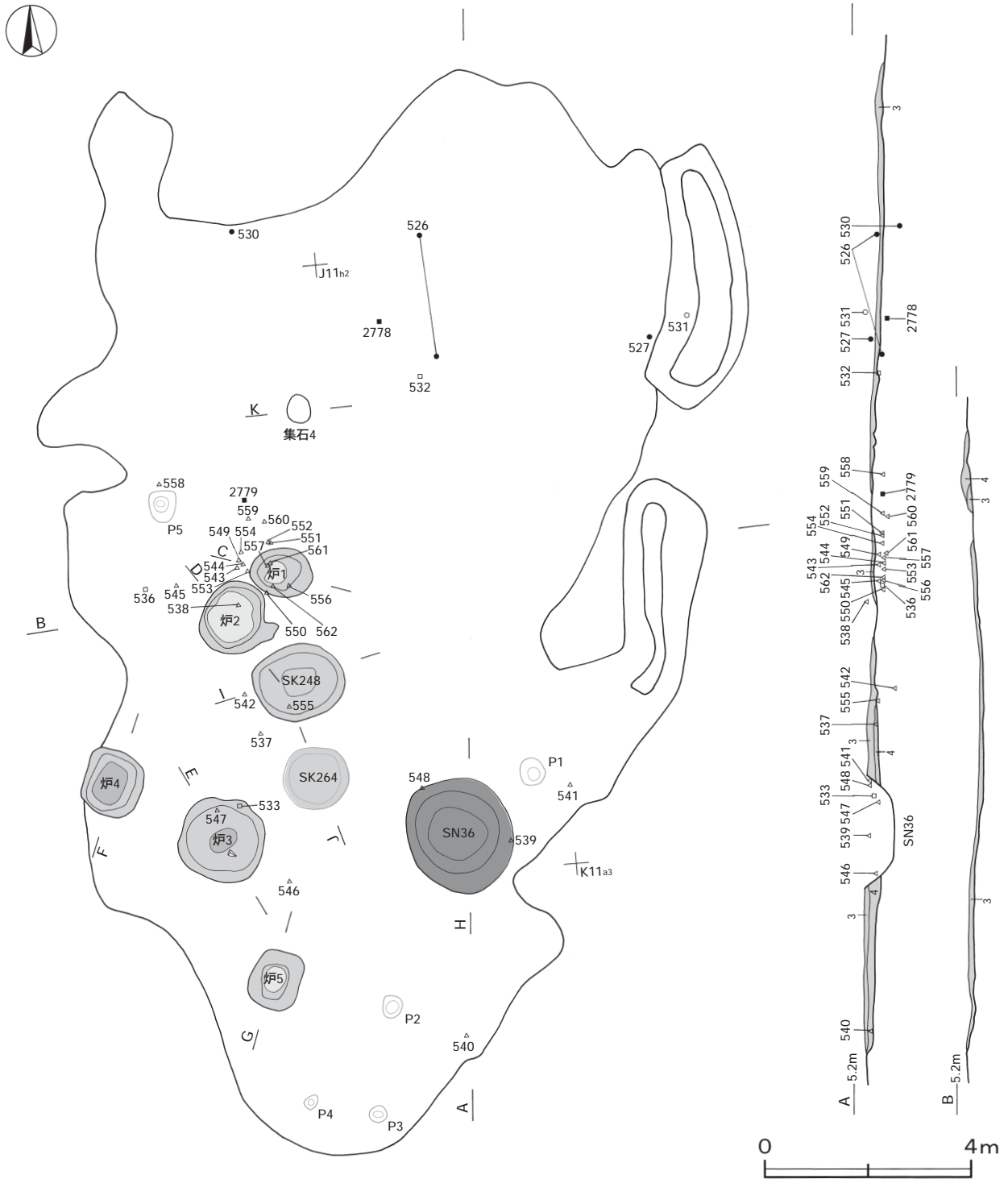
規模と施設 黒色土の範囲は南北21m, 東西12mの不定形である。第1~5号炉, 第36号粘土貼土坑, 第248・264号土坑が構築され, 第4号集石が確認されている。

床 ほぼ平坦で, 黒色土層の厚さは8~10cmである。東部には黒色土の高まりが確認された。

炉 (第190図) 第1~5号炉は黒色土面内の南西部に位置している。第3・4号炉の底部は黒色土の厚さがやや薄くなるものの, その他は10cm前後で, 全体的に黒色土を厚く貼って構築されている。5基とも第1次面で検出されている。

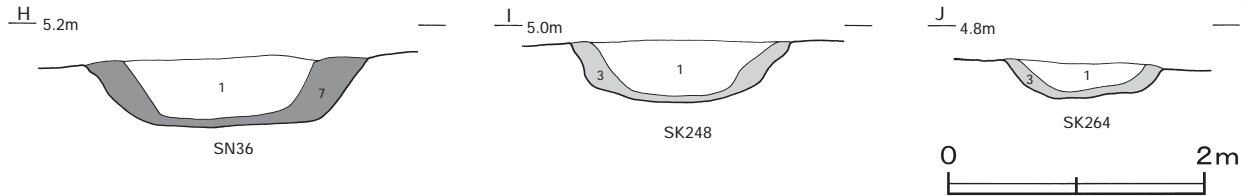


第190图 第11号建物跡炉土层图



第191图 第11号建物跡実测图

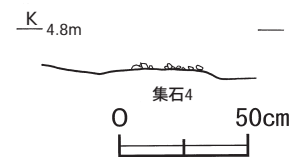
土坑（第192図） 第36号粘土貼土坑，第248・264号土坑は南西部に位置している。第36号粘土貼土坑・第248号土坑は第1次面，第264号土坑は第2次面で検出されている。第248・264号土坑は黒色土で構築されており，底部の黒色土は厚さ約2～21cmで，立ち上がり部は10～20cmと厚い。第36号粘土貼土坑は底部の粘土の厚さが6～10cm，壁部の粘土は厚さ30cmを超えている。



第192図 第11号建物跡土坑土層図

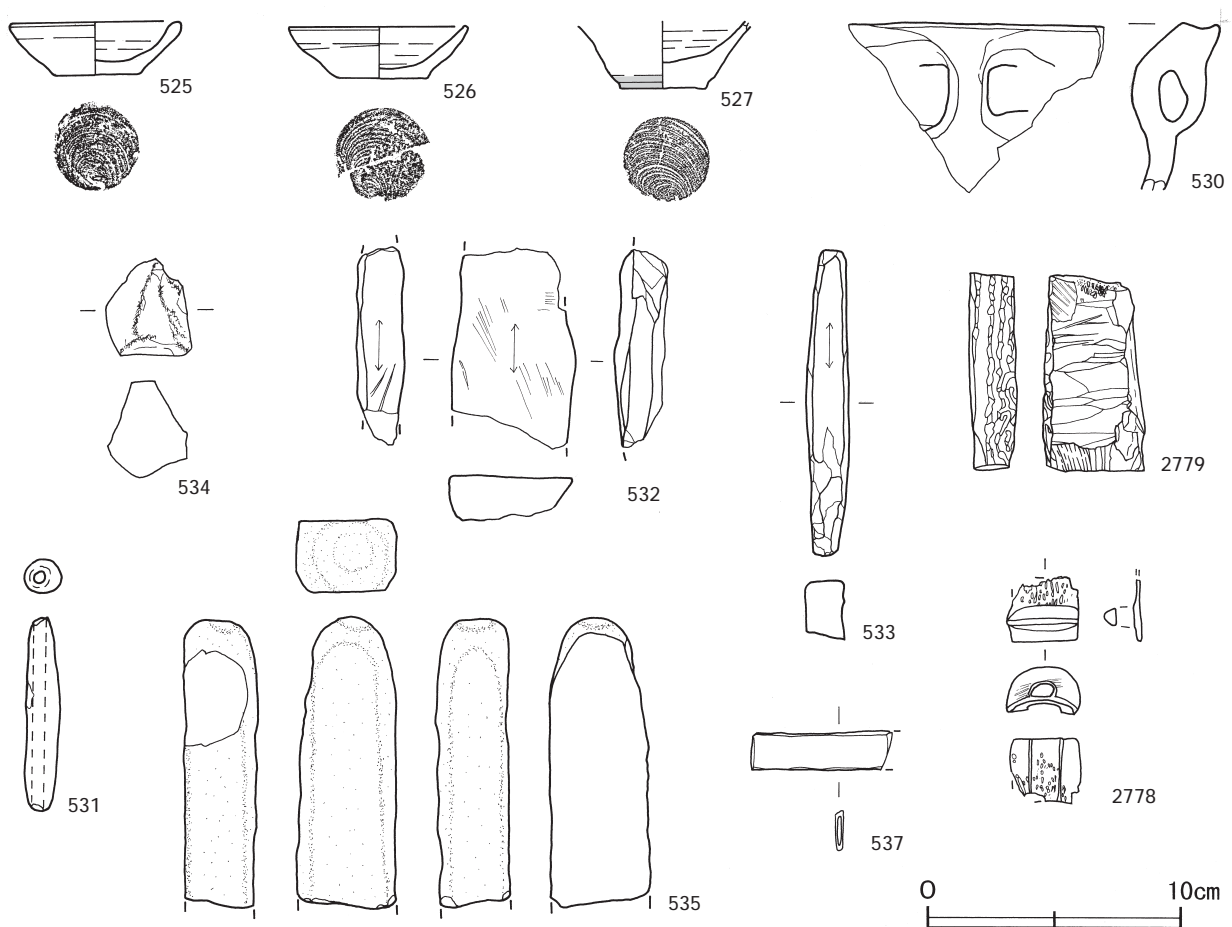
ピット 5か所。深さは20～45cmで，性格不明である。

集石（第193図） 第4号集石は中央部のやや北寄りに位置する。長径60cm，短径40cmの楕円形である。ほとんどが3～5cmの細礫であるが，その中の3点には火熱痕が認められた。

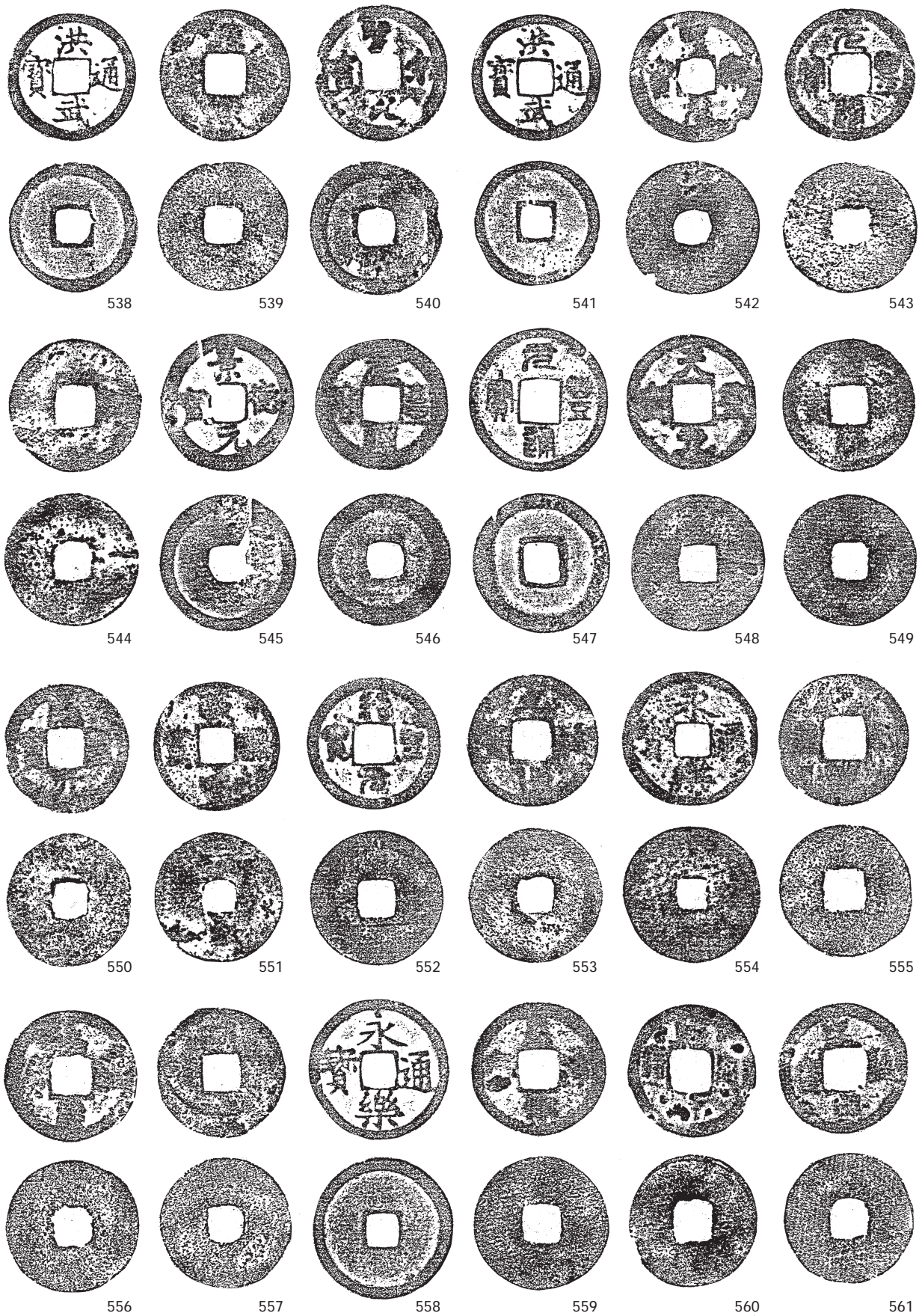


第193図 第11号建物跡集石断面図

遺物出土状況 土師質土器片88点(皿66，碗1，香炉5，内耳鍋15，鉢1)，土製品2点(管状土錘，土鈴)，石器6点(火打石3，砥石2，磨石1)，礫1点，金属製品26点(小柄1，古銭25)が出土している。



第194図 第11号建物跡出土遺物実測図（1）



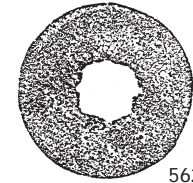
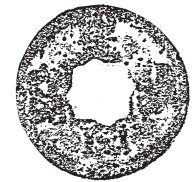
第195図 第11号建物跡出土遺物実測図(2) [古銭は原寸大]

526・530は北部の黒色土中と黒色土を除去した砂層から出土している。
533は第3号炉内、537は小柄の柄部で南部の黒色土中から出土している。
古銭は25枚出土しており、第1～3号炉内、第36号粘土貼土坑内などから
7枚が出土しているが、ほとんどが中央部の黒色土を除去した砂層から出
土している。2778・2779は鹿角の未製品で、2779には表面に加工痕が確認
できる。その他の出土遺物は細片のため図示できなかった。

所見 上屋を支えた柱穴は検出されなかったが、炉や日常雑器類が出土し
ていることから、建物跡と判断した。東部の黒色土の高まりは出入り部と
考えられ、南西部の炉付近が生活拠点であると推測される。北部の炉や土
坑が検出されない北部は、作業場か土間であった可能性が高い。

第11号建物跡出土遺物観察表（第194～196図）

番号	器形	器質	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
525	小皿	土師質土器	6.8	2.2	3.5	雲母	にぶい橙	普通	底部回転糸切り	覆土中	60%
526	小皿	土師質土器	7.2	2.1	3.7	長石・雲母	にぶい橙	普通	底部回転糸切り	北部黒色土中	60%
527	小皿	土師質土器	—	(3.7)	3.4	砂粒	灰褐色	普通	底部回転糸切り、外面油煙痕	東部黒色土面	60%
530	内耳鍋	土師質土器	—	(6.6)	—	雲母	にぶい橙	普通	内・外面ヘラナデ、外面煤付着	北部黒色土下	5%



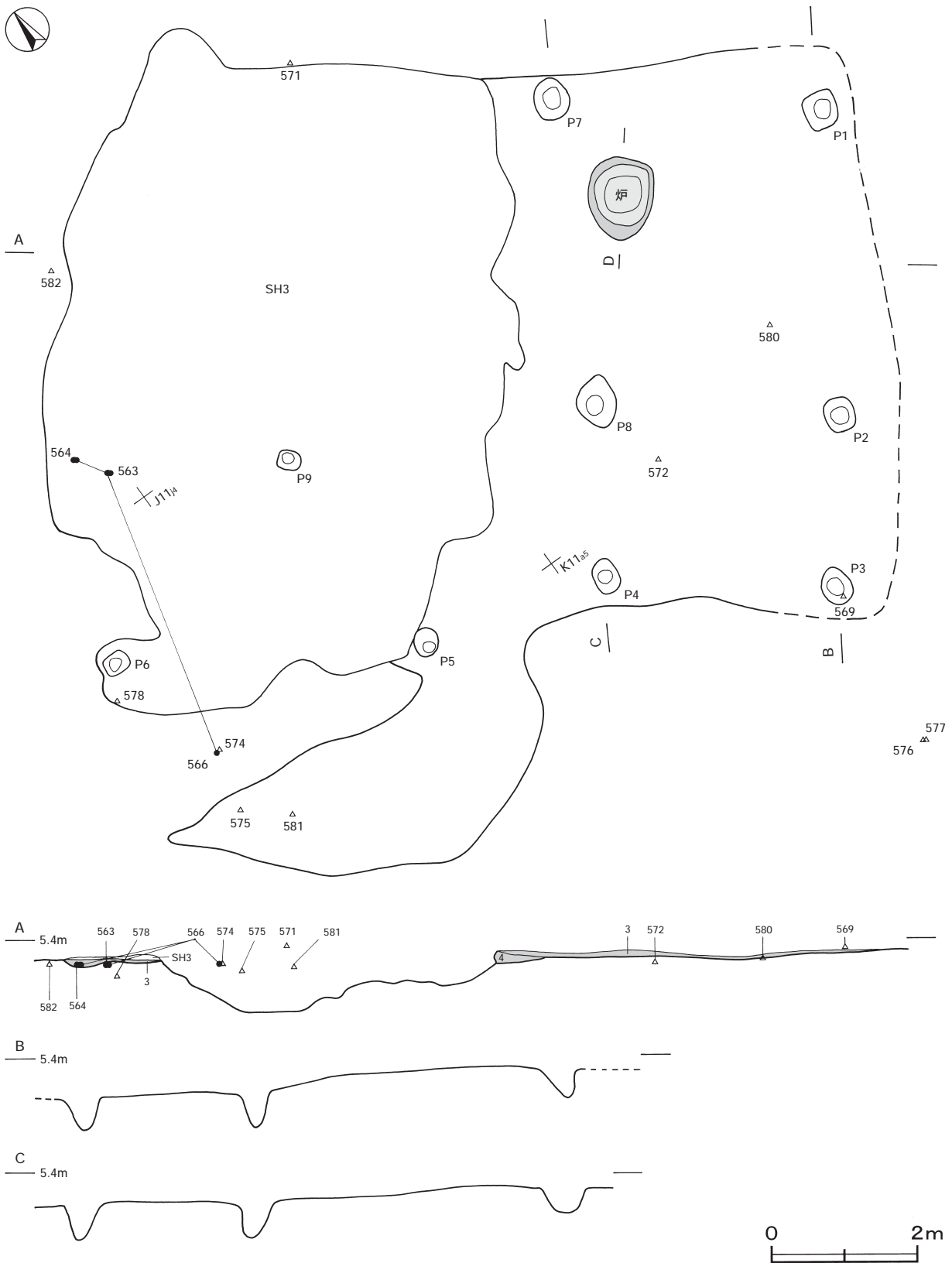
第196図 第11号建物跡出土遺物実測図（3）

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
531	管状土錘	5.1	1.0	0.9	3.3	粘土	片面穿孔、孔径0.3	東部覆土中	PL46
532	砥石	(7.9)	4.9	1.8	(101.1)	凝灰岩	砥面2面、自然面あり	北部黒色土下	
533	砥石	(12.1)	1.7	(2.3)	(78.1)	泥岩	砥面1面、自然面あり	炉3内	
534	火打石	3.8	3.2	3.8	57.9	瑪瑙	一部の稜が摩滅	覆土中	
535	磨石	(11.5)	4.0	2.9	(243.0)	砂岩	上部に毆打痕有り、表面研磨	覆土中	
537	小柄	(5.5)	1.6	0.3	(6.6)	銅	柄部、小口欠損	南部黒色土中	PL50
2778	栗形	2.6	2.8	1.5	(5.5)	鹿角	表面研磨、漆付着カ	北部黒色土下	
2779	骨角未製品	7.9	3.9	1.9	50.1	鹿角	外面削り痕あり	中央部黒色土下	PL53

番号	銭名	径	孔径	厚さ(孔径)	重さ	初鑄年	材質	特徴	出土位置	備考
538	洪武通寶	2.25	0.62	0.14	3.50	1368	銅	真書	炉2内	
539	□□□□	2.33	0.68	0.09	2.76	—	銅	判読不能、模鑄	SN36内	
540	聖宋元寶	2.35	0.62	0.13	(3.12)	1101	銅	行書、欠け	南部黒色土中	
541	洪武通寶	2.24	0.55	0.13	3.64	1368	銅	真書	南東部黒色土中	
542	聖宋元寶	2.40	0.63	0.09	(2.84)	1101	銅	篆書、欠け	中央部黒色土下	
543	元豊通寶	2.39	0.69	0.09	2.86	1078	銅	篆書	中央部黒色土下	
544	—	2.33	0.65	0.08	2.72	—	銅	模鑄	中央部黒色土下	
545	景德元寶	2.42	0.62	0.12	(3.00)	1004	銅	真書、割れ	中央部黒色土下	
546	元豊通寶	2.35	0.62	0.09	3.32	1078	銅	篆書	南部黒色土中	
547	元豊通寶	2.48	0.72	0.10	3.32	1078	銅	篆書	炉3内	
548	天聖元寶	2.39	0.68	0.10	3.84	1023	銅	真書	SN36内	
549	□□□□	2.38	0.62	0.09	2.96	—	銅	判読不能、模鑄	中央部黒色土下	
550	開元通寶	2.24	0.62	0.10	2.48	845	銅	真書、模鑄	中央部黒色土下	
551	政和通寶	2.27	0.61	0.09	3.02	1111	銅	篆書、模鑄	中央部黒色土下	
552	紹聖元寶	2.37	0.71	0.08	2.96	1094	銅	篆書	中央部黒色土下	
553	元祐通寶	2.40	0.70	0.01	2.60	1086	銅	行書、模鑄	中央部黒色土下	
554	永樂通寶	2.43	0.55	0.09	3.16	1408	銅	真書、模鑄	中央部黒色土下	
555	□□□□	2.31	0.73	0.09	2.58	—	銅	判読不能、模鑄	SK248内	
556	—	2.37	0.70	0.10	2.96	1068	銅	模鑄	炉1内	
557	—	2.30	0.66	0.10	3.12	—	銅	模鑄	炉1内	
558	永樂通寶	2.50	0.58	0.12	3.60	1408	銅	真書	西部黒色土下	
559	皇宋通寶	2.35	0.71	0.07	2.52	1038	銅	真書、模鑄	中央部黒色土下	
560	皇宋通寶	2.31	0.67	0.09	2.78	1038	銅	真書、模鑄	中央部2次覆土中	
561	皇宋通寶	2.31	0.73	0.10	2.76	1038	銅	真書、模鑄	炉1内	
562	皇宋通寶	2.33	0.82	0.10	3.30	1038	銅	真書、星形孔	炉1内	

第12号建物跡 2区S I-12 (第197~200図)

位置 調査区南部J11j5区を中心に位置している。



第197図 第12号建物跡実測図

重複関係 西部を第3号製塩跡に掘り込まれている。

確認状況 表砂を2m除去した標高約5～5.2mから黒色土面を確認した。上面はほぼ平坦であるが、南部に向かって緩やかに傾斜している。また、黒色土面から炉と北東に並ぶ柱穴7か所が確認された。

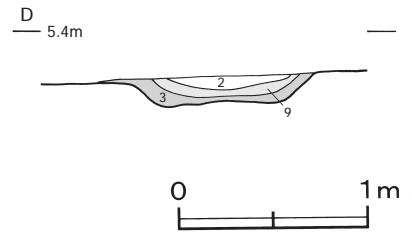
規模と施設 西部が第3号製塩跡に掘り込まれているため、南北11m、東西4.5mの黒色土面だけが確認できた。炉1基が構築されている。

床 残存部は厚さ4～16cmの黒色土を貼り付けて構築されている。

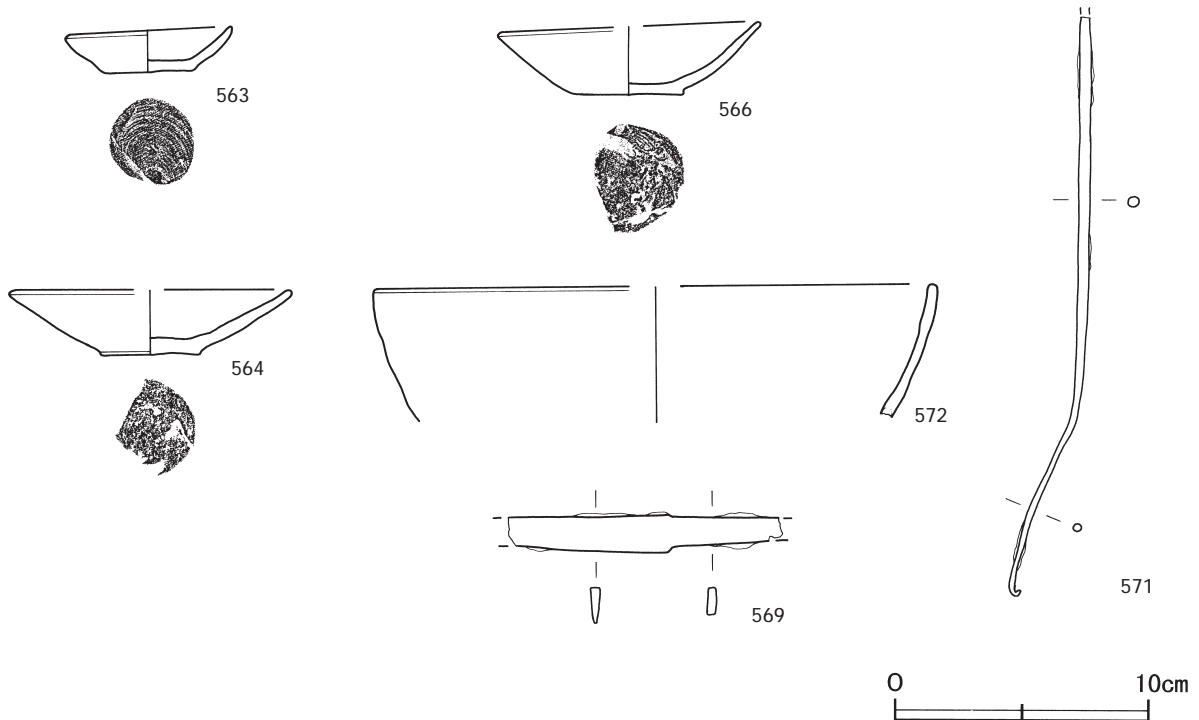
炉(第198図) 北部に位置し、厚さ2～7cmの黒色土で構築されている。底部には灰が確認された。

ピット 9か所。P1～P6は深さ30～45cmで、北東に軸線をもち、柱間寸法が規則的に配されていることから上屋を支えた柱穴と考えられる。P7～P9は深さ40～50cmで、本跡の西側部分にあった上屋を支えた柱穴と考えられる。なお、P6とP9は第3号製塩跡の黒色土面の下層から検出され、第3号製塩跡構築のため黒色土で埋め戻されている。

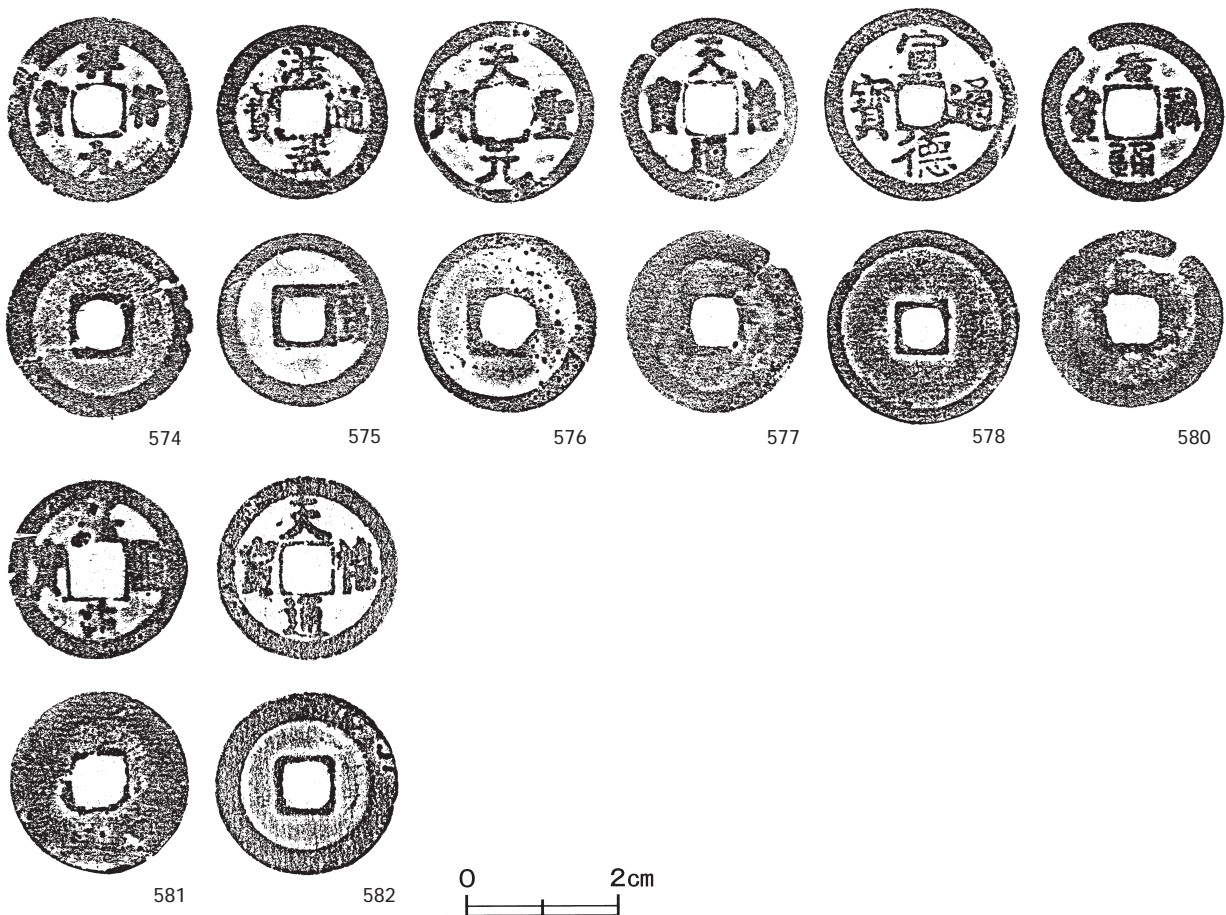
遺物出土状況 土師質土器片71点(Ⅲ69, 内耳鍋2), 石器1点(砥石), 金属製品14点(刀子1, 紡莖カ1, 古銭8, 不明4)が出土している。563・564・566は西部の黒色土面と・黒色土中から出土している。底部は全て糸切り痕を残し、563以外は中形で口縁は薄手のタイプである。569はP3内、572は東部の黒色土面下の砂層から出土しており、572は口縁部だけである。古銭は、574・575・578・581が南部の黒色土を除去した砂層から散在した状態で出土している。



第198図 第12号建物跡炉土層図



第199図 第12号建物跡出土遺物実測図(1)



第200図 第12号建物跡出土遺物実測図(2)

第12号建物跡出土遺物観察表(第199・200図)

番号	器形	器質	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
563	皿	土師質土器	6.6	1.7	3.4	雲母	にぶい橙	普通	底部回転糸切り	西部黒色土下	60% PL40
564	皿	土師質土器	[11.0]	2.6	3.8	雲母・赤色粒子	橙	普通	底部回転糸切り	西部黒色土中	30%
566	皿	土師質土器	[9.5]	4.0	4.0	雲母	にぶい橙	普通	底部回転糸切り	西部黒色土面	70%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
569	刀子	(10.8)	1.6	0.4	(19.5)	鉄	刀身部欠損	P3内	
571	紡茎カ	(23.0)	0.5	0.4	(13.8)	鉄	先端部屈曲	北部砂層	
572	鉄鍋	[22.2]	(5.3)	—	(135.8)	鉄	体部から口縁部片	東部黒色土下	

番号	銭名	径	孔径	厚さ	重さ	初鑄年	材質	特徴	出土位置	備考
574	祥符元寶	2.48	0.62	0.11	(2.64)	1008	銅	真書, 割れ	南部砂層	
575	洪武通寶	2.30	0.58	0.17	4.84	1368	銅	真書, 背「一錢」	南部黒色土下	
576	天聖元寶	2.37	0.73	0.13	3.16	1023	銅	真書	覆土中	
577	天禧通寶	2.45	0.63	0.12	(3.54)	1017	銅	真書, 欠け	覆土中	
578	宣德通寶	2.58	0.59	0.11	4.22	1433	銅	真書	南西部黒色土下	
580	元祐通寶	2.44	0.66	0.11	(3.56)	1086	銅	篆書, 欠け, 模鑄, 鑄造斑	東部黒色土中	
581	皇宋通寶	2.39	0.69	0.08	3.02	1038	銅	真書, 模鑄	南部黒色土下	
582	天禧通寶	2.44	0.64	0.14	3.68	1017	銅	真書	西部砂層	

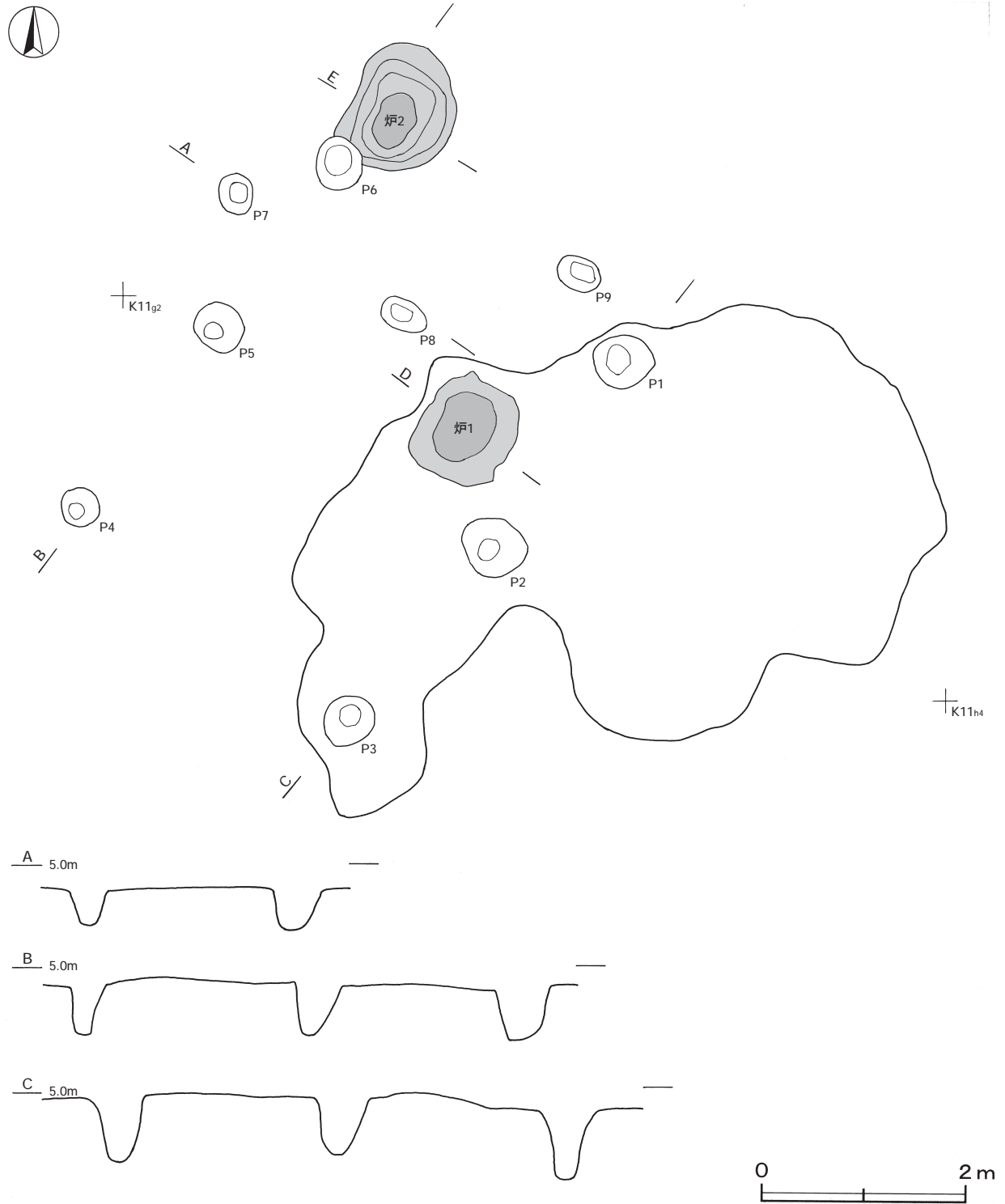
所見 炬や北東を軸として並ぶ柱穴が確認されたことから、建物跡と判断した。西部は第3号製塩跡と重複しているが、検出された柱穴から、西部に広がる可能性が高い。第3号製塩跡よりも早い時期に当遺跡内に構築されていたと推測される。また、出土した鉄鍋片は残存状態が悪いものの薄手であり、建物内での調理用具を探る上で良好な資料と言える。

第13号建物跡 2区S I-13 (第201~203図)

位置 調査区南部 K11g3区を中心に位置している。

確認状況 表砂を2.5m除去し、標高約5mで黒色土面を確認した。上面はほぼ平坦で、黒色土面の内外から炉と北東に並ぶ柱穴6か所が確認された。

規模と施設 黒色土の範囲は南北4m、東西6mの不定形である。炉2基が構築されている。

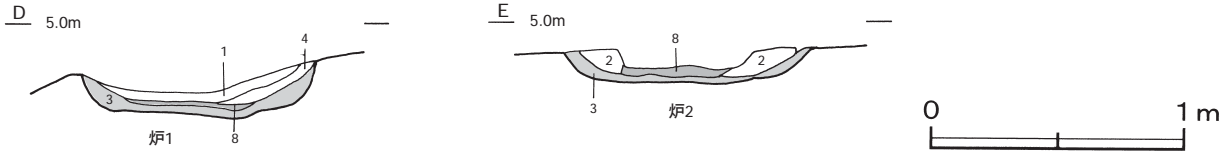


第201図 第13号建物跡実測図

床 ほぼ平坦であるが、P1周辺がやや低い。

炉(第202図) 第1号炉は黒色土内の北西部、第2号炉は第1号炉の北へ約2mに位置している。両者とも底面から焼砂が検出されている。

土層断面図中、第3層は炉を構築した黒色土A層である。第1号炉は厚さ2～7cm、第2号炉は厚さ2～6cmの黒色土を貼り付けて構築されている。

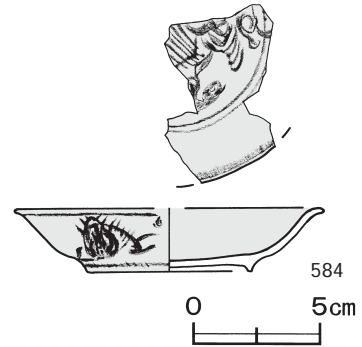


第202図 第13号建物跡炉土層図

ピット 9か所。P1～P6は深さ48～67cmで、北東に軸線をもっていることから上屋を支えた柱穴と考えられる。P7～P9は深さ30～50cmであるが、性格不明である。

遺物出土状況 土師質土器片3点(皿), 磁器片1点(皿)が出土している。584は明代の染付皿で、覆土中から出土している。土師質土器片は細片のため図示できなかった。

所見 黒色土の範囲は狭いものの、炉や北東に軸線をもつピットが検出されたことから建物跡と判断した。東部に広がる黒色土の範囲は、出入り口のため整地した部分と考えられる。日常雑器類などの出土遺物が少ないことから、一時的な生活の場であったか、作業場であった可能性が高い。



第203図 第13号建物跡出土遺物実測図

第13号建物跡出土遺物観察表 (第203図)

番号	器形	器質	口径	器高	底径	胎土・色調	絵付・釉薬	文様・特徴	産地・年代	出土位置	備考
584	端反皿	磁器	[12.2]	3.5	6.4	灰・灰白	染付・透明釉	玉取獅子文	明代, 16C前半	覆土中	20% PL38

第14号建物跡 3区S I-1 (第204・205図)

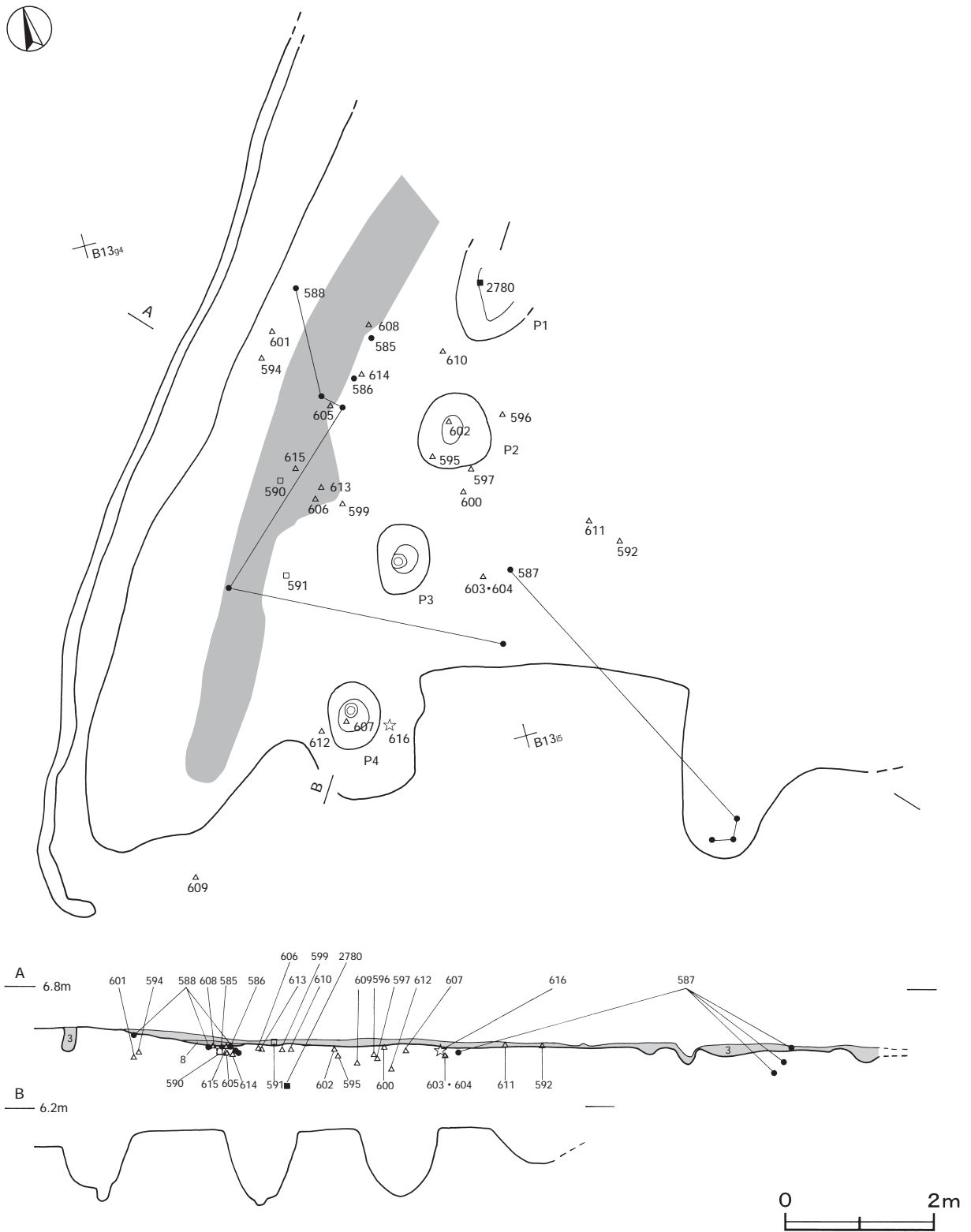
位置 調査区北部B13h5区を中心に位置している。

確認状況 表砂を2m除去し、標高約6.3mから黒色土面を確認した。上面はほぼ平坦であるが、西部から中央に向かって緩やかに傾斜している。黒色土面から北東に並ぶ柱穴4か所が確認された。

規模と施設 東部が調査区域外に延びているため、最大で南北11.4m、東西11mの黒色土面が確認できた。

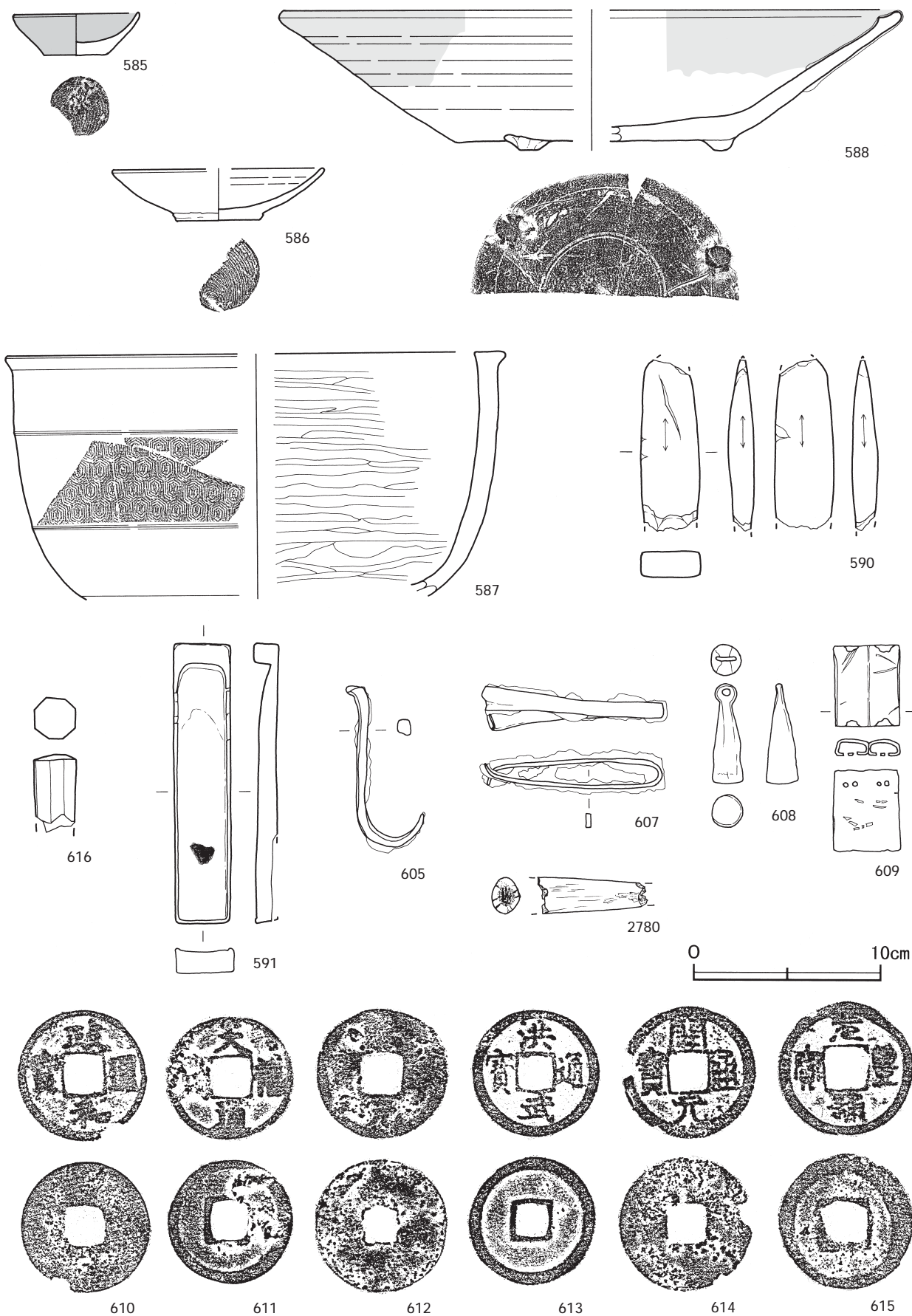
床 ほぼ平坦で、厚さ約10cmの黒色土を貼り付けて構築されている。西部には焼砂が幅約1.5m、長さ約8.5mにわたって検出された。

ピット 4か所。P1は深さ50cmとやや浅いが、その他は深さ90～100cmである。西部で確認された黒色土層と同じ北東に軸線をなしていることから、上屋を支えた柱穴と考えられる。これらに伴うピットは、東部の調査区域外に延びていたものと考えられる。



第204図 第14号建物跡実測図

遺物出土状況 土師質土器片111点（皿102，香炉4，内耳鍋5），陶器片15点（皿1，大皿14），石器1点（砥石），石製品1点（硯），金属製品22点（古銭6，分銅1，毛拔1，釘12，吊金具1，不明1），不明ガラス製品1点が出土している。遺物はP2周辺の黒色土下層や帯状に検出された焼砂付近に集中している。587の香炉は黒色土面を除去した砂層から出土しており，体部の中央に4列の亀甲文が施されている。また，587は隣接



第205図 第14号建物跡出土遺物実測図 [古銭は原寸大]

する第17号建物跡内から出土した火鉢片と接合したものである。588の古瀬戸の大皿は黒色土下の砂層から出土しており、同一個体と見られる卸目の体部も出土していることから、卸目付大皿の可能性もある。591の硯は泥岩製で黒色土中から出土しており、陸部と海部が遺存し陸部に墨痕が残っている。608の分銅は青銅製で、重量が約50gである。592・594～597・599～604・606は頭部を曲げられた釘12本で、これらはP2・P3周辺に集中している。2780は鹿角で、小刀の柄部の未製品である。

第14号建物跡出土遺物観察表（第205図）

番号	器形	器質	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
585	小皿	土師質土器	6.8	2.2	3.4	雲母	灰 褐	普通	底部回転糸切り, 内外面油煙付着	西部黒色土下	80%
586	皿	土師質土器	[11.2]	2.8	5.4	雲母	にぶい橙	普通	底部回転糸切り	西部黒色土下	25%
587	火鉢	瓦質土器	[26.8]	(13.1)	—	長石・雲母	にぶい褐	普通	体部外面4条の亀甲文	中央部黒色土下	10%

番号	器形	器質	口径	器高	底径	胎土・色調	絵付・釉薬	文様・特徴	産地・年代	出土位置	備考
588	折縁深皿	陶器	[33.6]	7.6	[14.6]	灰オリーブ・灰オリーブ	灰釉	体部外面下端・底面無釉	瀬戸・美濃, 15C中葉	西部黒色土下	20%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
590	砥石	(9.2)	3.2	1.4	(64.6)	砂岩	砥面4面, 断面長方形	西部黒色土下	
591	硯	14.8	3.0	1.3	(102.7)	泥岩	陸・海部・提残存, 陸部墨痕	西部黒色土下	PL47
605	吊金具	8.9	0.7	0.9	24.3	鉄	断面方形カ	西部黒色土下	
607	毛抜	(9.5)	2.4	0.3	(28.3)	鉄	錆の進行激しい, 完存	P4内	PL51
608	分銅	5.3	1.6	1.7	49.2	銅	上部の孔径0.4cm, 円錐形	西部黒色土中	PL49
609	不明銅製品	4.3	3.5	0.9	29.9	銅	繊維付着, 裏面穿孔, 鉄板折り返し	南部砂層	PL49
616	ガラス製品	(2.1)	1.1	1.1	(4.1)	ガラス	片側欠損, 断面八角形	南部黒色土下	PL53
2780	骨角未製品	(5.9)	1.9	1.5	(9.6)	鹿角	小刀の柄カ, 穿孔有り	P1内	

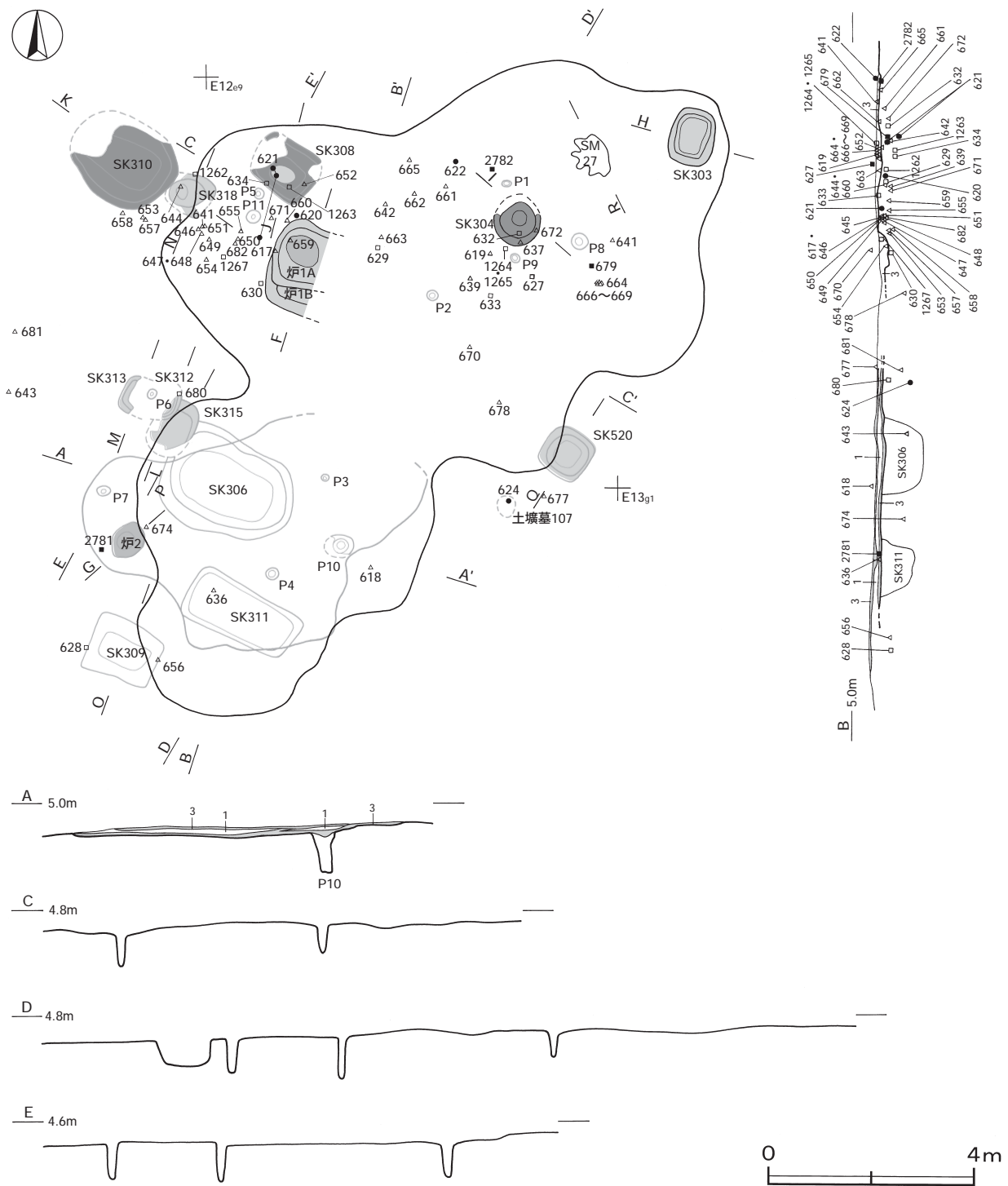
番号	銭名	径	孔径	厚さ	重さ	初鋳年	材質	特徴	出土位置	備考
610	政和通寶	2.32	0.71	0.09	(2.68)	1111	銅	分楷, 欠け	西部黒色土下	
611	天禧通寶	2.25	0.69	0.08	2.28	1017	銅	真書	西部黒色土中	
612	熙寧元寶	2.39	0.74	0.14	3.76	1068	銅	真書, 星形孔	南部黒色土下	
613	洪武通寶	2.28	0.56	0.17	3.64	1368	銅	真書	西部黒色土下	
614	開元通寶	2.40	0.70	0.10	(2.76)	621	銅	真書, 欠け	西部黒色土中	
615	元豊通寶	2.44	0.77	0.11	3.54	1078	銅	篆書	西部黒色土中	

所見 炉は検出されていないが、北東を軸にするピットや帯状に延びる黒色土層が居住区域を区切るものと捉え、建物跡と判断した。また、出土遺物も多量で硯や分銅の出土から、製塩を管理していた人物が居住していた建物の可能性もある。帯状に延びる焼砂範囲とともに、その周辺から釘も多量に出土していることから、屋根材などが焼失したのではないかと考えられる。時期は、出土した土師質土器や古瀬戸の大皿から、15世紀後半と考えることができる。なお、15世紀後半には当地方では製塩が生業の中心となり、管理者の建物が存在したことが推測される。

第15号建物跡 4区S I - 1（第206～213図）

位置 調査区中央部E12f0区を中心に位置している。

確認状況 表砂を7m除去した標高約4.5mから、上面がほぼ平坦な第1次面を確認した。さらに、下層の標高4.4mから第2次面が確認され、炉や複数の土坑、貝集積地が確認された。

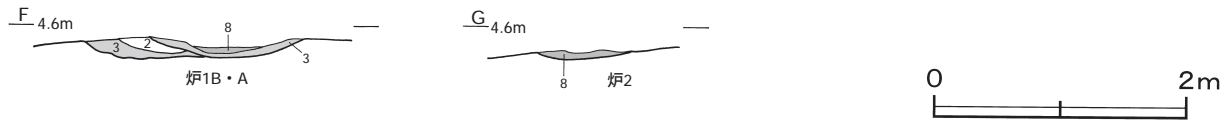


第206図 第15号建物跡実測図

規模と施設 第1次面の黒色土の範囲は南北15.7m，東西8.6m だけが確認された。第2次面の黒色土の範囲は南北6.6m，東西4.3mの不定形である。炉3基，粘土貼土坑3基，土坑9基が構築され，貝集積地1か所が確認された。下層からは土壇墓1基が確認されている。

床 第1・2次面とも厚さ約5cmの黒色土を貼り付けて構築されている。土層断面図中，第1次面と第2次面の黒色土層の間には約10cmの砂層が入っている。

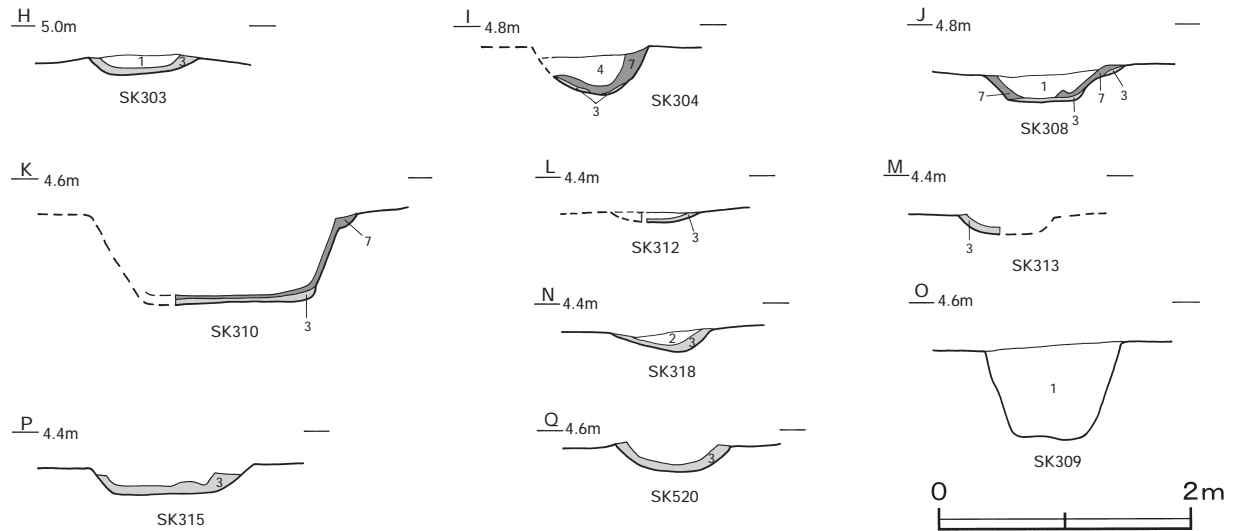
炉（第207図） 3基とも西部に位置している。第1 A号炉は第1 B号炉を造り替えたもので、厚さ4～13cmの黒色土を貼り付けて構築されている。第2号炉は焼砂層だけが検出された。



第207図 第15号建物跡炉土層図

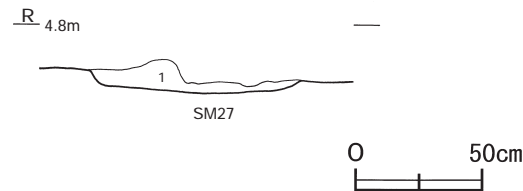
ピット 11か所。深さ45～80cmである。北東に軸をもつP1～P7は上屋を支えた柱穴と考えられるが、その他は性格不明である。

土坑（第208図） 黒色土で構築された第303・312・313・315・318・520号土坑と第306・309・311号土坑がある。また、第304・308・310号粘土貼土坑は、黒色土層の上に厚さ4cmの粘土を貼り付けて構築されている。



第208図 第15号建物跡土坑土層図

貝集積地（第209図） 第27号貝集積地は北東部に位置し、長軸0.9m、短軸0.7mの不定形で、貝層の厚さは最大で12cmである。

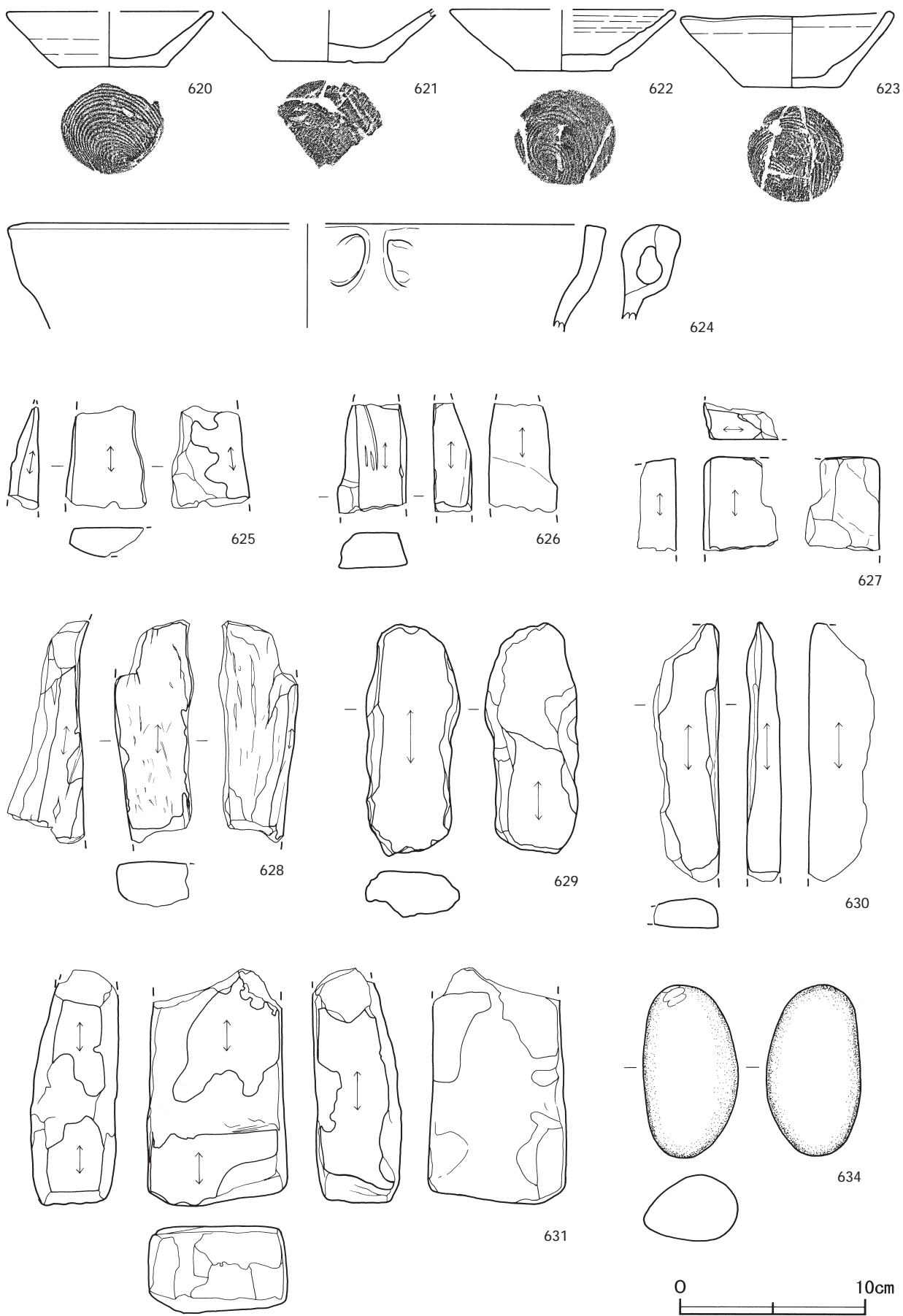


第209図 第15号建物跡貝集積地土層図

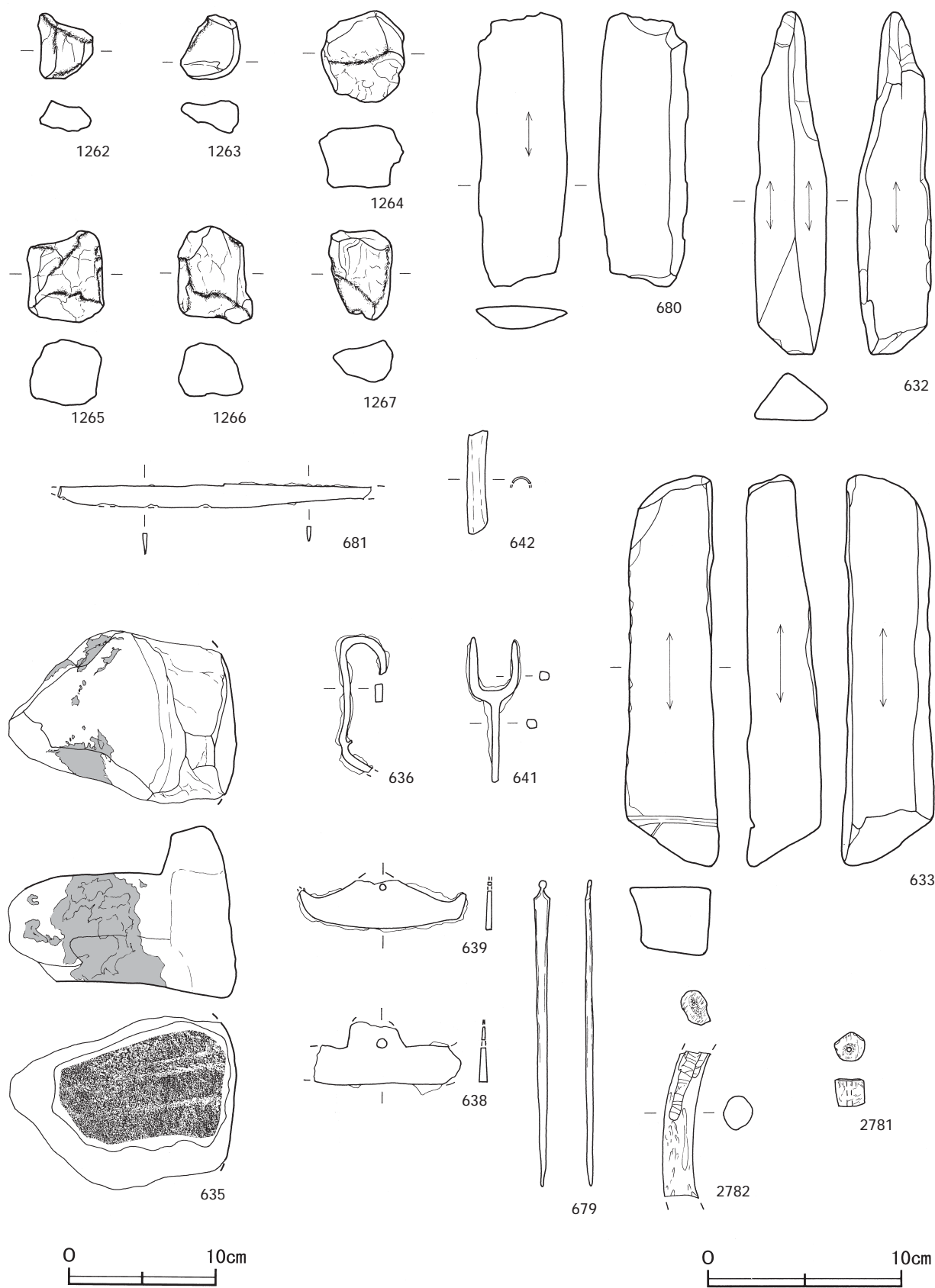
第27号貝集積地出土貝種一覧表

No.	貝種	重さ	比率	殻頂数	備考
1	アカニシ	20.0	0.85	1	
2	サルボウガイ	25.0	1.07	2	
3	ベンケイガイ	20.0	0.85	3	
4	コタマガイ	20.0	0.85	5	
5	ウバガイ	260.0	11.11	28	
6	イタボガキ属細片	115.0	4.91		
7	ウバガイ細片	1,880.0	80.34		

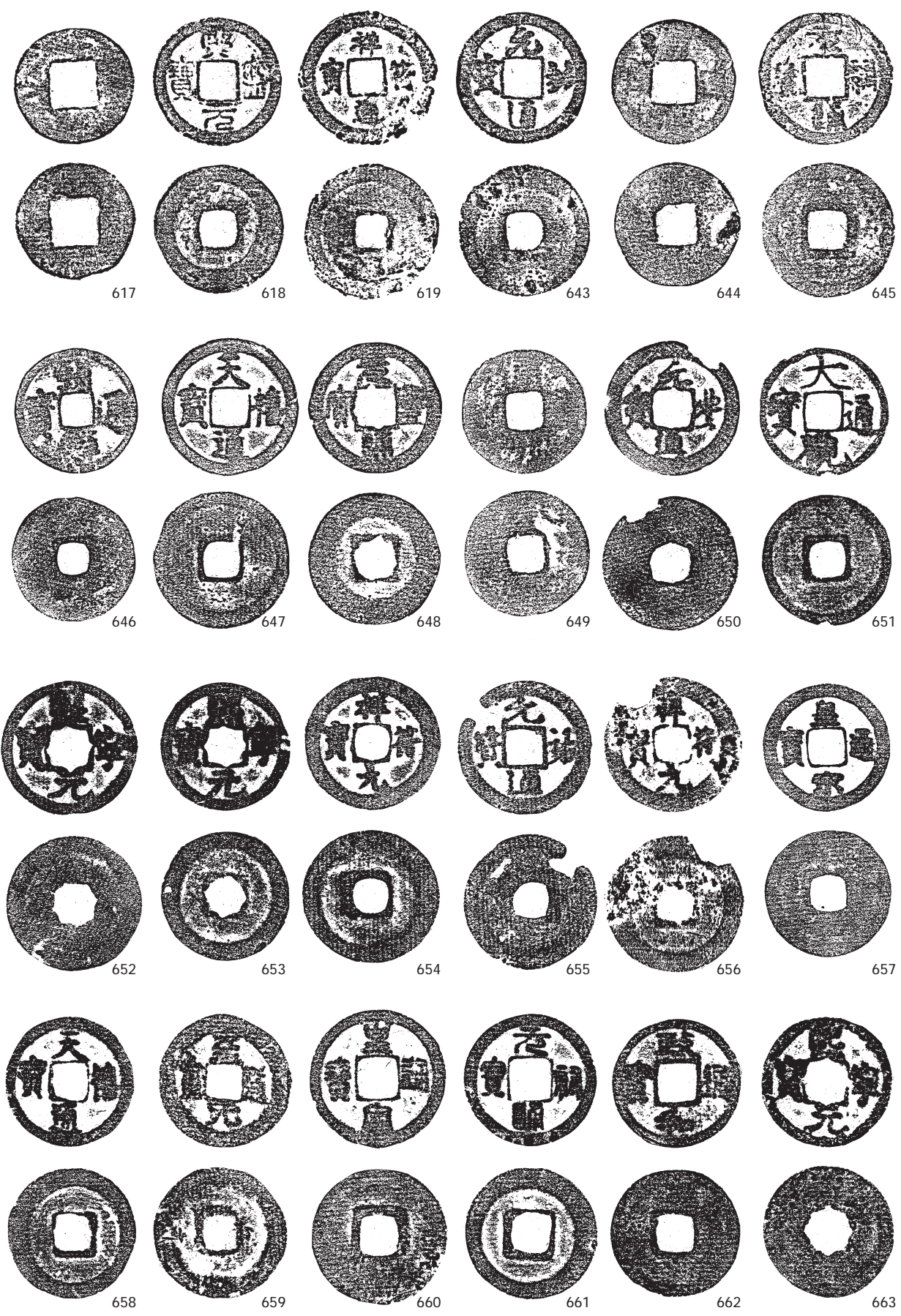
遺物出土状況 土師質土器片284点(皿173, 香炉5, 内耳鍋105, 火鉢1), 陶器片2点(碗, 甕), 磁器片1点(皿), 石器38点(砥石17, 火打石19, 石臼2), 礫14点, 金属製品48点(吊金具1, 火打金1, 筭2, 古銭44),



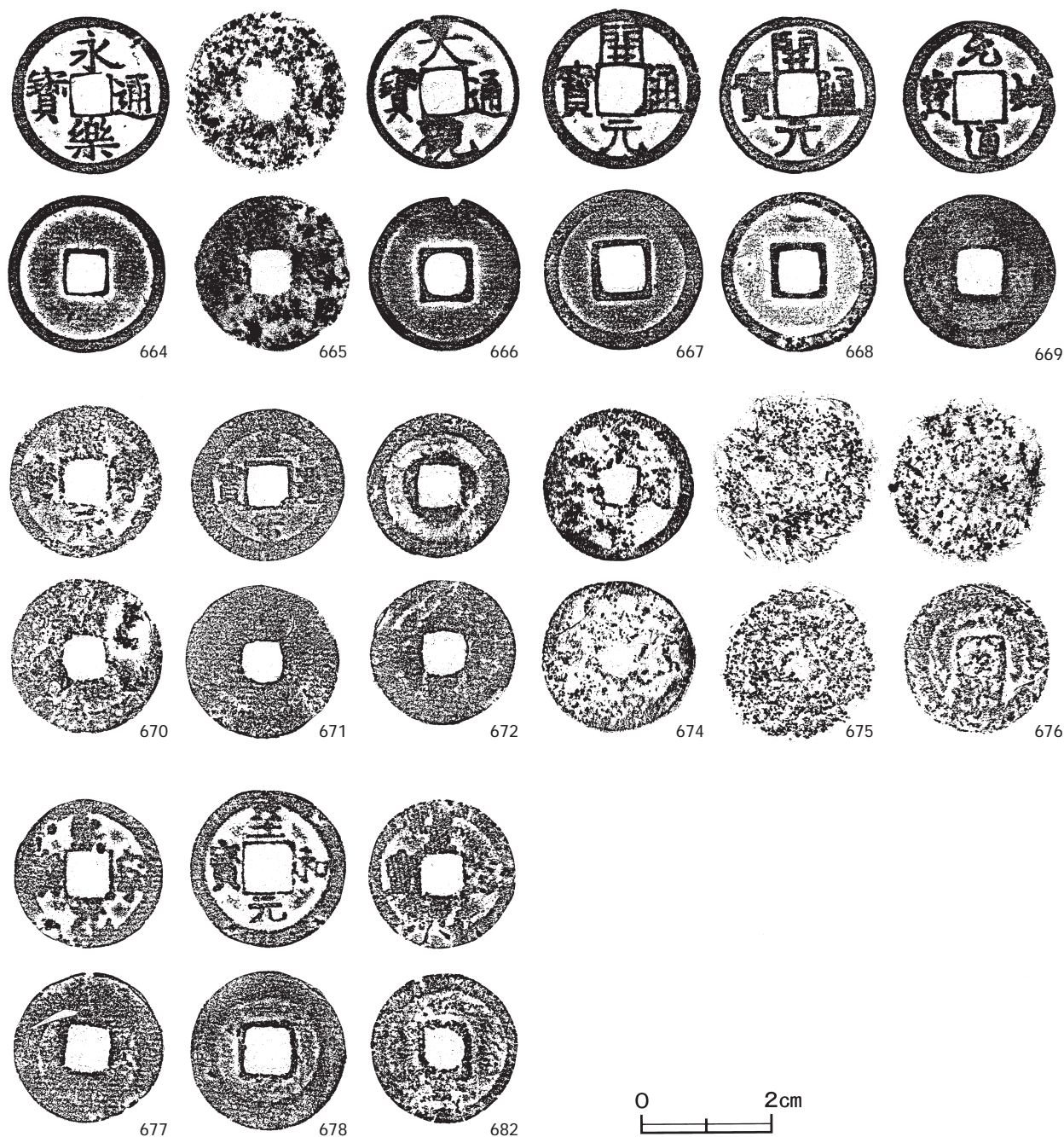
第210图 第15号建物跡出土遺物実測図(1)



第211图 第15号建物跡出土遺物実測図(2)



第212図 第15号建物跡出土遺物実測図(3) [古銭は原寸大]



第213図 第15号建物跡出土遺物実測図（4）

骨角製品1点（筭）が出土している。620・621は北西部，622は中央部の黒色土を除去した砂層，623は南西部，624は東部の砂層から出土している。620・622・623は底部内面のナデが強い。砥石と火打石の出土が多く，北部の第1A・1B号炉や第304号粘土貼土坑の下層から出土している。635の石臼は石灰質の物質が付着した状態で出土している。679の筭は骨角製で，東部の黒色土を除去した下層から出土している。古銭は西部の黒色土層を除去した層から多く出土している。2781は南部から，2782は鹿角の未製品で，北部の黒色土中から出土している。

所見 第1次面は第2次面の南部に再構築したものである。炉や柱穴の検出状況から建物跡と判断した。また，出土遺物が第2次面の北部に集中していることから，主たる生活地点は建物内の北部であると考えられる。

第15号建物跡出土遺物観察表（第210～213図）

番号	器形	器質	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
620	皿	土師質土器	[11.2]	3.0	5.8	雲母	橙	普通	底部回転糸切り	北西部黒色土下	50%
621	皿	土師質土器	—	(2.9)	6.0	雲母・赤色粒子	にぶい橙	普通	底部回転糸切り後ナデ	北西部黒色土下	25%
622	皿	土師質土器	[12.0]	3.3	5.2	雲母・赤色粒子	にぶい橙	普通	底部回転糸切り	中央部黒色土中	60%
623	皿	土師質土器	11.6	4.1	5.2	雲母・赤色粒子	橙	普通	底部回転糸切り, 底部内面一方向のナデ	南西部砂層	90% PL42
624	内耳鍋	土師質土器	[30.2]	(5.6)	—	雲母	橙	普通	口縁部ナデ	東部砂層	5%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
625	砥石	(5.6)	4.2	1.5	(38.2)	凝灰岩	砥面3面, 穿孔痕あり	覆土中	
626	砥石	(5.9)	3.7	1.9	(61.3)	凝灰岩	砥面3面, 擦痕あり	覆土中	
627	砥石	(5.0)	4.0	2.1	(49.2)	凝灰岩	砥面3面, 他は剥離面	中央部1次黒色土中	
628	砥石	(12.0)	4.2	4.2	(199.1)	滑石	砥面2面, 他は自然面	南西部砂層	
629	砥石	12.4	5.0	2.4	168.3	滑石	砥面2面, 他は自然面	中央部1次黒色土下	
630	砥石	14.9	(3.5)	1.3	(137.8)	凝灰岩	砥面3面, 他は剥離面	西部黒色土下	
631	砥石	(12.8)	7.5	4.7	(520.0)	凝灰岩	砥面5面, 砥面剥離顕著	西部砂層	
632	砥石	17.8	3.8	2.5	182.2	泥岩	砥面3面, 自然面あり	中央部黒色土下	
633	砥石	4.8	20.3	3.6	514.0	滑石	砥面3面, 断面台形	中央部黒色土下	
680	砥石	14.2	4.7	1.2	106.2	凝灰岩	砥面1面, 断面扁平	西部黒色土下	
1262	火打石	3.4	2.8	1.6	15.0	瑪瑙	一部の稜が摩滅	西部黒色土下	
1263	火打石	3.3	3.1	1.7	21.7	瑪瑙	一部の稜が摩滅	西部黒色土下	
1264	火打石	4.7	4.3	3.3	76.5	瑪瑙	一部の稜が摩滅	中央部黒色土中	
1265	火打石	4.7	3.9	3.3	86.6	瑪瑙	摩滅の集中箇所あり	中央部黒色土中	
1266	火打石	5.0	3.9	2.7	75.1	石英	一部の稜が摩滅	覆土中	
1267	火打石	4.7	3.3	2.2	45.7	瑪瑙	摩滅の集中箇所あり	西部黒色土中	
634	敲石	9.3	5.1	3.6	226.0	花崗岩	上部敲痕, 磨石にも使用	西部黒色土下	
635	石臼	(15.3)	—	11.7	(2,140.0)	安山岩	上臼, 石灰質付着	南部砂層	PL47
636	耳金	(7.2)	3.1	0.9	(15.3)	鉄	断面方形, 先端部欠損	南部2次黒色土中	
638	火打金	(7.6)	2.0	0.3	(33.4)	鉄	X線撮影により孔確認	南西部砂層	PL52
639	火打金	8.8	(2.7)	0.3	(33.0)	鉄	X線撮影により孔確認	中央部黒色土下	PL52
641	箆	7.5	2.6	0.5	12.4	鉄	断面方形, 柄部欠損	東部黒色土中	PL50
642	不明銅製品	5.4	1.2	(0.3)	3.1	銅	断面湾曲, 直線的に延びる	中央部黒色土下	PL50
679	筭	15.9	0.9	0.4	4.5	骨角	完存, 全面研磨	東部黒色土下	PL54
681	刀子	(16.2)	1.2	0.2	(16.9)	鉄	刀身部欠損, 片開	西部砂層	PL49
2781	骨角未製品	(1.5)	1.3	1.5	(3.2)	鹿角	孔あり, 断面と表面に削痕あり	南西部黒色土中	
2782	骨角未製品	(7.7)	1.7	1.5	(21.9)	鹿角	断面と表面に削痕あり	北部黒色土中	PL53

番号	銭名	径	孔径	厚さ	重さ	初鋳年	材質	特徴	出土位置	備考
617	—	2.20	0.89	0.08	1.74	—	銅	無文銭	西部黒色土下	
618	熙寧元寶	2.33	0.67	0.11	3.38	1068	銅	篆書	南部覆土中	
619	祥符通寶	2.55	0.61	0.13	3.08	1008	銅	真書	中央部黒色土中	
643	元祐通寶	2.40	0.67	0.12	3.42	1086	銅	行書	西部砂層	
644	□□□□	2.26	0.76	0.10	2.30	—	銅	判読不能, 模鋳	西部黒色土下	
645	元祐通寶	2.47	0.72	0.10	2.36	1086	銅	篆書	西部黒色土下	
646	朝鮮通寶	2.25	0.60	0.11	3.30	1423	銅	真書, 模鋳	西部黒色土下	
647	天禧通寶	2.51	0.62	0.09	2.80	1017	銅	真書	西部黒色土下	
648	元豐通寶	2.43	0.73	0.10	3.44	1078	銅	篆書, 星形孔	西部黒色土下	
649	開元通寶	2.31	0.65	0.11	2.42	621	銅	真書, 模鋳	西部黒色土下	
650	元豐通寶	2.45	0.73	0.09	(3.12)	1078	銅	行書, 欠け, 星形孔	西部黒色土下	
651	大観通寶	2.37	0.66	0.08	2.52	1107	銅	真書	西部黒色土下	
652	熙寧元寶	2.47	0.77	0.09	3.18	1068	銅	真書, 星形孔	西部黒色土下	
653	熙寧元寶	2.37	0.71	0.10	3.42	1068	銅	真書, 星形孔	西部砂層	
654	祥符元寶	2.48	0.60	0.08	2.50	1008	銅	真書, 円孔	西部黒色土中	
655	元祐通寶	2.46	0.65	0.09	(2.68)	1086	銅	行書, 鋳不足	西部黒色土下	
656	祥符元寶	2.54	0.62	0.10	(2.92)	1008	銅	真書, 錆がひどい, 欠け	南部黒色土下	
657	皇宋通寶	2.33	0.63	0.10	3.58	1038	銅	真書	西部砂層	
658	天禧通寶	2.37	0.64	0.12	3.34	1017	銅	真書	西部砂層	
659	至道元寶	2.41	0.61	0.08	2.82	995	銅	真書	西部黒色土下	
660	皇宋通寶	2.52	0.76	0.10	3.24	1038	銅	真書	西部黒色土下	

番号	銭名	径	孔径	厚さ	重さ	初铸年	材質	特徴	出土位置	備考
661	元祐通寶	2.42	0.71	0.12	3.82	1086	銅	篆書	中央部黒色土下	
662	政和通寶	2.35	0.65	0.10	3.14	1111	銅	分楷	中央部黒色土下	
663	熙寧元寶	2.40	0.78	0.11	3.56	1068	銅	分楷, 星形孔	中央部黒色土中	
664	永樂通寶	2.45	0.59	0.11	3.04	1408	銅	真書	東部黒色土面	
665	—	2.38	0.67	0.17	(3.34)	—	銅	判読不能	中央部黒色土下	
666	大観通寶	2.41	0.68	0.11	(2.84)	1107	銅	真書, 欠け	東部黒色土面	
667	開元通寶	2.49	0.71	0.10	3.44	621	銅	真書	東部黒色土面	
668	開元通寶	2.44	0.59	0.13	3.22	621	銅	真書, 背上月	東部黒色土面	
669	元祐通寶	2.40	0.70	0.11	3.50	1086	銅	行書	東部黒色土面	
670	熙寧元寶	2.39	0.59	0.11	(2.42)	1068	銅	真書	中央部覆土中	
671	皇宋通寶	2.39	0.60	0.08	2.80	1038	銅	真書	西部黒色土下	
672	—	2.23	0.62	0.05	1.66	—	銅	模鑄	中央部黒色土下	
674	□□通□	2.34	0.54	0.15	(3.68)	—	銅	判読不能	南部黒色土下	
675	—	(2.37)	—	(0.44)	(2.40)	—	銅	判読不能, 錆がひどい, 砂付着	覆土中	
676	—	2.33	—	(0.37)	(5.30)	—	銅	判読不能, 錆がひどい, 砂付着	覆土中	
677	熙寧元寶	2.34	0.65	0.09	2.66	1068	銅	真書	東部砂層	
678	至和元寶	2.45	0.71	0.12	3.64	1054	銅	真書	中央部黒色土下	
682	□□□寶	2.31	0.60	0.07	2.28	—	銅	判読不能, 模鑄	西部黒色土下	

第16号建物跡 4区S I - 2 (第214~218図)

位置 調査区北部 F12b8区を中心に位置している。

確認状況 表砂を7.5m除去し、標高5.9mから黒色土面を確認した。上面はほぼ平坦であり、複数の土坑が検出された。

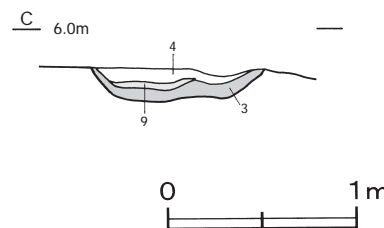
規模と施設 西部が調査区域外に延びているため、確認された黒色土の範囲は南北9.5m、東西10mだけである。炉1基、土坑3基が構築され、また貝集積地1か所が確認された。

床 ほぼ平坦である。厚さ20cmの黒色土を貼り付けて構築されている。下層には床面の基部をなす黒色土混じりの厚さ2~24cmの黒色土Bが確認された。土層断面図中、第3層は締めりのある黒色土A層、第4層は第3層の基部をなす黒色土B層である。

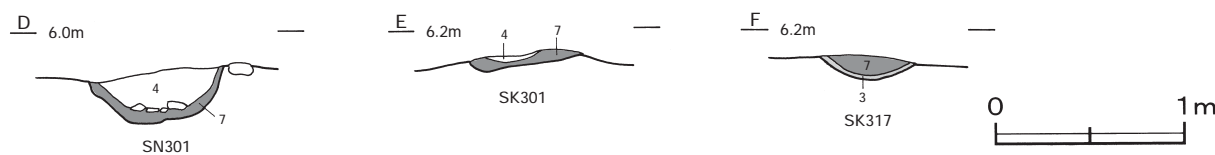
炉(第214図) 中央部やや西寄りに位置している。厚さ5~10cmの黒色土を貼り付けて構築されている。

ピット 3か所。深さは60~94cmで、性格不明である。

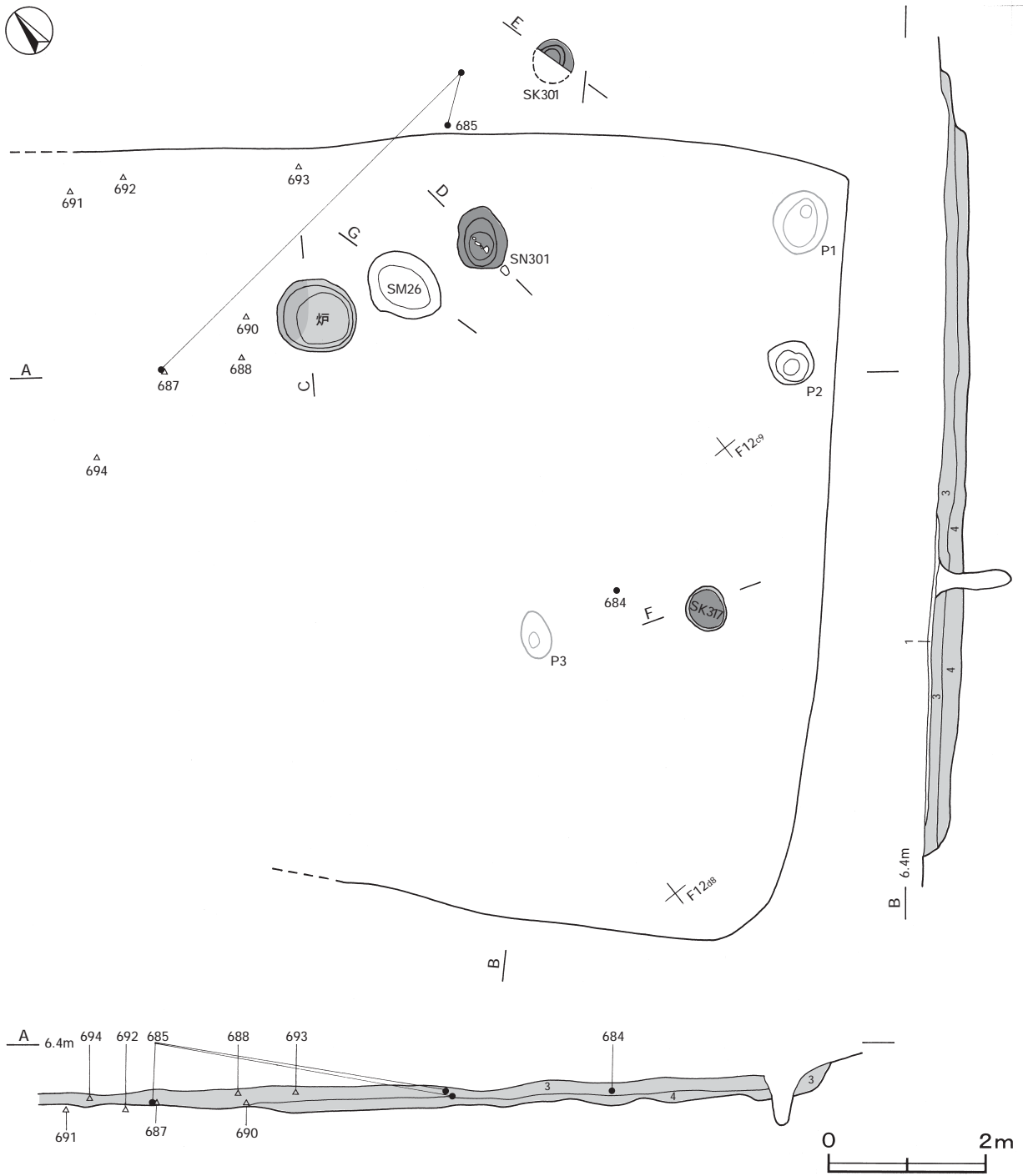
土坑(第215図) 第301号粘土貼土坑・第301号土坑は北部、第317号土坑は東部に位置している。第301号粘土貼土坑は厚さ5cm、第301号土坑は2~7cm、第317号土坑は2cmの黒色土を貼り付けて構築されている。



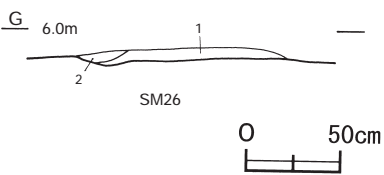
第214図 第16号建物跡炉土層図



第215図 第16号建物跡土坑土層図

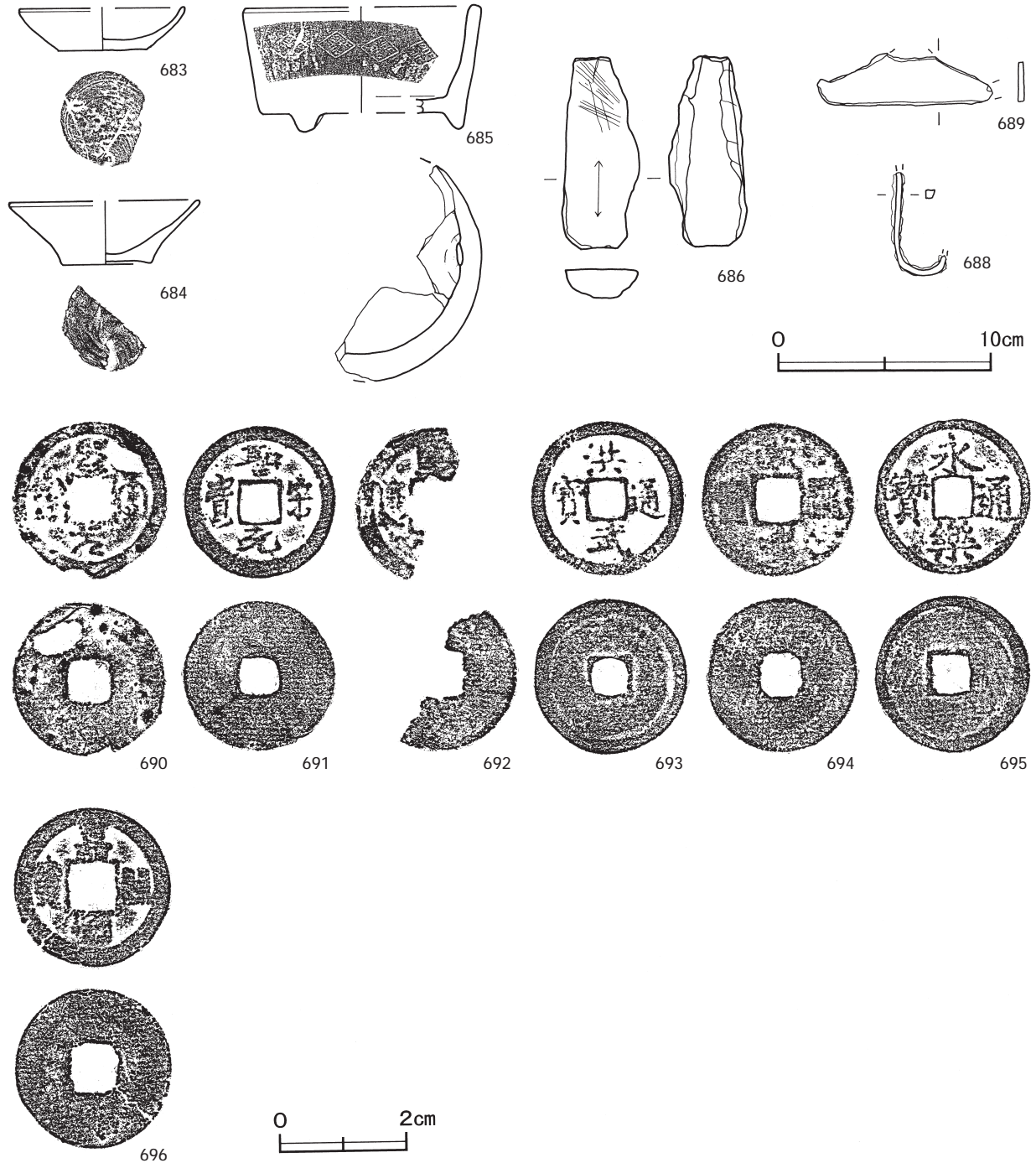


第216図 第16号建物跡実測図



貝集積地（第217図） 第26号貝集積地は北部に位置している。長径1.0m、短径0.8mの楕円形で、貝層の厚さは最大で7cmである。

第217図 第16号建物跡貝集積地土層図



第218図 第16号建物跡出土遺物実測図

遺物出土状況 土師質土器片31点（皿24，香炉3，内耳鍋4），石器4点（砥石1，敲石1，火打石2），金属製品8点（火打金1，古銭7）が出土している。683は覆土中，684は東部の黒色土面中から出土している。685は北西部の黒色土面中から出土しており，外面に菱形のスタンプ文が施される。688は西部の黒色土中，686・689は覆土中から出土している。690・694は西部の黒色土面中，691～693は北部の黒色土面中や黒色土面下の砂層から出土している。695は「永樂通寶」で繊維が付着している。また，第26号貝集積地からは混入と考えられる須恵器片1点が出土している。

所見 炉や平坦な床面が検出されたことから建物跡と判断した。上屋にかかわるピットや生活にかかわる出土遺物が少ないことから，一時的に生活した建物か作業場として機能した可能性が高い。

第16号建物跡出土遺物観察表（第218図）

番号	器形	器質	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
683	小皿	土師質土器	[7.8]	2.0	4.2	砂粒	にぶい橙	普通	底部回転糸切り後ナデ	覆土中	45%
684	皿	土師質土器	[9.0]	3.0	4.2	赤色粒子	にぶい黄橙	普通	底部回転糸切り後ナデ	東部黒色土中	45%
685	香炉	瓦質土器	[11.2]	5.8	[9.6]	砂粒	橙	普通	スタンプ文（菱形）	北西部黒色土中	35% PL45

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
686	砥石	9.0	3.6	1.4	63.9	凝灰岩	砥面1面，擦痕	覆土中	
688	釣針カ	(4.8)	0.4	0.4	(4.2)	鉄	断面方形	西部黒色土中	
689	火打金	(8.2)	(2.3)	0.3	(28.7)	鉄	上部欠損	覆土中	PL52

番号	銭名	径	孔径	厚さ	重さ	初鋳年	材質	特徴	出土位置	備考
690	聖宋元寶	2.40	0.69	0.15	(3.16)	1101	銅	篆書，鋳不足	西部黒色土中	
691	聖宋元寶	2.40	0.62	0.10	3.24	1101	銅	行書	北西部黒色土下	
692	□□□□	2.46	0.63	0.11	(1.38)	—	銅	判読不能，割れ，模鋳	北西部黒色土下	
693	洪武通寶	2.42	0.53	0.11	3.38	1368	銅	真書	北部黒色土中	
694	政和通寶	2.42	0.65	0.10	2.84	1111	銅	篆書	西部黒色土中	
695	永樂通寶	2.40	0.60	0.10	3.22	1408	銅	真書	覆土中	
696	嘉祐通寶	2.49	0.75	0.10	(3.20)	1056	銅	篆書，割れ	覆土中	

第17号建物跡 4区S I - 4（第219～230図）

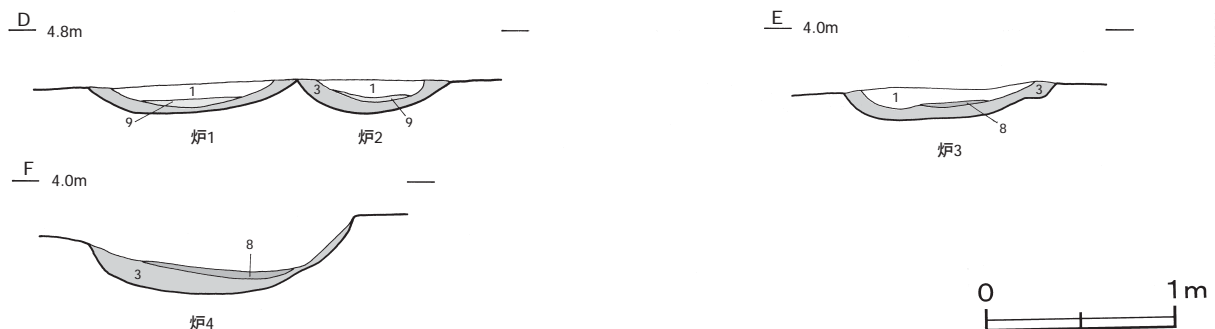
位置 調査区中央部 C13e3区を中心に位置している。

確認状況 表砂を5.6m除去した標高4.5mから黒色土面を確認した。上面はほぼ平坦である。さらに，下層から第2～4次面が確認され，複数の炉や土坑，貝集積地が確認された。第1次面の南部からは焼砂が検出された。本建物跡の下層から，第83～85号土壙墓が確認された。

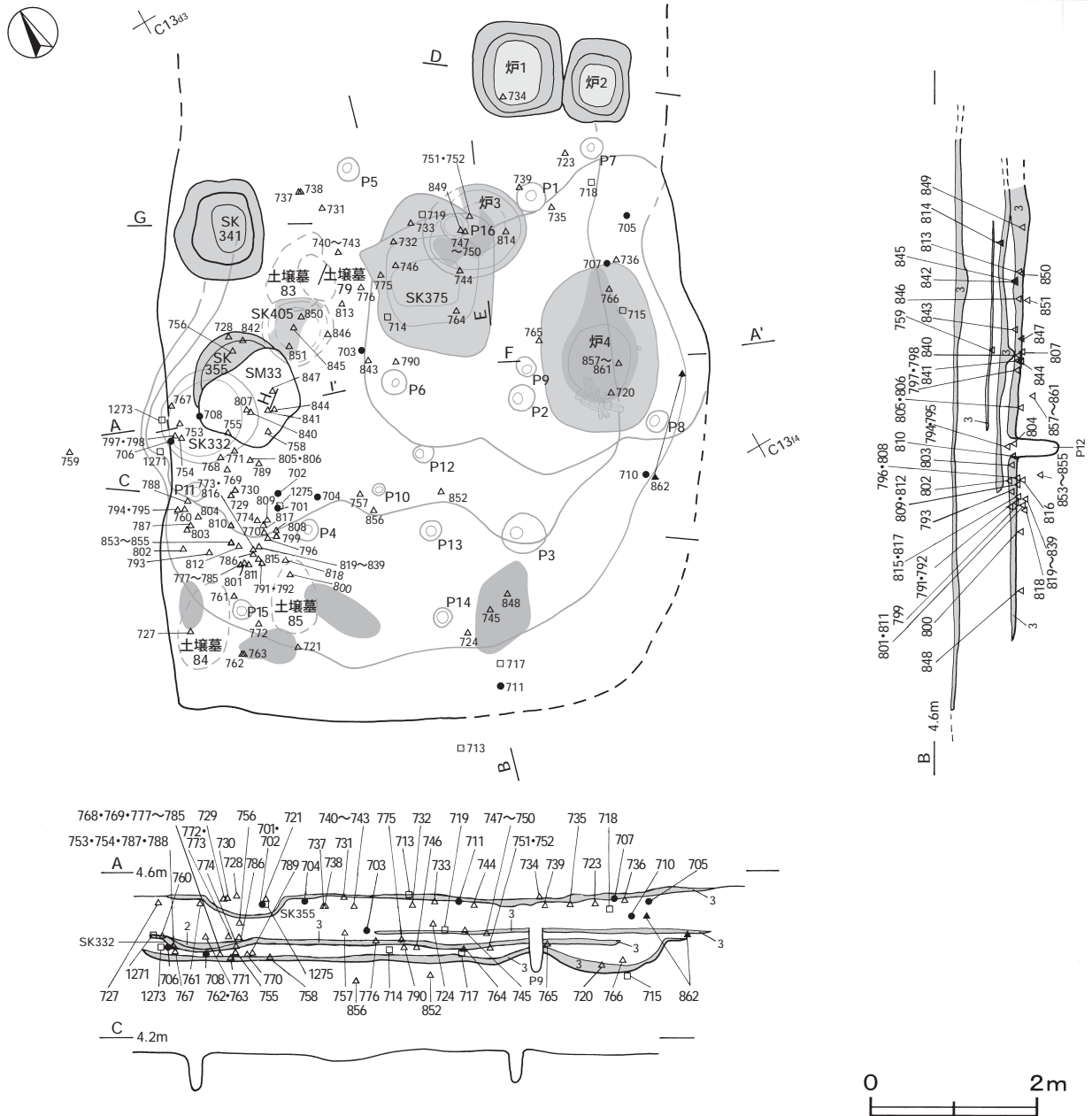
規模と施設 第1次面の黒色土の範囲は南北8.5m，東西6.5mが確認された。黒色土面は北部に延びていると考えられる。第2次面は南北3.5m，東西4mの不定形で，第3次面は南北軸3.5m，東西軸5.5m，第4次面は南北軸4.8m，東西軸6.6mが確認できた。3・4次面は第1次面と同様に北部に延びているため範囲の確定ができなかった。本建物跡の内・外には炉4基，土坑5基が構築され，貝集積地1か所が確認された。

床 4面ともほぼ平坦で，第2次面を除き厚さ4～10cmの黒色土を貼り付けて構築されている。なお，第2次面の黒色土の厚さは2～4cmと非常に薄い。

炉（第219図） 4基とも北東部に位置している。第1・2号炉は厚さ3～8cmの黒色土を貼り付けて構築されている。第3・4号炉内からは炭化材が検出されている。



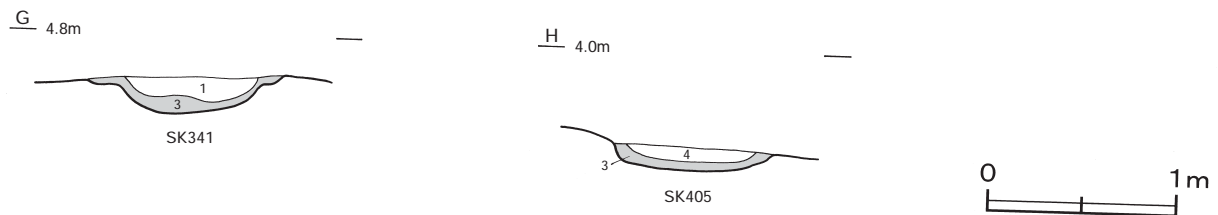
第219図 第17号建物跡炉土層図



第220図 第17号建物跡実測図

ピット 16か所。深さは43~70cmである。P1~P8・P16は第2次面、P9~P11は第3次面、P12~P15は第4次面に伴うピットである。P1~P6は上屋を支えた柱穴の一部と考えられる。P9~P16は不規則的な配置である。

土坑 (第221図) 5基とも厚さ2~14cmの黒色土を貼り付けて構築されている。第355号土坑は第33号貝集積地の下層、第332号土坑は第355号土坑の下層から検出されている。

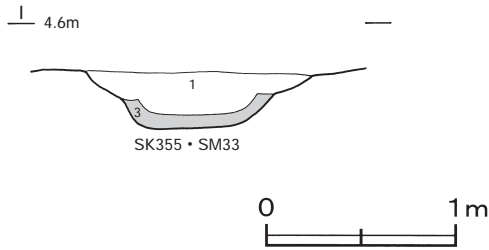


第221図 第17号建物跡土坑土層図

貝集積地（第222図） 第33号貝集積地は西部に位置し、第355号土坑の上層から確認された。長軸1.3m、短軸1 mの不定形で、貝層の厚さは21cmである。

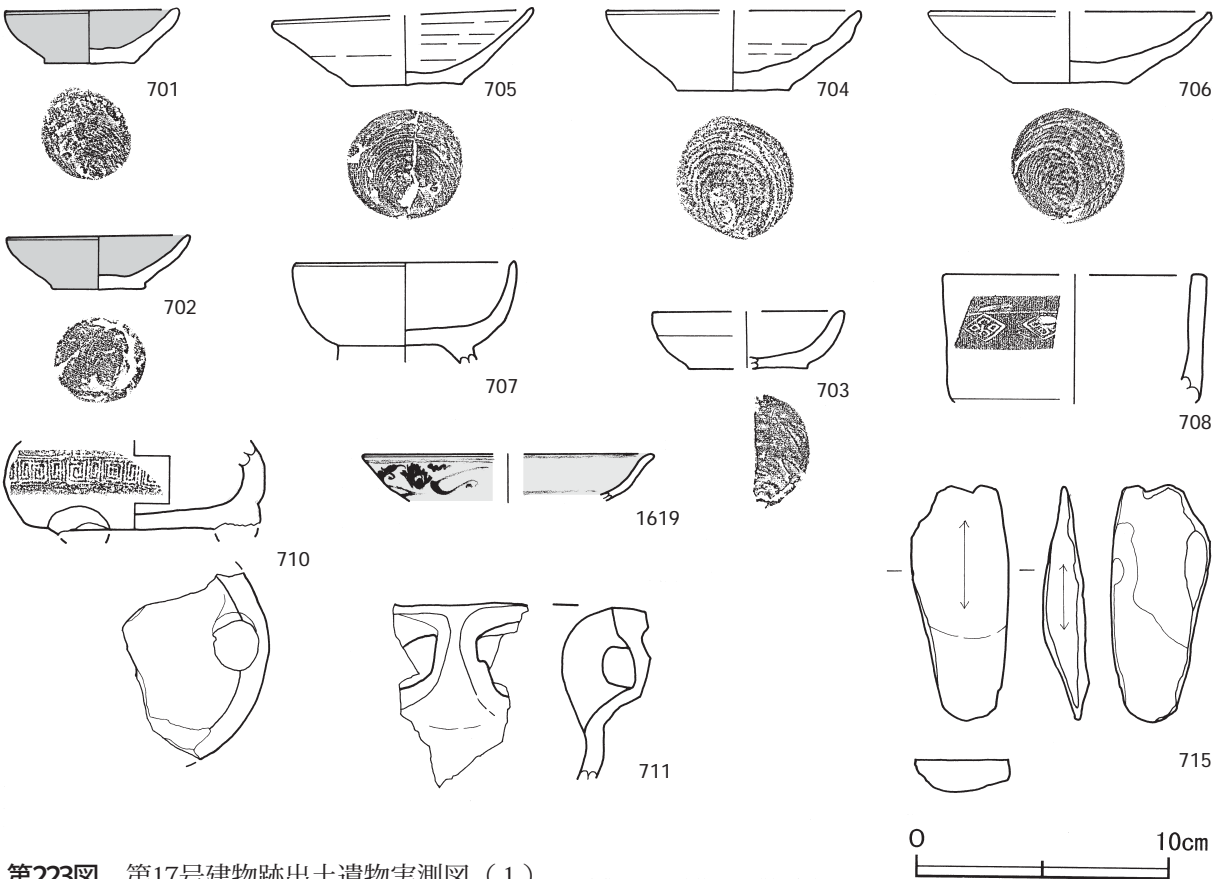
第33号貝集積地出土貝種一覧表

No.	貝種	重さ	比率	殻頂数	備考
1	アカニシ	40.0	0.18	3	
2	サルボウガイ	20.0	0.09	6	
3	アカガイ	10.0	0.04	2	
4	ペンケイガイ	60.0	0.27	9	
5	イタボガキ属	380.0	1.68		
6	コタマガイ	2.0	0.01	5	
7	ウバガイ	280.0	1.24	22	
8	細片	13,560.0	60.13		焼けている
9	細片	8,200.0	36.36		焼けていない

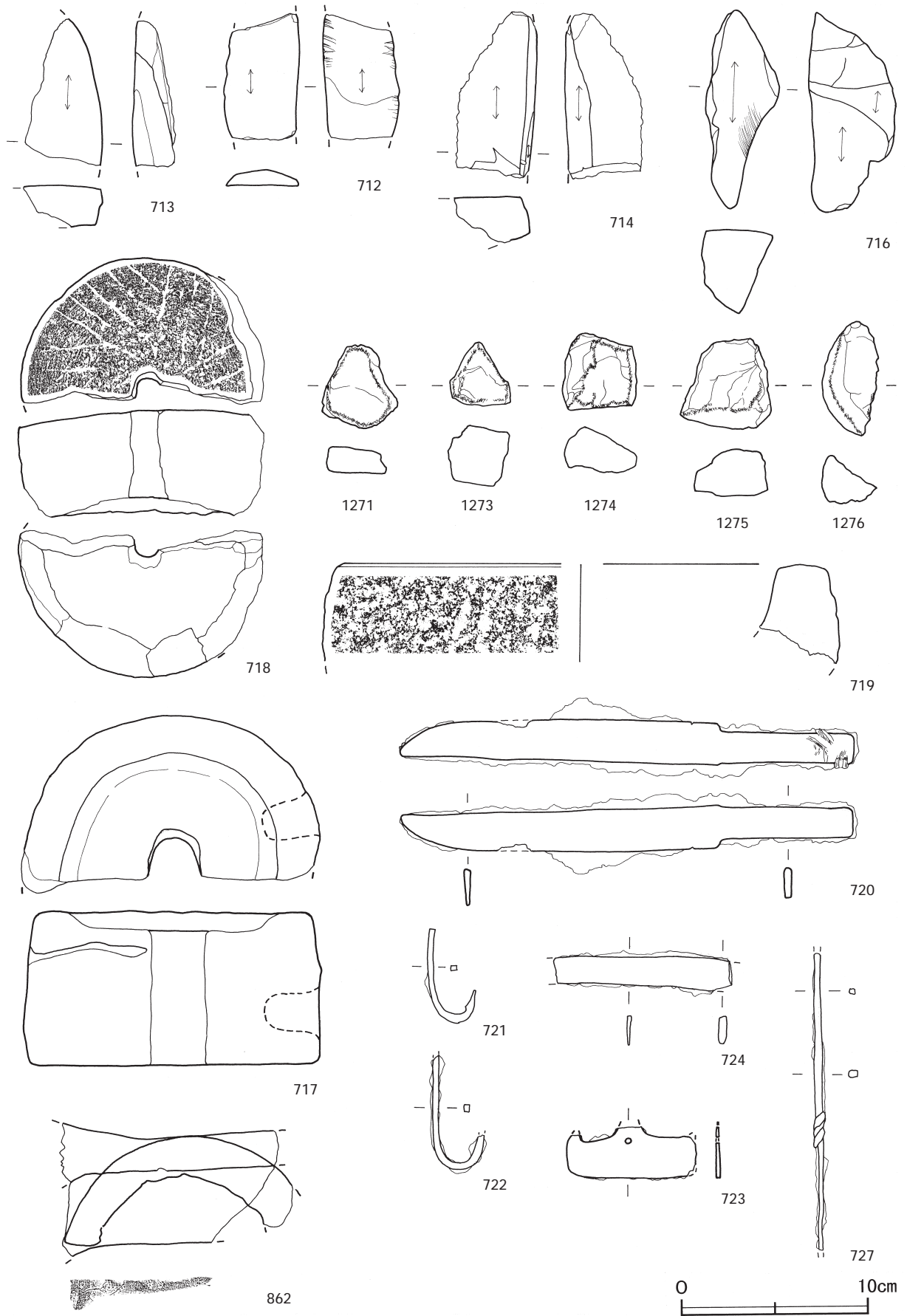


第222図 第17号建物跡土坑・貝集積地土層図

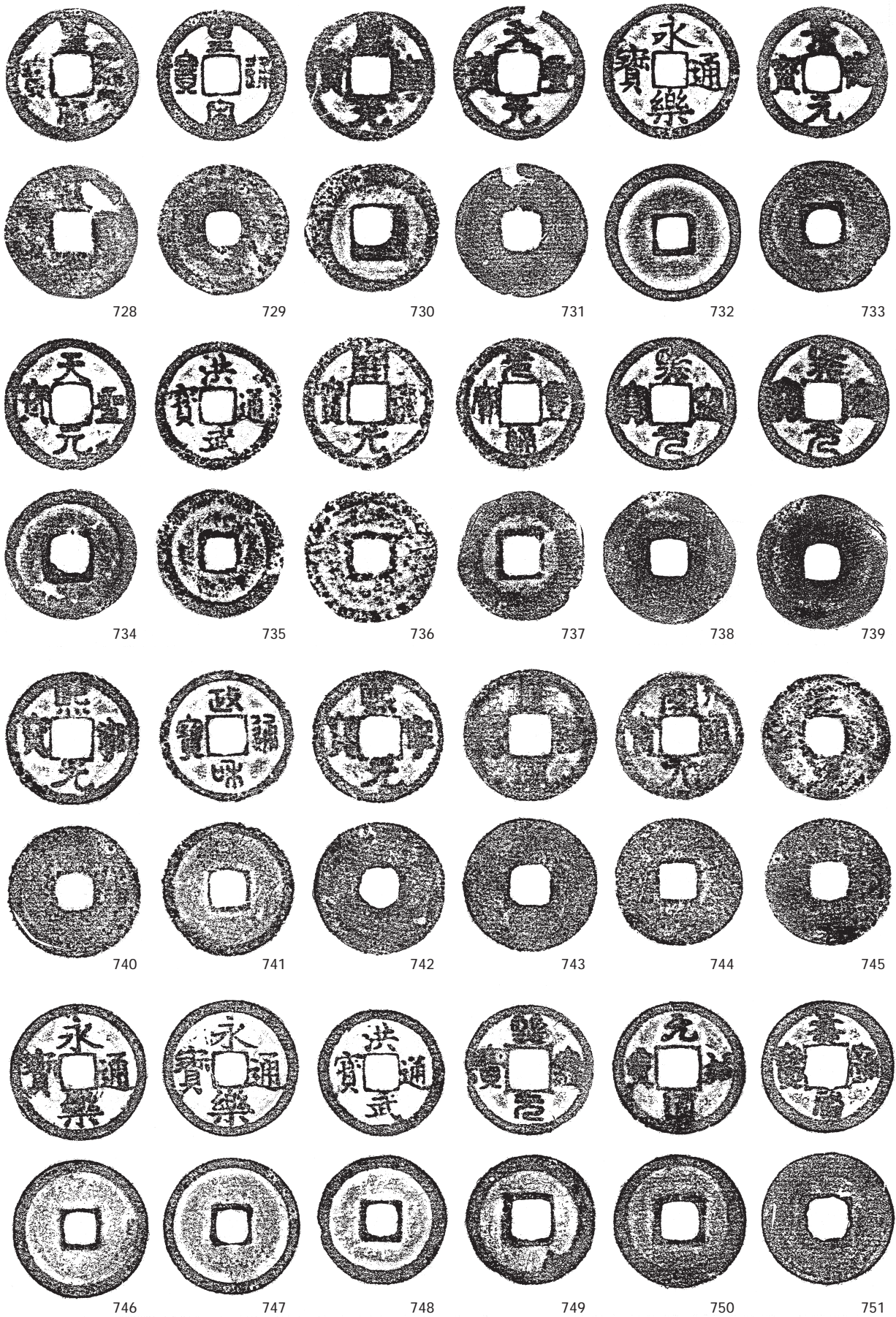
遺物出土状況 土師質土器片211点（皿173，香炉2，内耳鍋34，播鉢2），瓦質土器片2点（椀，香炉），陶器片5点（碗，甕），石器31点（砥石8，火打石17，石臼4，茶臼1，石鍋1），礫22点，金属製品143点（小刀2，釣針2，火打金1，毛抜2，紡荊カ1，不明1，古銭134），丸瓦片1点が出土している。701・702・707・711は第1次面中，706・708は第4次面の覆土中から出土しており，701・702は内外面に油煙痕が確認され，707は瓦質土器の椀である。金属製品の720は炉4内，721・723・727は第1次面から出土している。717は第4次面の覆土中，718は第2次面の覆土中から出土している。古銭は第1・3次面からの出土が多く，819～839は南西部の4次面黒色土下からまとめて出土している。「永樂通寶」が最新銭で，17枚出土している。第33号貝集積地からは土師質土器片2点（皿），陶器片1点（碗），不明金属製品1点が出土している。



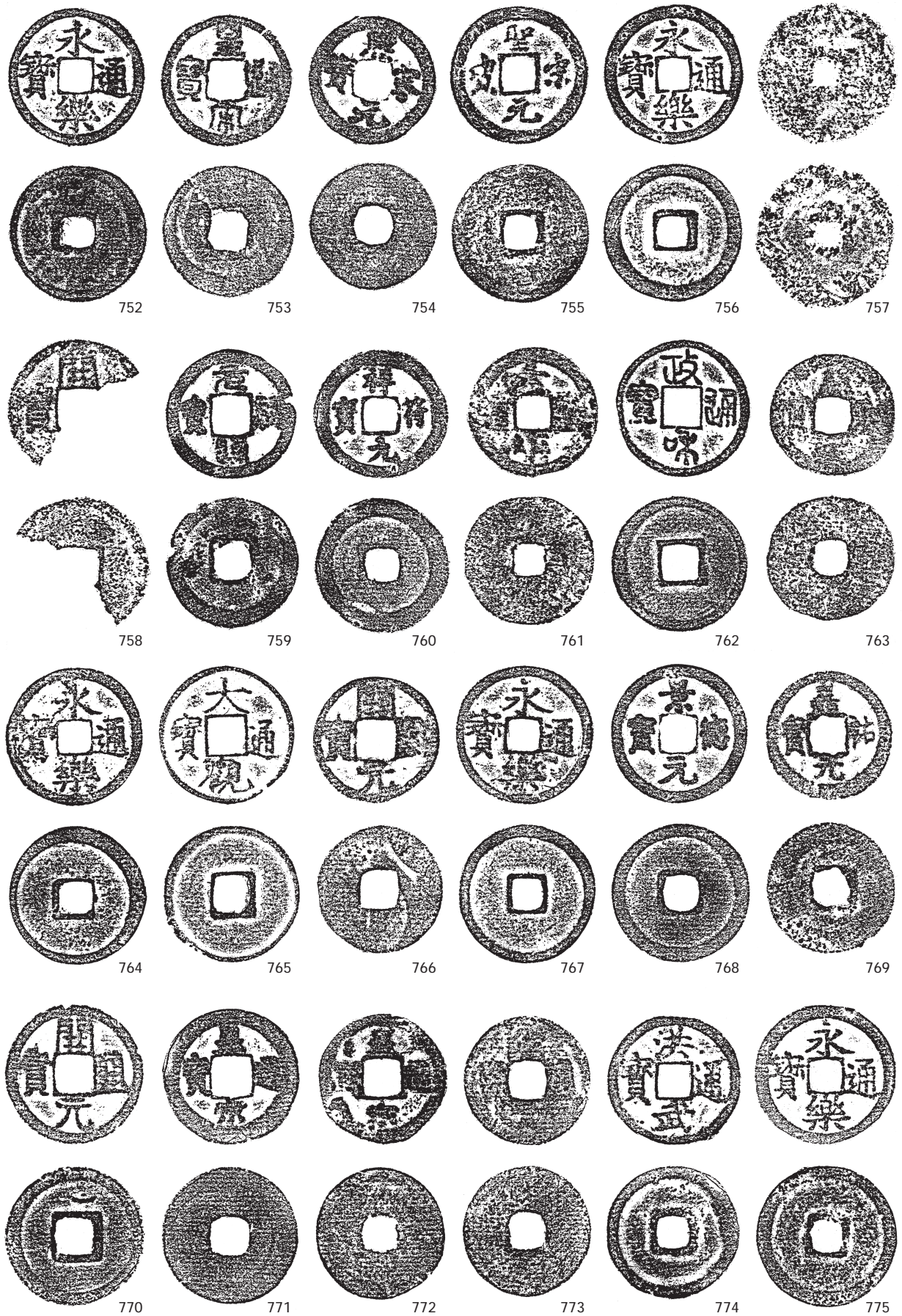
第223図 第17号建物跡出土遺物実測図（1）



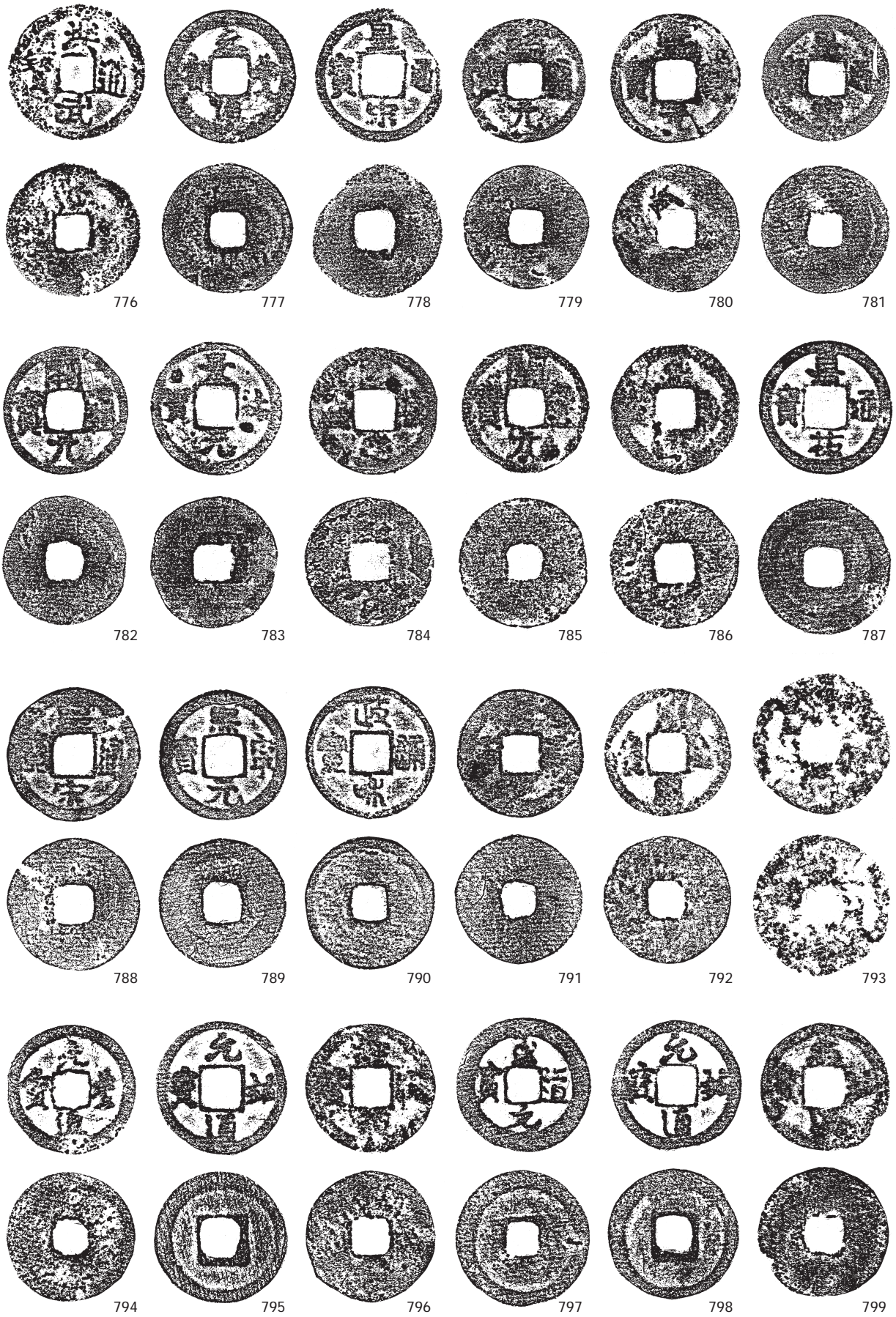
第224图 第17号建物跡出土遺物実測図(2)



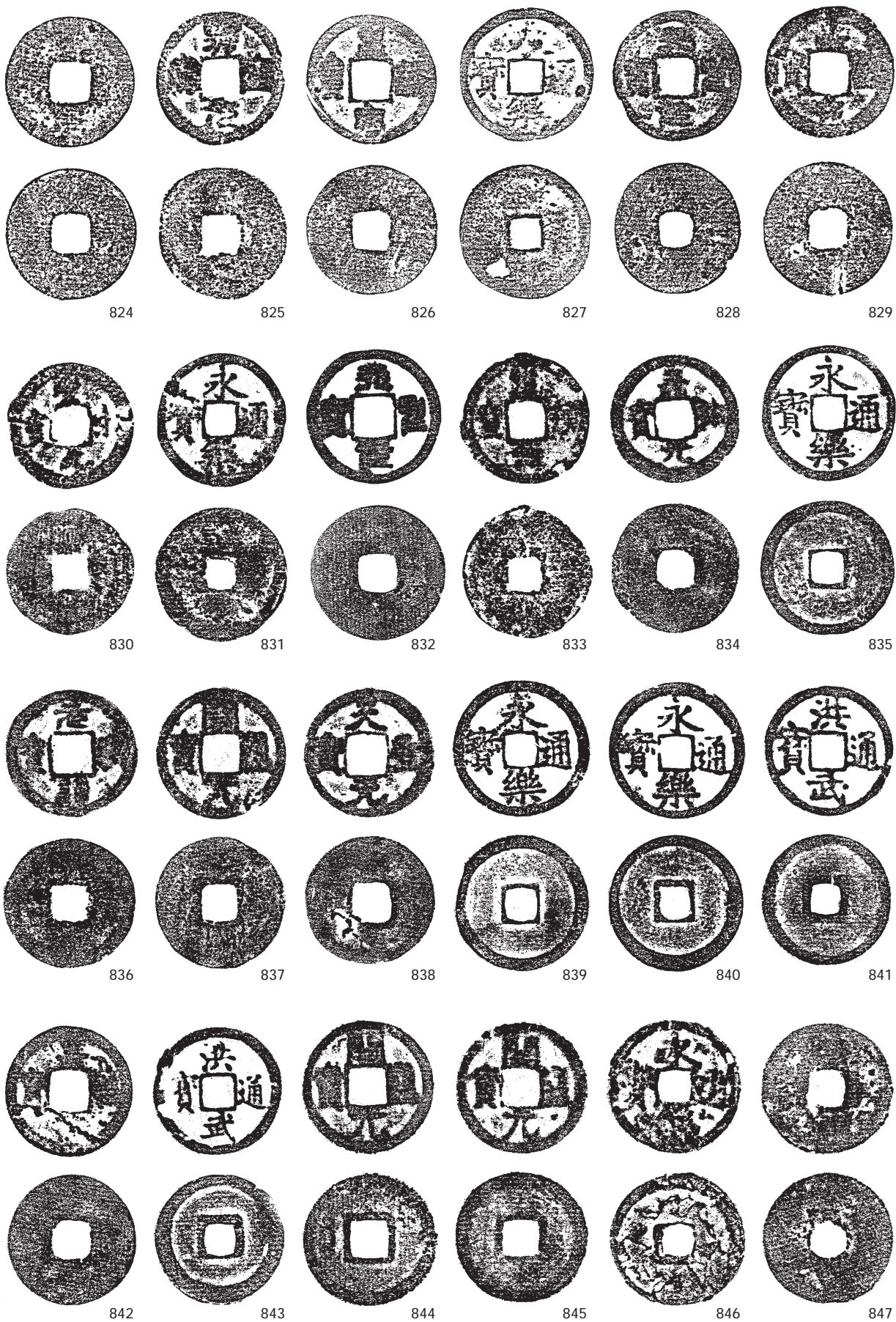
第225図 第17号建物跡出土遺物実測図(3) [古銭は原寸大]



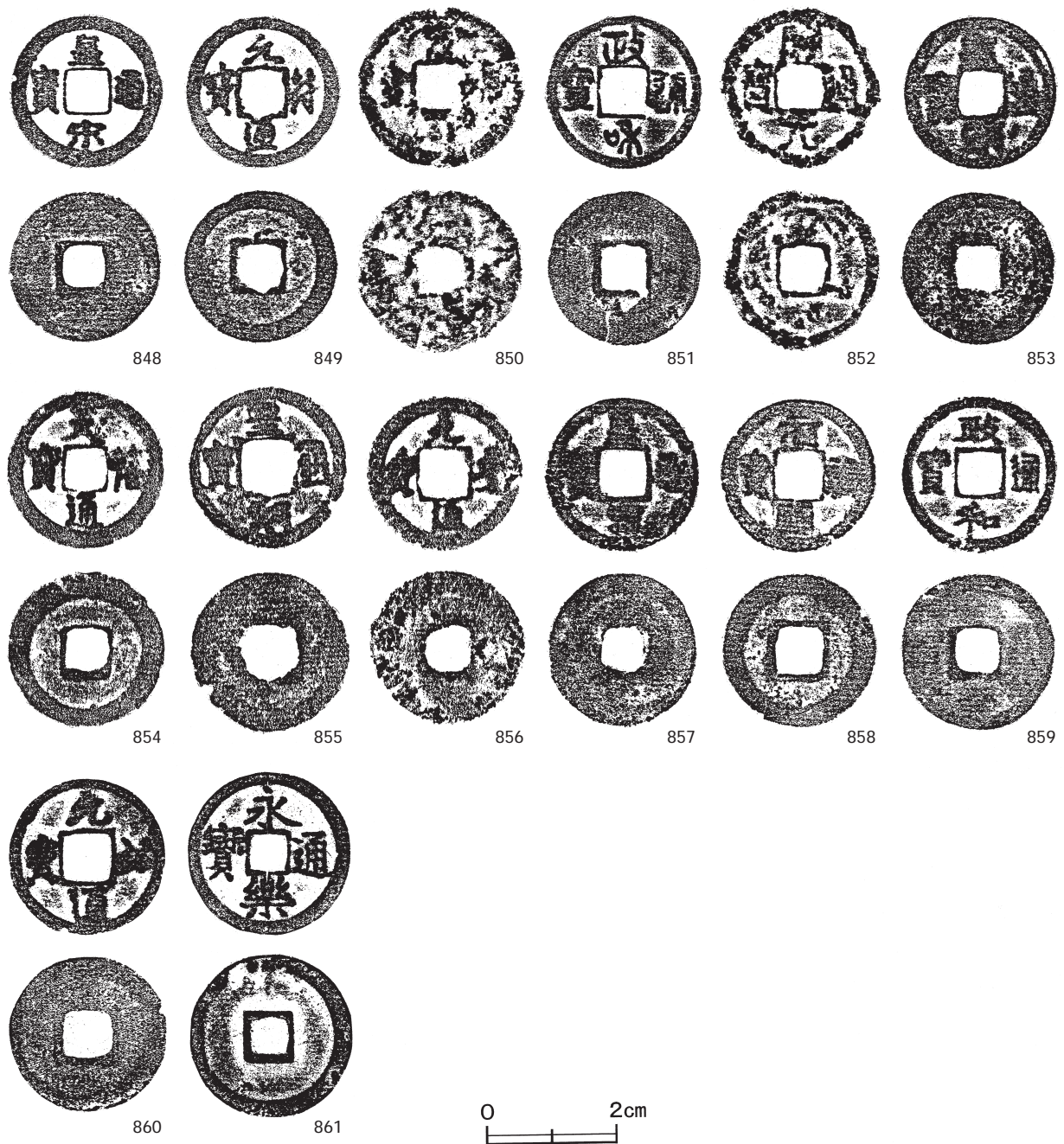
第226図 第17号建物跡出土遺物実測図(4) [古銭は原寸大]



第227図 第17号建物跡出土遺物実測図(5) [古銭は原寸大]



第229図 第17号建物跡出土遺物実測図(7) [古銭は原寸大]



第230図 第17号建物跡出土遺物実測図（8）

所見 第4号炉は黒色土で構築せず，床のくぼんだ部分を利用していたと考えられる。第33号貝集積地は第355号土坑の廃絶後，貝が投棄されて形成されたものである。第1・4次面は出土遺物が多いことから，両面が生活の中心面であったことが推測される。黒色土面は北に延びている可能性があり，幾度か黒色土面を再構築していると考えられる。本跡は大型で継続的に生活が営まれた建物跡と考えられる。

第17号建物跡出土遺物観察表（第223～230図）

番号	器形	器質	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
701	小皿	土師質土器	6.9	2.1	3.5	雲母	褐 灰	普通	底部回転糸切り，内外面煤付着	南西部1次黒色土中	97% PL40
702	小皿	土師質土器	7.3	2.2	3.6	雲母	褐 灰	普通	底部回転糸切り，内外面煤付着	南西部1次黒色土中	90% PL40
703	小皿	土師質土器	[7.4]	2.3	[2.7]	雲母・赤色粒子	にぶい橙	普通	底部回転糸切り	中央部2次覆土中	50%
704	皿	土師質土器	[10.0]	3.2	4.4	石英・赤色粒子	橙	普通	底部回転糸切り	南西部2次覆土中	70%

番号	器形	器質	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
705	小皿	土師質土器	[10.5]	3.1	4.3	雲母	灰褐色	普通	底部回転糸切り	東部1次黒色土下	30%
706	小皿	土師質土器	[11.2]	2.9	4.6	雲母	にぶい橙	普通	底部回転糸切り	西部4次覆土中	60%
707	椀	瓦質土器	8.9	(4.0)	—	長石・雲母	明赤褐色	普通	内外面ナデ調整	東部1次黒色土中	80% PL45
708	香炉	瓦質土器	[10.4]	(5.1)	—	雲母・赤色粒子	橙	普通	体部外面スタンプ文(菱形)	西部4次覆土中	5%
710	香炉	土師質土器	—	(3.6)	—	赤色粒子	橙	普通	器面荒れ, 体部外面スタンプ文(雷文)	東部2次覆土中	20%
711	内耳鍋	土師質土器	—	(7.3)	—	雲母	にぶい橙	普通	口縁部ナデ, 外面煤付着	南部1次黒色土中	5%

番号	器形	器質	口径	器高	底径	胎土・色調	絵付・釉薬	文様・特徴	産地・年代	出土位置	備考
1619	皿	磁器	[11.6]	(1.9)	—	灰白・灰	染付・透明釉	玉取獅子文	明, 16C後半	覆土中	10%

番号	器種	長さ(径)	幅	厚さ	重量	材質(胎土)	特徴	出土位置	備考
712	砥石	(6.8)	(4.1)	9.0	(32.3)	凝灰岩	砥面2面, 擦痕あり	覆土中	
713	砥石	(7.9)	(4.2)	2.3	(78.5)	砂岩	砥面1面, 調整面あり	南部1次黒色土中	
714	砥石	(9.0)	(4.2)	(2.5)	(89.8)	凝灰岩	砥面2面, 調整面あり	中央4次覆土中	
715	砥石	9.4	3.8	1.8	67.3	凝灰岩	砥面2面, 調整面あり	東部4次黒色土下	
716	砥石	10.6	4.0	4.4	160.0	凝灰岩	砥面3面, 擦痕あり	覆土中	
1271	火打石	4.5	4.1	1.5	31.6	石英	摩滅の集中箇所あり	西部2次黒色土中	
1273	火打石	3.5	3.3	3.3	39.3	石英	摩滅の集中箇所あり	西部4次覆土中	
1274	火打石	4.2	4.0	2.5	52.6	瑪瑙	摩滅の集中箇所あり	覆土中	PL54
1275	火打石	4.9	4.9	2.6	77.5	瑪瑙	一部の稜が摩滅	南西部1次黒色土中	
1276	火打石	7.2	3.0	2.6	46.6	瑪瑙	摩滅の集中箇所あり	覆土中	
717	茶臼	16.1	—	8.4	(1,730)	砂岩	上臼, 挽き手穴残存	南部4次覆土中	PL47
718	石臼	26.5	—	11.5	6250	安山岩	下臼, 6分画	東部2次覆土中	PL47
719	石鍋	[26.0]	—	(5.2)	(312)	安山岩	口縁部片	中央部2次黒色土中	
720	小刀	(24.5)	4.4	0.4	(111.1)	鉄	柄の部分に繊維質残存	炉4内	PL49
721	釣針	5.0	0.3	0.3	2.9	鉄	断面方形, 返し僅かに残存	南西部1次	PL51
722	釣針	(6.3)	0.3	0.4	(7.4)	鉄	断面方形, 先端部欠損	覆土中	PL51
723	火打金	7.0	(2.0)	0.2	(28.3)	鉄	孔有り, 断面扁平	東部1次黒色土下	PL52
724	小刀	(9.0)	2.0	0.4	(21.0)	鉄	先端柄部欠損	南部2次覆土中	
727	紡莖カ	(16.1)	0.7	0.4	(11.3)	鉄	断面方形, 両端欠損	南西部2次覆土中	
862	軒先丸瓦	(11.2)	(12.2)	1.9	(510.0)	長石・石英	凸面叩き後ヘラ削り, 凹面布目痕	東部2次黒色土中	

番号	銭名	径	孔径	厚さ	重さ	初鋳年	材質	特徴	出土位置	備考
728	皇宋通寶	2.43	0.66	0.09	(2.42)	1038	銅	篆書, 鋳不足	西部1次覆土中	
729	皇宋通寶	2.45	0.66	0.10	2.72	1038	銅	篆書	南西部1次覆土中	
730	熙寧元寶	2.40	0.70	0.14	(3.78)	1068	銅	真書, 鋳不足	南西部1次覆土中	
731	天聖元寶	2.43	0.70	0.10	(3.00)	1023	銅	真書, 欠け	中央部1次黒色土中	
732	永樂通寶	2.50	0.53	0.11	3.50	1408	銅	真書	中央部2次覆土中	
733	景德元寶	2.42	0.58	0.11	3.16	1004	銅	真書	中央部1次黒色土中	
734	天聖元寶	2.42	0.72	0.09	(2.24)	1023	銅		炉1内	
735	洪武通寶	2.35	0.59	0.13	(2.76)	1368	銅	真書	東部2次覆土中	
736	開元通寶	2.42	0.65	0.12	(3.52)	621	銅	真書	東部2次覆土中	
737	元豐通寶	2.40	0.69	0.11	3.26	1078	銅	篆書	中央部2次覆土中	
738	熙寧元寶	2.46	0.67	0.11	3.80	1068	銅	篆書	中央部2次覆土中	
739	熙寧元寶	2.46	0.64	0.13	4.46	1068	銅	篆書	東部2次覆土中	
740	熙寧元寶	2.44	0.70	0.10	3.10	1068	銅	真書	中央部2次覆土中	
741	政和通寶	2.45	0.61	0.11	2.96	1111	銅	篆書	中央部2次覆土中	
742	熙寧元寶	2.43	0.68	0.11	3.54	1068	銅	真書	中央部2次覆土中	
743	皇宋通寶	2.49	0.73	0.11	3.84	1038	銅	篆書	中央部2次覆土中	
744	開元通寶	2.35	0.61	0.08	2.40	621	銅	真書	中央部1次黒色土下	
745	□□□□	2.32	0.65	0.08	2.86	—	銅	判読不能, 模鋳	南部2次黒色土中	
746	永樂通寶	2.50	0.51	0.11	3.34	1408	銅	真書	中央部4次覆土中	
747	永樂通寶	2.52	0.56	0.11	3.74	1408	銅	真書	中央部2次黒色土中	
748	洪武通寶	2.36	0.58	0.12	(3.44)	1368	銅	真書	中央部2次黒色土中	
749	熙寧元寶	2.38	0.73	0.11	2.94	1068	銅	篆書	中央部2次黒色土中	
750	元祐通寶	2.43	0.75	0.10	3.78	1086	銅	行書	中央部2次黒色土中	
751	嘉祐通寶	2.43	0.76	0.09	3.28	1056	銅	篆書, 星形孔	中央部3次黒色土中	
752	永樂通寶	2.54	0.56	0.11	3.28	1408	銅	真書	中央部3次黒色土中	

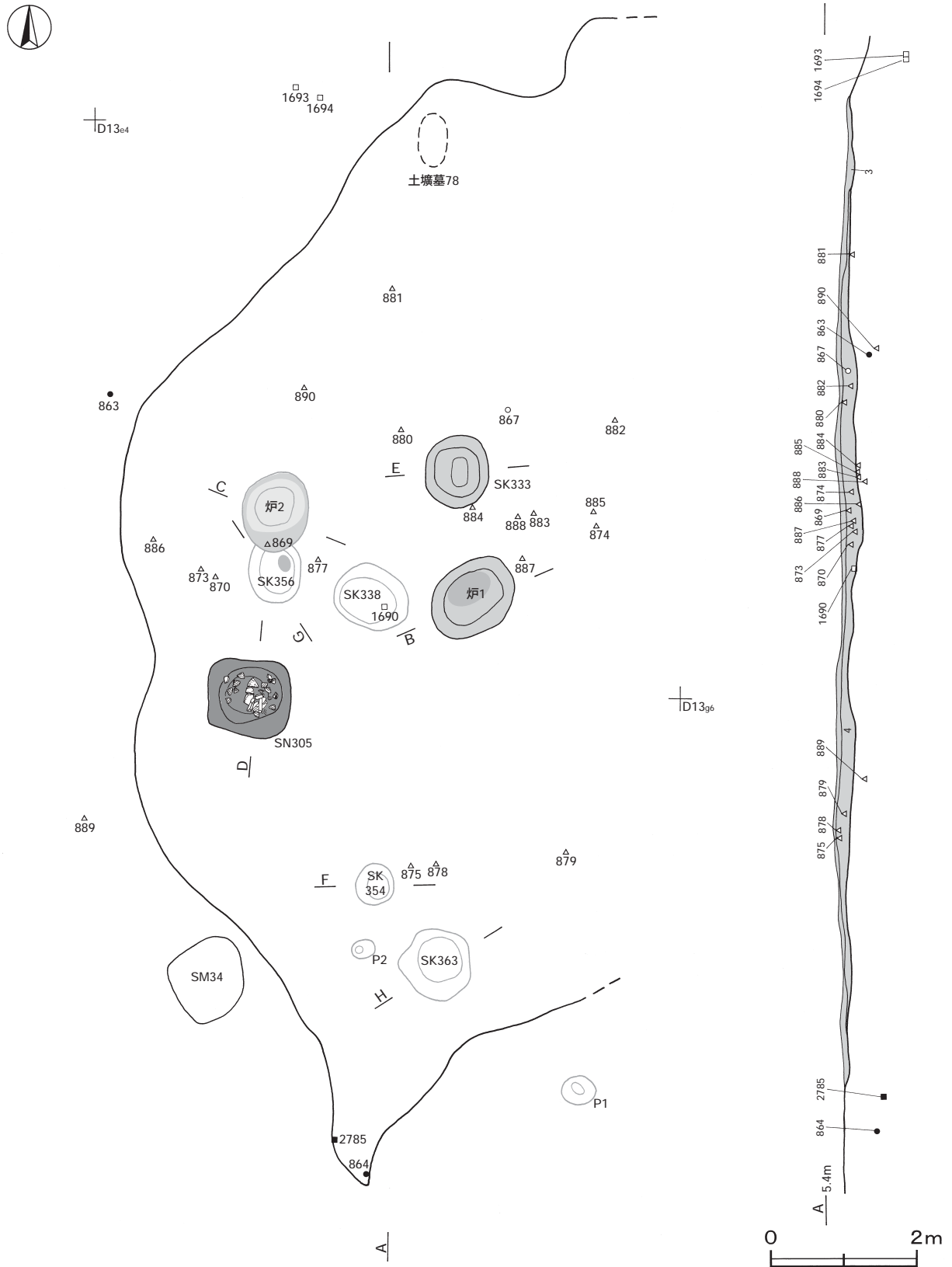
番号	銭名	径	孔径	厚さ	重さ	初铸年	材質	特徴	出土位置	備考
753	皇宋通寶	2.41	0.66	0.09	3.08	1038	銅	篆書, 星形孔	西部4次覆土中	
754	熙寧元寶	2.34	0.66	0.09	3.04	1068	銅	真書	西部4次覆土中	
755	聖宋元寶	2.54	0.61	0.13	4.12	1101	銅	行書	西部4次覆土中	
756	永樂通寶	2.53	0.55	0.13	4.20	1408	銅	真書	西部2次覆土中	
757	—	(2.48)	(0.33)	(0.23)	(3.80)	—	銅	判読不能, 錆がひどい	南西部3次覆土中	
758	開元通寶	2.52	0.70	0.12	(1.82)	845	銅	真書, 割れ	西部4次黒色土中	
759	元祐通寶	2.38	0.77	0.13	(3.66)	1086	銅	篆書, 欠け	西部2次黒色土中	
760	祥符元寶	2.42	0.06	0.11	3.38	1008	銅	行書	南西部3次黒色土中	
761	太平通寶	2.38	0.53	0.11	3.04	976	銅	真書	南西部2次覆土中	
762	政和通寶	2.48	0.66	0.11	3.44	1111	銅	篆書	南西部3次黒色土面	
763	□□□寶	2.31	0.57	0.09	3.24	—	銅	判読不能, 模铸	南西部3次黒色土面	
764	永樂通寶	2.50	0.59	0.14	4.36	1408	銅	真書	中央部3次黒色土中	
765	大觀通寶	2.49	0.67	0.12	3.30	1107	銅	真書	東部4次黒色土面	
766	開元通寶	2.30	0.66	0.13	3.52	621	銅	真書	東部4次覆土中	
767	永樂通寶	2.49	0.65	0.10	3.62	1408	銅	真書	西部4次覆土中	
768	景德元寶	2.50	0.60	0.10	3.92	1004	銅	真書	南西部4次覆土中	
769	嘉祐元寶	2.34	0.65	0.14	3.36	1056	銅	真書, 星形孔	南西部4次覆土中	
770	開元通寶	2.54	0.65	0.12	3.82	621	銅	真書, 背上月	南西部4次覆土中	
771	皇宋通寶	2.50	0.68	0.11	3.98	1038	銅	真書	南西部4次黒色土中	
772	皇宋通寶	2.37	0.61	0.06	3.18	1038	銅	真書	南西部3次覆土中	
773	開元通寶	2.31	0.57	0.07	2.06	621	銅	模铸	南西部3次覆土中	
774	洪武通寶	2.39	0.51	0.12	3.62	1368	銅	真書	南西部3次覆土中	
775	永樂通寶	2.54	0.50	0.13	3.98	1408	銅	真書	中央部3次黒色土中	
776	洪武通寶	2.43	0.55	0.14	2.50	1368	銅	真書	中央部3次黒色土中	
777	元豊通寶	2.41	0.68	0.11	3.40	1078	銅	行書	南西部4次覆土中	
778	皇宋通寶	2.43	0.67	0.08	(2.80)	1038	銅	真書, 欠け	南西部4次覆土中	
779	開元通寶	2.26	0.60	0.10	(2.28)	621	銅	真書	南西部4次覆土中	
780	熙寧元寶	2.36	0.64	0.13	3.28	1068	銅	模铸	南西部4次覆土中	
781	皇宋通寶	2.35	0.65	0.11	3.04	1038	銅	真書	南西部4次覆土中	
782	開元通寶	2.31	0.67	0.06	2.42	621	銅	真書	南西部4次覆土中	
783	景祐元寶	2.42	0.68	0.11	3.30	1034	銅	真書	南西部4次覆土中	
784	□□□□	2.34	0.71	0.11	2.68	—	銅	判読不能, 模铸	南西部4次覆土中	
785	開元通寶	2.38	0.63	0.11	2.74	621	銅	真書	南西部4次覆土中	
786	□□□□	2.38	0.67	0.10	2.52	—	銅	判読不能, 模铸	南西部3次黒色土面	
787	嘉祐通寶	2.48	0.64	0.13	3.68	1056	銅	真書	南西部4次覆土中	
788	皇宋通寶	2.43	0.73	0.07	(2.48)	1038	銅	真書	南西部4次覆土中	
789	熙寧元寶	2.34	0.67	0.10	2.68	1068	銅	真書	南西部4次覆土中	
790	政和通寶	2.39	0.62	0.12	3.60	1111	銅	篆書	中央部4次覆土中	
791	□□□□	2.36	0.62	0.11	3.70	—	銅	判読不能, 模铸	南西部4次黒色土中	
792	皇宋通寶	2.39	0.63	0.10	2.76	1038	銅	模铸	南西部4次黒色土中	
793	—	(2.57)	(0.61)	(0.17)	(3.06)	—	銅	判読不能, 錆がひどい	南西部4次黒色土中	
794	元豊通寶	2.41	0.54	0.11	2.90	1078	銅	行書, 星形孔	南西部4次黒色土中	
795	元祐通寶	2.43	0.63	0.10	3.50	1086	銅	行書	南西部4次黒色土中	
796	□□□寶	2.40	0.67	0.11	3.16	—	銅	判読不能, 模铸	南西部4次黒色土中	
797	至道元寶	2.51	0.60	0.10	3.92	995	銅	行書	西部4次黒色土中	
798	元祐通寶	2.40	0.61	0.11	3.54	1086	銅	行書	西部4次黒色土中	
799	元祐通寶	2.39	0.72	0.11	3.20	1086	銅	欠け, 模铸	南西部4次黒色土下	
800	開元通寶	2.33	0.63	0.12	(3.30)	621	銅	模铸	南西部4次黒色土下	
801	嘉祐元寶	2.27	0.68	0.08	2.46	1056	銅	真書, 模铸	南西部4次黒色土下	
802	永樂通寶	2.46	0.59	0.13	3.84	1408	銅	真書	南西部4次黒色土中	
803	景祐元寶	2.53	0.66	0.11	3.02	1034	銅	篆書	南西部4次黒色土中	
804	嘉祐元寶	2.32	0.62	0.12	3.42	1056	銅	篆書	南西部4次黒色土中	
805	熙寧元寶	2.41	0.60	0.11	4.08	1068	銅	篆書	南西部4次黒色土下	
806	熙寧元寶	2.33	0.64	0.11	3.68	1068	銅	篆書	南西部4次黒色土下	
807	景德元寶	2.45	0.65	0.10	2.84	1004	銅	真書	西部4次黒色土下	
808	嘉祐元寶	2.29	0.64	0.08	2.32	1056	銅	模铸	南西部4次黒色土下	
809	□□□□	2.32	0.59	0.09	2.46	—	銅	判読不能, 模铸	南西部4次黒色土下	
810	景德元寶	2.50	0.64	0.13	(3.42)	1004	銅	真書, 欠け	南西部4次黒色土中	
811	—	2.29	0.62	0.07	2.26	—	銅	模铸	南西部4次黒色土下	

番号	銭名	径	孔径	厚さ	重さ	初鋳年	材質	特徴	出土位置	備考
812	皇宋通寶	2.33	0.62	0.09	2.64	1038	銅	真書	南西部4次黒色土下	
813	熙寧元寶	2.38	0.74	0.12	3.64	1068	銅	真書	西部4次黒色土中	
814	祥符元寶	2.41	0.59	0.12	3.72	1008	銅	真書	中央部3次黒色土中	
815	嘉紹通寶	2.38	0.76	0.10	2.68	1056	銅	篆書	南西部4次黒色土下	
816	□□□□	2.36	0.64	0.07	(2.62)	—	銅	判読不能, 模鋳	南西部4次黒色土下	
817	開元通寶	2.24	0.62	0.06	1.82	621	銅	真書, 模鋳	南西部4次黒色土下	
818	元豐通寶	2.39	0.66	0.09	2.96	1086	銅	模鋳	南西部4次黒色土下	
819	—	2.36	0.68	0.09	2.28	—	銅	判読不能	南西部4次黒色土下	
820	永樂通寶	2.52	0.57	0.11	3.06	1408	銅	真書	南西部4次黒色土下	
821	元豐通寶	2.45	0.66	0.10	(3.36)	1078	銅	篆書, 欠け	南西部4次黒色土下	
822	永樂通寶	2.53	0.57	0.14	3.92	1408	銅	真書	南西部4次黒色土下	
823	嘉祐通寶	2.33	0.69	0.10	2.50	1056	銅	篆書	南西部4次黒色土下	
824	—	2.37	0.69	0.10	3.22	—	銅	判読不能	南西部4次黒色土下	
825	熙寧元寶	2.36	0.67	0.11	3.12	1068	銅	篆書	南西部4次黒色土下	
826	皇宋通寶	2.37	0.66	0.10	3.10	1038	銅	篆書	南西部4次黒色土下	
827	永樂通寶	2.47	0.54	0.11	(2.46)	1408	銅	真書, 欠け	南西部4次黒色土下	
828	天聖元寶	2.33	0.57	0.10	2.72	1023	銅	篆書	南西部4次黒色土下	
829	嘉祐通寶	2.34	0.70	0.08	2.52	1056	銅	真書	南西部4次黒色土下	
830	聖宋元寶	2.35	0.65	0.11	2.60	1101	銅	行書	南西部4次黒色土下	
831	永樂通寶	2.41	0.54	0.12	3.38	1408	銅	真書	南西部4次黒色土下	
832	天聖元寶	2.46	0.64	0.10	3.18	1023	銅	篆書	南西部4次黒色土下	
833	皇宋通寶	2.38	0.66	0.11	2.68	1038	銅	真書	南西部4次黒色土下	
834	嘉祐元寶	2.38	0.67	0.12	3.28	1056	銅	真書	南西部4次黒色土下	
835	永樂通寶	2.48	0.59	0.14	3.50	1408	銅	真書	南西部4次黒色土下	
836	元祐通寶	2.36	0.68	0.10	3.04	1086	銅	篆書, 模鋳	南西部4次黒色土下	
837	開元通寶	2.37	0.69	0.09	2.78	621	銅	真書	南西部4次黒色土下	
838	天聖元寶	2.37	0.72	0.13	2.88	1023	銅	真書	南西部4次黒色土下	
839	永樂通寶	2.49	0.60	0.12	3.68	1408	銅	真書	南西部4次黒色土下	
840	永樂通寶	2.49	0.57	0.15	4.60	1408	銅	真書	西部4次黒色土中	
841	洪武通寶	2.36	0.58	0.11	3.34	1368	銅	真書	西部4次黒色土中	
842	嘉祐通寶	2.35	0.70	0.11	2.86	1056	銅	真書, 模鋳	西部4次黒色土中	
843	洪武通寶	2.36	0.60	0.11	(2.98)	1368	銅	真書	中央部4次黒色土中	
844	開元通寶	2.41	0.68	0.12	3.52	621	銅	真書	西部4次黒色土中	
845	開元通寶	2.41	0.64	0.08	2.54	621	銅	真書	西部4次黒色土中	
846	永樂通寶	2.39	0.54	0.18	(3.60)	1408	銅	真書	西部4次黒色土中	
847	開元通寶	2.41	0.66	0.10	2.58	621	銅	模鋳	西部4次黒色土中	
848	皇宋通寶	2.31	0.64	0.12	3.56	1038	銅	真書	南部4次黒色土下	
849	元符通寶	2.37	0.65	0.11	3.28	1098	銅	行書, 星形孔	中央部4次黒色土中	
850	□□□寶	2.55	0.62	0.12	(3.10)	—	銅	錆がひどく判読不能	西部4次黒色土中	
851	政和通寶	2.41	0.71	0.08	2.90	1111	銅	篆書	西部4次黒色土下	
852	開元通寶	2.40	0.69	0.14	3.22	621	銅	真書	中央部4次黒色土下	
853	皇宋通寶	2.38	0.65	0.10	3.32	1038	銅	模鋳	南西部4次黒色土下	
854	天禧通寶	2.43	0.68	0.11	3.22	1017	銅	真書	南西部4次黒色土下	
855	皇宋通寶	2.43	0.84	0.10	(2.98)	1038	銅	真書	南西部4次黒色土下	
856	元豐通寶	2.40	0.73	0.11	2.88	1078	銅	行書	南西部4次黒色土下	
857	皇宋通寶	2.38	0.71	0.11	3.56	1038	銅	篆書, 模鋳	炉4内	
858	元祐通寶	2.40	0.69	0.11	3.00	1086	銅	篆書	炉4内	
859	政和通寶	2.38	0.69	0.07	2.74	1111	銅	分楷	炉4内	
860	元祐通寶	2.41	0.80	0.09	2.78	1086	銅	行書	炉4内	
861	永樂通寶	2.53	0.49	0.14	4.76	1408	銅	真書	炉4内	

第18号建物跡 4区S I-5 (第231~235区)

位置 調査区北部D13区5区を中心に位置している。

確認状況 表砂を7m除去し標高5.2mから、東部が調査区域外に延びる黒色土面を確認した。上面はやや凸凹があり、複数の炉と土坑が確認された。下層からは土壙墓1基が確認されている。

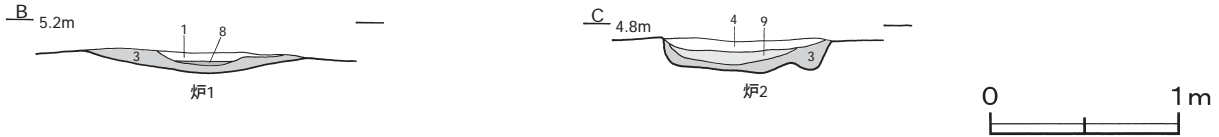


第231図 第18号建物跡実測図

規模と施設 東部が調査区域外に延びているため、黒色土の範囲は南北15m、東西6.5m だけが確認できた。
 炉2基、粘土貼土坑1基、土坑5基が構築され、貝集積地1か所が確認された。

床 やや凸凹があるが、全体的には平坦である。厚さ2～8 cmの黒色土を貼り付けて構築されている。土層断面図中、第3層は黒色土A層である。

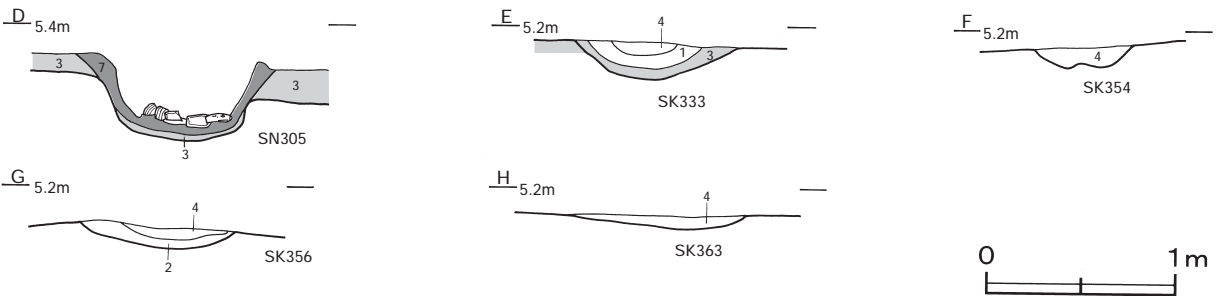
炉（第232図） 2基とも中央部に位置している。第1号炉は焼砂、第2号炉は灰が底面から検出されている。土層断面図中、第3層は炉を構築した黒色土Aである。第1号炉は厚さ3～7 cm、第2号炉は平均して厚さ3～13cmの黒色土を貼り付けて構築されている。



第232図 第18号建物跡炉土層図

ピット 2か所。深さ55～64cmで、性格は不明である。

土坑（第233図） 第333号土坑は、厚さ3～9 cmの黒色土を貼り付けて構築されている。第305号粘土貼土坑は厚さ3～8 cmの粘土と厚さ2～4 cmの黒色土を貼り付けて構築されている。底面から礫や貝が出土している。以下、出土している貝種を表で記載する。



第233図 第18号建物跡土坑土層図

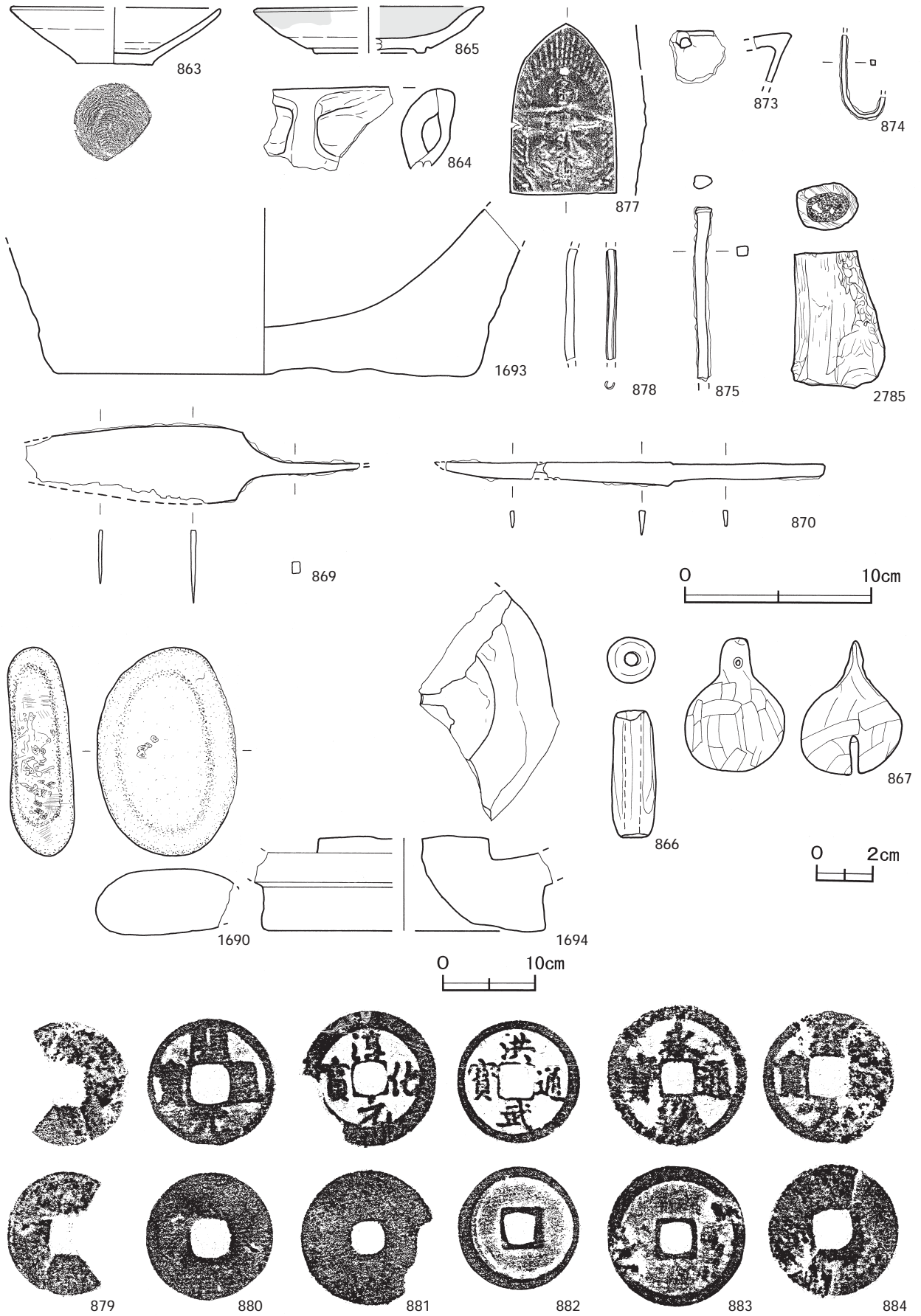
第305号粘土貼土坑出土貝種一覧表

No.	貝種	重さ	比率	殻頂数	備考	No.	貝種	重さ	比率	殻頂数	備考
1	タニシ	35.0	0.35	5		6	ウチムラサキガイ	270.0	2.71	5	
2	アカニシ	170.0	1.70	5		7	ウバガイ	5,280.0	52.95	L=75 R=119	
3	ベンケイガイ	150.0	1.50	8		8	イタボガキ属細片	2,040.0	20.46		
4	コタマガイ	90.0	0.90	7		9	ウバガイ細片	1,266.0	12.70		
5	ハマグリ	640.0	6.42	L=14 R=10		10	その他	30.0	0.30	3	アカガイ等の細片含む

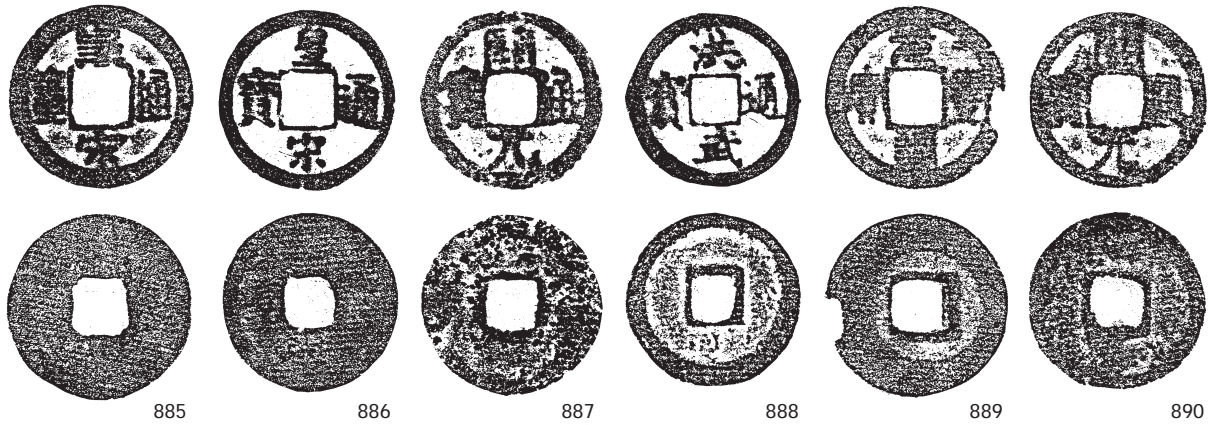
貝集積地 南西部に位置し、長径1.2m、短径1.0mの不定形を呈している。

第34号貝集積地出土貝種一覧表

No.	貝種	重さ	比率	殻頂数	備考	No.	貝種	重さ	比率	殻頂数	備考
1	サルボウガイ	2.0	0.29	1		4	コタマガイ	25.0	3.62	8	
2	ベンケイガイ	2.0	0.29	1		5	ウバガイ	595.0	86.11	3	細片含む
3	イタボガキ属細片	27.0	3.91			6	細片	40.0	5.79		



第234図 第18号建物跡出土遺物実測図(1) [古銭は原寸大]



第235図 第18号建物跡出土遺物実測図(2) [古銭は原寸大]

遺物出土状況 土師質土器片102点(皿76, 内耳鍋26), 陶器片6点(皿4, 甕2), 土製品5点(土鈴1, 土錘1, 埴輪片3), 石器2点(石鍋, 茶臼), 石製品1点(石棒), 金属製品19点(包丁カ1, 小刀1, 鉄鍋1, 釣針1, 釘1, 銅板如来坐像1, 古銭12, 不明1), 鹿角未製品1点が出土している。また, 第338号土坑からは磨石1点が出土している。863は西部の黒色土の砂層, 864は南部の黒色土下, 865は瀬戸・美濃産で覆土中から出土している。867は完形で中央部の黒色土B層, 1693・1694は北部の砂層から出土している。877は銅製で, やや表面が摩滅している。古銭は中央部の黒色土中を中心に12枚出土している。2785は鹿角の未製品で, 南部の黒色土面を除去した砂層から出土している。

第18号建物跡出土遺物観察表(第234・235図)

番号	器形	器質	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
863	皿	土師質土器	[11.4]	3.0	4.2	雲母	にぶい橙	普通	底部回転糸切り	西部砂層	30%
864	内耳鍋	土師質土器	—	(4.4)	—	赤色粒子	にぶい橙	普通	内外面ナデ, 外面煤付着	南部黒色土下	5%

番号	器形	器質	口径	器高	底径	胎土・色調	絵付・釉薬	文様・特徴	産地・年代	出土位置	備考
865	縁釉小皿	陶器	[12.4]	2.5	[6.5]	灰白・オリーブ	灰釉	内外面口縁部のみ釉	瀬戸・美濃, 15C後半	覆土中	20% 古瀬戸後期IV

番号	器種	長さ	幅	厚さ(底径)	重量	材質(胎土)	特徴	出土位置	備考
866	管状土錘	4.5	1.5	0.6	10.9	長石	孔径0.6cm	覆土中	PL46
867	土鈴	4.7	3.5	3.5	19.7	長石	外面ヘラナデ, 孔0.3cm	中央部黒色土下	PL46
869	包丁カ	(18.0)	4.3	0.4	(50.5)	鉄	刀身部欠損	炉2内	PL49
870	小刀	(12.2)	1.4	0.3	(20.1)	鉄	刀身部欠損	西部黒色土下	PL49
873	鉄鍋	(2.8)	—	—	(25.1)	鉄	口縁部のみ	西部黒色土中	
874	釣針	(4.5)	0.2	0.3	(2.6)	鉄	断面方形	中央部黒色土下	
875	釘	(9.1)	1.0	0.6	(19.3)	鉄	頭部潰れ, 断面方形	南部黒色土下	
877	銅板如来坐像	9.1	5.7	0.05	10.9	銅	坐像裏面から打ち出し, 蓮座, 光背, 表面から細粒凹起	西部黒色土中	PL49
878	不明銅製品	6.1	0.5	0.4	(4.3)	銅	断面U字形	南部黒色土下	PL50
1690	磨石	22.5	(15.1)	7.1	(3,240)	砂岩	側面敲痕	SK338内	
1693	石鍋	(9.0)	(9.0)	22.4	(1,110)	安山岩	内面磨滅	北西部砂層	
1694	茶臼	10.2	[30.4]	—	2,540	砂岩	下臼部, 受皿部欠損	北西部砂層	
2785	骨角未製品	(7.4)	5.0	2.5	(42.3)	鹿角	表面工具痕有り	南部黒色土下	PL53

番号	銭名	径	孔径	厚さ	重さ	初铸年	材質	特徴	出土位置	備考
879	—	2.22	0.67	0.11	(1.62)	—	銅	欠け, 模铸	南部黒色土下	
880	開元通寶	2.29	0.71	0.09	2.32	621	銅	真書	中央部黒色土下	

番号	銭名	径	孔径	厚さ	重さ	初铸年	材質	特徴	出土位置	備考
881	淳化元寶	2.44	0.61	0.10	(3.02)	990	銅	行書, 欠け	北部黒色土下	
882	洪武通寶	2.21	0.61	0.17	4.12	1368	銅	真書	中央部黒色土下	
883	永樂通寶	2.53	0.51	0.14	(4.26)	1408	銅	真書	中央部黒色土下	
884	開元通寶	2.36	0.68	0.09	(2.30)	621	銅	真書, 錆がひどい	中央部黒色土下	
885	皇宋通寶	2.49	0.72	0.10	3.48	1038	銅	真書, 星形孔	中央部黒色土下	
886	皇宋通寶	2.37	0.66	0.13	3.62	1038	銅	真書	西部黒色土下	
887	開元通寶	2.42	0.67	0.11	3.12	621	銅	真書	中央部黒色土下	
888	洪武通寶	2.32	0.64	0.14	3.48	1368	銅	真書	中央部黒色土下	
889	元豊通寶	2.45	0.68	0.13	(3.90)	1078	銅	篆書, 欠け	西部黒色土下	
890	開元通寶	2.35	0.69	0.08	2.46	621	銅	真書	西部黒色土下	

所見 平らな黒色土面や炉が検出されていることから、建物跡と判断した。日常雑器類や金属の調理用具、茶臼などの石器が出土していることから、生活を営んだ建物跡と考えることができる。時期は、出土遺物から15世紀後半と考えられる。

第19号建物跡 4区S I - 6 (第236~247図)

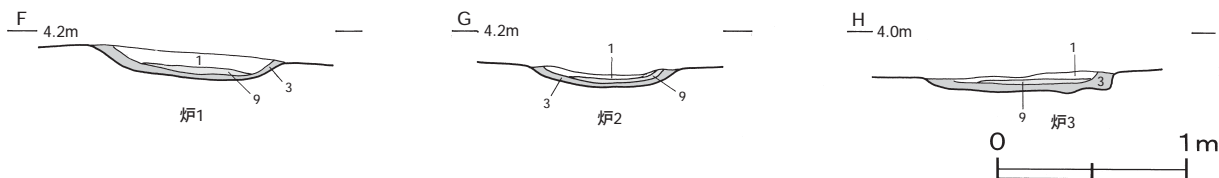
位置 調査区中央部 D13b3区を中心に位置している。

確認状況 表砂を7 m 除去した標高約4.3m から、第1次面である黒色土面を確認した。上面はほぼ平坦で、複数の土坑や柱穴5か所が確認された。さらに黒色土面を20cm 除去すると第2次面が確認され、炉や土坑、ピットが検出された。また、東部には焼砂が15m にわたり帯状に検出されている。下層には第90・91号土壙墓が確認されている。

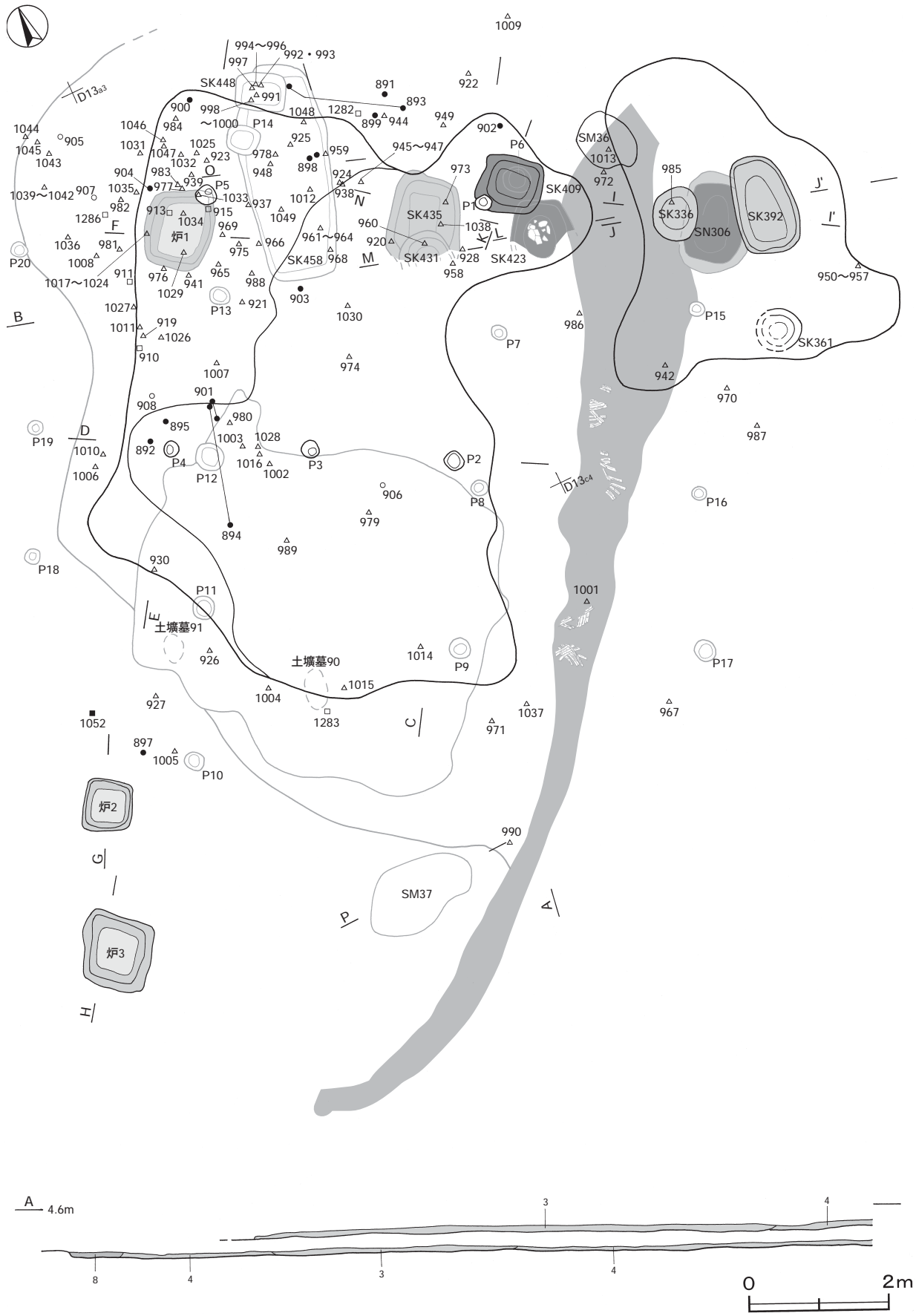
規模と施設 第1次面の黒色土の範囲は南北8 m, 東西11mのL字状である。第2次面の黒色土の範囲は南北11m, 東西6.3mの不定形である。本建物跡内には炉3基, 粘土貼土坑3基, 土坑7基が構築され、貝集積地2か所が確認された。

床 ほぼ平坦で、第1・2次面とも厚さ約6~10cmの黒色土を貼り付けて構築されている。第2次面の南部には、黒色土が硬化している部分が認められた。土層断面図中、第3層は硬化した黒色土A層, 第4層は建物構築の際に整地した黒色土B層である。

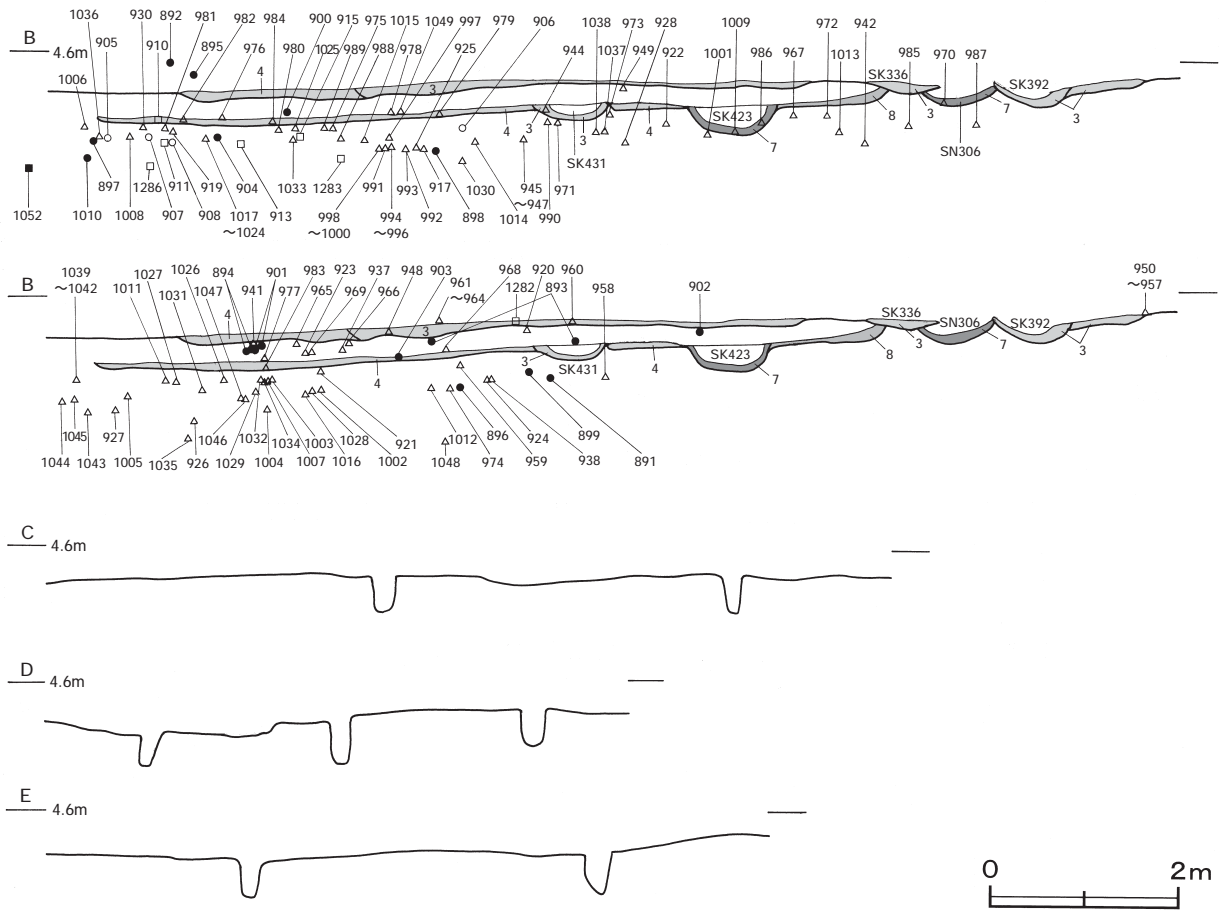
炉 (第236図) 3基とも平面形は方形である。第1号炉は北西部, 第2・3号炉は南西部の黒色土の範囲外から検出された。検出状況から第1号炉は第2次面, 第2・3号炉は第1次面に伴うものと考えられる。第1号炉は厚さ3~6 cm, 第2・3号炉は厚さ4~7 cmの黒色土を貼り付けて構築されている。



第236図 第19号建物跡炉土層図

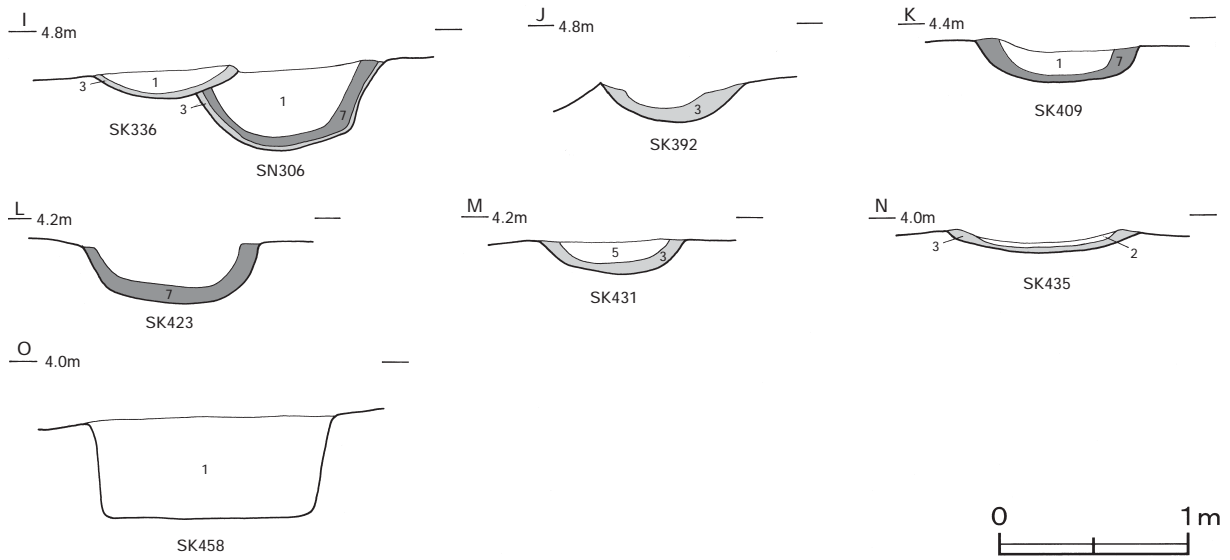


第237图 第19号建物跡実測図(1)



第238図 第19号建物跡実測図(2)

ピット 20か所。P1～P5は深さ34～46cmで、1次面で検出されており、上屋を支えた柱穴と考えられる。P8～P14は深さ40cm程で、2次面のう上屋を支えた柱穴と考えられる。P15～P20は深さ45cm程で、底の柱穴と考えられる。



第239図 第19号建物跡土坑土層図

土坑（第239図） 北部を中心に構築されている。第423号粘土貼土坑の底面から、礫数点が出土している。また、第336号土坑は第306号粘土貼土坑を掘り込んで構築されている。第458号土坑は第2次面の黒色土を除去した後、検出された。



貝集積地（第240図） 第36号貝集積地は北東部に位置し、長径0.9m、短径0.7mの不整楕円形を呈している。第37号貝集積地は南東部に位置し、長径1.6m、短径1mの不整楕円形で、貝層の厚さは最大で8cmである。

第240図 第19号建物跡貝集積地土層図

第36号貝集積地出土貝種一覧表

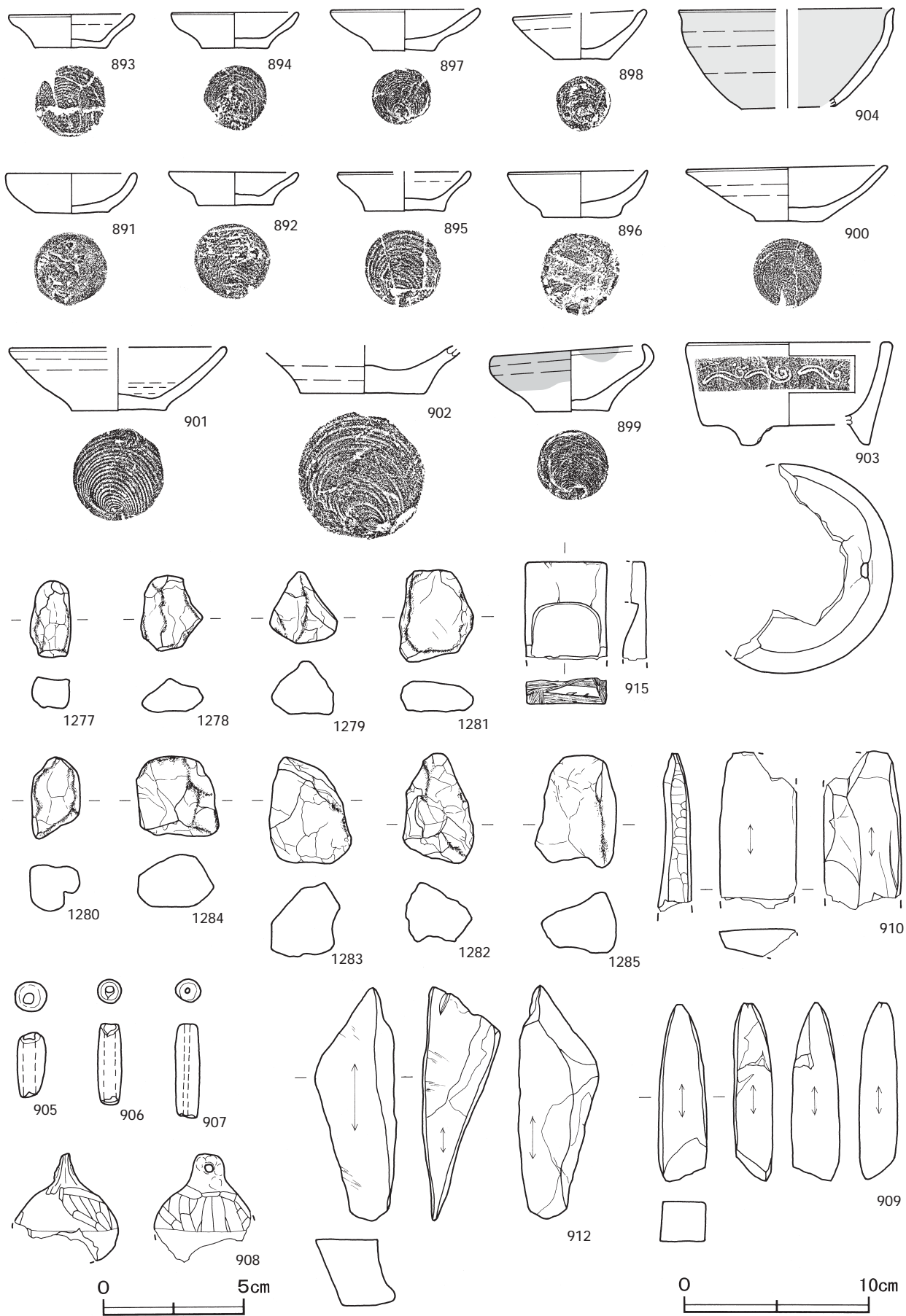
No.	貝種	重さ	比率	殻頂数	備考
1	アカニシ	5.0	0.51	1	
2	コタマガイ	2.0	0.20	1	
3	ウバガイ	240.0	24.39	9	
4	ベンケイガイ	2.0	0.20	1	
5	イタボガキ属細片	60.0	6.10		
6	ウバガイ細片	675.0	68.60		

第37号貝集積地出土貝種一覧表

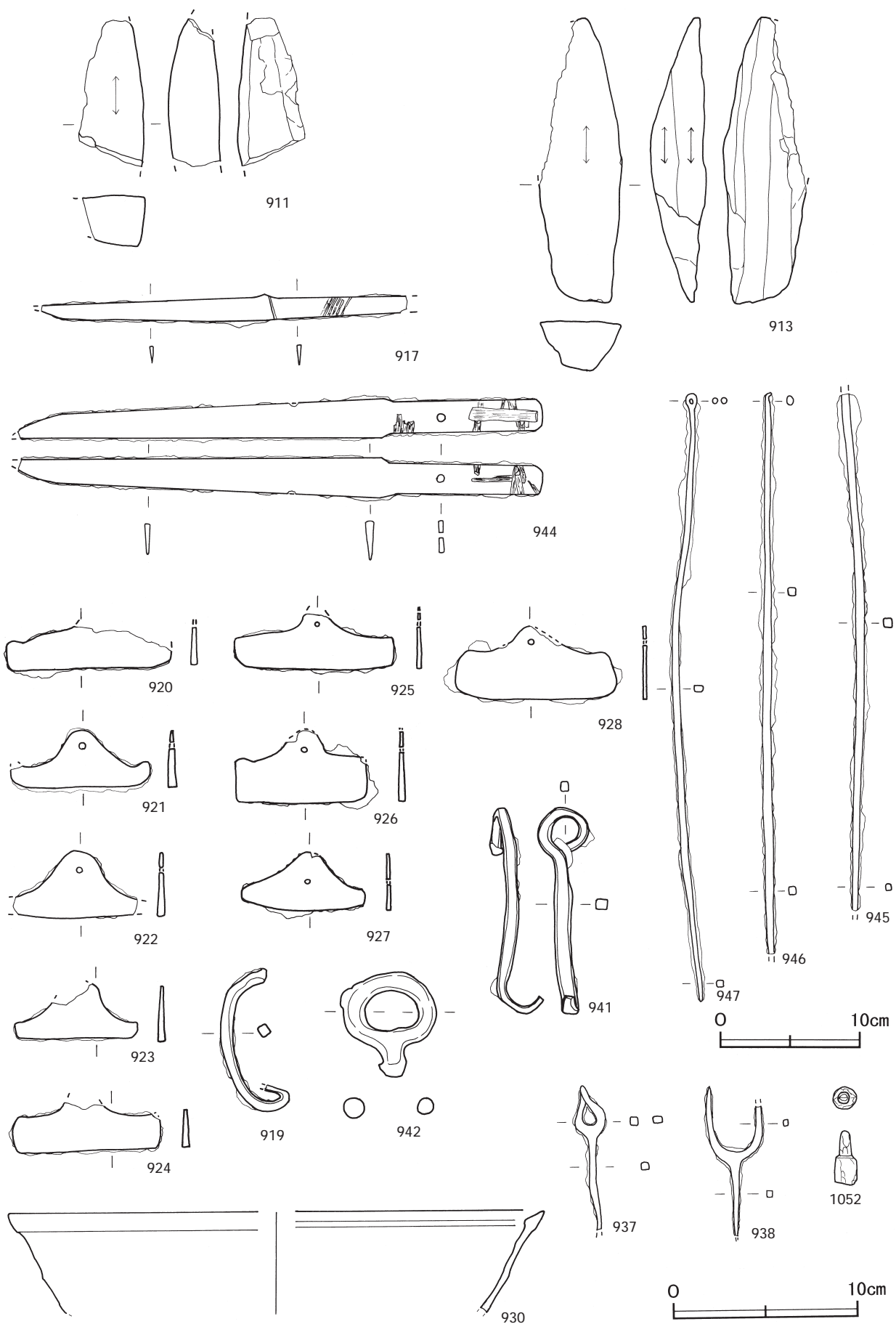
No.	貝種	重さ	比率	殻頂数	備考
1	サルボウガイ	30.0	0.42	3	
2	ベンケイガイ	35.0	0.49	3	
3	シジミ属	5.0	0.07	4	淡水または汽水
4	コタマガイ	85.0	1.18	13	
5	ウバガイ	125.0	1.73	4	
6	イタボガキ属細片	90.0	1.25		
7	ウバガイ細片	6,840.0	94.87		

遺物出土状況 土師質土器片870点（皿658、香炉8、内耳鍋199、播鉢5）、陶器片18点（皿13、天目茶碗2、甕3）、土製品4点（土鈴1、土錘3）、石器16点（砥石5、石鍋1、火打石10）、石製品1点（硯）、金属製品130点（釣針カ5、火打金9、耳金1、鉄鍋2、釘2、簞3、小刀4、古銭104）が北部の第1次面や第2次面の黒色土を除去した層から出土している。891～902は土師質土器の皿類で、北部の第1・2次面を除去した層から出土しており、底部には回転糸切り痕を残している。1277～1285は火打石で覆土中から出土しているが、摩擦痕が顕著である。920～928の火打金、905～907・937～947の漁労具などが中央部の第2次面の黒色土を除去した層から出土している。古銭の多くは、北部の炉や土坑の位置する黒色土面を除去した層から散在した状態で出土している。確認できた銭種は「永樂通寶」が8枚、「開元通寶」が6枚、「洪武通寶」が4枚で、「朝鮮通寶」も1枚出土している。1052は南西部の砂層から出土している。第36号貝集積地から土師質土器片6点（皿）が出土している。

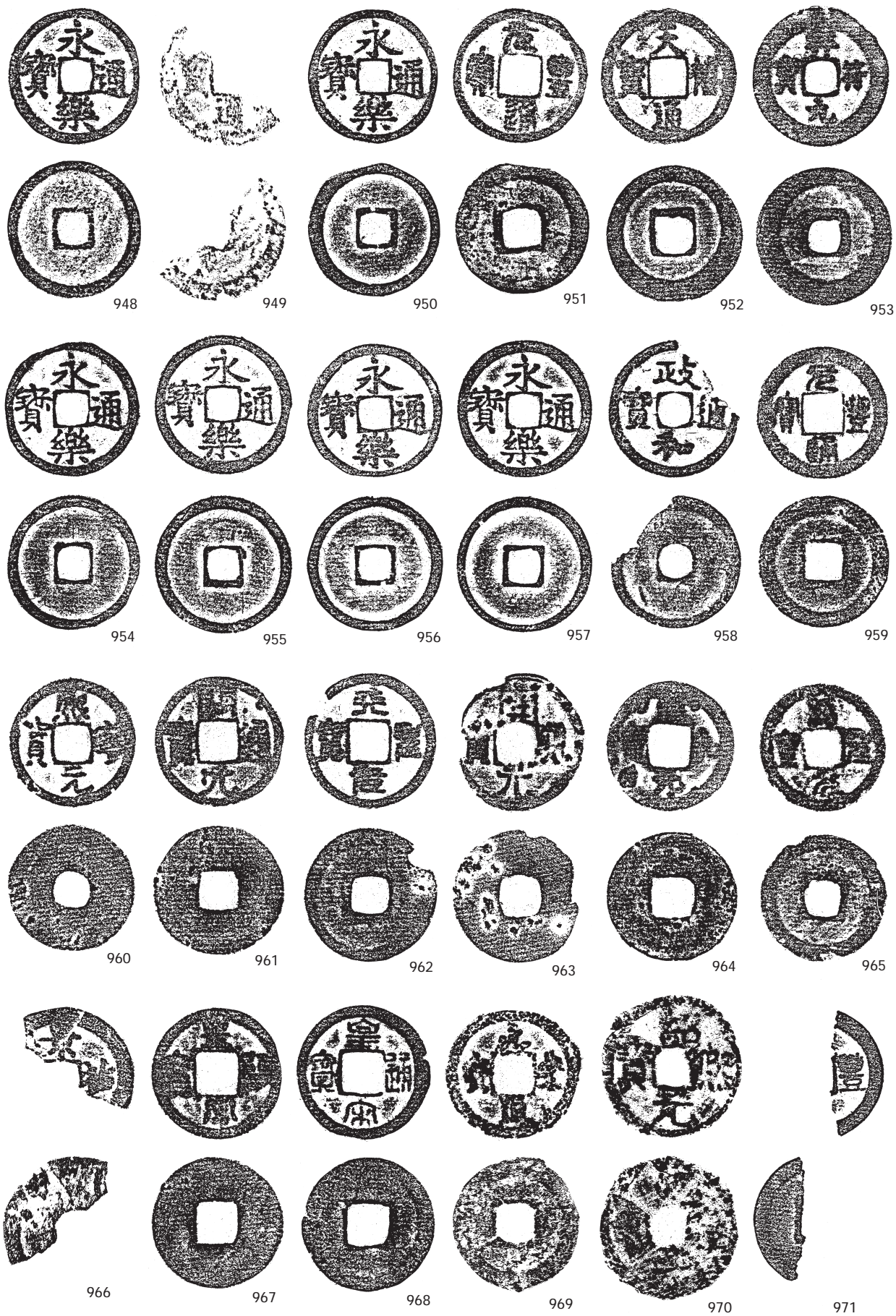
所見 土層や床面の検出状況から、二時期にわたって生活が営まれた建物と考えられる。特に第2次面は柱穴列の配置や多種にわたる出土遺物から、大型で当遺跡内で中心的な建物であったと想定できる。焼砂が帯状に検出された建物としては、北に隣接する第14号建物跡の検出状況と類似しており、両跡は同一の区画内に存在していた可能性が高い。



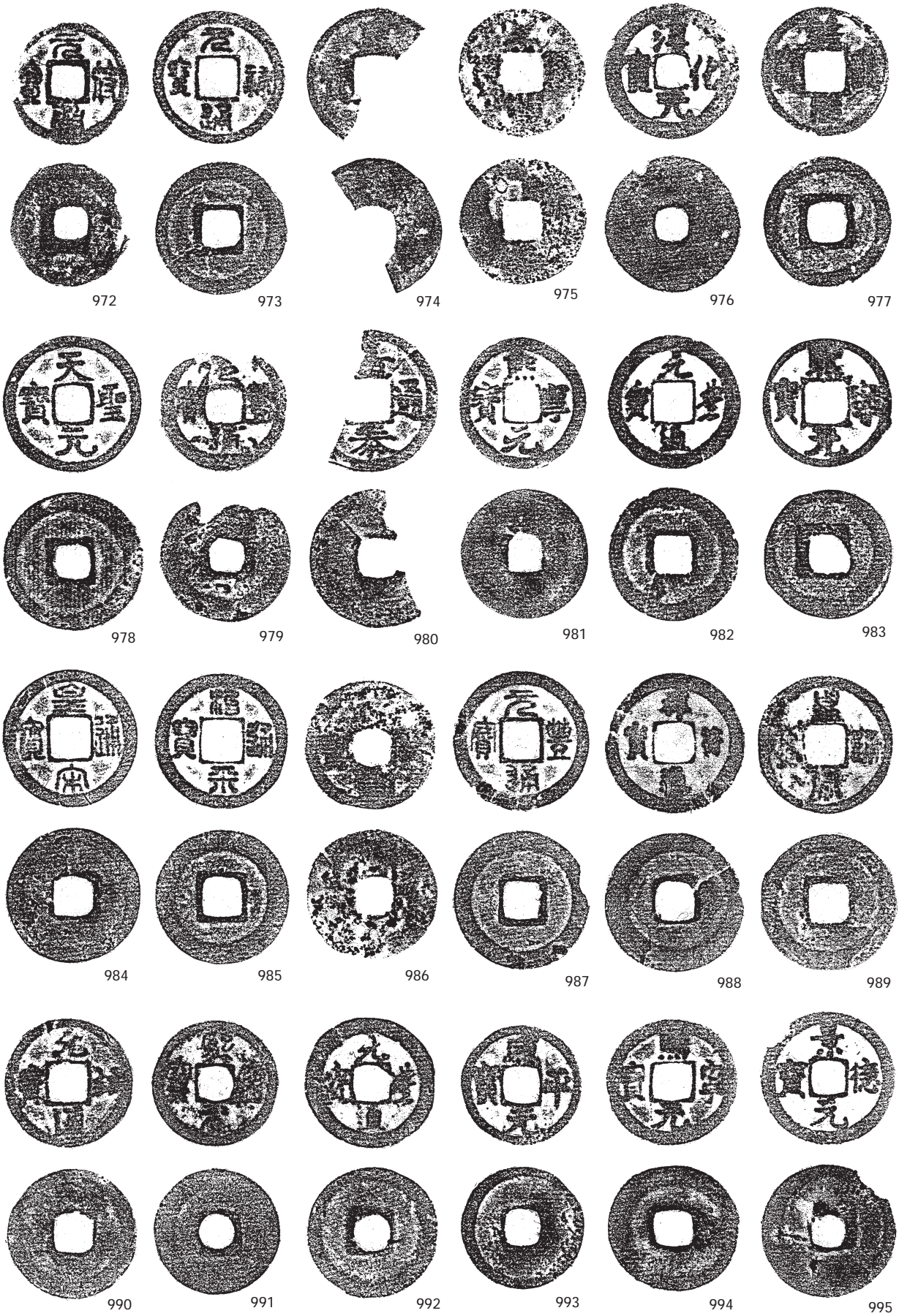
第241图 第19号建物跡出土遺物実測図(1)



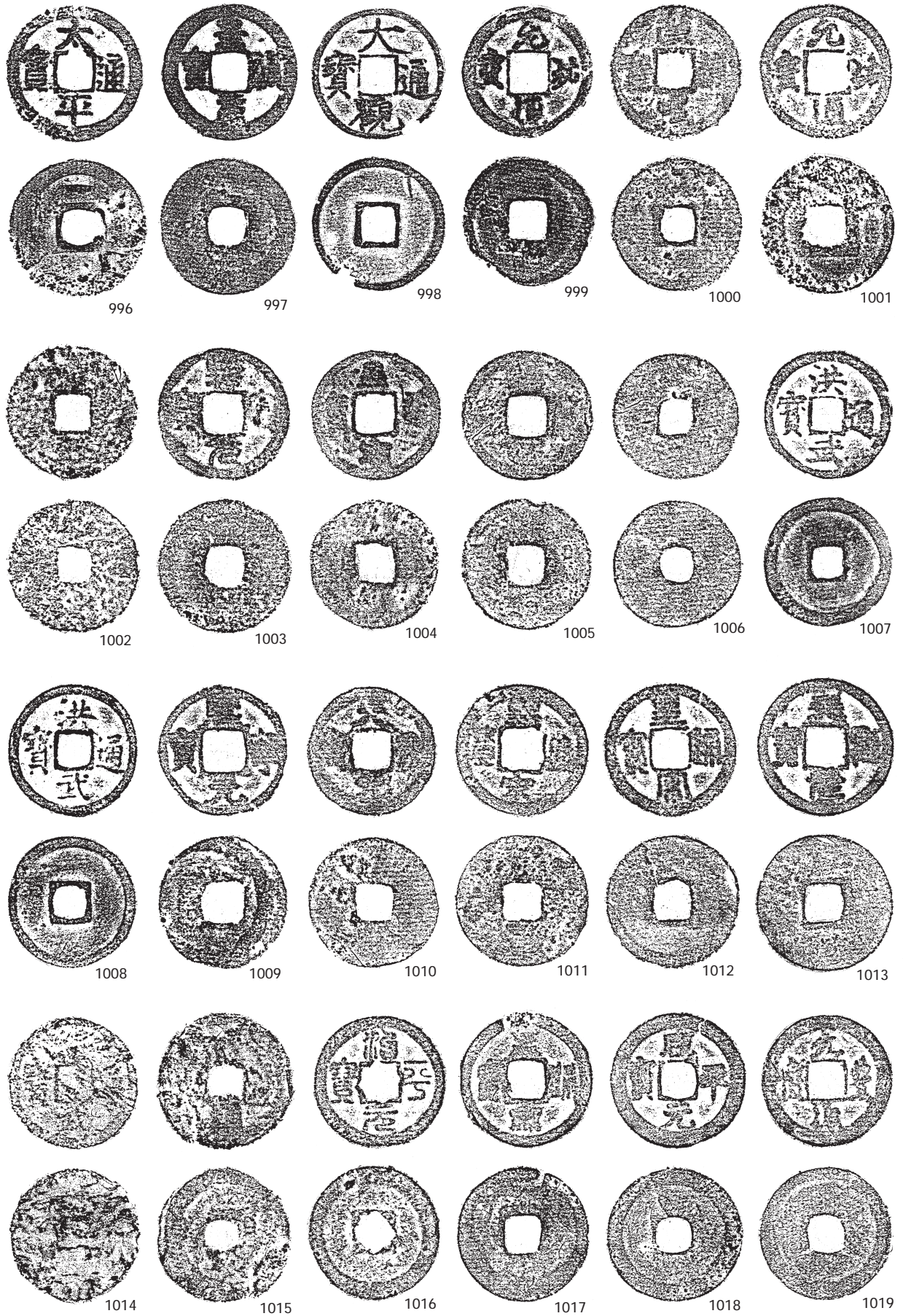
第242图 第19号建物跡出土遺物実測図(2)



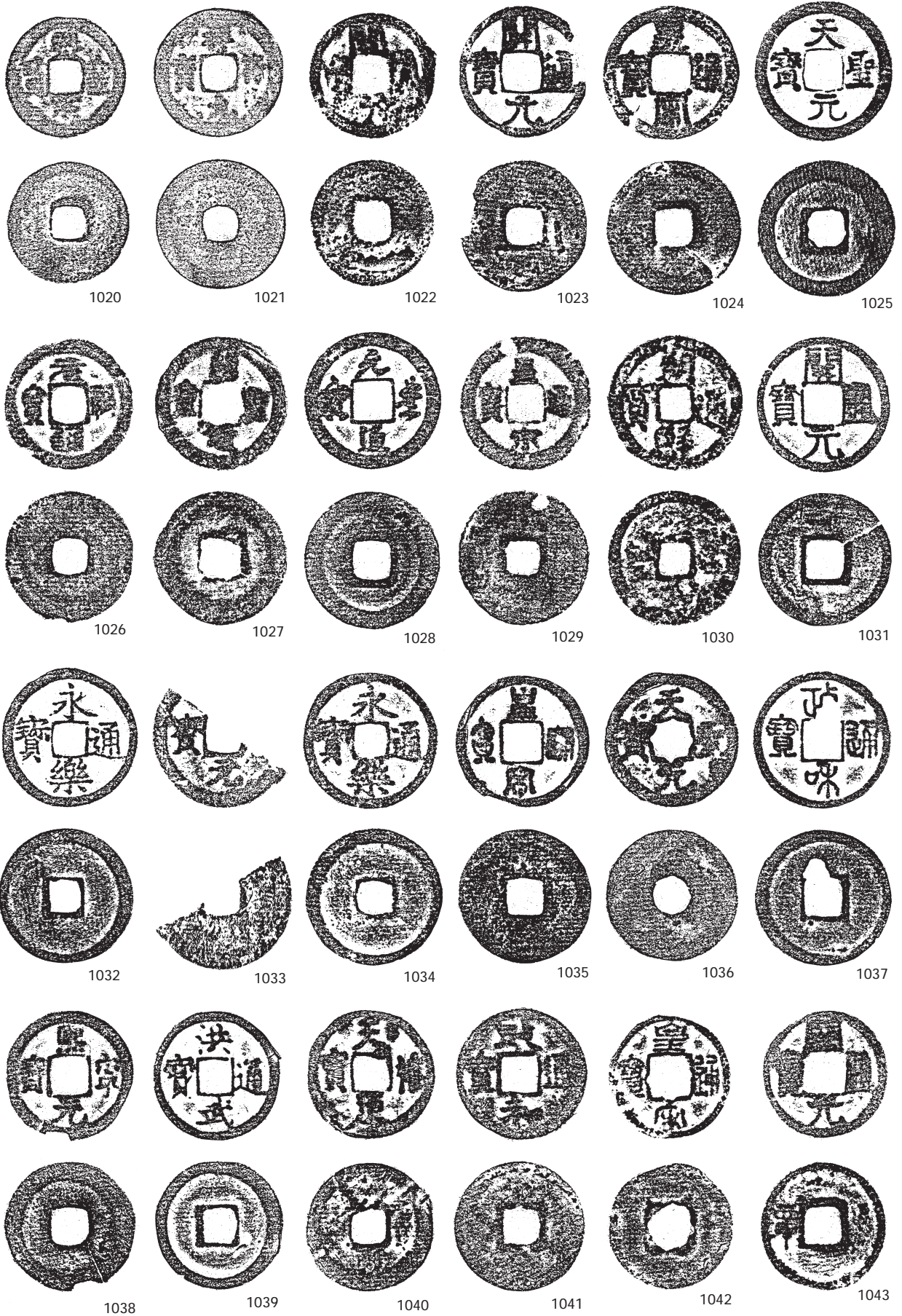
第243図 第19号建物跡出土遺物実測図(3) [古銭は原寸大]



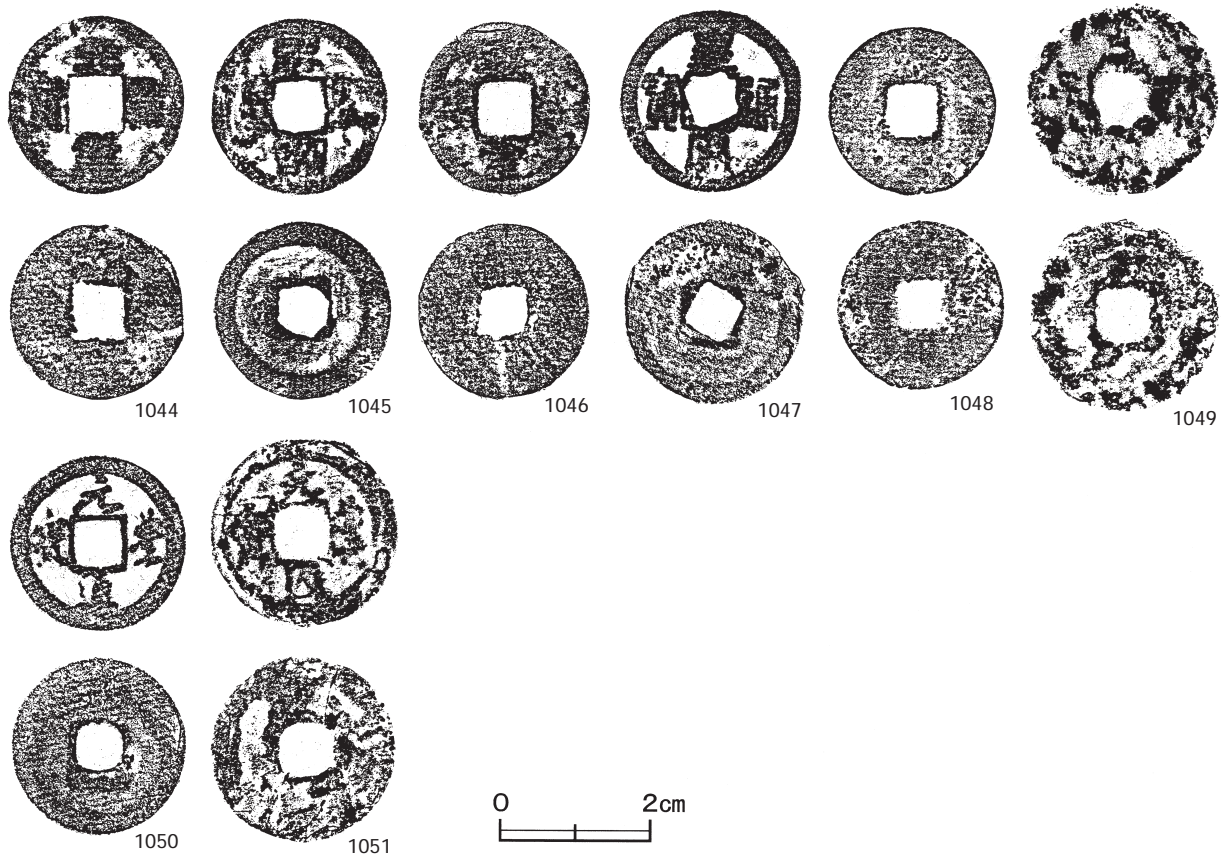
第244図 第19号建物跡出土遺物実測図（4）〔古銭は原寸大〕



第245図 第19号建物跡出土遺物実測図(5) [古銭は原寸大]



第246図 第19号建物跡出土遺物実測図(6) [古銭は原寸大]



第247図 第19号建物跡出土遺物実測図(7)

第19号建物跡出土遺物観察表(第241~247図)

番号	器形	器質	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
891	小皿	土師質土器	6.8	2.2	4.0	雲母・赤色粒子	にぶい橙	普通	底部回転糸切り	北部砂層	100%
892	小皿	土師質土器	6.9	1.8	4.0	雲母・赤色粒子	にぶい橙	普通	底部回転糸切り	中央部1次覆土中	95%
893	小皿	土師質土器	6.8	1.9	4.0	雲母	にぶい橙	普通	底部回転糸切り	北部砂層	90%
894	小皿	土師質土器	6.8	2.0	3.6	雲母・赤色粒子	橙	普通	底部回転糸切り	中央部2次覆土中	95%
895	小皿	土師質土器	[7.2]	2.1	4.2	雲母	にぶい橙	普通	底部回転糸切り	中央部1次覆土中	65%
896	小皿	土師質土器	7.5	2.6	4.2	赤色粒子	明黄褐	普通	底部回転糸切り	中央部2次黒色土下	90%
897	小皿	土師質土器	8.0	2.3	3.3	赤色粒子	にぶい橙	普通	底部回転糸切り	南部砂層	100%
898	小皿	土師質土器	[7.5]	2.7	2.9	長石・赤色粒子	にぶい橙	普通	底部回転糸切り	中央部2次黒色土下	60%
899	皿	土師質土器	8.1	3.6	4.0	長石	にぶい黄橙	普通	底部回転糸切り, 内外面煤付着	北部砂層	98%
900	皿	土師質土器	11.0	3.1	3.8	長石・雲母	橙	普通	底部回転糸切り	中央部2次覆土中	90%
901	皿	土師質土器	[11.4]	3.4	5.0	雲母	橙	普通	底部回転糸切り	中央部2次覆土中	40%
902	皿	土師質土器	—	(2.6)	6.8	長石・雲母・赤色粒子	にぶい橙	普通	底部回転糸切り	中央部2次覆土中	20%
903	香炉	土師質土器	11.0	5.6	9.4	長石	明赤褐	普通	外面蔵手のスタンプ文	中央部2次黒色土面	40%

番号	器形	器質	口径	器高	底径	胎土・色調	絵付・釉薬	文様・特徴	産地・年代	出土位置	備考
904	天目茶碗	陶器	[11.6]	5.4	[4.9]	明褐灰・暗赤褐	鉄釉	内外面施釉	瀬戸・美濃	北部2次黒色土下	

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質(胎土)	特徴	出土位置	備考
905	管状土錘	2.3	1.1	1.1	2.6	長石・石英	孔径0.4cm	中央部2次黒色土下	
906	管状土錘	2.8	0.9	0.8	(1.8)	長石・石英	孔径0.4cm	南部2次黒色土下	
907	管状土錘	3.4	0.8	0.8	2.5	長石・石英	孔径0.2cm	西部2次黒色土下	
908	土鈴	(3.9)	3.5	3.7	(7.6)	長石・石英	ケズリ整形	中央部2次黒色土下	
909	砥石	9.6	2.7	2.2	81.7	凝灰岩	砥面4面	覆土中	
910	砥石	(8.4)	4.2	1.8	(73.2)	凝灰岩	砥面2面	中央部2次黒色土中	
911	砥石	(8.0)	(3.6)	2.8	(97.2)	凝灰岩	砥面1面	中央部2次黒色土下	
912	砥石	12.7	4.4	3.7	158.8	砂岩	砥面3面	覆土中	
913	砥石	16.7	4.5	3.0	(179.8)	凝灰岩	砥面3面	中央部2次黒色土中	

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
1277	火打石	4.2	2.2	1.7	24.2	瑪瑙	摩滅の集中箇所有り	覆土中	
1278	火打石	4.1	3.3	1.8	28.8	瑪瑙	摩滅の集中箇所有り	覆土中	
1279	火打石	3.9	3.7	2.9	35.4	瑪瑙	摩滅の集中箇所有り	覆土中	
1280	火打石	4.5	2.7	2.5	36.5	瑪瑙	摩滅の集中箇所有り	覆土中	
1281	火打石	5.0	4.0	1.7	46.7	石英	摩滅の集中箇所有り	覆土中	
1282	火打石	6.0	3.9	3.2	74.6	瑪瑙	摩滅の集中箇所有り	北部砂層	
1283	火打石	5.8	4.5	4.0	112.8	石英	一部の稜が摩滅	南部2次黒色土下	
1284	火打石	4.4	4.5	2.8	77.8	石英	一部の稜が摩滅	覆土中	
1285	火打石	6.1	4.4	3.3	96.1	石英	一部の稜が摩滅	覆土中	
915	硯	(5.3)	4.3	1.4	(49.8)	泥岩	陸部欠損	炉1内	
917	小刀	(20.0)	1.5	0.2	(23.3)	鉄	刀身部欠損, 茎部に木質付着	2次黒色土下	
919	耳金	7.7	0.6	0.6	(18.6)	鉄	断面方形, 先端部屈曲	中央部2次黒色土下	
920	火打金	9.0	(2.3)	0.4	(27.6)	鉄	先端部欠損	中央部2次覆土中	
921	火打金	7.6	3.1	0.6	(26.1)	鉄	孔有り	中央部2次黒色土下	
922	火打金	(6.7)	3.7	0.5	(23.2)	鉄	孔有り, 両端部欠損	北部砂層	
923	火打金	(6.7)	3.0	0.4	(18.6)	鉄	上部欠損	中央部2次覆土中	
924	火打金	8.4	(2.6)	0.4	(37.0)	鉄	上部欠損	中央部2次黒色土下	
925	火打金	8.9	(3.4)	0.3	(34.2)	鉄	上部一部欠損, 孔有り	中央部2次黒色土下	
926	火打金	(7.5)	(3.9)	0.3	(46.2)	鉄	片側欠損, 孔有り	南部2次黒色土下	
927	火打金	6.7	3.6	0.2	20.0	鉄	孔有り, 山型	南部砂層	
928	火打金	8.8	4.0	0.2	58.0	鉄	孔有り	中央部2次黒色土下	
930	鉄鍋	[29.2]	(5.5)	—	(55.4)	鉄	口縁部のみ	2次黒色土下	
937	箆	(7.8)	1.8	0.4	(9.2)	鉄	先端部屈曲, 断面方形	中央部2次覆土中	
938	箆	(8.2)	3.0	0.4	(9.6)	鉄	先端部欠損, 断面方形	中央部2次黒色土下	
941	漁労具	11.1	2.7	0.6	32.6	鉄	断面方形, 先端部屈曲	中央部2次覆土中	
942	漁労具	(5.6)	5.3	1.0	(45.1)	鉄	環状, 断面円形	東部2次黒色土中	
944	短刀	(28.5)	2.5	0.5	(78.3)	鉄	刀身部欠損, 茎部に木質付着, 孔有り	北部砂層	
945	箆	(37.2)	0.6	0.7	(86.2)	鉄	断面方形	中央部2次黒色土下	
946	箆	(40.1)	0.6	0.6	(94.5)	鉄	断面方形, 先端部円形	中央部2次黒色土下	
947	箆	43.6	0.6	0.7	75.1	鉄	断面方形, 先端部孔確認	中央部2次黒色土下	
1052	骨角製品	2.9	1.2	1.2	3.0	鹿角	断面円形	南西部砂層	

番号	銭名	径	孔径	厚さ	重さ	初鑄年	材質	特徴	出土位置	備考
948	永樂通寶	2.49	0.52	0.09	3.54	1408	銅	真書	中央部1次黒色土中	
949	□□通寶	2.58	—	0.11	(1.24)	—	銅	判読不能, 欠け	北部砂層	
950	永樂通寶	2.47	0.60	0.12	4.00	1408	銅	真書	東部1次黒色土面	
951	元豐通寶	2.48	0.81	0.11	3.38	1078	銅	篆書, 磨り	東部1次黒色土面	
952	天禧通寶	2.55	0.70	0.11	3.70	1017	銅	真書, 磨り	東部1次黒色土面	
953	祥符元寶	2.53	0.61	0.10	3.50	1008	銅	真書, 磨り	東部1次黒色土面	
954	永樂通寶	2.48	0.62	0.12	3.46	1408	銅	真書, 磨り	東部1次黒色土面	
955	永樂通寶	2.52	0.64	0.11	4.04	1408	銅	真書	東部1次黒色土面	
956	永樂通寶	2.50	0.65	0.13	4.30	1408	銅	真書	東部1次黒色土面	
957	永樂通寶	2.48	0.60	0.12	3.22	1408	銅	真書	東部1次黒色土面	
958	政和通寶	2.43	0.58	0.13	(2.62)	1111	銅	分楷, 円孔, 欠け	中央部	
959	元豐通寶	2.43	0.75	0.11	3.88	1078	銅	篆書	中央部2次黒色土下	
960	熙寧元寶	2.34	0.62	0.10	2.88	1068	銅	真書	中央部2次覆土中	
961	開元通寶	2.40	0.71	0.07	2.52	621	銅	真書	中央部1次黒色土面	
962	天聖元寶	2.45	0.71	0.10	(2.92)	1023	銅	篆書, 欠け	中央部1次黒色土面	
963	開元通寶	2.45	0.71	0.13	(2.54)	621	銅	真書, 欠け	中央部1次黒色土面	
964	至和元寶	2.39	0.76	0.11	3.60	1054	銅	真書	中央部1次黒色土面	
965	紹聖元寶	2.31	0.64	0.12	(2.66)	1094	銅	篆書	中央部2次覆土中	
966	景祐□□	—	—	0.11	(1.40)	—	銅	真書, 欠け	中央部2次覆土中	
967	皇宋通寶	2.43	0.74	0.08	2.90	1038	銅	篆書	南東部砂層	
968	皇宋通寶	2.45	0.78	0.10	3.24	1038	銅	篆書	中央部2次黒色土面	
969	元豐通寶	2.37	0.76	0.10	(2.50)	1078	銅	行書	中央部2次覆土中	
970	紹熙元寶	(2.60)	0.56	(0.18)	(3.62)	1190	銅	真書	東部砂層	
971	□豐□□	—	—	(0.10)	(1.04)	—	銅	篆書, 欠け	南部2次黒色土下	
972	元豐通寶	2.21	0.62	0.08	(1.92)	1078	銅	篆書, 欠け	東部砂層	

番号	銭名	径	孔径	厚さ	重さ	初铸年	材質	特徴	出土位置	備考
973	元豊通寶	2.45	0.70	0.10	3.02	1078	銅	篆書	中央部2次黒色土下	
974	皇□□寶	2.56	0.71	0.07	(1.38)	—	銅	判読不能, 欠け	中央部2次黒色土下	
975	□□□□	(2.34)	0.74	(0.10)	(3.00)	—	銅	判読不能, 模铸	中央部2次黒色土下	
976	淳化元寶	2.49	0.58	0.10	(2.76)	990	銅	真書, 円孔	炉1内	
977	□□□寶	2.36	0.56	0.10	2.78	—	銅	判読不能, 模铸	中央部2次黒色土面	
978	天聖元寶	2.53	0.67	0.12	3.82	1023	銅	真書	中央部2次黒色土面	
979	元豊通寶	2.40	0.52	0.13	(3.22)	1078	銅	篆書, 欠け	南部2次黒色土中	
980	嘉泰通寶	2.53	0.69	0.12	(2.08)	1201	銅	真書, 欠け	中央部2次黒色土下	
981	熙寧元寶	2.33	0.65	0.08	2.44	1068	銅	篆書	西部2次黒色土下	
982	熙寧元寶	2.37	0.73	0.10	3.08	1068	銅	篆書	西部2次黒色土中	
983	元豊通寶	2.54	0.69	0.13	3.56	1078	銅	行書	中央部2次黒色土中	
984	皇宋通寶	2.47	0.80	0.08	2.68	1038	銅	篆書	中央部2次黒色土中	
985	治平通寶	2.47	0.70	0.13	3.98	1064	銅	篆書	東部2次黒色土下	
986	□□□□	2.37	0.67	0.09	(2.70)	—	銅	判読不能, 模铸	2次黒色土下	
987	元豊通寶	2.50	0.71	0.12	3.56	1078	銅	篆書	東部砂層	
988	祥符通寶	2.51	0.66	0.10	2.74	1008	銅	真書, 割れ	中央部2次黒色土下	
989	皇宋通寶	2.51	0.74	0.11	3.20	1038	銅	篆書	南部2次黒色土下	
990	元祐通寶	2.37	0.71	0.12	3.70	1086	銅	行書	南部2次黒色土下	
991	熙寧元寶	2.31	0.54	0.11	3.24	1068	銅	篆書, 円孔	北部砂層	
992	元豊通寶	2.44	0.65	0.13	3.52	1078	銅	行書	北部砂層	
993	咸平元寶	2.24	0.62	0.11	2.52	998	銅	真書	北部砂層	
994	熙寧元寶	2.42	0.70	0.11	3.06	1068	銅	真書	北部砂層	
995	景德元寶	2.44	0.63	0.10	(2.88)	1004	銅	真書, 欠け	北部砂層	
996	太平通寶	2.52	0.65	0.10	2.92	976	銅	真書	北部砂層	
997	景祐元寶	2.49	0.65	0.08	2.70	1034	銅	篆書	北部砂層	
998	大觀通寶	2.45	0.68	0.13	(2.84)	1107	銅	真書, 欠け	北部砂層	
999	元祐通寶	2.41	0.73	0.13	(3.20)	1086	銅	行書	北部砂層	
1000	政和通寶	2.44	0.62	0.10	3.50	1111	銅	篆書	北部砂層	
1001	元祐通寶	2.45	0.74	0.13	3.82	1086	銅	行書	南東部2次黒色土下	
1002	—	(2.48)	0.59	(0.18)	(2.74)	—	銅	判読不能, 模铸	中央部2次黒色土下	
1003	熙寧元寶	2.43	0.69	0.12	(3.30)	1068	銅	篆書	中央部2次黒色土下	
1004	皇宋通寶	2.34	0.70	0.09	(1.92)	1038	銅	真書	南部2次黒色土下	
1005	□□□□	2.36	0.69	0.06	1.96	—	銅	判読不能, 模铸	南部砂層	
1006	—	2.34	0.57	0.08	2.08	—	銅	判読不能, 模铸	西部2次黒色土下	
1007	洪武通寶	2.34	0.53	0.13	(2.86)	1368	銅	真書	中央部2次黒色土下	
1008	洪武通寶	2.34	0.61	0.14	3.40	1368	銅	真書	西部2次黒色土下	
1009	熙寧元寶	2.37	0.74	0.11	3.18	1068	銅	真書	北部砂層	
1010	天聖元寶	2.41	0.68	0.10	2.90	1023	銅	真書, 模铸	西部2次黒色土下	
1011	皇宋通寶	2.45	0.68	0.10	3.50	1038	銅	真書, 星形孔	中央部2次黒色土下	
1012	皇宋通寶	2.44	0.66	0.11	3.12	1038	銅	篆書	中央部2次黒色土下	
1013	天聖元寶	2.51	0.62	0.10	2.98	1023	銅	篆書	中央部2次黒色土下	
1014	洪武通寶	2.35	—	0.17	(2.90)	1368	銅	真書	南部2次黒色土下	
1015	□□通□	2.57	0.54	0.13	(3.34)	—	銅	錆がひどく判読不能	南部2次黒色土下	
1016	治平元寶	2.41	0.64	0.13	3.68	1064	銅	篆書, 星形孔	中央部2次黒色土下	
1017	皇宋通寶	2.43	0.67	0.11	(3.10)	1038	銅	篆書	中央部2次黒色土下	
1018	咸平元寶	2.46	0.58	0.10	3.10	998	銅	真書	中央部2次黒色土下	
1019	元豊通寶	2.40	0.63	0.11	2.70	1078	銅	行書	中央部2次黒色土下	
1020	熙寧元寶	2.23	0.53	0.13	3.64	1068	銅	篆書	中央部2次黒色土下	
1021	祥符元寶	2.37	0.50	0.08	2.92	1008	銅	真書	中央部2次黒色土下	
1022	開元通寶	2.28	0.64	0.14	2.90	621	銅	真書	中央部2次黒色土下	
1023	開元通寶	2.38	0.67	0.11	(2.48)	621	銅	真書, 欠け	中央部2次黒色土下	
1024	皇宋通寶	2.43	0.64	0.09	2.92	1038	銅	篆書	中央部2次黒色土下	
1025	天聖元寶	2.51	0.61	0.12	4.04	1023	銅	真書, 星形孔	中央部2次黒色土下	
1026	元祐通寶	2.38	0.67	0.09	(2.58)	1086	銅	篆書	中央部2次黒色土下	
1027	紹聖元寶	2.44	0.65	0.10	2.98	1094	銅	行書, 星形孔	中央部2次黒色土下	
1028	元豊通寶	2.50	0.67	0.09	2.88	1078	銅	行書	中央部2次黒色土下	
1029	皇宋通寶	2.42	0.57	0.13	(3.80)	1038	銅	真書, 欠け	中央部黒色土下	
1030	朝鮮通寶	2.50	0.50	0.16	3.58	1423	銅	真書	中央部2次黒色土下	
1031	開元通寶	2.46	0.68	0.10	2.58	621	銅	真書, 割れ	中央部2次黒色土下	

番号	銭名	径	孔径	厚さ	重さ	初鑄年	材質	特徴	出土位置	備考
1032	永樂通寶	2.47	0.55	0.10	3.68	1408	銅	真書	2次黒色土下	
1033	□□元寶	2.66	0.50	0.12	(1.76)	—	銅	真書, 欠け	P 5内	
1034	永樂通寶	2.50	0.48	0.14	4.00	1408	銅	真書	2次黒色土下	
1035	皇宋通寶	2.45	0.65	0.11	3.50	1038	銅	篆書	2次黒色土下	
1036	天聖元寶	2.43	0.63	0.11	3.24	1023	銅	真書, 星形孔	中央部2次黒色土下	
1037	政和通寶	2.60	0.61	0.10	(2.76)	1111	銅	篆書, 欠け	南部2次黒色土下	
1038	熙寧元寶	2.36	0.61	0.13	(3.16)	1068	銅	真書, 欠け	SK435内	
1039	洪武通寶	2.34	0.52	0.12	3.24	1368	銅	真書	西部2次黒色土下	
1040	天禧通寶	2.34	0.58	0.09	2.80	1017	銅	真書	西部2次黒色土下	
1041	政和通寶	2.38	0.59	0.10	3.34	1111	銅	分楷	西部2次黒色土下	
1042	皇宋通寶	2.38	0.69	0.10	2.58	1038	銅	篆書, 星形孔	西部2次黒色土下	
1043	開元通寶	2.30	0.65	0.13	3.34	845	銅	篆書, 背「潭」	西部2次黒色土下	
1044	天聖元寶	2.36	0.63	0.07	2.54	1023	銅	篆書	西部砂層	
1045	□□□寶	2.32	0.63	0.07	2.48	—	銅	判読不能, 星形孔, 模鑄	西部2次覆土中	
1046	□□元寶	2.39	0.63	0.14	3.48	—	銅	判読不能, 模鑄	中央部2次黒色土下	
1047	皇宋通寶	2.42	0.56	0.12	3.50	1038	銅	篆書	中央部2次黒色土下	
1048	—	2.22	0.59	0.08	2.08	—	銅	模鑄	中央部2次黒色土下	
1049	□□□□	(2.57)	0.61	(0.16)	(3.54)	—	銅	錆がひどく判読不能	中央部2次黒色土面	
1050	元豊通寶	2.36	0.54	0.11	3.30	1078	銅	行書	覆土中	
1051	元豊通寶	2.49	0.66	0.15	2.44	1078	銅	行書, 錆がひどい	覆土中	

第20号建物跡 4区S I-7 (第248~252図)

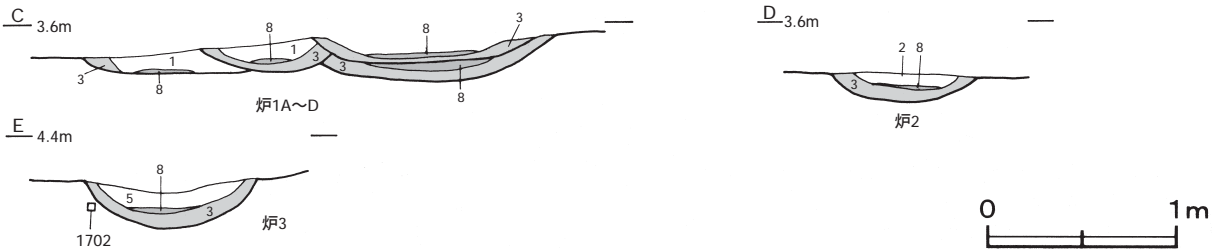
位置 調査区北部C13h1区を中心に位置している。

確認状況 表砂を5.6m除去し標高約3.4mから、西部が調査区域外に延びる黒色土面を確認した。確認された部分の黒色土面はほぼ平坦で、複数の炉や土坑、北東と北西に並ぶ柱穴5か所が確認された。

規模と施設 西部が調査区域外に延びているため、南北10.7m、東西3.8mだけが確認された。炉3基、土坑3基が構築されている。

床 確認された黒色土面はほぼ平坦である。

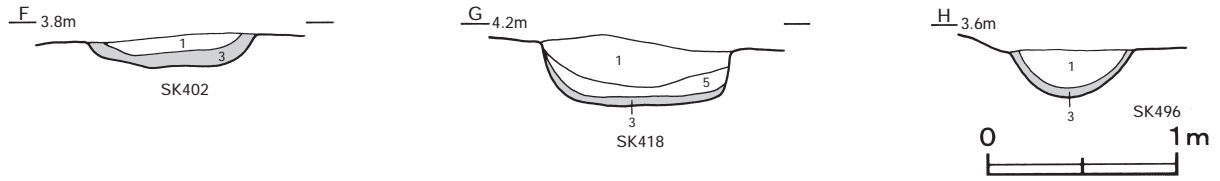
炉 (第248図) 6基とも黒色土面の東部に位置しており、第1号炉は3回の造り替えを行っている。土層断面図中、第3層は炉を構築した黒色土層である。第1号炉は厚さ2~10cm、第2号炉は厚さ5~9cm、第3号炉は厚さ4~9cmの黒色土を貼り付けて構築されている。



第248図 第20号建物跡炉土層図

ピット 5か所。深さ50~67cmで、北東と北西を軸として配していることから、上屋を支えた柱穴と考えられる。

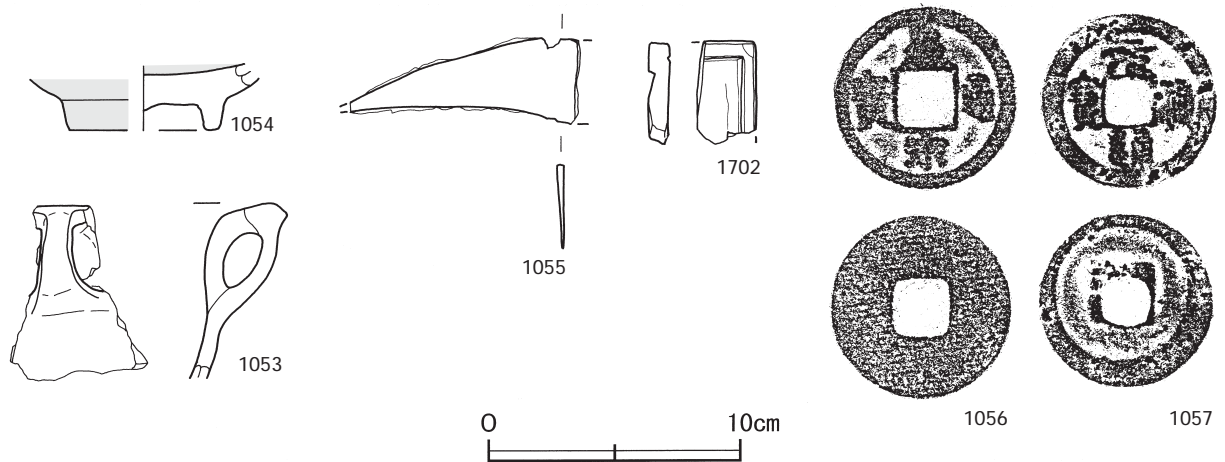
土坑 (第249図) 第418・496号土坑は北部、第402号土坑は黒色土範囲から北東3mに位置している。3基とも厚さ2~7cmの黒色土を貼り付けて構築されている。



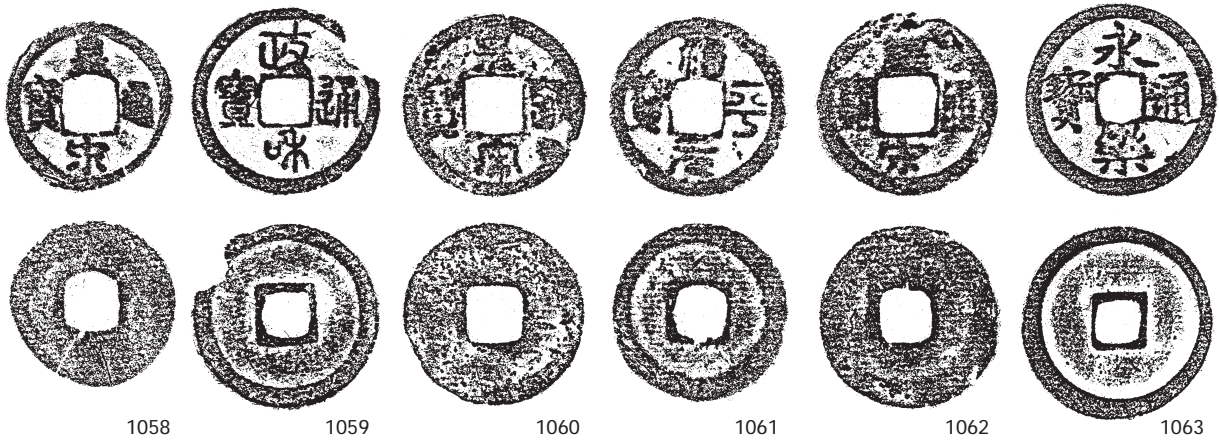
第249図 第20号建物跡土坑土層図



第250図 第20号建物跡実測図



第251図 第20号建物跡出土遺物実測図(1) [古銭は原寸大]



第252図 第20号建物跡出土遺物実測図（2）〔古銭は原寸大〕

第20号建物跡出土遺物観察表（第251・252図）

番号	器形	器質	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1053	内耳鍋	土師質土器	—	(6.9)	—	長石・雲母	橙	普通	口縁部ナデ，外面煤付着	覆土中	5%

番号	器形	器質	口径	器高	底径	胎土・色調	絵付・釉薬	文様・特徴	産地・年代	出土位置	備考
1054	碗	磁器	—	(2.1)	[6.0]	灰・オリーブ灰	青磁釉	高台内トチン跡	龍泉窯，15C前半	覆土中	30% PL39

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
1055	鎌	(9.0)	3.4	0.3	(24.8)	鉄	基端部欠損	覆土中	
1702	硯	(4.0)	(2.3)	0.9	(13.2)	泥岩	海部・堤部残存	炉3付近	

番号	銭名	径	孔径	厚さ	重さ	初鑄年	材質	特徴	出土位置	備考
1056	皇宋通寶	2.43	0.71	0.07	2.48	1038	銅	真書	覆土中	
1057	元祐通寶	2.33	0.54	0.12	3.30	1086	銅	篆書	覆土中	
1058	皇宋通寶	2.36	0.62	0.08	2.10	1038	銅	真書，割れ	覆土中	
1059	政和通寶	2.51	0.57	0.16	(4.50)	1111	銅	篆書，欠け	覆土中	
1060	皇宋通寶	2.44	0.69	0.09	2.98	1038	銅	篆書	覆土中	
1061	治平元寶	2.38	0.64	0.11	2.90	1064	銅	篆書	覆土中	
1062	皇宋通寶	2.43	0.66	0.10	3.16	1038	銅	真書	覆土中	
1063	永樂通寶	2.54	0.53	0.11	3.34	1408	銅	真書	覆土中	

遺物出土状況 土師質土器片92点(皿18，内耳鍋74)，磁器片1点(碗)，石器1点(火打石)，石製品1点(硯)，金属製品9点(鎌1，古銭8)が出土している。1053～1055は覆土中からで，1054は龍泉窯の青磁碗，1055は鎌，1702は硯である。

1056～1063は覆土中から出土しており，1063の「永樂通寶」が最新銭である。

所見 西部が調査区域外に延びているため，確認された黒色土面の範囲は少ないが，炉や柱穴が検出されたことから建物跡と判断した。また，第1号炉は3回の造り替えを行っており，本建物跡は継続的に生活が営まれた可能性が高い。

第21号建物跡 2区S B-1 (第253~259図)

位置 調査区中央部 H11c4区を中心に位置している。

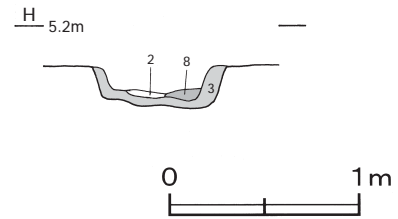
重複関係 第22号建物跡を掘り込んでいる。

確認状況 表砂を3.5m除去し、標高約5mから黒色土面を確認した。上面はほぼ平坦で、炉と北東に並ぶ柱穴7か所が確認された。

規模と施設 黒色土の範囲は南北12.2m、東西8.3mの北東に延びる不定形である。炉、第8号粘土貼土坑が構築されている。

床 厚さ約4~10cmの黒色土を貼り付けて構築している。土層断面図中、第3層は黒色土A層、第4層は建物構築の際に整地した黒色土B層である。

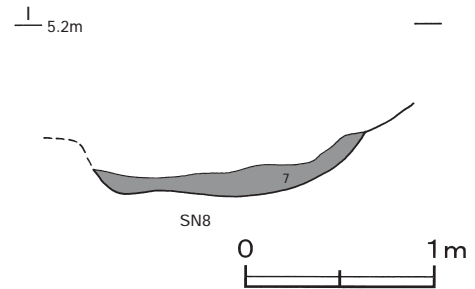
炉(第253図) 中央部に位置している。一辺が約0.6mの方形で、厚さ4~10cmの黒色土で構築されている。上層には炭化材が混じる焼砂範囲が確認されている。



第253図 第21号建物跡炉土層図

ピット 7か所。深さ20~45cmで、柱間寸法が約2mと規則的であることから、上屋を支えた柱穴と考えられる。

土坑(第254図) 建物内の東部に位置し、一辺が約1.2mの方形である。厚さ5~15cmの粘土で構築されているが、南部の壁の立ち上がり部は崩落している。

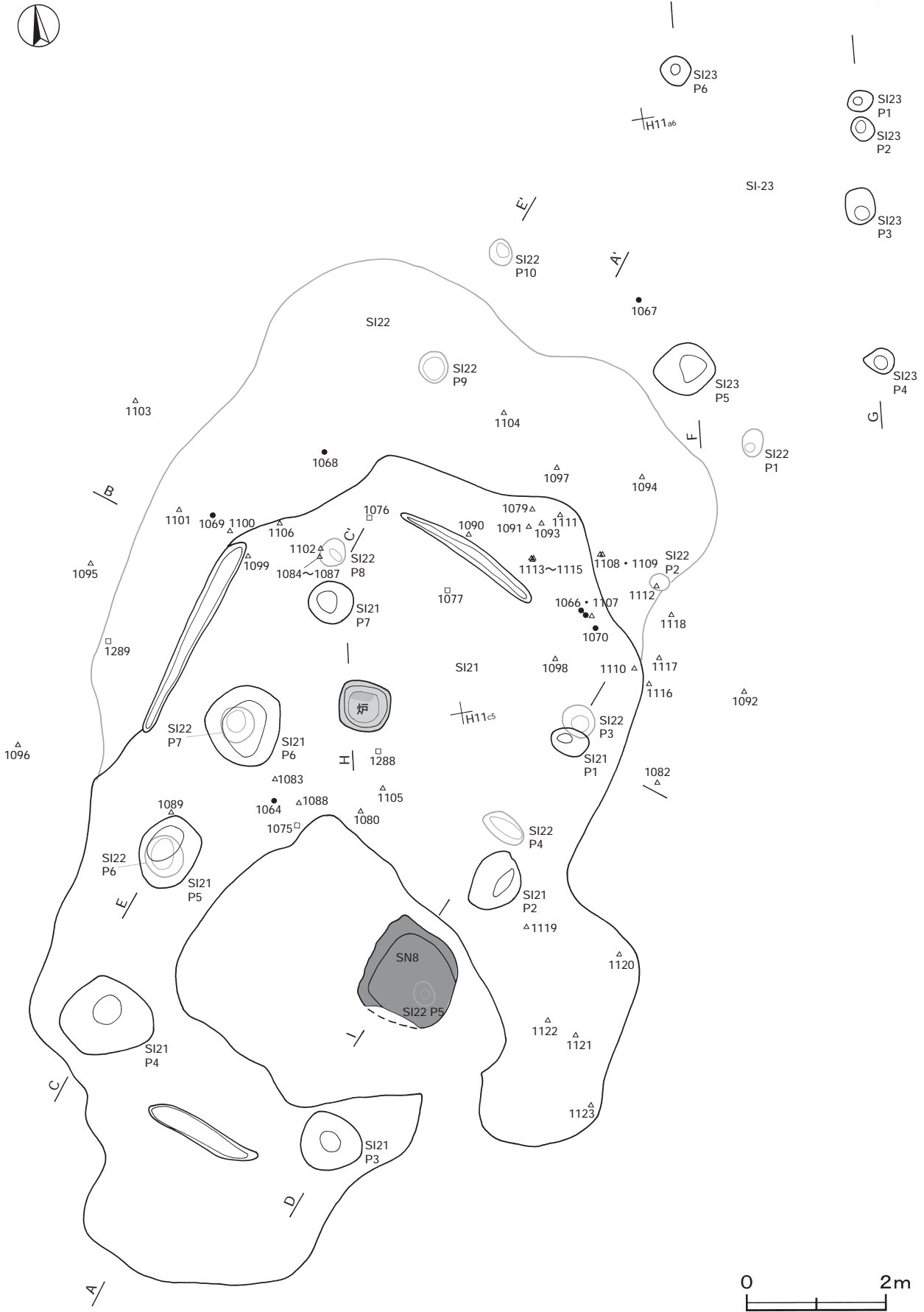


第254図 第21号建物跡土坑土層図

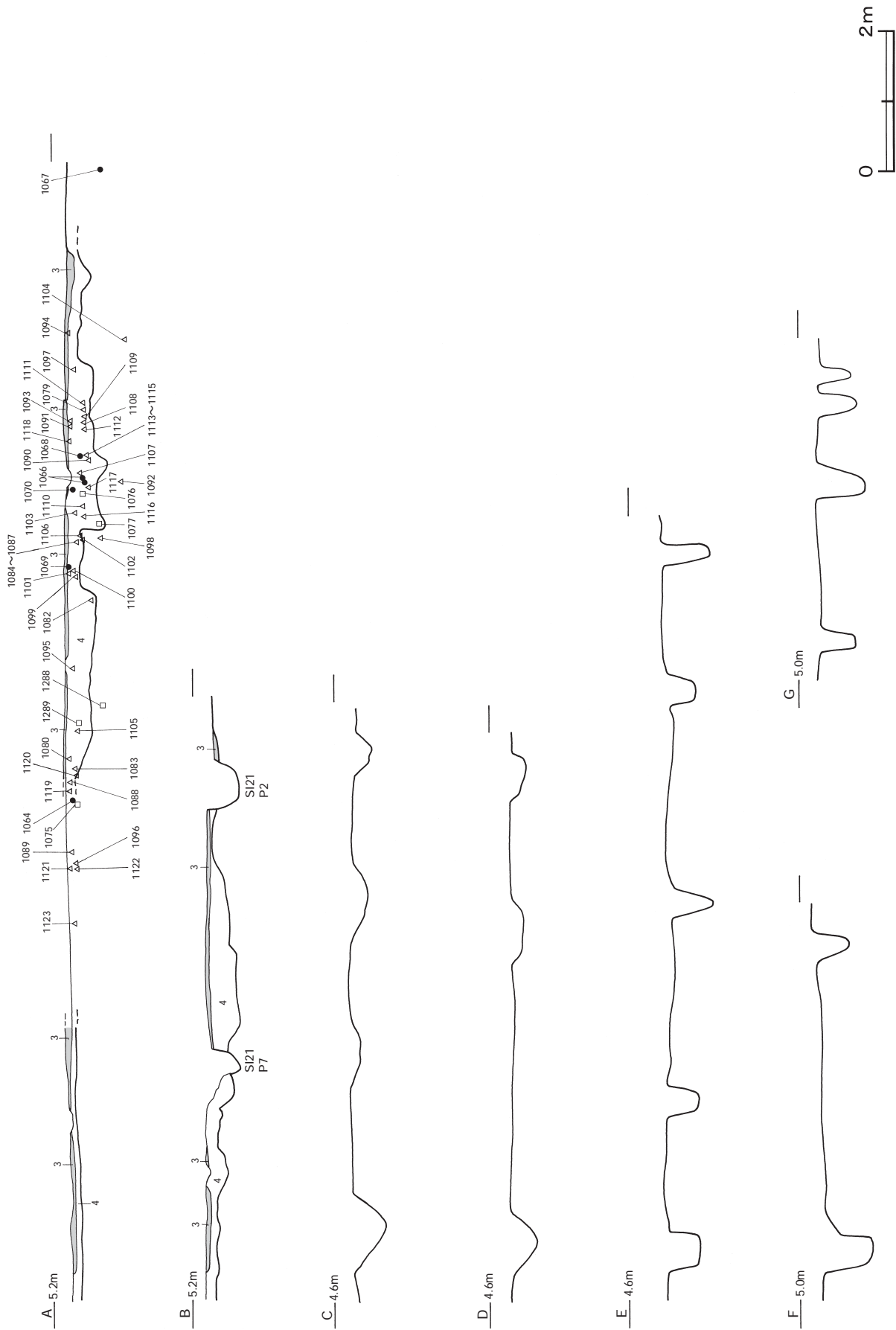
遺物出土状況 土師質土器片171点(皿144, 内耳鍋27), 陶器片40点(皿23, 甕17), 磁器片1点(皿), 石器15点(砥石11, 火打石4), 金属製品46点(毛抜1, 火打金1, 棒状金具1, 筭1, 古銭42)が出土している。1064は中央部の黒色土面下, 1065は炉内から出土している。1064は底部が欠損しているが, 口縁部には油煙痕が認められる。1066・1070は東部, 1067・1068は北部, 1069は西部の黒色土面下から出土している。1066~1070は瀬戸・美濃産で, 1066~1068は挟み皿である。

1069・1070は稜皿で底面が露胎であり, 回転糸切り痕を残している。砥石の出土も顕著で, 1072・1073は炉内から出土している。1083は中央部の黒色土面下から出土しており, 筭部が欠損している。古銭は北部や西部の黒色土面下から多く出土しており, 「洪武通寶」は5枚, 「永樂通寶」は4枚で, その中でも1091の「宣徳通寶」が最新銭である。

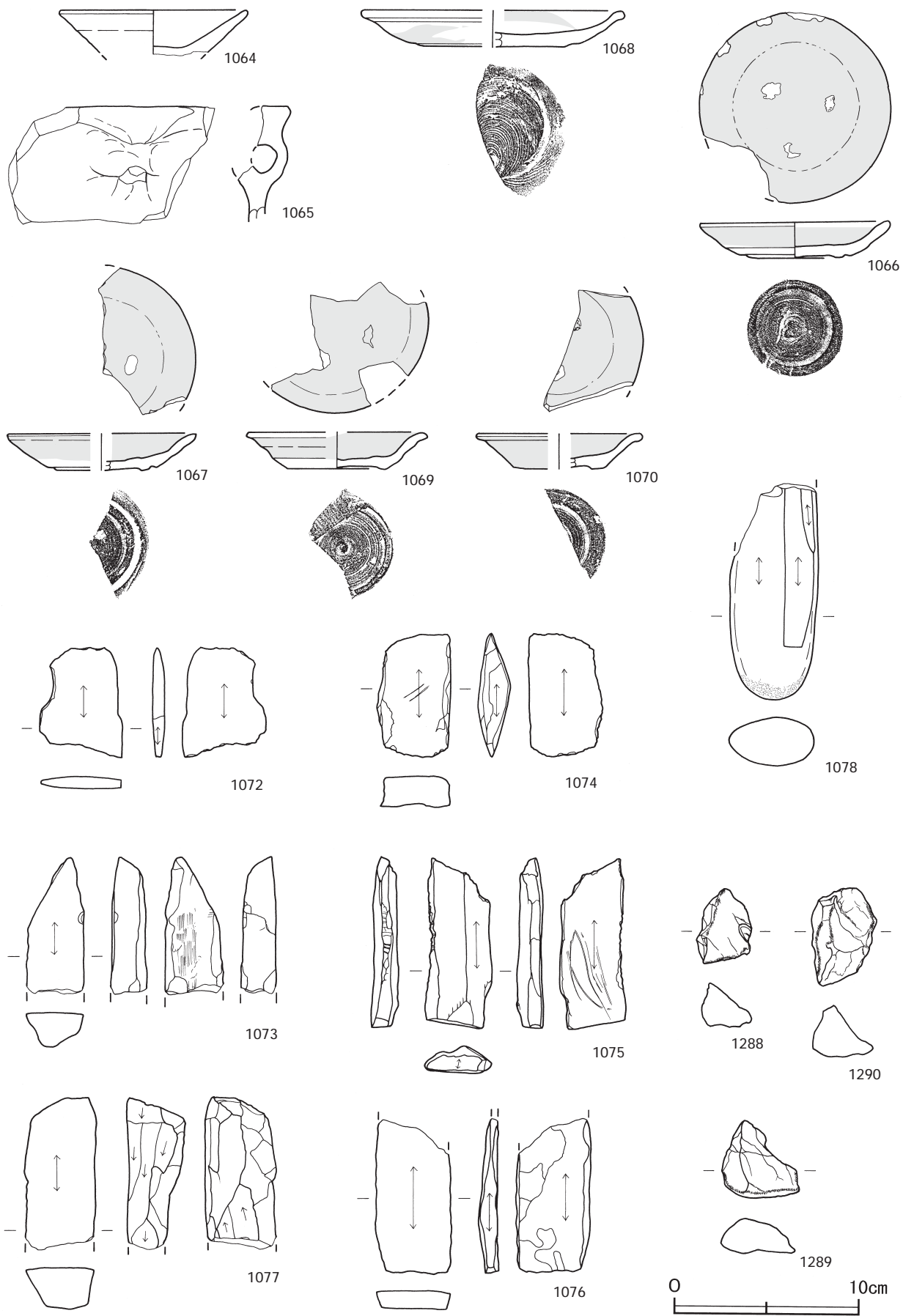
所見 日常雑器類が多く出土していることから, 継続的に生活が営まれた建物跡と考えられる。黒色土面の平面形と柱穴の主軸方向が一致し, 第22号建物跡からの造り替えと考えられる。古銭の多くは北部や西部の黒色土下の砂層から散在した状態で出土しており, 構築以前に遺棄されたか, 意図的に蒔かれたものと推測される。時期は, 出土した陶器などから15世紀の後半以降と考えられる。



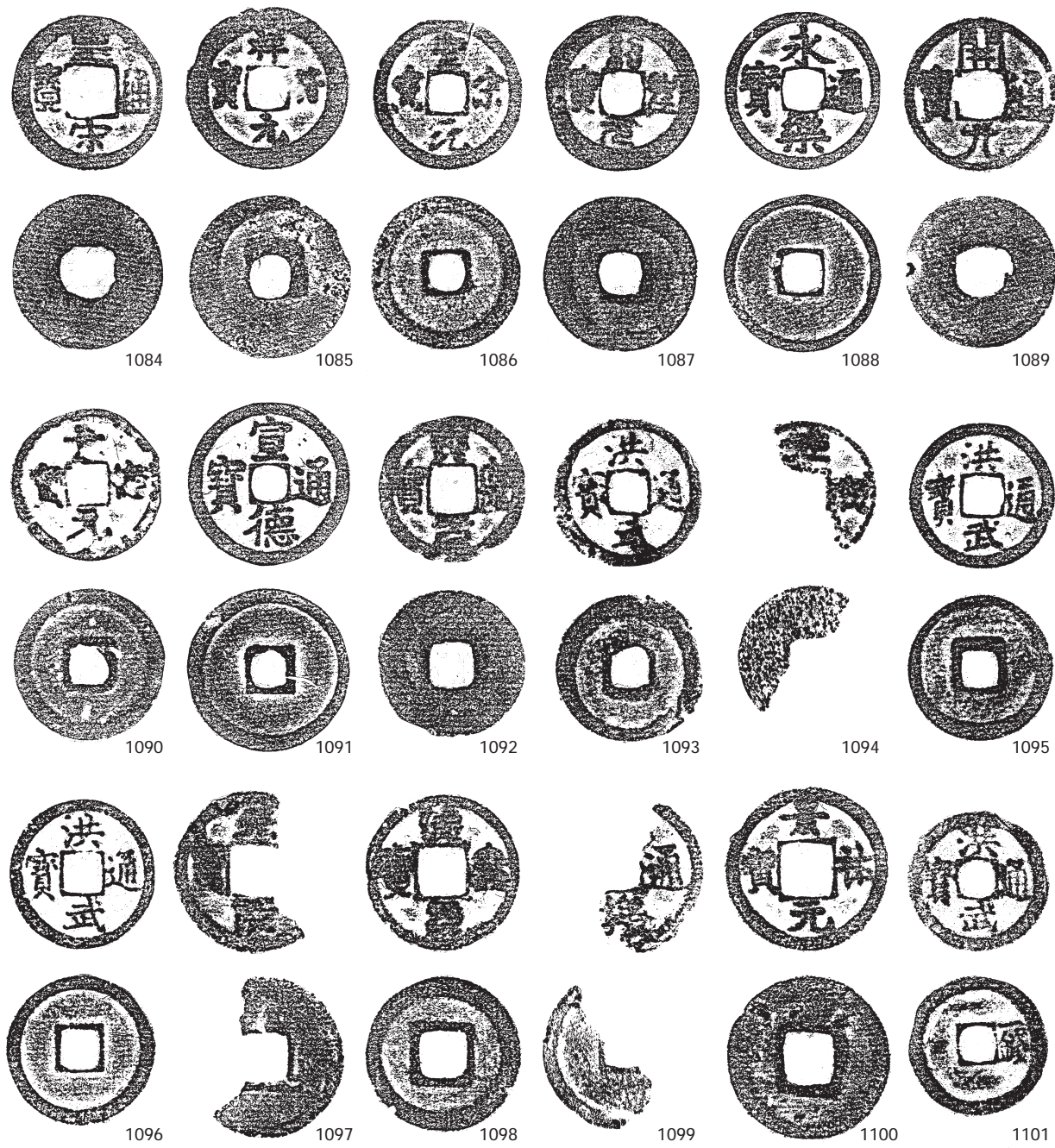
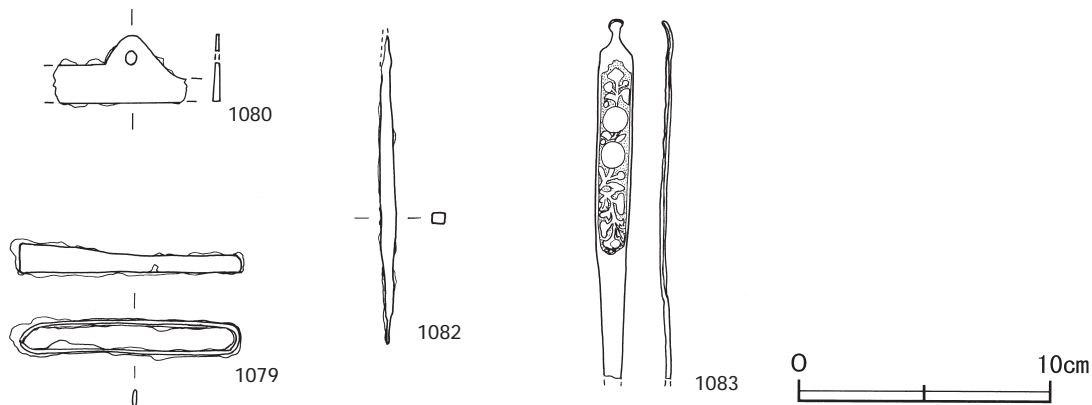
第255图 第21~23号建物跡実測図(1)



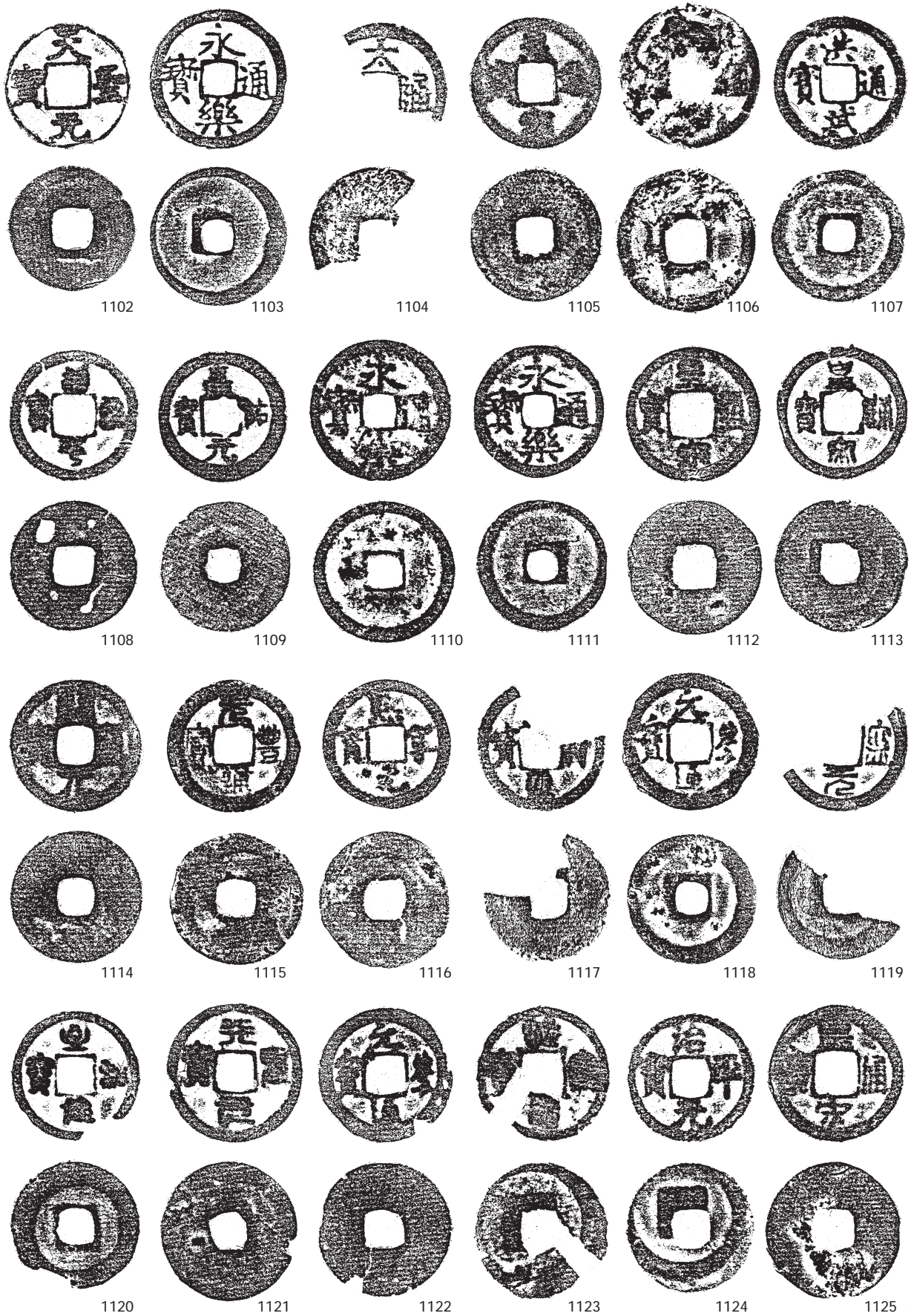
第256图 第21~23号建物跡実測图 (2)



第257图 第21号建物跡出土遺物実測図(1)



第258図 第21号建物跡出土遺物実測図(2) [古銭は原寸大]



第259図 第21号建物跡出土遺物実測図(3) [古銭は原寸大]

第21号建物跡出土遺物観察表（第257～259図）

番号	器形	器質	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1064	皿	土師質土器	10.0	(2.5)	—	雲母・赤色粒子	橙	普通	内外面ナデ	中央部黒色土下	70%
1065	内耳鍋	土師質土器	—	(6.3)	—	雲母	にぶい橙	普通	口縁部横ナデ, 外面煤付着	炉内	50%

番号	器形	器質	口径	器高	底径	胎土・色調	絵付・釉薬	文様・特徴	産地・年代	出土位置	備考
1066	縁釉小皿	陶器	10.2	2.0	5.2	灰白・黄褐	灰釉	削り出し高台トチン跡	瀬戸・美濃	北部黒色土下	95% PL37
1067	縁釉小皿	陶器	[10.2]	2.0	[5.0]	灰白・黄褐	灰釉	削り出し高台トチン跡	瀬戸・美濃	北部黒色土下	30%
1068	挟み皿	陶器	[14.4]	2.0	[7.8]	灰黄・灰オリーブ	灰釉	底部回転糸切り	瀬戸・美濃, 15C後	北西部黒色土下	20% 古瀬戸後IV
1069	稜皿	陶器	[9.8]	2.0	[5.4]	灰白・極暗赤褐	鉄釉	見込みトチン跡	瀬戸・美濃, 16C前	北西部黒色土中	40% 大窯II
1070	稜皿	陶器	[19.0]	1.9	[5.0]	灰白・極暗赤褐	鉄釉	見込みトチン跡	瀬戸・美濃, 16C前	北部黒色土下	25% 大窯II

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
1072	砥石	6.0	4.4	0.8	27.5	凝灰岩	砥面3面, 断面レンズ状	炉内	
1073	砥石	(7.4)	3.1	1.9	(55.3)	凝灰岩	砥面1面, 他は剥離面	炉内	
1074	砥石	6.7	4.0	1.7	56.1	凝灰岩	砥面3面, 断面長方形, 擦痕有り	覆土中	
1075	砥石	(9.3)	3.6	1.5	(57.0)	滑石	砥面3面, 擦痕有り	中央部黒色土下	
1076	砥石	(8.3)	4.1	1.0	(51.9)	凝灰岩	砥面3面, 断面長方形	北西部黒色土下	
1077	砥石	(8.2)	4.0	3.2	(125.8)	凝灰岩	砥面8面, 剥離面有り	北部黒色土下	
1078	砥石	(11.7)	4.7	2.6	(189.1)	砂岩	砥面2面, 断面楕円形, 端部擦痕有り	覆土中	
1288	火打石	4.1	3.0	2.4	27.2	瑪瑙	摩滅の集中箇所有り	中央部黒色土下	
1289	火打石	4.2	4.2	1.9	32.2	瑪瑙	摩滅の集中箇所有り	西部黒色土下	
1290	火打石	5.4	3.5	2.8	51.5	瑪瑙	摩滅の集中箇所有り	覆土中	
1079	毛拔	8.9	1.3	0.5	13.2	鉄	断面長方形, 錯の進行激しい	北部黒色土下	PL51
1080	火打金	(5.3)	2.9	0.3	(20.7)	鉄	X線撮影により孔確認, 両端部欠損	中央部黒色土下	PL52
1082	棒状金具	(12.3)	0.6	0.5	(13.3)	鉄	中央部断面方形, 先端部鋭利	東部黒色土下	
1083	筭	(14.3)	1.4	0.2	(22.4)	銅	筭部欠損, 胴部草花文	中央部黒色土下	PL54

番号	銭名	径	孔径	厚さ	重さ	初鋳年	材質	特徴	出土位置	備考
1084	皇宋通寶	2.38	0.76	0.07	2.76	1038	銅	真書	北西部黒色土下	
1085	祥符元寶	2.51	0.55	0.07	2.82	1008	銅	真書	北西部黒色土下	
1086	聖宋元寶	2.38	0.57	0.11	3.48	1101	銅	行書	北西部黒色土下	
1087	紹聖元寶	2.41	0.59	0.80	2.46	1094	銅	篆書	北西部黒色土下	
1088	永樂通寶	2.45	0.56	0.11	3.14	1408	銅	真書	中央部黒色土下	
1089	開元通寶	2.38	0.74	0.09	(2.42)	621	銅	真書, 欠け	中央部黒色土下	
1090	景德元寶	2.35	0.57	0.07	2.06	1004	銅	磨り	北部黒色土下	
1091	宣徳通寶	2.53	0.52	0.10	3.40	1433	銅	真書	北部黒色土下	
1092	熙寧元寶	2.30	0.66	0.11	3.04	1068	銅	篆書	北東部黒色土下	
1093	洪武通寶	2.34	0.57	0.13	3.56	1368	銅	真書	北部黒色土下	
1094	□□□□	2.26	—	0.12	(1.14)	—	銅	篆書, 判読不能, 欠け	北部黒色土中	
1095	洪武通寶	2.25	0.54	0.12	2.98	1368	銅	真書	西部黒色土下	
1096	洪武通寶	2.31	0.61	0.14	3.04	1368	銅	真書	西部黒色土下	
1097	天聖元寶	2.48	0.73	0.11	(2.20)	1023	銅	篆書, 欠け	北部黒色土下	
1098	熙寧元寶カ	2.38	0.64	0.11	3.28	1068	銅	篆書	北部黒色土下	
1099	永樂通寶	—	—	0.11	(1.34)	1408	銅	真書, 欠け	北西部黒色土下	
1100	景祐元寶	2.55	0.77	0.11	3.48	1034	銅	真書	北西部黒色土下	
1101	洪武通寶	2.18	0.51	0.12	2.86	1368	銅	真書, 背「一銭」	北西部黒色土下	
1102	天聖元寶	2.26	0.74	0.09	2.24	1023	銅	真書, 輪磨り	北西部黒色土下	
1103	永樂通寶	2.51	0.63	0.09	3.16	1408	銅	真書	北西部黒色土下	
1104	太平通寶	—	0.61	0.11	(1.08)	976	銅	真書, 欠け	北部黒色土下	
1105	皇宋通寶	2.40	0.70	0.10	3.18	1038	銅	真書	中央部黒色土下	
1106	□□□□	—	0.76	—	(2.92)	—	銅	判読不能	北西部黒色土下	
1107	洪武通寶	2.40	0.57	0.09	3.16	1368	銅	真書	北部黒色土下	
1108	治平通寶	2.33	0.76	0.08	(2.58)	1064	銅	篆書, 鋳不足	北部黒色土下	
1109	嘉祐元寶	2.33	0.58	0.11	3.72	1056	銅	真書, 星形孔	北部黒色土下	
1110	永樂通寶	2.53	0.57	0.10	2.94	1408	銅	真書	北東部黒色土下	
1111	永樂通寶	2.35	0.56	0.10	2.28	1408	銅	真書	北部黒色土下	
1112	皇宋通寶	2.43	0.71	0.08	2.68	1038	銅	真書	北東部黒色土下	

番号	銭名	径	孔径	厚さ	重さ	初鑄年	材質	特徴	出土位置	備考
1113	皇宋通寶	2.42	0.75	0.07	(2.68)	1038	銅	篆書	北部黒色土下	
1114	開元通寶	2.41	0.66	0.07	2.84	621	銅	真書	北部黒色土下	
1115	元豊通寶	2.42	0.63	0.10	3.32	1078	銅	篆書	北部黒色土下	
1116	熙寧元寶	2.34	0.57	0.10	2.88	1068	銅	真書	北東部黒色土下	
1117	□□□寶	2.32	0.66	0.08	(1.56)	—	銅	判読不能, 欠け	北東部黒色土下	
1118	元豊通寶	2.43	0.71	0.07	(2.54)	1078	銅	行書	北東部黒色土中	
1119	□寧元□	2.37	0.61	0.10	(1.44)	1068	銅	篆書, 欠け	東部黒色土下	
1120	至和元寶	2.32	0.61	0.11	2.88	1054	銅	篆書, 欠け	東部黒色土下	
1121	元豊通寶	2.43	0.61	0.08	(2.68)	1078	銅	行書	東部黒色土下	
1122	天聖元寶	2.51	0.68	0.10	(3.36)	1023	銅	篆書	東部黒色土下	
1123	熙寧元寶カ	2.45	0.70	0.12	(2.98)	1068	銅	篆書, 欠け	東部黒色土下	
1124	治平元寶	2.34	0.71	0.09	2.54	1064	銅	真書	覆土中	
1125	皇宋通寶	2.43	0.76	0.09	2.86	1038	銅	真書	覆土中	

第22号建物跡 2区S B-3 (第255・256図)

位置 調査区中央部 H11b5区を中心に位置している。

重複関係 第21号建物に掘り込まれている。北部には第23号建物跡が確認されている。

確認状況 表砂を3.5m除去し、標高約5mの第21号建物跡の北側から黒色土面を確認した。上面はほぼ平坦で、北東に並ぶ柱穴10か所が確認された。

規模と施設 第21号建物の黒色土面が構築されているため、黒色土の範囲は南北2m、東西7mだけが確認された。

床 厚さ約4～10cmの黒色土を貼り付けて構築している。土層断面図中、第3層は黒色土A層、第4層は建物構築の際に整地した黒色土B層である。

ピット 10か所。深さ48～75cmで、柱間寸法が約2mと規則的であることから、上屋を支えた柱穴と考えられる。

所見 第21号建物跡と本跡の黒色土面と柱穴の主軸方向が一致することから、第21号建物跡の造り替える前に存在していたと想定される。黒色土面が連続して構築されていることから、両跡は時期差を空けずに構築したと推測できる。

第23号建物跡 2区S B-2 (第255・256図)

位置 調査区中央部 H11a6区を中心に位置している。南部には第21・22・24号建物跡が確認されている。

確認状況 表砂を3m除去し、標高4.7～4.8mで柱穴6か所を確認した。

規模 推測される面積は11.3m²である。

柱穴 6か所。深さは40～73cmである。P5の径は0.8mとやや大きい、その他は0.4～0.5mの楕円形である。

所見 柱穴内からは、遺物や黒色土は検出されなかった。柱穴の位置する範囲内においても黒色土面が確認されないことから、倉庫と推測した。南に位置する第21・22号建物跡とは主軸方向が異なることから、これらは関連しない建物跡と判断した。時期は、出土遺物がなく不明である。

第24号建物跡 2区S B-4 (第260図)

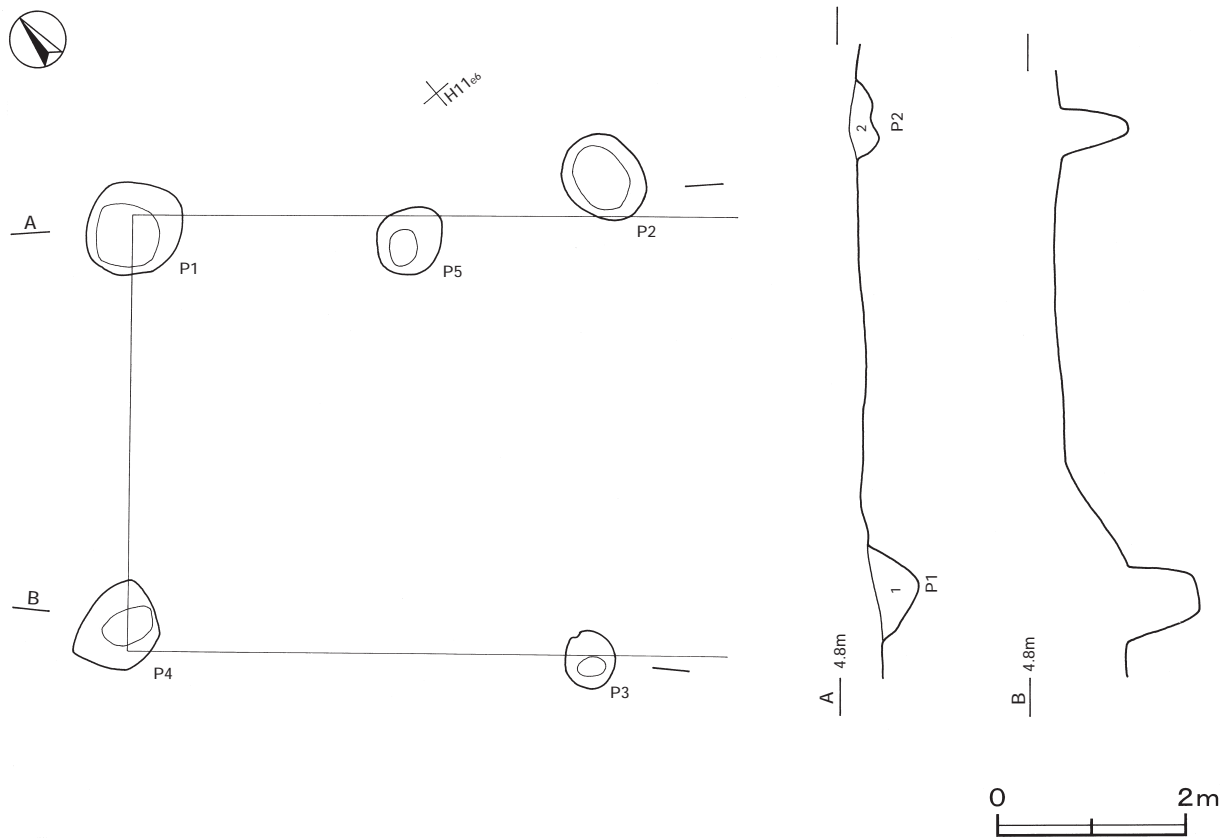
位置 調査区中央部 H11e5区を中心に位置している。北部には第21～23号建物跡が確認されている。

確認状況 表砂を2.5m 除去し、標高4.5～4.6m で柱穴5か所を確認した。

規模と施設 桁行1間(平均2.5m)、梁行1間(平均2.1m)で、面積は5.25㎡である。

柱穴 5か所。平面形は径0.3～1 mの楕円形で、深さが11～73cmである。

所見 柱穴内からは、遺物や黒色土は検出されなかった。柱穴の位置する範囲内においては、黒色土面が確認されないことから、倉庫と推測した。その配列から北に位置する第21～23号建物跡に付属する施設と考えられる。時期は、出土遺物がなく不明である。



第260図 第24号建物跡実測図

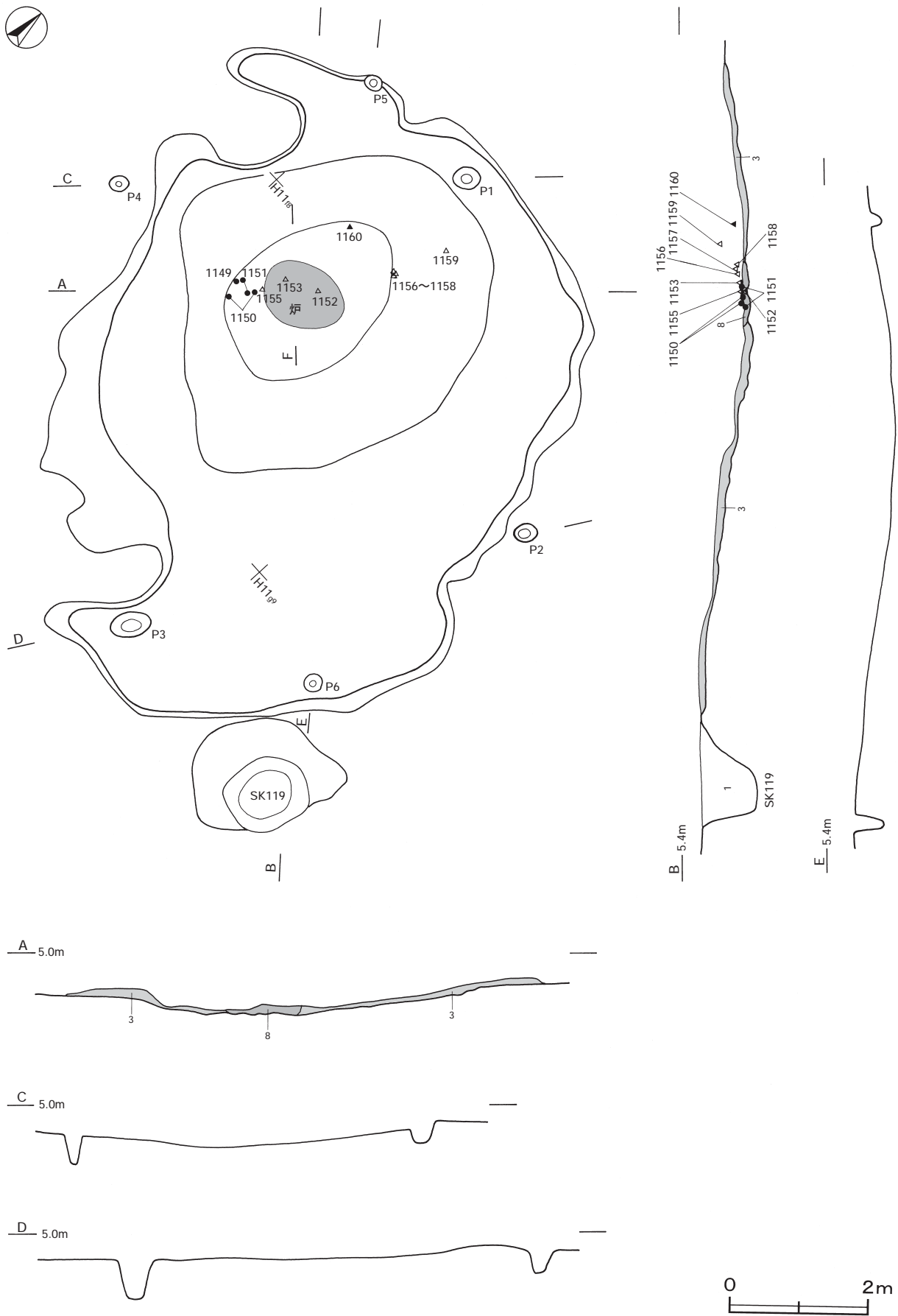
第25号建物跡 2区H K-7 (第261～263図)

位置 調査区中央部 H11f8区を中心に位置している。

確認状況 表砂を2 m 除去した標高約5 m から、円形で中央部がくぼんでいる黒色土面を確認した。中央部の白砂を除去すると炉が確認され、ピット6か所が検出された。中央部から検出された焼砂は当初投げ込まれたものと推測したが、焼砂が赤変硬化していることから、遺棄されたものと判断した。

規模と施設 黒色土の範囲は南北9.2m、東西7.4mの不定形である。炉1基、土坑1基が構築されている。

床 中央に向かって緩やかに傾斜している。黒色土の厚さは底面から立ち上がりの部分で5～8 cm、上面で10～12cmである。土層断面図中、第3層は黒色土A層、第8層は炉の焼砂の層である。



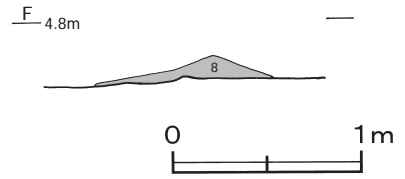
第261图 第25号建物跡実測図

炉 (第262図) 中央部に位置し、長径1.2m、短径0.9mの楕円形である。焼砂の厚さは4～14cmである。砂面に掘り込みは見られない。

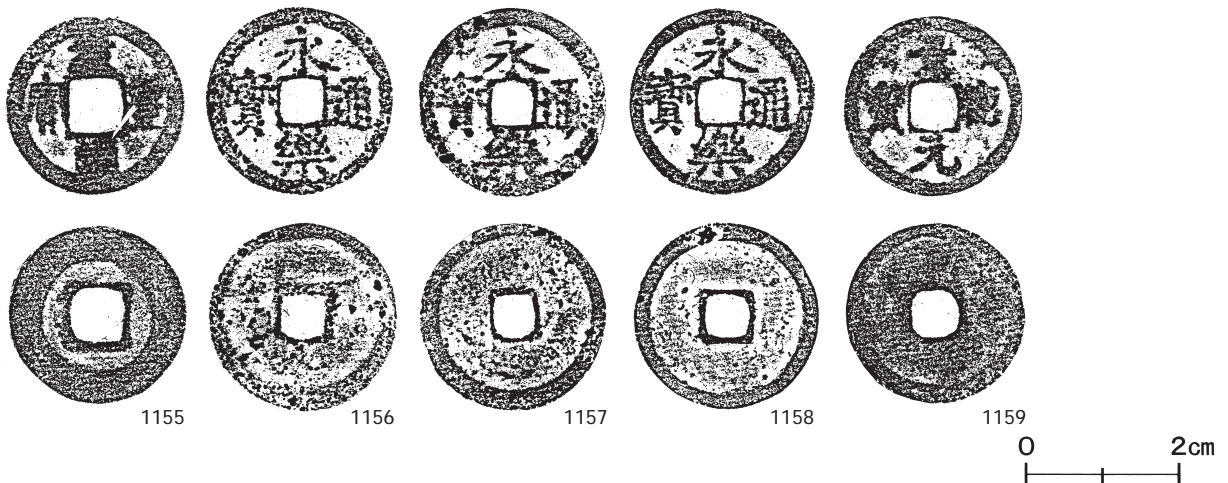
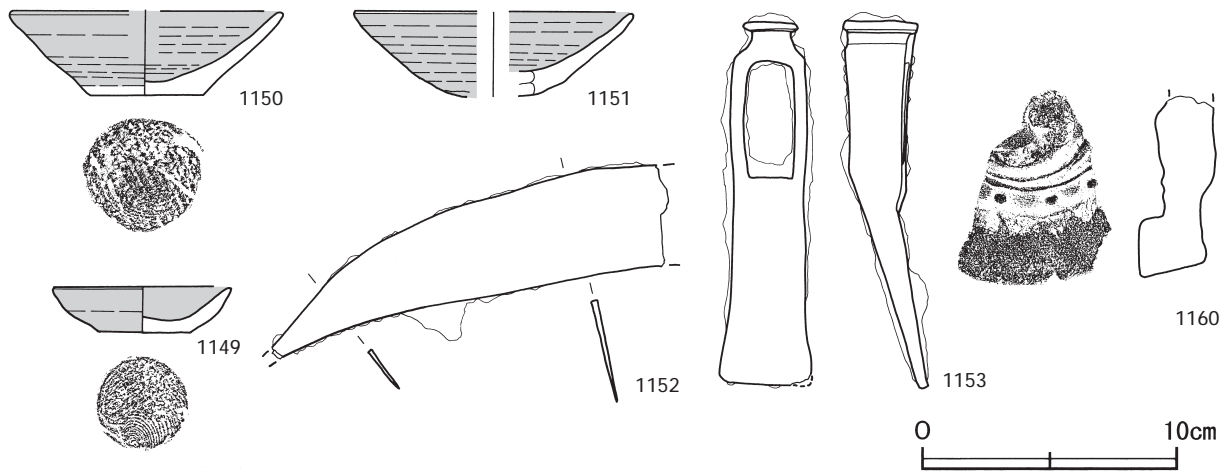
ピット 6か所。P1・P5は深さ20cm・16cmとやや浅いが、その他の深さは30～60cmである。P1～P4は上屋を支えた柱穴と考えられる。P5・P6は補助柱穴か庇の柱穴と考えられる。

土坑 南部に隣接し、長径2.2m、短径1.6mの不定形である。用途については不明である。

遺物出土状況 土師質土器片44点(皿39, 内耳鍋5), 陶器片1点(甕), 石器1点(火打石), 金属製品13点(鎌1, 片刃1, 釘カ6, 古銭5)が出土している。1149～1151は炉の西側の黒色土面, 1152・1153は炉内の上層と下層から出土している。1155は中央の黒色土面中, 1156～1159は覆土中から出土しており、「永樂通寶」が最新銭である。



第262図 第25号建物跡炉土層図



第263図 第25号建物跡出土遺物実測図

所見 柱穴は炉を中心に黒色土を囲むように配列されており、本跡は作業小屋と考えられる。赤変硬化した炉や金属製品が出土しており、鍛冶用の作業小屋とも考えられる。

第25号建物跡出土遺物観察表（第263図）

番号	器形	器質	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1149	小皿	土師質土器	7.1	1.9	3.7	雲母・赤色粒子	にぶい橙	普通	底部回転糸切り，内外面油煙	中央部黒色土面	95% PL40
1150	皿	土師質土器	[10.9]	3.4	4.5	雲母	にぶい橙	普通	底部回転糸切り，内外面油煙	中央部黒色土面	50%
1151	皿	土師質土器	[11.4]	(3.4)	—	雲母	にぶい赤褐	普通	内外面ナデ，内外面油煙	中央部黒色土面	20%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質(胎土)	特徴	出土位置	備考
1152	鎌	(16.3)	(6.2)	0.3	(63.3)	鉄	刀身のみ，先端部基端部欠損	炉内	
1153	片刃	14.5	3.7	3.0	351.0	鉄	石臼の目立て用	炉内	PL51
1160	軒丸瓦	(7.2)	3.7	—	(12.0)	長石・石英	巴文 珠文の間隔及び外縁幅が広い	中央部覆土中	

番号	銭名	径	孔径	厚さ	重さ	初鑄年	材質	特徴	出土位置	備考
1155	元豊通寶	2.39	0.73	0.11	3.32	1078	銅	篆書	中央部黒色土中	
1156	永樂通寶	2.52	0.56	0.13	3.48	1408	銅	真書	中央部覆土中	
1157	永樂通寶	2.52	0.57	0.14	3.42	1408	銅	真書	中央部覆土中	
1158	永樂通寶	2.57	0.52	0.13	3.78	1408	銅	真書	中央部覆土中	
1159	景德元寶	2.43	0.61	0.10	2.96	1004	銅	真書	東部覆土中	

第26号建物跡 2区HK-15（第264～267図）

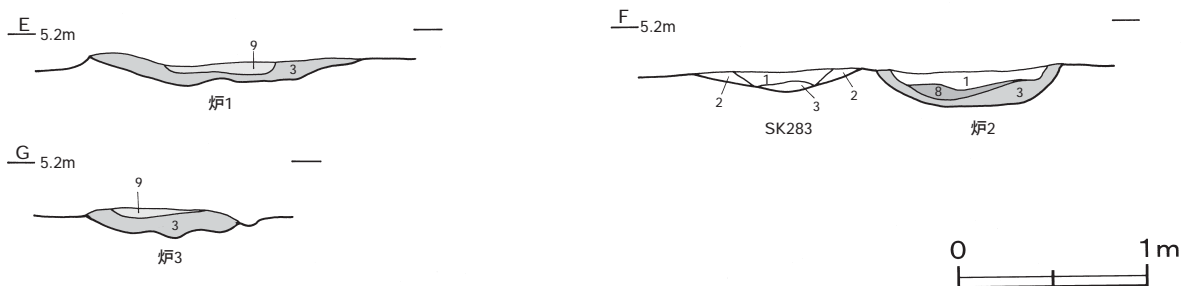
位置 調査区中央部 K11c2区を中心に位置している。

確認状況 表砂を2 m 除去した標高約5 m から黒色土面を確認した。上面はほぼ平坦で，複数の炉や土坑が確認された。本跡の下層から第6・7号土坑墓が確認されている。

規模と施設 西部が調査区域外に延びているため，黒色土の範囲は南北11.2m，東西6.8m だけ確認された。炉3基，土坑3基が構築されている。

床 ほぼ平坦である。黒色土の厚さは西部で2～20cm，東南部では2～4 cm と薄い。

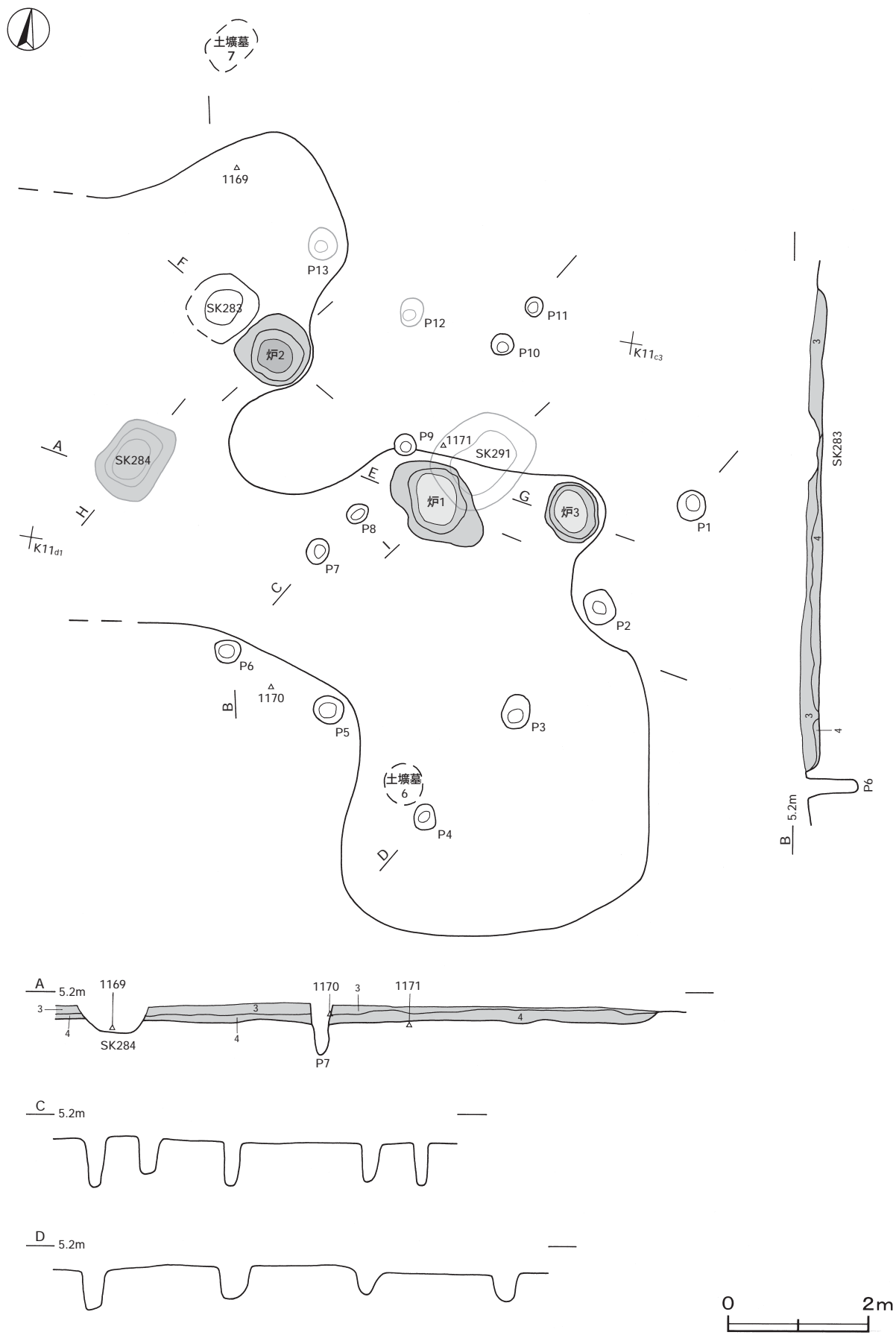
炉（第264図） 3基とも中央部に位置し，厚さ3～12cm の黒色土を貼り付けて構築されている。第1号炉は第291号土坑を掘り込んで構築されている。第3層は炉を構築した黒色土層である。第1・3号炉は灰，第2号炉は焼砂が底面から検出されている。



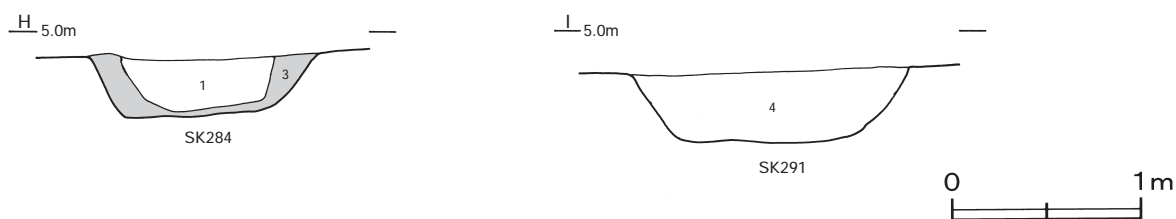
第264図 第26号建物跡炉・土坑土層図

ピット 13か所。深さ50～66cm で，上屋を支えた柱穴か間仕切のための柱穴と考えられる。P1～P11は第1次面，P12・P13は第2次面から検出されている。

土坑（第266図） 第283・284号土坑は西部，第291号土坑は中央部に位置している。第284号土坑は黒色土で構築されている。第283号土坑の上層には第2号炉から掻き出した灰が認められた。また，第291号土坑は第1号炉を構築するために黒色土B で埋め戻されていた。



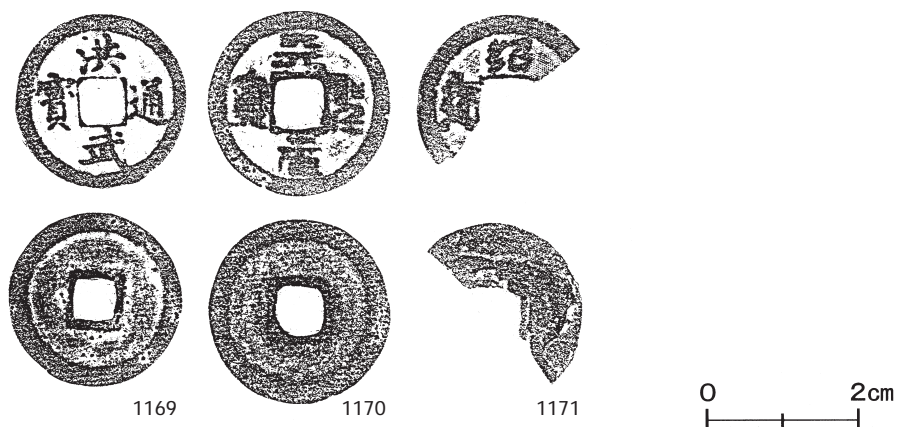
第265图 第26号建物跡実測図



第266図 第26号建物跡土坑土層図

遺物出土状況 土師質土器片 4点 (皿), 金属製品 4点 (古銭 3, 不明 1) が出土している。1169は北部の黒色土面下, 1170は南部の砂層, 1171は中央部の黒色土を除去した層から出土している。古銭は1169の「洪武通寶」が最新銭である。土師質土器片は細片のため図示できなかった。

所見 炉や上屋にかかわると想定される柱穴が検出されたことから, 建物跡と判断した。第2号炉が位置する北西方向にも柱穴が検出されていることから, 第1・2号炉を中心にL字状に展開する曲屋的構造の建物と考えられる。時期は, 出土遺物が少なく明確にすることができない。



第267図 第26号建物跡出土遺物実測図

第26号建物跡出土遺物観察表 (第267図)

番号	銭名	径	孔径	厚さ	重さ	初鑄年	材質	特徴	出土位置	備考
1169	洪武通寶	2.34	0.53	0.11	3.30	1138	銅	真書	北部黒色土下	
1170	天聖元寶	2.45	0.61	0.09	3.32	1023	銅	篆書	南部砂層	
1171	紹□□寶	(2.46)	—	0.10	(1.52)	—	銅	真書, 欠け	中央部黒色土下	

第27号建物跡 2区HK-18 (第268~273図)

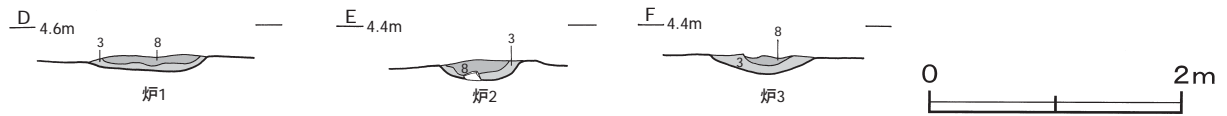
位置 調査区南部J11d1区を中心に位置している。

確認状況 表砂を1.5m除去した標高4.2mから黒色土面を確認した。上面はほぼ平坦で, 複数の炉や土坑が検出された。

規模と施設 西部が調査区域外に延びているため, 黒色土の範囲は南北15m, 東西は11.5mだけが確認された。炉3基, 土坑11基が構築され, 貝集積地2か所が確認された。

床 ほぼ平坦で, 黒色土の厚さは最大で45cm, その他は約15cmの黒色土を貼り付けて構築されている。

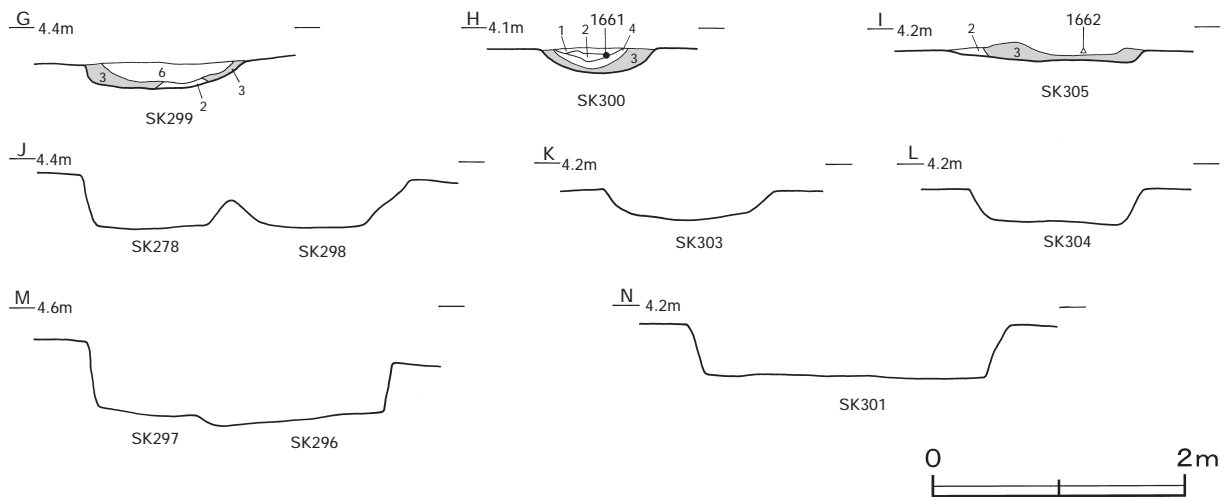
炉（第268図） 第1・2号炉は中央部、第3号炉は西部に位置している。3基とも厚さ7～10cmの黒色土を貼り付けて構築されており、底面には焼砂が認められる。



第268図 第27号建物跡炉土層図

ピット 19か所。深さは35～60cmである。P1～P6, P11・P14・P15は上屋を支えた柱穴と考えられる。その他は性格不明である。

土坑（第269図） 第299・300・305号土坑はほぼ中央に位置し、黒色土で構築されている。その他の土坑は中央部やや北寄りに集中して位置している。



第269図 第27号建物跡土坑土層・断面図

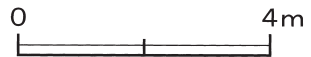
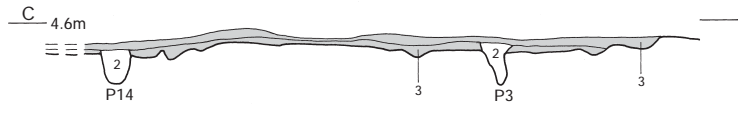
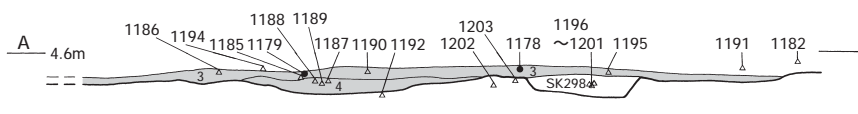
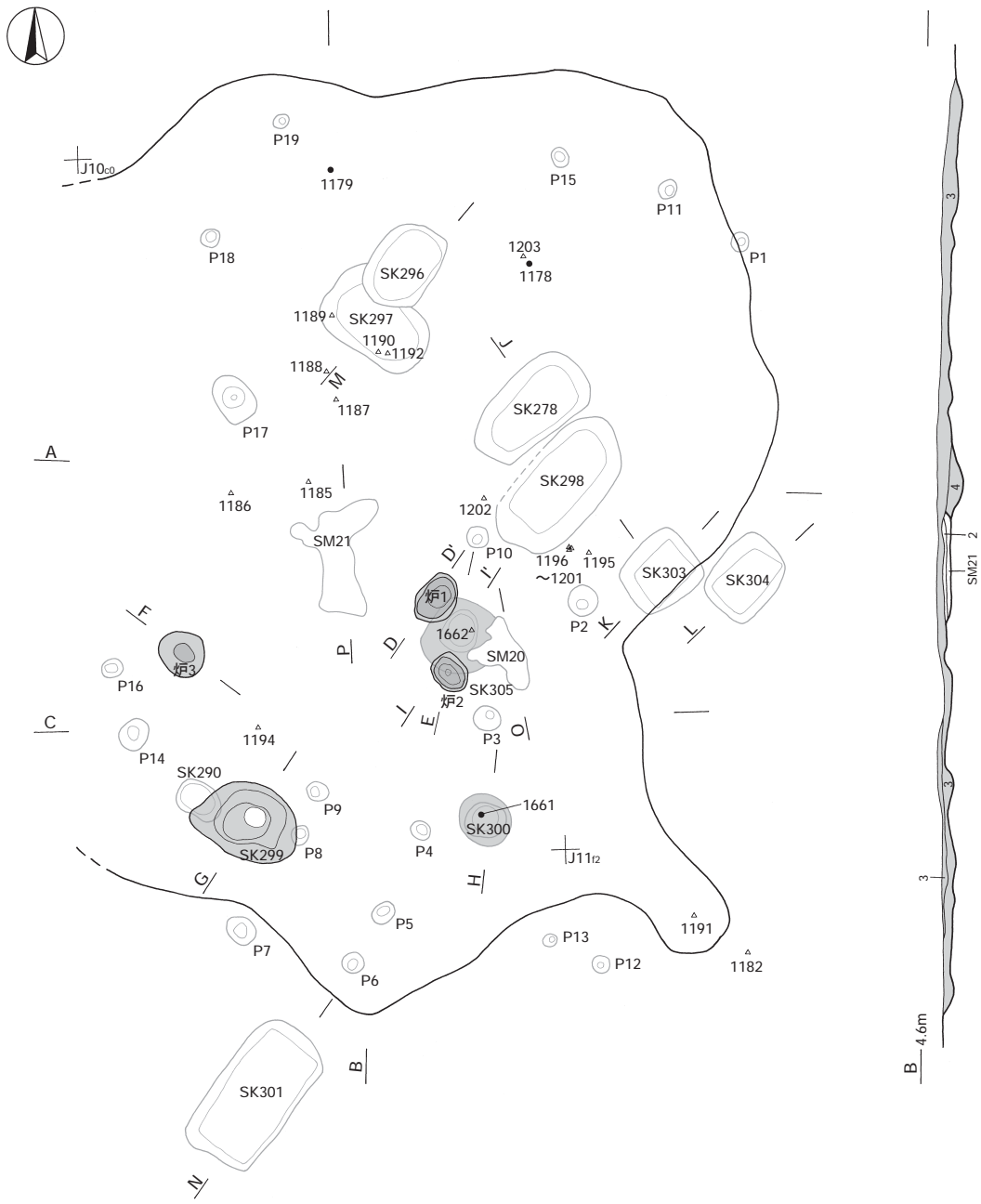
貝集積地（第270図） 第20号貝集積地は中央部に位置し、長軸1.2m、短軸0.9mの不定形で、貝層の厚さは最大で8cmである。第21号貝集積地は中央部に位置し、長軸1.7m、短軸1.4mの不定形で、貝層の厚さは最大で4cmである。

第20号貝集積地出土貝種一覧表

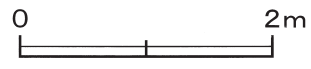
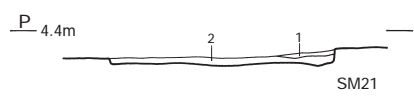
No.	貝種	重さ	比率	殻頂数	備考
1	ベンケイガイ	20.0	1.16	3	
2	マツカサガイ	300.0	17.44	L=135 R=136	淡水
3	コタマガイ	40.0	2.33	17	
4	ウバガイ	140.0	8.14	7	
5	マツカサガイ細片	260.0	15.12		淡水
6	ウバガイ細片	960.0	55.81		

第21号貝集積地出土貝種一覧表

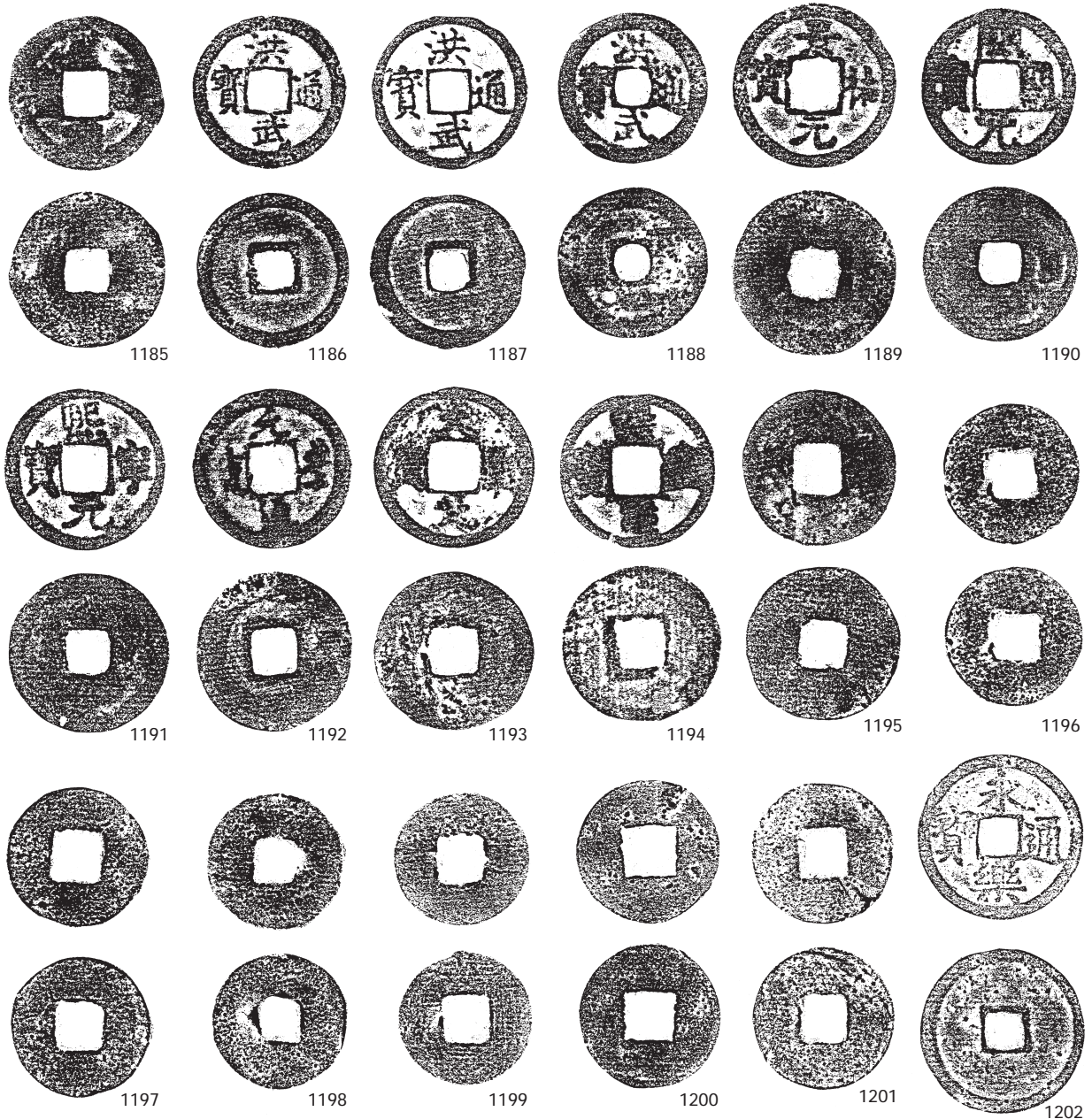
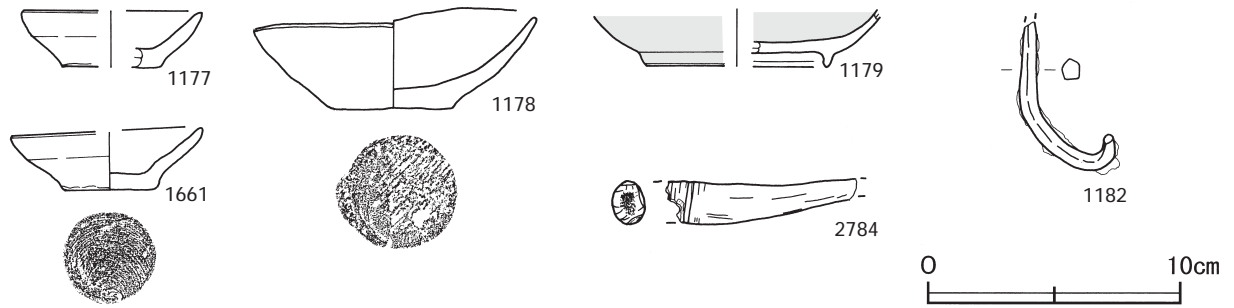
No.	貝種	重さ	比率	殻頂数	備考
1	タニシ	3.0	0.12	1	
2	タニシ	38.0	1.51	1	
3	ベンケイガイ	20.0	0.79	4	
4	マツカサガイ	700.0	27.77	L=109 R=109	淡水
5	コタマガイ	60.0	2.38	34	
6	ウバガイ	360.0	14.28	22	
7	ウバガイ細片	1,340.0	53.15		



第270图 第27号建物跡実測図



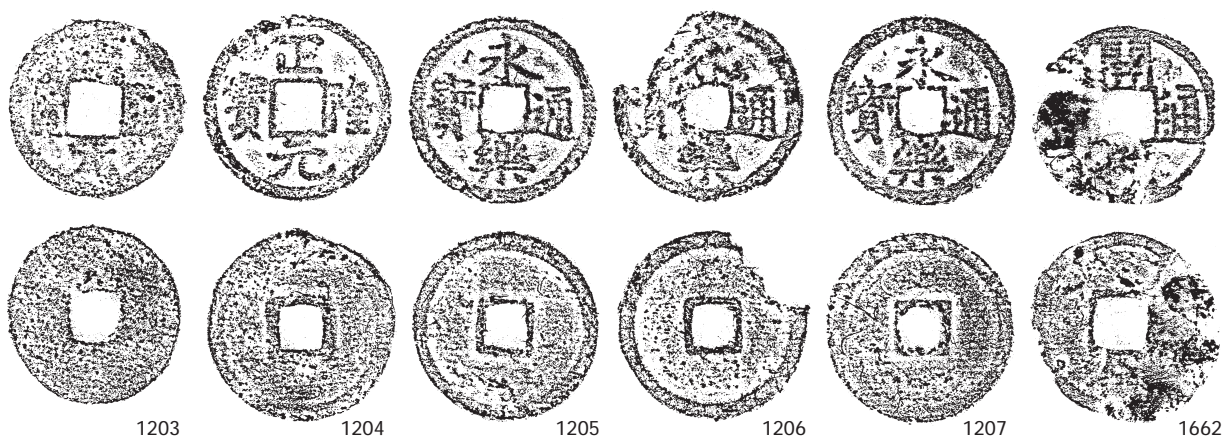
第271图 第27号建物跡貝集積地土層図



第272図 第27号建物跡出土遺物実測図(1) [古銭は原寸大]

遺物出土状況 土師質土器片60点(皿43, 内耳鍋17), 陶器片3点(碗2, 甕1), 石器3点(砥石1, 火打石2), 金属製品30点(古銭23, 不明7)が出土している。1178・1179は北部の黒色土面中, 1177は覆土中から出土している。古銭は北西部と中央部の黒色土面中や黒色土面下の砂層からの出土が多い。1196~1201は中央部

からまとまって出土しており、銭径の小さい無文銭である。1661は第300号、1662は第305号土坑内から出土している。



第273図 第27号建物跡出土遺物実測図（2）[古銭は原寸大]

第27号建物跡出土遺物観察表（第272・273図）

番号	器形	器質	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1177	小皿	土師質土器	[7.2]	2.4	(4.0)	長石・雲母・赤色粒子	にぶい橙	普通	底部回転糸切り	覆土中	40%
1661	小皿	土師質土器	[7.7]	2.5	3.8	長石・雲母	橙	普通	底部回転糸切り	SK300内	60%
1178	皿	土師質土器	11.1	4.0	4.6	長石	にぶい橙	普通	底部回転糸切り	北部黒色土中	95% PL42

番号	器形	器質	口径	器高	底径	胎土・色調	絵付・釉薬	文様・特徴	産地・年代	出土位置	備考
1179	白磁碗	磁器	—	(2.3)	[7.2]	灰白・灰白	白磁	高台畳付部釉剥ぎ	明, 15C後半~16C前半	北部黒色土中	5%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
1182	耳金	(5.9)	3.9	0.8	(15.6)	鉄	断面方形カ, 先端部屈曲	東部砂層	
2784	骨角未製品	(7.7)	1.7	1.3	(11.6)	鹿角	小刀の柄部カ, 全面研磨, 端部に刻み	覆土中	PL53

番号	銭名	径	孔径	厚さ	重さ	初鑄年	材質	特徴	出土位置	備考
1185	□□□□	2.37	0.71	0.09	2.38	—	銅	判読不能, 模鑄	中央黒色土中	
1186	洪武通寶	2.36	0.61	0.14	3.58	1368	銅	真書	西部黒色土中	
1187	洪武通寶	2.38	0.58	0.13	2.94	1368	銅	真書	西部黒色土下	
1188	洪武通寶	2.28	0.53	0.13	(3.32)	1368	銅	真書, 円孔	西部黒色土下	
1189	景祐元寶	2.53	0.77	—	(2.76)	1034	銅	真書, 星形孔	北部黒色土下	
1190	開元通寶	2.40	0.66	0.12	4.14	621	銅	真書, 背文字有り	北部黒色土中	
1191	熙寧元寶	2.45	0.65	0.12	3.75	1068	銅	篆書	東部覆土中	
1192	元豐通寶	2.42	0.69	0.11	3.70	1078	銅	行書	北部黒色土下	
1193	天聖元寶	2.45	0.73	0.12	2.94	1023	銅	真書	覆土中	
1194	熙寧元寶	2.37	0.70	0.11	(3.34)	1068	銅	篆書	中央部黒色土面	
1195	□□□□	2.33	0.71	0.08	2.90	—	銅	判読不能, 模鑄	東部黒色土中	
1196	—	2.10	0.74	0.03	1.10	—	銅	無文銭	中央黒色土中	
1197	—	2.10	0.70	0.07	1.56	—	銅	無文銭	中央黒色土中	
1198	—	2.04	0.61	0.04	1.30	—	銅	無文銭	中央黒色土中	
1199	—	2.02	0.74	0.04	1.12	—	銅	無文銭	中央黒色土中	
1200	—	2.18	0.74	0.07	2.14	—	銅	無文銭	中央黒色土中	
1201	—	2.13	0.67	0.06	1.42	—	銅	無文銭	中央黒色土中	
1202	永樂通寶	2.50	0.58	0.08	2.98	1408	銅	真書	中央黒色土下	
1203	開元通寶	2.35	0.66	0.10	2.74	621	銅	真書	北部黒色土中	
1204	正隆元寶	2.53	0.61	0.13	4.34	1157	銅	真書	覆土中	金の銭

番号	銭名	径	孔径	厚さ	重さ	初鋳年	材質	特徴	出土位置	備考
1205	永樂通寶	2.48	0.49	0.14	3.60	1408	銅	真書	覆土中	
1206	永樂通寶	2.52	0.53	0.13	(3.36)	1408	銅	真書, 欠け	覆土中	
1207	永樂通寶	2.52	0.54	0.11	3.74	1408	銅	真書	覆土中	
1662	開元通寶	2.40	0.72	0.12	(3.26)	621	銅	真書	SK305内	

所見 炉や日常雑器類などの遺物も多く出土し、整地された黒色土面からは柱穴も検出されていることから、上屋をもつ建物跡と判断した。黒色土が厚いのは、生活面の主体である黒色土を頻繁に積み重ねたためと推測される。黒色土面下から土坑が検出されているが、用途については不明である。

第28号建物跡 4区HK-3 (第274~277図)

位置 調査区中央部 D13g5区を中心に位置している。

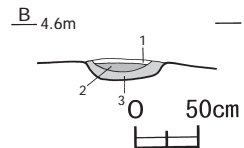
確認状況 表砂を8m除去した標高約4.9mから黒色土面を確認した。上面はほぼ平坦であり、炉や複数の土坑が検出された。

規模と施設 東部が調査区域外に延びているため、黒色土の範囲は南北25.2m、東西は8.4mだけ確認した。炉1基、土坑11基が構築されている。

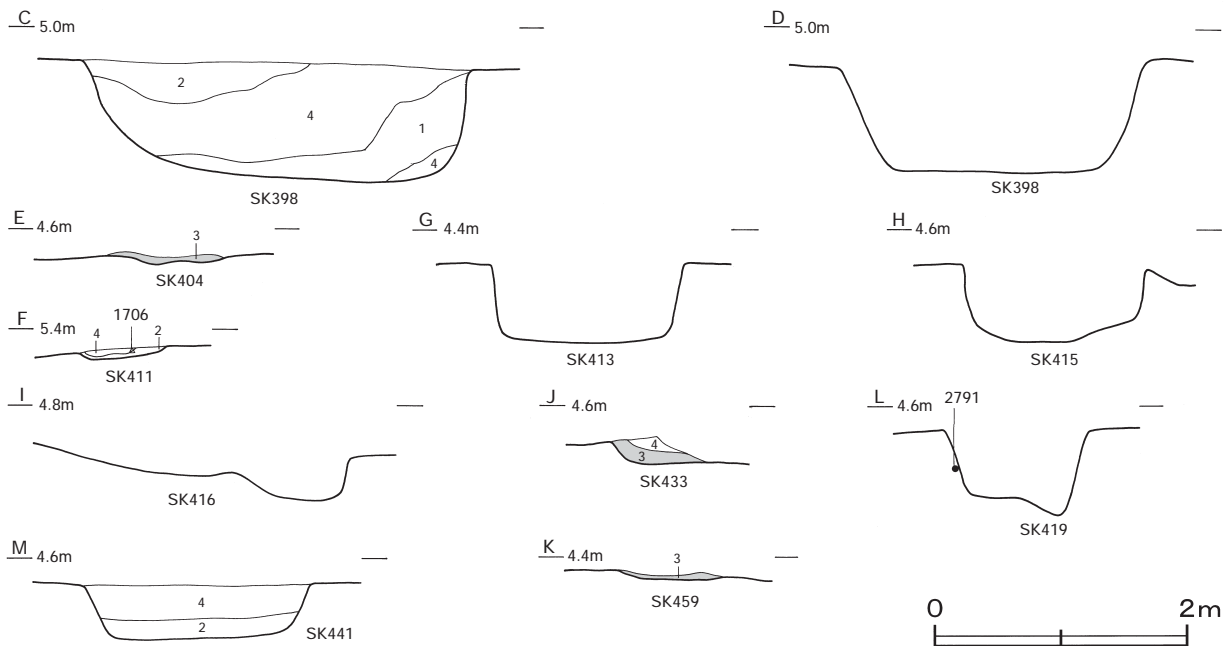
床 ほぼ平坦で、南部では厚さ約20cm、その他は厚さ6~8cmの黒色土を貼り付けて構築されている。

炉 (第274図) 中央やや北寄りに位置している。黒色土の厚さは6~10cm、砂を17cm掘り込んで構築されている。

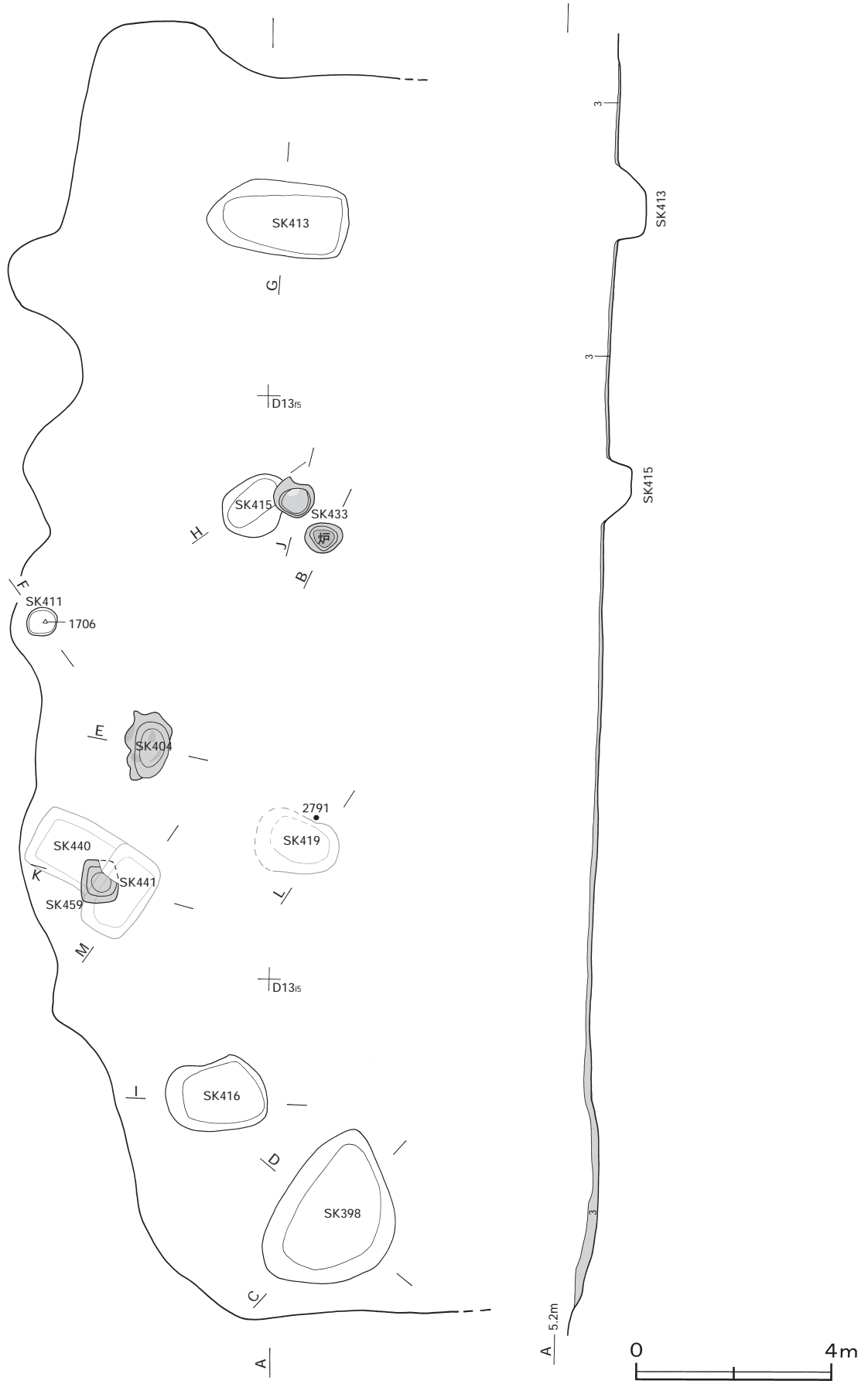
土坑 (第275図) 第404・433・459号土坑は中央部に位置し、黒色土で構築されている。第440・441号土坑は第459号土坑の下層から検出された。



第274図 第28号建物跡炉土層図

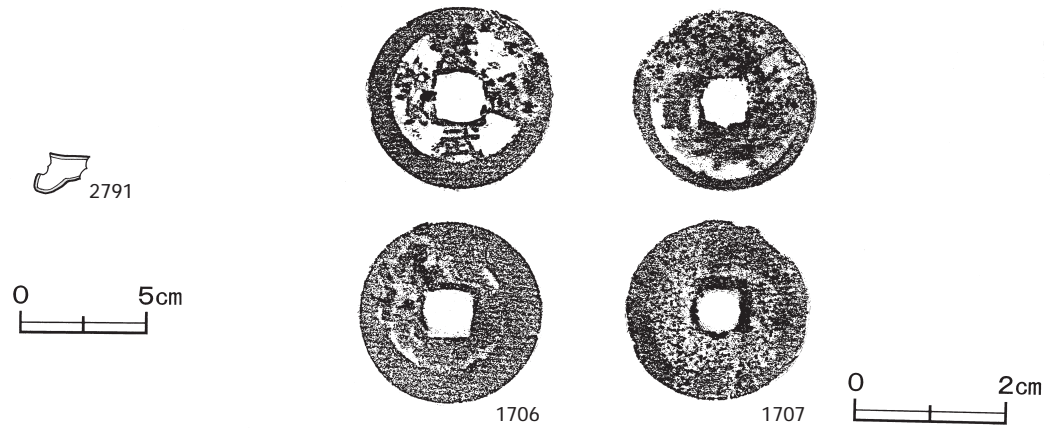


第275図 第28号建物跡土坑土層・断面図



第276图 第28号建物跡実測図

遺物出土状況 土師質土器片1点(内耳鍋), 金属製品1点(不明)が出土しただけである。細片のため図示できなかった。1706は「洪武通寶」で, 第411号土坑内から出土している。



第277図 第28号建物跡出土遺物実測図

第28号建物跡出土遺物観察表 (第277図)

番号	器形	器質	口径	器高	底径	胎土・色調	絵付・釉薬	文様・特徴	産地・年代	出土位置	備考
2791	青磁盤	磁器	—	(1.7)	—	灰白・オリブ	青磁釉	盤底部片	中国	SK419内	5%

番号	銭名	径	孔径	厚さ	重さ	初鑄年	材質	特徴	出土位置	備考
1706	洪武通寶	2.44	0.61	0.13	3.76	1368	銅	真書	SK411内	
1707	□和通寶	2.43	0.52	0.12	(3.60)	—	銅	判読不能, 星形孔	SK411内	

所見 炉や広範囲にわたり整地された黒色土面が検出されたことから, 建物跡と判断した。しかし, 日常雑器類などの出土が少ないことから, 作業場や厩などの施設の可能性もある。時期は, 出土遺物が少なく明確にすることができない。

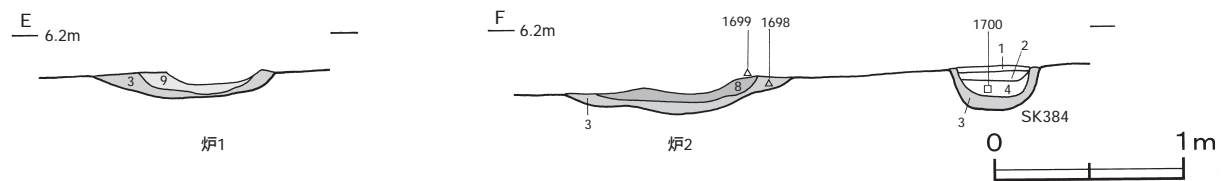
第29号建物跡 4区HK-8 (第278~281図)

位置 調査区中央部E13b5区を中心に位置している。

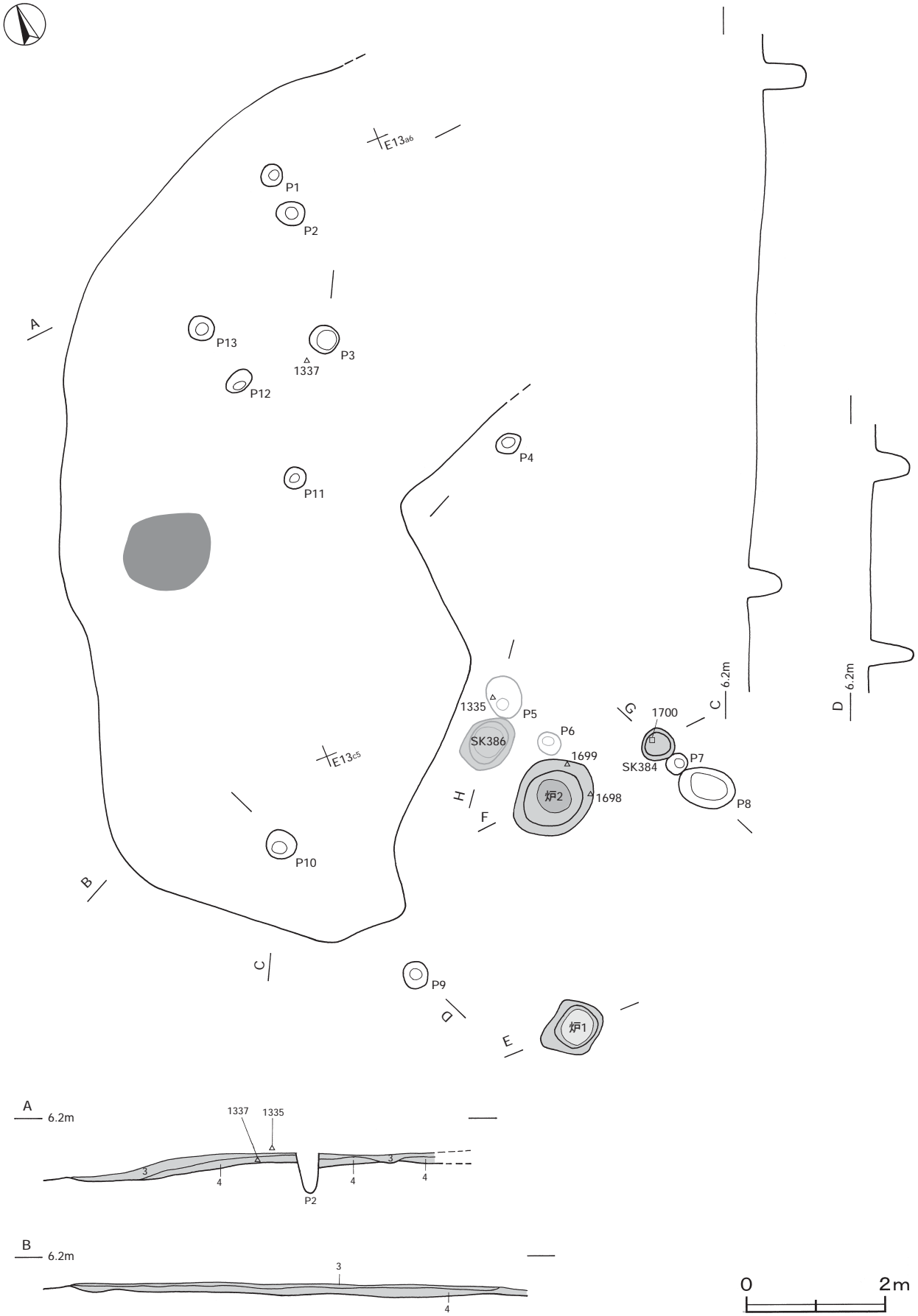
確認状況 表砂を6.5m除去した標高約5.7~5.8mから黒色土面を確認した。上面はほぼ平坦であるが, 北西部は西に向かって緩やかに傾斜している。南東部から複数の炉や土坑が検出された。

規模と施設 黒色土の範囲は南北10.5m, 東西5.4mである。炉2基, 土坑2基が構築されている。

床 ほぼ平坦で, 厚さ約4~14cmの黒色土を貼り付けて構築されている。北西の傾斜部は黒色土が流れ出したため, 黒色土は14cmと厚い。



第278図 第29号建物跡炉・土坑土層図

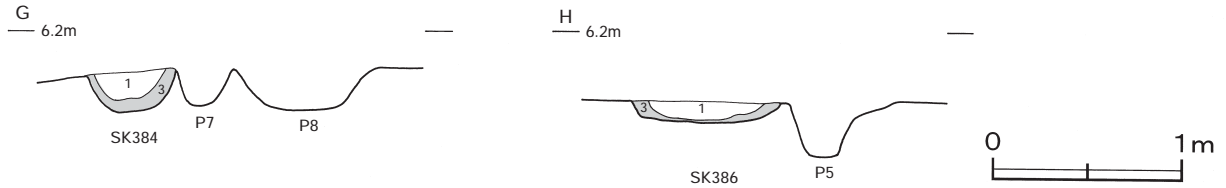


第279图 第29号建物跡実測図

炉（第278図） 2基とも南東部の黒色土の範囲外に構築されている。底面の黒色土の厚さは第1号炉が2～10cm，第2号炉が2～7cmである。

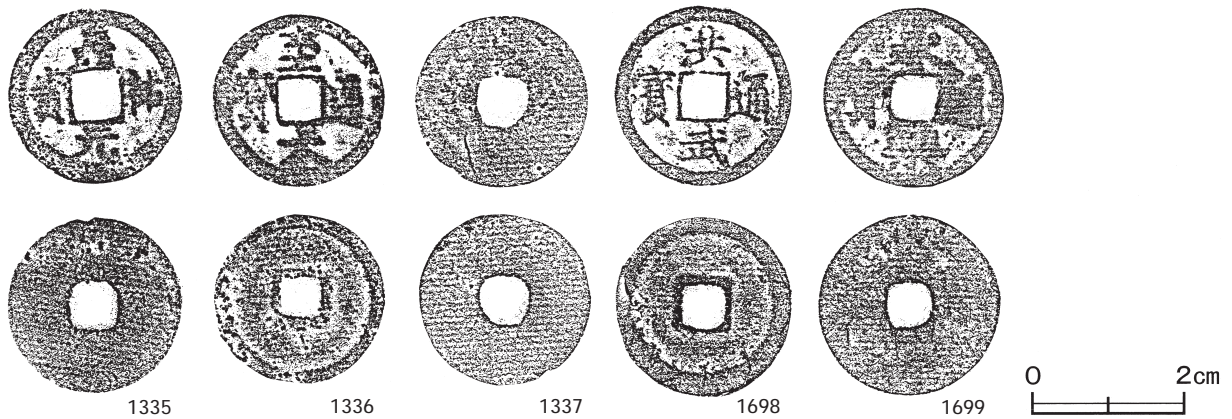
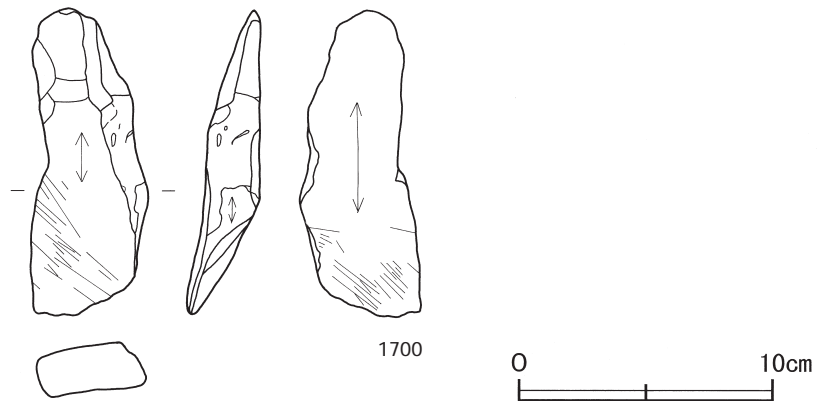
ピット 13か所。P4・P6は深さ26cm・24cmとやや浅いが，その他の深さは30～66cmである。P1・P6・P10を柱穴と考えたが，その他が不規則的な配置であるため，性格は不明である。

土坑（第280図） 黒色土で構築された第384・386号土坑がある。第386号土坑の黒色土は2cmと薄く，第384号土坑の黒色土は8cmと厚い。



第280図 第29号建物跡土坑土層図

遺物出土状況 土師質土器片1点(皿)，金属製品5点(古銭3，不明2)が出土している。1335はP5内，1337は中央部の覆土中と黒色土中から出土している。1698・1699は第2号炉内，1700は第384号土坑から出土している。古銭は1699の「永樂通寶」が最新銭である。



第281図 第29号建物跡出土遺物実測図

第29号建物跡出土遺物観察表（第281図）

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
1700	砥石	12.1	4.7	2.9	109.0	凝灰岩	砥石2面, 他は調整面	SK384内	

番号	銭名	径	孔径	厚さ	重さ	初鑄年	材質	特徴	出土位置	備考
1335	嘉祐元寶	2.35	0.62	0.13	3.72	1056	銅	真書	中央部覆土中	
1336	至大通寶	2.32	0.57	0.14	3.98	1310	銅	真書	覆土中	
1337	—	2.30	0.61	0.04	2.22	—	銅	模鑄	中央部黒色土中	
1698	洪武通寶	2.39	0.62	0.11	2.96	1368	銅	真書	炉2内	
1699	永樂通寶	2.42	0.62	0.11	3.82	1408	銅	真書	炉2内	

所見 整地された黒色土面と南東部から検出された炉や土坑を含め、建物跡と判断した。範囲は東部へ延びる可能性がある。整地された黒色土面は、作業場であった可能性が高い。時期は、出土遺物が少なく明確にすることができない。

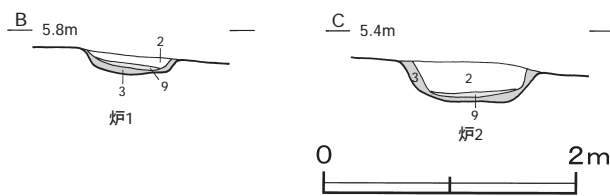
第30号建物跡 4区HK-11（第282～286図）

位置 調査区北部E13c5区を中心に位置している。

確認状況 表砂を8m除去した標高5.7～5.8mから黒色土面を確認した。上面はほぼ平坦で、複数の炉や土坑が検出された。

規模と施設 黒色土の範囲は最大長で南北13.2m、東西11mが確認された。黒色土面はさらに東部へ続いていると考えられる。炉2基、土坑4基が構築されている。

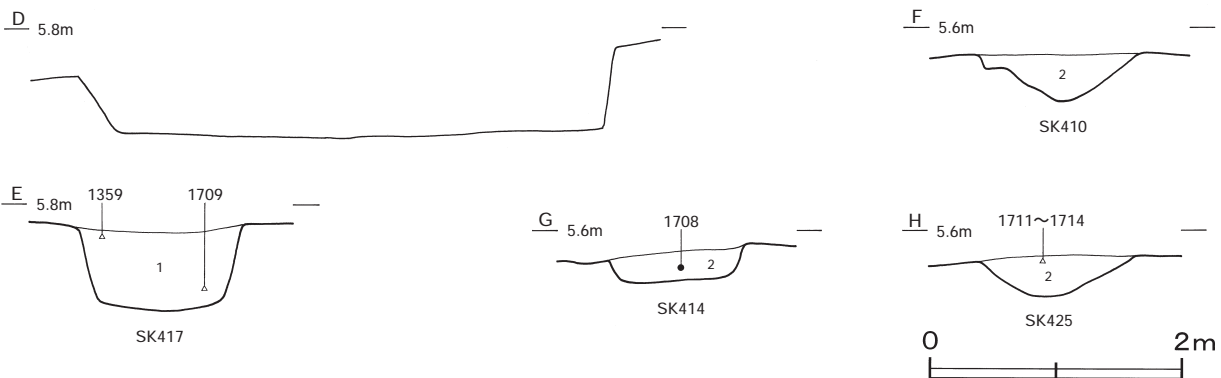
床 ほぼ平坦で、黒色土の厚さは10～20cmである。北部には小範囲ではあるが、炭化材がまとまって検出されている。



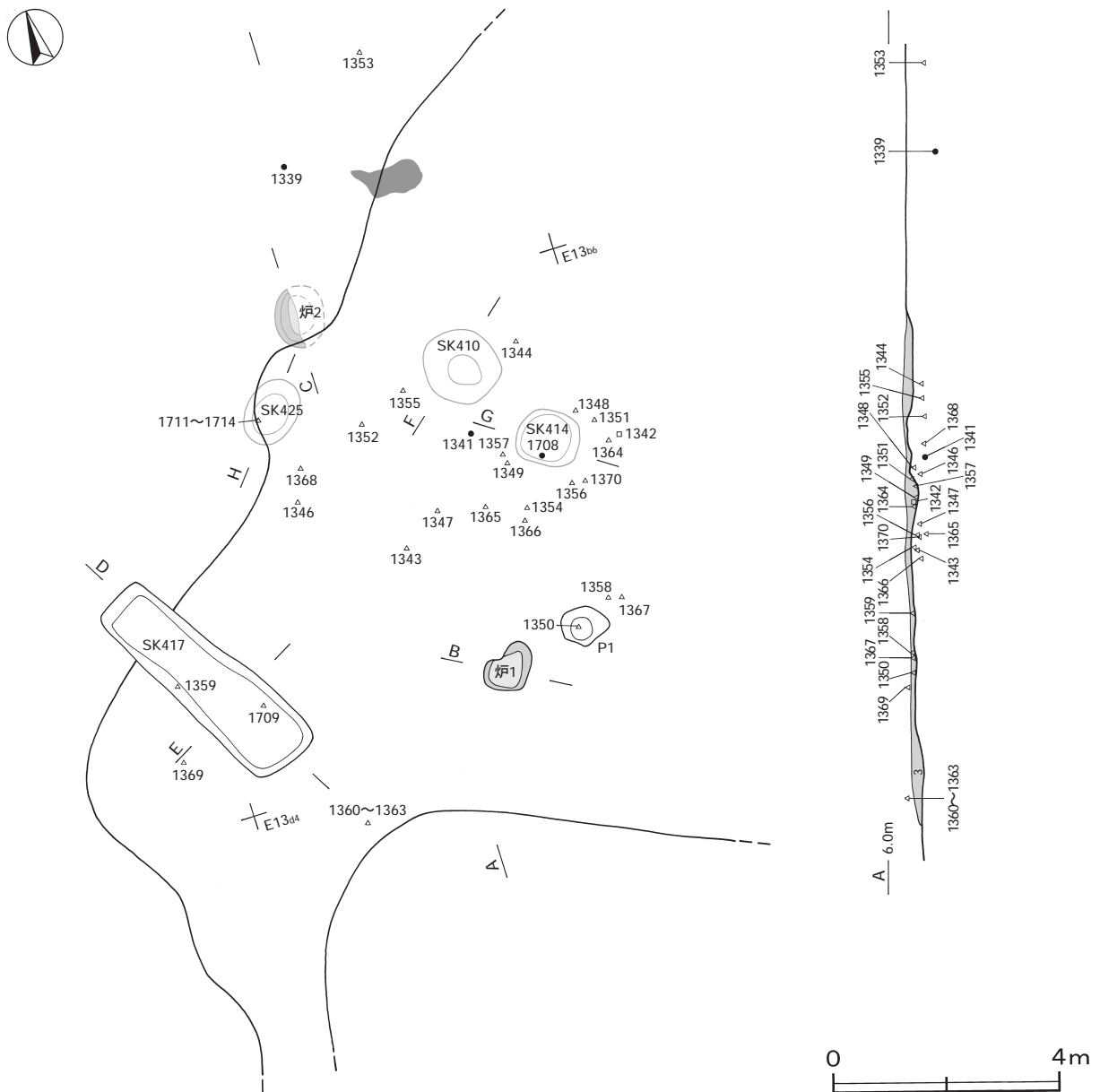
炉（第282図） 第1号炉は中央部、第2号炉は北西部の黒色土面と砂層の境に位置し、第2号炉は約半分だけが残存している。第1・2号炉とも厚さ2～5cmの黒色土を貼り付けて構築されている。

第282図 第30号建物跡炉土層図

ピット 深さは25cmで、対応するピットが検出されず性格不明である。



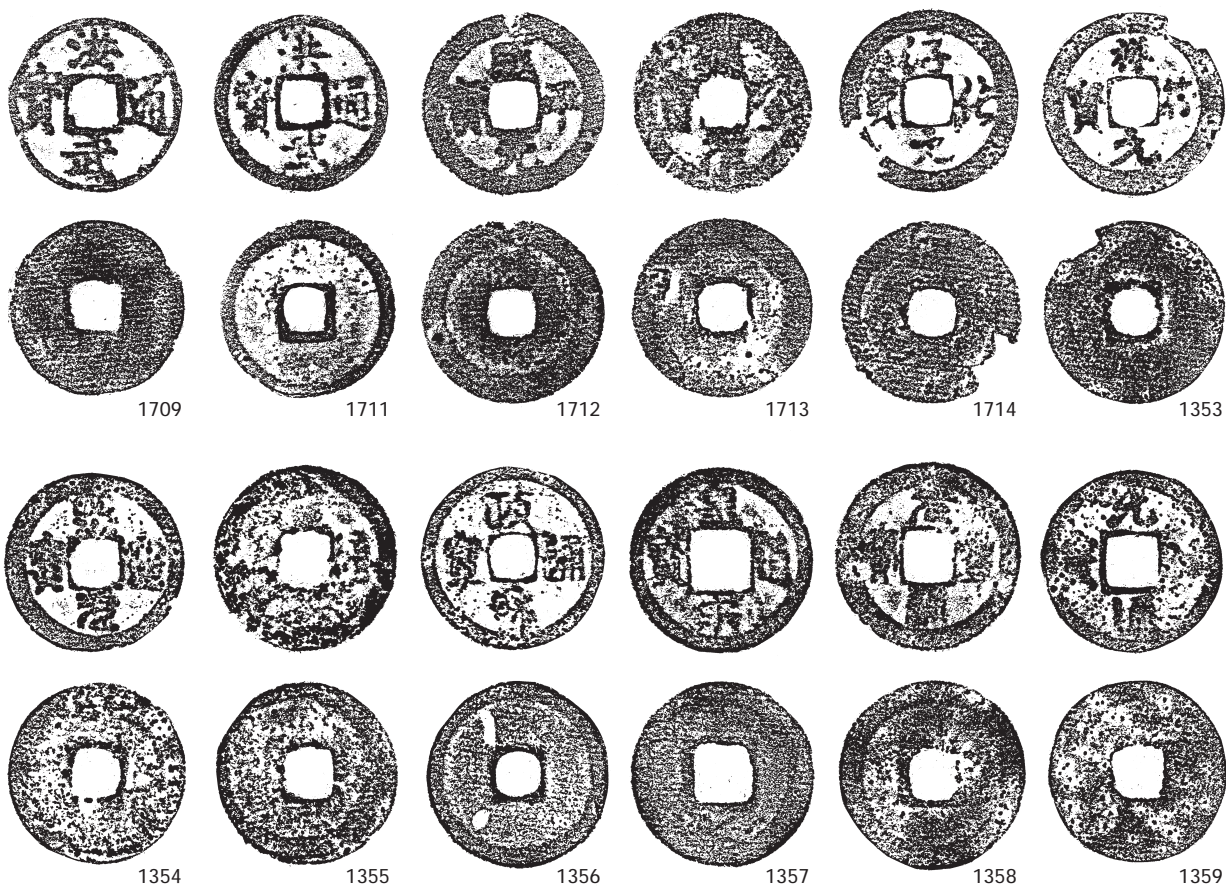
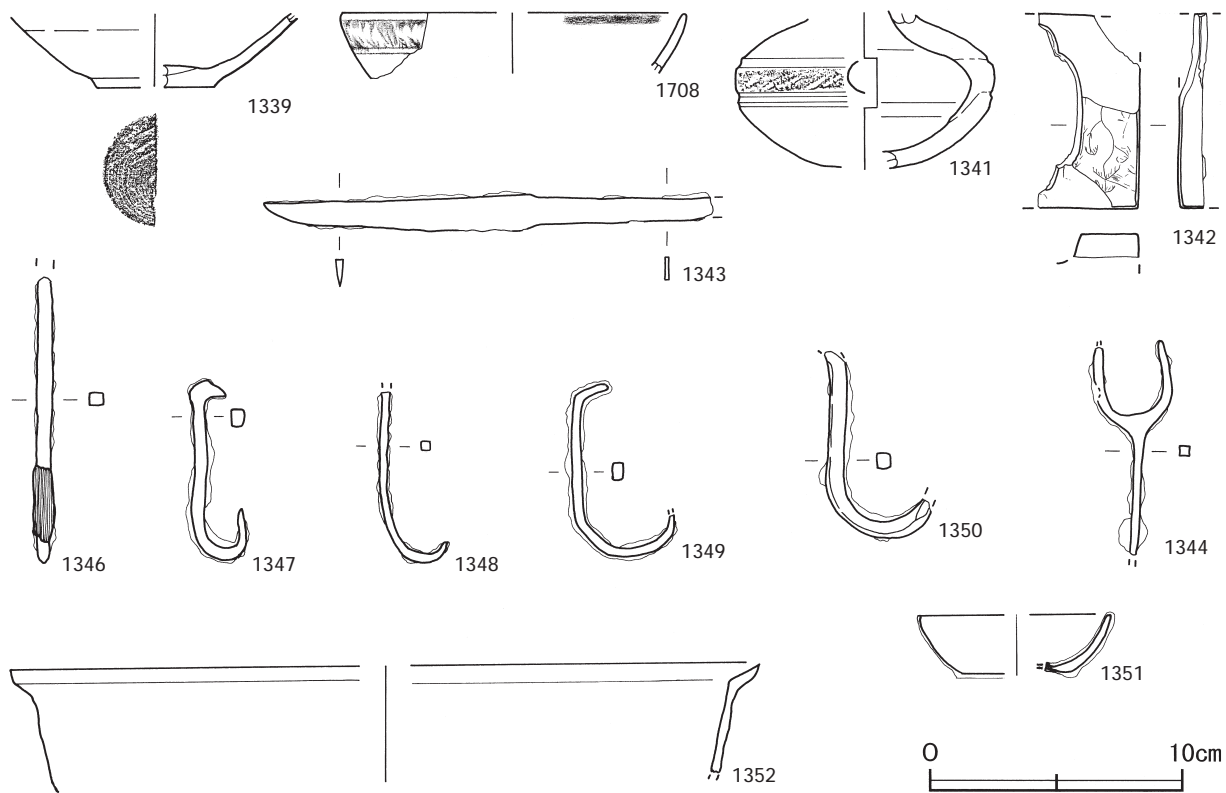
第283図 第30号建物跡土坑土層・断面図



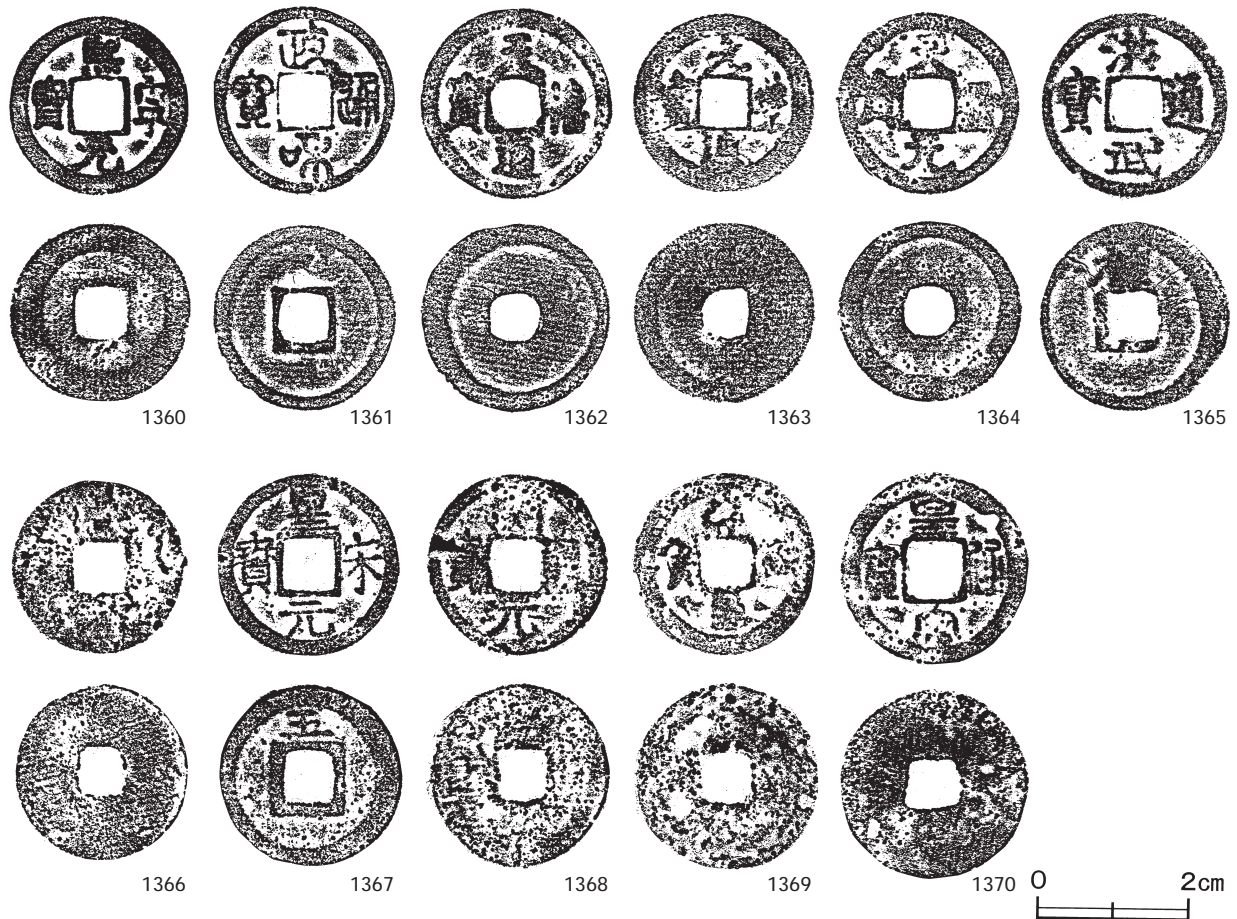
第284図 第30号建物跡実測図

土坑（第283図） 第417号土坑は第1次面の南西部，第410・414・425号土坑は中央部の黒色土面を除去した第2次面から検出された。

遺物出土状況 土師質土器片48点（皿41，内耳鍋7），須恵器片1点（甗），石製品3点（硯），金属製品35点（小刀1，簀1，棒状金具1，釘2，釣針カ1，吊金具2，鏡1，鉄鍋1，古銭18，不明7）が出土している。1339は北部の砂層，1341は中央部の黒色土面を除去した層からそれぞれ出土している。1343・1344・1346・1347・1352の鉄製品は中央部の黒色土面下の砂層から出土している。1342の硯は東部の黒色土中からの出土で，花か草の絵が線刻されている。1348・1349・1351は東部の黒色土下の砂層から出土している。1351は鉄製で内外面とも錆が激しい。古銭は初鑄年1368年の「洪武通寶」が最新銭である。1359・1708・1709・1711～1714はそれぞれ第414・417・425号土坑内から出土している。



第285図 第30号建物跡出土遺物実測図(1) [古銭は原寸大]



第286図 第30号建物跡出土遺物実測図（2）

第30号建物跡出土遺物観察表（第285・286図）

番号	器形	器質	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1339	皿	土師質土器	—	(2.9)	[4.6]	雲母	にぶい橙	普通	底部回転糸切り	北部砂層	10%
1341	甕	須恵器	—	(6.3)	—	雲母	灰	普通	体部外面へラ状工具による刺突、3状の洗線	中央部黒色土下	40%

番号	器形	器質	口径	器高	底径	胎土・色調	絵付・釉薬	文様・特徴	産地・年代	出土位置	備考
1708	碗	磁器	[13.8]	(2.4)	—	灰白・灰白	染付・透明釉	草木文	—	SK414内	5%

番号	器種	長さ(口径)	幅(器高)	厚さ(底径)	重量	材質	特徴	出土位置	備考
1342	硯	(7.8)	(4.0)	(1.2)	(32.7)	泥岩	花・草カの線刻入り	東部黒色土中	PL47
1343	小刀	(17.9)	1.5	0.3	(22.4)	鉄	茎部欠損	中央部黒色土下	PL49
1344	箆	(8.7)	0.4	0.4	(11.9)	鉄	断面方形	中央部黒色土下	
1346	棒状金具	(11.4)	0.8	0.4	(20.0)	鉄	断面方形、一部木質付着	中央部黒色土下	
1347	釘	7.2	2.3	0.7	19.7	鉄	頭部潰れ、断面方形	中央部黒色土下	
1348	釣針カ	(6.8)	0.4	0.3	(5.7)	鉄	断面方形	東部黒色土下	
1349	吊金具	6.9	4.2	0.8	18.3	鉄	断面方形	東部黒色土下	
1350	吊金具	(7.4)	0.6	0.6	(26.1)	鉄	断面方形	P 1 内	
1351	鉢	[7.6]	2.4	[3.4]	(82.3)	鉄	内外面錆付着	東部黒色土下	PL49
1352	鉄鍋	[29.8]	(4.7)	—	(28.7)	鉄	口縁部のみ	中央部黒色土下	

番号	銭名	径	孔径	厚さ	重さ	初鑄年	材質	特徴	出土位置	備考
1709	洪武通寶	2.32	0.60	0.09	2.74	1368	銅	真書	SK417内	
1711	洪武通寶	2.31	0.56	0.13	3.82	1368	銅	真書	SK425内	
1712	咸平元寶	2.45	0.67	0.09	(3.10)	998	銅	真書、欠け	SK425内	
1713	□□□寶	2.42	0.62	0.11	(2.70)	—	銅	判読不能、模鑄	SK425内	
1714	淳化元寶	2.44	0.62	0.12	(3.06)	990	銅	草書、欠け	SK425内	

番号	銭名	径	孔径	厚さ	重さ	初鋳年	材質	特徴	出土位置	備考
1353	祥符元寶	2.47	0.58	0.10	(2.96)	1008	銅	真書, 円孔, 欠け	北部砂層	
1354	熙寧元寶	2.39	0.62	0.12	3.28	1068	銅	篆書	中央部黒色土面	
1355	□□□□	2.42	0.56	0.13	4.06	—	銅	判読不能, 模鋳	中央部黒色土面	
1356	政和通寶	2.44	0.59	0.13	(3.42)	1111	銅	篆書, 円孔	東部黒色土面	
1357	皇宋通寶	2.44	0.79	0.11	3.28	1038	銅	真書	中央部黒色土面	
1358	元祐通寶	2.46	0.62	0.12	3.68	1086	銅	篆書	南部黒色土面中	
1359	元符通寶	2.37	0.66	0.11	3.30	1098	銅	行書	SK417内	
1360	熙寧元寶	2.36	0.66	0.14	3.74	1068	銅	真書	南部覆土中	
1361	政和通寶	2.48	0.66	0.11	3.02	1111	銅	篆書	南部覆土中	
1362	天禧通寶	2.52	0.64	0.12	3.98	1017	銅	真書	南部覆土中	
1363	元豊通寶	2.40	0.57	0.10	3.34	1078	銅	行書	南部覆土中	
1364	天聖元寶	2.44	0.66	0.08	(2.56)	1023	銅	真書	東部黒色土面	
1365	洪武通寶	2.50	0.65	0.11	(3.28)	1368	銅	真書, 背上「桂」	中央部黒色土面	
1366	□□□□	2.33	0.64	0.13	3.02	—	銅	判読不能, 模鋳	中央部黒色土面	
1367	皇宋元寶	2.44	0.68	0.10	3.02	1253	銅	真書, 背上「五」	南部黒色土面中	
1368	開元通寶	2.39	0.63	0.12	2.86	621	銅	真書	中央部黒色土面	
1369	□□□□	2.43	0.69	0.10	(1.66)	—	銅	判読不能, 模鋳, 鋳造斑	西部覆土中	
1370	皇宋通寶	2.52	0.68	0.08	(3.06)	1038	銅	篆書	東部黒色土面	

所見 炉や広範囲にわたり整地された黒色土面が検出され、日常雑器類などが出土していることから、建物跡と判断した。柱穴は上層を構築する際に埋め戻されたため、検出できなかつたと考えられる。生活面を構築する黒色土面中から出土した須恵器片は、黒色土が古墳時代の遺跡がある他所より持ち込まれたことを示す貴重な資料である。

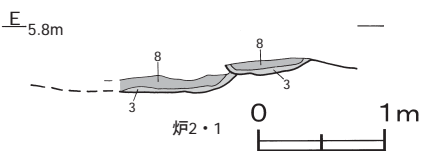
第31号建物跡 4区HK-26 (第287~293図)

位置 調査区中央部 E13f2区を中心に位置している。

確認状況 表砂を約7m除去した標高5.6~6mから、第1次面である黒色土面を確認した。上面はほぼ平坦である。さらに、下層から第2・3次面が確認され、複数の炉や土坑、土壙墓が検出された。

規模と施設 第1次面の黒色土の範囲は南北7.8m、東西10m、第2次面は南北5m、東西6m、第3次面は南北10m、東西7mで、3面とも不定形である。炉3基、土壙墓2基、土坑2基が構築され、貝集積地3か所が確認されている。

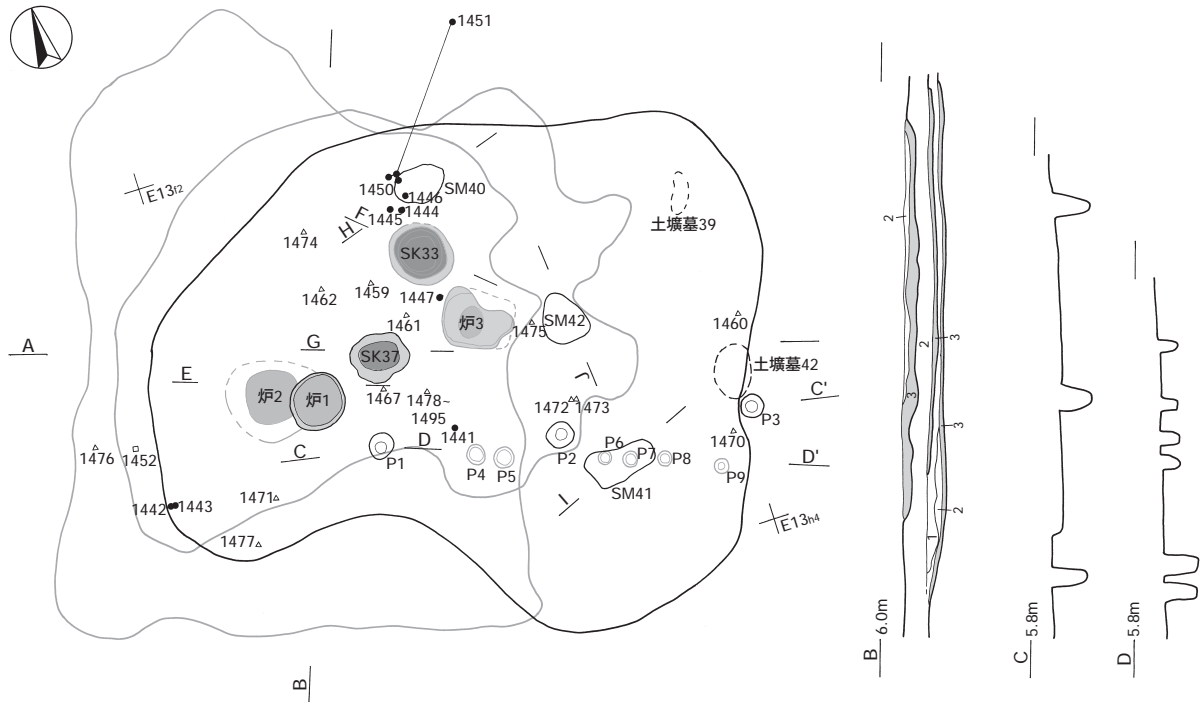
床 3面ともほぼ平坦で、黒色土層の厚さは第1次面が6~36cm、第2・3次面が2~8cmである。第1次面は第2・3次面と比べると黒色土を厚く貼り付けて構築されている。



炉 (第287図) 3基とも中央部に位置しており、第1号炉は第2号炉を掘り込んで構築されている。第1号炉は第1次面、第2・3号炉は第2次面から検出されたものである。

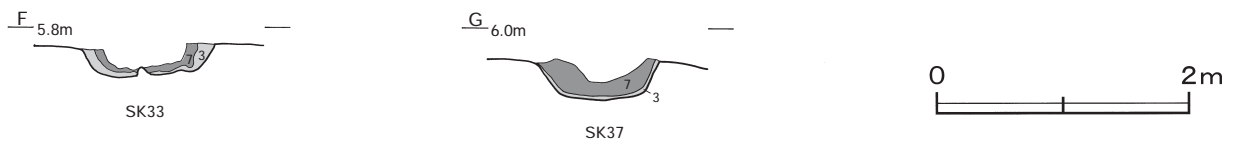
第287図 第31号建物跡炉土層図

ピット 9か所。P1~P3は深さ56~62cmで第1次面、P4~P9は深さ28~56cmで、第2次面の調査時に検出されたものである。P1~P3は上屋を支えた柱穴の一部と考えられるが、対応するピットは検出されなかつた。



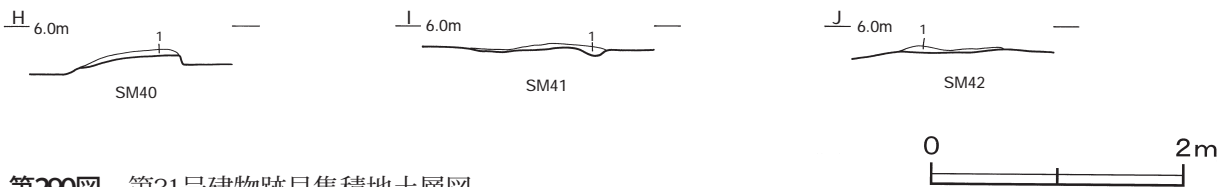
第288図 第31号建物跡実測図

土坑（第289図） 2基とも中央部に位置している。第37号土坑は第1次面，第33号土坑は第2次面から検出された。第37号土坑は厚さ10～22cmの粘土を貼り付けて構築されている。



第289図 第31号建物跡土坑土層図

貝集積地（第290図） 第40号貝集積地は北部に位置し，長径0.8m，短径0.6mの楕円形で，貝層の厚さは最大で5 cmである。第41号貝集積地は東部に位置し，長軸1.1m，短軸0.6mの不定形で，貝層の厚さは最大で7 cmである。第42号貝集積地は中央部に位置し，長径0.8m，短径0.7mの不定形で，貝層の厚さが最大で4 cmである。



第290図 第31号建物跡貝集積地土層図

第40号貝集積地出土貝種一覧表

No.	貝種	重さ	比率	殻頂数	備考
1	ダンベイキサゴ	1.0	0.14	4	
2	オオタニシ	50.0	7.13	80	淡水
3	マツカサガイ	110.0	15.69	L=26 R=30	淡水 1個体接合
4	オオタニシ細片	330.0	47.08		淡水
5	マツカサガイ細片	65.0	9.27		淡水
6	その他	145.0	20.68		ウバガイなど

第41号貝集積地出土貝種一覧表

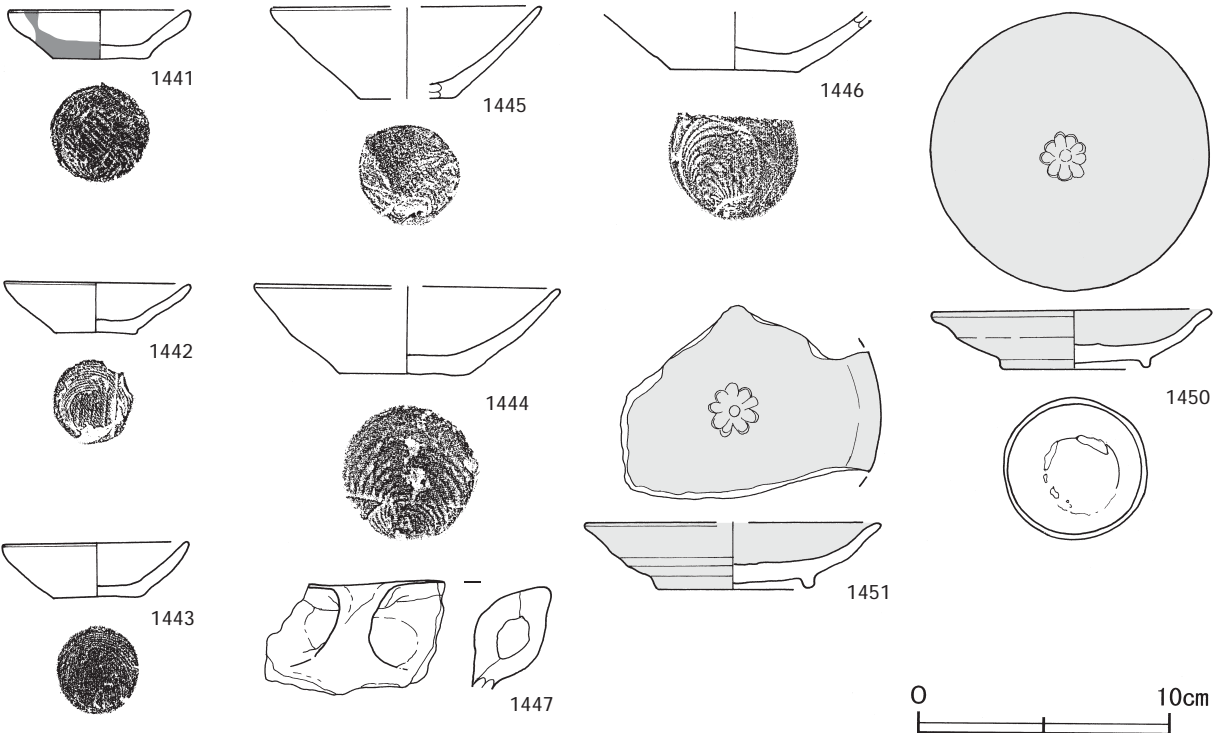
No.	貝種	重さ	比率	殻頂数	備考
1	オオタニシ	20.0	1.67	5	淡水
2	マツカサガイ	1,180.0	98.33	L=371 R=368	淡水 7個体接合

第42号貝集積地出土貝種一覧表

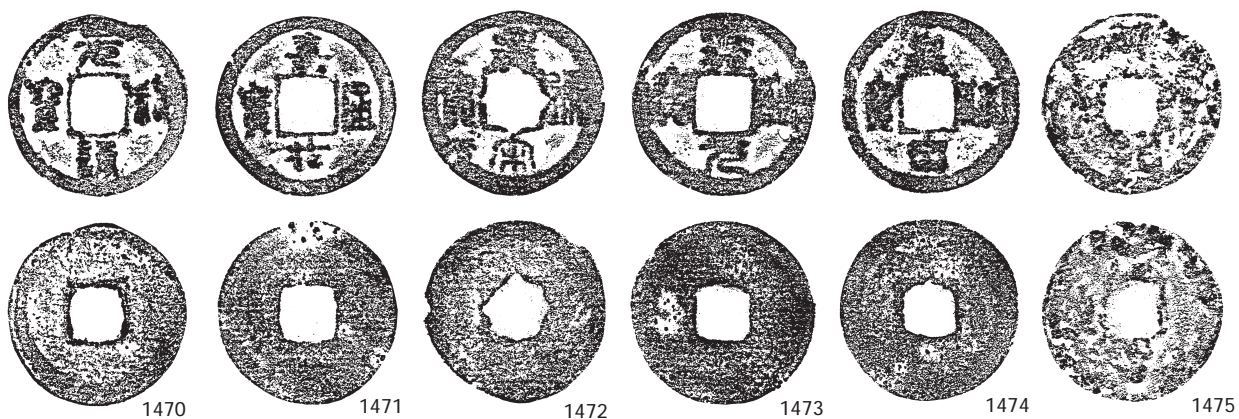
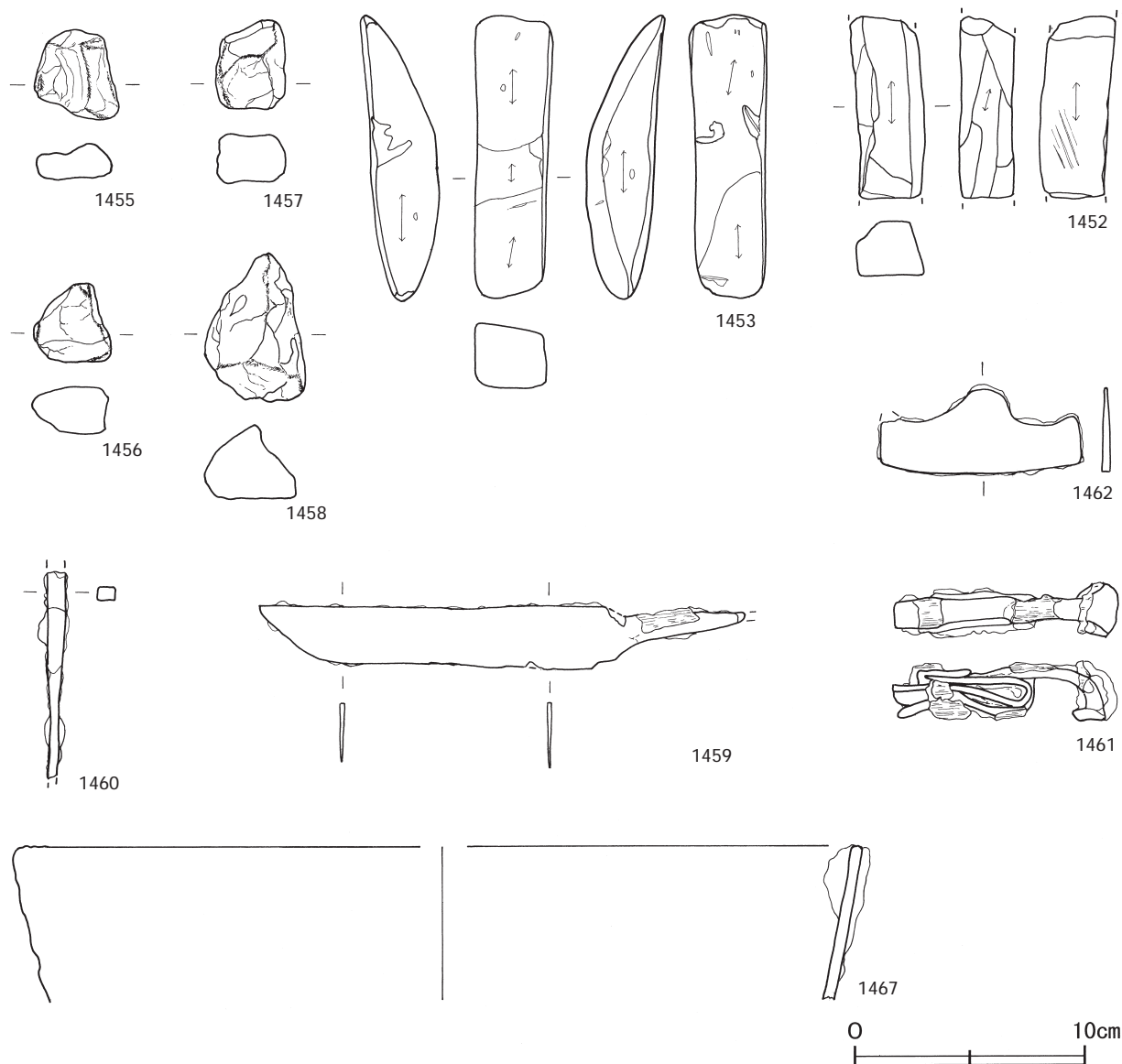
No.	貝種	重さ	比率	殻頂数	備考
1	マツカサガイ	2.0	0.53	1	淡水
2	イタボガキ属細片	28.0	7.47		
3	ウバガイ細片	345.0	92.00		

遺物出土状況 土師質土器片150点（皿80，内耳鍋69，播鉢1），陶器片4点（皿），石器14点（砥石2，火打石11，石臼カ1），金属製品54点（小刀1，火打金1，毛抜カ1，古銭26，釘1，鉄鍋4，不明20），礫5点が出土している。1441・1444・1446・1450・1451・1459・1462は第1次面中からの出土で，1450・1451は見込みに菊花文が施される。1442・1443は第3次面の覆土中，1447・1467・1478・1495は第3次面を除去した層から出土しており，1478～1495の18枚はまとめて出土している。古銭のうち「永樂通寶」が最新銭である。

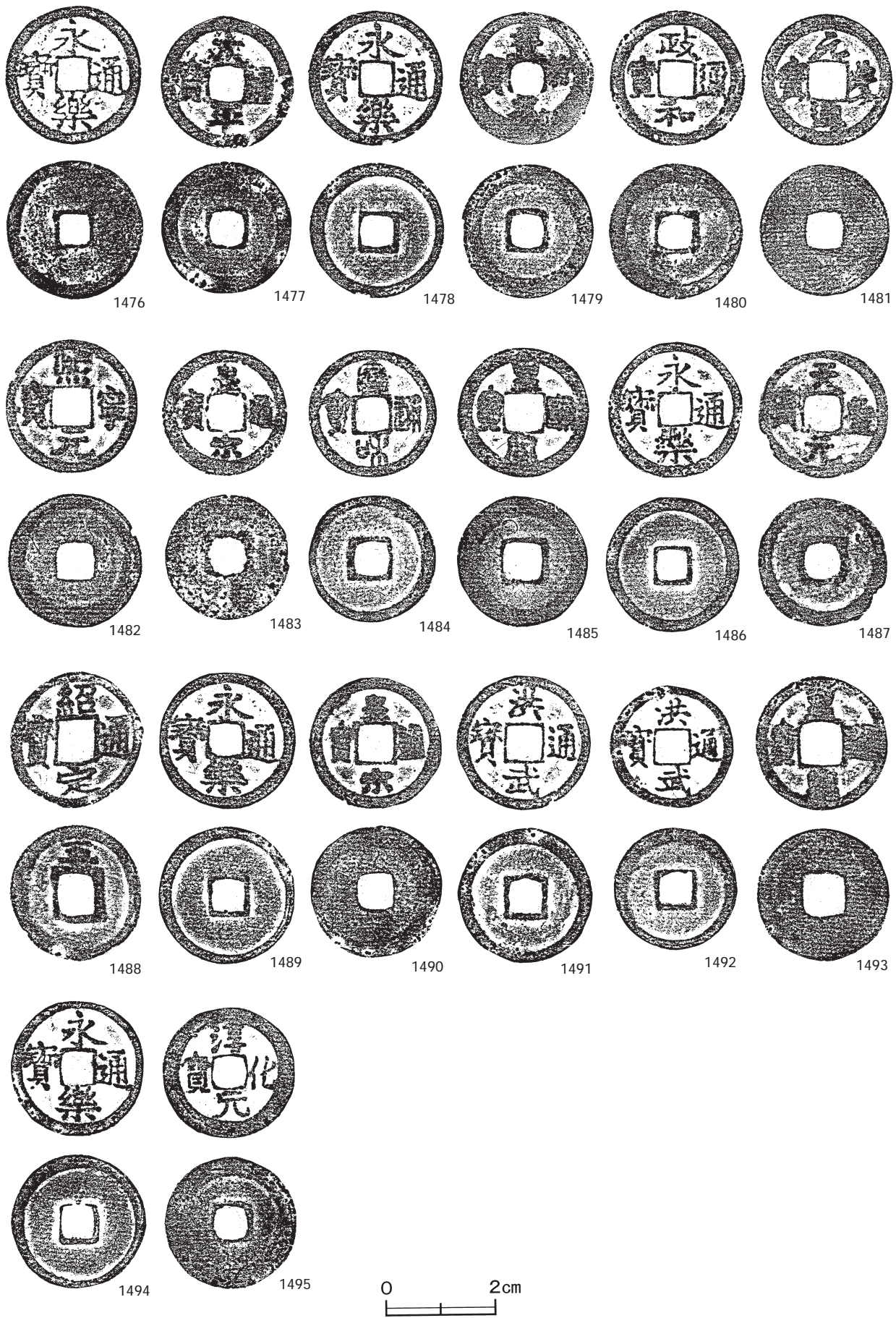
所見 炉や日常雑器類や，整地された黒色土面が検出されたことから建物跡と判断した。黒色土面からは柱穴も検出されたが，対応する柱穴列が検出されなかった。これは黒色土面の貼り替えと同様に何回かの建て替えが行われているため，柱穴が黒色土で埋め戻されたと推測される。時期は，出土した陶器の皿などから15世紀後半から16世紀初めと考えられる。



第291図 第31号建物跡出土遺物実測図（1）



第292図 第31号建物跡出土遺物実測図(2) [古銭は原寸大]



第293图 第31号建物跡出土遺物実測図(3)

第31号建物跡出土遺物観察表（第291～293図）

番号	器形	器質	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1441	小皿	土師質土器	7.0	2.0	3.8	長石・赤色粒子	にぶい橙	普通	底部回転糸切り, 油煙痕, 内外面煤付着	中央1次黒色土中	95% PL40
1442	小皿	土師質土器	7.5	2.2	3.5	雲母	明 褐 灰	普通	底部回転糸切り	南西部3次面覆土中	100% PL40
1443	小皿	土師質土器	7.3	2.0	3.2	雲母	にぶい橙	普通	底部回転糸切り	南西部3次面覆土中	60%
1444	皿	土師質土器	[12.0]	3.5	5.3	雲母	にぶい橙	普通	底部回転糸切り	中央部1次黒色土中	50%
1445	皿	土師質土器	[10.8]	3.7	[4.0]	雲母	灰 褐	普通	ナデ	北部3次黒色土中	50%
1446	皿	土師質土器	—	(2.2)	5.2	雲母・赤色粒子	にぶい橙	普通	底部回転糸切り	北部1次黒色土中	40%
1447	内耳鍋	土師質土器	—	(4.6)	—	雲母	浅 黄 橙	普通	口縁部ナデ, 外面煤付着	中央部3次黒色土下	5%

番号	器形	器質	口径	器高	底径	胎土・色調	絵付・釉薬	文様・特徴	産地・年代	出土位置	備考
1450	端反皿	陶器	11.0	2.4	6.0	灰白・浅黄	灰釉	見込みに印花文	瀬戸・美濃, 16C前半	北部1次黒色土中	100% 大窯Ⅲ期 PL37
1451	端反皿	陶器	[11.8]	2.7	5.3	灰白・浅黄	灰釉	見込みに印花文	瀬戸・美濃, 16C前半	北部1次黒色土中	50% 大窯Ⅲ期 PL37

番号	器種	長さ(口径)	幅(器高)	厚さ(底径)	重量	材質	特 徴	出土位置	備考
1452	砥石	(7.9)	3.3	2.3	(98.1)	砂岩	砥面3面	3次面覆土中	
1453	砥石	12.4	3.3	3.3	156.2	滑石	砥面7面, 断面方形	覆土中	PL46
1455	火打石	3.7	4.0	1.6	27.4	瑪瑙	摩滅の集中箇所有り	覆土中	PL54
1456	火打石	3.5	3.4	2.0	28.3	瑪瑙	摩滅の集中箇所有り	覆土中	
1457	火打石	3.9	3.1	2.2	35.9	瑪瑙	摩滅の集中箇所有り	覆土中	
1458	火打石	6.5	4.4	3.2	97.9	瑪瑙	摩滅の集中箇所有り	覆土中	
1459	小刀	(20.6)	2.8	0.2	(45.8)	鉄	茎部木質付着	中央部1次黒色土中	
1460	釘	(9.1)	0.8	0.8	(18.3)	鉄	頭部欠損, 断面方形	東部1次黒色土下	
1461	不明鉄製品	(9.8)	(2.3)	(2.5)	(54.4)	鉄	マツカサガイ付着	中央部3次黒色土下	
1462	火打金	8.6	3.6	0.6	(53.4)	鉄	片側先端部欠損, 孔不明	中央部1次黒色土中	PL52
1467	鉄鍋	[36.4]	(6.7)	—	(104.6)	鉄	口縁部片	中央部3次黒色土下	

番号	銭名	径	孔径	厚さ	重さ	初鑄年	材質	特 徴	出土位置	備考
1470	元符通寶	2.42	0.66	0.12	3.64	1098	銅	篆書	東部	
1471	嘉祐通寶	2.42	0.74	0.10	3.26	1056	銅	真書	南西部	
1472	皇宋通寶	2.45	0.88	0.09	(3.38)	1038	銅	篆書, 星形孔, 欠け	中央部	
1473	熙寧元寶	2.46	0.69	0.08	(2.50)	1068	銅	篆書, 模鑄	中央部	
1474	皇宋通寶	2.40	0.64	0.09	3.06	1038	銅	真書, 模鑄	北西部	
1475	□□□□	2.39	0.65	0.18	(2.84)	—	銅	判読不能, 錆がひどい, 模鑄	中央部黒色土中	
1476	永樂通寶	2.53	0.54	0.13	4.64	1408	銅	真書	西部3次覆土中	
1477	太平通寶	2.42	0.60	0.11	2.92	976	銅	真書	南西部3次黒色土下	
1478	永樂通寶	2.48	0.58	0.11	3.76	1408	銅	真書	中央部3次黒色土下	
1479	祥符元寶	2.45	0.58	0.11	3.84	1008	銅	真書	中央部3次黒色土下	
1480	政和通寶	2.47	0.58	0.11	3.64	1111	銅	分楷	中央部3次黒色土下	
1481	元豐通寶	2.42	0.67	0.10	3.70	1078	銅	篆書	中央部3次黒色土下	
1482	熙寧元寶	2.45	0.67	0.11	(3.66)	1068	銅	真書	中央部3次黒色土下	
1483	皇宋通寶	2.34	0.66	0.10	2.94	1038	銅	真書, 星形孔	中央部3次黒色土下	
1484	宣和通寶	2.37	0.61	0.10	3.38	1119	銅	篆書	中央部3次黒色土下	
1485	皇宋通寶	2.42	0.70	0.10	3.88	1038	銅	篆書	中央部3次黒色土下	
1486	永樂通寶	2.49	0.56	0.12	4.20	1408	銅	真書	中央部3次黒色土下	
1487	天聖元寶	2.43	0.64	0.10	(2.96)	1023	銅	真書, 欠け	中央部3次黒色土下	
1488	紹定通寶	2.42	0.63	0.11	3.50	1228	銅	真書, 背上「五」	中央部3次黒色土下	
1489	永樂通寶	2.51	0.58	0.10	3.70	1408	銅	真書	中央部3次黒色土下	
1490	皇宋通寶	2.44	0.64	0.11	3.62	1038	銅	真書	中央部3次黒色土下	
1491	洪武通寶	2.48	0.64	0.14	4.40	1368	銅	真書	中央部3次黒色土下	
1492	洪武通寶	2.29	0.57	0.13	3.18	1368	銅	真書	中央部3次黒色土下	
1493	皇宋通寶	2.45	0.77	0.07	2.70	1038	銅	篆書, 模鑄	中央部3次黒色土下	
1494	永樂通寶	2.45	0.59	0.12	3.92	1408	銅	真書	中央部3次黒色土下	
1495	淳化元寶	2.40	0.59	0.09	3.48	990	銅	真書	中央部3次黒色土下	

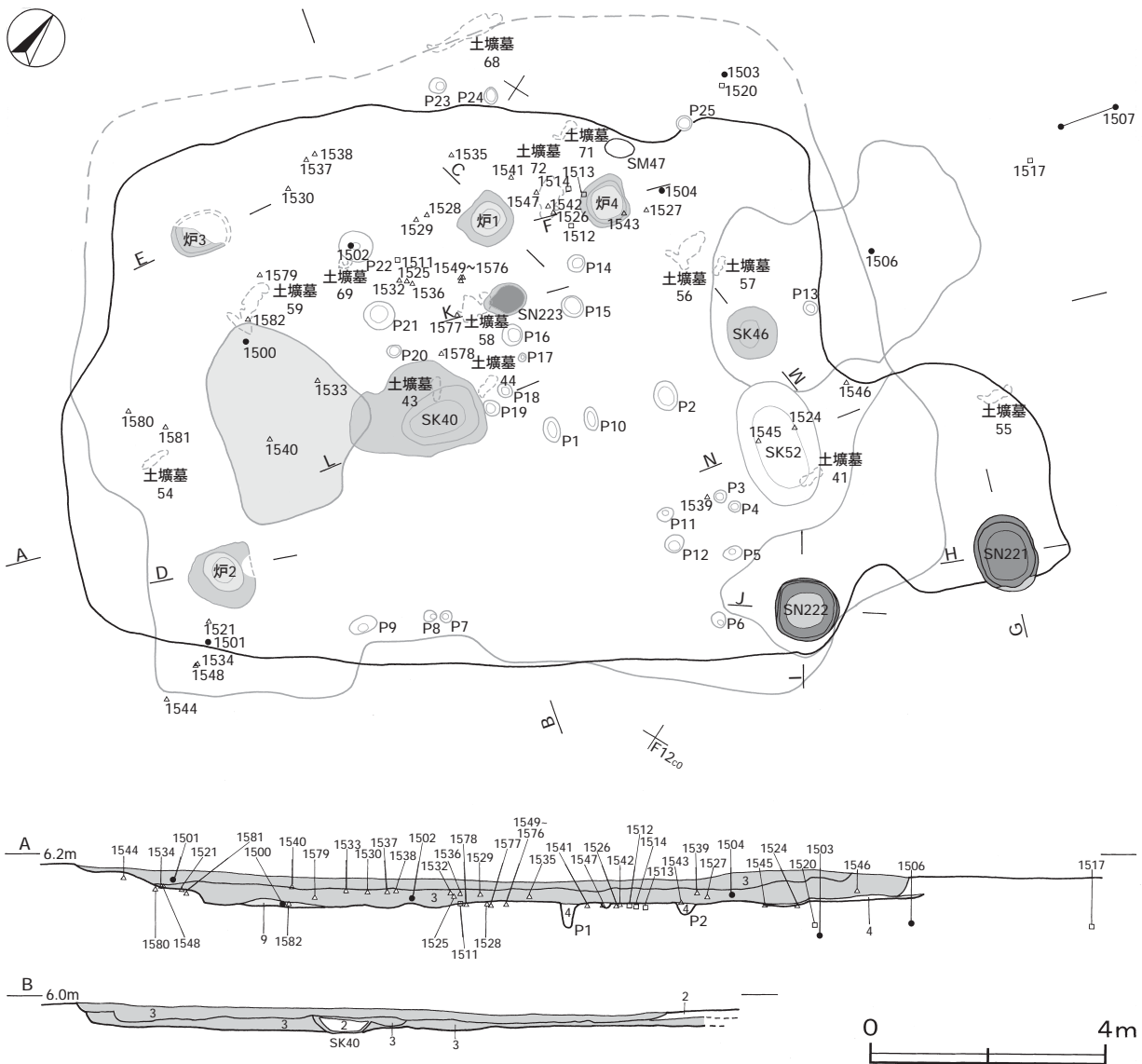
第32号建物跡 4区HK-27 (第294~300図)

位置 調査区北部F12b9区を中心に位置している。

確認状況 表砂を1.5m除去した標高5.8mから、第1次面である黒色土面が確認された。下層からは第2・3次面が確認された。いずれも黒色土面は平坦で、複数の炉や土坑が検出された。本建物跡の下層からは、13基の土壇墓が確認されている。

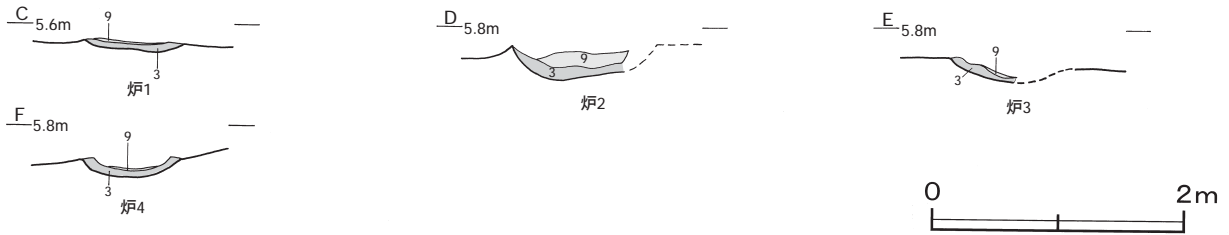
規模と施設 第1次面の黒色土の範囲は南北9.5m、東西は17mの長方形で、南東部に張り出し部をもっている。第2次面は南北10.7m、東西14mが確認され、長方形と推定される。第3次面は小範囲の黒色土面が2か所・灰状の範囲1か所が確認された。炉4基、粘土貼土坑3基、土坑3基が構築され、貝集積地1か所が確認された。

床 いずれもほぼ平坦で、黒色土の厚さは第1次面が14~28cm、第2次面が最大で10~40cmである。第3次面は2~4cmと非常に薄い。



第294図 第32号建物跡実測図

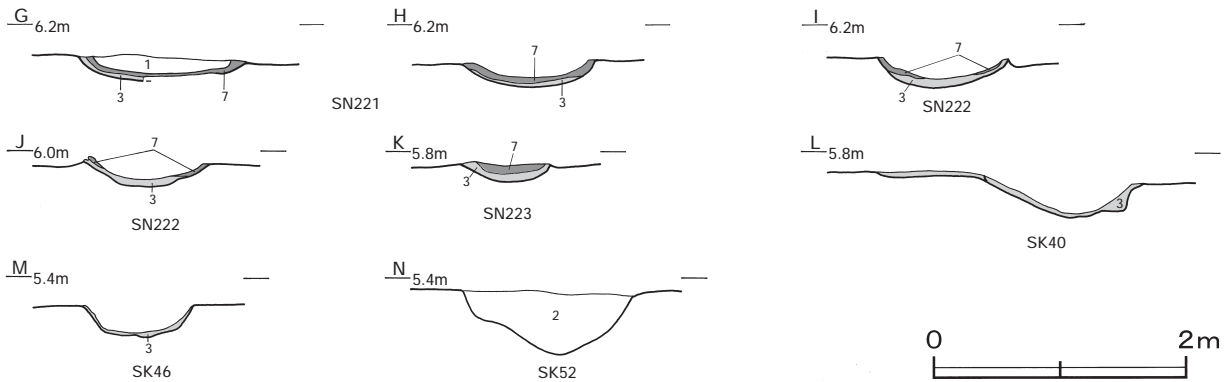
炉（第295図） 第1・3・4号炉は北部，第2号炉は南西部に位置している。第2号炉は黒色土の厚さが10cmと厚く，第3号炉は残存状況が悪い。4基とも底面に灰が検出されている。



第295図 第32号建物跡炉土層図

ピット 25か所。すべて3次面の黒色土を除去した面から検出されている。黒色土の範囲内に構築されているが，規模や形状が異なり，詳細については不明である。

土坑（第296図） 第46・52号土坑は東部，第223号粘土貼土坑，第40号土坑は中央部に構築されている。第221・222号粘土貼土坑は第1次面の南東部の張り出し部に構築されている。

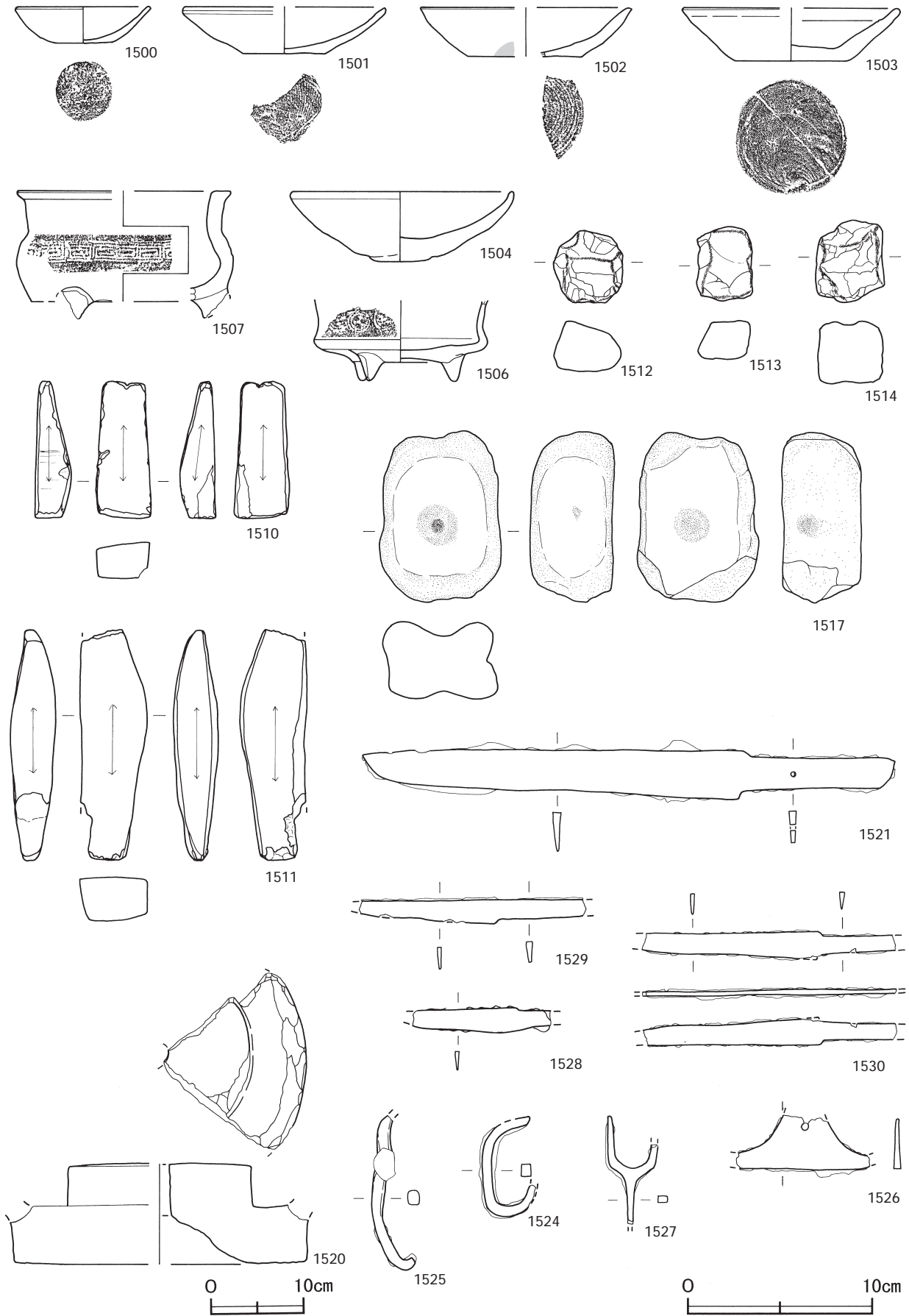


第296図 第32号建物跡土坑土層図

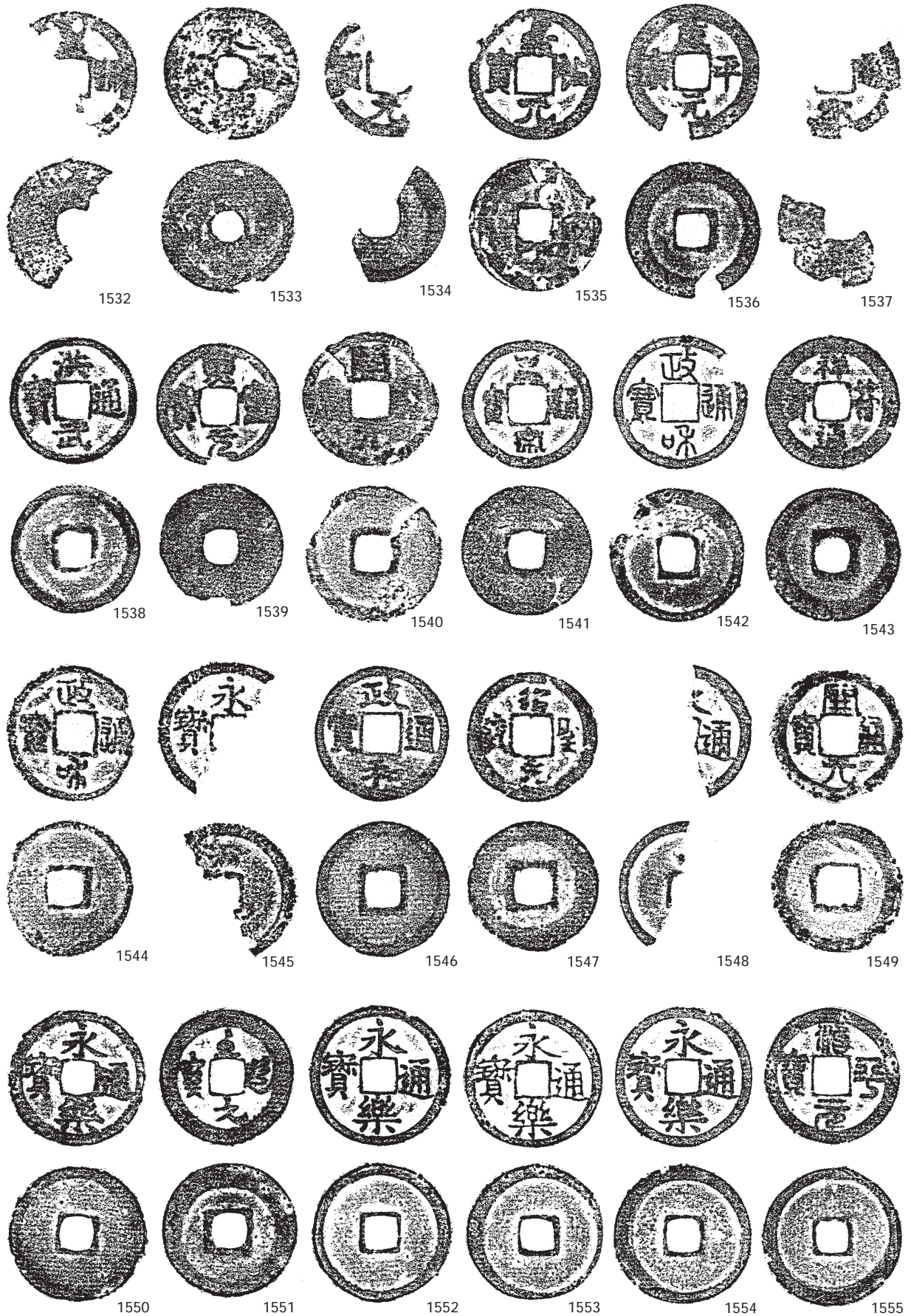
貝集積地 第47号貝集積地は北部に位置し，長径0.5m，短径0.3mの楕円形を呈している。

遺物出土状況 土師質土器片158点（皿105，内耳鍋45，香炉8），陶器片4点（甕），土製品2点（土玉，土鈴），石器22点（凹石1，砥石4，火打石15，石臼1，茶臼1），金属製品61点（小刀4，簞1，耳金1，火打金1，釘3，古銭51）が出土している。1501は第1次面の黒色土中から出土している。1502・1504は第2次面の黒色土中，1503・1506は第3次面を除去した層から出土し，1506は内外面とも器面荒れが激しい。1502は外面に煤が付着している。1512～1514の火打石，1526の火打金，1527の簞は第4号炉の周辺から出土している。第2号炉の南西部から出土した1521の小刀は，刀身の残存状態も良く，目釘孔も遺存している。1520は第3次面下，1528～1530の小刀は，第2次面から出土している。

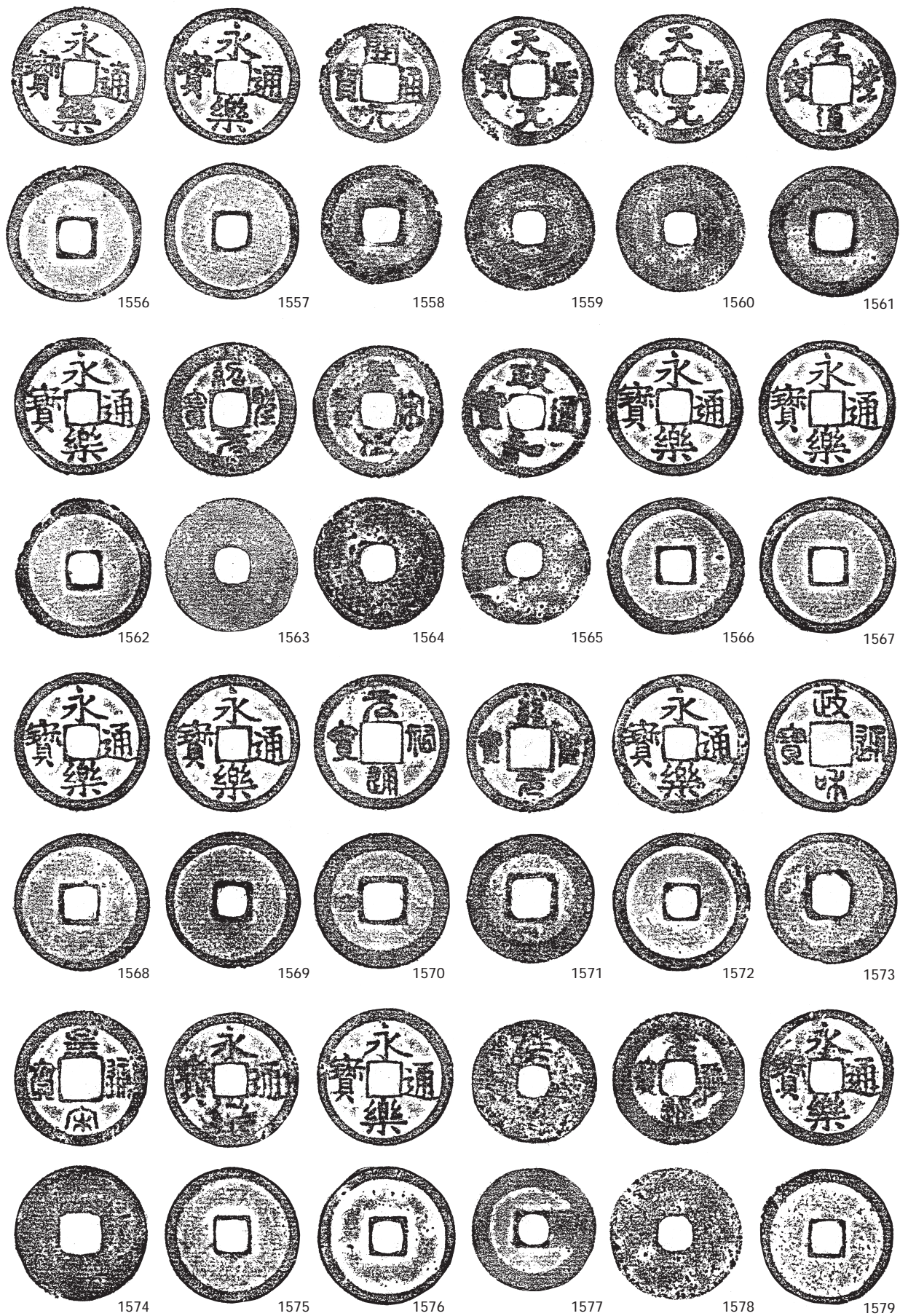
所見 炉や日常雑器類などの出土遺物が多いことから，建物跡と判断した。第3次面までが存在するが，炉や遺物の多くが第2次面に伴うことなどから，第2次面が主たる生活面であった可能性が高い。本建物跡内からは香炉が複数出土していることから，一般的に普及していたものかこれらを所持することが可能な人物の存在がうかがえる。第2次面の土層はほぼ同規模の範囲で黒色土が貼られ，第1次面は炉跡などが検出されないことから，同規模のままでも生活以外に機能した建物ではないかと推測される。



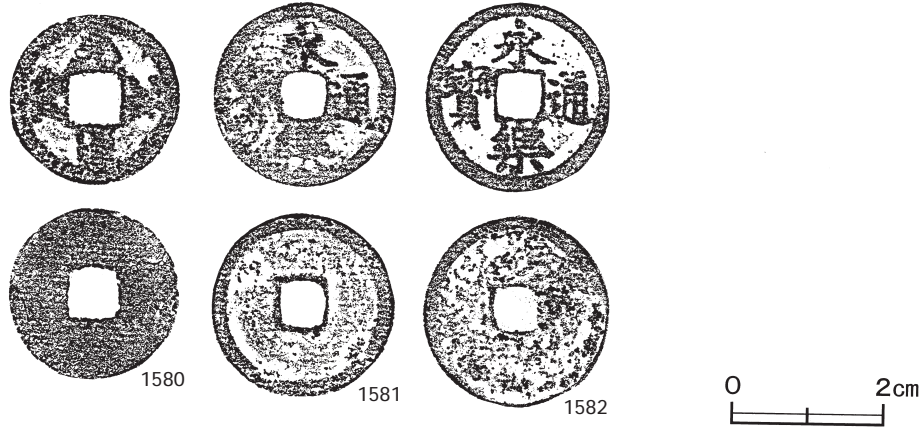
第297图 第32号建物跡出土遺物実測図(1)



第298図 第32号建物跡出土遺物実測図(2) [古銭は原寸大]



第299図 第32号建物跡出土遺物実測図(3) [古銭は原寸大]



第300図 第32号建物跡出土遺物実測図(4)

第32号建物跡出土遺物観察表(第297~300図)

番号	器形	器質	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1500	小皿	土師質土器	7.0	2.0	3.0	長石・雲母	浅黄橙	普通	底部回転糸切り, 内外面ナデ	西部3次黒色土中	75%
1501	皿	土師質土器	[11.0]	2.5	4.4	長石・赤色粒子	にぶい橙	普通	底部回転糸切り	南西部1次黒色土中	20%
1502	皿	土師質土器	[11.4]	2.7	[6.2]	長石	にぶい黄橙	普通	底部回転糸切り, 外面煤付着	中央部2次黒色土中	20%
1503	皿	土師質土器	[11.8]	2.9	6.0	雲母・赤色粒子	にぶい橙	普通	底部回転糸切り	北部3次黒色土下	70%
1504	皿	土師質土器	12.0	3.8	3.1	長石・赤色粒子	にぶい褐	普通	底部器面荒れ	北部2次黒色土中	80%
1506	香炉	土師質土器	—	(4.3)	5.2	長石・赤色粒子	にぶい赤褐	普通	内外面器面荒れ, 外面スタンプ文(巴文)	東部3次黒色土下	60% PL45
1507	香炉	瓦質土器	[11.6]	(6.9)	[8.7]	長石	赤褐	普通	胴部スタンプ文(雷文)	東部砂層	20%

番号	器種	長さ(径)	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
1510	砥石	7.4	2.9	1.9	62.7	砂岩	砥面4面, 断面方形	覆土中	
1511	砥石	(12.5)	3.7	2.4	(148.3)	凝灰岩	砥面4面, 断面方形	中央部2次黒色土下	
1512	火打石	3.9	3.7	2.8	45.7	瑪瑙	摩滅の集中箇所有り	北部2次黒色土下	
1513	火打石	4.0	3.0	2.1	41.9	瑪瑙	摩滅の集中箇所有り	炉4内	
1514	火打石	4.5	3.7	3.4	78.5	瑪瑙	摩滅の集中箇所有り	北部2次黒色土下	
1517	凹石	9.3	6.7	4.5	414.0	砂岩	4面ともくぼみ部有り	東部砂層	PL47
1520	茶臼	[31.6]	—	11.0	(2,710)	砂岩	受け皿部欠損, 下臼	北部3次黒色土下	PL47
1524	耳金カ	5.4	0.5	0.7	(21.0)	鉄	断面方形, 両端部湾曲	南西部3次黒色土中	
1525	釘	(8.3)	0.7	0.8	(21.3)	鉄	断面方形, 両端部湾曲	中央部2次黒色土中	
1526	火打金	(7.2)	(3.0)	0.4	(18.9)	鉄	孔有り, 頂・両端部欠損	北部2次黒色土下	
1527	簞	(5.8)	2.6	0.3	(7.5)	鉄	断面方形, 2本簞	北部2次黒色土中	PL52
1521	小刀	28.7	2.1	0.5	144.3	鉄	目釘孔有り	南西部2次黒色土中	
1528	小刀	(7.4)	1.0	0.3	(10.3)	鉄	刀身部・茎部欠損	北部2次黒色土下	PL50
1529	小刀	(12.2)	1.2	0.4	(15.0)	鉄	刀身部・茎部欠損, 片関	北部2次黒色土中	
1530	小刀	(13.9)	(1.5)	0.3	(20.1)	鉄	刀身部欠損, 両関カ	北西部2次黒色土中	

番号	銭名	径	孔径	厚さ	重さ	初铸年	材質	特徴	出土位置	備考
1532	皇中通	2.40	0.65	0.16	(2.10)	—	銅	篆書, 割れ	中央部2次黒色土中	
1533	永樂通寶	2.45	0.60	0.10	(3.22)	1408	銅	真書, 円孔, 欠け	中央部2次黒色土中	
1534	元寶	—	—	0.10	(1.20)	—	銅	判読不能, 割れ	南西部2次黒色土中	
1535	嘉祐元寶	2.38	0.67	0.08	(2.58)	1056	銅	真書, 欠け	北部2次黒色土中	
1536	咸平元寶	2.46	0.66	0.11	(3.38)	998	銅	真書, 欠け	中央部2次黒色土中	
1537	宋通	—	—	0.11	(0.99)	—	銅	真書, 欠け	北西部2次黒色土中	
1538	洪武通寶	2.32	0.68	0.12	2.96	1368	銅	真書	北西部2次黒色土中	
1539	熙寧元寶	2.27	0.67	0.12	(3.28)	1068	銅	篆書, 欠け, 模铸	南東部2次黒色土中	
1540	開元通寶	2.47	0.76	0.08	(2.18)	621	銅	真書, 欠け	西部1次黒色土中	
1541	皇宋通寶	2.36	0.66	0.08	2.00	1038	銅	篆書	北部2次黒色土下	
1542	政和通寶	2.39	0.67	0.13	(2.80)	1111	銅	篆書, 欠け	北部2次黒色土下	
1543	祥符通寶	2.43	0.65	0.09	2.84	1008	銅	真書	北部2次黒色土中	
1544	政和通寶	2.44	0.71	0.13	(3.12)	1111	銅	篆書, 欠け	南西部砂層	

番号	銭名	径	孔径	厚さ	重さ	初铸年	材質	特徴	出土位置	備考
1545	永□□寶	—	—	0.20	(2.08)	—	銅	真書、割れ	東部3次黒色土下	
1546	政和通寶	2.44	0.65	0.12	3.54	1111	銅	分楷	東部2次黒色土中	
1547	紹聖通寶	2.39	0.68	0.12	2.96	1094	銅	真書	北部2次黒色土下	
1548	□□通□	—	—	0.12	(1.30)	—	銅	割れ、判読不能	南西部2次黒色土中	
1549	開元通寶	2.38	0.73	0.12	(2.88)	621	銅	真書、背上月カ	中央部2次黒色土下	
1550	永樂通寶	2.44	0.59	0.10	2.90	1408	銅	真書	中央部2次黒色土下	
1551	至道元寶	2.44	0.65	0.11	3.84	995	銅	草書	中央部2次黒色土下	
1552	永樂通寶	2.55	0.63	0.16	4.12	1408	銅	真書	中央部2次黒色土下	
1553	永樂通寶	2.48	0.58	0.15	3.34	1408	銅	真書	中央部2次黒色土下	
1554	永樂通寶	2.51	0.60	0.11	3.04	1408	銅	真書	中央部2次黒色土下	
1555	治平元寶	2.46	0.68	0.12	4.02	1064	銅	篆書	中央部2次黒色土下	
1556	永樂通寶	2.48	0.64	0.13	3.06	1408	銅	真書	中央部2次黒色土下	
1557	永樂通寶	2.50	0.58	0.11	3.62	1408	銅	真書	中央部2次黒色土下	
1558	開元通寶	2.21	0.69	0.09	1.92	621	銅	真書	中央部2次黒色土下	
1559	天聖元寶	2.40	0.60	0.12	3.48	1023	銅	真書	中央部2次黒色土下	
1560	天聖元寶	2.49	0.68	0.12	3.56	1023	銅	真書	中央部2次黒色土下	
1561	元豊通寶	2.39	0.70	0.12	3.60	1078	銅	行書	中央部2次黒色土下	
1562	永樂通寶	2.51	0.60	0.11	(3.18)	1408	銅	真書、磨り	中央部2次黒色土下	
1563	紹聖元寶	2.47	0.66	0.09	3.20	1094	銅	篆書	中央部2次黒色土下	
1564	聖宋元寶	2.43	0.65	0.08	2.70	1101	銅	篆書	中央部2次黒色土下	
1565	政和通寶	2.36	0.69	0.08	2.46	1111	銅	分楷	中央部2次黒色土下	
1566	永樂通寶	2.53	0.60	0.87	5.35	1408	銅	真書	中央部2次黒色土下	
1567	永樂通寶	2.49	0.58	0.12	3.86	1408	銅	真書	中央部2次黒色土下	
1568	永樂通寶	2.50	0.62	0.11	3.26	1408	銅	真書	中央部2次黒色土下	
1569	永樂通寶	2.50	0.57	0.11	3.04	1408	銅	真書	中央部2次黒色土下	
1570	元祐通寶	2.50	0.71	0.11	3.56	1078	銅	篆書	中央部2次黒色土下	
1571	紹聖元寶	2.37	0.73	0.13	3.86	1094	銅	篆書	中央部2次黒色土下	
1572	永樂通寶	2.56	0.57	0.11	3.56	1408	銅	真書	中央部2次黒色土下	
1573	政和通寶	2.44	0.70	0.12	3.88	1111	銅	分楷	中央部2次黒色土下	
1574	皇宋通寶	2.47	0.81	0.09	3.02	1038	銅	篆書	中央部2次黒色土下	
1575	永樂通寶	2.48	0.62	0.12	3.56	1408	銅	真書	中央部2次黒色土下	
1576	永樂通寶	2.50	0.56	0.13	3.58	1408	銅	真書	中央部2次黒色土下	
1577	洪武通寶	2.29	0.57	0.12	3.48	1368	銅	真書、背「一錢」、模铸	中央部2次黒色土下	
1578	元祐通寶	2.42	0.65	0.11	2.80	1086	銅	篆書、模铸	中央部2次黒色土下	
1579	永樂通寶	2.47	0.59	0.15	4.62	1408	銅	真書	西部2次黒色土中	
1580	元祐通寶	2.27	0.66	0.08	2.74	1086	銅	真書、模铸	西部2次黒色土下	
1581	永樂通寶	2.46	0.57	0.12	3.22	1408	銅	真書	西部2次黒色土下	
1582	永樂通寶	2.48	0.61	0.13	3.14	1408	銅	真書	西部2次黒色土下	

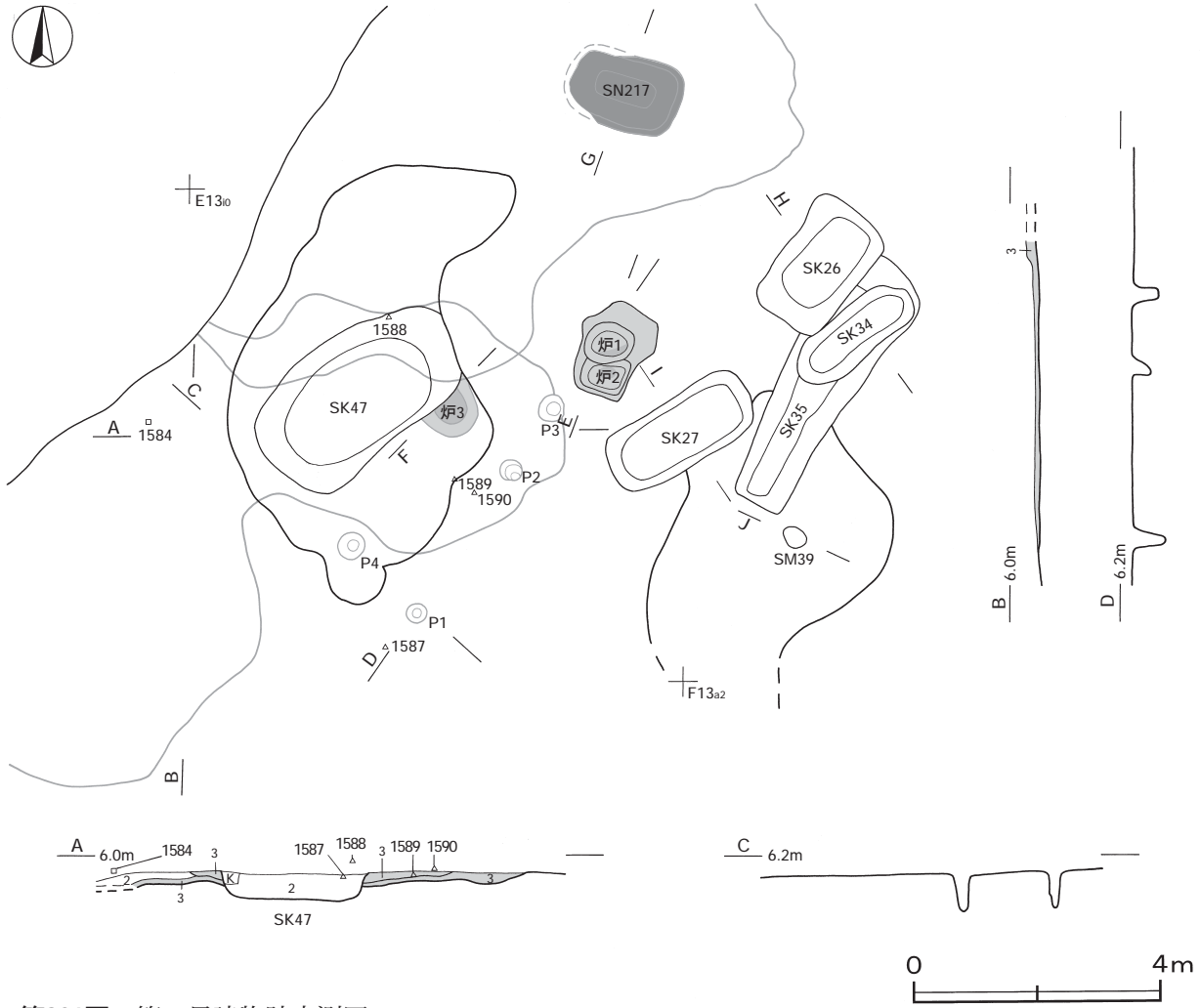
第33号建物跡 4区HK-28 (第301~305区)

位置 調査区中央部E13i1区を中心に位置している。

確認状況 表砂を6.5m除去した標高5.7mから、第1次面である黒色土面を確認した。上面はほぼ平坦である。下層から第2・3次面が確認され、複数の炉や土坑が検出された。

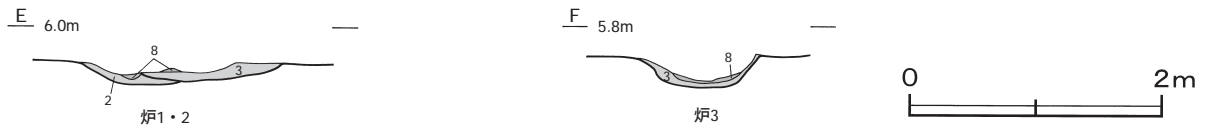
規模と施設 第1次面の黒色土の範囲は南北7.2m、東西4.2mで不定形である。第2・3次面の西側は大きく削平されているため確認できなかったが、第2次面は幅4mで、長さ7mで北東へ延びている。第3次面は幅2.9m、長さ10.4mで北東へ延びている。炉3基、粘土貼土坑1基、土坑5基が構築され、貝集積地1か所が確認されている。

床 3面ともほぼ平坦である。黒色土の厚さは第1次面が8~14cm、第2次面が10cmである。



第301図 第33号建物跡実測図

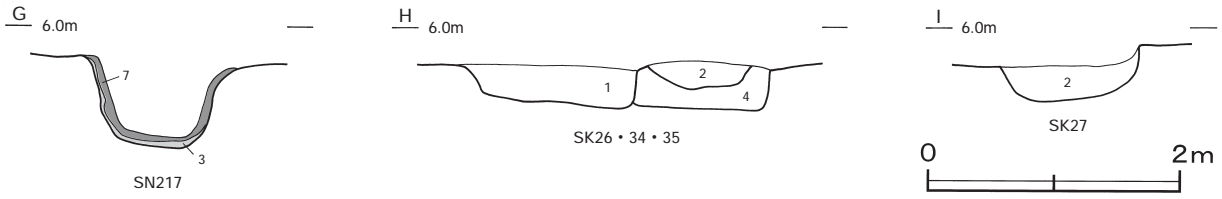
炉 (第302図) 3基とも中央部に位置しており、第3号炉は第47号土坑に掘り込まれている。第1号炉は第2号炉から造り替えられたものである。第3号炉の黒色土の厚さは2～9 cm、第1・2号炉の黒色土の厚さは4～10cmである。



第302図 第33号建物跡炉土層図

ピット 4か所。深さは30～58cmで、上屋を支えた柱穴の一部と考えられるが、対応するピットが検出されず性格は不明である。

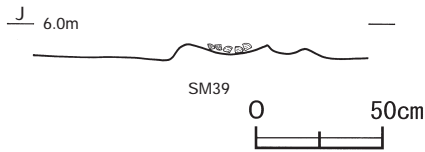
土坑 (第303図) 第217号粘土貼土坑は第3次面、第26・27・34・35・47号土坑は第1次面の黒色土面から検出されたものである。第217号粘土貼土坑は粘土の厚さが3～8 cm、黒色土の厚さが2～6 cmである。



第303図 第33号建物跡土坑土層図

貝集積地（第304図） 第39号貝集積地は東部に位置し、長径0.4m、短径0.3mの楕円形を呈している。貝層の厚さは最大で4cmである。

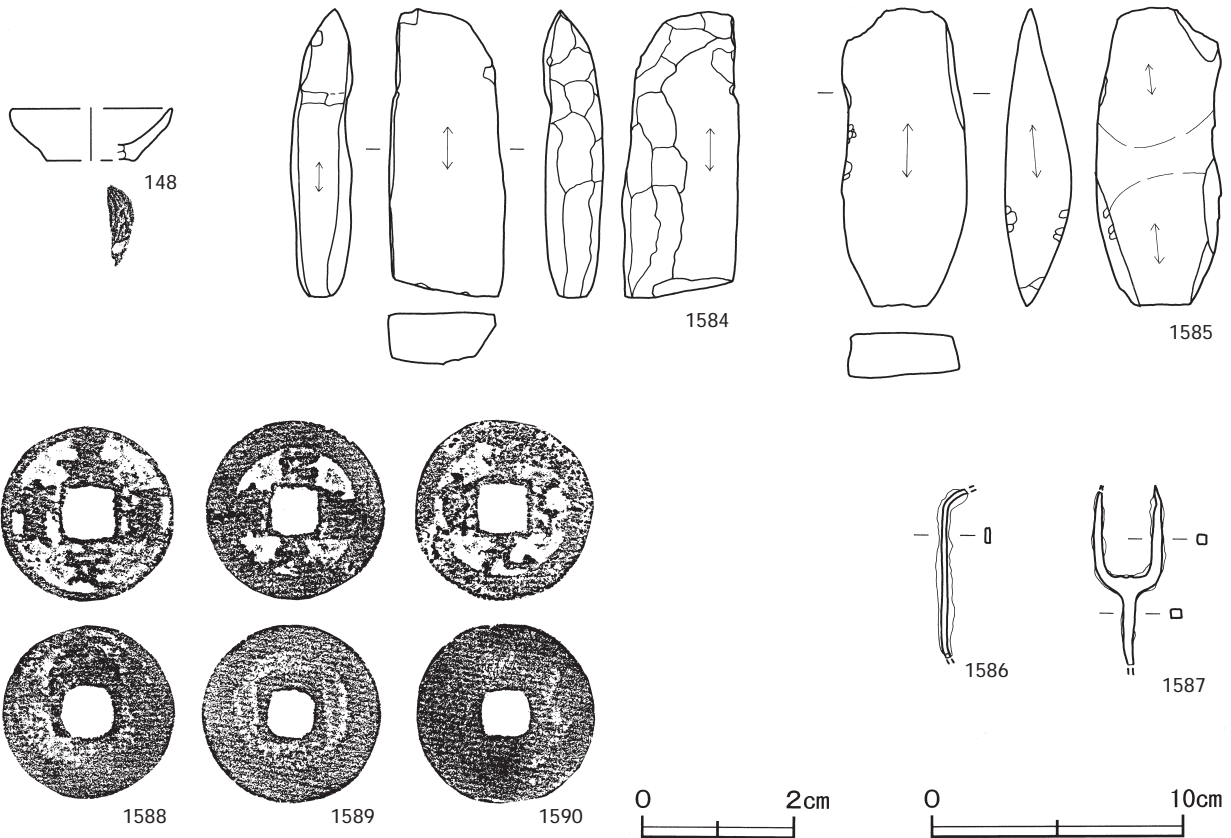
第39号貝集積地出土貝種一覧表



No.	貝種	重さ	比率	殻頂数	備考
1	マツカサガイ	299.0	93.44	L=49 R=44	淡水
2	ウバガイ細片	21.0	6.56		

第304図 第33号建物跡貝集積地土層図

遺物出土状況 土師質土器片42点（皿12，香炉1，内耳鍋29），陶器片1点（皿），石器2点（砥石），金属製品10点（釘カ1，簞1，古銭3，不明5）が出土している。1584は西部の砂層，1587は南部の砂層，1585・1586は覆土中から出土している。1588は第1次面の覆土中，1589は中央部の第1次面中から出土している。古銭は，1588の「嘉定通寶」が初铸年1208年の最新銭である。土師質土器片や陶器片は，細片のため図示できなかった。



第305図 第33号建物跡出土遺物実測図

第33号建物跡出土遺物観察表（第305図）

番号	器形	器質	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
148	小皿	土師質土器	[6.3]	2.1	[3.4]	雲母・赤色粒子	にぶい橙	普通	内・外面ナデ	SN217内	30%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
1584	砥石	11.3	4.6	2.4	165.8	砂岩	砥面3面，断面長方形	西部砂層	
1585	砥石	11.9	5.0	2.7	194.1	砂岩	砥面4面，断面長方形	覆土中	
1586	釘カ	(6.7)	0.2	0.6	(10.2)	鉄	先端部欠損，上部屈曲	覆土中	
1587	箆	(7.2)	0.5	0.4	(11.1)	鉄	断面方形，2本箆	南部砂層	

番号	銭名	径	孔径	厚さ	重さ	初鋳年	材質	特徴	出土位置	備考
1588	嘉定通寶	2.32	0.68	0.12	2.96	1208	銅	真書	中央部1次覆土中	
1589	紹聖元寶	2.44	0.65	0.10	3.22	1094	銅	行書	中央部1次黒色土中	
1590	聖宋元寶	2.41	0.64	0.09	2.84	1101	銅	真書，模鋳	中央部2次覆土中	

所見 炉や整地された黒色土面が検出されたことから，建物跡と判断した。しかし，1面ごとの出土遺物は少なく，黒色土面を幾度も貼り替えていることを考えると，頻りに建て替えを行ったものと考えられる。西部の整地した黒色土面は，作業場や上屋をもつ生活以外で機能した部分と推測することができる。

第34号建物跡 4区HK-30（第306～310図）

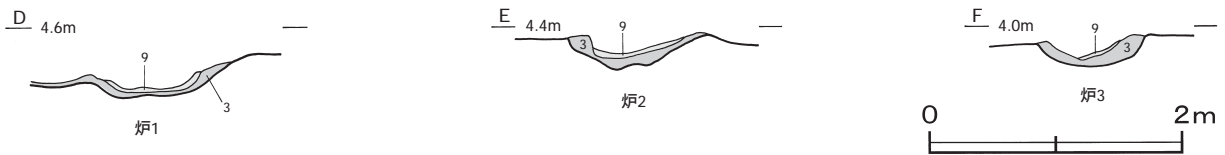
位置 調査区中央部F12a0区を中心に位置している。

確認状況 表砂を6.5m除去した標高4.4mから，黒色土面3か所を確認した。3か所とも上面はほぼ平坦で，複数の炉や土坑が検出された。北西部の黒色土面からは内耳鍋片が集中して出土している。

規模と施設 幅3mの黒色土が北東に17m延びている。西側には，径約2mの楕円形をした黒色土が2か所確認された。炉3基，土坑3基が構築され，貝集積地1か所が確認されている。

床 ほぼ平坦で，黒色土の厚さは最大で10cmの部分もあるが，その他の厚さは4cmである。

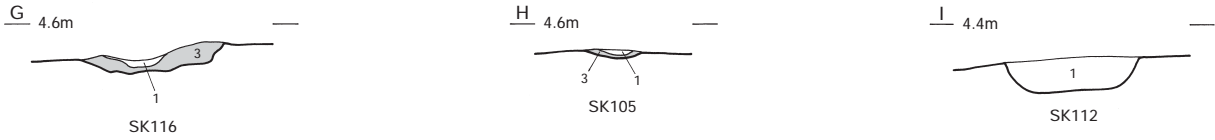
炉（第306図） 第1・2号炉は南東部の黒色土面の外，第3号炉は中央部に位置している。第1号炉は厚さ2～8cm，第2・3号炉は厚さ3～15cmの黒色土を貼り付けて構築されている。いずれも底面には灰が認められた。



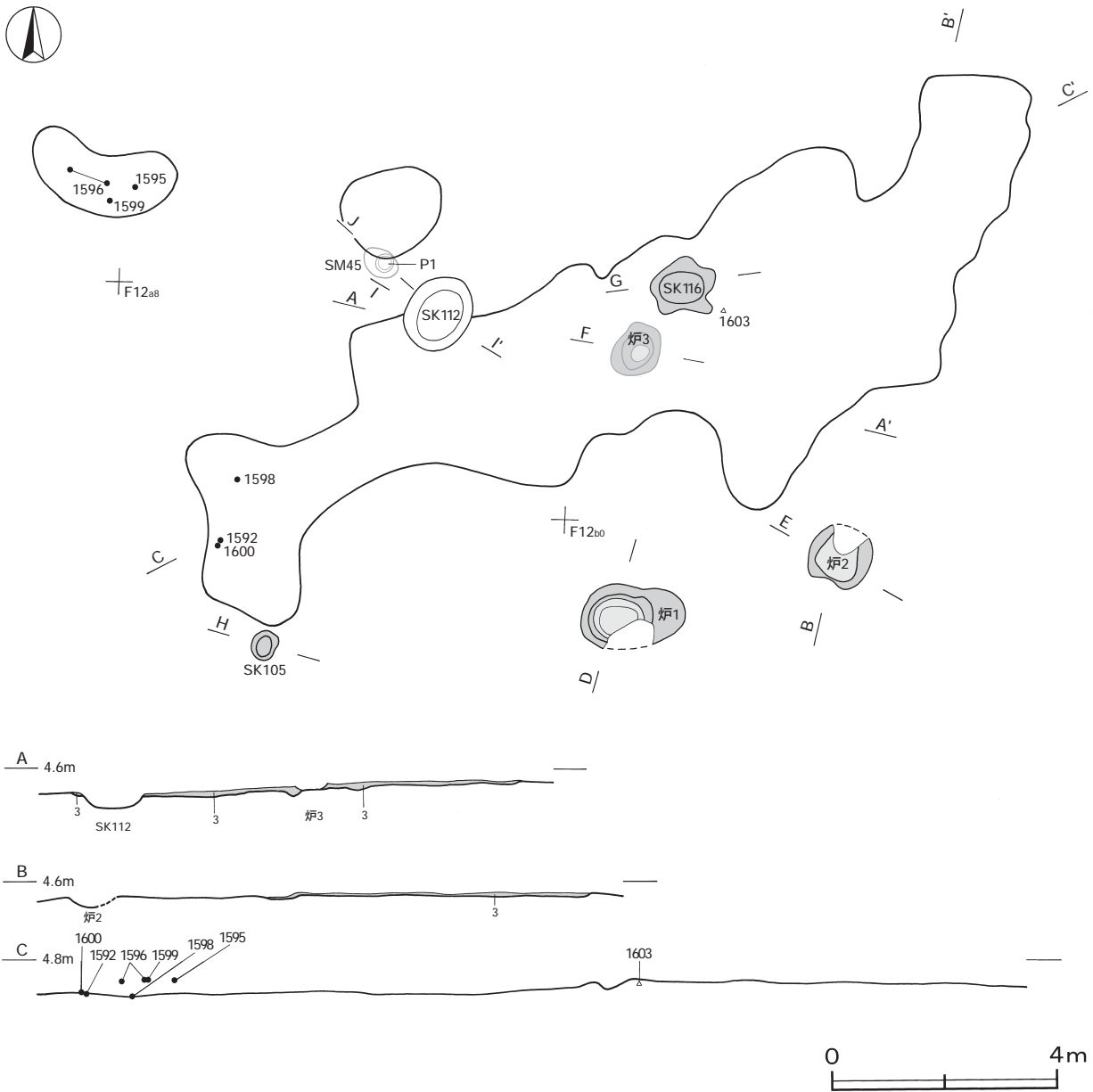
第306図 第34号建物跡炉土層図

ピット 1か所。P1の深さは55cmで，第45号貝集積地を掘り込んでいる。対応するピットが検出されないため，性格は不明である。

土坑（第307図） 第105号土坑は南部，第112・116号土坑は中央部に位置している。第116号土坑の黒色土の厚さは，底部は2～16cmで，壁部は15cmである。

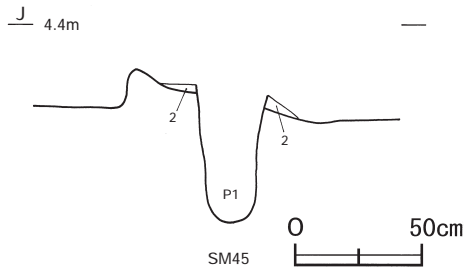


第307図 第34号建物跡土坑土層図



第308図 第34号建物跡実測図

貝集積地 (第309図) 第45号貝集積地は中央部に位置し、長径0.7m、短径0.5mの楕円形を呈している。中心部はP1に掘り込まれている。貝層は最大で5cmの厚さである。遺物は、土師質土器片4点(皿3, 内耳鍋1)が出土している。

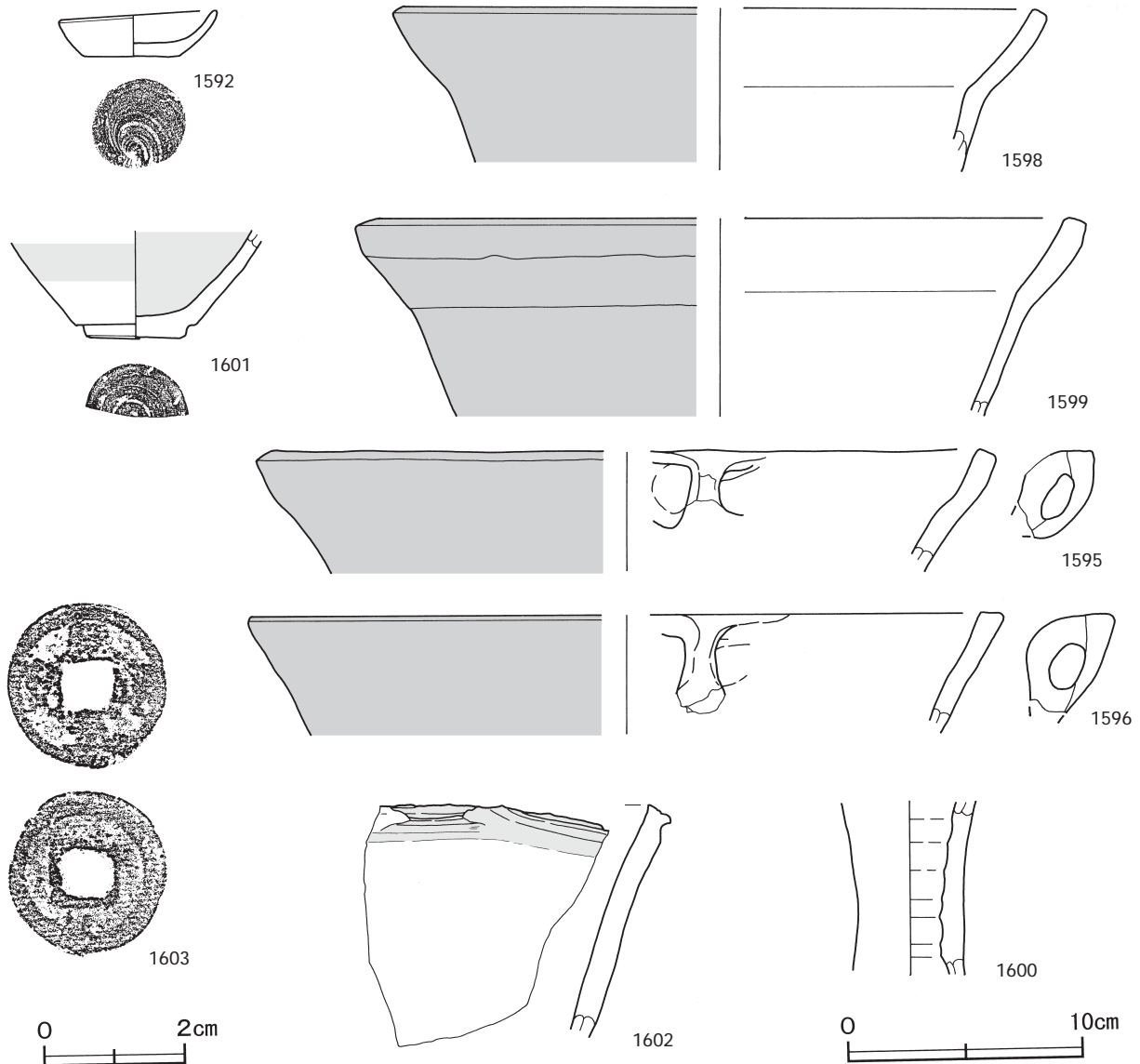


第309図 第34号建物跡貝集積地土層図

第45号貝集積地出土貝種一覧表

No.	貝種	重さ	比率	殻頂数	備考
1	クボガイ	5.0	0.48	4	
2	マツカサガイ	740.0	70.81	L=289 R=286	淡水 14個体接合
3	アサリ	18.0	1.72	L=15 R=13	9個体接合
4	チョウセンハマグリ	2.0	0.19	L=1	1個体接合
5	その他細片	280.0	26.79	R=1	

遺物出土状況 土師質土器片212点（皿3，内耳鍋209），陶器片2点（甕），須恵器片1点（長頸瓶），金属製品2点（古銭，不明）が出土している。1592・1598・1600は南西部の黒色土面，1595・1596・1599は西部の覆土中からそれぞれ出土している。1601・1602も覆土中から出土しており，1601は瀬戸・美濃産である。古銭は1603の1枚で，中央部の黒色土中から出土している。



第310図 第34号建物跡出土遺物実測図

第34号建物跡出土遺物観察表（第310図）

番号	器形	器質	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1592	小皿	土師質土器	6.8	1.9	4.0	雲母	にぶい橙	普通	底部回転糸切り	南西部黒色土面	100% PL40
1595	内耳鍋	土師質土器	[32.2]	(5.1)	—	長石・石英	浅黄	普通	口縁部ナデ，外面煤付着	西部覆土中	5%
1596	内耳鍋	土師質土器	[31.2]	(8.4)	—	雲母	にぶい赤褐	普通	口縁部ナデ，外面煤付着	西部覆土中	5%
1598	内耳鍋	土師質土器	[28.0]	(6.0)	—	長石	灰黄	普通	口縁部ナデ，外面煤付着	南西部黒色土面	5%
1599	内耳鍋	土師質土器	[31.2]	(8.4)	—	雲母	にぶい赤褐	普通	口縁部ナデ，外面煤付着	西部覆土中	5%
1600	長頸瓶	須恵器	—	(7.5)	—	砂粒	灰白	普通	ロクロナデ，自然釉	南西部黒色土面	10%

番号	器形	器質	口径	器高	底径	胎土・色調	絵付・釉薬	文様・特徴	産地・年代	出土位置	備考
1601	天目茶碗	陶器	—	(4.7)	4.2	灰白・黒	鉄釉	下位は露胎・内面施釉	瀬戸・美濃，15C中	覆土中	20% 古瀬戸後Ⅲカ
1602	鉢	陶器	—	(10.1)	—	オリーブ黒・暗赤褐	錆釉	口縁部圧痕有り	—	覆土中	5%

番号	銭名	径	孔径	厚さ	重さ	初鑄年	材質	特徴	出土位置	備考
1603	熙寧元寶	2.31	0.76	0.14	3.98	1068	銅	篆書	中央部黒色土中	

所見 黒色土面や複数の炉をもっていること，内耳鍋片などが多量に出土していることから建物跡と判断した。上層の遺構により削平されているため，柱穴列や黒色土が確認されない。黒色土面から出土した長頸瓶は，生活面を形成する黒色土が他所から持ち込まれたことを示す貴重な資料となる。時期は，出土遺物から15世紀中葉と考えられ，最初に構築された建物跡と推測できる。

第35号建物跡 4区HK-32（第311～314図）

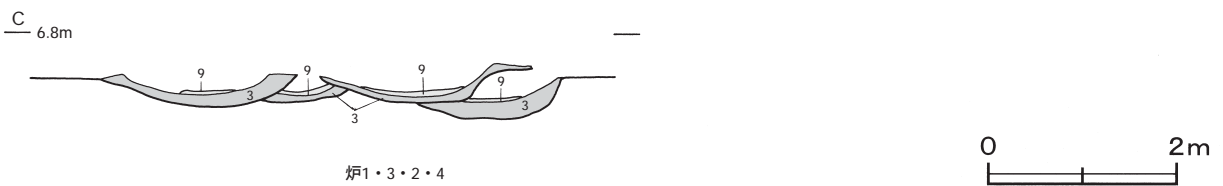
位置 調査区中央部 E13c5区を中心に位置している。

確認状況 表砂を6.5m 除去した標高約6.1～7.4m から，第1次面である黒色土面を確認した。上面は南部から北部へ緩やかに傾斜し，複数の炉や土坑が確認された。さらに，10cm 下層から小範囲の黒色土面が確認された。

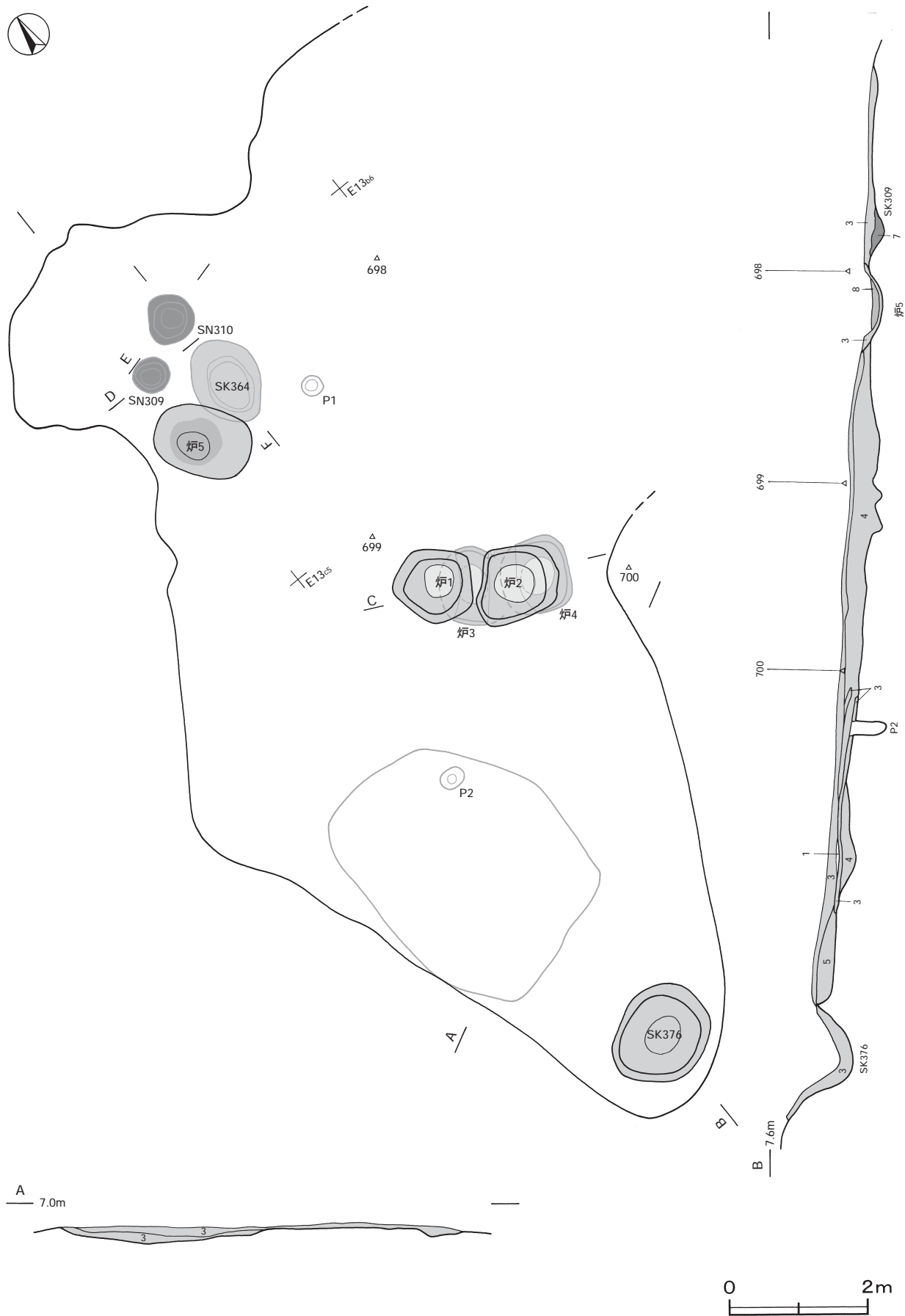
規模と施設 黒色土の範囲は最大で南北15m，東西7m である。炉5基，粘土貼土坑2基，土坑2基が構築されている。

床 南部から北部へ緩やかに傾斜している。第1次面は，最大で厚さ14cm の黒色土を貼り付けて構築されている。南部の黒色土層の間には約2～10cm の砂A層が入っている。

炉（第311図） 5基とも中央部に位置している。第1・2号炉は第3・4号炉から造り替えられたものである。第5号炉は第364号土坑を掘り込んで構築されている。炉の検出状況から，第1・2号炉と第3・4号炉は同時期に機能していたと推測される。



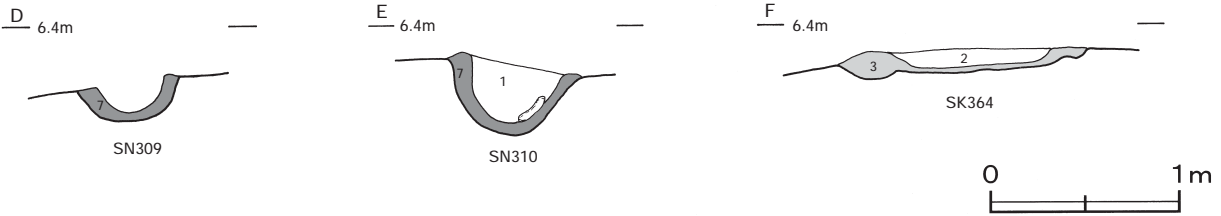
第311図 第35号建物跡炉土層図



第312图 第35号建物跡実測図

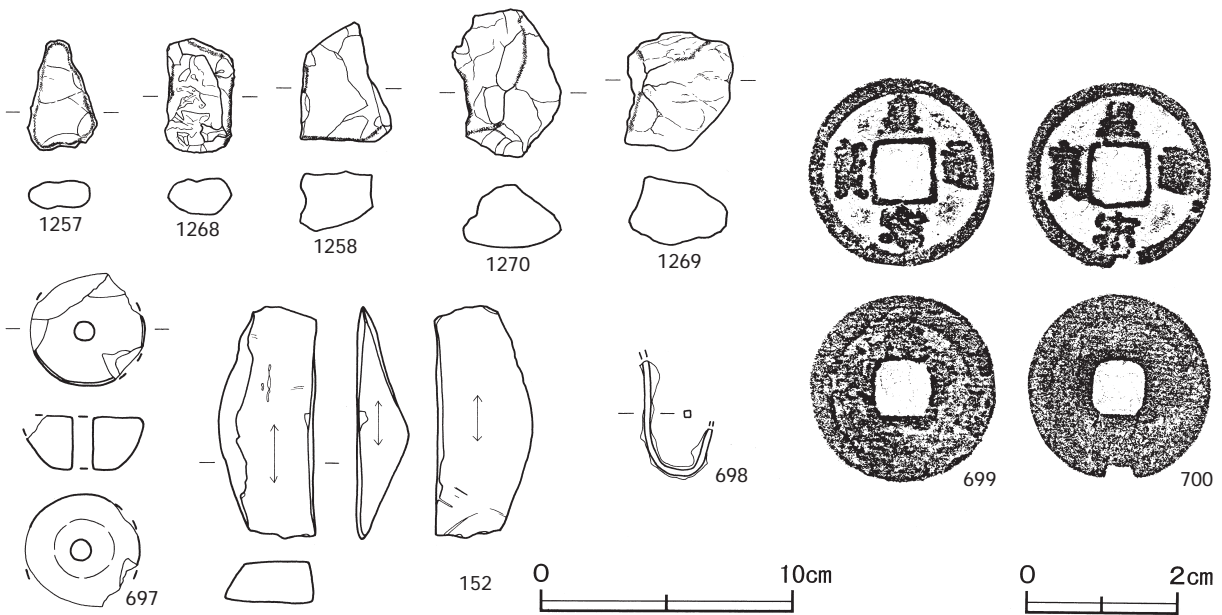
ピット 2か所。深さは40cmと50cmで、第1次面の黒色土を除去した層から検出された。対応するピットが検出されず、性格は不明である。

土坑（第313図） 第364土坑は北西部，第376号土坑は南東部に位置し，黒色土で構築されている。第309・310号粘土貼土坑は北西部に位置しており，第310号粘土貼土坑の底面からは長さ約30cmの礫が出土している。



第313図 第35号建物跡土坑土層図

遺物出土状況 土師質土器片5点（皿），石器6点（紡錘車1，砥石1，石臼1，火打石3），金属製品3点（釣針カ1，古銭2）が出土している。698・699は北部・中央部の覆土中，700は東部の砂層から出土している。699・700は「皇宋通寶」で初鑄年が1038年である。1268～1270は覆土中から出土している。土師質土器片は，細片のため図示できなかった。



第314図 第35号建物跡出土遺物実測図

第35号建物跡出土遺物観察表（第314図）

番号	器種	長さ(径)	幅(孔径)	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
152	砥石	9.3	3.9	2.0	64.4	凝灰岩	砥面3面	SN309内	
697	紡錘車	4.6	0.8	2.1	(43.5)	砂岩	両面穿孔，一部欠損	覆土中	
698	釣針	(4.6)	0.3	0.3	(3.3)	鉄	断面方形，両端部欠損	北部覆土中	PL51
1257	火打石	4.0	2.8	1.1	18.3	瑪瑙	一部の稜が摩滅	SN309内	
1258	火打石	4.8	2.9	2.4	52.0	瑪瑙	一部の稜が摩滅	SN309内	
1268	火打石	4.6	2.7	1.5	24.6	瑪瑙	摩滅の集中箇所有り	覆土中	PL54

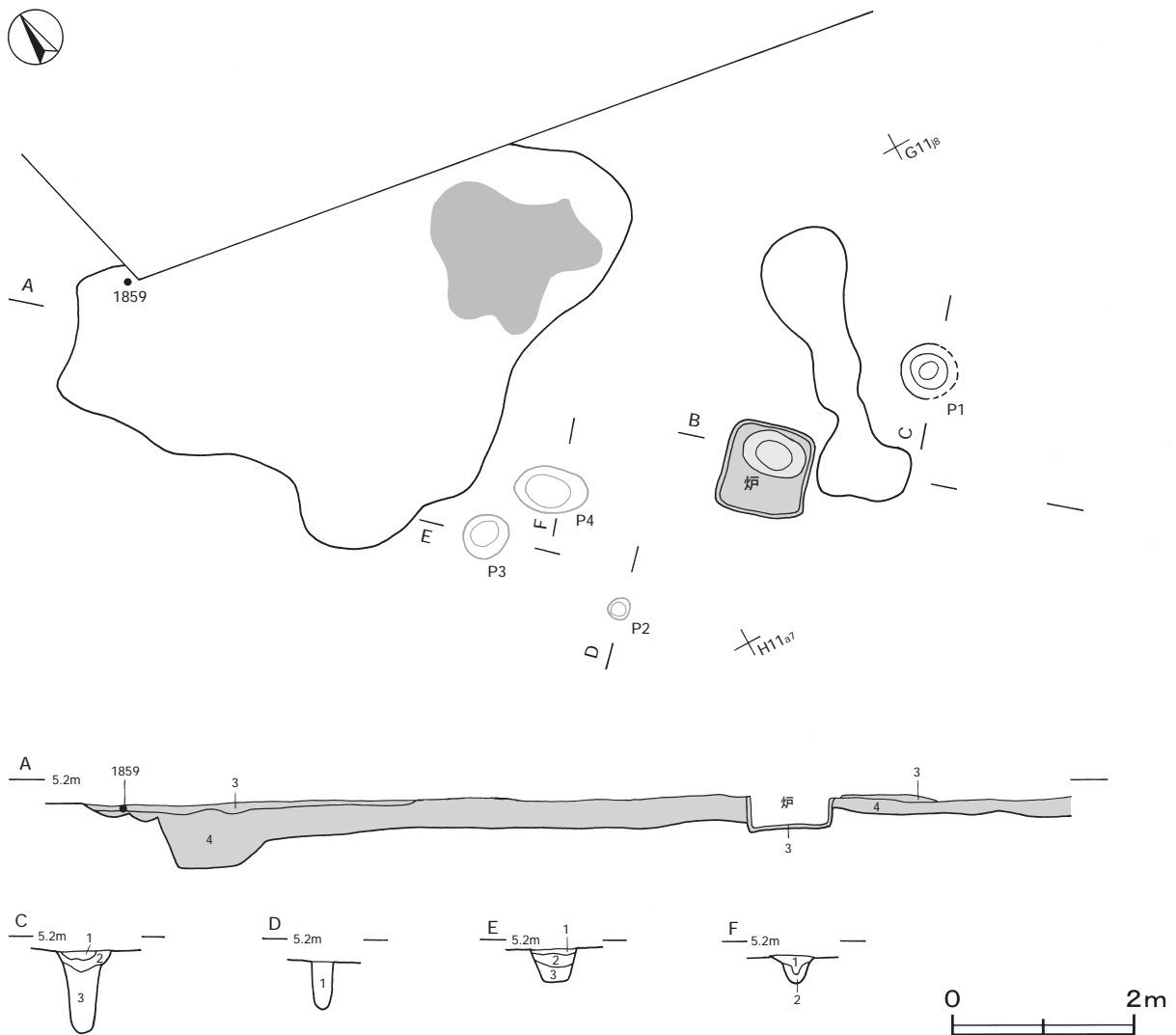
番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
1269	火打石	4.7	4.3	2.7	55.5	瑪瑙	一部の稜が摩滅	覆土中	
1270	火打石	6.0	4.3	2.5	65.4	石英	一部の稜が摩滅	覆土中	

番号	銭名	径	孔径	厚さ	重さ	初鑄年	材質	特徴	出土位置	備考
699	皇宋通寶	2.50	0.75	0.10	2.88	1038	銅	真書	中央部覆土中	
700	皇宋通寶	2.48	0.74	0.09	(3.20)	1038	銅	真書, 欠け	東部砂層	

所見 広範囲にわたり整地された黒色土が検出され、炉や土坑などの内部施設も検出されたことから、建物跡と判断した。しかし、検出された柱穴が少ないことや日常雑器類の出土遺物が少ないことから、簡易的な建物跡と考えられる。時期は、出土遺物が少なく明確にすることができない。

第36号建物跡 2区S X-2 (第315~317図)

位置 調査区中央部 G11j7区を中心に位置している。

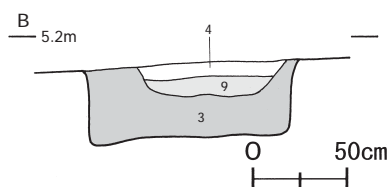


第315図 第36号建物跡実測図

確認状況 表砂を3.5m 除去した標高約 5 m から黒色土面を確認した。上面はほぼ平坦である。下層には黒色土 B 層が広範囲にわたり確認されている。上面からは炉やピット、焼砂が検出された。

規模と施設 北部が調査範囲外に延びているため、範囲の特定は難しい。炉 1 基やピットが確認された。

床 ほぼ平坦であり、上層の黒色土 A 層とその基部をなす黒色土 B 層とに分かれる。黒色土 A 層は厚さが 6～12cm で締まりがあり、黒色土 B 層は厚さが 10～64cm である。黒色土 B 層は広範囲にわたっていたと推測される。

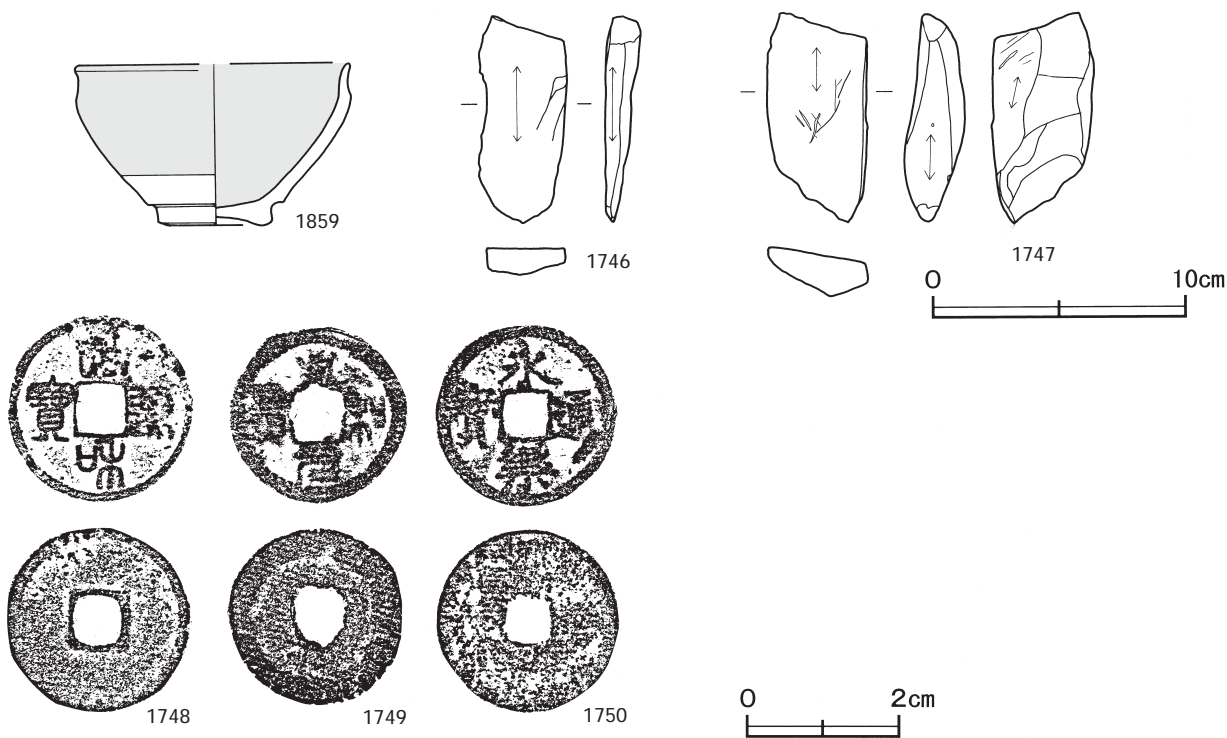


炉 (第316図) 黒色土 A 層が方形で巡った中に灰層が確認された。黒色土の厚さは 6～40cm で、深さ約 18cm である。

ピット 4 か所。深さ 50～88cm で、対応するピットが検出されず性格は不明である。

第316図 第36号建物跡炉土層図

遺物出土状況 土師質土器片 28 点 (皿 22, 内耳鍋 6), 陶器片 3 点 (皿, 碗, 甕), 石器 3 点 (砥石 1, 火打石 2), 金属製品 7 点 (古銭 3, 不明 4), 礫 8 点 が出土している。1859 は瀬戸・美濃産で西部の黒色土 A 層中, 1746・1747 は黒色土 B 層中, 1748～1750 は覆土中から出土している。1750 の「永樂通寶」が最新銭である。土師質土器片は細片のため図示できなかった。



第317図 第36号建物跡出土遺物実測図

第36号建物跡出土遺物観察表 (第317図)

番号	器形	器質	口径	器高	底径	胎土・色調	絵付・釉薬	文様・特徴	産地・年代	出土位置	備考
1859	天目茶碗	陶器	[10.6]	6.4	4.4	灰白・オリーブ黒	鉄釉	内反高台	瀬戸・美濃, 16C前半	西部黒色土中	50% 大窯II

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
1746	砥石	8.2	3.5	1.4	41.8	凝灰岩	砥面2面	黒色土中	
1747	砥石	8.3	4.0	2.4	64.5	凝灰岩	砥面3面	黒色土中	

番号	銭名	径	孔径	厚さ	重さ	初鑄年	材質	特徴	出土位置	備考
1748	政和通寶	2.48	0.64	0.09	2.90	1111	銅	篆書	覆土中	
1749	至和元寶	2.36	0.64	0.11	3.36	1054	銅	篆書、星形孔	覆土中	
1750	永樂通寶	2.40	0.56	0.10	2.82	1408	銅	真書	覆土中	

所見 炉の存在や出土遺物から、建物跡と判断した。整地された黒色土B層が黒色土A層の基部をなすと考えられると、建物の範囲はさらに北に広がっていたと推測される。本跡の時期は、出土した天目茶碗などから16世紀前半と考えられる。

第37号建物跡 2区SX-7 (第318~324図)

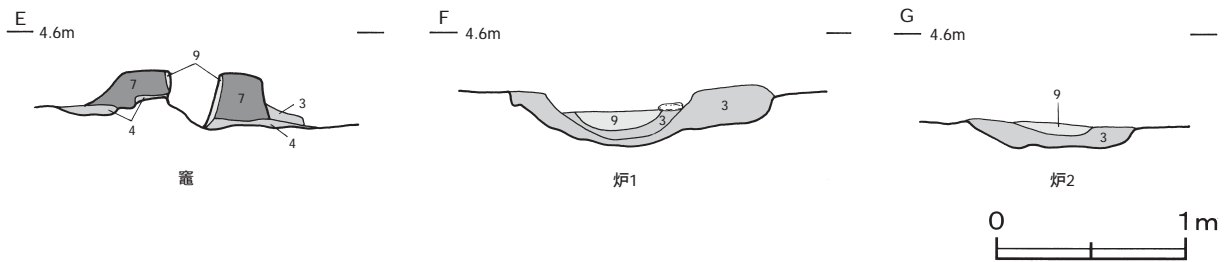
位置 調査区南部 H12f2区を中心に位置している。

確認状況 表砂を4m除去した標高4.2mから、上面がほぼ平坦な黒色土面を確認した。さらに、下層から第2次面が確認され、炉やピットが検出された。

規模と施設 第1次面の範囲は南北10.3m、東西11mの不定形、第2次面は南北7m、東西4.6mの不定形である。竈1基、炉2基、土坑1基が構築され、貝集積地1か所が確認されている。

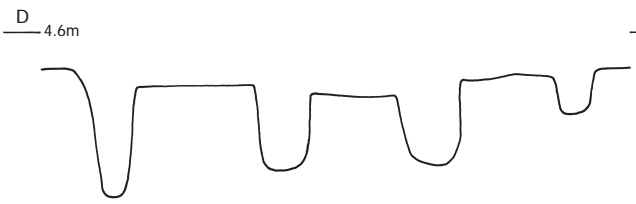
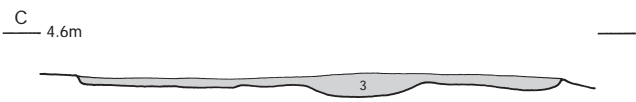
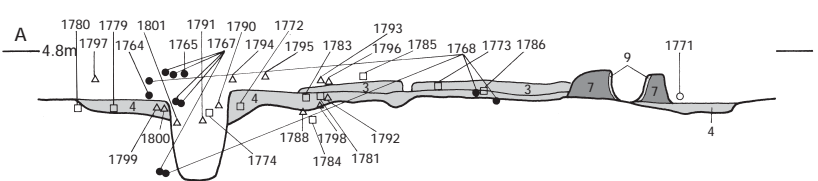
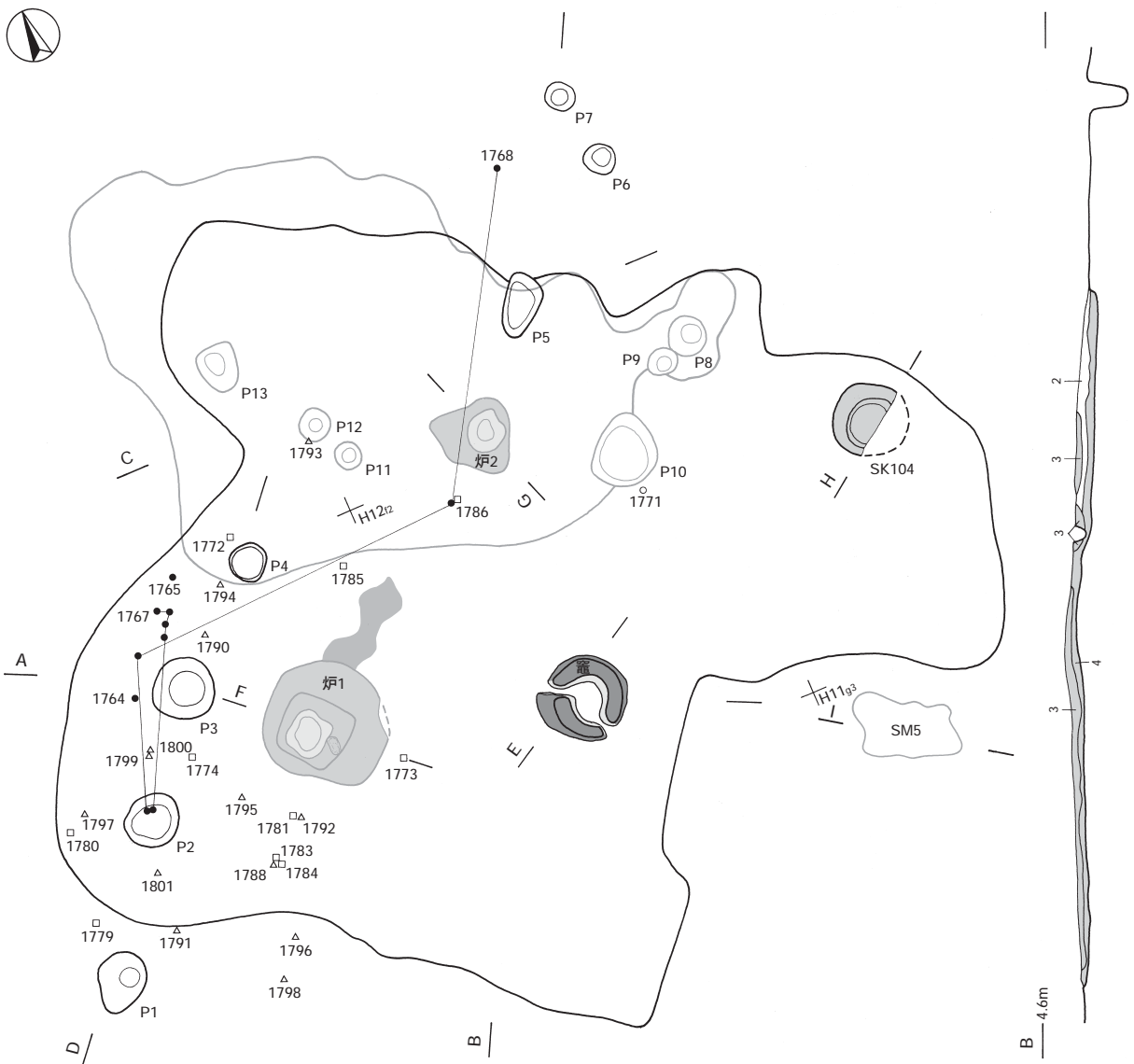
床 2面ともほぼ平坦であり、黒色土の厚さは第1次面が10cm、第2次面が6cmである。第1次面には、生活面と考えられる黒色土層の基部をなす黒色土B層や締まりのある黒色土の範囲が確認されている。

竈・炉 (第318図) 第1号竈は第1次面の東部、第1・2号炉は中央部に構築されている。第1号竈は径約0.8mの円形を呈し、高さは30cmである。主に砂質粘土で構築され、壁の内面が赤変硬化しており、底面には灰状の層が堆積していた。第1号炉の黒色土の厚さは5cm、第2号炉は4~12cmである。



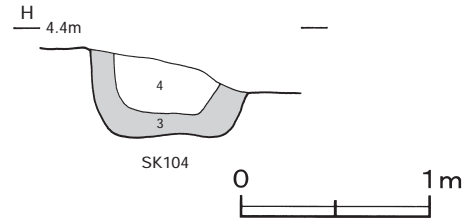
第318図 第37号建物跡竈・炉土層図

ピット 13か所。P1は深さ112cmと深いですが、P2~P7は深さ40~80cmで、第1次面の調査時に検出されたものである。P8~P13は深さ42~70cmで第1次面を除去した下層から検出されており、第2次面に伴うものである。上屋を支えた柱穴の一部と考えられるが、対応するピットは検出されなかった。



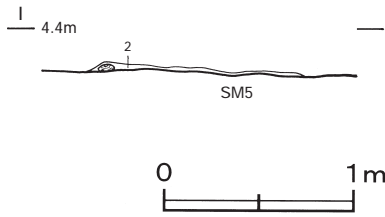
第319图 第37号建物跡実測図

土坑（第320図） 第1次面の北東部に位置し、厚さ10～14cmの黒色土を貼り付けて構築されている。



第320図 第37号建物跡土坑土層図

貝集積地（第321図） 第5号貝集積地は東部に位置し、長軸1.3m、短軸0.7mの不定形を呈している。貝層の厚さは最大で5cmである。



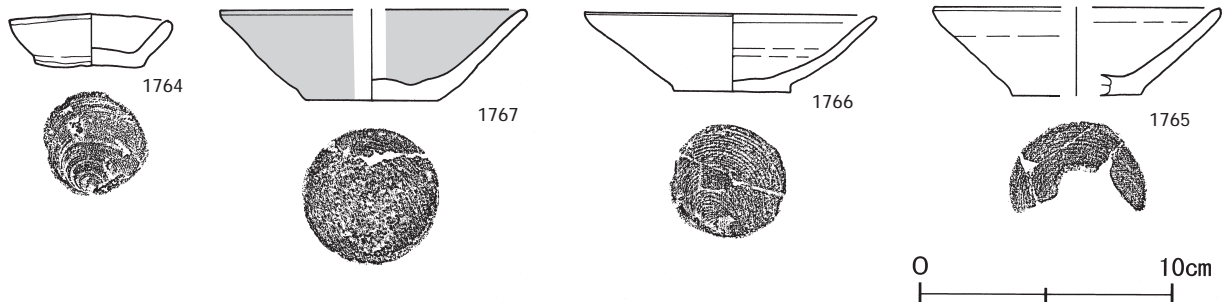
第321図 第37号建物跡貝集積地土層図

第5号貝集積地出土貝種一覧表

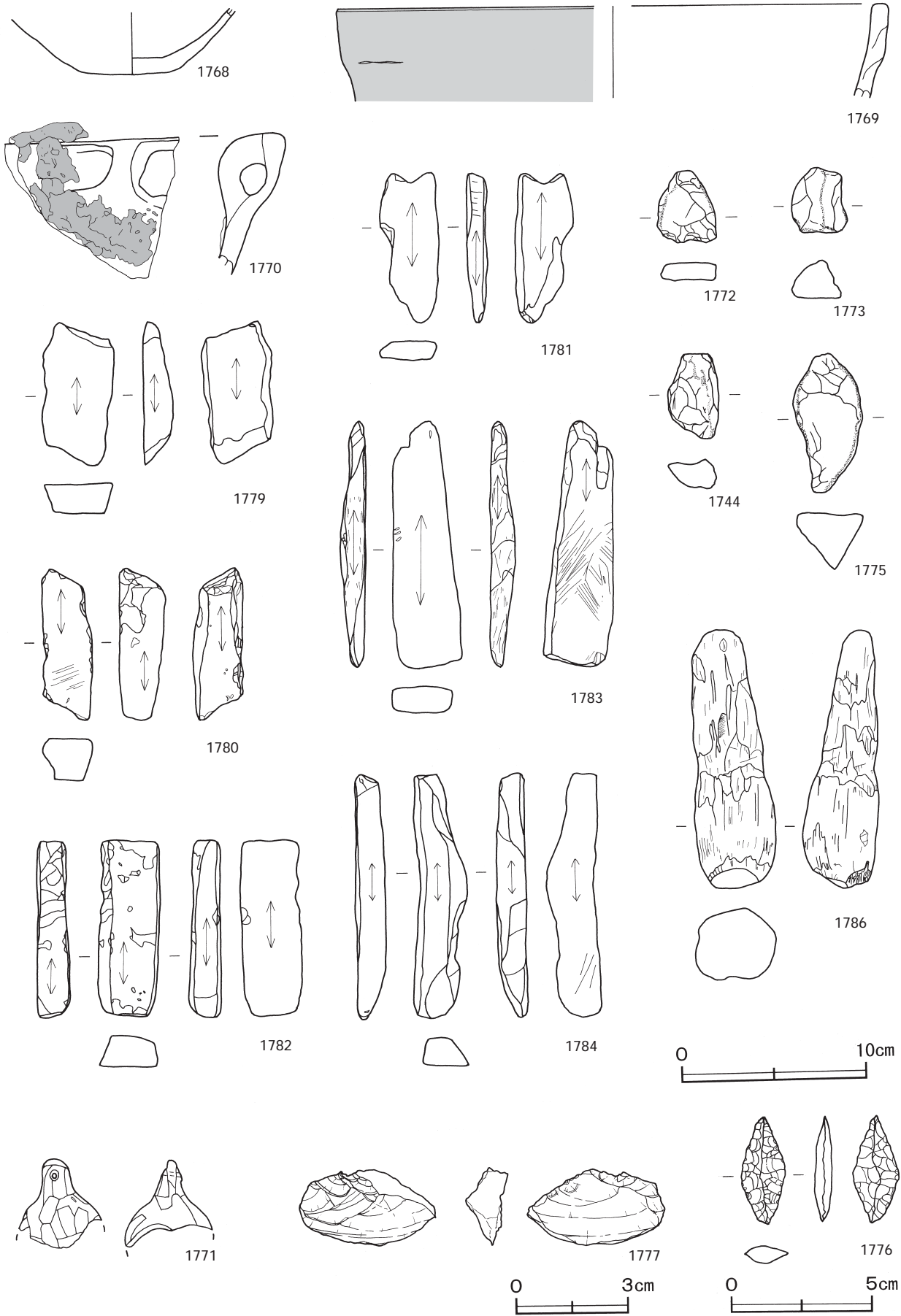
No.	貝種	重さ	比率	殻頂数	備考
1	レイシガイ	2.2	1.27	1	
2	サルボウガイ	16.0	9.23	1	
3	ベンケイガイ	9.5	5.48	2	
4	イガイ類	1.7	0.98	3	
5	ムラサキインコガイ	73.2	42.21	L=55 R=45	
6	ツキヒガイ	0.5	0.29	1	
7	マツカサガイ	1.3	0.75	1	淡水
8	ウバガイ	69.0	39.79	R=2	

遺物出土状況 土師質土器片121点（皿90，内耳鍋31），土製品2点（土鈴），石器23点（砥石14，火打石8，石錘1），金属製品16点（小刀1，環状金具1，目貫1，古銭10，不明3）が出土している。1764・1767・1768は第1次面の西部黒色土中，1766・1770は覆土中から出土している。1770は口縁部に石灰質の物質が付着したまま出土している。1791は南西部の砂層，1792は第1次面の黒色土B層から出土しており，1791の莖部には木質が付着しており，刀身部の遺存状況も良い。砥石や火打石は第1号炉の周辺の黒色土面中から多量に出土している。1793～1798は覆土中や砂層，1799～1801は南西部の黒色土中から出土している。古銭は，1794・1802の「永樂通寶」が最新銭である。第5号貝集積地から古銭1枚が出土している。

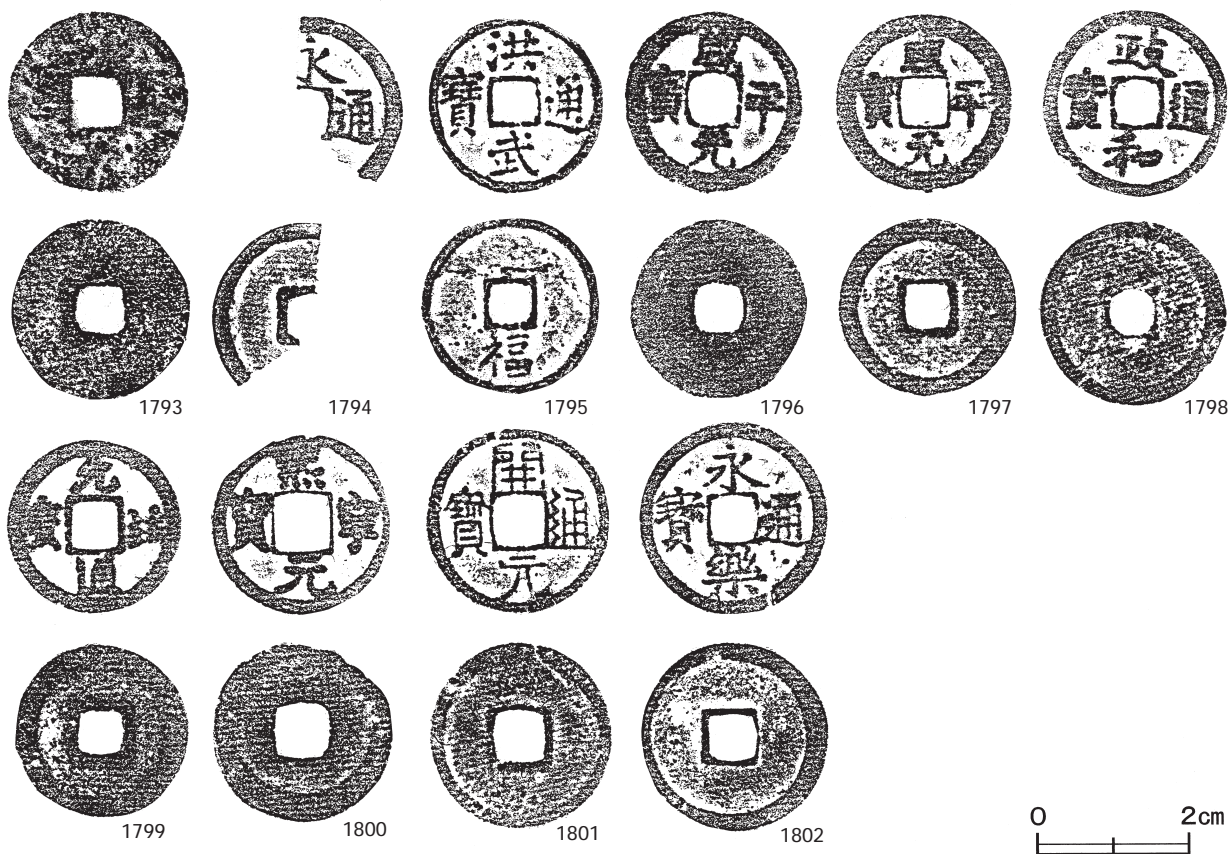
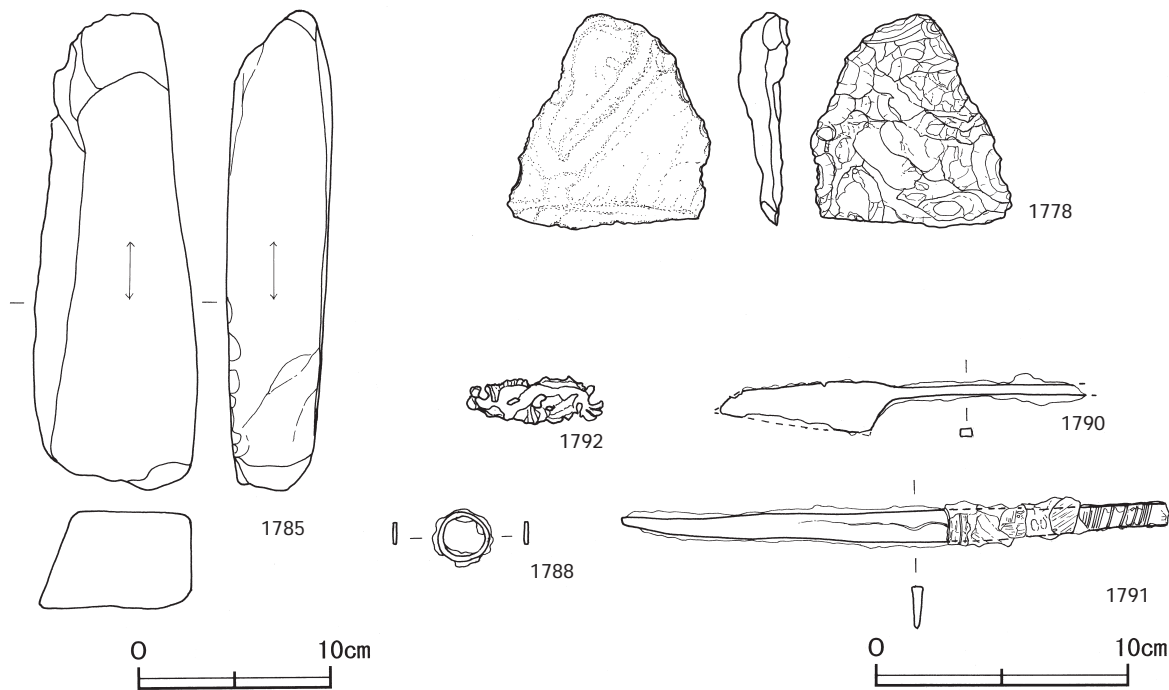
所見 炉や日常雑器類などの出土遺物，整地された黒色土面が検出されたことから建物跡と判断した。黒色土面は何回か貼り替えられており，同様に建て替えが行われていることが検出された柱穴から判断できる。砂質粘土で構築された円柱状の竈は，建物内から出土したものとしては唯一である。壁内面が赤変硬化していることから，かなりの高温で使用されていたものと考えられるが，関連する出土遺物がなく用途については不明である。火打石や砥石の出土も多く，鍛冶に関連する作業が行われた建物跡とも推測できる。



第322図 第37号建物跡出土遺物実測図（1）



第323图 第37号建物跡出土遺物実測図（2）



第324図 第37号建物跡出土遺物実測図(3)

第37号建物跡出土遺物観察表(第322~324図)

番号	器形	器質	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1764	小皿	土師質土器	6.5	2.2	4.2	雲母	にぶい褐	普通	底部回転糸切り, 口縁部油煙	西部1次黒色土中	100% PL44

番号	器形	器質	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1768	皿	土師質土器	—	(3.6)	5.0	雲母	にぶい橙	普通	内外面器面荒れ	P2内・西部1次黒色土中	60%
1765	皿	土師質土器	[11.4]	3.6	[5.0]	雲母	にぶい橙	普通	底部回転糸切り	西部覆土中	30%
1766	皿	土師質土器	11.6	3.1	4.6	雲母・赤色粒子	にぶい橙	普通	底部回転糸切り	覆土中	70% PL42
1767	皿	土師質土器	[12.2]	3.6	5.4	雲母・赤色粒子	にぶい赤褐	普通	底部回転糸切り, 内外面油煙	西部1次黒色土中	60% PL42
1769	内耳鍋	土師質土器	[29.9]	(5.0)	—	長石	明赤褐	普通	口縁部横ナデ, 外面煤付着	黒色土面	5%
1770	内耳鍋	土師質土器	—	(7.6)	—	雲母	黄灰	普通	内外面石灰質付着, 外面煤付着	覆土中	5%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
1771	土鈴	(3.1)	(3.0)	—	(6.8)	土製	ナデ, 孔径0.1	中央部1次黒色土中	
1772	火打石	4.0	3.2	1.0	18.4	瑪瑙	摩滅の集中箇所有り	西部1次黒色土中	
1773	火打石	3.6	3.0	2.0	26.5	瑪瑙	摩滅の集中箇所有り	中央部1次黒色土中	
1774	火打石	4.6	2.7	1.6	23.6	瑪瑙	摩滅の集中箇所有り	西部1次黒色土中	
1775	火打石	7.6	3.7	3.1	72.4	瑪瑙	摩滅の集中箇所有り	黒色土面	
1776	石鏝	2.9	1.2	0.5	1.5	瑪瑙	両面に押圧剥離	覆土中	
1777	剥片	2.7	4.8	11.4	11.4	瑪瑙	両面に剥離痕有り	黒色土面	
1778	剥片	5.6	5.2	1.3	23.8	チャート	片面に剥離痕有り	覆土中	
1779	砥石	7.8	3.8	1.8	71.7	凝灰岩	砥面3面	西部砂層	
1780	砥石	8.2	2.7	2.5	79.1	凝灰岩	砥面3面	南西部1次黒色土中	
1781	砥石	8.1	3.1	1.1	31.8	滑石	砥面3面	南西部1次黒色土中	
1782	砥石	9.6	3.4	1.7	83.1	凝灰岩	砥面4面	覆土中	
1783	砥石	13.4	3.8	1.4	92.5	凝灰岩	砥面4面	南西部1次黒色土下	
1784	砥石	13.4	2.9	1.6	75	凝灰岩	砥面4面	南西部1次黒色土下	
1785	砥石	25.0	8.6	5.5	1,510	凝灰岩	砥面2面	中央部1次覆土中	PL46
1786	石錘	14.0	4.5	4.1	310	滑石	中央部削り痕有り	中央部1次黒色土中	
1788	環状金具	径2.0	—	1.0	5.7	鉄	断面長方形	南西部1次黒色土下	
1790	不明鉄製品	(14.4)	(2.1)	0.5	(18.4)	鉄	工具カ	西部1次黒色土中	
1791	小刀	21.7	1.4	0.4	37.5	鉄	一部木質部付着	南西部砂層	
1792	目貫	5.3	1.8	0.3	9.2	銅	龍文カ	南西部1次黒色土中	PL49

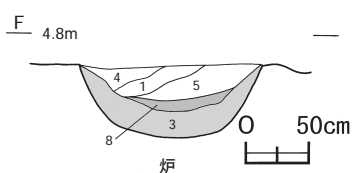
番号	銭名	径	孔径	厚さ	重さ	初铸年	材質	特徴	出土位置	備考
1793	□□□□	2.39	0.63	0.12	2.94	—	銅	判読不能	北西部1次覆土中	
1794	永口通口	—	—	0.09	(1.36)	—	銅	真書, 割れ	西部1次覆土中	
1795	洪武通寶	2.36	0.57	0.13	3.14	1368	銅	真書, 背下「福」	南西部1次覆土中	
1796	咸平元寶	2.37	0.56	0.08	2.46	998	銅	真書	南部砂層	
1797	咸平元寶	2.35	0.60	0.08	2.48	998	銅	真書	南西部1次覆土中	
1798	政和通寶	2.47	0.58	0.13	3.60	1111	銅	分楷, 円孔	南部砂層	
1799	元祐通寶	2.31	0.58	0.08	2.72	1086	銅	行書	南西部2次黒色土中	
1800	熙寧元寶	2.39	0.72	0.11	(3.48)	1068	銅	真書	西部1次黒色土中	
1801	開元通寶	2.42	0.69	0.08	3.40	621	銅	真書	南西部2次黒色土中	
1802	永樂通寶	2.49	0.59	0.11	3.74	1408	銅	真書	覆土中	

第38号建物跡 2区SX-9 (第325~328図)

位置 調査区中央部 H11h6区を中心に位置している。

確認状況 表砂を2m除去した標高4.6mから黒色土面を確認した。上面はほぼ平坦で、炉や土坑が検出された。

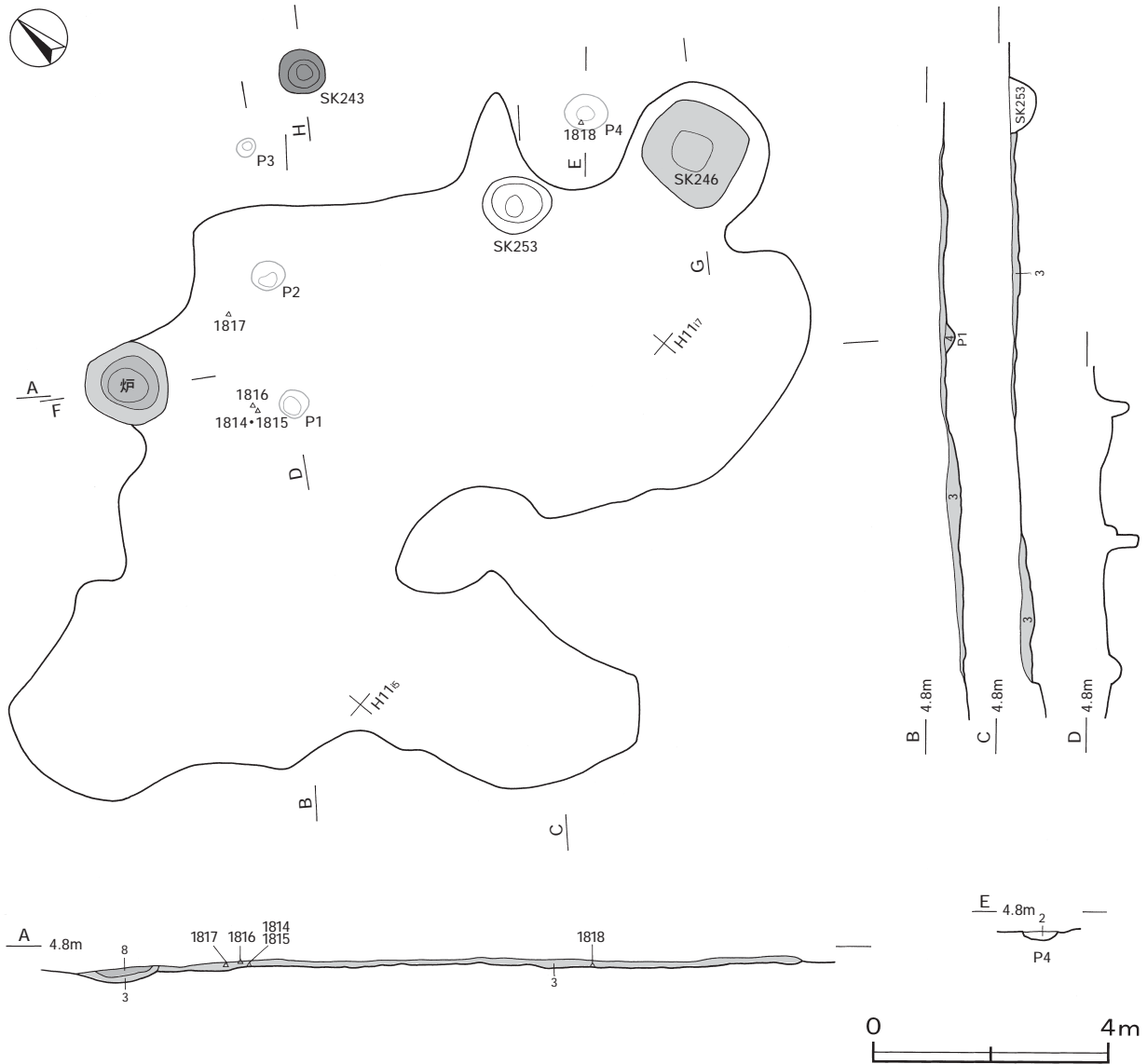
規模と施設 黒色土の範囲は南北11m, 東西12mの不定形である。炉1基, 土坑3基が構築されている。北東部は, 第246号土坑とともに黒色土が張り出している。



床 ほぼ平坦で, 黒色土の厚さは最大で約20cmである。

炉(第325図) 西部に位置している。黒色土の厚さは25cmと厚く, 砂を約25cm掘り込んで構築されている。覆土中には多量の焼砂が検出された。

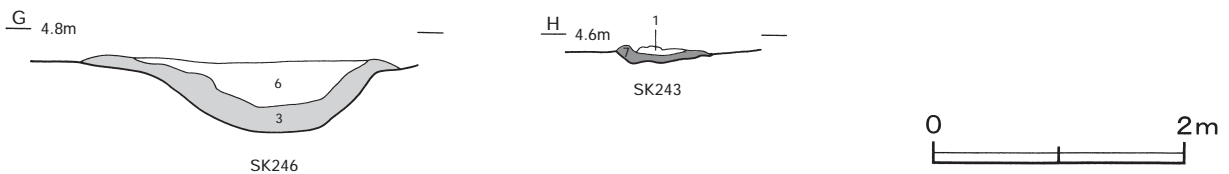
第325図 第38号建物跡炉土層図



第326図 第38号建物跡実測図

ピット 4か所。P1は深さ16cmとやや浅いが、P2～P4は深さ24～46cmである。上屋を支える柱穴と考えられるが、対応するピットが検出されなかった。

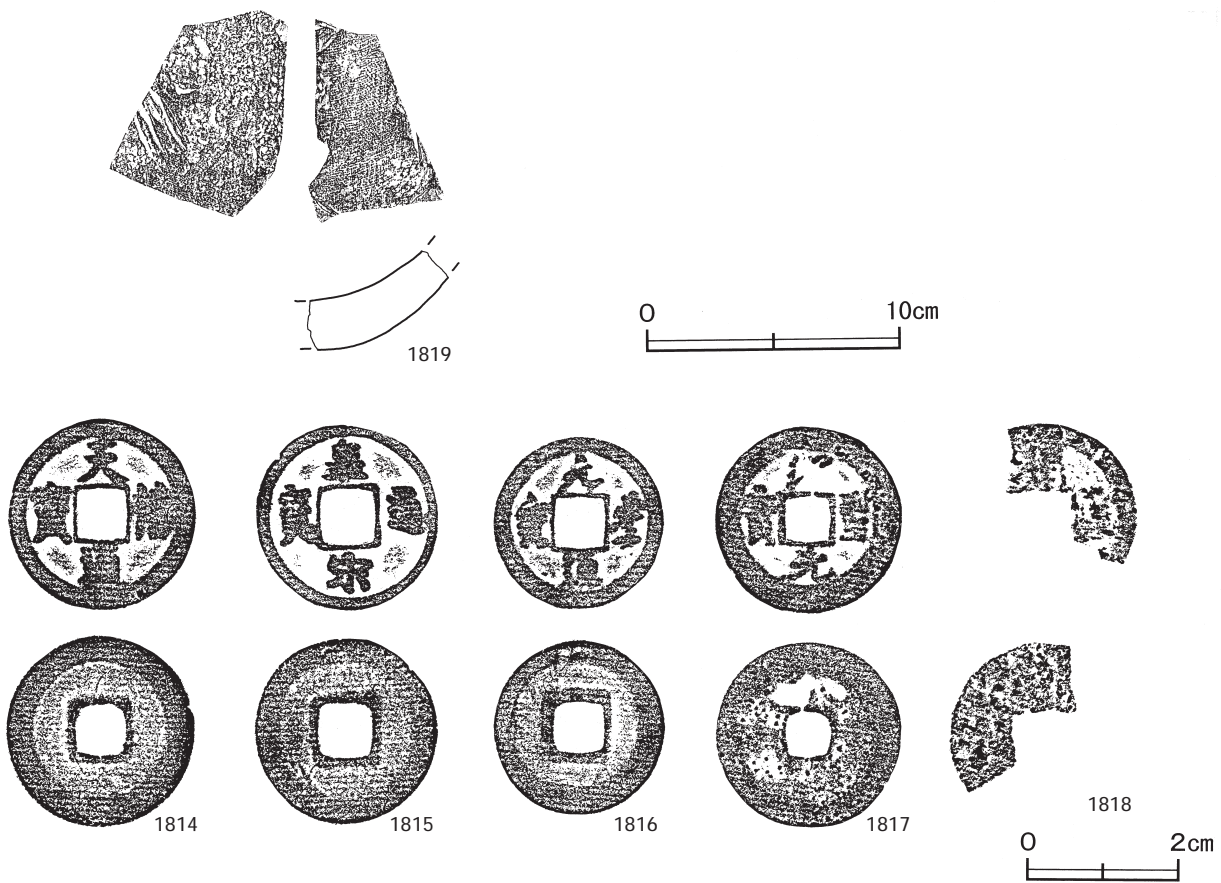
土坑（第327図） 第243号土坑は北部、第246・253号土坑は北東部に位置している。第243号土坑は厚さ5～10cmの粘土を貼り付けて構築されている。



第327図 第38号建物跡土坑土層図

遺物出土状況 土師質土器片15点(皿7, 内耳鍋8), 陶器片1点(皿), 金属製品5点(古銭), 丸瓦片1点が出土している。1814~1817は西部の黒色土面中, 1818は北部のP4内からそれぞれ出土している。古銭は1817の「紹聖元寶」が初鑄年1094年の最新銭である。その他の出土遺物は細片のため図示できなかった。

所見 炉や整地された黒色土面が検出されたことから建物跡と判断したが, 日常雑器類などの出土遺物が少ないことから, 簡易的な建物と考えられる。北東に構築された土坑などの遺構構成を見ると, 作業場や厩などの生活以外に機能した建物跡と推測することができる。



第328図 第38号建物跡出土遺物実測図

第38号 建物跡出土遺物観察表 (第328図)

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	胎土	特徴	出土位置	備考
1819	丸瓦	(5.6)	(4.0)	2.0	(130)	長石・石英・雲母	凹面布目痕	覆土中	

番号	銭名	径	孔径	厚さ	重さ	初鑄年	材質	特徴	出土位置	備考
1814	天禧通寶	2.51	0.68	0.09	3.54	1017	銅	真書	西部黒色土中	
1815	皇宋通寶	2.44	0.77	0.07	2.62	1038	銅	真書	西部黒色土中	
1816	元豊通寶	2.27	0.67	0.08	2.50	1078	銅	行書	西部黒色土中	
1817	紹聖元寶	2.48	0.59	0.09	(3.06)	1094	銅	行書, 鑄不足	西部黒色土中	
1818	開口通口	—	—	0.10	(1.14)	—	銅	真書, 割れ	P4内	

表4 建物跡一覽表

番号	旧遺構番号	位置	長軸方向	標高	黒色土			厚さ(cm)	屋内施設	屋外施設	ピット	備考
					範囲(最大値)		形状					
					長軸(m)	短軸(m)						
1	2区SI1	I12e4	N-10° - E	6.3	11.0	9.0	不定形	10~16	炉1~3	SK108A・B	13	柱穴P1~P8
2	2区SI2	I12e1	N-20° - E	5.5	南北10.5	東西5.0	不定形	4~6	炉1・2・5	SK78・79・127・165	7	
		2次面		5.4	12	東西9.6	不定形	4~6	炉3・4	SK129・130・134・170	32	
3	2区SI3	I12h1	N-21° - W	5.9~6.4	南北9.5	東西7.0	不定形	4~12	炉1,炉2	SK100	13	P1~P6柱穴
4	2区SI4	I11g9	N-0°	5.7~5.9	南北[10.5]	東西7.0	不定形	1次面6~14	炉1~4	SK257~259, SM7・11	6	P1~P6柱穴
		2次面	N-0°	5.6	10.8	6.9	不定形	8~20	—	—	—	
5	2区SI5	I11e8	N-14° - E	5.4	南北7.0	東西8.0	不定形	12~14	炉1~3	SK99・151, SM4・6	—	
		2次面		5.2	(8.0)	(8.0)	不定形	8~10	炉4・5	SK107・114・156・171・172, SM9	18	
6	2区SI6	H11c8	N-85° - E	5.0	7.1	7.9	不定形	4~13	炉1	SK150・155	6	P1~P6柱穴
7	2区SI7	J11c8	N-21° - E	5.7~5.9	南北14.0	東西11.7	不定形	8~16	炉1~9	SK147・213・214・219・222, SM10・12・13・16	14	P3・5・7柱穴
8	2区SI8	J11b3	N-15° - E	4.5	13.6	10.0	不定形	4~40	炉1~4	SK199・200・205・207・209・244・245・251・252・255, SM19	—	
9	2区SI9	J11g9	N-11° - E	6.0	16.0	7.5	不定形	—	—	SK215・216・237, SM15	—	
10	2区SI10	J11h7	N-42° - E	5.8	東西7.0	南北4.6	不定形	4~8	炉1	SK211・218・219	14	P1~P14柱穴
		2次面		5.5	南北12.0	東西10.0	不定形	4~14	炉2~4	SK212・221	—	第3・4号土壌墓
11	2区SI11	J11i2	N-9° - E	4.8~5.0	21.0	12.0	不定形	8~16	炉1~5	SK248・264, SN36, 第4集石	5	
12	2区SI12	J11j5	N-56° - W	5.0~5.2	11.0	(4.5)	不定形	4~16	炉1	—	9	P1~P6, P7~P9は柱穴
13	2区SI13	K11g3	N-82° - E	5.0	6.0	4.0	不定形	—	炉1・2	—	9	P1~P6柱穴
14	3区SI1	B13h4	N-34° - E	6.3	南北(11.4)	東西(11.0)	不定形	10	—	—	4	柱穴
15	4区SI1	E12f0	N-30° - E	4.5	南北15.7	東西8.6	不定形	5	炉1A・B	SK303・304, SM27	—	
		2次面		4.4	6.6	4.3	不定形	5	炉2	SK306・308~313・315・318・520	11	P1~P7柱穴 第107号土壌墓
16	4区SI2	F12c8	N-42° - E	5.7	9.5	10.0	—	6~38	炉1	SK301, 317・SN301(粘土貼土坑), SM26	3	
17	4区SI4	C13e3	N-34° - W	4.5	(8.5)	6.5	[長方形]	4~14	炉1・2	SK341・355, SM33	—	
		2次面	N-56° - E		3.5	4.0	不定形	2~4	—	SK375	—	P1~P6柱穴
		3次面	N-34° - W		3.5	5.5	不定形	6~10	炉3	SK332・405	9	
		4次面	N-34° - W		(4.8)	6.6	不定形	6~20	炉4	—	4	
18	4区SI5	D13f5	N-0°	5.2	15.0	(6.5)	不定形	2~8	炉2	SK333・338・354・356・363, SN305, SM34	2	第78号土壌墓
19		D13b3	[N-30° - E]	4.3	南北8	東西11	不定形	6~10	炉2・3	SK336・361・392・409・423・458, SN306, SM36	5	P1~P5柱穴
	4区SI6	2次面			南北(11)	東西(6.3)	不定形	6~10	炉1	SN306, SM37, SK423・431・435・448・458	15	P8~P14柱穴 第90・91号土壌墓
20	4区SI-7	C13h1	N-20° - W	3.4	(10.7)	(3.8)	不定形	—	炉1~3	SK402・418・496	5	P1~P5柱穴 第8号土壌墓
21	2区SB1	H11c4	N-37° - E	5.0	12.2	8.3	不定形	4~10	炉1	SN8	7	P1~P7柱穴
22	2区SB3	H11b5	N-37° - E	5.0	2.0	7.0	不定形	4~10	—	—	10	
23	2区SB2	H11a6	—	4.7~4.8	—	—	—	—	—	—	6	P1~P6柱穴
24	2区SB4	H11e5	N-50° - W	4.5~4.6	—	—	—	—	—	—	5	黒色土は検出されなかった P1~P5柱穴
25	2区HK7	H11f8	N-45° - W	5.0	南北9.2	東西7.4	不定形	5~12	炉1	SK119	6	P1~P4柱穴, P5・P6は柱穴か
26	2区HK15	K11c2	N-15° - W	5.0	11.2	(6.8)	不定形	18~26	炉1~3	SK283・284・291	13	第6・7号土壌墓
27	2区HK18	J11d1	N-41° - E	4.2	15	(11.5)	不定形	10~45	炉1~3	SK278・290・296~301・303~305, SM20・21	19	P1・P3・P4・P15~P17柱穴
28	4区HK3	D13g5	N-0°	4.9	25.2	(8.4)	不定形	6~20	炉	SK398・404・411・413・415・416・419・433・440・441・459	—	
29	4区HK8	E13b5	N-21° - E	5.7~5.8	南北10.5	東西5.4	不定形	4~14	炉1・2	SK384・386	13	(P1, P6, P10) 主柱穴
30	4区HK11	E13c5	N-17° - E	5.7~5.8	南北13.6	東西(10.5)	不定形	4~22	炉1・2	SK410, 414, 417, 425	1	
31	4区HK26	E13g3	N-90° - E	5.6~6.0	南北7.8	東西9.5	不定形	6~36	炉1	SK37, SM40~42	3	P1~P3 1次面柱穴 第39・42号土壌墓
		2次面	N-90° - E	5.1~5.3	南北5.0	東西7.2	不定形	4~8	炉2・3	SK33	6	P4~P9 2次面柱穴
		3次面	N-0°	5.0~5.1	南北9.9	北東7.0	不定形	4~8	—	—	—	
32	4区HK27	F12b9	N-64° - E	5.8	東西17.0	南北9.5	不定形	14~28	—	SN221・222, SM47	—	
		2次面	N-62° - E	5.6	東西14.0	南北[10.7]	不定形	10~40	炉1~4	SN223, SK40	—	
		3次面	N-23° - E	—	5.0	2.6	不定形	2~4	—	SK46・52	25	

番号	旧遺構 番号	位置	長軸方向	標高	黒色土				屋内施設	屋外施設	ピット	備考
					範囲(最大値)		形状	厚さ (cm)				
					長軸 (m)	短軸 (m)						
33	4区HK28	E13i1	N-13°-E	5.7	長軸7.2	短軸4.2	不定形	8~14	炉1~2	SK26・27・34・35・47, SM39	—	
		2次面	N-72°-E	5.6	7.0	4.0	不定形	10	炉3	—	4	
		3次面	N-60°-E	—	10.4	2.9	不定形	—	—	SN217	—	
34	4区HK30	F12a0	N-62°-E	4.2~4.4	北東17.0	西側3.0	不定形	4~10	炉1~3	SK105・112・116, SM45	1	ピット→SM45
35	4区HK32	E13c5	N-0°	6.1~7.4	南北15.0	東西(7.0)	不定形	4~14	炉1・2・5	SK376	—	
		2次面	N-0°	6.6	3.7	(3.4)	不整形	4~16	炉3・4	SK364, SN309, 310	2	
36	2区SX2	G11j7	N-55°-W	5.0	5.8	東西9.6	不定形	12~64	炉1	—	4	
37	2区SX7	H12f2	N-0°	4.3	南北10.3	東西11.0	不定形	7~28	カマド1	SK104	7	
		2次面	N-90°-E	4.1~4.2	南北7.0	9.4	不定形	8~24	炉1・2	SM5	6	
38	2区SX9	H11h6	N-48°-W	4.1~4.4	11.2	12.0	不定形	6~20	炉1	SK243・246・253	4	

表5 建物跡炉一覧表

遺構 番号	番号	位置	標高	長軸方向	規模			形状	黒色 土厚 (cm)	粘土厚 (cm)	壁面	床面	出土遺物	備考
					長軸(m)	短軸(m)	深さ(cm)							
SI1	1	I12e4	6.1	N-31°-E	1.2	1.1	20	方形	2~5	—	緩斜	皿状	火打石, 火打金	SK105
	2	I12e4	6.1	N-31°-E	(1.1)	1.2	20	不整形	3~15	—	緩斜	皿状	—	SK106
	3	I12d3	6.3	N-17°-E	1.4	1.4	20	不整形	4~7	—	緩斜	皿状	古銭	SK107
SI2	1	I12d1	5.6	N-49°-W	1.0	0.9	17	楕円形	7	—	緩斜	皿状	—	SK80
	2	I11e0	5.7	N-88°-E	1.2	1.0	17	楕円形	2~4	—	緩斜	皿状	—	
	3A	I12d2	5.5	N-16°-E	0.9	0.8	17	楕円形	3~7	—	緩斜	皿状	—	
	3B	I12d2	5.5	N-16°-W	(0.8)	0.6	(4)	[楕円形]	3	—	緩斜	平坦	—	
	4	I12d1	5.4	N-4°-W	1.0	0.8	6	楕円形	4~8	—	緩斜	凸凹	—	
	5	I12d1	5.5	N-35°-E	1.2	1.0	—	隅丸長方形	—	—	緩斜	平坦	—	
SI3	1	I12h1	6.4	N-20°-W	1.5	1.4	12	不定形	4~10	—	緩斜	凸凹	—	SK101
	2	I12h1	6.4	N-12°-E	1.1	[1.0]	16	楕円形	2~5	—	緩斜	皿状	古銭	SK131
SI4	1	I11f9	5.6	N-16°-W	1.1	0.9	18	不定形	2~10	—	緩斜	皿状	—	SK138
	2A	I11g9	5.6	N-0°	0.9	0.9	14	不定形	2~6	—	緩斜	皿状	—	SK139
	2B	I11g9	5.6	N-0°	1.1	0.9	17	不定形	2~8	—	緩斜	皿状	—	SK139
	2C	I11g9	5.6	N-0°	—	—	11	—	2~5	—	緩斜	皿状	—	SK139
	3	I11g9	5.6	N-60°-E	1.1	1.0	16	不定形	5~10	—	緩斜	皿状	—	SK140
	4	I11g9	5.6	N-28°-E	0.9	0.8	6	隅丸方形	3~7	—	緩斜	皿状	—	SK141
SI5	1	I11d9	5.2	N-12°-W	1.0	0.8	17	楕円形	3~5	—	緩斜	平坦	—	SK92
	2	I11c8	5.1	N-50°-E	1.1	1.0	12	方形	7~10	—	緩斜	平坦	—	SK94
	3	I11c9	5.2	N-20°-E	0.8	0.8	4	円形	4	—	緩斜	平坦	—	SK159
	4	I11c9	(5.2)	N-71°-W	[0.6]	0.6	3	円形	4	—	緩斜	平坦	—	SK161
	5	I11d8	5.0	N-31°-E	1.2	0.8	6	不整形長方形	4~10	—	緩斜	凸凹	古銭	SK93
SI6	1	H11b8	4.9	N-21°-W	0.4	0.3	10	不整形楕円形	—	—	緩斜	皿状	—	SK453
SI7	1	J11b7	5.7	N-58°-W	1.1	0.8	11	長方形	5~7	—	緩斜	皿状	—	SK145
	2	J11c8	5.8	N-10°-E	1.1	1.1	12	方形	3~7	—	緩斜	皿状	—	SK146
	3	J11b8	5.7	N-37°-W	1.6	1.1	16	隅丸長方形	3~10	—	緩斜	皿状	—	SK210
	4	J11d8	5.6	N-58°-W	1.7	1.5	16	不定形	3~14	—	緩斜	皿状	—	SK232
	5	J11d8	5.5	N-35°-E	1.1	0.9	10	長方形	2~5	—	緩斜	皿状	—	SK233
	6	J11d8	5.6	N-30°-E	0.9	(0.7)	10	[方形]	1~7	—	緩斜	皿状	砥石	SK234
	7	J11e8	5.6	N-44°-E	1.1	1.0	10	方形	3~10	—	緩斜	皿状	—	SK231

遺構 番号	番号	位 置	標 高	長軸方向	規 模			形 状	黒色 土厚 (cm)	粘土厚 (cm)	壁面	床面	出土遺物	備 考
					長軸(m)	短軸(m)	深さ(cm)							
SI7	8	J11c6	5.3	N-60° -E	0.7	[0.6]	6	[楕 円 形]	3~7	—	緩斜	皿状	—	SK148
	9	J11c6	5.3	N-60° -E	1.1	[0.8]	10	[方 形]	4~6	—	緩斜	皿状	—	SK149
SI8	1	J11a2	4.5	N-3° -E	[1.2]	1.1	15	[円 形]	3~20	—	緩斜	皿状	吊金具, 古銭	SK204
	2	J11b1	4.3	N-19° -E	1.8	1.5	9	不整楕円形	5~10	—	外傾	ゆるい起伏	—	SK228
	3	J11b3	4.3	N-26° -E	1.2	(0.6)	10	不 定 形	8~13	—	緩斜	皿状	小皿	SK241
	4A	J11a3	4.2	N-31° -E	1.6	1.1	17	不 定 形	4~14	—	緩斜	皿状	—	SK250A
	4B	J11a3	4.1	N-24° -E	0.9	0.7	(10)	不 定 形	5~15	—	緩斜	平坦	—	SK250B
SI10	1	J11h7	5.7	N-41° -E	1.7	1.3	14	不整楕円形	2~6	—	緩斜	皿状	—	SK217
	2A	J11h7	5.6	N-41° -E	1.4	1.3	23	不 定 形	6~13	—	緩斜	皿状	—	SK242A
	2B	J11h7	(5.4)	[N-41° -E]	[1.4]	[1.3]	—	不 定 形	(16~22)	—	不明	平坦	毛拔	SK242B
	3	J11g7	5.5	N-45° -E	1.3	1.2	28	隅丸長方形	5~14	—	緩斜	皿状	—	SK236
	4	J11g7	5.4	N-46° -E	1.0	0.9	14	隅丸方形	2~6	—	緩斜	皿状	—	SK238
SI11	1	J11i1	4.6	N-82° -W	1.2	0.9	11	楕 円 形	9~14	—	緩斜	皿状	古銭	Sk262
	2	J11i1	4.6	N-30° -E	1.4	1.4	14	不整楕円形	7~12	—	緩斜	平坦	古銭	SK263
	3	J11i1	4.7	N-31° -W	1.7	1.7	35	不 整 円 形	4~14	—	緩斜	皿状	砥石, 古銭	SK265
	4	J11i1	4.6	N-29° -E	1.3	1.1	13	隅丸長方形	2~12	—	緩斜	皿状	—	Sk288
	5	J11i1	4.5	N-26° -E	1.2	1.0	8	隅丸長方形	6~12	—	緩斜	皿状	—	SK276
SI12	1	J11j5	5.1	N-40° -E	1.2	0.9	12	不整楕円形	2~7	—	緩斜	皿状	—	SK293
SI13	1	K11g2	4.8	N-38° -E	1.1	0.9	15	長 方 形	2~7	—	緩斜	平坦	—	SK275
	2	K11f2	4.9	N-27° -E	1.3	1.0	12	不整楕円形	2~6	—	緩斜	平坦	—	SK274
SI15	1A	E12e9	4.5	—	(0.9)	1.3	12	—	4~6	—	緩斜	皿状	—	SK307
	1B	E12e9	4.5	—	(0.9)	(0.4)	10	—	4~13	—	緩斜	皿状	—	Sk307
	2	E12g8	4.4	N-35° -E	0.8	0.6	6	楕 円 形	—	—	緩斜	皿状	—	Sk305
SI16	1	F12a8	5.8	N-30° -W	1.0	0.9	10	楕 円 形	5~10	—	緩斜	皿状	—	SK316
SI17	1	C13d3	4.5	N-34° -E	1.1	1.1	12	隅丸方形	3~6	—	緩斜	皿状	古銭	SK399
	2	C13d4	4.5	N-32° -E	1.0	0.8	12	隅丸方形	4~8	—	緩斜	皿状	—	SK340
	3	C13d3	3.7	N-67° -W	1.2	1.1	10	楕 円 形	6~8	—	緩斜	皿状	—	SK403
	4	C13e3	3.8	N-34° -E	2.0	1.4	56	楕 円 形	2~12	—	緩斜	皿状	小刀, 古銭	SK391
SI18	1	D13f5	5.0	N-49° -E	1.2	0.9	7	楕 円 形	3~7	—	緩斜	平坦	—	SK352
	2	D13f4	4.7	N-16° -E	1.1	0.9	12	楕 円 形	3~13	—	緩斜	平坦	包丁カ	SK368
SI19	1	D13a3	4.1	N-31° -E	1.2	1.0	10	隅丸長方形	3~6	—	緩斜	平坦	硯, 古銭	SK453
	2	D13c2	4.0	N-30° -E	0.8	0.7	7	方 形	2~3	—	緩斜	平坦	—	SK427
	3	D13c1	3.7	N-37° -E	1.0	1.0	6	方 形	1~7	—	緩斜	平坦	—	SK426
SI20	1A	C13h1	3.5	N-41° -E	1.1	1.1	14	隅丸方形	2~7	—	緩斜	皿状	—	SK470A
	1B	C13h1	3.5	N-50° -W	1.3	(0.4)	13	[隅丸長方形]	6~8	—	緩斜	皿状	—	SK470B
	1C	C13h1	3.4	N-55° -W	1.1	0.6	10	隅丸長方形	4~10	—	緩斜	皿状	—	SK470C
	1D	C13h1	3.4	N-37° -E	(1.2)	1.0	10	隅丸長方形	7	—	緩斜	皿状	—	SK470D
	2	C12g0	3.3	N-35° -E	[1.0]	0.8	8	[隅丸長方形]	5~9	—	緩斜	皿状	—	SK469
	3	C12g0	4.2	N-31° -W	0.8	(0.5)	17	[隅丸長方形]	4~7	—	緩斜	皿状	—	SK394
SI21	1	H11b4	5.0	N-71° -W	0.7	0.7	15	隅丸方形	4~10	—	外傾	凸凹	内耳鍋, 砥石	
SI25	1	H11f8	4.5	N-62° -E	1.2	0.9	12	楕 円 形	—	—	—	—	鎌, 片刃	
SI26	1	K11c2	5.1	N-49° -W	1.6	1.0	9	不整楕円形	3~10	—	緩斜	皿状	—	SK269
	2	K11c1	4.9	N-48° -W	1.0	1.0	14	方 形	3~12	—	緩斜	皿状	—	SK282
	3	K11c2	4.9	N-40° -W	0.9	0.8	5	楕 円 形	8~12	—	緩斜	凸凹	—	SK277
SI27	1	J11e1	4.3	N-37° -E	0.9	0.7	7	楕 円 形	7	—	緩斜	平坦	—	
	2	J11e1	4.1	N-39° -W	0.7	0.6	10	楕 円 形	10	—	緩斜	皿状	—	
	3	J10e0	4.1	N-38° -E	1.9	0.8	40	楕 円 形	7	—	外傾	皿状	—	SK296
SI28	1	D13f5	4.3	N-56° -E	0.8	0.6	10	楕 円 形	6~10	—	外傾	平坦	—	SK434
SI29	1	E13d5	6.0	N-90° -E	1.0	0.8	12	不 定 形	2~10	—	外傾	皿状	—	SK377

遺構 番号	番号	位 置	標 高	長軸方向	規 模			形 状	黒色 土厚 (cm)	粘土厚 (cm)	壁面	床面	出土遺物	備 考
					長軸(m)	短軸(m)	深さ(cm)							
SI29	2	E13c5	5.9	N-69°-E	1.3	1.1	10	橢 円 形	2~7	—	緩斜	皿状	古銭	SK383
SI30	1	E13c5	5.6	N-72°-E	1.0	0.6	10	不 定 形	3~5	—	緩斜	平坦	—	SK420
	2	E13a4	5.2	N-2°-W	[1.1]	[0.9]	23	—	3~5	—	緩斜	平坦	—	SK424
SI31	1	E13g2	5.5	N-19°-E	0.9	0.9	6	円 形	2~5	—	緩斜	平坦	—	
	2	E13f2	(5.4)	N-71°-W	[1.3]	(1.0)	10	[橢円形]	2~5	—	緩斜	平坦	—	
	3	E13f3	—	N-48°-W	1.1	[0.9]	—	[長方形]	—	—	—	—	—	
SI32	1	F12a8	5.5	N-2°-E	0.8	0.8	—	隅丸方形	3~7	—	緩斜	平坦	—	SK44
	2	F12c8	5.6	N-70°-W	1.1	1.1	20	不 定 形	10.0	—	緩斜	平坦	—	SK43
	3	F12b7	5.6	N-35°-E	1.0	[7.2]	10	[橢円形]	6.0	—	緩斜	皿状	—	SK45
	4	F12a8	5.6	N-14°-W	0.9	0.9	10	橢 円 形	5.0	—	緩斜	皿状	火打石	SK41
SI33	1	F13i1	5.7	N-90°-W	0.8	0.7	6	橢 円 形	6~10	—	緩斜	皿状	—	SK28B
	2	F13i1	5.7	N-72°-W	0.7	0.6	13	長 方 形	4~9	—	緩斜	皿状	—	SK28A
	3	F13i1	5.6	N-49°-W	0.8	(0.6)	21	—	2~9	—	緩斜	皿状	—	SK62
SK34	1	F12b0	4.3	N-84°-E	1.9	[1.2]	18	橢 円 形	2~6	—	緩斜	皿状	—	SK114
	2	F13b1	4.3	N-62°-W	1.1	[1.0]	19	不 定 形	3~10	—	緩斜	皿状	—	SK115
	3	F12a0	3.9	N-21°-E	1.0	0.8	16	橢 円 形	5~15	—	緩斜	皿状	—	SK120
SI35	1	E13c5	6.6	N-57°-W	1.1	1.0	10	不 定 形	4~10	—	緩斜	皿状	—	SK342
	2	E13c5	6.6	N-74°-W	1.1	1.1	14	不 定 形	2~6	—	緩斜	皿状	—	SK337
	3	E13c5	(6.5)	N-41°-E	1.1	[0.7]	11	[円形]	3	—	緩斜	平坦	—	SK358
	4	E13c5	6.6	N-23°-E	1.1	[1.0]	15	[方形]	9	—	緩斜	平坦	—	SK359
	5	E13b5	—	N-41°-W	1.4	1.0	—	橢 円 形	—	—	—	—	—	SK360
SI36	1	G11j7	5.1	N-41°-E	9.4	(3.8)	18	方 形	6	—	外傾	平坦	—	
SI37	1	H11f1	4.3	N-44°-W	1.4	1.3	10	隅丸方形	7~9	—	—	—	—	
	2	H11e2	4.1	N-23°-W	0.9	0.8	6	不 定 形	4~12	—	緩斜	皿状	—	
	3	H11f2	4.0	N-40°-E	1.0	1.0	28	円 形	2~10	12~25	緩斜	平坦	—	竈
SI38	1	H11g5	4.6	N-43°-W	1.4	1.4	35	不整円形	10~22	—	緩斜	皿状	—	

表6 建物跡粘土貼土坑一覧表

番号	遺構番号	位 置	標 高	長軸方向	規 模			形 状	黒色 土厚 (cm)	粘土厚 (cm)	壁面	床面	出土遺物	備 考
					長軸(m)	短軸(m)	深さ(cm)							
SI11	SN36	J11j2	4.9	N-35°-W	2.3	2.0	45	橢 円 形	—	6~30	外傾	平坦	古銭	
SI16	SN301	F12b8	5.7	N-54°-E	0.8	0.6	20	橢 円 形	—	5	緩斜	皿状	—	
SI18	SN305	D13f4	5.2	N-84°-W	1.1	1.0	34	隅丸長方形	2~4	3~8	外傾	平坦	—	
SI19	SN306	D13b4	4.4	N-29°-E	1.4	0.9	35	隅丸長方形	1~3	2~8	外傾	平坦	—	
SI21	SN8	H11c4	4.6	N-43°-E	1.4	1.3	20	不 定 形	—	5~15	緩斜	平坦	—	
SI32	SN221	F12a8	5.9	N-46°-W	1.3	1.0	13	橢 円 形	1~5	2~5	緩斜	皿状	—	
SI32	SN222	F12b0	5.9	N-33°-W	1.1	1.0	15	円 形	4	5	緩斜	皿状	—	
SI32	SN223	F12a8	5.7	N-43°-E	0.7	0.5	2	橢 円 形	6	8	緩斜	皿状	—	
SI33	SN217	E13h1	5.8	N-70°-W	[1.9]	1.2	57	[長方形]	2~6	3~8	外傾	皿状	小皿	
SI35	SN309	E13b5	6.1	N-25°-W	0.5	0.5	15	円 形	—	5~9	緩斜	皿状	砥石, 火打石	
SI35	SN310	E13b5	6.2	N-0°	0.7	0.7	31	円 形	—	6~10	外傾	皿状	—	

表7 建物跡土坑一覽表

番号	遺構番号	位置	標高	長軸方向	規模			形状	黒色土厚 (cm)	粘土厚 (cm)	壁面	床面	出土遺物	備考
					長軸(m)	短軸(m)	深さ(cm)							
SI1	SK108A	I12f4	6.6	N-12°-E	1.6	1.6	31	不整形	6~15	—	緩斜	皿状	—	
	SK108B	I11f3	6.4	N-10°-E	1.7	1.5	55	不整形	2~6	—	緩斜	皿状	—	
SI2	SK78	I12d1	5.6	N-24°-W	0.9	0.8	15	楕円形	—	—	緩斜	皿状	—	
	SK79	I12d1	6.0	N-3°-E	0.8	0.8	9	隅丸方形	3~8	3~6	緩斜	皿状	古銭	
	SK127	I12c1	5.4	N-86°-E	0.6	0.5	10	不整楕円形	3~7	—	緩斜	皿状	古銭	
	SK165	I12c1	5.6	N-87°-W	1.2	1.0	10	隅丸長方形	8~14	—	緩斜	皿状	—	
	SK129	I12d1	5.4	N-31°-E	1.0	0.8	25	隅丸長方形	—	—	緩斜	平坦	—	
	SK130	I12c1	5.2	N-11°-E	1.7	1.0	11~15	楕円形	5~16	4~8	緩斜	平坦	—	
	SK134	I12d2	5.2	N-28°-E	1.3	0.8	32	楕円形	—	—	緩斜	皿状	—	
	SK170	I11e0	5.3	N-69°-W	2.5	1.9	64	楕円形	—	—	緩斜	凸凹	—	
SI3	SK100	I12h2	6.5	N-9°-E	0.9	0.8	15	楕円形	2~7	—	緩斜	皿状	—	
SI4	SK257	I11h8	5.8	N-5°-W	1.2	1.2	18	不定形	5~12	—	緩斜	段状	—	
	SK258	I11f9	5.7	N-12°-W	[1.0]	0.6	10	不定形	6~12	—	緩斜	平坦	—	
	SK259	I11f9	5.7	N-46°-W	[1.0]	0.7	5	不定形	7~10	—	緩斜	皿状	—	
SI5	SK99	I11e7	5.2	N-6°-E	1.6	1.5	35	円形	9~15	—	緩斜	皿状	—	
	SK107	I11e9	5.2	N-1°-E	0.8	0.6	17	楕円形	3~5	3~5	緩斜	皿状	—	
	SK114	I11d7	4.8	N-71°-E	1.5	1.1	24	楕円形	7~13	—	緩斜	平坦	—	
	SK151	I11f6	5.1	N-41°-E	1.7	1.1	28	楕円形	—	—	緩斜	平坦	毛拔	
	SK156	I11f6	5.1	N-33°-E	0.7	0.7	16	円形	—	—	緩斜	皿状	—	
	SK171	I11d7	4.8	N-15°-W	1.4	[1.3]	—	[円形]	(5~8)	—	外傾	—	—	
	SK172	I11d6	4.8	N-76°-W	[1.0]	0.9	25	楕円形	6~9	—	緩斜	平坦	—	
SI6	SK155	H11c8	4.6	N-11°-E	1.0	0.8	25	楕円形	—	1~10	緩斜	皿状	—	
	SK150	H11b9	4.9	N-49°-W	0.6	0.6	10	円形	—	1~10	外傾	皿状	—	
SI7	SK147	J11d0	5.8	N-50°-E	1.3	1.1	34	方形	2~8	—	外傾	平坦	古銭	
	SK222	J11e8	5.9	N-46°-E	[1.2]	1.1	43	[方形]	4~11	—	外傾	皿状	—	
	SK213	J11c8	5.7	N-88°-W	1.0	1.0	14	方形	2~5	—	緩斜	皿状	—	
	SK214	J11e8	5.7	—	0.9	0.7	42	(円形)	4~10	—	外傾	皿状	—	
	SK219	J11c8	5.7	N-45°-E	3.1	2.5	14	方形	2~6	—	緩斜	皿状	—	
SI8	SK199	I11j1	4.5	N-23°-E	1.4	1.1	21	楕円形	3~9	3~9	外傾	平坦	—	
	SK200	J11b2	4.6	N-30°-E	1.1	1.1	30	隅丸方形	3~9	—	緩斜	皿状	切羽	
	SK205	J10c0	4.5	N-40°-E	2.0	(0.8)	28	[隅丸長方形]	4~8	—	緩斜	ゆるい起伏	—	
	SK207	J11b2	4.3	N-62°-W	0.9	(0.6)	13	[隅丸長方形]	7~10	—	緩斜	皿状	—	
	SK229	J11b1	4.4	N-3°-E	1.0	0.8	11	楕円形	5~10	—	外傾・緩斜	平坦	—	
	SK239	J11c3	4.2	N-39°-E	2.1	1.3	35	隅丸長方形	—	—	外傾	平坦	—	
	SK244	J11c1	4.4	N-44°-W	1.2	1.1	30	不定形	8~22	—	外傾	皿状	—	
	SK245	J11c1	4.4	N-28°-E	1.5	1.1	40	楕円形	2~8	3~7	外傾	ゆるい起伏	—	
SI9	SK251	J11a3	4.2	N-24°-E	0.9	0.8	12	隅丸長方形	3~12	—	緩斜	ゆるい起伏	—	
	SK252	J11b3	4.1	N-55°-W	0.9	0.7	13	楕円形	5~9	—	緩斜	ゆるい起伏	—	
	SK255	J11b3	4.2	N-21°-E	1.2	0.8	55	隅丸長方形	—	—	緩斜	皿状	—	
	SK215	J11f8	6.0	N-52°-E	1.1	1.0	24	楕円形	5~8	—	緩斜	皿状	—	
	SK216	J11g9	6.2	N-55°-E	2.0	1.7	45	不定形	3~14	—	緩斜	皿状	—	
SI10	SK237	J11i9	5.8	N-35°-E	1.8	1.8	14	方形	4~11	—	緩斜	平坦	—	
	SK211	J11f6	5.8	N-37°-E	1.7	1.4	36	楕円形	6~12	—	緩斜	皿状	—	
	SK212	J11f5	5.3	N-27°-W	1.8	1.7	32	円形	4~11	—	緩斜	平坦	—	
	SK218	J11g6	5.6	N-27°-W	1.7	1.4	32	楕円形	2~8	—	緩斜	平坦	—	

番号	遺構番号	位置	標高	長軸方向	規模			形状	黒色土厚 (cm)	粘土厚 (cm)	壁面	床面	出土遺物	備考	
					長軸(m)	短軸(m)	深さ(cm)								
SI10	SK219	J11f6	—	N-49°-W	1.5	1.4	—	楕円形	—	—	—	—	—		
	SK221	J11g5	5.1	N-40°-E	1.2	1.2	34	方形	2~9	—	外傾	平坦	—		
SI11	SK248	J11j1	4.8	N-85°-E	1.7	1.5	42	楕円形	2~21	—	緩斜	平坦	古銭		
	SK264	J11j1	4.6	N-77°-E	1.3	1.2	22	円形	4~13	—	緩斜	皿状	—		
SI15	SK303	E13e1	4.7	N-14°-E	1.1	0.9	10	長方形	4~7	—	緩斜	平坦	—		
	SK304	E12e0	4.6	N-50°-E	(0.8)	0.9	30	[方形]	2	4~12	緩斜	皿状	—		
	SK306	E12f9	4.4	N-66°-W	2.6	2.0	70	楕円形	—	—	外傾	平坦	—		
	SK308	E12e9	4.4	N-52°-W	(0.9)	(1.0)	20	[長方形]	3	4~8	緩斜	平坦	—		
	SK309	E12g8	4.2	N-66°-W	1.4	1.1	70	長方形	—	—	外傾	平坦	—		
	SK310	E12e8	4.3	N-48°-W	(1.4)	(1.6)	60	[楕円形]	2~12	2~6	外傾	平坦	—		
	SK311	E12g9	4.5	N-26°-E	2.3	1.1	60	長方形	—	—	外傾	平坦	—		
	SK312	E12f8	4.1	—	—	—	5	—	2	—	緩斜	皿状	—		
	SK313	E12f8	4.1	—	—	—	10	—	6	—	緩斜	皿状	—		
	SK315	E12f8	4.1	N-33°-E	(0.9)	0.7	15	—	6~15	—	緩斜	平坦	—		
	SK318	E12e8	4.2	N-61°-W	(0.7)	0.8	12	[楕円形]	2~7	—	緩斜	皿状	—		
	SK520	E12f0	4.5	N-33°-E	0.9	0.9	16	方形	6~10	—	緩斜	皿状	—		
	SI16	SK301	F12a9	6.0	N-15°-W	0.5	(0.2)	5	[円形]	—	2~7	緩斜	皿状	—	
		SK317	F12e8	5.9	N-22°-E	0.6	0.5	10	楕円形	2	10	緩斜	皿状	—	
SI17	SK341	C13d2	4.6	N-39°-E	1.2	1.1	11	不定形	2~9	—	緩斜	皿状	—		
	SK355	C13e2	4.2	N-23°-E	(0.4)	1.0	(8)	[楕円形]	7	—	緩斜	皿状	—		
	SK375	C13e3	4.3	N-33°-E	1.7	1.5	10	不定形	4~14	—	緩斜	凹凸	—		
	SK332	C13e2	3.8	N-82°-W	1.1	1.1	12	[円形]	2~6	—	緩斜	皿状	—		
	SK405	C13e2	3.5	N-45°-W	0.8	(0.4)	6	[円形]	4~8	—	緩斜	皿状	—		
SI18	SK333	D13f5	5.1	N-0°	1.0	0.8	13	楕円形	3~9	—	緩斜	皿状	—		
	SK338	D13f4	—	N-60°-W	1.0	0.8	—	楕円形	—	—	—	—	磨石		
	SK354	D13g4	5.1	N-0°	0.6	0.5	10	円形	—	—	外傾	凸凹	—		
	SK356	D13f4	5.0	N-28°-W	[0.9]	0.7	10	楕円形	—	—	緩斜	皿状	—		
	SK363	D13g5	5.0	N-32°-E	1.0	0.9	7	不定形	—	—	緩斜	皿状	—		
SI19	SK336	D13b4	4.5	N-35°-E	0.8	0.6	10	楕円形	3~5	—	緩斜	皿状	—		
	SK361	D13b4	—	N-82°-W	[0.7]	0.6	—	[円形]	—	—	—	—	—	平面図のみ	
	SK392	D13b5	4.3	N-8°-E	1.4	0.9	12	隅丸長方形	6~10	—	緩斜	皿状	—		
	SK409	D13a4	4.3	N-50°-W	0.9	0.8	14	隅丸長方形	—	3~12	緩斜	平坦	—		
	SK423	D13b4	4.1	N-21°-E	(0.8)	0.8	23	[楕円形]	—	5~8	緩斜	平坦	—		
	SK431	D13b3	4.0	N-68°-W	(0.7)	(0.3)	10	—	3~6	—	緩斜	平坦	—		
	SK435	D13a3	3.9	N-23°-E	(1.3)	1.1	7	[隅丸長方形]	2~6	—	緩斜	皿状	古銭		
SI20	SK448	D13a3	—	N-64°-W	0.7	0.6	—	長方形	—	—	—	—	—	平面図のみ	
	SK458	D13a3	3.6	N-16°-E	3.1	1.3	56	隅丸長方形	—	—	外傾	平坦	—		
	SK402	C13h2	3.7	N-35°-E	[1.0]	0.9	8	隅丸方形	4~9	—	緩斜	平坦	—		
	SK418	C13g1	4.1	N-35°-E	1.0	0.9	27	隅丸方形	5	—	外傾	平坦	—		
	SK496	C13g1	3.5	N-50°-W	[1.0]	0.6	20	楕円形	2~4	—	緩斜	皿状	—		
SI25	SK119	H11g9	5.0	N-42°-E	2.2	1.6	80	不定形	—	—	緩斜	平坦	—		
SI26	SK283	K11c1	4.8	N-52°-W	0.9	[0.9]	14	[方形]	—	—	緩斜	皿状	—		
	SK284	K11c1	4.9	N-31°-E	1.2	0.9	26	楕円形	3~15	—	緩斜	平坦	—		
	SK291	K11c2	4.8	N-38°-E	1.4	1.2	37	長方形	—	—	緩斜	平坦	—		
SI27	SK278	J11d1	4.3	N-50°-E	2.2	1.2	40	楕円形	—	—	外傾	平坦	—		
	SK290	J10c0	—	N-39°-E	0.8	0.5	—	楕円形	—	—	—	—	—		

番号	遺構番号	位置	標高	長軸方向	規模			形状	黒色土厚 (cm)	粘土厚 (cm)	壁面	床面	出土遺物	備考	
					長軸(m)	短軸(m)	深さ(cm)								
SI27	SK297	J11c1	4.3	N-49°-E	1.9	[1.3]	55	楕円形	—	—	外傾	平坦	—		
	SK298	J11d1	4.2	N-48°-E	2.7	[1.3]	37	楕円形	—	—	緩斜	平坦	—		
	SK296	J11c1	4.1	N-43°-E	1.5	1.1	50	楕円形	—	—	外傾	皿状	—		
	SK299	J10e0	4.1	N-67°-W	1.9	1.3	15	不整楕円形	5~16	—	緩斜	皿状	—		
	SK300	J11e1	3.9	N-41°-W	0.9	0.8	15	楕円形	6~15	—	緩斜	皿状	小皿		
	SK301	J10g0	4.0	N-36°-E	2.5	1.4	40	隅丸長方形	—	—	外傾	平坦	—		
	SK303	J11d2	4.0	N-43°-E	1.3	1.1	23	長方形	—	—	緩斜	皿状	—		
	SK304	J11d2	4.0	N-48°-E	1.4	1.1	25	長方形	—	—	外傾	平坦	—		
SI28	SK305	J11d1	4.0	N-54°-W	1.3	0.9	7	不定形	2~12	—	緩斜	皿状	古銭		
	SK398	D13j5	4.7	N-33°-E	3.4	2.4	90	三角形	—	—	外傾	平坦	—		
	SK404	D13g4	4.3	N-4°-E	1.3	0.9	3	不定形	3~6	—	緩斜	縄文状	—		
	SK411	D13g3	5.2	N-48°-E	0.6	0.6	7	正方形	—	—	外傾	平坦	古銭		
	SK413	D13e5	4.1	N-85°-W	2.9	1.5	61	ほぼ長方形	—	—	垂直	平坦	—		
	SK415	D13f4	4.3	N-53°-E	1.5	1.2	61	楕円形	—	—	垂直	皿状	—		
	SK416	D13i4	4.5	N-90°-E	2.1	1.5	35	楕円形	—	—	外傾	縄文状	—		
	SK419	D13h5	4.4	N-71°-E	[1.7]	1.2	65	[楕円形]	—	—	外傾	縄文状	磁器		
	SK433	D13f5	4.3	N-78°-W	0.8	0.7	7	円形	8~12	—	外傾	平坦	—		
	SK440	D13h4	—	N-60°-W	(1.6)	1.3	—	長方形	—	—	—	—	—		
	SK441	D13h4	4.4	N-36°-E	1.8	1.1	40	長方形	—	—	外傾	平坦	—		
	SK459	D13h4	4.3	N-2°-E	0.9	0.8	3	[長方形]	2~5	—	緩斜	平坦	—		
	SI29	SK384	E13c6	6.0	N-70°-E	0.5	0.5	16	円形	3~8	—	外傾	平坦	砥石	
		SK386	E13c5	5.8	N-63°-E	0.8	0.7	10	楕円形	2~7	—	緩斜	皿状	—	
SI30	SK410	E13b5	5.4	N-39°-W	4.0	1.3	36	円形	—	—	緩斜	皿状	—		
	SK414	E13b5	5.4	N-57°-W	1.1	1.0	23	方形	—	—	外傾	平坦	磁器		
	SK417	E13c4	5.4	N-31°-W	4.2	1.3	60	長方形	—	—	外傾	平坦	古銭		
	SK425	E13b4	5.4	N-39°-E	1.2	0.9	30	楕円形	—	—	緩斜	皿状	古銭		
SI31	SK33	E13f2	5.7	N-48°-W	1.1	0.9	15	楕円形	3~12	3~10	緩斜	平坦	—		
	SK37	E13f2	5.8	N-73°-W	1.0	0.8	17	不定形	2~3	10~22	緩斜	皿状	—		
SI32	SK40	F12b8	5.6	N-44°-E	1.3	0.9	25	楕円形	3~12	—	外傾	U型状	—		
	SK46	F12a9	5.2	N-47°-W	0.9	0.9	20	円形	2~5	—	外傾	平坦	—		
	SK52	F12a9	5.3	N-47°-W	2.1	1.2	97	楕円形	—	—	外傾	U型状	—		
SI33	SK26	E13i2	5.7	N-38°-E	2.1	1.3	30	長方形	—	—	緩斜	平坦	—		
	SK27	E13j2	5.7	N-64°-E	2.5	1.1	25	長方形	—	—	緩斜	平坦	—		
	SK34	E13i2	5.7	N-55°-E	2.2	0.8	20	楕円形	—	—	緩斜	皿状	—		
	SK35	E13i2	5.7	N-30°-E	4.5	1.3	40	長方形	—	—	垂直	平坦	—		
	SK47	E13i0	5.7	N-53°-E	(3.5)	1.9	40	長方形	—	—	外傾	平坦	—		
SI34	SK105	F12b8	4.4	N-23°-E	0.5	0.4	8	楕円形	2~4	—	緩斜	皿状	—		
	SK112	F12a9	4.1	N-37°-E	1.4	1.1	25	楕円形	—	—	緩斜	平坦	—		
	SK116	E12j0	4.5	N-85°-E	1.1	0.9	15	不定形	4~16	—	緩斜	皿状	—		
SI35	SK364	E13b5	6.2	N-0°	1.0	0.8	10	楕円形	2~15	—	緩斜	凸凹	—		
	SK376	E13e4	7.4	N-81°-E	1.5	1.3	50	楕円形	8~20	—	緩斜	皿状	—		
SI37	SK104	H11f3	4.1~4.3	N-58°-E	[0.9]	[0.8]	28	[円形]	10~14	—	外傾	平坦	—		
SI38	SK243	H11g6	4.5	N-45°-W	0.8	0.8	7	円形	—	5~10	緩斜	凸凹	—		
	SK246	H11h7	4.5	N-43°-E	1.9	1.8	35	隅丸方形	8~25	—	緩斜	皿状	—		
	SK253	H11h7	4.6	N-43°-W	1.2	1.0	50	楕円形	—	—	緩斜	皿状	—		

表8 貝集積地一覽表

番号	調査区	旧遺構番号	位置	標高	長軸方向	平面形	長軸 (m)	短軸 (m)	厚さ (cm)	出土遺物	備考(伴う遺構)
4	2	SM4	I11d0	5.3	N-1°-E	不定形	3.3	1.5	12	皿	SI-5
5	2	SM5	H11g3	4.2	N-44°-W	不定形	1.3	0.7	5	—	SI-37
6	2	SM6	I11c7	5.0	N-1°-E	長方形	1.1	0.8	8	—	SI-5
7	2	SM7	I11g9	5.7	N-59°-W	不定形	1.3	0.7	5	—	SI-4
9	2	SM9	I11e7	5.0	N-34°-W	不整楕円形	0.6	0.4	5	—	SI-5
10	2	SM10	J11b9	5.9	N-30°-W	不定形	3.2	2.0	6	—	SI-7
11	2	SM11	I11h8	5.9	N-10°-E	不定形	2.1	1.6	6	小皿, 古銭	SI-4
12	2	SM12	J11d8	5.8	N-30°-E	楕円形	1.5	1.2	3	—	SI-7
13	2	SM13	J11e8	5.8	N-48°-E	不定形	1.4	1.2	3	—	SI-7
15	2	SM15	J11i9	6.0	N-10°-W	不定形	1.5	1.1	21	—	SI-9
16	2	SM16	J11e7	5.6	N-42°-E	不定形	2.6	2.3	5	—	SI-7
19	2	SM20	J11b4	4.7	N-18°-E	円形	1.7	1.6	11	—	SI-8
20	2	SM22	J11e1	4.3	N-38°-W	不定形	1.2	0.9	8	—	SI-27
21	2	SM23	J11d1	4.3	N-0°	不定形	1.7	1.4	4	—	SI-27
26	4	SM1	F12a8	5.8	N-15°-W	楕円形	1.0	0.8	7	—	SI-16
27	4	SM3	E12e0	4.6	N-39°-W	不定形	0.9	0.7	12	—	SI-15
33	4	SM10	C13e2	4.3	N-87°-E	不定形	1.3	1.0	21	—	SI-17
34	4	SM11	D13g4	—	N-0°	不定形	1.2	1.0	—	—	SI-18
36	4	SM13	D13a4	—	N-34°-W	不整楕円形	0.9	0.7	—	—	SI-19
37	4	SM14	D13d2	4.0	N-87°-E	不整楕円形	1.6	1.0	8	—	SI-19
39	4	SM16	E13j2	5.9	N-65°-W	楕円形	0.4	0.3	4	—	SI-33
40	4	SM17	E13f3	5.7	N-82°-E	楕円形	0.8	0.6	5	—	SI-31
41	4	SM18	E13g3	5.8	N-86°-E	不定形	1.1	0.6	7	—	SI-31
42	4	SM19	E13f3	5.8	N-7°-E	不定形	0.8	0.7	4	—	SI-31
45	4	SM23	E12j9	4.2	N-46°-W	楕円形	0.7	0.5	5	—	SI-34
47	4	SM26	E12j8	—	N-65°-W	楕円形	0.5	0.3	—	—	SI-32

3 墓域

ここでは、埋葬と判断した人骨や動物骨が出土しているところを広い意味で墓域とした。位置的には製塩区域の北側に顕著であり、人骨と動物骨が確認されている。

当遺跡では、調査区全体が砂地に立地するため、砂層の中から人骨や動物骨の出土が多く見られた。また、前述のように客土によって構築された層からも遺骸が出土しており、埋葬時の掘り込みが確認できない墓も多かった。しかし、ほとんどの人骨は北方に頭を向けての屈葬であり、副葬品を伴うものもあることから、埋葬と判断した。動物遺骸については、馬や犬などの家畜と考えられる骨が約一体分出土したものを埋葬ととらえた。

遺構の定義については以下の通りである。また、表砂除去の際に遺骸が動いてしまった場合や新生児・埋葬状況の不明確な場合は、一覧表に計測値を掲載した。

土壙墓 人骨の埋葬が確認でき、約一体分の骨格が認められたもの。

土壙 家畜と考えられる動物骨の埋葬が確認でき、約一体分の骨格が認められたもの。

(1) 土壙墓

人骨が埋葬されていた遺構109基について、その概要を記述する。

第1号土壙墓 2区SK-6 (第329・330図)

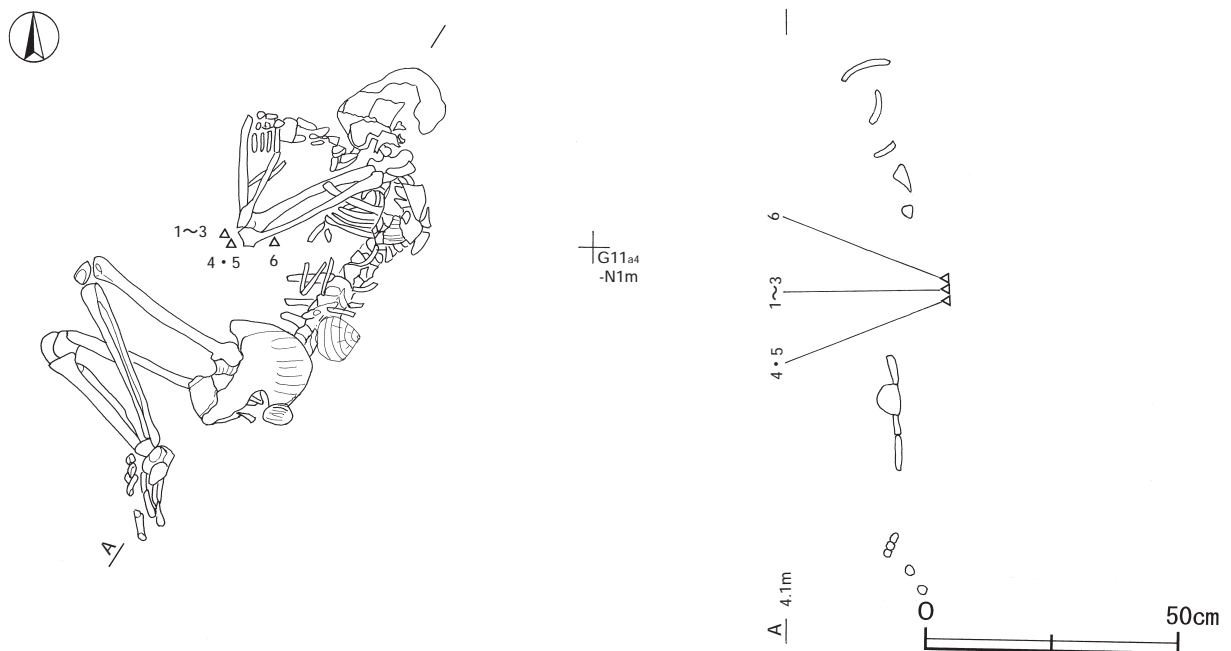
位置 調査区北部のF11j3区で、第2号土壙墓の南西側6mに位置している。

確認状況 表砂を2.3m除去後、標高4mで人骨を確認した。掘り込みの有無は確認できなかった。

埋葬の状況 北東頭位西面右側臥屈葬で埋葬されていた。両腕ともに体前面に折り曲げられ、両手は顔の前に置かれていた。

遺物出土状況 古銭6枚が左肘の部分から出土している。また、ウバガイが腰椎付近から出土している。

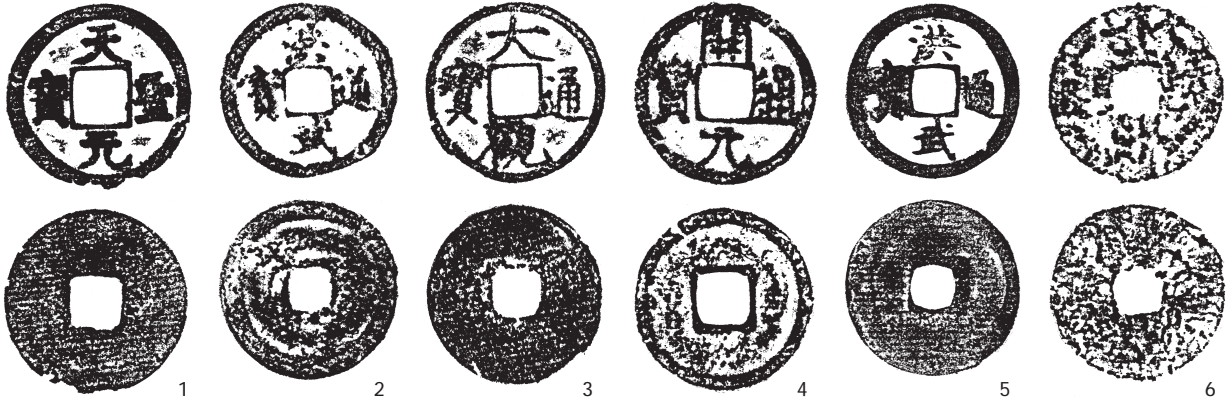
性別と年齢 男性 老年



第329図 第1号土壙墓実測図

遺骸の特徴 ほぼ全身骨格が確認された。頑強な骨格で骨盤の大坐骨切痕の開きが鋭角である。頭蓋骨は崩れており、歯の欠損も多い。上顎左側の切歯2本、犬歯1本の部分の歯槽骨が閉鎖しており、それらの歯は生前に脱落したことが考えられる。歯の磨耗が著しく、永久歯列が整ってからの時間の経過が推測される。

所見 古銭は、埋葬に伴う六道銭と考えられる。判読できた最新銭は、洪武通寶（1368年）である。



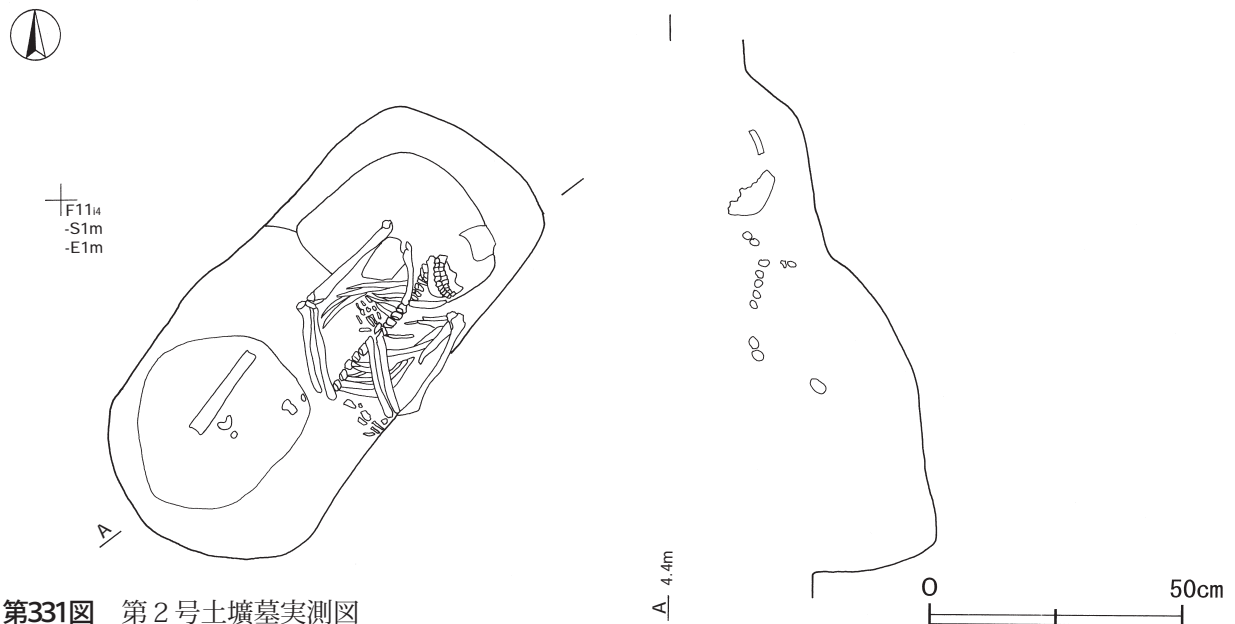
第330図 第1号土壙墓出土遺物実測図 [古銭は原寸大]

第1号土壙墓出土遺物観察表 (第330図)

番号	銭名	径	孔径	厚さ	重さ	初铸年	材質	特徴	出土位置	備考
1	天聖元寶	2.46	0.65	0.07	2.60	1023	銅	真書	左肘付近	
2	洪武通寶	2.34	0.55	0.11	3.62	1368	銅	真書	左肘付近	
3	大觀通寶	2.38	0.65	0.09	3.52	1107	銅	真書	左肘付近	
4	開元通寶	2.41	0.7	0.09	2.82	621	銅	真書	左肘付近	
5	洪武通寶	2.33	0.6	0.11	3.72	1368	銅	真書	左肘付近	
6	□□□□	2.32	0.6	0.08	2.30	—	銅	錆がひどく判読不能、模铸	左肘付近	

第2号土壙墓 2区SK-33 (第331図)

位置 調査区北部のF11i4区で、第1号土壙墓の北東側6mに位置している。



第331図 第2号土壙墓実測図

確認状況 表砂を2.3m除去後、標高4.3mで人骨を確認した。頭部から足にかけて傾斜して埋葬されていることが確認された。

埋葬の状況 北東頭位仰臥屈葬で埋葬されていた。下肢骨は大腿骨が1本確認されたが、左右は不明であり、体部よりも低い位置で出土した。右腕は右体側から腹部の方へ、左腕は左体側から胸の上にそれぞれ折り曲げられていた。

性別と年齢 女性 壮年（20歳代後半）

遺骸の特徴 確認できたのは、上下の顎骨から腰椎にかけてと両腕、大腿骨である。骨格が華奢で、下顎が細く小さい。歯は残存状態が良好で、上顎下顎ともすべての歯が確認できた。上顎下顎ともに永久歯で、すべての第3大臼歯が萌出している。切歯と第1大臼歯に多少の磨耗が見られるが、歯全体はきれいである。

所見 副葬品がなく埋葬の時期は不明である。

第3号土壌墓 2区SK-240（第332図）

位置 調査区南部のJ11h6区で、第10号建物跡の南西部床下に位置している。



J11h6
-E2m

確認状況 表砂を1.8m除去後、標高5.4mで人骨を確認した。掘り込みの有無は確認できなかった。

重複関係 本跡の上に第10号建物跡の床面が構築されている。

埋葬の状況 北東頭位で、体前面を西側に向けて埋葬されていた。右腕・右足は確認できなかったが、その他の骨格は確認できた。

性別と年齢 性別不明 新生児

遺骸の特徴 残存状態が悪く、ほとんどの骨が崩れていた。歯はすべて乳歯で、第2乳臼歯まで確認できた。乳中切歯が歯根の半分まで成長しており、乳側切歯から第2乳臼歯までは、歯冠のみを確認することができた。



0 30cm

所見 第10号建物跡の下層から確認されているが、本跡との関連は不明である。

第332図 第3号土壌墓実測図

第4号土壌墓 2区SK-254（第333図）

位置 調査区南部のJ11g7区で、第10号建物跡の北西部に位置している。

確認状況 第10号建物跡の下層、標高5.1mで頭骨を確認した。砂中に埋葬されていたが、覆土の含有物の違いから掘り込みが確認できた。

規模と形状 長径0.6m、短径0.4mの楕円形で、深さは20cmである。

重複関係 第10号建物跡の北西部の床下から出土した。

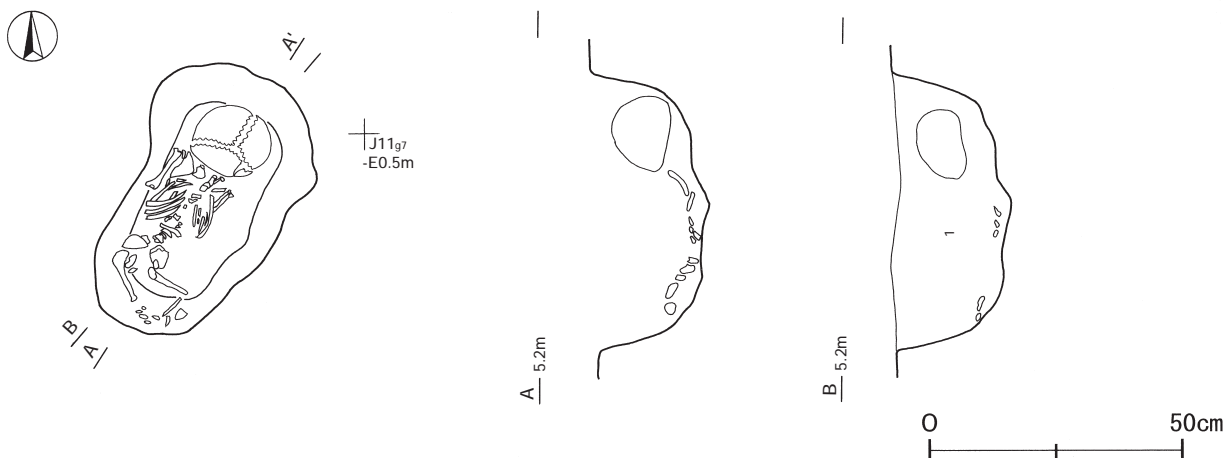
埋葬の状況 北東頭位俯臥屈葬で埋葬されていた。

覆土 単一層である。砂B層を主体とした黒色土Aの小ブロックを含み、埋葬時の埋め戻しである。

性別と年齢 性別不明 乳児（6ヶ月～1歳）

遺骸の特徴 ほぼ全身骨格が確認された。頭蓋骨が薄く、上肢下肢ともに骨が細く短い。歯は乳歯で、第2乳白歯が萌出している。第1大白歯は萌出途中である。

所見 第10号建物跡の下層から確認されているが、本跡との関連は不明である。授乳期に死亡したものと推測される。



第333図 第4号土墳墓実測図

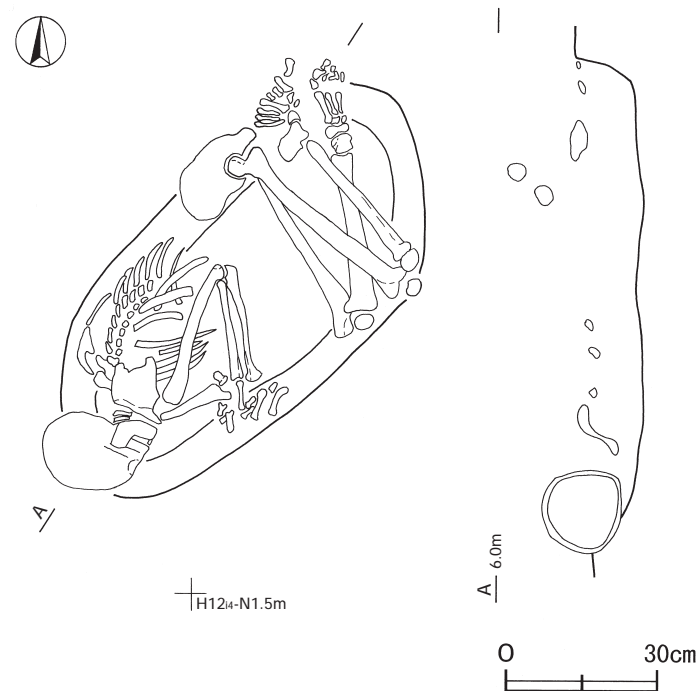
第5号土墳墓 2区SK-268 (第334図)

位置 調査区北部のH12h4区で、第1号製塩跡の西側15mに位置している。

確認状況 表砂を4m除去後、標高6mで人骨の左足を確認した。掘り込みの有無は確認できなかったが、本人骨を埋葬した土墳墓の最下部を認めることができた。

規模と形状 掘り込みの最下部は、長径1.0m、短径0.5mの楕円形で、深さが10cmである。

埋葬の状況 南西頭位南東面右側臥屈葬で埋葬されていた。両腕は体前面に折り曲げられていた。



性別と年齢 男性 壮年

遺骸の特徴 ほぼ全身骨格が確認された。残存状態が良好で、頭蓋骨が厚く、上肢下肢ともにしっかりしている。骨盤の大坐骨切痕は鋭角である。歯は永久歯で下顎右側の第1・2小白歯は生前脱落し、歯槽骨が閉じている。ほとんどの歯が激しい磨耗をしている。

所見 副葬品がなく埋葬の時期は不明である。歯の磨耗は、生業に関するものと考えられるが、その内容については不明である。

第334図 第5号土墳墓実測図

第6号土壙墓 2区SK-273 (第335図)

位置 調査区南部のK11d2区で、第7号土壙墓の南西側8.5mに位置している。

確認状況 表砂を2.8m除去後、標高4.6mで人骨の頭部を確認した。

規模と形状 径約0.6mの円形で、深さは30cmである。

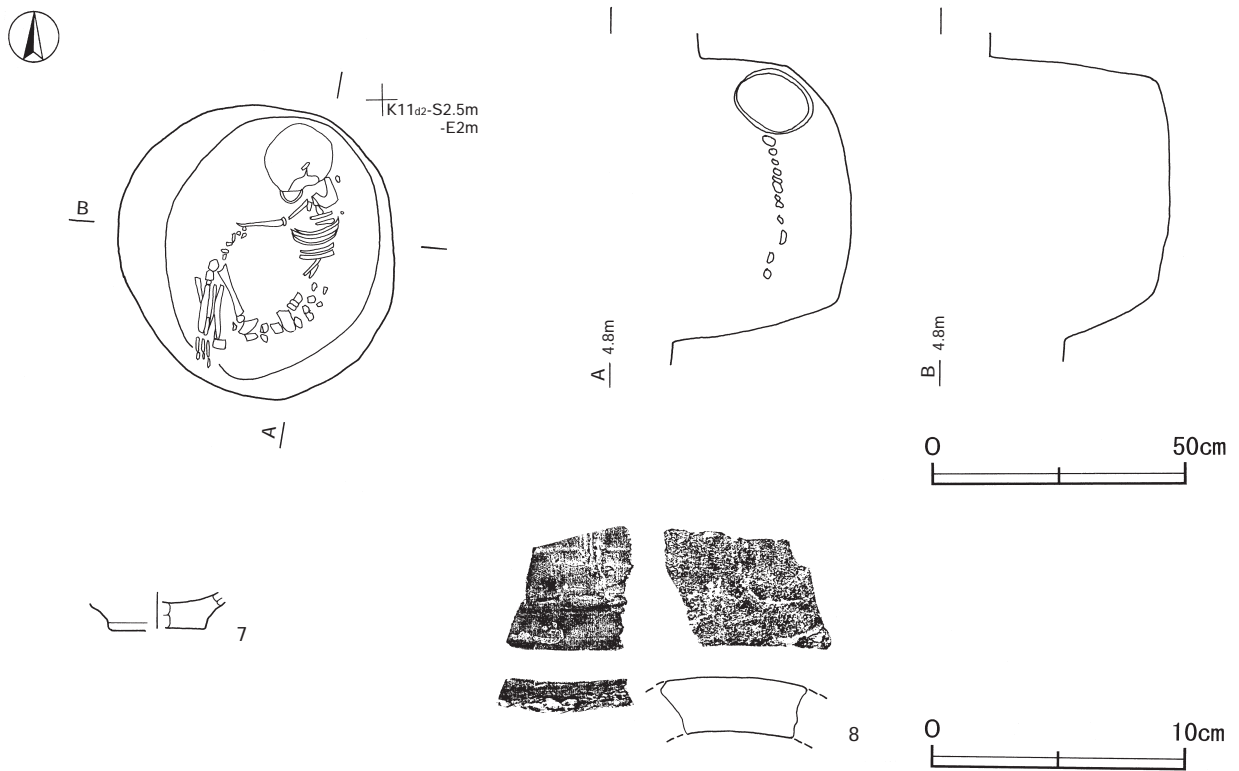
埋葬の状況 北頭位西面右側臥屈葬で埋葬されていた。両腕は体前面で、両足膝の方向へ伸ばされていた。

遺物出土状況 土師質土器片1点(小皿)と平瓦片1点が出土している。

性別と年齢 性別不明 幼児(3歳頃)

遺骸の特徴 ほぼ全身骨格が確認された。上肢下肢ともに残存状態は良好である。歯は乳歯で第2乳臼歯が萌出しており、第1大臼歯が未萌出である。

所見 遺物は細片であり、埋葬時の混入と考えられる。



第335図 第6号土壙墓・出土遺物実測図

第6号土壙墓出土遺物観察表 (第335図)

番号	器形	器質	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
7	小皿	土師質土器	—	(1.4)	[3.8]	砂粒・雲母・長石	にぶい褐	普通	底部回転糸切り	覆土中	10%
番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	胎土	特徴	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
8	平瓦	(5.6)	(5.3)	(2.2)	(69.7)	長石・石英	褐灰色、狭端部残存、凹面ナゲ消し			覆土中	10%

第7号土壙墓 2区SK-287 (第336図)

位置 調査区南部のK11b1区で、第6号土壙墓の北東側8.5mに位置している。

確認状況 表砂を2m除去後、標高4.4mで人骨の頭部を確認した。

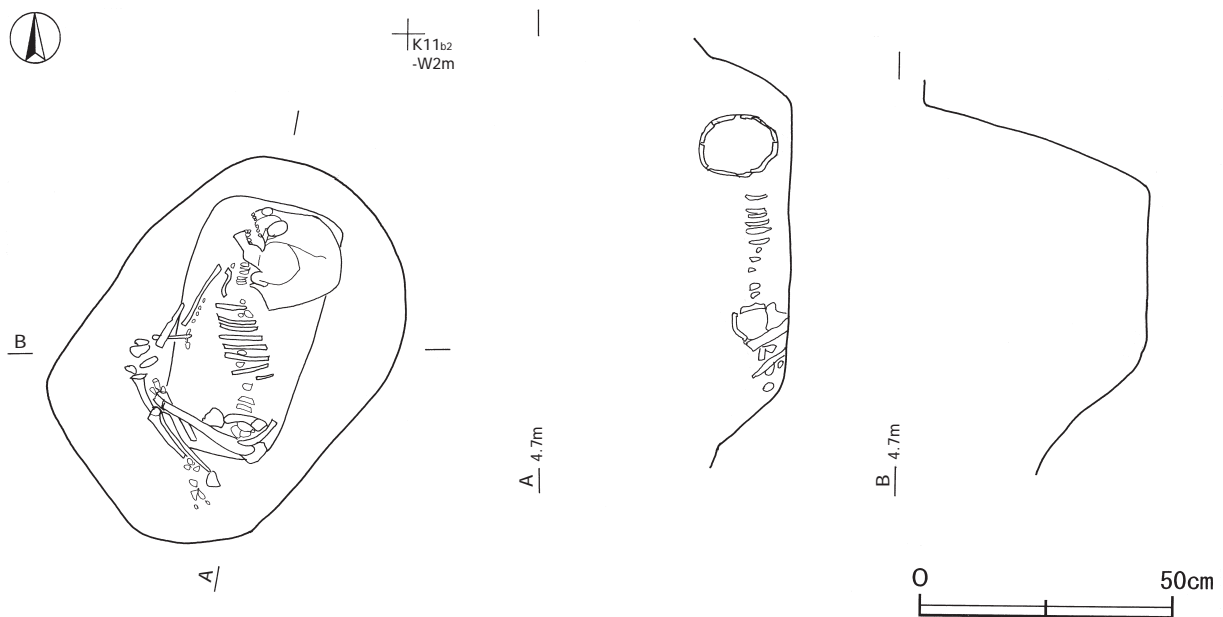
規模と形状 長径0.8m, 短径0.5mの楕円形で、深さは40cmである。

埋葬の状況 北東頭位で、体前面を西に向けた右側臥屈葬で埋葬されていた。顔は北を向き、両腕で両膝を抱え込むような姿勢であった。

性別と年齢 性別不明 幼児（5歳頃）

遺骸の特徴 ほぼ全身骨格が確認された。上肢下肢ともに残存状態は良好である。歯は乳歯で第2乳白歯が萌出している。第1大白歯は未萌出である。

所見 右側臥屈葬であれば顔は西に向くのが自然であるが、頭部が後ろに倒れているために北を向いたと考えられる。



第336図 第7号土壙墓実測図

第8号土壙墓 3区SK-4（第337図）

位置 調査区北部のB12f0区で、第9号土壙墓の北側2mに位置している。

確認状況 表砂を2.6m除去後、標高5.3mで人骨の頭部を確認した。掘り込みの有無は確認できなかった。

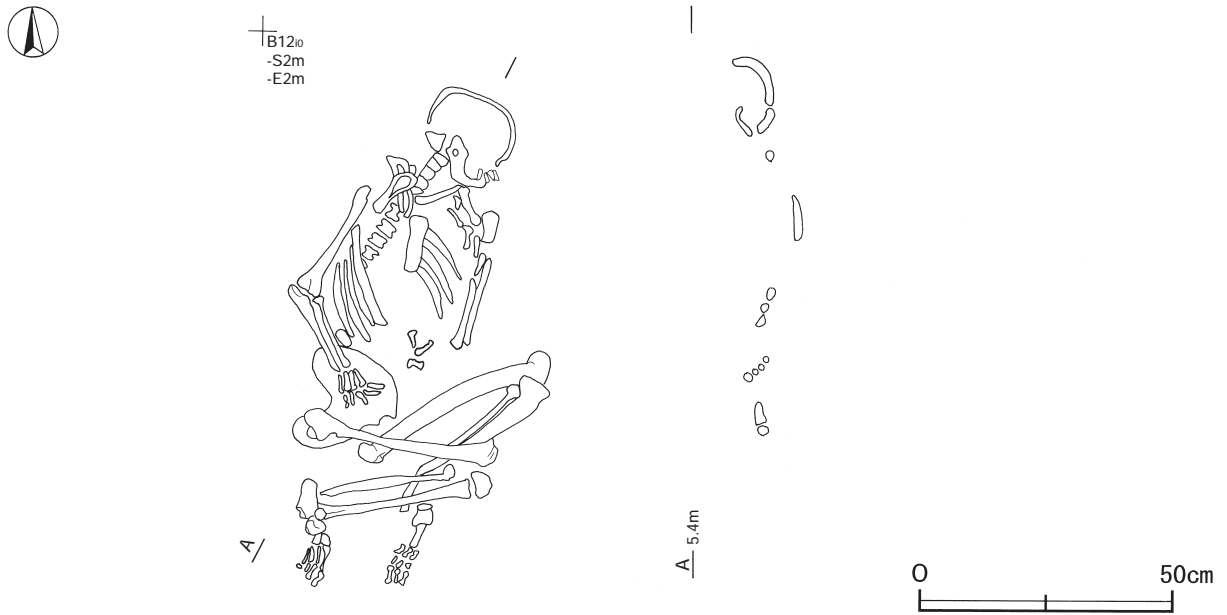
埋葬の状況 北東頭位南東面左側臥屈葬で埋葬されていた。右手首は腹部に、左手首は首付近に確認できた。

遺物出土状況 土師質土器片2点（内耳鍋）が人骨の左膝付近から出土している。出土遺物は細片のため図示できなかった。

性別と年齢 女性 老年

遺骸の特徴 ほぼ全身骨格が確認された。頭蓋骨と下顎骨が小さく、大坐骨切痕が鈍角である。骨全体が細く華奢であるが、三角筋粗面が隆起しており筋肉の発達がうかがえる。歯は永久歯で歯並びが悪く、欠損も多い。下顎左右の第3大白歯が欠損しており、その部分の骨の増殖が見られることから、第3大白歯は生前に脱落し、時間の経過がうかがえる。

所見 遺物は細片であり、埋葬時に混入したものと考えられる。第9号土壙墓に近接し、同じ高さで確認されていることから、第9号土壙墓と前後して埋葬された可能性が考えられる。

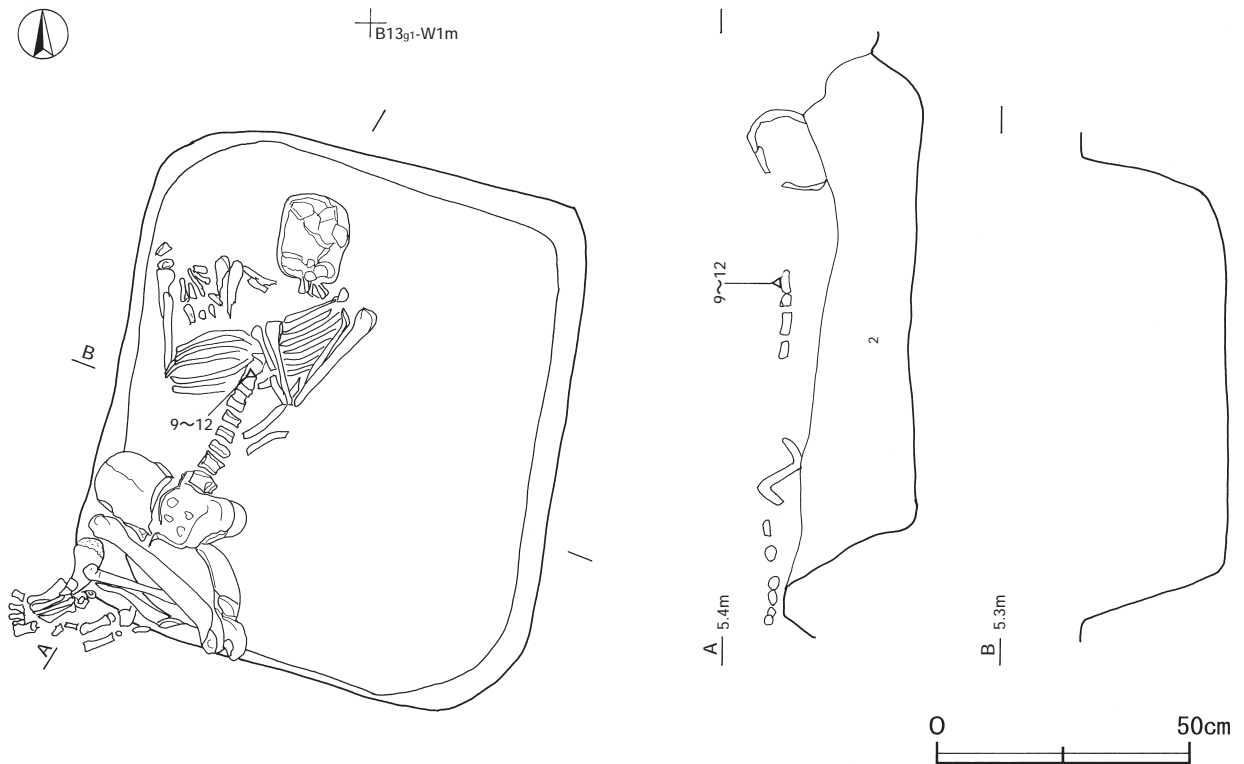


第337図 第8号土壙墓実測図

第9号土壙墓 3区SK-5 (第338・339図)

位置 調査区北部のB12g0区で、第8号土壙墓の南側2mに位置している。

確認状況 表砂を2.6m除去後、標高5.3mで人骨の頭部を確認した。砂中に埋葬されており、人骨よりも下位層で黒色土ブロックの混じる人骨埋葬時の覆土を確認した。



第338図 第9号土壙墓実測図

規模と形状 人骨より下で確認した掘り込みは、長軸1.1m、短軸0.9mの長方形で、深さは28cmである。

埋葬の状況 北東頭位仰臥屈葬で、両手が右肩の上に乗せられ埋葬されていた。

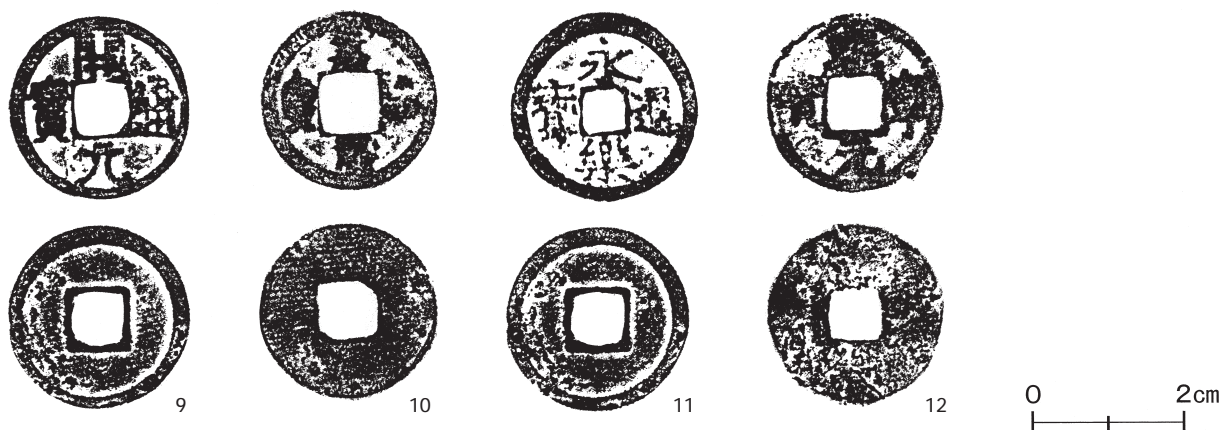
覆土 単一層である。砂Bを主体とし、黒色土Aと炭化粒子が少量混じる埋葬時の埋め戻しである。

遺物出土状況 古銭4枚が出土しており、胸郭剣状突起付近で確認された。また、覆土下層から、土師質土器片1点（内耳鍋）が出土している。

性別と年齢 男性 老年

遺骸の特徴 ほぼ全身骨格が確認された。骨が太く堅強な骨格であり、大坐骨切痕が鋭角である。右腕の大結節稜が隆起しており、筋肉の強さがうかがわれる。歯は永久歯で、下顎右の第1～3大臼歯と左の第3大臼歯が生前脱落し、歯槽骨が閉じていることから、脱落後の時間の経過が推測される。残存している歯はすべて摩滅著しく、歯周疾患が見られる。

所見 古銭は副葬品と考えられ、判別できた古銭のうち、最新銭は永樂通寶（1408年）である。第8号土壙墓に近接し、同じ高さで確認されていることから、第8号土壙墓と前後して埋葬された可能性が考えられる。



第339図 第9号土壙墓出土遺物実測図

第9号土壙墓出土遺物観察表（第339図）

番号	銭名	径	孔径	厚さ	重さ	初鑄年	材質	特徴	出土位置	備考
9	開元通寶	2.42	0.7	0.10	3.06	621	銅	真書	左肘付近	
10	嘉祐通寶	2.36	0.8	0.09	3.16	1056	銅	真書	左肘付近	
11	永樂通寶	2.49	0.6	0.10	3.02	1408	銅	真書	左肘付近	
12	熙寧元寶	2.37	0.7	0.08	3.24	1068	銅	真書	左肘付近	

第10号土壙墓 3区SK-7（第340図）

位置 調査区北部のB13f2で、第8号土壙墓の北東側6mに位置している。

確認状況 表砂を3m除去後、標高5.3mで人骨を確認した。掘り込みの有無は確認できなかった。

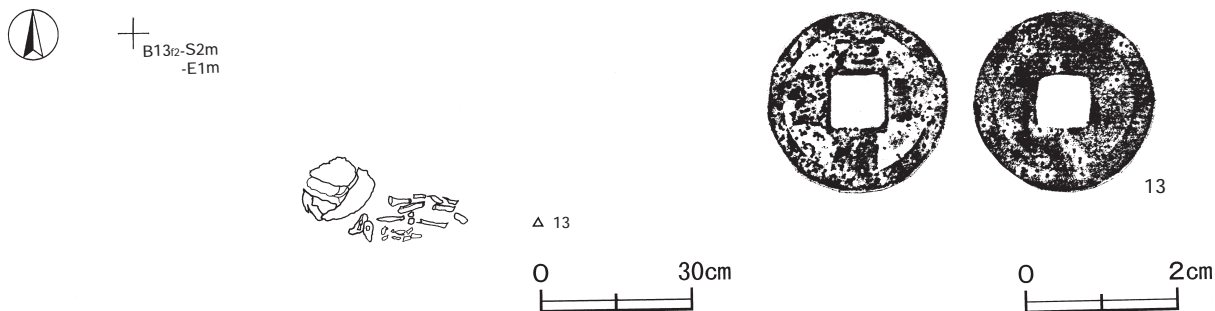
埋葬の状況 西頭位で、体を小さく折りたたんだ状態で埋葬されていた。骨格そのものが小さいので、四肢骨の状況は確認できなかった。

遺物出土状況 古銭1枚が人骨の足元付近から出土している。

性別と年齢 性別不明 新生児

遺骸の特徴 全身の骨の腐朽が進んでいる。四肢骨の残存している部分で計測すると最大のもので8 cm、その他の骨も4～5 cmほどの長さである。歯は乳歯で、歯根の成長がみられず、歯冠だけが確認された。すべての歯が未萌出である。

所見 足元付近から出土した古銭は副葬された可能性が考えられ、銭種は元祐通寶（初鑄年 1086）である。



第340図 第10号土壙墓・出土遺物実測図

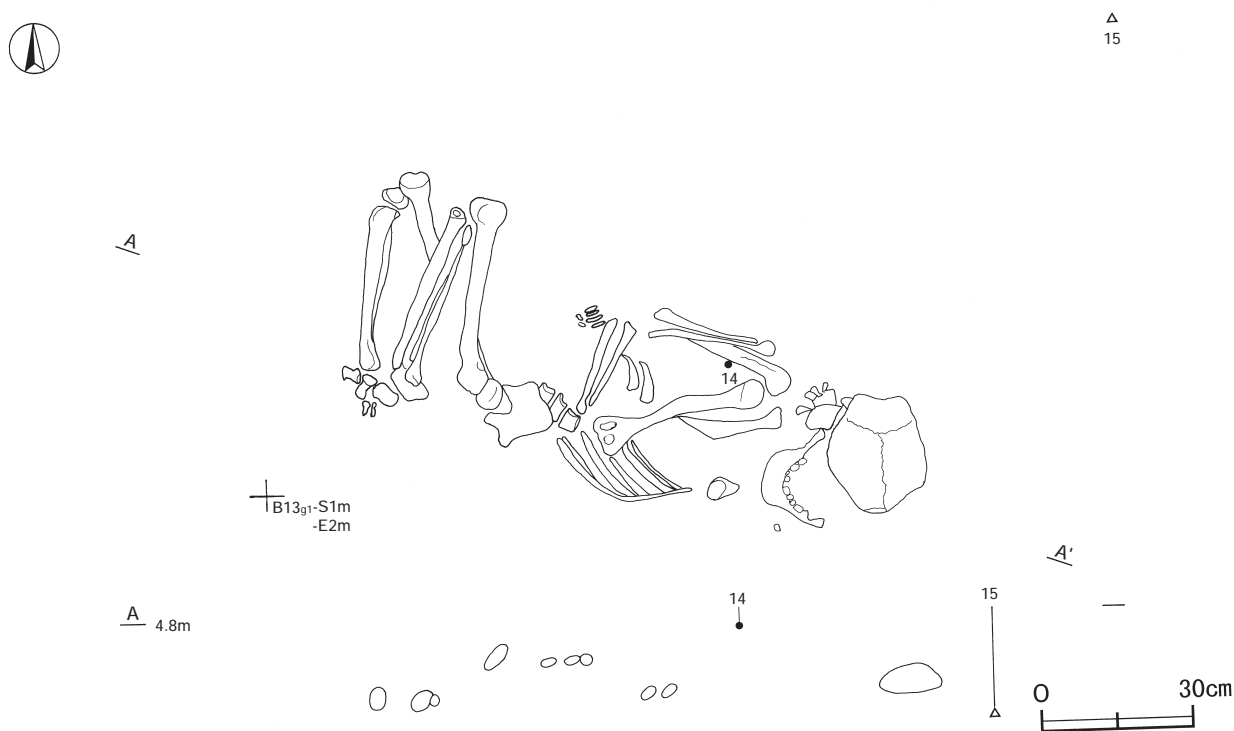
第10号土壙墓出土遺物観察表（第340図）

番号	銭名	径	孔径	厚さ	重さ	初鑄年	材質	特徴	出土位置	備考
13	元祐通寶	2.39	0.7	0.12	3.5	1086	銅	篆書	足元付近	

第11号土壙墓 3区S K-8（第341・342図）

位置 調査区北部のB13g1区で、第9号土壙墓の東側4 mに位置している。

確認状況 表砂を3.4m除去後、標高4.7mで人骨の頭部を確認した。掘り込みの有無は確認できなかった。



第341図 第11号土壙墓実測図

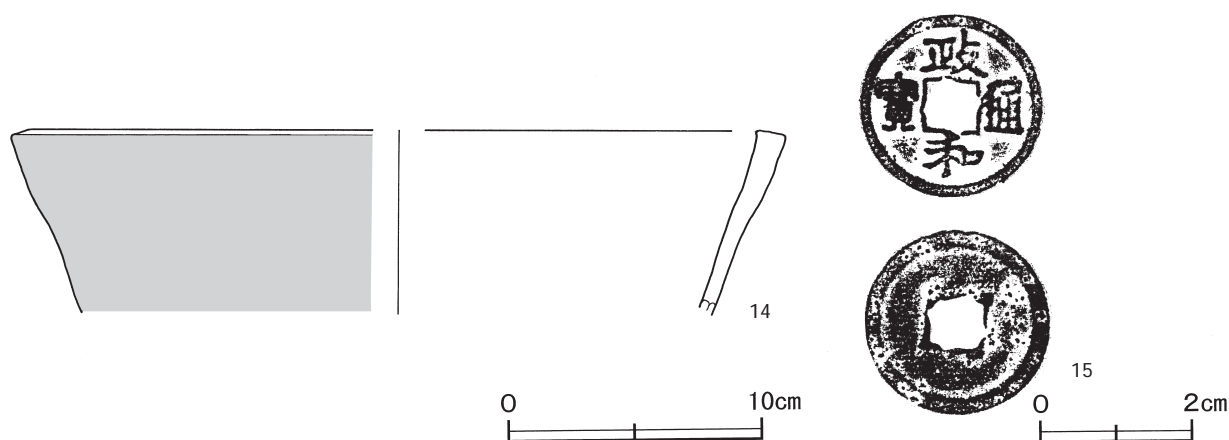
埋葬の状況 東頭位仰臥屈葬で埋葬されていた。左腕は体前面で曲げられ、左手首は腹部に添えられていた。右腕は、右手首を肩の方向に曲げられていた。

遺物出土状況 土師質土器片32点(内耳鍋30, 皿1, 椀1), 古銭1枚, 鉄製品1点が人骨確認の段階で散在するように出土している。14は、右上腕骨より20cm 高い位置で確認されている。

性別と年齢 男性 老年

遺骸の特徴 全身骨格の残存が良好であった。上腕骨や大腿骨, 脛骨が太く頑強な骨格で, 骨盤の大坐骨切痕が鋭角である。上腕骨の三角筋粗面の隆起と大腿骨の後稜の隆起が顕著で, 筋肉の発達がかがえる。歯は永久歯で, 切歯の抜けが多く, 下顎右側の第1~3大臼歯の歯槽部分に骨の増殖が見られる。それらは生前に脱落し, 時間の経過がかがえる。すべての歯が摩滅著しく, 歯周疾患が認められる。

所見 遺物は出土状況から, 埋葬時の混入と考えられる。



第342図 第11号土壙墓出土遺物実測図

第11号土壙墓出土遺物観察表 (第342図)

番号	器形	器質	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
14	内耳鍋	土師質土器	[24.6]	(7.3)	—	砂粒・雲母・長石・石英	にぶい赤褐	普通	ナデ・外面煤付着	覆土中	5%

番号	銭名	径	孔径	厚さ	重さ	初鑄年	材質	特徴	出土位置	備考
15	政和通寶	2.46	0.75	0.09	2.92	1111	銅	分楮, 星形孔	人骨周辺	

第12号土壙墓 3区SK-28 (第343図)

位置 調査区北部のB13e1区で, 第13号土壙墓の北東側3.5m に位置している。

確認状況 表砂を3.3m 除去後, 標高4.8m で人骨の頭部を確認した。掘り込みの有無は確認できなかった。

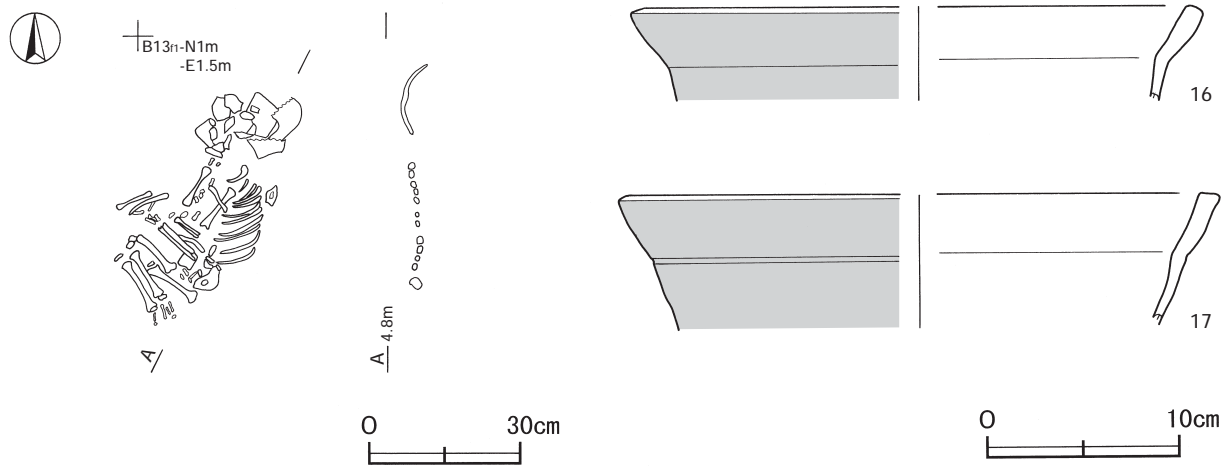
埋葬の状況 北東頭位北西面右側臥屈葬で埋葬してあった。両腕は体前面で折り曲げられていた。

遺物出土状況 土師質土器片6点(椀3, 内耳鍋3)が出土している。

性別と年齢 性別不明 乳児(1~1歳6ヶ月)

遺骸の特徴 ほぼ全身骨格が確認された。上肢下肢ともに残存状態は良好である。歯は乳歯で, 第1乳臼歯が萌出しており, 第2乳臼歯が未萌出である。

所見 土師質土器は細片であり，埋葬時に混入したものと考えられる。第13号土壙墓と近接し，0.4m 高い位置で確認されていることから，第13号土壙墓と前後して埋葬された可能性が考えられる。



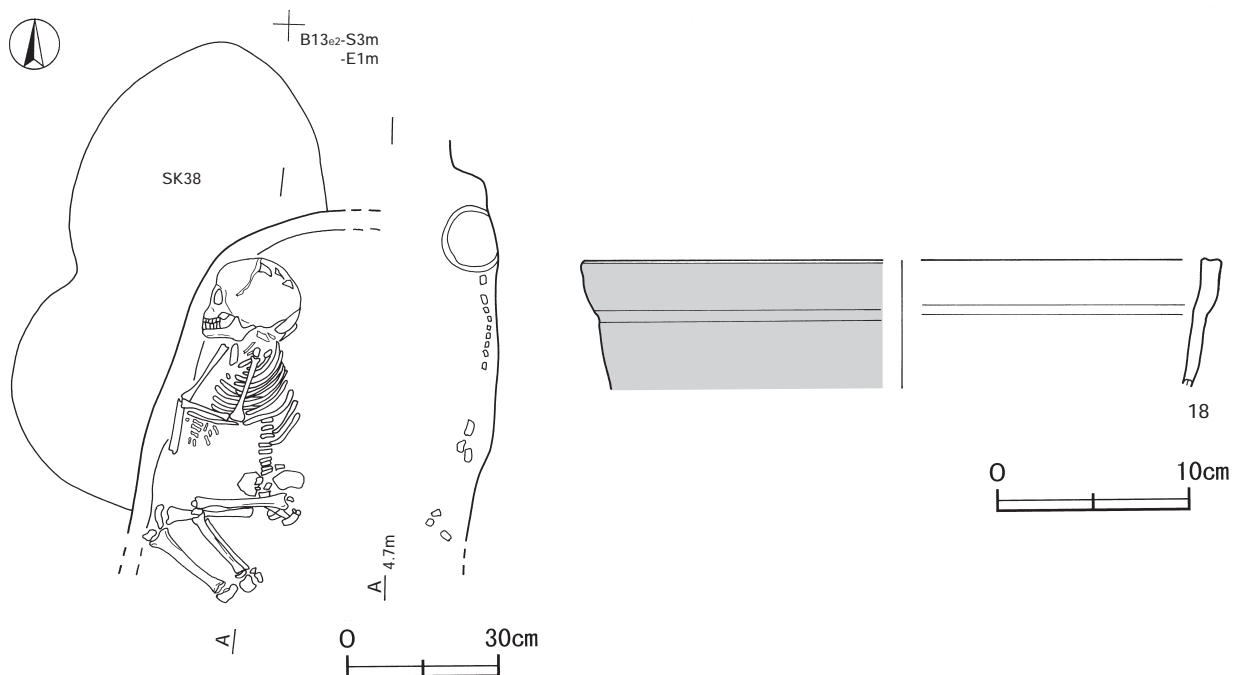
第343図 第12号土壙墓・出土遺物実測図

第12号土壙墓出土遺物観察表（第343図）

番号	器形	器質	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
16	内耳鍋	土師質土器	[27.6]	(4.9)	—	砂粒・雲母・石英	橙	普通	ナデ・外面煤付着	覆土中	5%
17	内耳鍋	土師質土器	[31.8]	(7.6)	—	砂粒・雲母・長石	にぶい橙	普通	ナデ・外面煤付着	覆土中	5%

第13号土壙墓 3区SK-29（第344図）

位置 調査区北部のB13e2区で，第12号土壙墓の3.5m 南西側に位置している。



第344図 第13号土壙墓・出土遺物実測図

確認状況 表砂を3.6m除去後、標高4.6mで人骨の左膝を確認した。掘り込みの有無は確認できなかった。

重複関係 第38号土坑を掘り込んでいる。

埋葬の状況 北頭位西面右側臥屈葬で埋葬されていた。左腕は曲げられ、右腕は伸ばされた状態で体前面に確認できた。

遺物出土状況 土師質土器片1点（内耳鍋）が出土している。

性別と年齢 性別不明 幼児（3～4歳）

遺骸の特徴 ほぼ全身骨格が確認された。上肢下肢ともに残存状態は良好である。歯は乳歯で、第2乳臼歯まで萌出しており、やや摩滅している。第1大臼歯が歯茎にあり、萌出前である。

所見 土師質土器は細片であり、埋葬時に混入したものと考えられる。第12号土壙墓と近接し、0.4m低い位置で確認されていることから、第12号土壙墓と前後して埋葬された可能性が考えられる。

第13号土壙墓出土遺物観察表（第344図）

番号	器形	器質	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
18	内耳鍋	土師質土器	[33.6]	(6.8)	—	砂粒・雲母・長石	にぶい橙	普通	ナデ・外面煤付着	覆土中	5%

第14号土壙墓 3区SK-37（第345図）

位置 調査区北部のB13h3区で、第15号土壙墓の南側5mに位置している。



B13h4
-S0.5m



確認状況 表砂を3.4m除去後、標高4.8mで人骨を確認した。掘り込みの有無は確認できなかった。

埋葬の状況 細く短い骨が、一箇所にまとまって出土した。

性別と年齢 性別不明 新生児（生後3ヶ月未満）

遺骸の特徴 薄く小さい頭蓋骨の破片が確認された。前頭葉の縫合線も未接合の状態である。歯は乳歯で、乳切歯から乳臼歯まですべて歯冠だけが残存しており、萌出していない。

所見 人骨の様子から、授乳期に死亡したと考えられる。

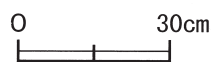
第345図 第14号土壙墓実測図

第15号土壙墓 3区SK-55（第346図）

位置 調査区北部のB13g3区で、第16号土壙墓の南側4mに位置している。



B13g4
-S0.5m



確認状況 表砂を4.7m除去後、標高3.6mで人骨を確認した。掘り込みの有無は確認できなかった。

埋葬の状況 ほとんどの骨が砕けた状態で出土した。確認できたのは、頭蓋骨の破片と上肢骨である。頭蓋骨が北東側から、上肢骨が南側から出土したので、北東頭位の埋葬と推測される。

性別と年齢 性別不明 乳児（1歳6ヶ月頃）

第346図 第15号土壙墓実測図

遺骸の特徴 骨格が小さく、各部の骨も細い。上肢の骨は、右上腕骨のみ確認できた。歯は乳歯で、上顎左右の乳切歯から第2乳臼歯まで確認できた。第1乳臼歯が萌出しており、犬歯と第2乳臼歯が萌出途中である。

所見 人骨が確認された標高は、近接の第14・16号土壌墓より約1 m低い。これらの土壌より深く埋葬されたか、あるいは古い時期の埋葬と推測される。

第16号土壌墓 3区SK-56 (第347図)

位置 調査区北部のB13f4区で、第15号土壌墓の北側4 mに位置している。

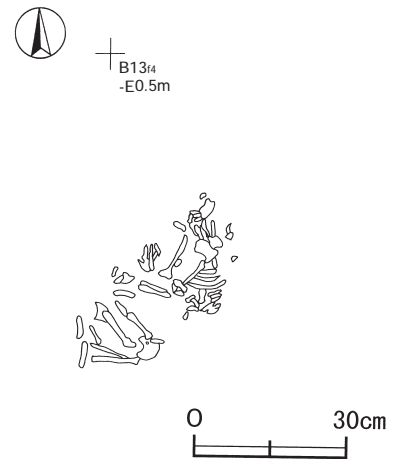
確認状況 表砂を3.8m除去後、標高4.6mで人骨の頭部を確認した。掘り込みの有無は確認できなかった。

埋葬の状況 頭蓋骨片と上肢骨が北東側から、下肢骨が南西側から出土したので、北東頭位屈葬での埋葬と推測される。

性別と年齢 性別不明 乳児 (生後6ヶ月頃)

遺骸の特徴 歯と四肢の骨は確認できた。骨格全体が小さく、各部の骨も細い。歯は乳歯で、上顎の左右第1乳臼歯と第2乳臼歯は、歯槽に確認でき萌出前である。

所見 人骨の様子から、授乳期に死亡したと考えられる。



第347図 第16号土壌墓実測図

第17号土壌墓 4区SK-1 (第348図)

位置 調査区中央部のG12h8区で、第5号製塩跡の南側に位置している。

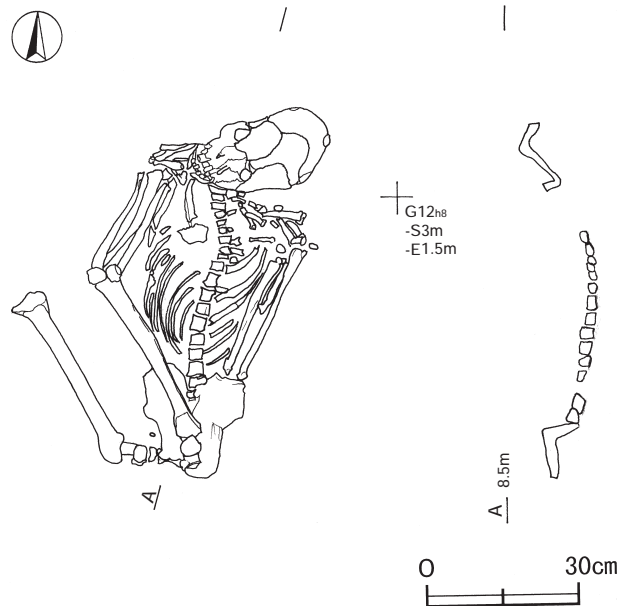
確認状況 表砂を3.6m除去後、標高8.5mで人骨を確認した。掘り込みの有無は確認できなかった。

重複関係 第5号製塩跡の南側の黒色土を掘り込んでいる。

埋葬の状況 北頭位仰臥屈葬で埋葬されていた。上腕骨は、体側に沿って添えられており、大腿骨は体部左側に傾いた状態であった。

性別と年齢 性別不明 熟年

遺骸の特徴 ほぼ全身骨格が確認された。腐朽が進んでおり、計測は困難であった。骨盤も腐朽しており、大坐骨切痕の開きは確認できなかった。頭蓋骨の眼窩上隆起が弱く、前頭骨は頭頂部にかけてなだらかに傾斜している。骨は細く華奢であるが、上腕骨の稜の膨らみから、筋肉の強さが想定される。歯は永久歯で、下顎左右の第2・3大臼歯が萌出している。右下の第2・3大臼歯は歯槽膿漏になっており、う歯も多い。歯列が乱れており、磨耗著しく、上顎前突であるため歯の内側が磨り減っている。



第348図 第17号土壌墓実測図

所見 遺骸の特徴に男女両方のものがみられたので、性別は不明である。副葬品が確認されなかったので、埋葬時期も不明であるが、第5号製塩跡構築後の埋葬である。

第18号土壙墓 4区SK-3 (第349図)

位置 調査区中央部のG12e9区で、第5号製塩跡の北側1mに位置している。

確認状況 表砂を5.2m除去後、標高8.8mで、土坑を調査している段階で人骨を確認した。南側部分は削平されていたが、掘り込みの最下層の状況が確認できた。

規模と形状 掘り込みの最下層は、長軸0.9m、短軸0.8mの隅丸長方形で、深さは16cmある。

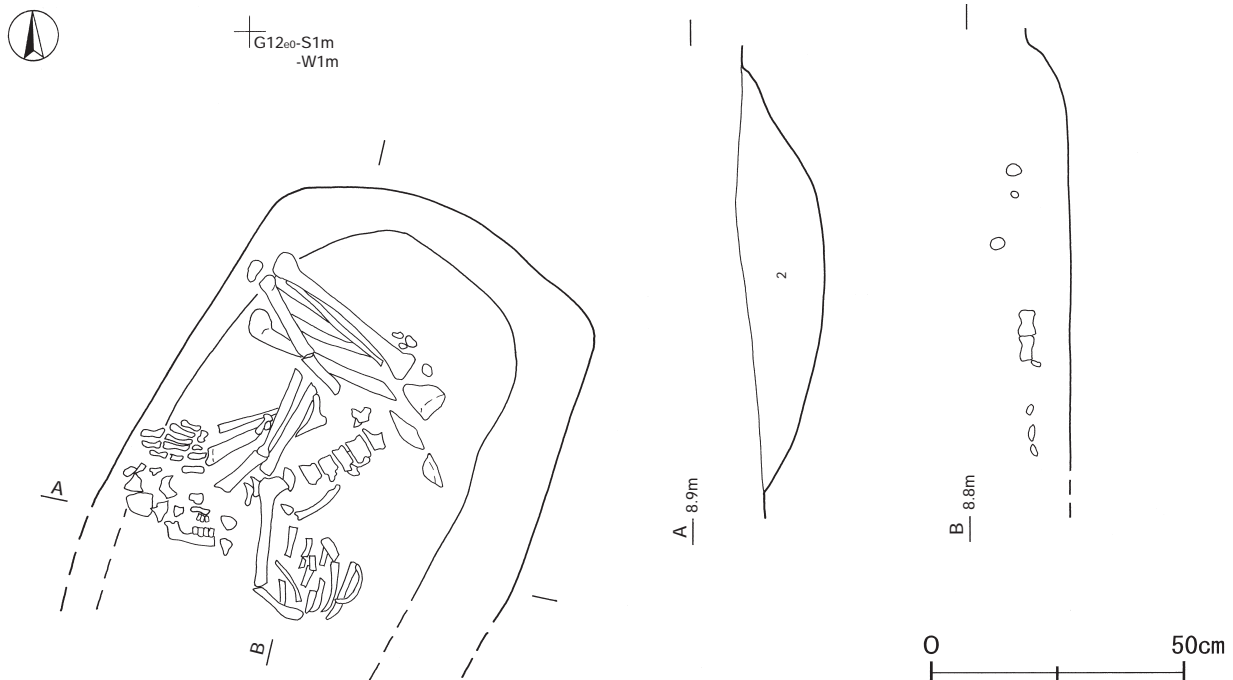
覆土 単一層である。砂Bを主体とした埋葬時の埋め戻しである。

埋葬の状況 南西頭位左側臥屈葬で、全身骨格が小さく折りたたまれた状態で埋葬されていた。右手が顔面近くに置かれていた。

性別と年齢 女性 老年

遺骸の特徴 ほぼ全身骨格が確認された。それぞれの骨が細く華奢である。頭蓋骨が崩れていたものの、頭蓋骨の縫合線は癒着している事が確認できた。骨盤の大坐骨切痕が鈍角である。歯は永久歯で、上顎左側の第2・3大臼歯が萌出し、生前に脱落している。その部分の歯槽が塞がりつつある。下顎右側も第2・3大臼歯が萌出後に脱落し、歯槽は完全に閉鎖していた。

所見 副葬品を伴わないため、埋葬の時期は不明である。第17号土壙墓と同様に、第5号製塩跡構築後の埋葬である。



第349図 第18号土壙墓実測図

第19号土壙墓 4区SK-4 (第350図)

位置 調査区中央部のH12f5区で、第5号土壙墓の北東側8mに位置している。

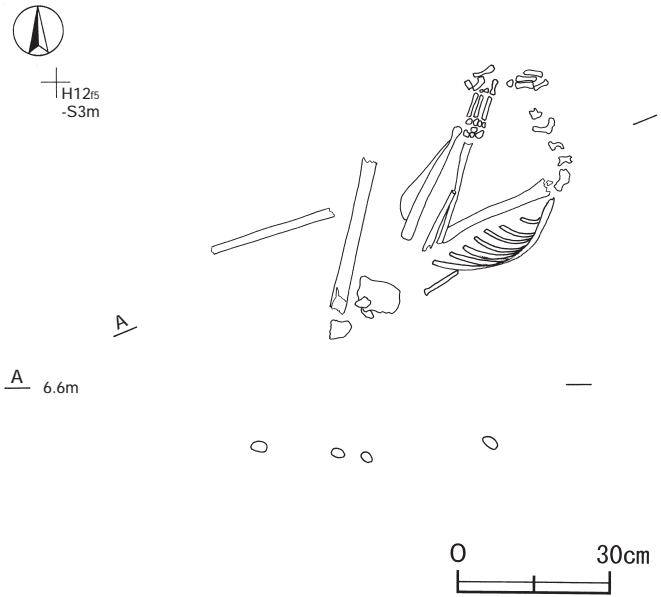
確認状況 表砂を3.8m除去後、標高6.5mで人骨を確認した。掘り込みの有無は確認できなかった。

埋葬の状況 上肢骨と下肢骨の出土位置から北東頭位と推測され、左側臥屈葬で埋葬されていた。両腕は体前面に折り曲げられていた。

性別と年齢 女性の可能性あり 成人

遺骸の特徴 頭蓋骨を除く体部の骨格が確認された。確認された左右の上腕骨は、細く華奢である。大腿骨の後陵は弱く、筋肉の発達は普通と考えられる。頭蓋骨が確認できなかったことで、歯の観察はできなかった。また、骨自体の腐朽が進んでいたため、四肢骨の計測が困難であった。

所見 骨格から成人の女性の可能性がある。埋葬の時期は不明である。



第350図 第19号土壌墓実測図

第20号土壌墓 4区S K-5 (第351図)

位置 調査区中央部のG12e7区で、第5号製塩跡の竈北側1mに位置している。

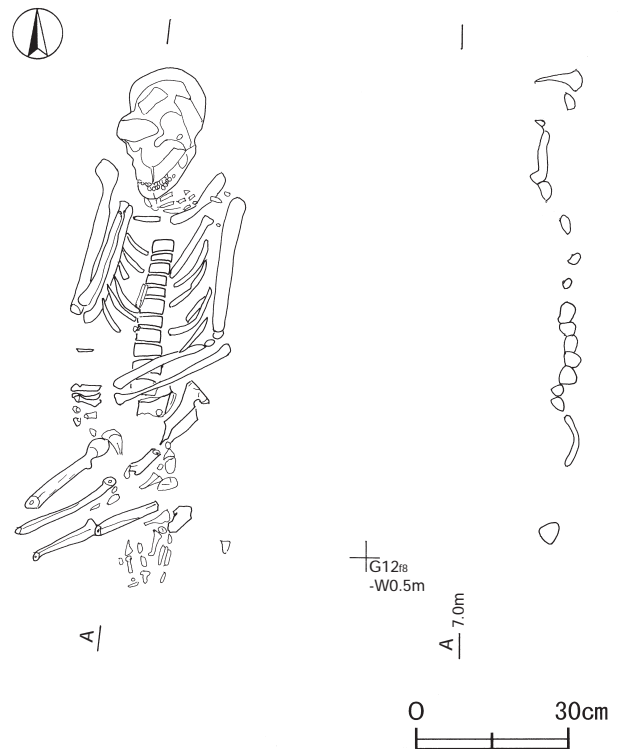
確認状況 表砂を5.4m除去後、標高6.8mで人骨を確認した。掘り込みの有無は確認できなかった。

埋葬の状況 北頭位仰臥屈葬で埋葬されていた。右手は下顎付近に左手は、骨盤の右側に添えられていた。

性別と年齢 男性 老年

遺骸の特徴 ほぼ全身骨格が確認された。頭蓋骨の腐朽が進んでいたものの体部の骨格については、残存が良好であった。上腕骨の三角筋粗面の稜が強く、筋肉が発達していたことがうかがえる。骨盤の大坐骨切痕が鋭角である。歯は永久歯で摩滅著しく、下顎左側の第2・3大臼歯のそれは最も顕著である。下顎右側の第3大臼歯が萌出している。それ以外の第3大臼歯は確認できなかった。萌出後に脱落し、歯槽が閉鎖している可能性がある。腰椎に椎間板ヘルニアの痕跡が認められた。

所見 副葬品が確認されなかったため、埋葬の時期は不明である。第5号製塩跡構築後の埋葬である。



第351図 第20号土壌墓実測図

第21号土壌墓 4区SK-6 (第352図)

位置 調査区中央部のG12g5区で、第5号製塩跡の下層1.5mに位置している。

確認状況 表砂を4.2m除去後、標高6.9mで人骨の頭部を確認した。掘り込みの有無は確認できなかった。

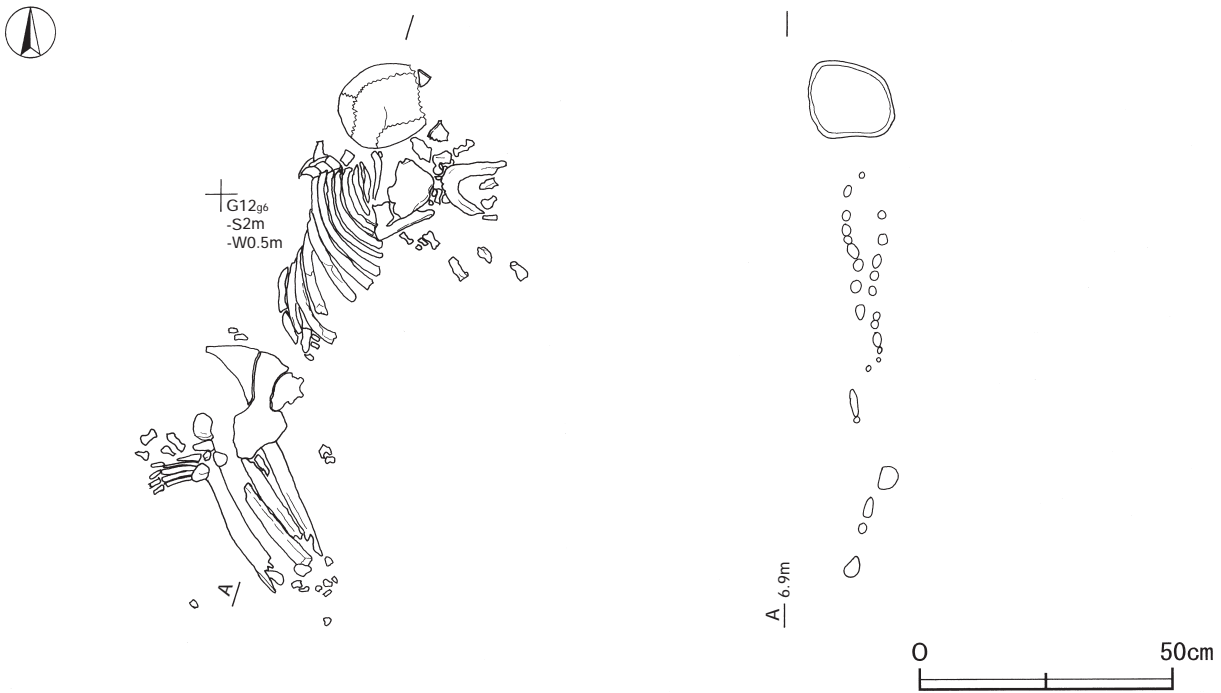
重複関係 本跡の上層に第5号製塩跡が確認された。

埋葬の状況 北東頭位左側臥屈葬で埋葬されていた。

性別と年齢 男性 熟年

遺骸の特徴 ほぼ全身骨格が確認された。四肢骨は、太くて頑丈である。腐朽が進んでおり、計測は困難であった。側頭骨の乳様突起が大きく、後頭骨の外後頭隆起が突出していた。歯は永久歯で、下顎左右の第2大臼歯が萌出していたが、下顎左右の第3大臼歯は萌出後生前脱落していた。多くの歯が磨耗しており、上顎左側は、ほとんどがう歯であった。下顎右側の第1・2大臼歯もう歯になっていた。

所見 副葬品が確認されなかったので、埋葬時期は不明である。第5号製塩跡構築以前に埋葬されていたと考えられる。第5号製塩跡を構築する段階で、本跡を認識していたかは不明である。



第352図 第21号土壌墓実測図

第22号土壌墓 4区SK-8 (第353図)

位置 調査区北部のF13b7区で、第28号土壌墓の北東側11mに位置している。

確認状況 表砂を7.1m除去後、標高10.2mで人骨を確認した。掘り込みの有無は確認できなかった。

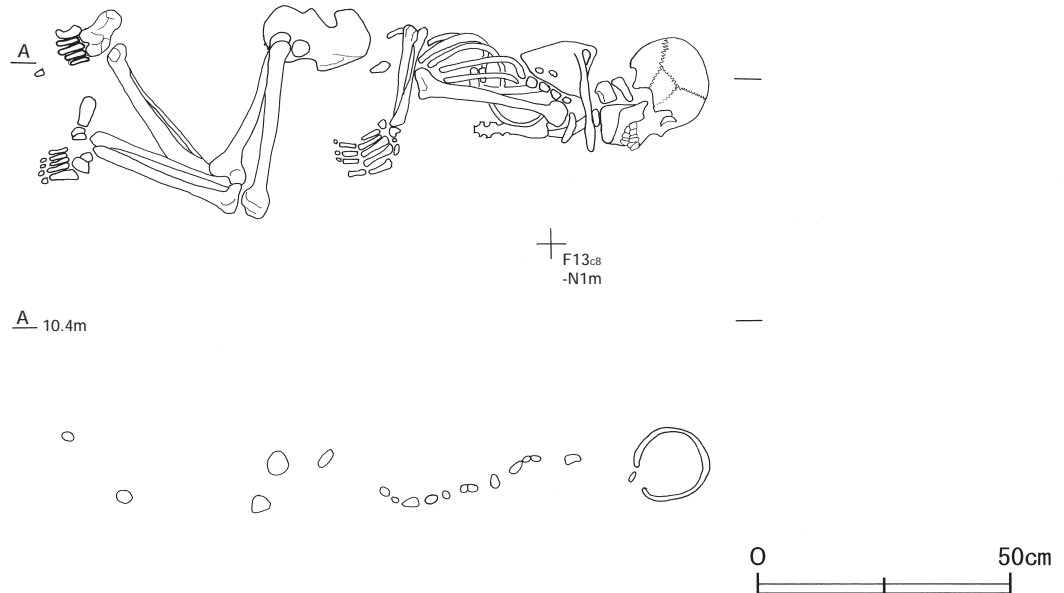
埋葬の状況 東頭位南面左側臥屈葬で埋葬されていた。

性別と年齢 男性 壮年

遺骸の特徴 ほぼ全身の骨格が確認された。前頭骨は頭頂部にかけてなだらかに傾斜しており、側頭骨の稜が明瞭で、乳様突起は比較的大きい。骨盤の大坐骨切痕と恥骨下角が鋭角であることが確認できた。上腕骨や大腿骨の筋粗面の稜が弱く、筋肉の発達は普通である。歯は永久歯列で、第2大臼歯が萌出していたが、第3大

白歯は萌出していなかった。上顎下顎ともに、第3大臼歯が成人になっても未萌出のままであることが推測される。歯全体に摩滅は少なかった。

所見 本人骨は筋肉のつき方が普通であり、過酷な労働のあとも見られないことと、栄養状態もよく各種疾病痕も見られないことから、生活環境に恵まれていたことが想定される。



第353図 第22号土壙墓実測図

第23号土壙墓 4区S K-9 (第354図)

位置 調査区中央部のG12f7区で、第5号製塩跡の北側下層に位置している。

確認状況 表砂を6.5m除去後、標高5.6mで人骨の頭部を確認した。掘り込みの有無は確認できなかった。

埋葬の状況 南頭位東面右俯臥屈葬で埋葬されていた。両腕は、体前面で折り曲げられていた。

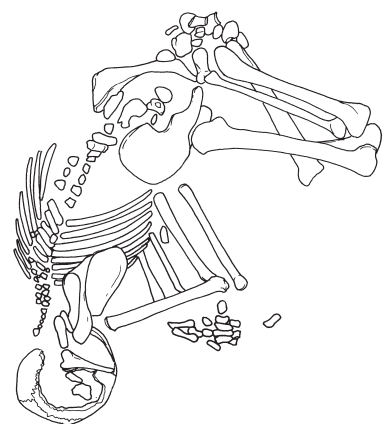
性別と年齢 男性 熟年から老年

遺骸の特徴 ほぼ全身骨格が確認された。残存状態は良好で、四肢骨がしっかりしていた。頭蓋骨の眼窩上隆起が強く、骨盤の大坐骨切痕が鋭角であった。椎骨にカリエスの痕跡が認められた。歯は永久歯で、下顎左右の第3大臼歯は萌出が確認された。下顎右側の第2・3大臼歯は生前に脱落し、時間の経過がみられる。下顎左側の第3大臼歯も脱落しており、下顎左側の第2大臼歯には摩滅が見られる。

所見 副葬品が確認されなかったため、埋葬の時期は不明である。南頭位の埋葬は、当遺跡において事例が少ない。



G12f7
-S2m
-E1m



第354図 第23号土壙墓実測図

第24号土壌墓 4区SK-11

位置 調査区北部のF13f4区で、第25号土壌墓の南側に位置している。

確認状況 表砂を7.6m除去後、標高9.2mで人骨を確認した。表砂除去の際にほとんどの骨が動いてしまったので、残存している骨で位置と高さを記録した。

性別と年齢 女性 若年(17~18歳)

遺骸の特徴 骨格が細く華奢である。頭蓋骨の眼窩上隆起が弱く、前額部の傾斜は垂直に近い角度である。乳様突起が小さい。骨盤は崩れていた。大腿骨長は、約31cmである。

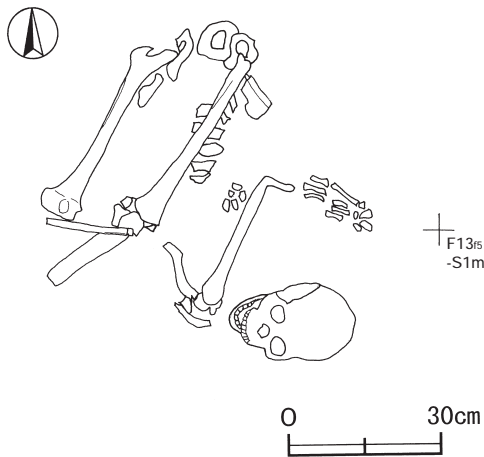
所見 骨がきれいであり、若々しい。残存している骨の長さから、成人に近い体長があったと推測される。

第25号土壌墓 4区SK-15(第355図)

位置 調査区北部のF13f4区で、第26号土壌墓の北側2mに位置している。

確認状況 表砂を7.7m除去後、標高9.3mで人骨の頭部を確認した。掘り込みの有無は確認できなかった。

埋葬の状況 南頭位で埋葬されていた。顔は南向きで、体を右にねじるようにして左腕が顔の右側に添えられていた。



性別と年齢 男性 壮年

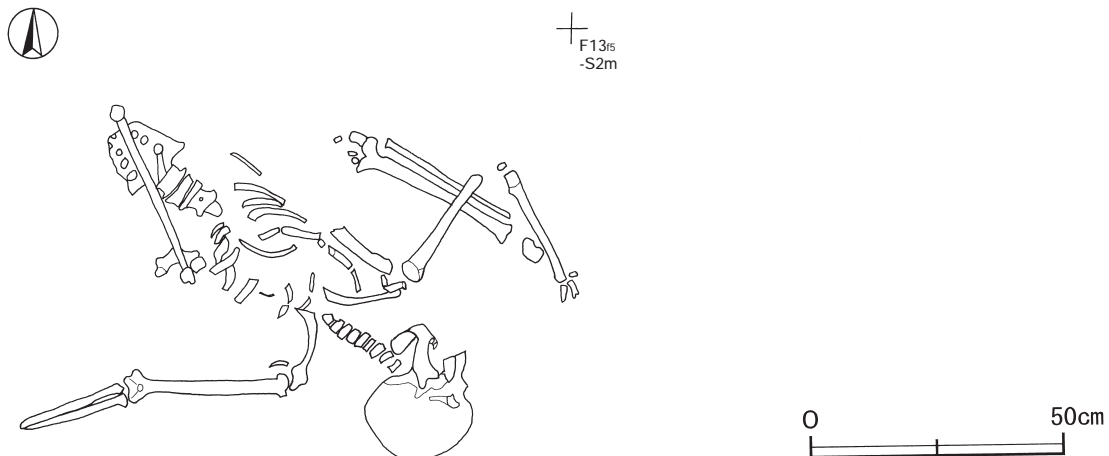
遺骸の特徴 ほぼ全身骨格が確認された。残存状態は良好で、四肢骨が太くたくましい。頭蓋骨の眼窩上隆起が弱く、額から頭頂部にかけての傾斜は垂直に近い。骨盤の大坐骨切痕は鋭角である。歯は永久歯で、上下左右とも第2大臼歯が萌出している。第3大臼歯は、萌出していない。顎の形状から判断すると、第3大臼歯は未萌出のままであることも考えられる。すべての歯が摩滅している。

所見 第13号製塩跡の東側で確認されており、標高も第13号製塩跡とほぼ同じである。第13号製塩跡構築後の埋葬と考えられる。

第355図 第25号土壌墓実測図

第26号土壌墓 4区SK-16(第356図)

位置 調査区北部のF13f4区で、第25号土壌墓の南側2mに位置している。



第356図 第26号土壌墓実測図

確認状況 表砂を7.8m除去後、標高9.2mで人骨を確認した。掘り込みの有無は確認できなかった。

埋葬の状況 南東頭位東面俯臥の状態で見つかった。両腕は左右に広げられ、左腕の下側に左足の脛骨と腓骨が確認できた。体を腰から二つ折りにした状態である。

性別と年齢 女性 熟年

遺骸の特徴 ほぼ全身骨格が確認された。体幹骨は腐朽していた。骨盤の大坐骨切痕が鈍角である。歯は永久歯で、下顎左側の第3大臼歯が萌出している。下顎左側の第1大臼歯は生前に脱落し、その部分の歯槽骨が閉鎖している。

所見 第25号土壌墓と同様、第13号製塩跡構築後の埋葬と考えられる。

第27号土壌墓 4区SK-17A

位置 調査区北部のF13e5区で、第29号土壌墓の南側7mに位置している。南西側3mには第13号製塩跡が位置している。

確認状況 表砂を8.4m除去後、標高8.7mで人骨を確認した。表砂除去の際にほとんどの骨が動いてしまったので、残存している骨で位置と高さを記録した。

性別と年齢 性別不明 少年(6~7歳)

遺骸の特徴 頭蓋骨と腐朽した四肢骨が残存していた。歯は混合歯列の時期で、乳歯は上下左右の第2乳臼歯が萌出している。永久歯は、上顎左側と下顎右側の第1大臼歯が萌出しており、切歯3本が萌出途中である。

所見 人骨の標高が第17号製塩跡より高く、第13号製塩跡よりも低い。第13号製塩跡の存在時期に埋葬されたと推測される。

第28号土壌墓 4区SK-17B

位置 調査区北部のF13e5区で、第29号土壌墓の南側7mに位置している。南西側3mには第13号製塩跡が位置している。

確認状況 表砂を8.4m除去後、標高8.7mで人骨を確認した。表砂除去の際にほとんどの骨が動いてしまったので、残存している骨で位置と高さを記録した。

性別と年齢 男性 熟年

遺骸の特徴 頭蓋骨を除く四肢骨が残存していた。上肢骨や下肢骨が太くたくましい。

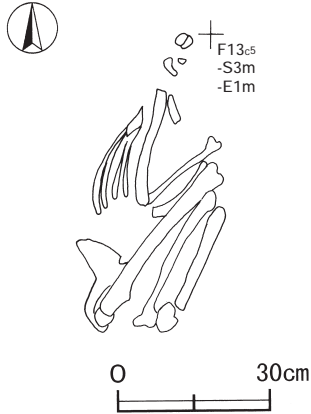
所見 第27号土壌墓と同様、第13号製塩跡の存在時期に埋葬されたと推測される。

第29号土壌墓 4区SK-18 (第357図)

位置 調査区北部のF13c5区で、第30号土壌墓の南東側2mに位置している。南西側7mには第13号製塩跡が位置している。

確認状況 表砂を7.8m除去後、標高8.6mで人骨を確認した。掘り込みの有無と頭骨は確認できなかった。

埋葬の状況 左側臥屈葬で埋葬されていた。四肢骨の状況から北東頭位と推測される。



性別と年齢 男性 成人

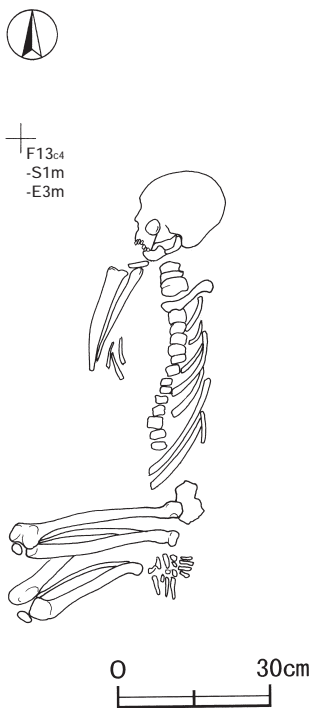
遺骸の特徴 頭蓋骨を除くほぼ全身骨格が確認された。腐朽が進んでおり、計測は困難であった。大坐骨切痕も腐朽していたため観察できなかった。上肢骨や下肢骨、なかでも大腿骨が太く、頑強な骨格である。

所見 骨格の様子から男性と推定した。第27号土壌墓と同様、第13号製塩跡の存在時期に埋葬されたと推測される。

第357図 第29号土壌墓実測図

第30号土壌墓 4区SK-19 (第358図)

位置 調査区北部のF13c4区で、第29号土壌墓の北西側2mに位置している。南西側8mには第13号製塩跡が位置している。



確認状況 表砂を7.2m除去後、標高8.5mで人骨を確認した。掘り込みの有無は確認できなかった。

埋葬の状況 北頭位西面右側臥屈葬で埋葬されていた。左手は、顔の前に置かれていた。

性別と年齢 男性 熟年

遺骸の特徴 ほぼ全身骨格が確認された。残存状態は良好で、太くがっしりとした骨格である。頭蓋骨の眼窩上隆起が強く、前額部から頭頂部にかけてなだらかに傾斜している。歯は永久歯で、上下左右とも切歯から第3大白歯まで確認できた。すべての歯に摩滅が見られた。全身骨格と歯に疾患は認められない。

所見 第27号土壌墓と同様、第13号製塩跡の存在時期に埋葬されたと推測される。

第358図 第30号土壌墓実測図

第31号土壌墓 4区S K-22 (第359図)

位置 調査区北部のF12j7区で、第32号土壌墓の北側6 mに位置している。

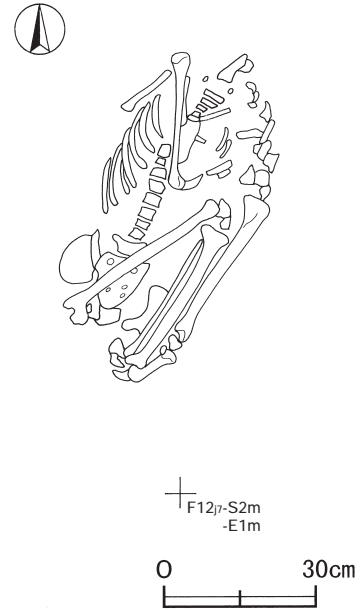
確認状況 表砂を5.9m除去後、標高6.2mで人骨を確認した。掘り込みの有無と頭部は確認できなかった。

埋葬の状況 左側臥屈葬で埋葬されていた。両膝を胸の前にして、腕も体の前で曲げられていた。四肢骨と体幹骨の状況から北東頭位と推測される。

性別と年齢 女性 壮年～熟年

遺骸の特徴 頭骨を除くほぼ全身骨格が確認され、残存状態は良好である。それぞれの骨が細く、全体的に華奢である。歯は16本確認できた。第2大臼歯が萌出していた。

所見 副葬品がなく埋葬時期は不明である。第32号土壌墓より0.2m低い位置で確認されている。



第359図 第31号土壌墓実測図

第32号土壌墓 4区S K-24 (第360図)

位置 調査区中央部のG12a6区で、第31号土壌墓の南側6 mに位置している。

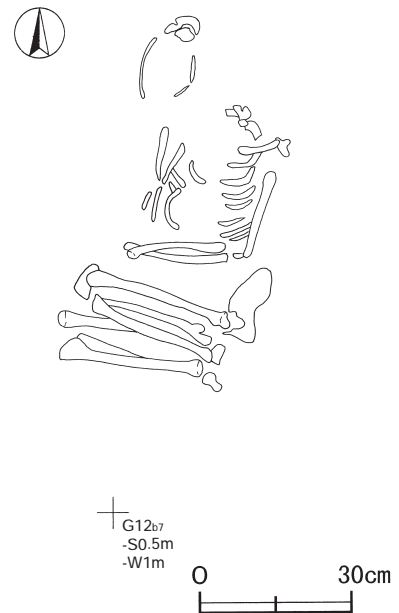
確認状況 表砂を5.8m除去後、標高6.4mで人骨を確認した。掘り込みの有無は確認できなかった。表砂除去の際、頭部の大部分が損傷を受けた。

埋葬の状況 体の軸を北方向に向け、体面を西にした右側臥屈葬で埋葬されていた。

性別と年齢 女性の可能性あり 若年 (17～18歳)

遺骸の特徴 ほぼ全身骨格が確認された。骨の腐朽が進んでいた。骨は細く、鎖骨が小さいが、体の大きさは、成人に近い。歯は永久歯で、第1大臼歯まで確認できた。

所見 第24土壌墓の人骨と骨格の様子や骨の細さが似ており、同年代の人骨と推定される。第31号土壌墓より0.2m高い位置で確認されている。



第360図 第32号土壌墓実測図

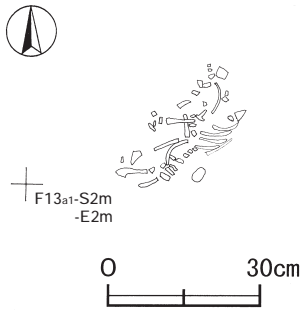
第33号土壌墓 4区S K-25 (第361図)

位置 調査区北部のF13a1区で、第66号土壌墓の北東側1 mに位置している。

確認状況 表砂を9.2m除去後、標高5.5mで人骨を確認した。頭部は、歯のみが確認できた。掘り込みの有無は確認できなかった。

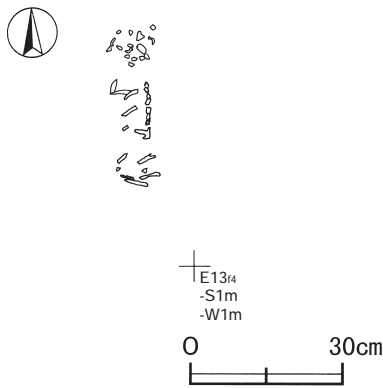
埋葬の状況 上肢骨が北東側から、下肢骨が南東側から出土したので北東頭位の埋葬と推測される。

性別と年齢 性別不明 乳児 (6ヶ月～1歳未満)



第361図 第33号土壙墓
実測図

第34号土壙墓 4区SK-29 (第362図)



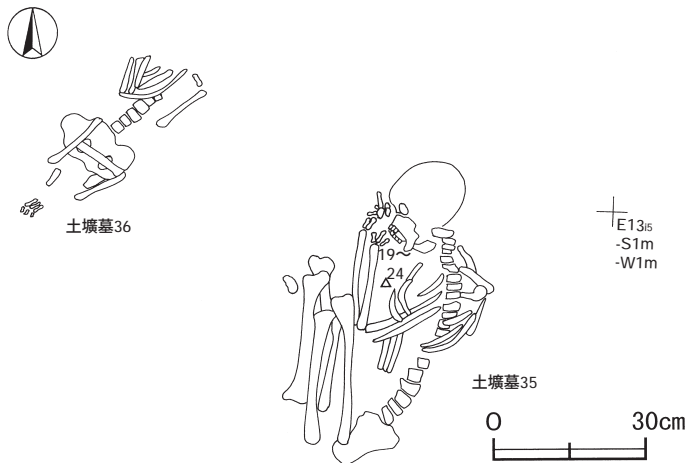
第362図 第34号土壙墓実測図

第35号土壙墓 4区SK-30 (第363図)

位置 調査区北部のE13i4区で、第36号土壙墓の南東側0.5mに位置している。

確認状況 表砂を10.3m除去後、標高5.3mで人骨の右大腿骨を確認した。掘り込みの有無は確認できなかった。

埋葬の状況 北頭位西面右側臥屈葬で埋葬されていた。両手と両足が体の前で曲げられていた。



第363図 第35・36号土壙墓実測図

遺骸の特徴 頭蓋骨や四肢骨・体幹骨に確認できなかった骨もあるが、ほぼ全身骨格が残存している。骨盤が小さく成長していないので、歩行はまだできなかったと推測される。歯は乳歯で、第1・2乳切歯の歯根が半分ほどまで成長している。第1・2乳臼歯は、歯冠しか形成されていない。

所見 副葬品が確認されなかったため、埋葬の時期は不明である。第66号土壙墓と近接し、0.5m高い位置で確認されていることから、第66号土壙墓と前後して埋葬された可能性が考えられる。

位置 調査区北部のE13f3区で、第39号土壙墓の北西側2mに位置している。

確認状況 表砂を7.5m除去後、標高6.1mで人骨を確認した。掘り込みの有無は確認できなかった。

埋葬の状況 北頭位右側臥屈葬で埋葬されていた。

遺物出土状況 土師質土器片1点(内耳鍋)が出土している。

性別と年齢 性別不明 乳児(6ヶ月未満)

遺骸の特徴 骨の腐朽が進み、四肢骨の計測は困難であった。歯は14本確認でき、すべてが歯冠までしか形成されていない乳歯であった。

所見 出土土器は細片であり、埋葬時の混入である。授乳期に死亡したものと推測される。

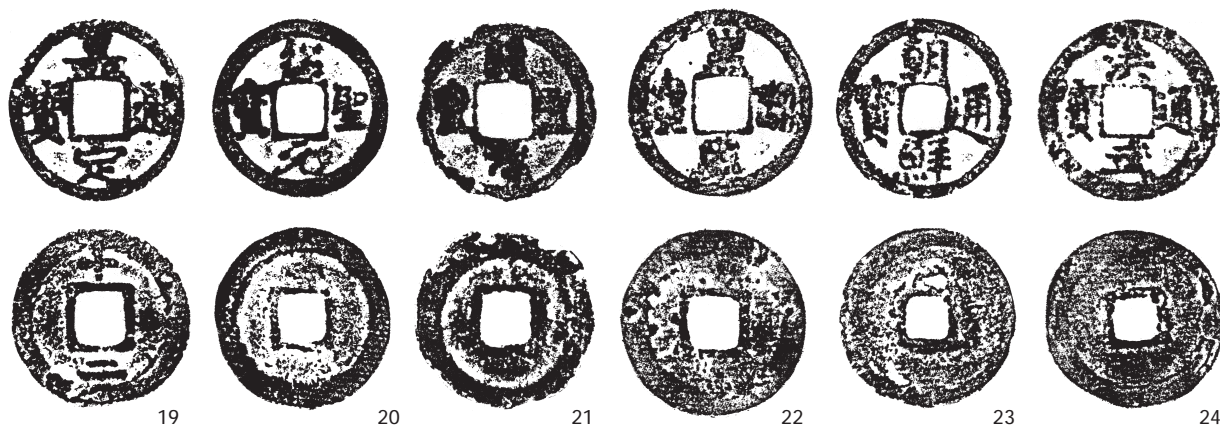
遺物出土状況 古銭6枚が胸の前から出土している。

性別と年齢 男性 熟年

遺骸の特徴 ほぼ全身骨格が確認された。上肢骨が太く、頑強な骨格である。頭蓋骨の眼窩上隆起がやや強く、前額部から頭頂部にかけてなだらかに傾斜している。頭蓋骨の縫合線は癒着している。歯は永久歯で、上下左右ともに第3大臼歯まで萌出している。上顎左側の第1～3大臼歯、下顎右側の第2小臼歯、下顎左側の第2大臼歯は生前に脱落し、その部分の歯槽骨が閉鎖

している。う蝕が認められるのは、上顎左側の犬歯と第1～3大白歯、上顎右側の第1・2小白歯、下顎左側の第3大白歯である。歯全体の磨耗と歯周疾患が著しい。

所見 出土した古銭は、埋葬に伴う六道銭であると考えられる。最新銭は朝鮮通寶（初鑄年1423）である。



第364図 第35号土壙墓出土遺物実測図〔古銭は原寸大〕

第35号土壙墓出土遺物観察表（第364図）

番号	銭名	径	孔径	厚さ	重さ	初鑄年	材質	特徴	出土位置	備考
19	嘉定通寶	2.36	0.70	0.07	2.60	1208	銅	真書，背「十二」	胸部前面	
20	紹聖元寶	2.36	0.65	0.11	3.42	1094	銅	行書	胸部前面	
21	紹聖元寶	2.42	0.70	0.11	3.24	1094	銅	篆書	胸部前面	
22	皇宋通寶	2.48	0.70	0.08	2.56	1038	銅	篆書	胸部前面	
23	朝鮮通寶	2.38	0.60	0.14	4.32	1423	銅	真書	胸部前面	
24	洪武通寶	2.41	0.55	0.10	3.56	1368	銅	真書	胸部前面	

第36号土壙墓 4区SK-31（第363図）

位置 調査区北部のE13i4区で、第35号土壙墓の北西側0.5mに位置している。

確認状況 表砂を10.2m除去後、標高5.4mで人骨を確認した。北西側0.5mに第35号土壙墓があり、並んで埋葬されていた。掘り込みの有無は確認できなかった。

埋葬の状況 仰臥屈葬で埋葬されており、四肢骨と体幹骨の状況から北東頭位と推測される。

性別と年齢 性別不明 幼児（3～4歳）

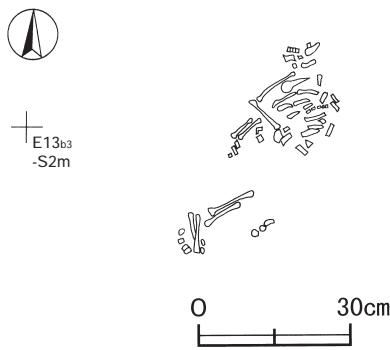
遺骸の特徴 頭蓋骨を除く全身骨格が確認されたが、腐朽が進んでいる。大腿骨には筋粗面の稜が見られるので、歩行していたと推測される。歯は確認できなかった。

所見 年齢は、体長と歩行していたと推測されることから推定した。第35号土壙墓と並列し標高も同じであることから、第35号土壙墓と前後して埋葬されたと推測される。

第37号土壙墓 4区SK-36（第365図）

位置 調査区北部のE13b3区で、第93号土壙墓の北西側0.2mで、第30号建物跡より下層に位置している。

確認状況 表砂を7.8m除去後、標高4.5mで人骨を確認した。掘り込みの有無は確認できなかった。



第365図 第37号土壌墓実測図

埋葬の状況 頭骨は腐朽により確認できなかった。上肢骨と下肢骨の状況から、北東頭位の埋葬と推測される。

性別と年齢 性別不明 幼児（4～5歳）

遺骸の特徴 ほぼ全身骨格が確認された。四肢骨の計測から、同年齢期の人骨と比較すると体長がやや小さい。歯は乳歯で、下顎右側の第2乳臼歯が萌出しており、下顎右側の第1大臼歯の歯冠を歯槽骨内に確認できた。

所見 第30号建物跡より下層で本人骨が出土しており、第30号建物跡構築以前の埋葬である。建物構築の段階で、本人骨が埋葬されていたことを認識していたかは不明である。

第38号土壌墓 4区S K-38（第366図）



第366図 第38号土壌墓実測図

位置 調査区北部のF13d1区で、第66号土壌墓の南西側12mに位置している。東側16mには第21号製塩跡が位置している。

確認状況 表砂を11.5m除去し、標高3.8mで人骨の左大腿骨を確認した。掘り込みの有無は確認できなかった。

埋葬の状況 肋骨や上肢骨が北側から、下肢骨が南側から出土しているため、北頭位の埋葬と推測される。

性別と年齢 性別不明 幼児（1～2歳）

遺骸の特徴 頭骨を除くほぼ全身骨格が確認された。残存状態は良好で、四肢骨の長さが記録でき、左右の大腿骨の長さは14.5cmである。骨盤が小さく、まだ歩行していないと推測される。歯は確認できなかった。

所見 第21号製塩跡が標高4.8mで確認されているため、第21号製塩跡の存在時期かそれ以前に埋葬されたと推測される。

第39号土壌墓 4区S K-39（第367図）

位置 調査区北部のE13f4区で、第34号土壌墓の南東側2mに位置している。

確認状況 表砂を5m除去後、第31号建物跡の下層0.4mの標高5.5mで、人骨の頭部を確認した。掘り込みの有無は確認できなかった。

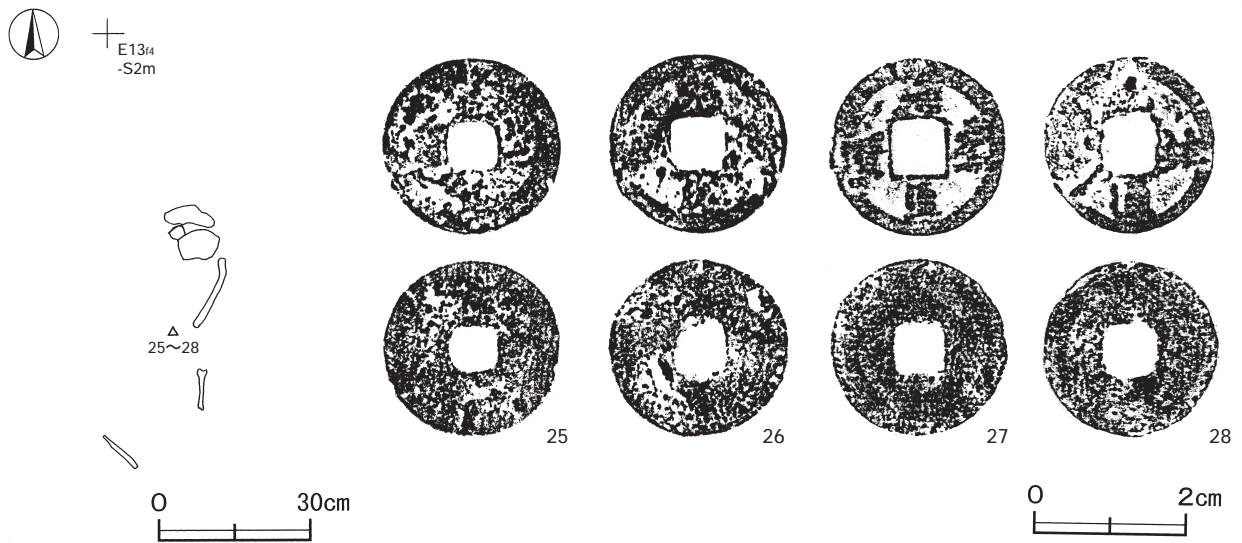
埋葬の状況 頭蓋骨片が北側から、四肢骨が南側から確認されたため、北頭位の埋葬と推測される。

遺物出土状況 古銭4枚が人骨の左手付近から出土している。

性別と年齢 性別不明 乳児（1歳頃）

遺骸の特徴 頭蓋骨の破片と四肢骨が残存しており、腐朽が進んでいた。歯は乳歯で、下顎の第1・2乳切歯と上顎右側の第1乳臼歯が萌出している。上下左右ともに第2乳臼歯は萌出していない。骨盤が小さく、歩行前と推測される。

所見 出土した古銭4枚は副葬品と考えられる。判読できた古銭では元祐通寶（初鑄年1086）が最新銭である。



第367図 第39号土壙墓・出土遺物実測図

第39号土壙墓出土遺物観察表 (第367図)

番号	銭名	径	孔径	厚さ	重さ	初鑄年	材質	特徴	出土位置	備考
25	□□□□	2.35	0.60	0.06	2.54	—	銅	判読不能, 模鑄	胸部付近	
26	□□□□	2.34	0.70	0.08	2.76	—	銅	判読不能, 模鑄	胸部付近	
27	元豊通寶	2.35	0.70	0.06	2.30	1078	銅	行書	胸部付近	
28	元祐通寶	2.34	0.75	0.70	2.82	1086	銅	行書, 星形孔	胸部付近	

第40号土壙墓 4区S K-42 (第368・369図)

位置 調査区北部のE13e3区で、第51号土壙墓の北西側7mに位置している。

確認状況 表砂を8.9m除去後、標高5.2mで人骨の頭部を確認した。掘り込みの有無は確認できなかった。

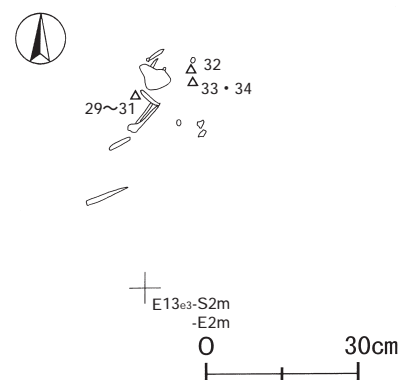
埋葬の状況 頭蓋骨片が北東側から、四肢骨が南西側から出土したので、北東頭位の埋葬と推測される。

遺物出土状況 古銭6枚が人骨の上腕骨と頭部付近から出土している。

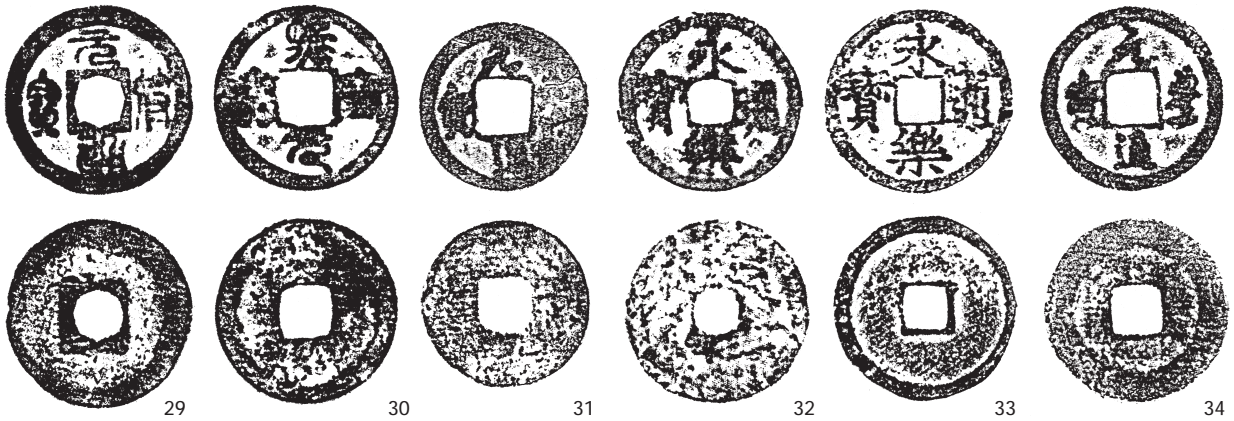
性別と年齢 性別不明 乳児(6ヶ月未満)

遺骸の特徴 頭蓋骨の破片, 左右の上腕骨, 左の大腿骨と脛骨等が残存している。腐朽が進んでおり計測が困難であった。歯は3本確認され, すべて歯冠のみであった。歯の形状と歯槽骨の状態から見て, 乳切歯と第1・2乳臼歯は未萌出と推測される。

所見 出土した古銭は副葬品と考えられる。判別できた古銭では永樂通寶(初鑄年1408)が最新銭である。



第368図 第40号土壙墓実測図



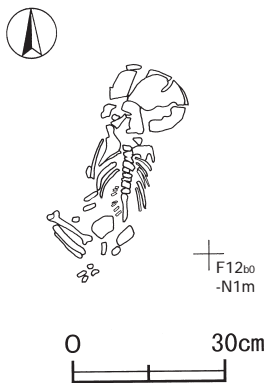
第369図 第40号土壙墓出土遺物実測図 [古銭は原寸大]

第40号土壙墓出土遺物観察表 (第369図)

番号	銭名	径	孔径	厚さ	重さ	初鑄年	材質	特徴	出土位置	備考
29	元符通寶	2.48	0.61	0.09	3.34	1098	銅	篆書, 八角孔	上腕骨付近	
30	熙寧元寶	2.43	0.70	0.08	2.66	1068	銅	篆書	上腕骨付近	
31	元豊通寶	2.23	0.70	0.04	1.44	1078	銅	行書	上腕骨付近	
32	永樂通寶	2.47	0.60	0.14	3.60	1408	銅	真書	頭骨付近	
33	永樂通寶	2.48	0.61	0.10	3.02	1408	銅	真書	頭骨付近	
34	元豊通寶	2.45	0.65	0.08	2.76	1078	銅	行書	頭骨付近	

第41号土壙墓 4区SK-49 (第370図)

位置 調査区北部のF12a9区で、第33号土壙墓の南西側6mに位置している。



第370図 第41号土壙墓実測図

確認状況 表砂を8.7m除去後、第32号建物跡の下層0.4mの標高5.5mで、人骨の頭部を確認した。掘り込みの有無は確認できなかった。

埋葬の状況 北頭位西面右俯臥屈葬で埋葬されていた。両腕は、体前面に置かれていた。

性別と年齢 性別不明 乳児(1歳頃)

遺骸の特徴 ほぼ全身骨格が確認され、残存状態は良好である。歯は乳歯で、第2乳臼歯が萌出はじめる時期である。永久歯の第1大臼歯は歯冠の半分まで成長している。上顎左右の乳切歯はう歯である。

所見 副葬品が確認されなかったので、埋葬の時期は不明である。第33号土壙墓と同じ高さで確認されている。

第42号土壙墓 4区SK-50 (第371図)

位置 調査区北部のE13g4区で、第39号土壙墓の南側3mに位置している。

確認状況 表砂を9.9m除去後、第31号建物跡の下層0.7mの標高5.2mで、人骨を確認した。掘り込みの有無は確認できなかった。

埋葬の状況 右側臥屈葬で埋葬されていた。頭蓋骨の破片は北側から、下肢骨は南側から出土しているため、北頭位の埋葬と推測される。

性別と年齢 女性 熟年から老年

遺骸の特徴 腐朽が進んでいたが、四肢骨の計測は可能であった。頭蓋骨の眼窩上隆起が弱く、前頭骨の傾斜が強い。骨が細く華奢である。下肢骨の筋粗面が隆起しており、発達した筋肉の様子がうかがえる。骨盤の大坐骨切痕が鈍角である。歯は永久歯で、第3大臼歯まで萌出している。上顎左右の第1～3大臼歯は、萌出後に生前脱落し、歯槽骨が閉塞している。下顎左右の第3大臼歯は、欠損している。上下ともに歯槽膿漏の痕跡が見られ、右上は顕著である。

所見 第39号土壙墓と近接し、0.3m低い位置で確認されていることから、第39号土壙墓と前後して埋葬された可能性が考えられる。



第371図 第42号土壙墓実測図

第43号土壙墓 4区S K-51A (第372図)

位置 調査区北部のF12b8区で、第44号土壙墓の南西側1mに位置している。

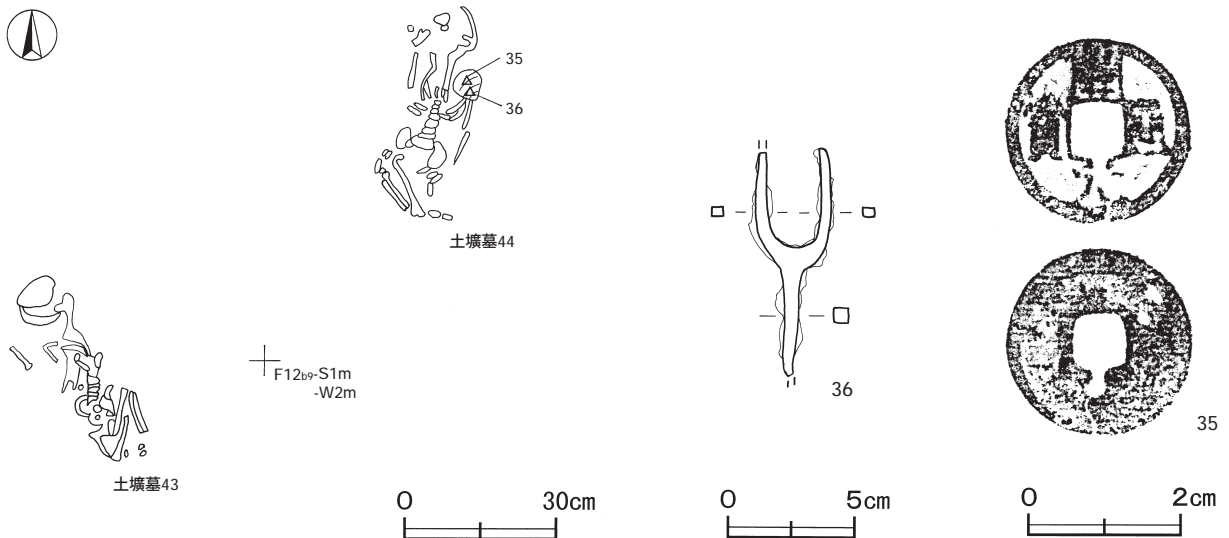
確認状況 表砂を9.4m除去後、第32号建物跡の下層0.6mの標高5.2mで人骨の頭部を確認した。掘り込みの有無は確認できなかった。

埋葬の状況 北西頭位北東面左側臥屈葬で埋葬されていた。

性別と年齢 性別不明 幼児(5歳頃)

遺骸の特徴 ほぼ全身骨格が確認され、残存状態は良好である。歯は乳歯で、第1乳切歯から第2乳臼歯まで萌出している。第1大臼歯の歯冠は歯槽に確認でき、歯槽骨の上部が開いている。

所見 第44号土壙墓と近接し、0.1m高い位置で確認されたことから、第44号土壙墓と前後して埋葬された可能性が考えられる。



第372図 第43・44号土壙墓、44号土壙墓出土遺物実測図

第44号土墳墓 4区S K-51 B (第372図)

位置 調査区北部のF12b8区で、第43号土墳墓の北東側1 mに位置している。

確認状況 表砂を9.5m除去後、第32号建物跡の下層0.7mの標高5.1mで人骨の左大腿骨を確認した。掘り込みの有無は確認できなかった。

埋葬の状況 北頭位仰臥屈葬で埋葬されていた。顔は西側を向いていた。

遺物出土状況 古銭1枚、鉄製品(簀)1点がウバガイの下に納められた状態で、左肩付近から出土している。

性別と年齢 性別不明 幼児(5歳頃)

遺骸の特徴 ほぼ全身骨格が確認された。歯は乳歯で、第1乳切歯から第2乳臼歯まで萌出している。第1・2大臼歯は歯槽の中に確認でき、第2大臼歯は、歯冠上部のできはじめである。上顎右側と下顎左右の第2乳臼歯はう歯である。

所見 第43号土墳墓と近接し、0.1m低い位置で確認されていることから、第43号土墳墓と前後して埋葬された可能性が考えられる。伏せたウバガイの中から出土した開元通寶(初鑄年 621)と簀は出土状況から副葬品と考えられ、当遺跡では唯一の事例である。

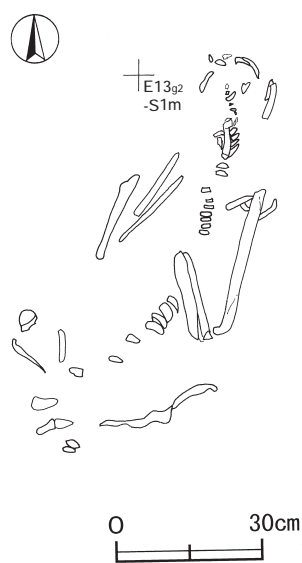
第44号土墳墓出土遺物観察表 (第372図)

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
36	簀	(9.1)	3.1	0.4	(12.3)	鉄	尖頭は2本	左肩付近	

番号	銭名	径	孔径	厚さ	重さ	初鑄年	材質	特徴	出土位置	備考
35	開元通寶	2.48	0.7	0.1	(2.86)	621	銅	真書、鑄造斑	左肩付近	

第45号土墳墓 4区S K-52 (第373図)

位置 調査区北部のE13g2区で、第46号土墳墓の南西側5 mに位置している。



第373図 第45号土墳墓
実測図

確認状況 表砂を9m除去後、第31号建物跡の下層1.4mの標高4.1mで人骨を確認した。掘り込みの有無は確認できなかった。

埋葬の状況 頭蓋骨の破片は北東側から、体幹骨の一部と下肢骨が南西側から出土したので、北東頭位の埋葬と推測される。

遺物出土状況 土師質土器片2点(内耳鍋)、土師器1点が人骨確認の段階で出土している。

性別と年齢 男性 熟年

遺骸の特徴 頭蓋骨の一部、左右の上腕骨、左橈骨、右尺骨、左右の大腿骨が残存していた。腐朽が進んでおり、計測は困難であった。上腕骨がたくましく、筋肉の発達の様子がうかがえる。歯は永久歯で、上顎左側の第3大臼歯の萌出が確認できた。下顎右側の第3大臼歯は萌出後に生前脱落し、歯槽骨の閉鎖がみられる。

所見 第31号建物跡構築前の埋葬と考えられる。出土遺物は細片で、埋葬時の混入である。

第46号土壙墓 4区SK-53 (第374図)

位置 調査区北部のE13f2区で、第45号土壙墓の北東側5mに位置している。

確認状況 表砂を8.4m除去後、第31号建物跡の下層1.1mの標高4.5mで人骨を確認した。掘り込みの有無は確認できなかった。

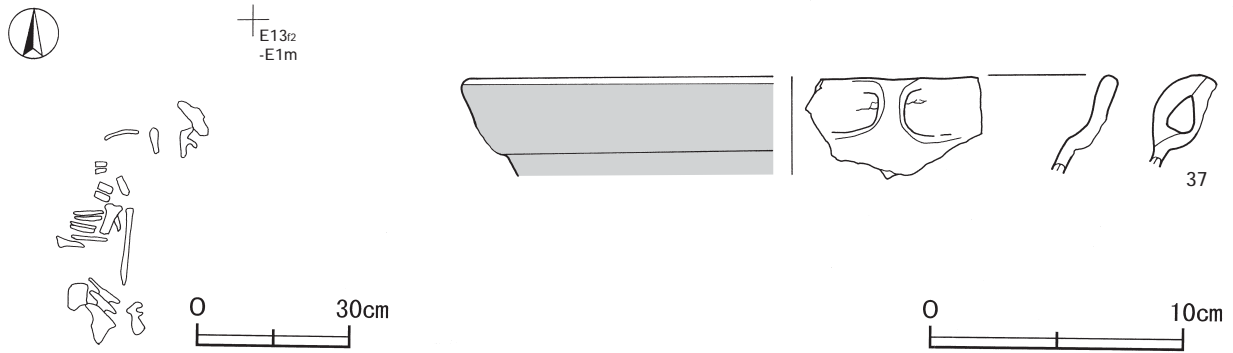
埋葬の状況 頭蓋骨の破片は北側から、四肢骨は南側から出土したので、北頭位での埋葬と推測される。

遺物出土状況 土師質土器片11点(内耳鍋), 須恵器片1点(甕)が人骨確認の段階で出土している。

性別と年齢 性別不明 幼児(1~2歳)

遺骸の特徴 ほとんどの骨が腐朽していた。歯は乳歯で9本確認できた。下顎左側の第1乳臼歯が萌出しており、第2乳臼歯は萌出直前あるいは直後である。

所見 第31号建物跡の構築の際に、本跡を認識していたかは不明である。出土土器は細片で、埋葬時の混入と考えられる。



第374図 第46号土壙墓・出土遺物実測図

第46号土壙墓出土遺物観察表 (第374図)

番号	器形	器質	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
37	内耳鍋	土師質土器	[33.6]	(5.2)	—	砂粒・雲母	にぶい橙	普通	ナデ・外面煤付着	覆土中	5%

第47号土壙墓 4区SK-54 (第375図)

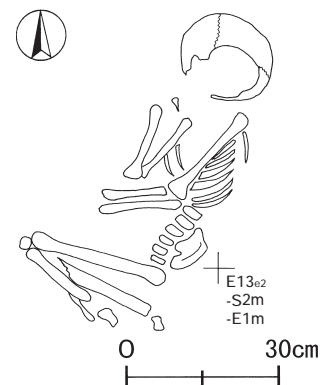
位置 調査区北部のE13e2区で、第49号土壙墓の北東側2mに位置している。

確認状況 表砂を7.9m除去後、標高4.5mで人骨の頭部を確認した。掘り込みの有無は確認できなかった。

埋葬の状況 北東頭位西面右側臥屈葬で埋葬されていた。両腕は、体前面に曲げた状態で置かれていた。

性別と年齢 性別不明 少年(8~9歳)

遺骸の特徴 ほぼ全身骨格が確認された。歯は34本残存しており、混合歯列である。乳歯は、乳切歯から乳臼歯まで萌出している。永久歯で歯槽に確認できたのは、上顎左右の切歯と犬歯、下顎左側の犬歯から第1大臼歯、下顎右側の第1小臼歯と第1大臼歯である。

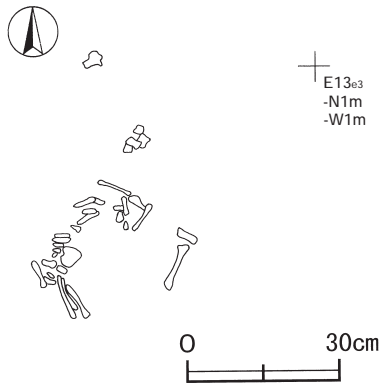


第375図 第47号土壙墓実測図

所見 第49号土壙墓と近接し、0.1m 高い位置で確認されていることから、第49号土壙墓と前後して埋葬された可能性が考えられる。

第48号土壙墓 4区SK-55 (第376図)

位置 調査区北部のE13d2区で、第47号土壙墓の北東側3mに位置している。



確認状況 表砂を7.8m除去後、標高4.5mで人骨の頭部を確認した。掘り込みの有無は確認できなかった。

埋葬の状況 頭蓋骨片は北側から、四肢骨の一部が南側から出土したので、北頭位での埋葬と推測される。

性別と年齢 性別不明 幼児

遺骸の特徴 頭蓋骨の破片と四肢骨と体幹骨の一部が残存していた。歯は、確認できなかった。残存する骨の長さは、左大腿骨で10.1cm、右脛骨で11.4cmである。

所見 第47号土壙墓と近接し、同じ標高で確認されていることから、第47号土壙墓と前後して埋葬された可能性が考えられる。

第376図 第48号土壙墓実測図

第49号土壙墓 4区SK-60 (第377図)

位置 調査区北部のE13e2区で、第47号土壙墓の南西側2mに位置している。

確認状況 表砂を8m除去後、第31号建物跡の下層1.6mの標高4.4mで人骨の頭部を確認した。掘り込みの有無は確認できなかった。



埋葬の状況 北頭位西面右側臥屈葬で埋葬されていた。両腕は、体前面で曲げた状態である。

遺物出土状況 土師質土器片1点(内耳鍋)が人骨確認の段階で出土している。

性別と年齢 女性 老年

遺骸の特徴 ほぼ全身骨格が確認された。頭蓋骨の眼窩上隆起が弱く、四肢骨の骨は細い。上腕の三角筋粗面が隆起しており、体をよく動かしていた様子がうかがえる。歯は永久歯で、下顎右側は第3大白歯まで萌出している。下顎右側の中切歯、第1・2小臼歯、第2・3大白歯は、生前脱落している。切歯の磨耗が著しい。

所見 第47号土壙墓と近接し、0.1m低い位置で出土していることから、第47号土壙墓と前後して埋葬された可能性が考えられる。出土遺物は細片であり、埋葬時の混入と考えられる。

第377図 第49号土壙墓実測図

第50号土壙墓 4区SK-62 (第378図)

位置 調査区北部のF12a7区で、第67号土壙墓の北東側3mに位置している。

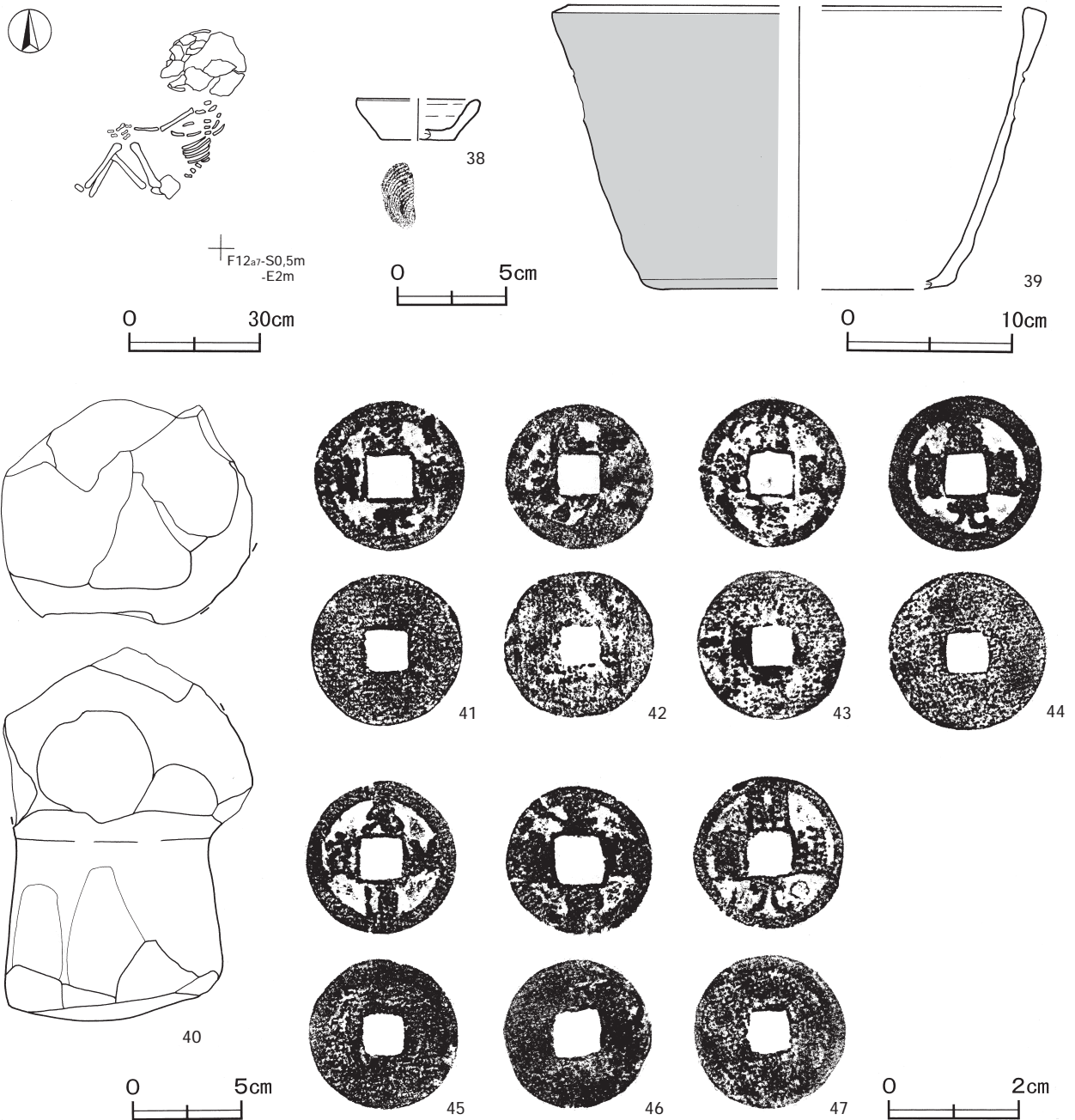
確認状況 表砂を7.9m除去後、標高5.3mで人骨の頭部を確認した。掘り込みの有無は確認できなかった。

埋葬の状況 北東頭位北西面右側臥屈葬で埋葬されていた。両手は両膝付近に置かれていた。

遺物出土状況 土師質土器片72点（小皿14，内耳鍋58），陶器片2点（皿1，大皿1），石棒1点，古銭7枚，ウバガイが出土している。これらの遺物は，人骨確認の段階で人骨周辺に散在していた。石棒は，人骨の南側1.5m，古銭は人骨の北側0.4m付近で確認された。

性別と年齢 性別不明 乳児（1歳未満）

遺骸の特徴 骨の腐朽が著しく，残存している部分の長さは，右大腿骨9.0cm，左大腿骨14.0cm，左脛骨14.0cmである。歯は乳歯で，乳切歯から乳犬歯までは歯根が確認でき，萌出していたと考えられる。第1乳臼歯は歯根が生育途中であり，萌出直前である。



第378図 第50号土壙墓・出土遺物実測図

所見 第67号土壙墓と近接し、0.2m 低い位置で確認されていることから、第67号土壙墓と前後して埋葬された可能性が考えられる。古銭7枚は、埋葬との関係も類推されるので拓本を掲載した。判読できた最新銭は元祐通寶（初鑄年 1086）である。他の銭名は不明確で、外縁に段差のないものも含まれており、全体的に銭の厚みが少ない。

第50号土壙墓出土遺物観察表（第378図）

番号	器形	器質	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
38	小皿	土師質土器	[5.6]	1.9	[3.5]	砂粒・雲母	にぶい褐	普通	底部回転糸切り	覆土中	40%
39	内耳鍋	土師質土器	[30.4]	17.4	[18.5]	砂粒・雲母	暗赤褐	普通	ナデ・外面煤付着	覆土中	35%

番号	器種	幅	奥行	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
40	石棒	(11.5)	(10.4)	(17.3)	(2.760)	花崗岩	自然石素材 全面に剥離顕著	人骨南側	PL48

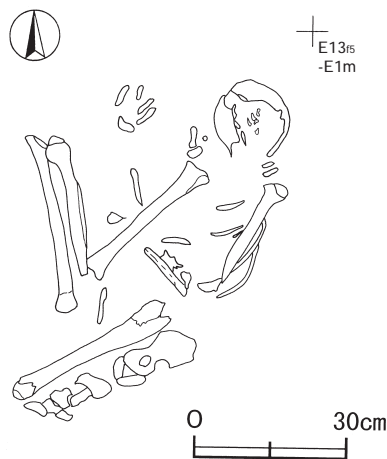
番号	銭名	径	孔径	厚さ	重さ	初鑄年	材質	特徴	出土位置	備考
41	皇宋通寶	2.34	0.60	0.06	2.24	1038	銅	模鑄	人骨周辺	
42	□化通寶	2.28	0.61	0.04	2.52	—	銅	判読不能, 模鑄	人骨周辺	
43	天聖□寶	2.26	0.61	0.10	2.18	—	銅	判読不能, 星形孔, 模鑄	人骨周辺	
44	至道元寶	2.43	0.65	0.10	3.54	945	銅	真書	人骨周辺	
45	元祐通寶	2.32	0.60	0.12	3.16	1086	銅	行書	人骨周辺	
46	□□□寶	2.31	0.70	0.10	2.88	—	銅	判読不能, 模鑄	人骨周辺	
47	開元通寶	2.37	0.60	0.11	3.44	621	銅	真書	人骨周辺	

第51号土壙墓 4区S K-75（第379図）

位置 調査区北部のE13f5区で、第52号土壙墓の南西側2mに位置している。

確認状況 表砂を9.3m除去後、標高5.2mで人骨の頭部を確認した。掘り込みの有無は確認できなかった。

埋葬の状況 北東頭位西面右側臥屈葬で埋葬されていた。



性別と年齢 男性 熟年

遺骸の特徴 ほぼ全身骨格が確認され、残存状態は良好である。眼窩上の隆起が強く、前頭骨の傾斜がなだらかであり、骨盤の大坐骨切痕は鋭角である。歯は永久歯で、下顎左側の第3大白歯が萌出している。下顎右側の第1大白歯は生前に脱落し、歯槽骨の閉鎖が見られる。ほとんどの歯が磨耗しており、下顎左右の切歯は磨耗著しい。上顎右側の第2大白歯は、う歯である。

所見 副葬品が確認されなかったため、埋葬の時期は不明である。第52号土壙墓と近接し、0.3m低い位置で確認されていることから、第52号土壙墓と前後して埋葬された可能性が考えられる。

第379図 第51号土壙墓実測図

第52号土壙墓 4区S K-76（第380図）

位置 調査区北部のE13e5区で、第51号土壙墓の北東側2mに位置している。

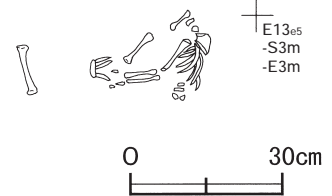
確認状況 表砂を8.2m除去後、標高5.5mで人骨の上腕骨を確認した。掘り込みの有無は確認できなかった。

埋葬の状況 頭蓋骨の破片と上肢骨が東側から、下肢骨の一部が西側から出土したので、東頭位での埋葬と推測される。頭蓋骨が下肢骨より15cm高い位置で出土した。

性別と年齢 性別不明 乳児（1歳前後）

遺骸の特徴 脛骨と腓骨を除くほぼ全身骨格が確認された。頭蓋骨は薄く、縫合が弱い。歯は乳歯で、乳切歯から乳犬歯まで萌出している。第1乳臼歯が萌出直後であり、第2乳臼歯は未萌出である。

所見 副葬品が確認されなかったため、埋葬の時期は不明である。第51号土壙墓と近接し、0.3m高い位置で確認されていることから、第51号土壙墓と前後して埋葬された可能性が考えられる。



第380図 第52号土壙墓実測図

第53号土壙墓 4区SK-78（第381図）

位置 調査区北部のE12j0区で、第33号土壙墓の北西側4mに位置している。

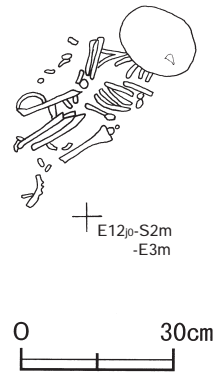
確認状況 表砂を9m除去後、第34号建物跡の上層0.9mの標高5.3mで、人骨の頭部を確認した。掘り込みの有無は確認できなかった。

埋葬の状況 北東頭位仰臥屈葬で埋葬されていた。両腕は、体前面に置かれていた。

性別と年齢 性別不明 幼児後半（5～6歳）

遺骸の特徴 ほぼ全身骨格が確認され、残存状態が良好である。歯は乳歯で、乳切歯から第2乳臼歯まで萌出している。第1大白歯が歯槽に確認でき、萌出直前である。

所見 副葬品が確認されなかったため、埋葬の時期は不明である。第34号建物跡構築後の埋葬である。



第381図 第53号土壙墓実測図

第54号土壙墓 4区SK-82（第382図）

位置 調査区北部のF12c7区で、第59号土壙墓の南側3mに位置している。

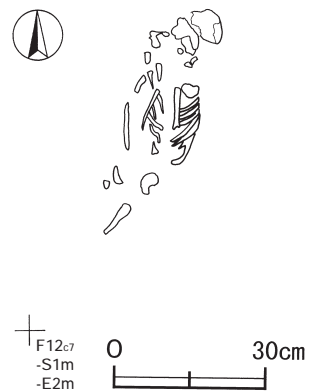
確認状況 表砂を9.3m除去後、第32号建物跡の下層0.8mの標高4.9mで、人骨の頭部を確認した。掘り込みの有無は確認できなかった。

埋葬の状況 北頭位西面右側臥屈葬で埋葬されていた。

性別と年齢 性別不明 乳児（1歳前後）

遺骸の特徴 ほぼ全身骨格が確認された。歯は乳歯で、乳切歯が萌出している。乳犬歯と第1乳臼歯が萌出始めである。

所見 副葬品が確認されなかったため、埋葬の時期は不明である。第32号建物跡構築前に埋葬されている。第59号土壙墓と近接し、0.3m高い位置で確認されていることから、第59号土壙墓と前後して埋葬された可能性が考えられる。

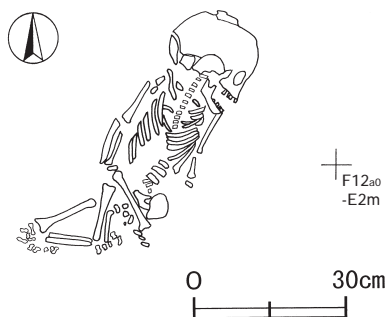


第382図 第54号土壙墓実測図

第55号土壌墓 4区SK-83 (第383図)

位置 調査区北部のE12j0区で、第57号土壌墓の東側6mに位置している。

確認状況 表砂を9.5m除去後、第32号建物跡の下層0.9mの標高4.8mで、人骨の頭部を確認した。掘り込みの有無は確認できなかった。



第383図 第55号土壌墓実測図

埋葬の状況 北東頭位仰臥屈葬で埋葬されていた。顔は南東面を向いており、両腕は体側に添えられていた。

性別と年齢 性別不明 幼児(5歳頃)

遺骸の特徴 ほぼ全身骨格が確認され、残存状態は良好である。歯は乳歯で、乳切歯から第2乳臼歯まで萌出している。第1大臼歯は歯槽に確認でき、未萌出である。

所見 副葬品が確認されなかったため、埋葬の時期は不明である。第32号建物跡構築前に埋葬されている。

第56号土壌墓 4区SK-84 (第384図)

位置 調査区北部のF12a8区で、第57号土壌墓の西側0.5mに位置している。

確認状況 表砂を9.2m除去後、第32号建物跡の下層0.8mの標高4.9mで、人骨の頭部を確認した。掘り込みの有無は確認できなかった。

埋葬の状況 北頭位仰臥屈葬で、第57号土壌墓の人骨と並列して埋葬されていた。



第384図 第56・57号土壌墓実測図

遺物出土状況 土師質土器片2点(内耳鍋)、土師器片1点(甕)、礫4点が人骨を確認した段階で人骨周辺から散在した状態で出土している。出土遺物は細片のため図示できなかった。

性別と年齢 女性 熟年

遺骸の特徴 四肢骨がほぼ確認された。頭蓋骨が崩れており、上顎と下顎の形を確認することはできなかった。手足の骨が華奢であり、鎖骨も細く小さい。骨盤の大坐骨切痕が鈍角である。歯は永久歯で、26本確認できた。内訳は、切歯7本、犬歯4本、小白歯7本、大臼歯8本である。

所見 副葬品が確認されなかったため、埋葬の時期は不明である。第57号土壌墓の人骨と近接し、0.1m高い位置で確認されたことから、第57号土壌墓と前後して埋葬された可能性が考えられる。出土土器は細片であり、埋葬時の混入と考えられる。

第57号土壌墓 4区SK-85 (第384図)

位置 調査区北部のF12a9区で、第56号土壌墓の東側0.5mに位置している。

確認状況 表砂を9.5m除去後、第32号建物跡の下層0.9mの標高4.8mで人骨の頭部を確認した。掘り込みの有無は確認できなかった。

埋葬の状況 北頭位仰臥屈葬で埋葬され、第56号土壙墓の人骨と並列していた。

遺物出土状況 土師質土器片2点(内耳鍋)、礫2点が人骨確認の段階で人骨周辺に散在した状態で出土している。出土遺物は細片のため図示できなかった。

性別と年齢 性別不明 乳児(生後3ヶ月頃)

遺骸の特徴 ほぼ全身骨格が確認された。頭蓋骨の縫合が弱く、歯は乳切歯の歯冠1本と乳臼歯の歯冠1本が残存していた。

所見 副葬品が確認されなかったため、埋葬の時期は不明である。第56号土壙墓の人骨と近接し、0.1m低い位置で確認されていたことから、第56号土壙墓と前後して埋葬された可能性が考えられる。出土土器は細片であり、埋葬時の混入と考えられる。

第58号土壙墓 4区SK-86(第385図)

位置 調査区北部のF12a8区で、第69号土壙墓の東側3mに位置している。

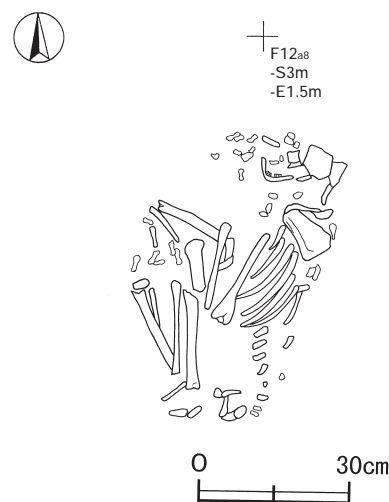
確認状況 表砂を9.3m除去後、第32号建物跡の下層1.1mの標高4.7mで、人骨の右脛骨を確認した。掘り込みの有無は確認できなかった。

埋葬の状況 北東頭位西面右側臥屈葬で埋葬されていた。

性別と年齢 男性 熟年

遺骸の特徴 頭蓋骨の破片、上顎の一部と下顎、四肢骨、体幹骨が残存していた。四肢骨は腐朽が進んでおり、計測が困難であった。上腕骨、大腿骨、脛骨が太く、四肢骨が頑強である。歯は永久歯で、下顎左側第3大白歯が萌出している。上顎左側第2・3大白歯は、生前に脱落しており、すべての歯の磨耗が著しい。

所見 副葬品が確認されなかったため、埋葬の時期は不明である。第69号土壙墓と近接し、0.2m低い位置で確認されており、第69号土壙墓と前後して埋葬された可能性が考えられる。第32号建物跡構築前に埋葬されている。

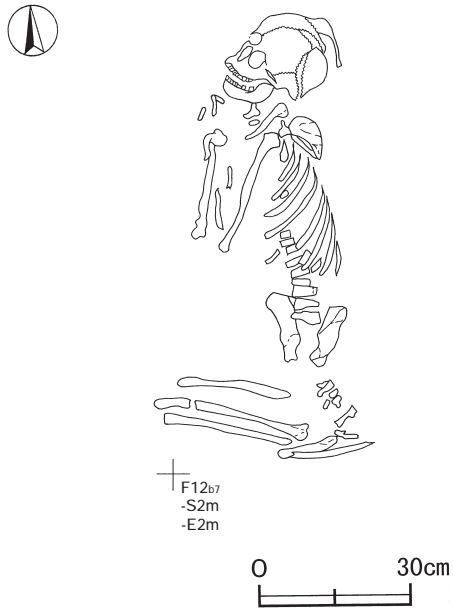


第385図 第58号土壙墓実測図

第59号土壙墓 4区SK-87(第386・387図)

位置 調査区北部のF12b7区で、第54号土壙墓の北側3mに位置している。

確認状況 表砂を9.5m除去後、第32号建物跡の下層1.1mの標高4.6mで、人骨の頭部を確認した。掘り込みの有無は確認できなかった。



埋葬の状況 北頭位西面右側臥屈葬で、両腕を体前面で合わせるように埋葬されていた。

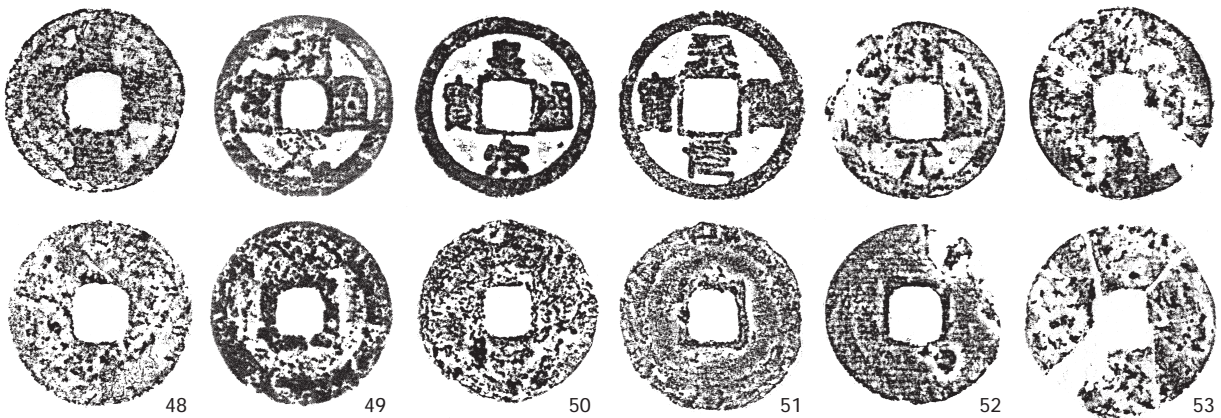
遺物出土状況 古銭6枚が人骨の西側1mから出土している。

性別と年齢 男性 熟年

遺骸の特徴 ほぼ全身骨格が残存しており、四肢骨は細かった。骨盤の大坐骨切痕が鋭角である。歯は永久歯で、下顎左側の第3大臼歯は生前に脱落している。下顎左側の第2大臼歯は、う歯である。

所見 第32号建物跡構築前に埋葬されている。第54号土壙墓と近接し、0.3m高い位置で確認されていることから、第54号土壙墓と前後して埋葬された可能性が考えられる。

第386図 第59号土壙墓実測図



第387図 第59号土壙墓出土遺物実測図 [古銭は原寸大]

第59号土壙墓出土遺物観察表 (第387図)

番号	銭名	径	孔径	厚さ	重さ	初铸年	材質	特徴	出土位置	備考
48	□□□□	2.48	0.75	0.15	4.00	—	銅	判読不能, 星形孔, 模铸	人骨周辺	
49	開元通寶	2.40	0.65	0.10	2.68	621	銅	真書	人骨周辺	
50	皇宋通寶	2.46	0.61	0.13	3.56	1038	銅	真書	人骨周辺	
51	天聖元寶	2.51	0.75	0.11	3.22	1023	銅	篆書	人骨周辺	
52	開元通寶	2.43	0.71	0.10	(2.24)	621	銅	真書, 欠け	人骨周辺	
53	□元□□	2.40	0.62	0.11	(1.83)	—	銅	判読不能, 欠け	人骨周辺	

第60号土壙墓 4区SK-88 (第388図)

位置 調査区北部のE13e1区で、第61号土壙墓の北側1mに位置している。

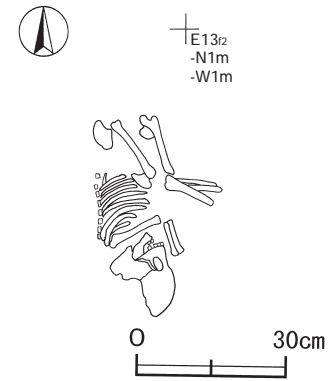
確認状況 表砂を8m除去後、第32号建物跡の下層1.4mの標高4.2mで、人骨の左脛骨を確認した。掘り込みの有無は確認できなかった。

埋葬の状況 南頭位東面右側臥屈葬で埋葬されていた。

性別と年齢 性別不明 幼児（5歳頃）

遺骸の特徴 ほぼ全身骨格が確認された。歯は乳歯で、乳切歯から第2乳臼歯まで萌出している。上顎下顎とも左右の第1大臼歯が歯槽に確認でき、未萌出である。

所見 第32号建物跡構築前に埋葬されている。第61号土壙墓と近接し、標高も同じであることから、第61号土壙墓と前後して埋葬された可能性が考えられる。



第388図 第60号土壙墓実測図

第61号土壙墓 4区SK-89 (第389図)

位置 調査区北部のE13f1区で、第60号土壙墓の南側1mに位置している。

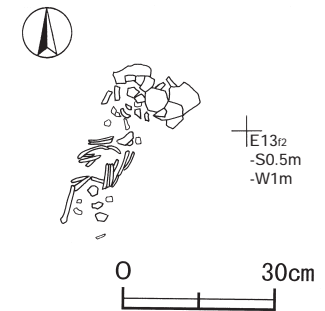
確認状況 表砂を8m除去後、第32号建物跡の下層1.4mの標高4.2mで、人骨の頭部を確認した。掘り込みの有無は確認できなかった。

埋葬の状況 北東頭位西面右側臥屈葬で埋葬されていた。

性別と年齢 性別不明 乳児（1～2歳）

遺骸の特徴 頭蓋骨の破片、肋骨、四肢骨の一部が残存していた。歯は乳歯で、乳切歯から第1乳臼歯まで萌出しており、第2大臼歯は萌出始めである。

所見 第32号建物跡構築前に埋葬されている。第60号土壙墓と近接し、標高も同じであることから、第60号土壙墓と前後して埋葬された可能性が考えられる。



第389図 第61号土壙墓実測図

第62号土壙墓 4区SK-90 (第390図)

位置 調査区北部のE13f1区で、第61号土壙墓の西側1mに位置している。

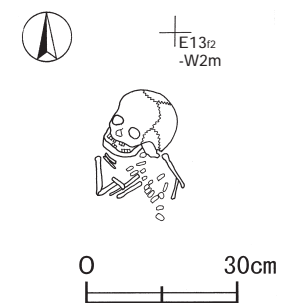
確認状況 表砂を8m除去後、標高4.2mで人骨を確認した。掘り込みの有無は確認できなかった。

埋葬の状況 北頭位仰臥屈葬で埋葬されていた。下肢骨は上肢骨よりも低い位置に埋葬されていた。

性別と年齢 性別不明 幼児（4歳頃）

遺骸の特徴 ほぼ全身骨格が確認された。腐朽が進んでおり、左大腿骨の長さだけ計測できた。歯は乳歯で、下顎左右の第2乳臼歯まで萌出している。上顎下顎ともに左右の第2大臼歯が歯槽に確認でき、未萌出である。

所見 第61号土壙墓と近接し、標高も同じであることから、第61号土壙墓と前後して埋葬された可能性が考えられる。



第390図 第62号土壙墓実測図

第63号土壌墓 4区SK-91 (第391図)

位置 調査区北部のE13h2区で、第45号土壌墓の南側5mに位置している。



第391図 第63号土壌墓
実測図

確認状況 表砂を8.1m除去後、標高5.0mで人骨の頭部を確認した。掘り込みの有無は確認できなかった。

埋葬の状況 北頭位で埋葬されており、顔と体は西側を向いていた。

性別と年齢 性別不明 幼児(4歳頃)

遺骸の特徴 頭蓋骨の破片と歯、上肢骨だけが残存していた。歯は乳歯で、上顎下顎ともに乳切歯から第2乳臼歯まで萌出している。上顎右側の切歯2本と犬歯、上顎下顎ともに左右の第1大臼歯が歯槽に確認でき、それぞれ未萌出である。

所見 副葬品が確認されなかったため、埋葬の時期は不明である。

第64号土壌墓 4区SK-92

位置 調査区北部のF12e7区で、第54号土壌墓の南側8mに位置している。

確認状況 表砂を8.9m除去後、標高4.5mで人骨を確認した。掘り込みの有無は確認できなかった。

埋葬の状況 細く短い骨が、一箇所にまとまって出土した。

性別と年齢 性別不明 新生児

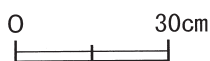
遺骸の特徴 ほとんどの骨が崩れていて部位の判別が不可能であった。歯は乳歯で、乳切歯の歯冠まで形成されたものが2本、乳臼歯の歯冠上部まで形成されたものが1本確認できた。

所見 副葬品が確認されなかったため、埋葬の時期は不明である。

第65号土壌墓 4区SK-96 (第392図)

位置 調査区北部のE13e2区で、第70号土壌墓の北東側6mに位置している。

確認状況 表砂を8.7m除去後、第31号建物跡の下層2.2mの標高3.4mで、人骨の頭部を確認した。掘り込みの有無は確認できなかった。



第392図 第65号土壌墓
実測図

埋葬の状況 北頭位西面右側臥屈葬で埋葬されていた。

性別と年齢 性別不明 新生児

遺骸の特徴 ほぼ全身骨格が確認され、残存状態は良好である。歯は乳歯で、上顎は左右とも第1乳切歯から第2乳臼歯まで、下顎は第1乳切歯から第1乳臼歯まで確認された。すべての歯が未萌出である。

所見 副葬品が確認されなかったため、埋葬の時期は不明である。第31号建物跡構築前の埋葬である。第70号土壌墓より0.3m低い位置に埋葬されている。

第66号土壙墓 4区SK-98 (第393図)

位置 調査区北部のF13a1区で、第33号土壙墓の南西側1mに位置している。

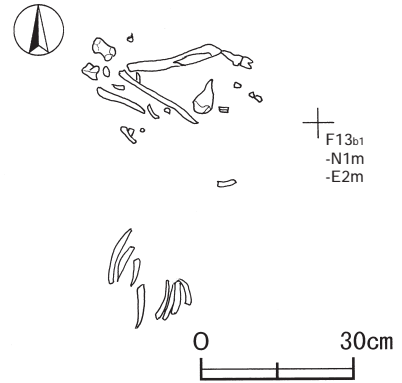
確認状況 表砂を9.7m除去後、標高5mで人骨の右大腿骨を確認した。表砂除去の際にほとんどの骨が損傷を受けた。掘り込みの有無は確認できなかった。

埋葬の状況 下肢骨が北側から、肋骨と上腕骨が南側から出土したので、南頭位の埋葬と推測される。

性別と年齢 性別不明 成人

遺骸の特徴 右尺骨を計測できた以外は、ほとんどの骨が崩れており、頭蓋骨も原形をとどめていない。歯は、大白歯1本が確認され、う蝕のため歯根だけが残存している。

所見 副葬品が確認されなかったので、埋葬の時期は不明である。第33号土壙墓と近接し、0.5m低い位置で確認されていることから、第33号土壙墓と前後して埋葬された可能性が考えられる。



第393図 第66号土壙墓実測図

第67号土壙墓 4区SK-100 (第394図)

位置 調査区北部のF12a6区で、第50号土壙墓の北東側3mに位置している。

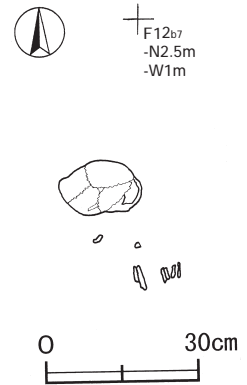
確認状況 表砂を7.5m除去後、標高5.5mで人骨の頭部を確認した。掘り込みの有無は確認できなかった。

埋葬の状況 頭蓋骨が北側から、下肢骨の一部が南側から出土したので、北頭位での埋葬と推測される。

性別と年齢 性別不明 乳児(生後3~4ヶ月)

遺骸の特徴 頭蓋骨と大腿骨の一部が残存していた。歯は乳歯で、乳切歯が萌出直前であり、乳犬歯と乳臼歯は歯冠だけが形成されている。

所見 副葬品が確認されなかったので、埋葬の時期は不明である。第50号土壙墓と近接し、0.2m高い位置で確認されたことから、第50号土壙墓と前後して埋葬された可能性が考えられる。



第394図 第67号土壙墓実測図

第68号土壙墓 4区SK-524 (第395図)

位置 調査区北部のE12j7区で、第72号土壙墓の北西側3mに位置している。

確認状況 表砂を8.3m除去後、第32号建物跡の下層1mの標高4.7mで人骨の頭部を確認した。掘り込みの有無は確認できなかった。

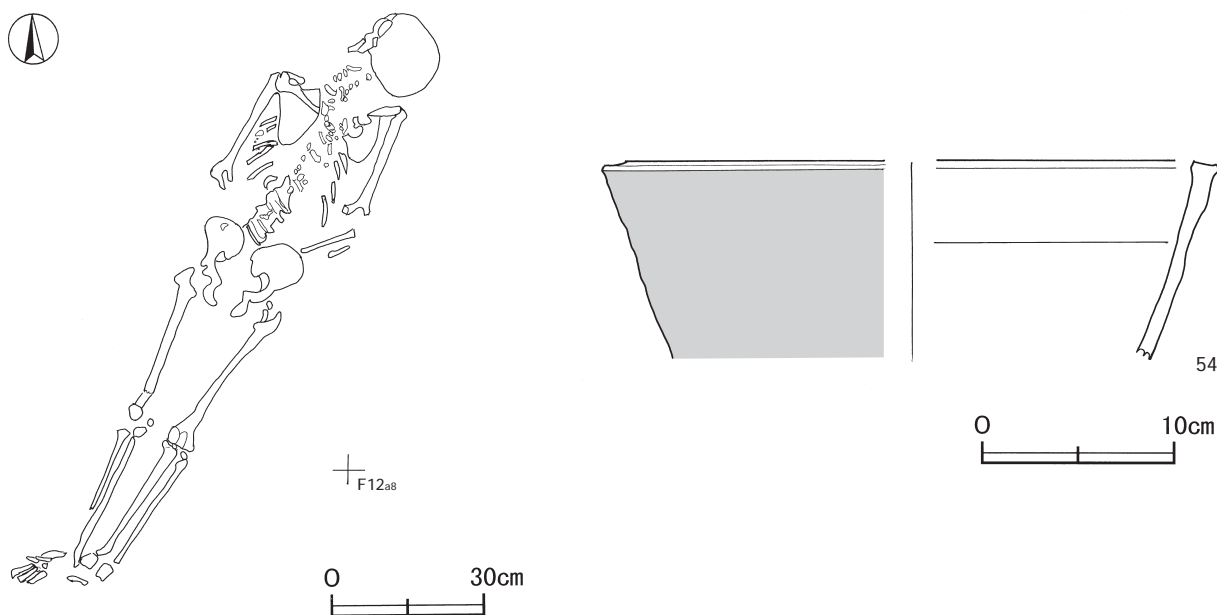
埋葬の状況 北東頭位俯臥伸展葬で埋葬されていた。

遺物出土状況 土師質土器片4点(内耳鍋)、陶器片1点(皿)が人骨を確認した段階で人骨周辺から散在して出土している。

性別と年齢 男性 熟年

遺骸の特徴 ほぼ全身骨格が確認され、残存状態は良好である。腕や指が太く、乳様突起は小さい。眼窩上隆起と外後頭隆起が強く、骨盤の大坐骨切痕が鋭角である。歯は永久歯で、下顎左側は中切歯から第3大臼歯まで萌出している。上顎左側の第2小臼歯と第1大臼歯は生前に脱落し、歯槽骨の閉鎖がみられる。

所見 出土土器は埋葬時の混入と考えられ、副葬品が確認されなかったため、埋葬の時期は不明である。第72号土壙墓に近接し、0.1m高い位置で確認されていることから、第72号土壙墓と前後して埋葬された可能性が考えられる。第32号建物跡構築前の埋葬である。



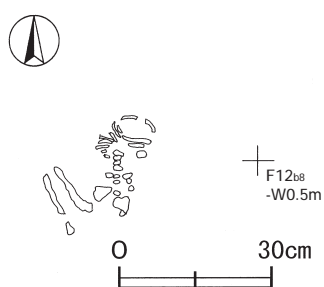
第395図 第68号土壙墓・出土遺物実測図

第68号土壙墓出土遺物観察表（第395図）

番号	器形	器質	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
54	内耳鍋	土師質土器	[32.6]	(10.5)	—	砂粒・雲母	にぶい赤褐	普通	外面煤付着	覆土中	5%

第69号土壙墓 4区S K-102（第396図）

位置 調査区北部のF12b7区で、第58号土壙墓の西側3mに位置している。



第396図 第69号土壙墓
実測図

確認状況 表砂を9.2m除去後、第32号建物跡の下層0.9mの標高4.9mで、人骨の左大腿骨を確認した。掘り込みの有無は確認できなかった。

埋葬の状況 北頭位西面右側臥屈葬で埋葬されていた。

性別と年齢 性別不明 幼児

遺骸の特徴 頭蓋骨を除く、上肢骨と下肢骨が残存していた。腐朽しており、計測は困難であった。歯は確認できなかった。

所見 副葬品が確認されなかったため、埋葬の時期は不明である。第58号土壙墓と近接し、0.2m 高い位置で確認されていることから、第58号土壙墓と前後して埋葬された可能性が考えられる。第32号建物跡構築前の埋葬である。

第70号土壙墓 4区S K-104 (第397図)

位置 調査区北部のE13f1区で、第65号土壙墓の南西側6 mに位置している。

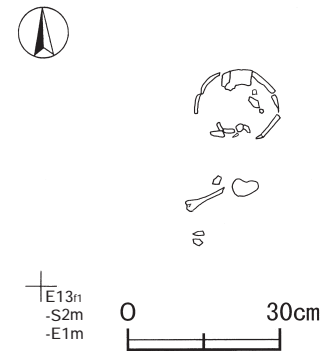
確認状況 表砂を8.6m除去後、標高3.7mで人骨を確認した。掘り込みの有無は確認できなかった。

埋葬の状況 頭蓋骨が北側から、上肢骨の一部が南側から出土したので、北頭位の埋葬と推測される。

性別と年齢 性別不明 幼児(4~5歳)

遺骸の特徴 頭蓋骨と上肢骨の一部が残存している。歯は乳歯で、上顎左右の第1乳切歯から第2乳臼歯まで萌出している。第1大臼歯が上顎に確認でき、その部分の歯槽骨が開口している。上顎左右の第1・2乳切歯は、う歯である。

所見 副葬品が確認されなかったため、埋葬の時期は不明である。第65号土壙墓より0.3m高い位置に埋葬されている。



第397図 第70号土壙墓
実測図

第71号土壙墓 4区S K-107 (第398図)

位置 調査区北部のF12a8区で、第72号土壙墓の北側1 mに位置している。

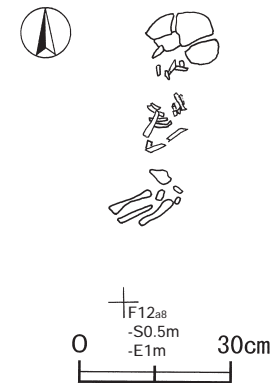
確認状況 表砂を9.4m除去後、第32号建物跡の下層1.1mの標高4.6mで、人骨の頭部を確認した。掘り込みの有無は確認できなかった。

埋葬の状況 北頭位西面右側臥屈葬で埋葬されていた。

性別と年齢 性別不明 乳児(6~9ヶ月)

遺骸の特徴 頭蓋骨は縫合が弱く、歯は乳歯である。上顎下顎とも第1・2乳切歯が萌出途中であり、乳犬歯と第1乳臼歯は歯冠が形成されている。

所見 副葬品が確認されなかったため、埋葬の時期は不明である。第72号土壙墓と近接し、同じ標高で確認されていることから、第72号土壙墓と前後して埋葬された可能性が考えられる。



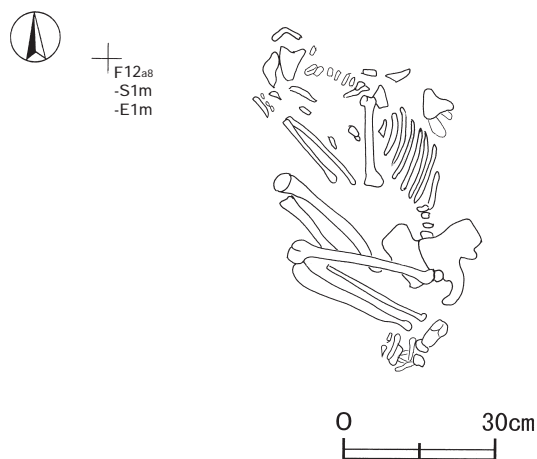
第398図 第71号土壙墓
実測図

第72号土壙墓 4区S K-108 (第399図)

位置 調査区北部のF12a8区で、第71号土壙墓の南側1 mに位置している。

確認状況 表砂を9.5m除去後、第32号建物跡の下層1.1mの標高4.6mで、人骨の頭部を確認した。掘り込みの有無は確認できなかった。表砂除去の際に頭部が損傷を受けた。

埋葬の状況 北西頭位西面右側臥屈葬で埋葬されていた。



第399図 第72号土壙墓実測図

性別と年齢 男性 熟年～老年

遺骸の特徴 ほぼ全身骨格が確認された。四肢骨は太く、側頭骨の乳様突起が小さい。歯は永久歯で、上顎左側は第1～3大臼歯が生前に脱落し、歯槽骨が閉鎖している。下顎左側の第2小臼歯は、う蝕のため歯根だけが残存していた。

所見 副葬品が確認されなかったので、埋葬の時期は不明である。第71号土壙墓と近接し、同じ標高で確認されていることから、第71号土壙墓と前後して埋葬された可能性が考えられる。

第73号土壙墓 4区S K-135

位置 調査区北部のE12h0区で、第108号土壙墓の南側4mに位置している。

確認状況 表砂を8.9m除去後、標高3.4mで人骨を確認した。掘り込みの有無は確認できなかった。

埋葬の状況 細く短い骨が、一箇所にまとまって出土した。

性別と年齢 性別不明 死産児カ

遺骸の特徴 頭蓋骨は薄く小さい。最長の骨は、残存している部分で3.3cmである。歯は、確認されなかった。

所見 副葬品が確認されなかったので、埋葬の時期は不明である。骨格の様子から、死産児あるいは流産した胎児と推測される。

第74号土壙墓 4区S K-129

位置 調査区北部のE12i5区で、第76号土壙墓の南西側10mに位置している。

確認状況 表砂を7m除去後、標高3.9mで人骨を確認した。掘り込みの有無は確認できなかった。表砂除去の際にほとんどの骨が動いてしまい、残存している骨で位置と標高を記録した。

性別と年齢 性別不明 乳児(1～1歳半)

遺骸の特徴 頭蓋骨は腐朽していた。歯は乳歯で第1乳臼歯が萌出しており、第2大臼歯が萌出直後である。

所見 副葬品が確認されなかったので、埋葬の時期は不明である。第76号土壙墓より0.1m高い位置で確認された。

第75号土壙墓 4区S K-130

位置 調査区北部のE12g6区で、第76号土壙墓の北側1mに位置している。

確認状況 表砂を6.7m除去後、標高3.8mで人骨を確認した。掘り込みの有無は確認できなかった。

埋葬の状況 細く短い骨が、一箇所にまとまって出土した。

性別と年齢 性別不明 新生児

遺骸の特徴 上腕骨と推測される骨1本が確認できた。その他の骨格は、崩れていて記録できなかった。歯は乳切歯1本と乳臼歯3本が残存しており、未萌出である。

所見 副葬品が確認されなかったため、埋葬の時期は不明である。第76号土壌墓と近接し、標高も同じであることから、第76号土壌墓と前後して埋葬された可能性が考えられる。

第76号土壌墓 4区S K-134 (第400図)

位置 調査区北部のE12g6区で、第75号土壌墓の南側1mに位置している。

確認状況 表砂を6.7m除去後、標高3.8mで人骨を確認した。掘り込みの有無は確認できなかった。

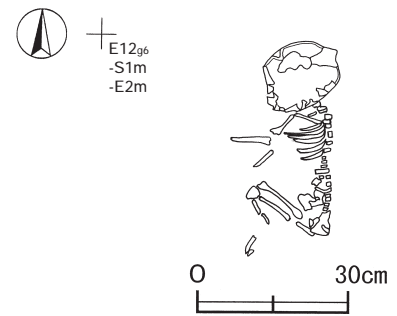
埋葬の状況 北頭位西面右側臥屈葬で埋葬されていた。

性別と年齢 性別不明 幼児(1~1歳半)

遺骸の特徴 ほぼ全身骨格が確認された。歯は乳歯で、第1乳切歯から第1乳臼歯まで萌出しており、第2乳臼歯は未萌出である。

所見 副葬品が確認されなかったため、埋葬の時期は不明である。

第75号土壌墓と近接し、標高も同じであることから、第75号土壌墓と前後して埋葬された可能性が考えられる。



第400図 第76号土壌墓実測図

第77号土壌墓 4区S K-335

位置 調査区北部のC13e4区で、第79号土壌墓の東側4mに位置している。

確認状況 表砂を5m除去後、標高4.8mで人骨を確認した。掘り込みの有無は確認できなかった。

埋葬の状況 細く小さな骨が折りたたまれたように埋葬されていた。

性別と年齢 性別不明 新生児

遺骸の特徴 頭蓋骨が薄く、縫合線は接合していない。四肢骨は、ほぼ残存していた。下顎が小さく、歯は乳歯で乳切歯の歯冠まで形成されていた。

所見 副葬品が確認されなかったため、埋葬の時期は不明である。第79号土壌墓より0.5m高い位置で確認された。

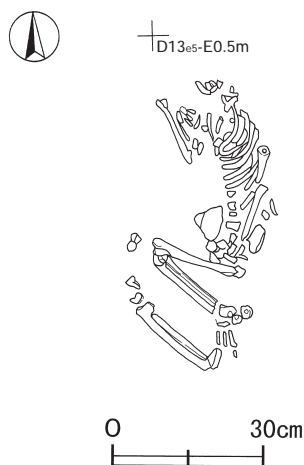
第78号土壌墓 4区S K-524 (第401図)

位置 調査区北部のD13e5区で、第88号土壌墓の北側4mに位置している。

確認状況 表砂を7.9m除去後、第18号建物跡の下層0.6mの標高4.4mで、人骨を確認した。掘り込みの有無は確認できなかった。表砂除去の際、頭蓋骨が損傷を受けた。

埋葬の状況 肋骨や上肢骨が北側から、下肢骨が南側から出土したため、北頭位右側臥屈葬の埋葬と推測される。

性別と年齢 性別不明 少年(8歳前後)



第401図 第78号土壌墓実測図

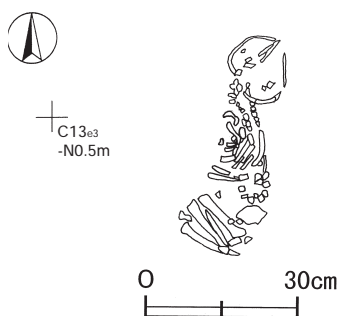
遺骸の特徴 頭蓋骨を除くほぼ全身骨格が確認された。骨は腐朽していた。歯は43本残存しており、乳歯と永久歯が生え変わる混合歯列である。乳歯は乳中切歯から第2乳臼歯まで、永久歯は中切歯から第2大臼歯まで確認された。乳歯はすべて萌出しており、永久歯は上顎の第1大臼歯が萌出し、第2大臼歯は未萌出である。

所見 副葬品が確認されなかったため、埋葬の時期は不明である。第88号土壌墓と隣接し、0.2m 高い位置で確認されている。第18号建物跡構築前に埋葬されたと考えられる。

第79号土壌墓 4区S K-374 (第402図)

位置 調査区北部の C13d3区で、第84号土壌墓の北東側 4 m に位置している。

確認状況 表砂を4.6m 除去後、第17号建物跡の下層0.1m の標高4.3m で、人骨の頭部を確認した。掘り込みの有無は確認できなかった。



第402図 第79号土壌墓実測図

重複関係 第17号建物跡の床面の下層に埋葬されていた。

埋葬の状況 北頭位西面右側臥屈葬で埋葬されていた。

性別と年齢 性別不明 幼児 (1歳半頃)

遺骸の特徴 ほぼ全身骨格が確認された。残存状態は良好であり、しっかりとした骨格である。歯は乳歯で、上顎下顎とも第1乳切歯から第1乳臼歯まで萌出している。第2乳臼歯は歯槽に確認でき、未萌出である。

所見 副葬品が確認されなかったため、埋葬の時期は不明である。第17号建物跡の下層から確認されているが、本跡との関連は不明である。

第80号土壌墓 4区S K-379 (第403図)

位置 調査区北部の C13e1区で、第81号土壌墓の南側 2 m に位置している。

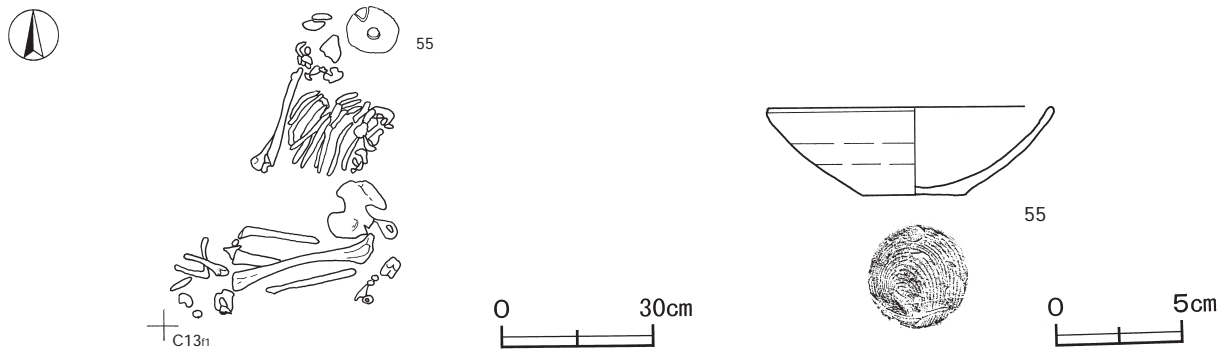
確認状況 表砂を5.4m 除去後、標高3.5m で人骨を確認した。掘り込みの有無は確認できなかった。

埋葬の状況 北頭位西面右側臥屈葬で埋葬されていた。

遺物出土状況 土師質土器片12点 (皿3, 内耳鍋9), 鉄製品2点 (釘) が人骨周辺から出土している。55は頭部付近から正位で出土している。

性別と年齢 女性 壮年 (20歳前後)

遺骸の特徴 ほぼ全身骨格が確認された。骨は腐朽していた。頭蓋骨が薄く、上腕骨は華奢である。歯は永久歯で、上顎下顎とも左右の中切歯から第2大臼歯まで萌出している。下顎左右の第3大臼歯は未萌出である。下顎右側第2小臼歯は生前脱落し、その部分の歯槽骨が閉鎖している。



第403図 第80号土壙墓・出土遺物実測図

所見 55は副葬品と考えられ、埋葬時期は15世紀代またはそれ以降と推測される。第81号土壙墓と近接し、0.1m 高い位置で確認されていることから、第81号土壙墓と前後して埋葬された可能性が考えられる。

第80号土壙墓出土遺物観察表（第403図）

番号	器形	器質	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
55	皿	土師質土器	11.4	3.5	4	砂粒・雲母	にぶい黄橙	普通	底部回転糸切り，内外面クロコナデ	頭部付近	100% PL42

第81号土壙墓 4区SK-380（第404図）

位置 調査区北部のC13e1区で、第80号土壙墓の北側2mに位置している。

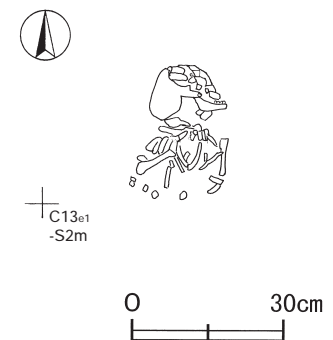
確認状況 表砂を5.5m除去後、標高3.4mで人骨を確認した。掘り込みの有無は確認できなかった。

埋葬の状況 北頭位北東面左側臥屈葬で埋葬されていた。下肢骨が骨盤付近に小さく曲げられて出土したことから、屈葬と考えられる。

性別と年齢 性別不明 乳児（1歳前後）

遺骸の特徴 ほぼ全身骨格が確認された。骨は腐朽していた。歯は乳歯で、乳切歯、乳犬歯、乳臼歯が確認できた。上顎下顎とも左右の第2乳臼歯が未萌出である。

所見 第80号土壙墓と近接し、0.1m低い位置で確認されていることから、第80号土壙墓と前後して埋葬された可能性が考えられる。



第404図 第81号土壙墓実測図

第82号土壙墓 4区SK-381（第405図）

位置 調査区北部のC13j4区で、第98号土壙墓の東側2mに位置している。

確認状況 表砂を5.8m除去後、標高5.2mで人骨を確認した。掘り込みの有無は確認できなかった。

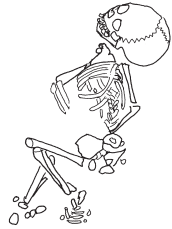
埋葬の状況 北東頭位北西面右俯臥屈葬で埋葬されていた。

性別と年齢 性別不明 幼児（4～5歳）

遺骸の特徴 ほぼ全身骨格が確認され、残存状態が良好である。歯は乳歯で、上顎下顎ともに左右の乳中切歯から第2乳臼歯まで萌出している。第1大臼歯の部分の歯槽骨が開いており、第1大臼歯は、未萌出である。



C13_d-S1m
-E1m

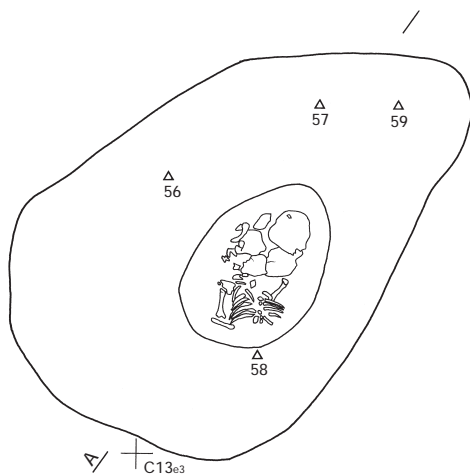


0 30cm

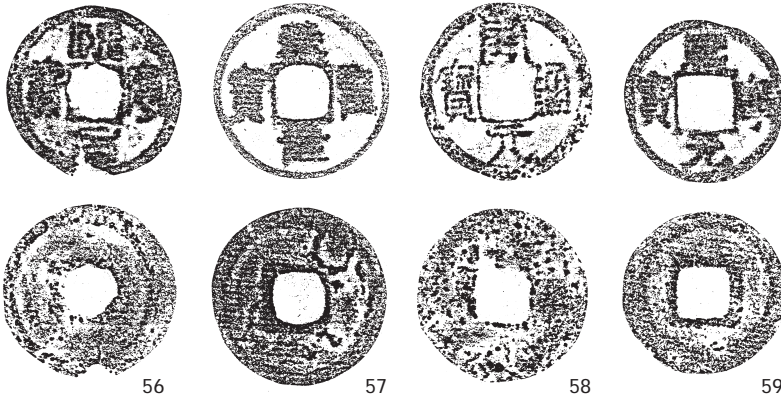
第405図 第82号土壙墓実測図

第83号土壙墓 4区SK-382 (第406図)

位置 調査区北部のC13d3区で、第79号土壙墓に近接している。



0 50cm



0 2cm

第406図 第83号土壙墓・出土遺物実測図

所見 副葬品が確認されなかったため、埋葬の時期は不明である。第98号土壙墓より1.8m高い位置で確認された。近隣の土壙墓は、標高3～4mで人骨が出土している。

確認状況 表砂を5m除去後、第17号建物跡の下層0.3mの標高4.1mで人骨を確認した。人骨よりも下位層で土壙墓の掘り込みを確認することができた。

規模と形状 長径1.04m、短径0.66mの楕円形で、深さは16cmである。

重複関係 第17号建物跡中央部の床面の下層で、さらに第79号土壙墓の0.4m低い位置に埋葬されていた。

埋葬の状況 北頭位で埋葬されていた。

覆土 人骨より下の覆土は、黒D層を主体とした埋葬時の埋め戻しである。

遺物出土状況 古銭4枚が人骨周辺から散在した状態で出土している。

性別と年齢 性別不明 新生児

遺骸の特徴 頭蓋骨と上肢骨、下肢骨の一部が残存している。歯は乳歯で、乳切歯4本、乳犬歯4本、乳臼歯6本が確認でき、すべて歯冠だけで歯根が形成されていない。

所見 第17号建物跡の下層から確認されているが、本跡との関連は不明である。第79号土壙墓の埋葬以前に埋葬されている。古銭は埋葬の前後に混入したものと考えられる。

第83号土壙墓出土遺物観察表（第406図）

番号	銭名	径	孔径	厚さ	重さ	初鑄年	材質	特徴	出土位置	備考
56	熙寧元寶	2.40	0.68	0.08	2.92	1068	銅	篆書，星形孔，欠け	人骨周辺	
57	天聖元寶	2.34	0.70	0.06	2.14	1023	銅	篆書	人骨周辺	
58	開元通寶	2.26	0.69	0.09	2.84	621	銅	真書	人骨周辺	
59	熙寧元寶	2.43	0.70	0.11	3.12	1068	銅	真書	人骨周辺	

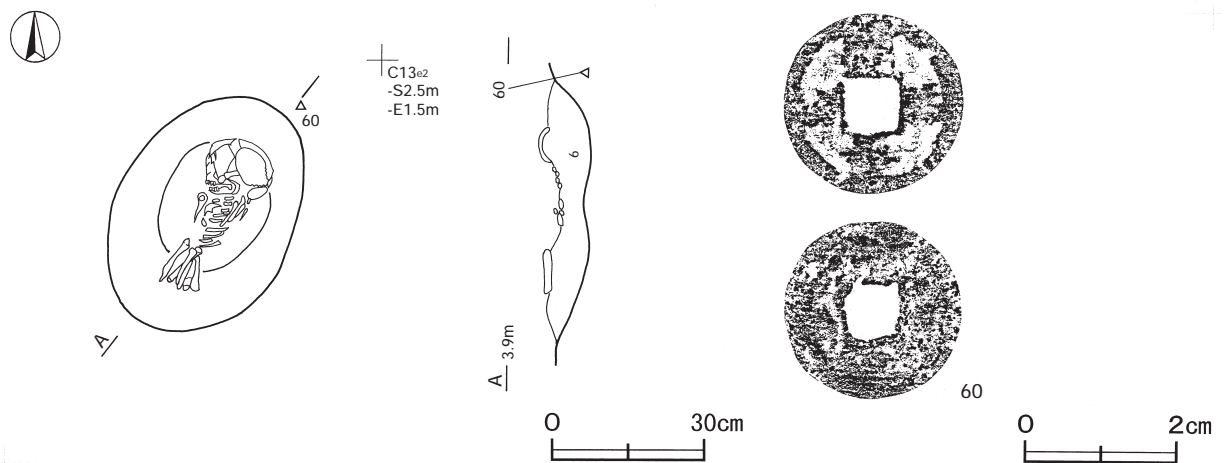
第84号土壙墓 4区SK-388（第407図）

位置 調査区北部のC13e2区で、第85号土壙墓の西側1mに位置している。

確認状況 表砂を5m除去後、第17号建物跡の下層0.5mの標高3.9mで人骨を確認した。人骨よりも下位層で土壙墓の掘り込みを確認することができた。

規模と形状 長径0.5m、短径0.35mの楕円形で、深さは10cmである。

重複関係 第17号建物跡の南西部で床面の下層に埋葬されていた。



第407図 第84号土壙墓・出土遺物実測図

埋葬の状況 北東頭位北西面右側臥屈葬で埋葬されていた。

覆土 人骨より下の覆土は、黒D層を主体とした埋葬時の埋め戻しである。

遺物出土状況 古銭1枚が頭部付近から出土している。

性別と年齢 性別不明 幼児（1～1歳半）

遺骸の特徴 ほぼ全身骨格が確認された。頭蓋骨の縫合は弱く、四肢骨も腐朽していた。歯は乳歯で、上顎下顎ともに乳中切歯から第1乳臼歯まで萌出しており、第2乳臼歯が萌出始めである。

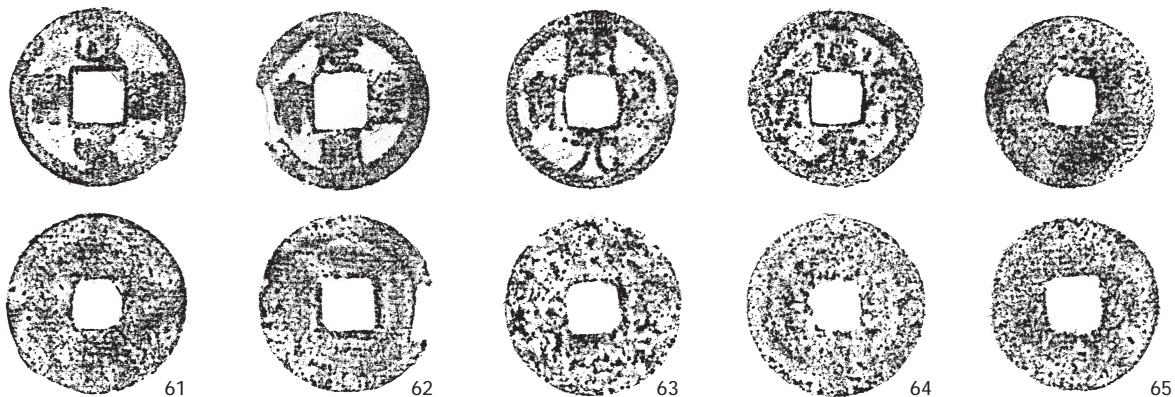
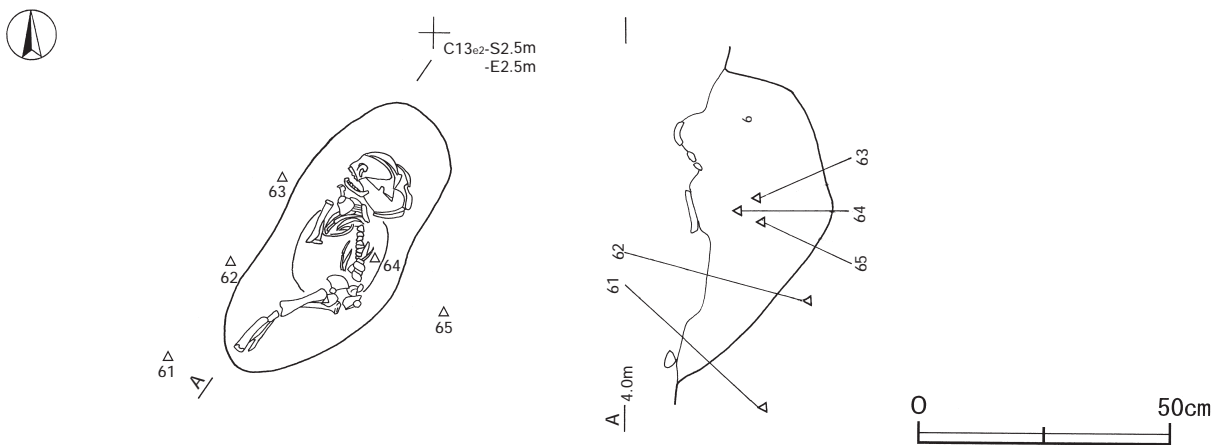
所見 第85号土壙墓と近接し、同じ標高で確認されていることから、第85号土壙墓と前後して埋葬された可能性が考えられる。古銭は埋葬の前後に混入したものと考えられる。第17号建物跡の下層から確認されているが、本跡との関連は不明である。離乳期に死亡したものと推測される。

第84号土壙墓出土遺物観察表（第407図）

番号	銭名	径	孔径	厚さ	重さ	初鑄年	材質	特徴	出土位置	備考
60	□□□□	2.38	0.7	0.08	2.46	—	銅	判読不能、模鑄	頭部付近	

第85号土壙墓 4区S K-389（第408図）

位置 調査区北部のC13e2区で、第84号土壙墓の東側1mに位置している。



第408図 第85号土壙墓・出土遺物実測図 [古銭は原寸大]

確認状況 表砂を5.1m除去後、第17号建物跡の下層0.5mの標高3.9mで人骨を確認した。人骨よりも下層で土壙墓の掘り込みを確認することができた。

規模と形状 長径0.62m、短径0.27mの楕円形で、深さは24cmである。

重複関係 第17号建物跡の南西部で床面の下層に埋葬されていた。

埋葬の状況 北東頭位北西面右側臥伸展葬で埋葬されていた。

覆土 人骨下の覆土は、黒D層を主体とした埋葬時の埋め戻しである。

遺物出土状況 古銭5枚が人骨周辺から散在した状態で出土している。

性別と年齢 性別不明 乳児（1歳前後）

遺骸の特徴 ほぼ全身骨格が確認され、残存状態は良好である。歯は乳歯で、上顎下顎ともに乳中切歯が萌出しており、乳犬歯は萌出始めである。第1乳臼歯は萌出直前で歯槽骨が開いている。

所見 判読できた古銭の中で、最新銭は61の政和通寶（初鑄年 1111）である。64は出土位置から埋葬に伴う副葬品としての性格が考えられ、それ以外は埋葬の前後に混入したものと考えられる。第84号土壙墓と近接し、同じ標高で確認されていることから、第84号土壙墓と前後して埋葬された可能性が考えられる。第17号建物跡の下層から確認されているが、本跡との関連は不明である。

第85号土壙墓出土遺物観察表（第408図）

番号	銭名	径	孔径	厚さ	重さ	初鑄年	材質	特徴	出土位置	備考
61	政和通寶	2.39	0.70	0.11	3.20	1111	銅	篆書	人骨周辺	
62	元豊通寶	2.38	0.70	0.09	2.82	1078	銅	篆書、欠け、模鑄	人骨周辺	
63	開元通寶	2.38	0.07	0.10	2.30	621	銅	真書	人骨周辺	
64	□元□寶	2.30	0.70	0.07	2.60	—	銅	判読不能、模鑄	人骨周辺	
65	—	2.25	0.70	0.07	2.50	—	銅	模鑄	人骨周辺	

第86号土壙墓 4区SK-390（第409図）

位置 調査区北部のC13e1区で、第80号土壙墓の北側1m、第81号土壙墓の南側1mに位置している。

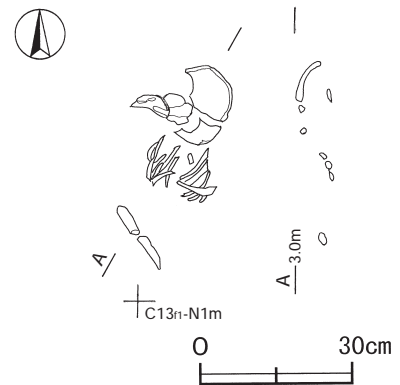
確認状況 表砂を6m除去後、標高3mで人骨を確認した。掘り込みの有無は確認できなかった。

埋葬の状況 北頭位で埋葬されていた。

性別と年齢 性別不明 幼児（1～1歳半）

遺骸の特徴 頭蓋骨破片と歯、上肢骨と下肢骨の一部が残存している。腐朽しており、計測は困難であった。歯は乳歯で、下顎右側の乳中切歯から第1乳臼歯まで萌出している。第2乳臼歯は、萌出始めである。

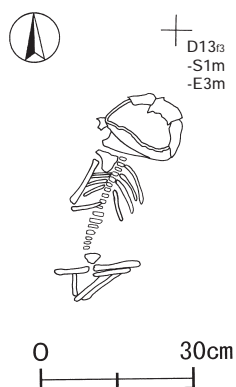
所見 副葬品が確認されなかったため、埋葬の時期は不明である。第80号土壙墓と第81号土壙墓に近接し、0.5m低い位置で確認されていることから、これらの土壙墓への埋葬は、前後して行われた可能性が考えられる。



第409図 第86号土壙墓実測図

第87号土壙墓 4区S K-400 (第410図)

位置 調査区北部のD13f3区で、第88号土壙墓の西側6 mに位置している。



第410図 第87号土壙墓
実測図

確認状況 表砂を13.6m除去後、第16号整地面の下層0.6mの標高4.1mで、人骨を確認した。掘り込みの有無は確認できなかった。

埋葬の状況 北頭位仰臥屈葬で埋葬されていた。

性別と年齢 性別不明 乳児(1歳未満)

遺骸の特徴 ほぼ全身骨格が確認された。頭蓋骨や四肢骨は腐朽しており、計測が困難であった。歯は乳歯で、上顎下顎とも乳切歯、乳犬歯、乳臼歯の歯冠が確認された。すべての歯の歯根が生育途中であり、萌出途中である。

所見 副葬品が確認されなかったため、埋葬の時期は不明である。第88号土壙墓より0.1m低い位置で確認されている。

第88号土壙墓 4区S K-401 (第411図)

位置 調査区北部のD13f5区で、第87号土壙墓の東側6 mに位置している。

確認状況 表砂を14.5m除去後、第16号整地面の下層0.6mの標高4.2mで、人骨を確認した。掘り込みの有無は確認できなかった。

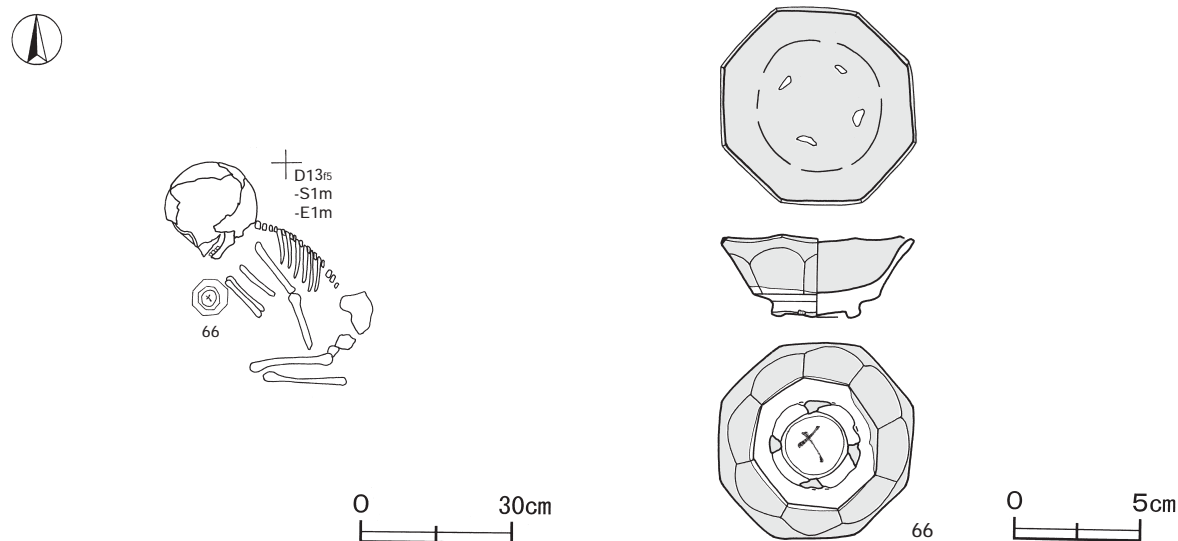
埋葬の状況 北西頭位南西面右側臥屈葬で埋葬されていた。

遺物出土状況 磁器1点(八角小坏)が右手付近から逆位で出土している。

性別と年齢 性別不明 幼児(4~5歳)

遺骸の特徴 ほぼ全身骨格が確認された。腐朽しており、計測は困難であった。歯は乳歯で、乳中切歯から第2乳臼歯まで萌出している。

所見 66は副葬品と考えられ、埋葬時期は15世紀後半以降である。



第411図 第88号土壙墓・出土遺物実測図

第88号土壙墓出土遺物観察表（第411図）

番号	器形	器質	口径	器高	底径	胎土・色調	絵付・釉薬	文様・特徴	産地・年代	出土位置	備考
66	八角小坏	磁器	7.8	3.2	3.6	灰・灰白	白磁	内外面施釉，底部ヘラ削り，高台内側墨書	明，15C代	右手付近	PL37

第89号土壙墓 4区SK-428（第412図）

位置 調査区北部のC13e5区で，第79号土壙墓の東側10mに位置している。

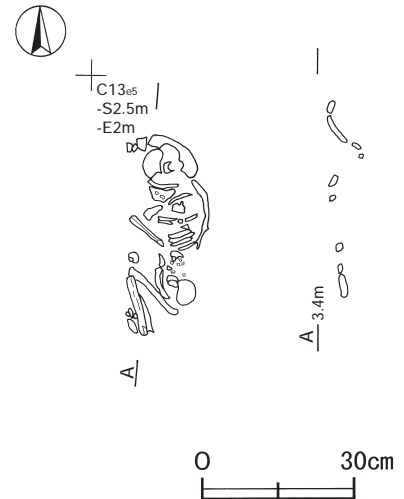
確認状況 表砂を6.5m除去後，標高3.4mで人骨の頭部を確認した。掘り込みの有無は確認できなかった。

埋葬の状況 北頭位西面右側臥屈葬で埋葬されていた。

性別と年齢 性別不明 少年（9歳頃）

遺骸の特徴 ほぼ全身骨格が確認された。腐朽しており，計測は困難であった。歯は，乳歯と永久歯の混合歯列である。上顎下顎ともに永久歯の中切歯と側切歯が萌出しており，第2大臼歯は萌出していない。

所見 副葬品が確認されなかったため，埋葬の時期は不明である。第79号土壙墓より1.1m低い位置で確認されている。



第412図 第89号土壙墓実測図

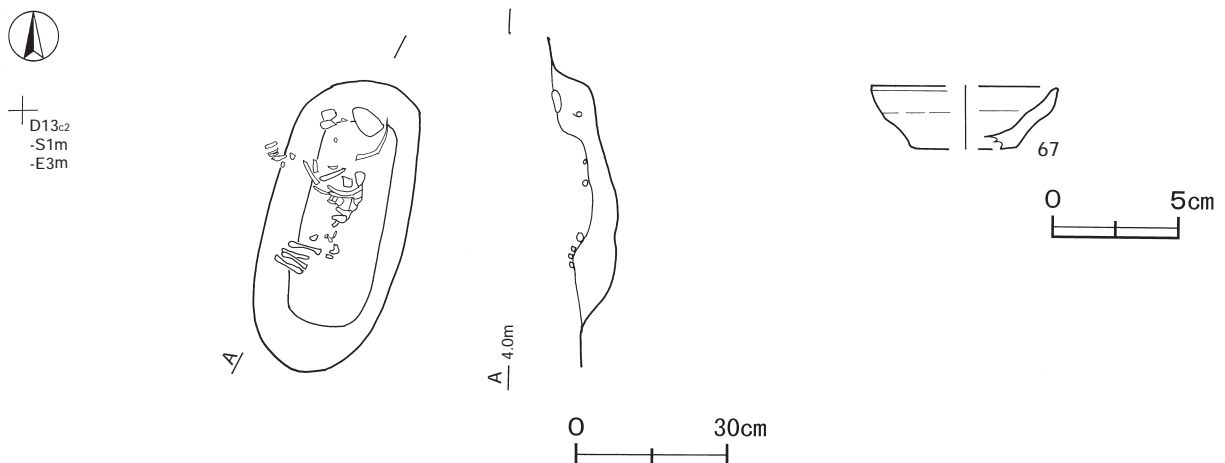
第90号土壙墓 4区SK-432（第413図）

位置 調査区北部のD13c2区で，第91号土壙墓の南東側3mに位置している。

確認状況 表砂を7.2m除去後，第19号建物跡の下層0.3mの標高3.9mで人骨を確認した。人骨よりも下層で，土壙墓の掘り込みを確認することができた。

規模と形状 長径0.59m，短径0.27mの楕円形で，深さは10cmである。

重複関係 第19号建物跡の南西部で床面の下層に埋葬されていた。



第413図 第90号土壙墓・出土遺物実測図

埋葬の状況 北東頭位北西面右側臥屈葬で埋葬されていた。

覆土 覆土は黒D層で、埋葬時の埋め戻しである。

遺物出土状況 土師質土器片30点（小皿24，内耳鍋6），砥石1点が覆土中から出土している。

性別と年齢 性別不明 乳児（1歳未満）

遺骸の特徴 ほぼ全身骨格が確認され、残存状態は良好である。頭蓋骨の縫合は未接合である。歯は乳歯で、19本残存していた。ほとんどの歯が歯冠まで形成された段階で、乳中切歯は萌出途中である。

所見 第19号建物跡の下層から確認されているが、本跡との関連は不明である。出土遺物はいずれも細片であり、埋葬時の混入と考えられる。

第90号土壙墓出土遺物観察表（第413図）

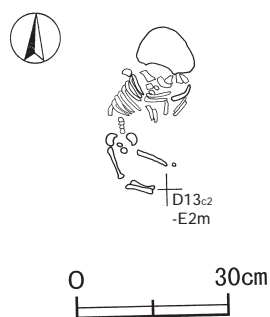
番号	器形	器質	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
67	小皿	土師質土器	[7.4]	2.4	[4.2]	砂粒・雲母	にぶい黄橙	普通	ロクロ成形	覆土中	35%

第91号土壙墓 4区SK-437（第414図）

位置 調査区北部のD13b2区で、第90号土壙墓の北西側3mに位置している。

確認状況 表砂を11m除去後、第19号建物跡の下層0.6mの標高3.6mで人骨を確認した。掘り込みの有無は確認できなかった。

重複関係 第19号建物跡の床面の下層に埋葬されていた。



埋葬の状況 北頭位東面左側臥伸展葬で埋葬されていた。

性別と年齢 性別不明 新生児

遺骸の特徴 ほぼ全身骨格が確認され、残存状態は良好である。頭蓋骨の縫合は未接合である。手足の骨が細く小さい。歯は乳歯で、乳切歯が歯冠だけでほとんど萌出していない状態である。

所見 副葬品が確認されなかったため、埋葬の時期は不明である。第19号建物跡構築前の埋葬と考えられる。

第414図 第91号土壙墓 実測図

第92号土壙墓 4区SK-438（第415図）

位置 調査区北部のD13e3区で、第87号土壙墓の北側2mに位置している。

確認状況 表砂を11.2m除去後、第16号整地面の下層1.2mの標高3.5mで人骨を確認した。掘り込みの有無は確認できなかった。

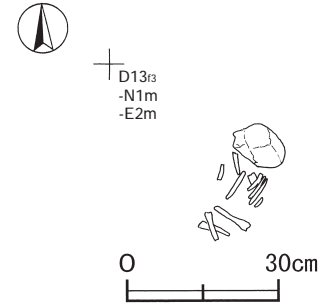
埋葬の状況 北東頭位北西面右側臥屈葬で埋葬されていた。

遺物出土状況 土師質土器片3点（小皿2，内耳鍋1）が、人骨確認の段階で人骨周辺に散在するように出土している。出土土器は細片のため図示できなかった。

性別と年齢 性別不明 幼児（1～1歳半）

遺骸の特徴 ほぼ全身骨格が確認された。腐朽しており、計測は困難であった。歯は乳歯で、乳中切歯から第1乳臼歯まで萌出し、第2乳臼歯は未萌出である。

所見 出土土器は細片で埋葬時の混入と考えられる。副葬品が確認されなかったことから、埋葬の時期は不明である。第87号土壙墓より0.6m低い位置で確認されており、第16号整地面構築前の埋葬と考えられる。



第415図 第92号土壙墓実測図

第93号土壙墓 4区S K-449（第416図）

位置 調査区北部のE13b3区で、第37号土壙墓の南東側0.2mに位置している。

確認状況 表砂を7.2m除去後、標高5.1mで人骨を確認した。掘り込みの有無は確認できなかった。

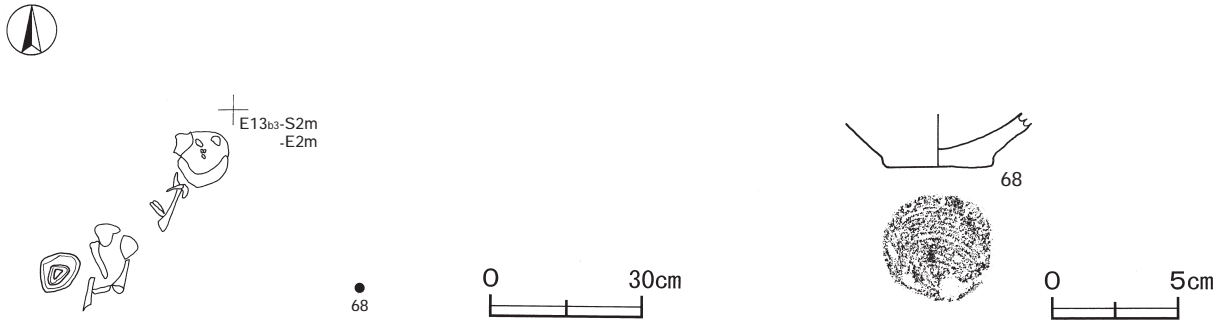
埋葬の状況 北東頭位で埋葬されていた。

遺物出土状況 土師質土器片15点（皿）が、人骨確認の段階で人骨周辺に散在するように出土している。また、ウバガイ、タマキガイ、マツカサガイが3枚重なって、内側を上に向けた状態で足元から出土している。

性別と年齢 性別不明 乳児（6ヶ月～1歳）

遺骸の特徴 頭蓋骨と四肢骨の一部が残存していた。頭蓋骨は薄く、縫合が弱かった。歯は乳歯で、16本確認された。乳中切歯が萌出始めであり、第2乳臼歯は未萌出である。

所見 第37号土壙墓と近接し、0.6m高い位置で確認されており、第37号土壙墓で埋葬が行われた後の墓である可能性が考えられる。貝は出土状況から副葬品と考えられる。68は細片であり埋葬時の混入と考えられる。



第416図 第93号土壙墓・出土遺物実測図

第93号土壙墓出土遺物観察表（第416図）

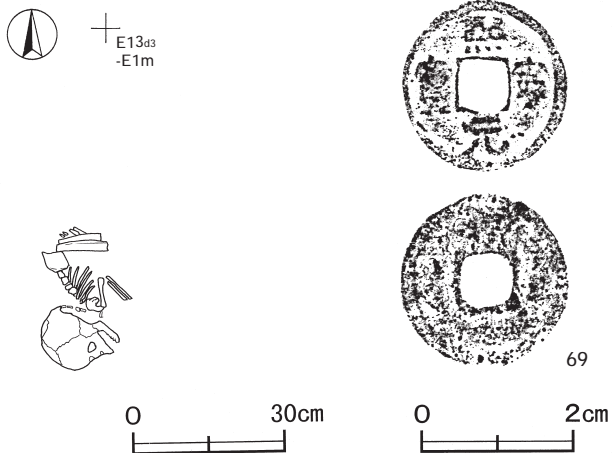
番号	器形	器質	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
68	小皿	土師質土器	—	(1.8)	4.2	砂粒・雲母	にぶい橙色	普通	底部回転糸切り	人骨周辺	40%

第94号土壙墓 4区S K-456（第417図）

位置 調査区北部のE13d3区で、第48号土壙墓の北東側3mに位置している。

確認状況 表砂を12.5m除去後、標高5.0mで人骨を確認した。掘り込みの有無は確認できなかった。

埋葬の状況 南頭位東面右側臥屈葬で埋葬されていた。



第417図 第94号土壙墓・出土遺物実測図

第94号土壙墓出土遺物観察表（第417図）

番号	銭名	径	孔径	厚さ	重さ	初鑄年	材質	特徴	出土位置	備考
69	熙寧元寶	2.25	0.7	0.07	2.5	1068	銅	真書	人骨周辺	

遺物出土状況 古銭1枚が人骨確認の段階で出土している。

性別と年齢 性別不明 乳児（1歳頃）

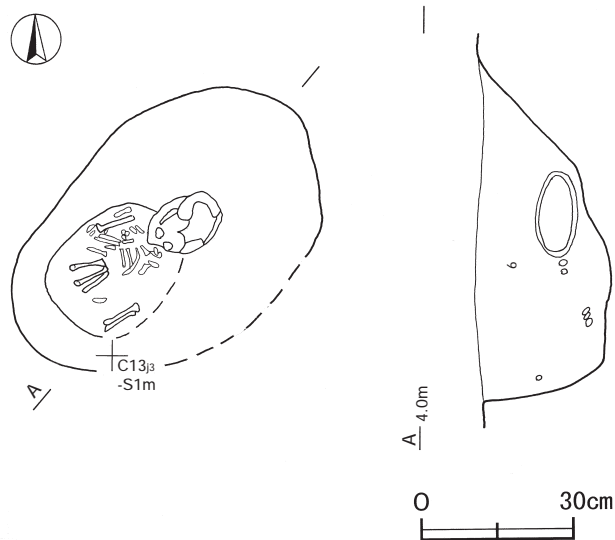
遺骸の特徴 ほぼ全身骨格が確認された。歯は乳歯で、乳中切歯から乳犬歯まで萌出しており、第1・2乳臼歯は未萌出である。

所見 第48号土壙墓に近接し、0.5m低い位置で確認されている。第48号土壙墓と前後して埋葬された可能性が考えられる。古銭は、人骨に伴うものと考えられる。

第95号土壙墓 4区SK-457（第418図）

位置 調査区北部のC13i3区で、第98号土壙墓の北西側5mに位置している。

確認状況 表砂を6.6m除去後、標高3.9mで人骨を確認した。掘り込みを確認することができた。



第418図 第95号土壙墓実測図

規模と形状 長径0.66m、短径0.43mの楕円形と推定され、深さは25cmである。

埋葬の状況 北東頭位仰臥屈葬で埋葬されていた。

覆土 黒D層を主体とし、黒色土Bが不規則に混じる堆積状況で、埋葬時の埋め戻しと考えられる。

性別と年齢 性別不明 乳児（1歳未満）

遺骸の特徴 ほぼ全身骨格が確認された。歯は乳歯で、乳切歯が萌出途中である。第1・2乳臼歯は未萌出である。

所見 副葬品が確認されなかったため、埋葬の時期は不明である。第98号土壙墓より0.5m高い位置で確認された。

第96号土壙墓 4区SK-460（第419図）

位置 調査区北部のE13b5区で、第97号土壙墓の北東側6mに位置している。

確認状況 表砂を9.5m除去後、第30号建物跡の下層1mの標高4.7mで、人骨の頭部を確認した。掘り込みの有無は確認できなかった。

埋葬の状況 北頭位西面右側臥屈葬で埋葬されていた。

性別と年齢 性別不明 新生児

遺骸の特徴 ほぼ全身骨格が確認され、残存状態は良好である。頭蓋骨の縫合は未接合である。下顎の歯の歯冠だけが残存しており、未萌出である。

所見 副葬品が確認されなかったため、埋葬の時期は不明である。第97号土壙墓より0.1m高い標高で確認されている。第30号建物跡構築前の埋葬と考えられる。



+E13_{d6}
-W1m



第419図 第96号土壙墓実測図

第97号土壙墓 4区S K-461 (第420図)

位置 調査区北部のE13d4区で、第96号土壙墓の南西側6mに位置している。

確認状況 表砂を13.2m除去後、第30号建物跡の下層0.8mの標高4.8mで、人骨を確認した。掘り込みの有無は確認できなかった。

埋葬の状況 北頭位で埋葬されていた。頭蓋骨の破片が北側から、四肢骨が南側から出土したことから推測される。

性別と年齢 性別不明 幼児(5~6歳)

遺骸の特徴 ほぼ全身骨格が確認された。歯は乳歯で、乳中切歯から第2乳臼歯まで萌出しており、永久歯の第1大臼歯は萌出途中である。

所見 副葬品が確認されなかったため、埋葬の時期は不明である。第96号土壙墓より0.1m低い位置で確認されている。第30号建物跡構築前の埋葬と考えられる。



+E13_{d5}
-W1m



第420図 第97号土壙墓実測図

第98号土壙墓 4区S K-465 (第421図)

位置 調査区北部のC13j3区で、第102号土壙墓の南西側3mに位置している。

確認状況 表砂を7.3m除去後、標高3.4mで人骨を確認した。掘り込みの有無は確認できなかった。

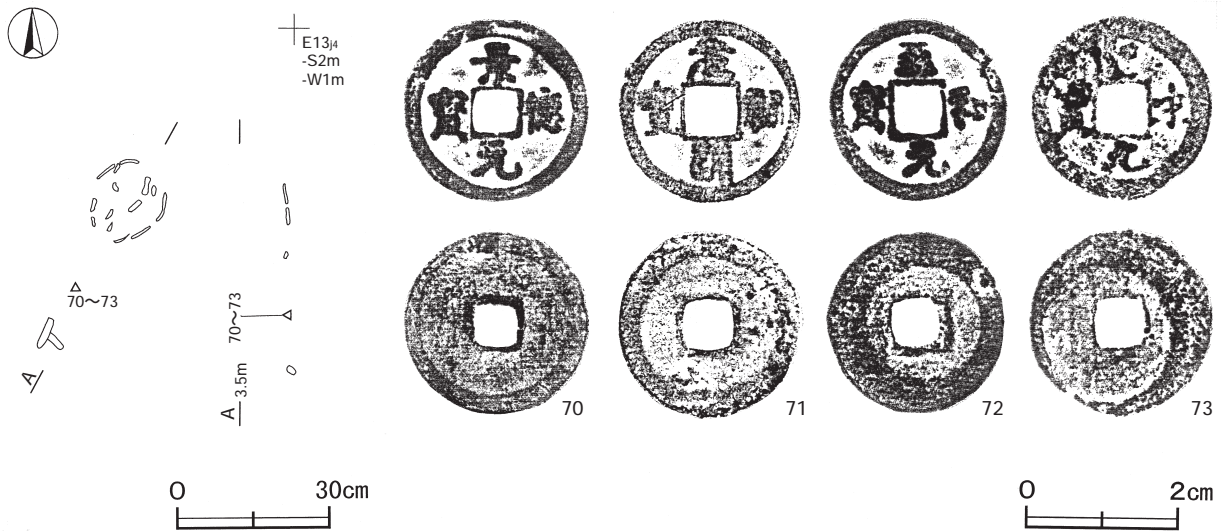
埋葬の状況 歯を含む頭蓋骨の破片が北側から、下肢骨の一部が南側から出土したので、北東頭位の埋葬と推測される。

遺物出土状況 古銭4枚が胸部に相当する位置から出土している。

性別と年齢 性別不明 乳児(6ヶ月未満)

遺骸の特徴 頭蓋骨破片と下肢骨の一部と考えられる骨が残存していた。歯は17本確認され、乳歯である。ほとんどの歯が歯冠だけで、乳切歯の歯根が成長始めである。

所見 判読できた古銭の中では、元祐通寶(初鑄年 1086)が最新銭である。古銭は埋葬に伴う六道銭としての性格が考えられる。第102号土壙墓と同じ標高であり、第102号土壙墓と前後して埋葬された可能性が考えられる。



第421図 第98号土壙墓・出土遺物実測図

第98号土壙墓出土遺物観察表（第421図）

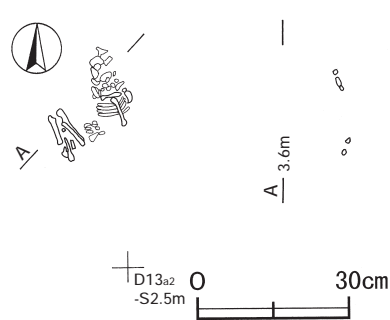
番号	銭名	径	孔径	厚さ	重さ	初鑄年	材質	特徴	出土位置	備考
70	景德元寶	2.46	0.60	0.10	3.30	1004	銅	真書	胸部付近	
71	元祐通寶	2.45	0.60	0.09	3.46	1086	銅	篆書	胸部付近	
72	至和元寶	2.38	0.60	0.10	3.36	1054	銅	真書	胸部付近	
73	聖宋元寶	2.44	0.70	0.09	3.36	1101	銅	行書	胸部付近	

第99号土壙墓 4区S K-467（第422図）

位置 調査区北部のD13a1区で、第104号土壙墓の南西側2mに位置している。

確認状況 表砂を6.8m除去後、標高3.5mで人骨を確認した。掘り込みの有無は確認できなかった。

埋葬の状況 北東頭位北西面右側臥屈葬で埋葬されていた。頭蓋骨の破片が北東側で出土していることから推測される。



性別と年齢 性別不明 乳児（6ヶ月未満）

遺骸の特徴 ほぼ全身骨格が確認されたが、腐朽していた。頭蓋骨は薄く、縫合は弱かった。確認できた10本の歯は乳歯であり、ほとんどの歯は歯冠だけ形成されている。乳中切歯は歯根の成長始めである。

所見 副葬品が確認されなかったので、埋葬の時期は不明である。第104号土壙墓に近接し、0.5m高い位置で確認されていることから、第104号土壙墓と前後して埋葬された可能性が考えられる。

第422図 第99号土壙墓実測図

第100号土壙墓 4区S K-468（第423図）

位置 調査区北部のD13j2区で、第37号土壙墓の北側4mに位置している。

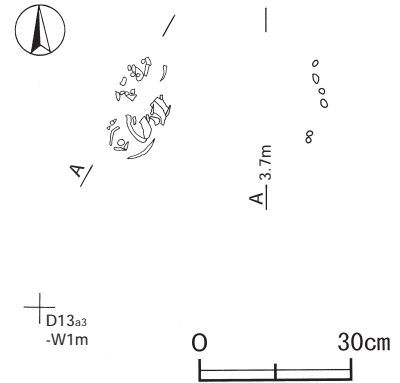
確認状況 表砂を8.6m除去後、標高3.6mで人骨を確認した。掘り込みの有無は確認できなかった。

埋葬の状況 北頭位で埋葬されていた。頭蓋骨の破片が北側から、上肢骨が南側から出土したことから推測される。

性別と年齢 性別不明 幼児（1歳半頃）

遺骸の特徴 頭蓋骨と四肢骨の一部が残存していた。腐朽しており、計測は困難であった。歯は14本確認でき、乳歯である。第1乳臼歯が萌出完了しており、第2乳臼歯は未萌出である。

所見 副葬品が確認されなかったため、埋葬の時期は不明である。第37号土壌墓より0.9m低い標高で確認されている。



第423図 第100号土壌墓実測図

第101号土壌墓 4区S K-500 (第424図)

位置 調査区北部のD13e2区で、第92号土壌墓の西側5mに位置している。

確認状況 表砂を11.2m除去後、標高3.4mで人骨を確認した。掘り込みの有無は確認できなかった。

埋葬の状況 北頭位西面右側臥屈葬で埋葬されていた。

性別と年齢 女性カ 老年

遺骸の特徴 ほとんどの骨が腐朽しており、計測が困難であった。頭蓋骨の縫合線は癒着しており、四肢骨は細く華奢である。歯は永久歯で、9本確認した。下顎左側は第3大白歯まで萌出している。第2小白歯、第1大白歯、第3大白歯は生前に脱落し、その後歯槽骨が閉鎖している。

所見 副葬品が確認されなかったため、埋葬の時期は不明である。第92号土壌墓より0.1m低い位置で確認されている。



第424図 第101号土壌墓実測図

第102号土壌墓 4区S K-511 (第425図)

位置 調査区北部のC13i4区で、第103号土壌墓の北西側1mに位置している。

確認状況 表砂を7.2m除去後、標高3.4mで人骨を確認した。掘り込みの有無は確認できなかった。

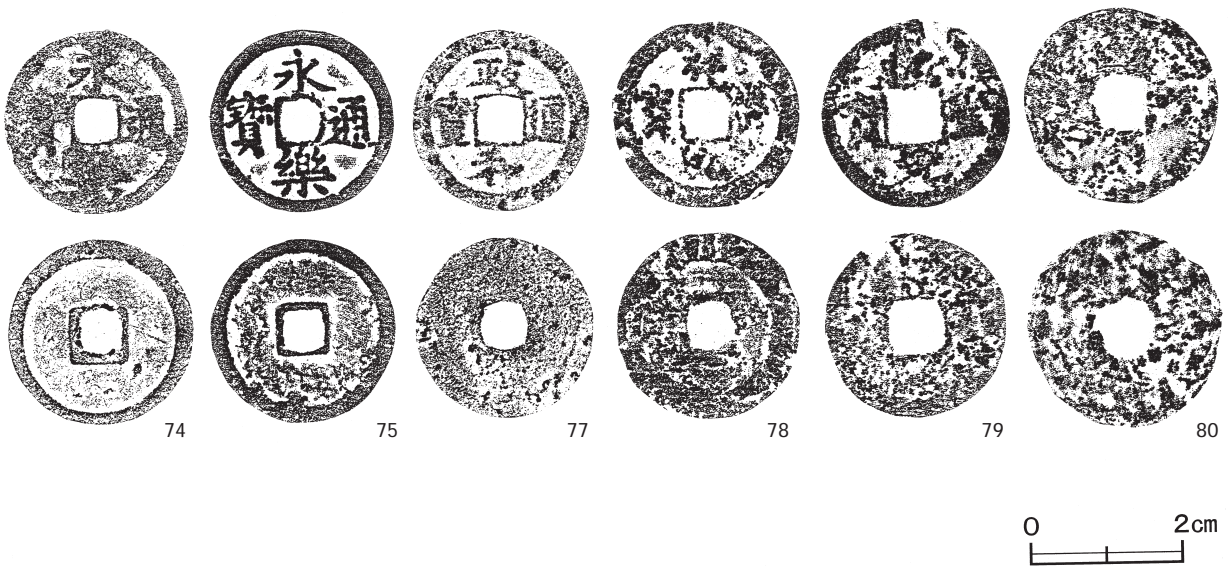
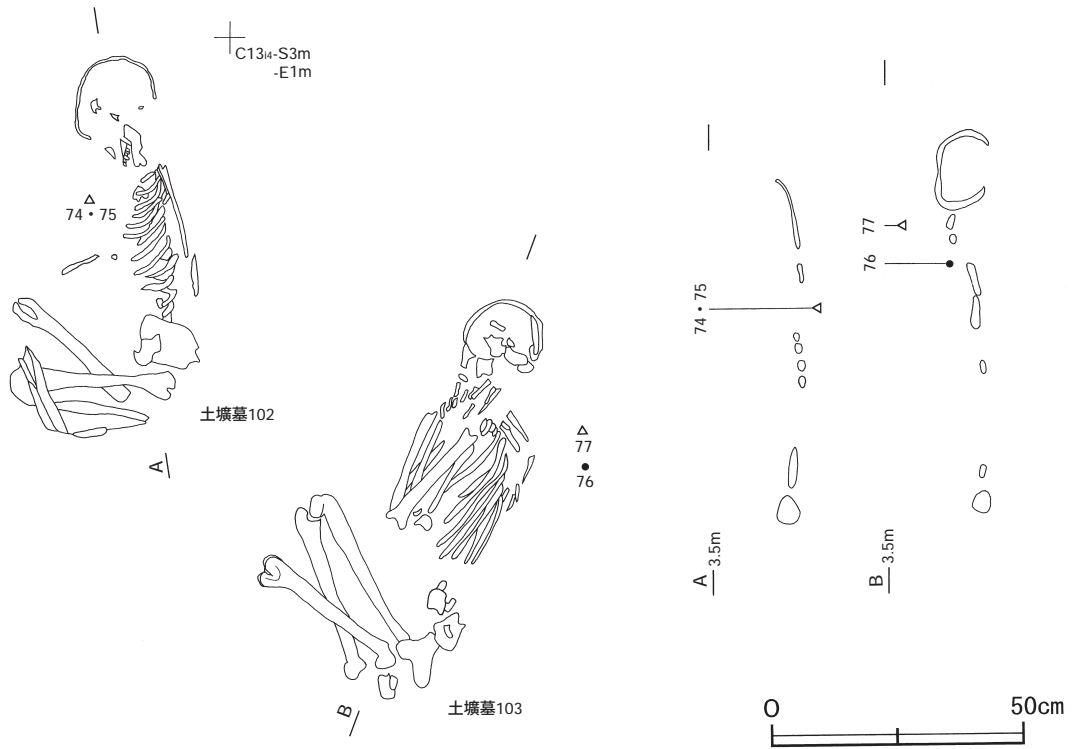
埋葬の状況 北頭位西面右側臥屈葬で埋葬されていた。

遺物出土状況 古銭2枚が胸部前面から出土している。

性別と年齢 性別不明 若年（13~17歳）

遺骸の特徴 頭蓋骨と椎骨、四肢骨の一部が確認されたが、腐朽していた。歯は永久歯で、上顎下顎とも左右の中切歯から第2大白歯まで萌出している。第3大白歯は歯槽に確認でき、歯冠が形成された段階で未萌出である。

所見 判読できた古銭の中では、永樂通寶（初鑄年 1408）が最新銭である。古銭は埋葬に伴う六道銭としての性格が考えられる。第103号土壌墓と近接し、同じ標高で確認されていることから、同時期に埋葬された可能性が考えられる。



第425図 第102・103号土墳墓・出土遺物実測図

第102号土壙墓出土遺物観察表（第425図）

番号	銭名	径	孔径	厚さ	重さ	初鑄年	材質	特徴	出土位置	備考
74	永樂通寶	2.51	0.6	0.10	3.02	1408	銅	真書	胸部前面	
75	永樂通寶	2.49	0.5	0.13	3.24	1408	銅	真書	胸部前面	

第103号土壙墓出土遺物観察表（第425図）

番号	器形	器質	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
76	内耳鍋	土師質土器	[34.3]	(6.5)	—	長石・雲母・黒色粒子	にぶい橙	普通	内耳部分貼りつけ後指ナデ	覆土中	5%

番号	銭名	径	孔径	厚さ	重さ	初鑄年	材質	特徴	出土位置	備考
77	政和通寶	2.47	0.6	0.11	3.88	1111	銅	分楷	覆土中	
78	祥符元寶	2.51	0.6	0.11	3.62	1008	銅	真書	覆土中	
79	天聖元寶	2.5	0.7	0.12	2.90	1023	銅	模鑄	覆土中	
80	□□□□	2.7	0.7	0.14	3.62	—	銅	判読不能、火を受けている	覆土中	

第103号土壙墓 4区SK-512（第425図）

位置 調査区北部のC13i4区で、第102号土壙墓の南東側1mに位置している。

確認状況 表砂を7.2m除去後、標高3.4mで人骨を確認した。掘り込みは確認できなかった。

埋葬の状況 北東頭位北西面右側臥屈葬で埋葬されていた。

遺物出土状況 土師質土器7点（内耳鍋）と古銭4枚が、人骨確認の段階で人骨周辺に散在するように出土している。

性別と年齢 男性カ 熟年

遺骸の特徴 ほぼ全身骨格が確認された。腐朽しており、計測は困難であった。乳様突起が大きく、四肢骨も太い。歯は永久歯で、上顎下顎とも左右の中切歯から第2大臼歯まで萌出している。第3大臼歯は生前から萌出していないと考えられる。全体の歯に摩耗がみられ、歯周疾患も認められた。

所見 判読できた古銭の中で、最新銭は政和通寶（初鑄年 1111）である。古銭と土師質土器片は、埋葬時の混入と考えられる。第102号土壙墓と近接し、同じ標高で確認されていることから、同時期に埋葬された可能性が考えられる。

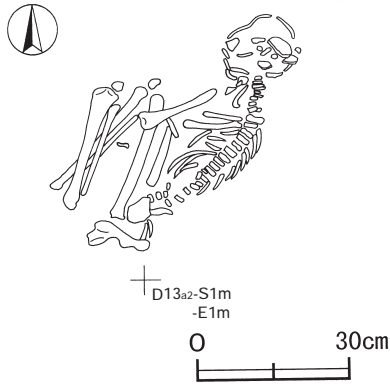
第104号土壙墓 4区SK-515（第426図）

位置 調査区北部のD13a2区で、第99号土壙墓の北東側2mに位置している。

確認状況 表砂を11m除去後、標高3mで人骨の頭部を確認した。掘り込みは確認できなかった。

埋葬の状況 北東頭位北西面右側臥屈葬で埋葬されていた。

性別と年齢 女性 壮年



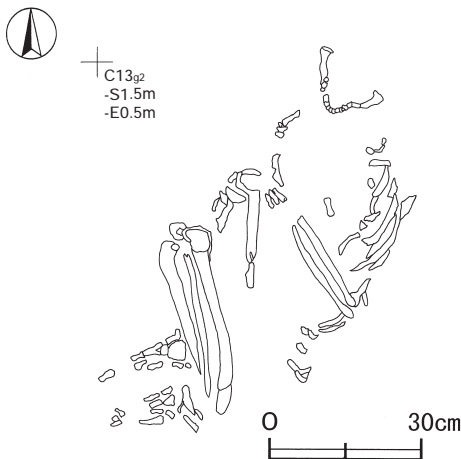
第426図 第104号土壙墓実測図

遺骸の特徴 ほぼ全身骨格が確認された。腐朽しており、計測は困難であった。前頭骨の眉弓隆起は弱い。四肢骨が細く、上腕骨は華奢である。歯は永久歯で、上顎下顎ともに左右の中切歯から第3大臼歯まで萌出している。上顎右側第2小臼歯と第1大臼歯、下顎左側第1大臼歯がう歯であり、それ以外の歯にもう蝕が認められる。上顎下顎とも歯槽膿漏が見られる。

所見 副葬品が確認されなかったので、埋葬の時期は不明である。第99号土壙墓より0.5m低い位置で確認されており、第99号土壙墓と前後して埋葬された可能性が考えられる。

第105号土壙墓 4区SK-518 (第427図)

位置 調査区北部のC13g2区で、第80号土壙墓の南東側8mに位置している。



第427図 第105号土壙墓実測図

確認状況 表砂を9.6m除去後、標高3.1mで人骨を確認した。掘り込みは確認できなかった。

埋葬の状況 北東頭位の屈葬で埋葬されていた。

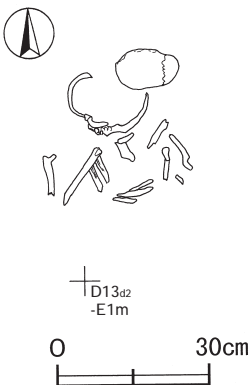
性別と年齢 男性 老年

遺骸の特徴 頭蓋骨を除く下顎とほぼ全身骨格が確認されたが、腐朽していた。四肢骨は太くたくましい。歯は永久歯で、下顎は中切歯から第3大臼歯まで萌出している。右側の第1～3大臼歯は著しい歯周疾患であり、すべての歯が摩滅している。

所見 副葬品が確認されなかったので、埋葬の時期は不明である。第80号土壙墓より0.4m低い位置で確認されている。

第106号土壙墓 4区SK-519 (第428図)

位置 調査区北部のD13c2区で、第90号土壙墓の南側2mに位置している。



第428図 第106号土壙墓実測図

確認状況 表砂を11.1m除去後、標高3mで人骨を確認した。掘り込みの有無は確認できなかった。

埋葬の状況 北東頭位仰臥の状態に埋葬されていた。骨盤は頭蓋骨より0.2m低い位置から出土している。

性別と年齢 性別不明 少年から若年(12～13歳)

遺骸の特徴 頭蓋骨と上肢骨の一部が確認された。腐朽しており、計測は困難であった。歯は永久歯で、27本残存していた。上顎下顎ともに左右の中切歯から第2大臼歯まで萌出している。第3大臼歯は、歯冠が形成され、未萌出である。

所見 副葬品が確認されなかったので、埋葬の時期は不明である。第90号土壙墓より0.9m低い位置で確認されている。

第107号土壌墓 4区S K-521 (第429図)

位置 調査区北部のE12g0区で、第70号土壌墓の南西側4 mに位置している。

確認状況 表砂を7.7m除去後、第15号建物跡の下層0.6mの標高4 mで、人骨を確認した。

規模と形状 長径0.41m、短径0.37mの楕円形で、深さは15cmである。

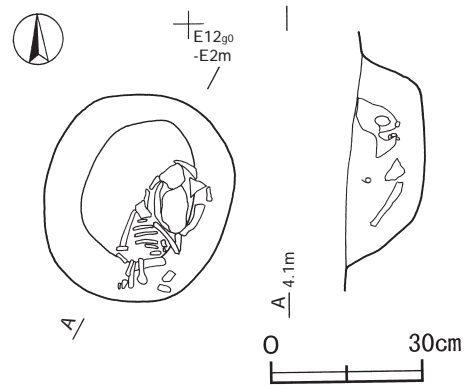
埋葬の状況 北東頭位俯臥屈葬で埋葬されていた。

覆土 黒D層を主体とした黒色土Bが不規則に混じる堆積状況で、埋葬時の埋め戻しであると考えられる。

性別と年齢 性別不明 乳児(6ヶ月頃)

遺骸の特徴 ほぼ全身骨格が確認された。腐朽しており、計測は困難であった。歯は乳歯で、上顎下顎ともに左右の乳切歯から乳犬歯まで萌出しており、第1乳臼歯は未萌出である。

所見 副葬品が確認されなかったため、埋葬の時期は不明である。第15号建物跡構築前の埋葬である。



第429図 第107号土壌墓実測図

第108号土壌墓 4区S K-522 (第430図)

位置 調査区北部のE13c4区で、第97号土壌墓の北西側2 mに位置している。

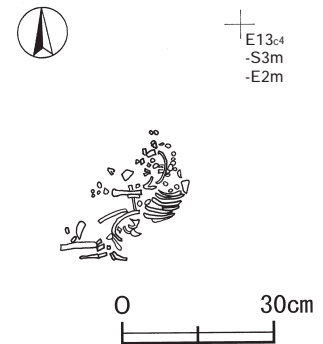
確認状況 表砂を13.2m除去後、標高4.2mで人骨を確認した。掘り込みの有無は確認できなかった。

埋葬の状況 北東頭位で埋葬されていた。頭蓋骨の破片が北東側から、四肢骨と体幹骨が南西側から出土したことから推測される。

性別と年齢 性別不明 幼児(3~4歳)

遺骸の特徴 頭蓋骨の破片と歯、四肢骨・体幹骨の破片が残存していた。歯は23本確認された。上顎左側と下顎右側の第2乳臼歯が萌出しており、永久歯の第1大白歯は未萌出である。

所見 副葬品が確認されなかったため、埋葬の時期は不明である。第97号土壌墓に近接し、0.6m低い位置で確認されていることから、第97号土壌墓と前後して埋葬された可能性が考えられる。



第430図 第108号土壌墓実測図

第109号土壌墓 2区H K-1 (第431図)

位置 調査区北部のF11j4区で、第1号土壌墓の東側2 mに位置している。

確認状況 表砂を4.1m除去後、標高3.7mで人骨を確認した。掘り込みの有無は確認できなかった。

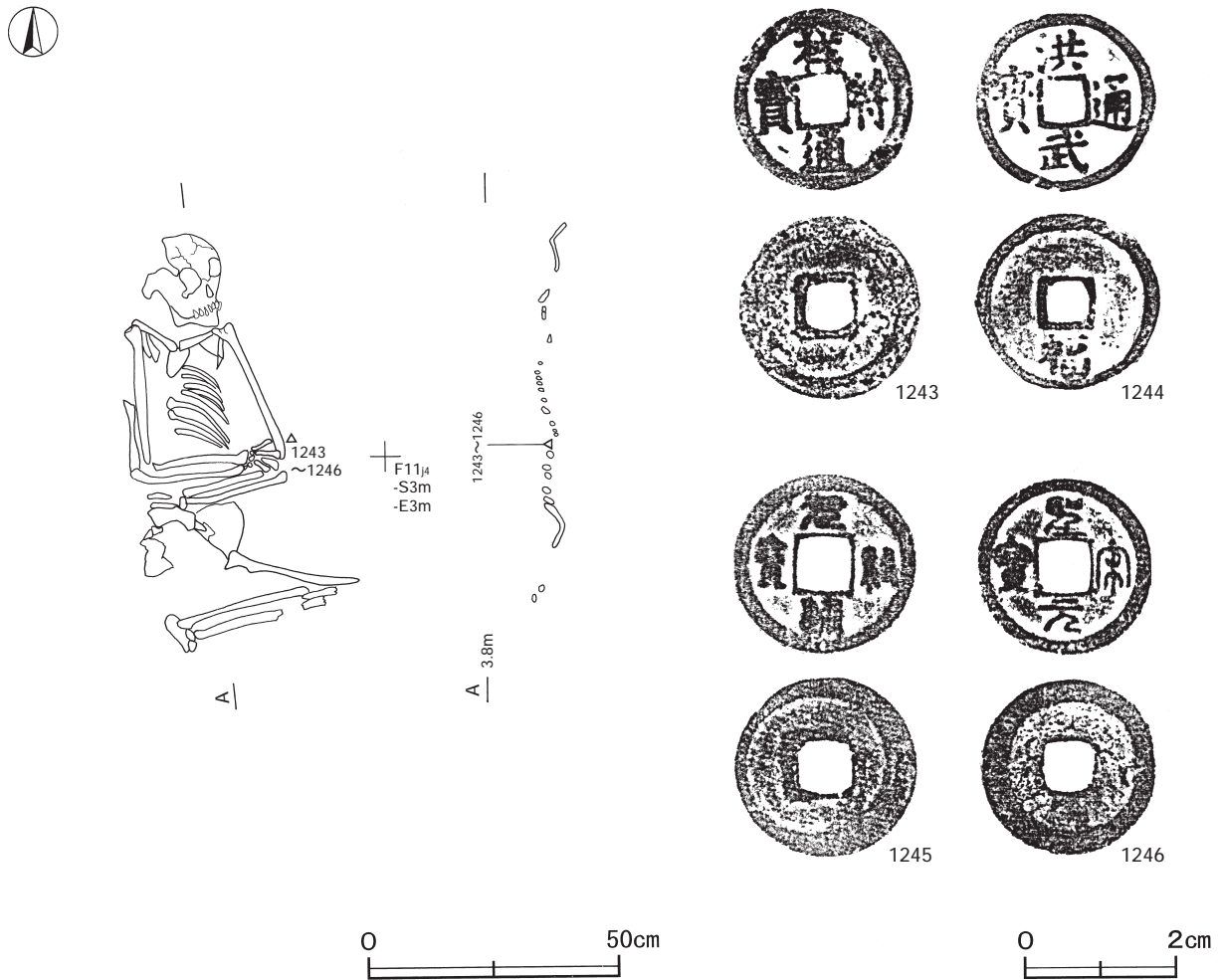
埋葬の状況 北頭位仰臥屈葬で埋葬されていた。

遺物出土状況 古銭4枚が右手付近から出土している。

性別と年齢 女性 熟年

遺骸の特徴 ほぼ全身骨格が確認された。腐朽しており、計測は困難であった。頭蓋骨は薄く、四肢骨は細く華奢である。歯は永久歯で、16本が残存している。下顎右側の第2大臼歯が萌出しており、歯の摩耗が著しい。

所見 判読できた古銭の中で、最新銭は洪武通寶（初鋳年 1368）である。古銭は埋葬に伴う六道銭としての性格が考えられる。第1号土壙墓より標高が0.1m程低いことから、第1号土壙墓の埋葬と前後して埋葬された可能性が考えられる。



第431図 第109号土壙墓・出土遺物実測図

第109号土壙墓出土遺物観察表（第431図）

番号	銭名	径	孔径	厚さ	重さ	初鋳年	材質	特徴	出土位置	備考
1243	祥符通寶	2.43	0.62	0.12	3.10	1008	銅	真書	左肘部分	
1244	洪武通寶	2.40	0.56	0.14	3.50	1368	銅	真書、背下「福」	左肘部分	
1245	元祐通寶	2.43	0.74	0.11	3.58	1086	銅	篆書	左肘部分	
1246	聖宋元寶	2.33	0.63	0.12	3.56	1101	銅	篆書	左肘部分	

(2) 土壌

出土した動物遺骸の中で、丁寧な埋葬の状況を確認できた馬5体、犬1体について、その概要を以下に記述する。

第1号土壌 2区SK-267 (第432図)

位置 調査区中央部のH13c5区で、第2号製塩跡の南東側18mに位置している。

確認状況 表砂を3.5m除去後、標高7.6mで馬骨の頭部を確認した。掘り込みの有無は確認できなかった。

埋葬の状況 頭位は北方向で、前肢骨と後肢骨を西側に向け、椎骨を東側にした状態で埋葬されていた。尾椎付近にウバガイが出土している。

雌雄と年齢 雄 5～6歳

遺骸の特徴 ほぼ1個体分が確認された。頭蓋骨や四肢骨、体幹骨が残存していた。上顎下顎ともにすべての切歯・犬歯・小白歯・大白歯の萌出が認められた。

所見 土壌に伴う遺物が確認されなかったので、埋葬の時期は不明である。



第432図 第1号土壌実測図

第2号土壌 4区SK-97 (第433図)

位置 調査区北部のF12b7区で、第59号土壌墓の南側2mに位置している。

確認状況 表砂を10m除去後、標高4.2mで馬骨の頭部を確認した。掘り込みの有無は確認できなかった。

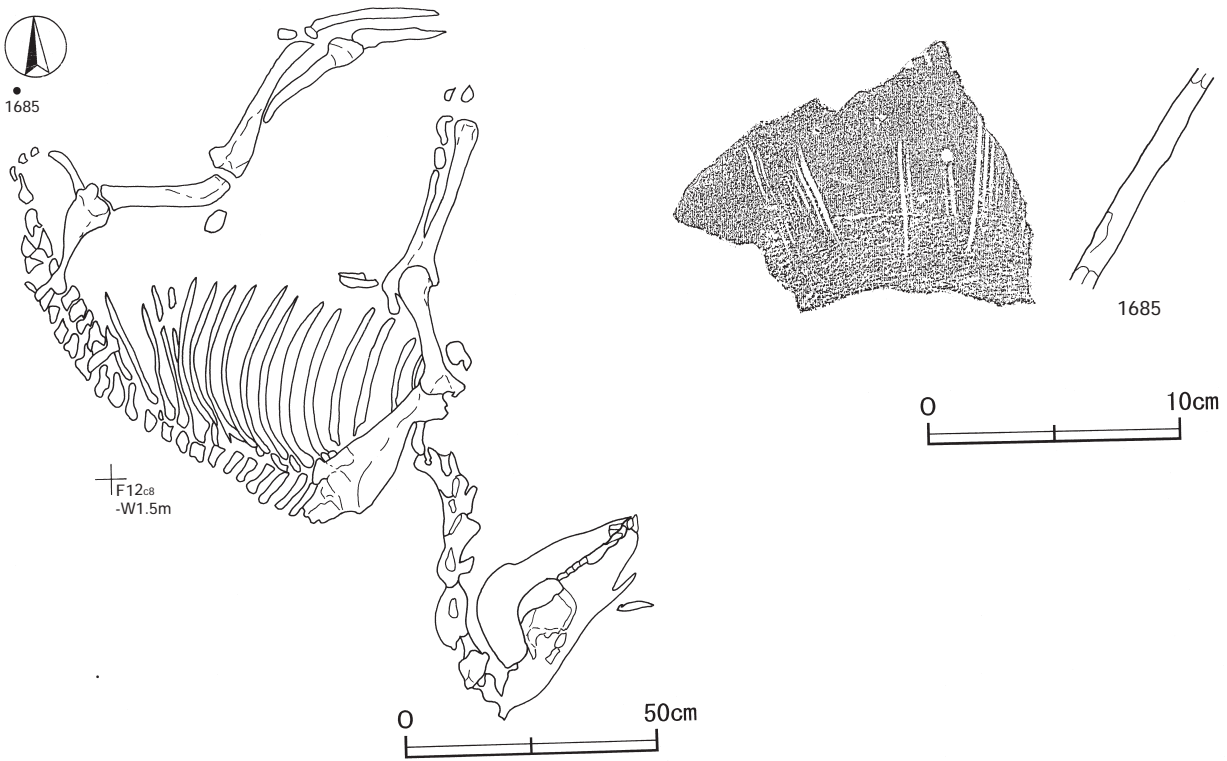
埋葬の状況 頭位は南東方向で、前肢骨と後肢骨を北東側に向け、椎骨を南西側にした状態で埋葬されていた。

遺物出土状況 土師質土器1点(播鉢)が尾椎付近に出土している。

雌雄と年齢 雄 17~18歳

遺骸の特徴 ほぼ1個体分が確認された。頭蓋骨や四肢骨、体幹骨が残存していた。上顎下顎ともに切歯・犬歯・小白歯・大白歯が萌出している。歯の脱落も認められる。

所見 1685は、出土状況から埋葬時の混入と考えられる。第59号土壌墓より0.4m低い位置で確認され、第59号土壌墓と前後して埋葬された可能性が考えられる。



第433図 第2号土壌・出土遺物実測図

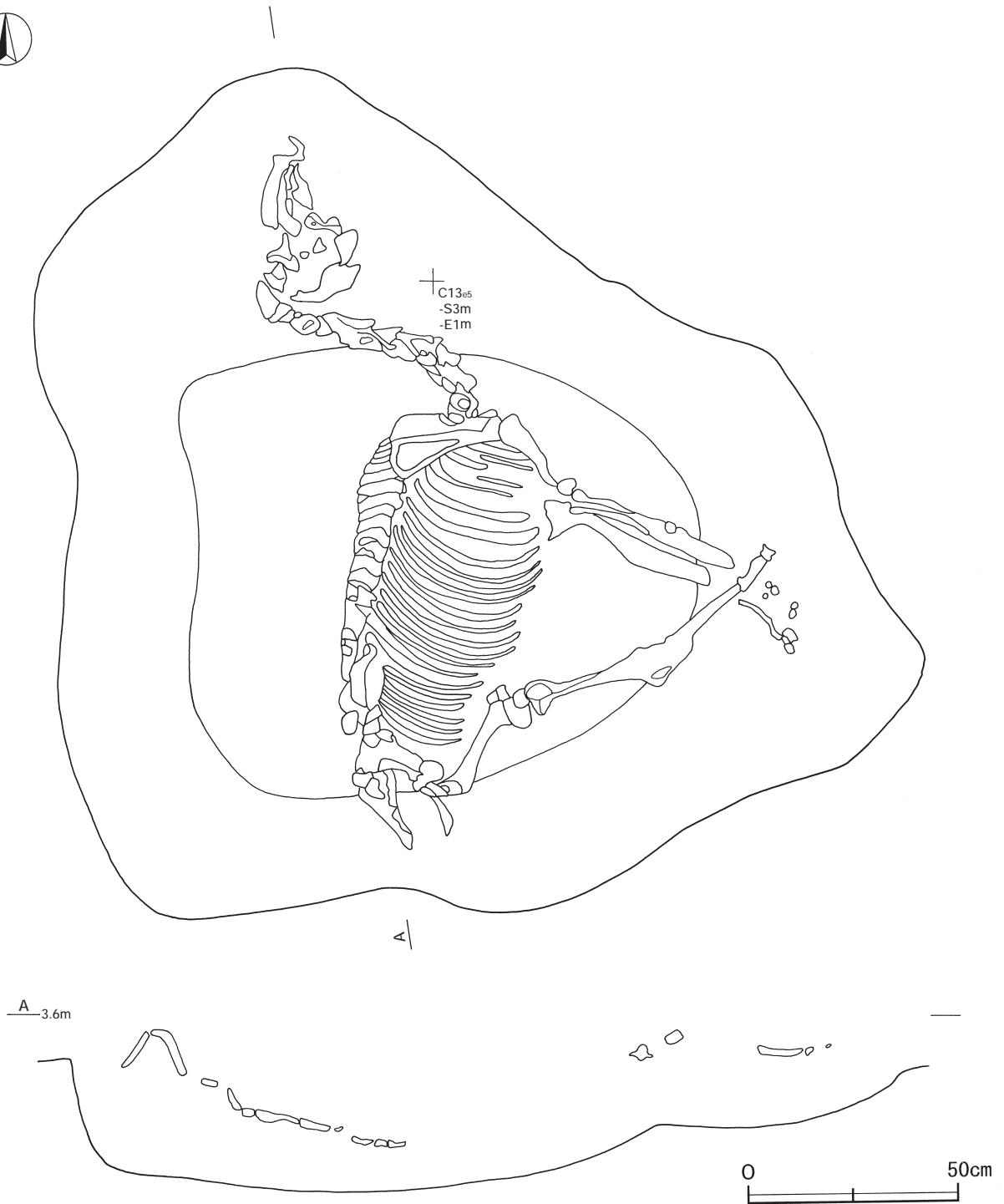
第2号土壌出土遺物観察表 (第433図)

番号	器形	器質	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
76	播鉢	土師質土器	—	(8.7)	—	長石・赤色粒子	にぶい橙	普通	内面8条1単位の播り目	尾椎付近	5%

第3号土壌 4区SK-407 (第434図)

位置 調査区北部のC13e5区で、第89号土壌墓の南西側2mに位置している。

確認状況 表砂を6.3m除去後、標高3.6mで馬骨を確認した。掘り込みの有無は確認できなかった。窪地に馬を横たえて埋葬した状態であった。



第434図 第3号土壙実測図

埋葬の状況 頭位は北方向で、前肢骨と後肢骨を東側に向け、椎骨を西側にした状態で埋葬されていた。

雌雄と年齢 雄 18～19歳

遺骸の特徴 ほぼ1個体分が確認された。頭蓋骨や四肢骨、体幹骨が残存していた。歯は、上顎左側の残存が良好で、切歯・犬歯・小白歯・大白歯が萌出している。歯の脱落も認められる。

所見 土壙に伴う遺物が確認されなかったため、埋葬の時期は不明である。第89号土壙墓より0.2m 高い位置で確認されており、第89号土壙墓と前後して埋葬された可能性が考えられる。

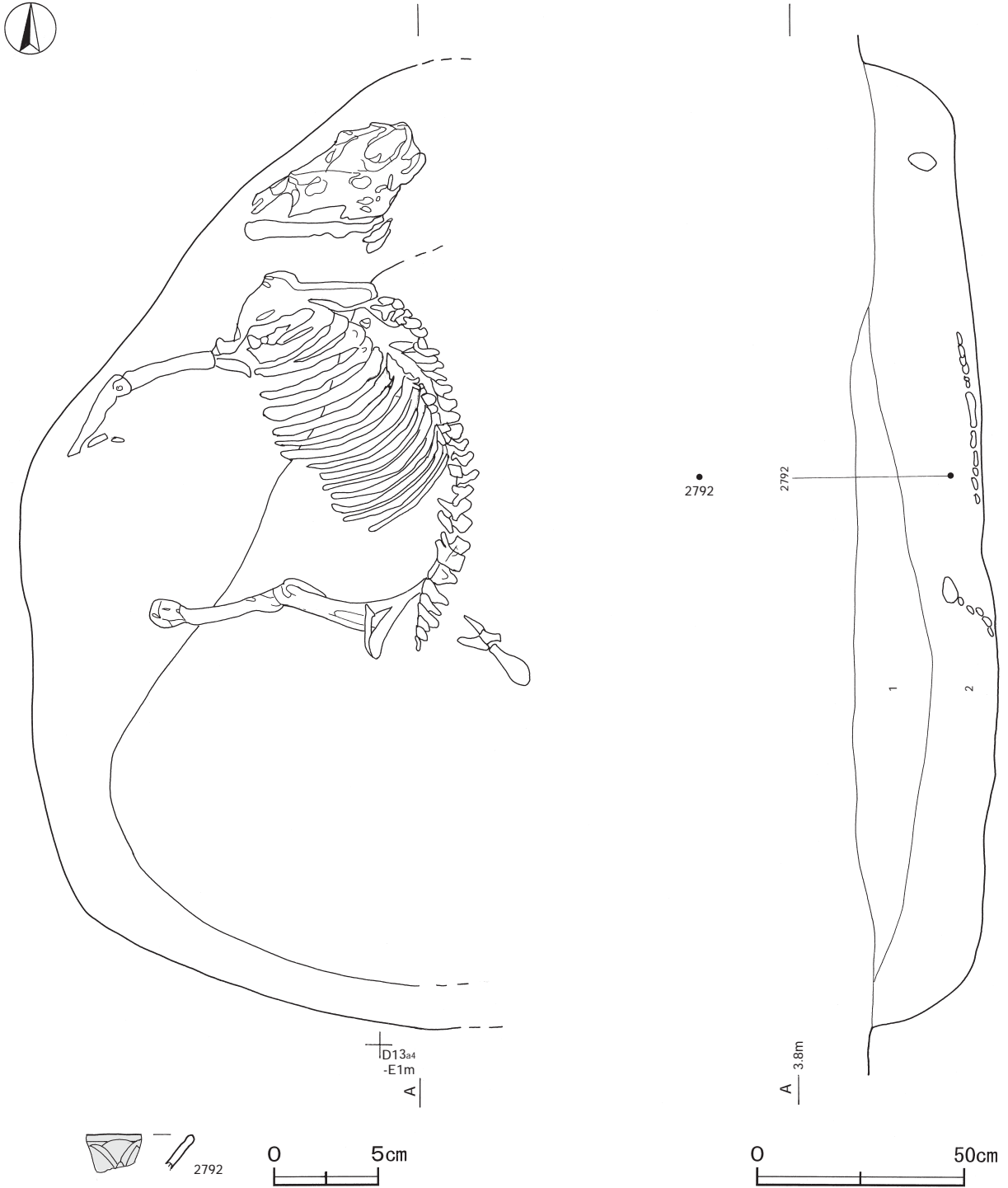
第4号土壙 4区SK-455 (第435図)

位置 調査区北部のC13j4区で、第98号土壙墓の南東側2mに位置している。

確認状況 表砂を7.4m除去後、標高3.6mで馬骨の頭部を確認した。遺骸を埋葬した土壙の最下部を覆土の色の違いから認めることができた。

埋葬の状況 頭位は北東方向で、前肢骨と後肢骨を西側に向け、椎骨を東側にした状態で埋葬されていた。

覆土 2層に分層される。2層目は、黒色土D、黒色土B、砂Bがブロック状に堆積していることから、埋葬時の埋め戻しと考えられる。



第435図 第4号土壙・出土遺物実測図

第4号土壙出土遺物観察表（第435図）

番号	器形	器質	口径	器高	底径	胎土・色調	絵付・釉薬	文様・特徴	産地・年代	出土位置	備考
2792	青磁連弁文碗	磁器	—	(1.9)	—	灰白・灰白	粉青色釉	連弁文	龍泉窯系	東側1m	5%

遺物出土状況 陶磁器片1点（青磁連弁文碗）が脊椎骨の東側から出土している。

雌雄と年齢 雄 6～7歳

遺骸の特徴 ほぼ1個体分が確認された。頭蓋骨や四肢骨，体幹骨が残存していた。歯は，上顎左右の切歯・犬歯・小白歯・大白歯まで萌出していた。

所見 2792は，出土状況から埋葬時の混入と考えられる。第98号土壙墓より0.2m高い位置で確認されており，第98号土壙墓と前後して埋葬された可能性が考えられる。

第5号土壙 4区SK-517（第436図）

位置 調査区北部のD13e2区で，第101号土壙墓の北側2mに位置している。

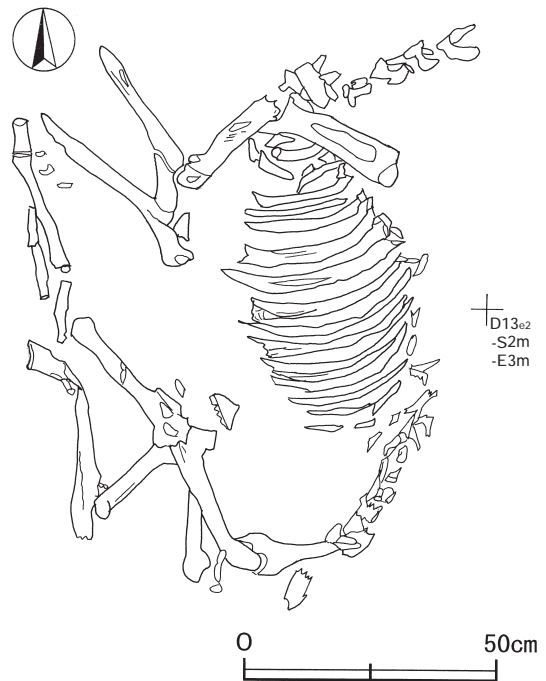
確認状況 表砂を8.2m除去後，標高3.1mで馬骨を確認した。掘り込みの有無は確認できなかった。表砂除去の際，頭蓋骨が損傷を受けた。

埋葬の状況 頭位は北方向で，前肢骨と後肢骨を西側に向け，椎骨を東側にした状態で埋葬されていた。

雌雄と年齢 雄 7～8歳

遺骸の特徴 ほぼ1個体分が確認された。歯は，切歯・犬歯・小白歯・大白歯まで萌出している。

所見 土壙に伴う遺物が確認されなかったため，埋葬の時期は不明である。



第436図 第5号土壙実測図

第6号土壙 3区SK-44（第437図）

位置 調査区北部のB13g3区で，第13号土壙墓の南東側6mに位置している。

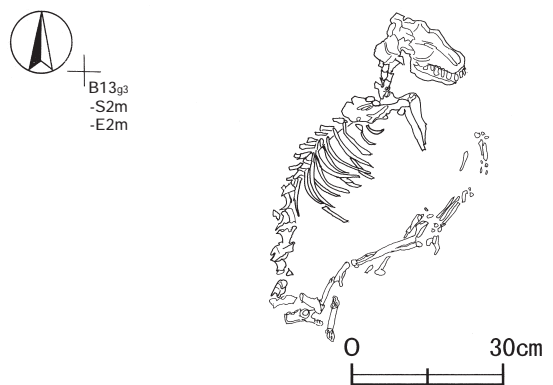
確認状況 表砂を4.3m除去後，標高4.1mで犬の骨格を確認した。掘り込みの有無は確認できなかった。

埋葬の状況 頭位は北東方向で，前肢骨と後肢骨を南東側に向け，椎骨を北西側にした状態で埋葬されていた。

雌雄と年齢 不明 成犬

遺骸の特徴 ほぼ1個体分が確認された。頭蓋骨や四肢骨，体幹骨が残存していた。歯の残存状態も良好であった。

所見 土壙に伴う遺物が確認されなかったため，埋葬の時期は不明である。



第437図 第6号土壙実測図

表9 土壙墓一覽表

番号	区	遺構番号	位置	標高	性別	推定死亡年齢	推定身長	各四肢骨の長さ (cm)												備考	
								上腕骨		橈骨		尺骨		大腿骨		脛骨		腓骨			
								右	左	右	左	右	左	右	左	右	左	右	左		
1	2	SK6	F11j3	4.0	男	老年	157	31.4	(26.8)	(23.5)	23.4	24.9	23.4	41.7	41.8	34.9	34.0	(30.0)	30.5	HK1下層	
2	2	SK33	F11i4	4.3	女	20歳代後半	—	(21.1)	(21.1)	(15.7)	(14.6)	(15.3)	(17.7)	—	(20.8)	—	—	—	—	—	HK1下層
3	2	SK240	J11h6	5.4	—	新生児	—	—	7.0	—	—	—	—	—	(6.1)	(5.3)	(6.2)	—	—	—	SI10下層
4	2	SK254	J11g7	5.1	—	6ヶ月～1歳	—	9.0	9.3	7.1	(7.1)	(8.0)	(8.0)	(11.4)	11.3	(9.7)	(9.4)	(8.4)	(7.8)	—	SI10下層
5	2	SK268	H12h4	6.0	男	壮年	154	(24.6)	29.2	(12.8)	23.1	(21.3)	25.0	40.3	41.0	34.0	34.4	(26.0)	32.9	—	
6	2	SK273	K11d2	4.6	—	3歳頃	—	12.0	12.0	9.0	(6.0)	10.0	10.0	16.0	16.0	12.5	12.5	(11.0)	12.2	—	
7	2	SK287	K11b1	4.4	—	5歳頃	—	14.0	13.8	(11.0)	(11.5)	10.5	(10.5)	(17.8)	18.5	15.2	15.0	15.1	15.0	—	
8	3	SK4	B12f0	5.3	女	老年	143	(27.5)	(22.5)	(18.3)	(18.7)	(16.0)	(18.8)	(37.0)	(35.0)	(29.0)	(24.1)	(14.6)	—	—	
9	3	SK5	B12g0	5.3	男	老年	158	(20.0)	30.1	21.8	22.7	(21.8)	(18.7)	(38.2)	(7.7)	—	(29.2)	(27.3)	—	—	
10	3	SK7	B13f2	5.3	—	新生児	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
11	3	SK8	B13g1	4.7	男	老年	162	(28.7)	30.4	(22.3)	21.5	24.5	24.7	43.6	44.0	35.0	34.0	33.5	33.4	—	
12	3	SK28	B13e1	4.8	—	1～1歳半	—	9.5	9.6	7.8	7.7	(9.8)	9.9	12.0	11.9	10.2	10.2	8.8	8.7	—	
13	3	SK29	B13e2	4.6	—	3～4歳	—	13.0	13.0	9.8	9.5	11.0	11.0	17.5	17.5	14.0	13.7	14.0	13.5	—	SK38上層
14	3	SK37	B13h3	4.8	—	3ヶ月未満	—	6.2	5.8	—	(3.5)	5.5	5.5	6.5	(5.5)	4.8	—	—	—	—	
15	3	SK55	B13g3	3.6	—	1歳半頃	—	10.3	(8.5)	(3.7)	(4.0)	(8.5)	(5.5)	—	—	—	—	—	—	—	
16	3	SK56	B13f4	4.6	—	6ヶ月頃	—	8.5	(7.7)	—	(6.0)	(7.3)	(7.1)	(12.1)	(8.2)	(5.0)	9.1	(5.0)	(8.1)	—	
17	4	SK1	G12h8	8.5	不明	熟年	—	(22.3)	(26.4)	(21.0)	(21.2)	(24.9)	(14.7)	(39.4)	(38.9)	—	(33.2)	(24.2)	(31.7)	—	
18	4	SK3	G12e9	8.8	女	老年	143	(21.0)	(26.5)	22.0	(21.0)	24.0	23.2	36.0	37.5	31.0	—	(24.0)	(28.5)	—	
19	4	SK4	H12f5	6.5	女カ	成人	—	(25.0)	(26.3)	(19.2)	(21.1)	(21.1)	(19.7)	(29.8)	—	—	—	(26.8)	(14.2)	—	
20	4	SK5	G12e7	6.8	男	老年	132	30.4	30.0	22.5	22.3	24.5	24.7	31.5	(22.0)	—	—	(20.7)	(7.0)	—	
21	4	SK6	G12g5	6.9	男	熟年	—	—	(13.5)	—	(8.5)	(16.3)	—	—	—	—	—	—	—	—	SH5下層
22	4	SK8	F13b7	10.2	男	壮年	151	29.8	—	21.2	—	23.0	—	39.0	39.5	32.0	32.0	31.0	31.0	—	
23	4	SK9	G12f7	5.6	男	熟年～老年	156	(26.6)	29.3	22.6	22.6	23.9	24.2	41.1	41.0	32.2	33.0	(29.0)	31.8	—	SH5下層
24	4	SK11	F13f4	9.2	女	17～18歳	—	(24.2)	(24.5)	(17.1)	(13.0)	(17.1)	(20.0)	(28.6)	(19.3)	(26.5)	(24.3)	(28.8)	(20.8)	—	
25	4	SK15	F13f4	9.3	男	壮年	155	(26.3)	(23.0)	21.7	21.7	24.0	23.5	40.8	(37.5)	(30.0)	34.0	(12.0)	(16.0)	—	
26	4	SK16	F13f4	9.2	女	熟年	—	(23.9)	(21.5)	(18.2)	(17.5)	21.5	(19.7)	(36.0)	(7.2)	(31.8)	(28.8)	(26.0)	30.0	—	
27	4	SK17A	F13e5	8.7	—	6～7歳	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
28	4	SK17B	F13e5	8.7	男	熟年	—	(25.0)	(23.0)	(19.5)	(14.0)	(7.5)	(10.0)	38.5	35.0	(35.0)	(31.0)	(24.5)	—	—	
29	4	SK18	F13c5	8.6	男	成人	—	(26.7)	(18.3)	(13.6)	—	(9.3)	(23.1)	(22.6)	(36.1)	—	(20.7)	(14.4)	(14.4)	—	
30	4	SK19	F13c4	8.5	男	熟年	156	(24.5)	(10.2)	23.0	(22.3)	(25.5)	24.5	(36.0)	(37.5)	33.5	(33.2)	(29.8)	33.5	—	
31	4	SK22	F12j7	6.2	女	壮年～熟年	153	28.0	28.0	21.5	22.0	23.5	24.0	40.0	40.0	33.5	33.4	32.4	32.9	—	
32	4	SK24	G12a6	6.4	女カ	17～18歳	—	(23.6)	(23.3)	(20.9)	(18.5)	(20.3)	(20.8)	(33.6)	(33.3)	(25.0)	(25.7)	—	(23.1)	—	
33	4	SK25	F13a1	5.5	—	6ヶ月～1歳	—	8.5	(7.4)	—	—	(7.3)	(6.1)	10.5	(4.1)	—	—	—	—	—	
34	4	SK29	E13f3	6.1	—	6ヶ月未満	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
35	4	SK30	E13i4	5.3	男	熟年	156	30.0	(27.5)	(21.2)	23.0	(24.0)	(24.5)	(27.5)	(33.5)	(31.0)	(23.5)	(26.0)	(24.5)	—	
36	4	SK31	E13i4	5.4	—	3～4歳	—	(6.7)	(17.0)	13.0	13.0	(11.5)	(11.2)	(18.0)	(15.6)	(18.0)	(16.7)	(10.5)	(8.1)	—	
37	4	SK36	E13b3	4.5	—	4～5歳	—	—	11.0	(8.1)	8.2	9.1	9.1	—	—	10.0	10.0	(10.2)	(8.2)	—	
38	4	SK38	F13d1	3.8	—	1～2歳	—	(5.7)	—	8.8	(4.0)	(14.8)	12.7	14.5	14.5	11.5	11.5	11.5	11.5	—	
39	4	SK39	E13f4	5.5	—	1歳頃	—	10.0	10.0	(7.7)	(7.1)	(8.5)	(8.0)	(12.1)	10.0	10.2	10.0	—	10.4	—	SI31下層
40	4	SK42	E13e3	5.2	—	6ヶ月未満	—	(8.0)	(8.0)	—	—	(7.0)	—	—	(8.0)	—	(8.0)	—	—	—	
41	4	SK49	F12a9	5.5	—	1歳頃	—	10.0	10.0	(8.0)	8.0	10.0	10.0	13.0	13.0	11.0	11.0	11.0	11.0	—	SI32下層
42	4	SK50	E13g4	5.2	女	熟年～老年	150	(26.4)	28.2	21.0	22.1	23.1	23.6	39.0	39.8	(23.0)	—	—	32.0	—	SI31下層
43	4	SK51A	F12b8	5.2	—	5歳頃	—	12.0	12.0	9.0	9.0	10.0	10.0	15.5	15.5	12.5	12.5	(10.5)	12.3	—	SI32下層
44	4	SK51B	F12b8	5.1	—	5歳頃	—	14.8	(11.7)	(8.2)	11.0	12.3	(7.0)	(19.0)	(18.0)	16.0	(16.0)	15.8	15.6	—	SI32下層
45	4	SK52	E13g2	4.1	男	熟年	—	(10.8)	(29.9)	—	(21.1)	(22.0)	—	(11.7)	(30.6)	—	—	—	—	—	SI31下層
46	4	SK53	E13f2	4.5	—	1～2歳	—	(10.8)	(10.3)	(7.6)	(8.0)	(8.4)	(8.2)	(10.5)	13.0	11.0	10.5	—	—	—	SI31下層
47	4	SK54	E13e2	4.5	—	8～9歳	—	(20.0)	(20.0)	(10.0)	13.3	(11.6)	14.7	(17.9)	(25.0)	(13.0)	(13.9)	(15.2)	(14.6)	—	
48	4	SK55	E13d2	4.5	—	幼児	—	—	—	—	—	—	(5.5)	—	(10.1)	(11.4)	(8.2)	—	(8.0)	—	
49	4	SK60	E13e2	4.4	女	老年	—	(26.2)	(28.3)	(20.9)	(20.4)	(22.0)	(22.6)	(39.5)	(38.7)	(28.3)	(32.2)	(17.5)	(27.6)	—	SI31下層
50	4	SK62	F12a7	5.3	—	1歳未満	—	—	—	—	—	—	—	(9.0)	(15.0)	—	(14.0)	(4.0)	(4.5)	—	
51	4	SK75	E13f5	5.2	男	熟年	153	29.0	(28.0)	22.5	22.5	(23.5)	24.0	39.2	40.0	32.5	32.5	32.4	32.5	—	
52	4	SK76	E13e5	5.5	—	1歳前後	—	8.8	9.0	8.0	(6.9)	(7.0)	7.9	11.0	11.0	—	—	—	—	—	
53	4	SK78	E12j0	5.3	—	5～6歳	—	11.7	11.8	9.0	9.0	11.2	11.2	15.6	15.5	13.1	13.2	12.8	(10.2)	—	SI34上層
54	4	SK82	F12c7	4.9	—	1歳前後	—	9.0	9.0	(5.0)	8.0	(8.0)	(8.2)	—	11.5	—	9.0	(6.0)	(9.0)	—	SI32下層
55	4	SK83	E12j0	4.8	—	5歳頃	—	(10.3)	11.0	(10.0)	11.5	9.0	—	15.0	(15.0)	12.4	13.0	12.0	—	—	SI32下層
56	4	SK84	F12a8	4.9	女	熟年	—	—	(26.0)	—	20.3	—	(21.5)	(33.0)	(37.0)	(26.5)	(26.0)	(22.0)	(29.0)	—	SI32下層

番号	区	遺構番号	位置	標高	性別	推定死亡年齢	推定身長	各四肢骨の長さ (cm)												備考
								上腕骨		橈骨		尺骨		大腿骨		脛骨		腓骨		
								右	左	右	左	右	左	右	左	右	左	右	左	
57	4	SK85	F12a9	4.8	—	生後3ヶ月頃	—	6.9	(2.2)	—	5.1	(3.6)	5.8	9.0	7.5	7.0	(4.4)	7.0	(3.6)	SI32下層
58	4	SK86	F12a8	4.7	男	熟年	—	—	(12.2)	—	(13.2)	—	—	(21.5)	(28.3)	(26.3)	(29.7)	(18.5)	(24.2)	SI32下層
59	4	SK87	F12b7	4.6	男	熟年	—	(28.3)	(27.5)	22.8	22.8	(23.7)	24.2	(29.0)	—	(12.0)	(32.0)	(22.5)	(31.3)	SI32下層
60	4	SK88	E13e1	4.2	—	5歳頃	—	(11.3)	(13.0)	—	(8.3)	(9.2)	(11.0)	(12.7)	(14.0)	(10.8)	(15.0)	(9.8)	(10.6)	SI32下層
61	4	SK89	E13f1	4.2	—	1~2歳	—	—	(6.3)	—	(3.2)	—	(4.5)	(9.5)	(11.5)	—	—	—	—	
62	4	SK90	E13f1	4.2	—	4歳頃	—	(12.0)	(10.5)	—	(6.2)	(9.5)	(8.4)	(12.0)	16.0	(12.0)	(12.0)	(4.8)	(4.0)	
63	4	SK91	E13h2	5.0	—	4歳頃	—	12.0	12.0	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
64	4	SK92	F12e7	4.5	—	新生児	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
65	4	SK96	E13e2	3.4	—	新生児	—	5.4	5.7	4.8	5.0	5.2	5.2	7.1	7.3	6.0	6.0	5.9	6.0	SI31下層
66	4	SK98	F13a1	5.0	不明	成人	—	(29.0)	—	—	—	24.5	(21.5)	—	—	—	—	—	—	
67	4	SK100	F12a6	5.5	—	生後3~4ヶ月	—	—	—	—	—	—	—	(11.0)	—	—	—	—	—	
68	4	SK101	E12j7	4.7	男	熟年	157	28.7	28.3	(21.0)	22.8	25.0	(24.1)	41.5	41.1	33.8	33.7	33.1	32.7	SI32下層
69	4	SK102	F12b7	4.9	—	幼児	—	—	—	—	—	—	—	(13.0)	(13.0)	(8.7)	(11.0)	—	—	SI32下層
70	4	SK104	E13f1	3.7	—	4~5歳	—	12.3	—	9.0	—	(9.5)	—	—	—	—	—	—	—	
71	4	SK107	F12a8	4.6	—	6~9ヶ月	—	—	9.0	—	—	(5.0)	(5.5)	11.0	11.0	(8.5)	—	—	—	SI32下層
72	4	SK108	F12a8	4.6	男	熟年~老年	150	(18.5)	(24.5)	(18.4)	21.8	23.5	24.0	38.6	(34.2)	(28.5)	(30.0)	31.5	32.0	SI32下層
73	4	SK135	E12h0	3.4	—	死産児カ	—	—	(2.0)	—	—	(2.0)	—	(3.3)	(3.0)	—	—	—	—	
74	4	SK129	E12i5	3.9	—	1~1歳半	—	—	10.5	(4.6)	8.0	9.1	(4.3)	(9.2)	(10.5)	11.1	(6.0)	(4.5)	10.5	
75	4	SK130	E12g6	3.8	—	新生児	—	6.5	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
76	4	SK134	E12g6	3.8	—	1~1歳半	—	9.2	(9.5)	7.6	—	—	(7.5)	(12.0)	12.5	(3.5)	(9.5)	(7.0)	9.2	
77	4	SK335	C3e4	4.8	—	新生児	—	—	6.2	5.6	5.5	4.9	—	7.0	7.0	6.0	6.0	(5.7)	(5.6)	
78	4	SK524	D13e5	4.4	—	8歳前後	—	(16.0)	(5.5)	(12.0)	(11.5)	(12.0)	(12.0)	(22.5)	(18.5)	(16.0)	(15.0)	17.0	17.0	SI18下層
79	4	SK374	C13d3	4.3	—	1歳半前後	—	10.6	10.5	8.0	(6.2)	9.0	9.5	13.0	13.2	11.0	11.2	10.8	(7.0)	SI17下層
80	4	SK379	C13e1	3.5	女	20歳前後	—	(24.5)	(23.0)	(16.5)	(13.0)	(23.5)	(14.0)	(32.0)	(36.0)	(25.0)	(27.0)	(21.0)	(22.0)	
81	4	SK380	C13e1	3.4	—	1歳前後	—	(10.0)	—	—	—	—	—	(13.0)	—	—	—	—	—	
82	4	SK381	C13j4	5.2	—	4~5歳	—	11.7	11.9	8.7	8.7	9.2	9.9	15.3	15.4	12.9	12.9	12.7	12.8	
83	4	SK382	C13d3	4.1	—	新生児	—	6.0	6.0	5.0	5.0	(5.8)	(6.0)	—	7.5	—	—	—	—	SI17下層
84	4	SK388	C13e2	3.9	—	1~1歳半	—	—	(9.0)	—	(5.4)	—	(6.3)	13.0	13.0	(9.9)	11.0	(8.0)	(3.5)	SI17下層
85	4	SK389	C13e2	3.9	—	1歳前後	—	9.0	8.6	(6.0)	(4.0)	(5.0)	(5.8)	11.0	10.7	8.8	8.8	(10.0)	(7.8)	SI17下層
86	4	SK390	C13e1	3.0	—	1~1歳半	—	(7.0)	—	—	—	—	—	(11.0)	(6.5)	—	—	—	—	
87	4	SK400	D13f3	4.1	—	1歳未満	—	(8.0)	(8.5)	—	—	(5.0)	(5.3)	(10.0)	(11.2)	(7.5)	(8.3)	(5.0)	(4.0)	HK16下層
88	4	SK401	D13f5	4.2	—	4~5歳	—	(8.5)	(10.0)	(5.5)	(8.5)	—	—	17.5	(6.0)	(10.5)	(12.0)	(10.5)	(8.0)	HK16下層
89	4	SK428	C13e5	3.4	—	9歳頃	—	(16.0)	(10.7)	(9.1)	(10.2)	(10.2)	(10.3)	(17.0)	(21.0)	—	—	—	—	
90	4	SK432	D13e2	3.9	—	1歳未満	—	7.0	7.0	5.6	5.5	6.0	6.0	8.0	8.0	7.0	7.0	6.8	6.7	SI19下層
91	4	SK437	D13b2	3.6	—	新生児	—	6.6	6.9	5.2	5.2	(3.8)	6.1	7.8	7.8	6.7	6.7	6.4	6.4	SI19下層
92	4	SK438	D13e3	3.5	—	1~1歳半	—	—	—	—	—	—	—	(12.0)	(12.0)	(10.0)	(11.0)	—	—	HK16下層
93	4	SK449	E13b3	5.1	—	6ヶ月~1歳	—	—	—	(5.1)	(5.6)	(5.8)	—	10.0	(9.2)	(7.4)	(8.1)	—	—	HK24下層
94	4	SK456	E13d3	5.0	—	1歳頃	—	9.4	(9.1)	7.2	(7.1)	(7.9)	(5.6)	(10.7)	11.8	(9.0)	9.6	(6.5)	(8.8)	
95	4	SK457	C13i3	3.9	—	1歳未満	—	9.2	9.2	7.2	7.0	(7.8)	(8.2)	(10.0)	(11.1)	9.4	9.5	(9.3)	(8.7)	
96	4	SK460	E13b5	4.7	—	新生児	—	6.9	6.5	5.4	5.4	6.0	6.0	8.0	8.0	6.0	6.0	6.1	(5.0)	
97	4	SK461	E13d4	4.8	—	5~6歳	—	15.5	(13.3)	(10.5)	11.0	(12.0)	(9.7)	(19.3)	(18.5)	(15.4)	(15.9)	(8.8)	(12.3)	SI30下層
98	4	SK465	C13j3	3.4	—	6ヶ月未満	—	—	—	—	—	—	—	(8.0)	—	—	—	—	—	
99	4	SK467	D13a1	3.5	—	6ヶ月未満	—	7.5	7.0	(6.0)	(5.7)	(6.5)	6.5	8.5	8.5	(7.0)	(6.5)	(6.0)	(6.0)	
100	4	SK468	C13j2	3.6	—	1歳半頃	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
101	4	SK500	D13e2	3.4	女カ	老年	—	(24.5)	—	(16.7)	(14.4)	—	—	(15.4)	(21.0)	—	—	—	—	HK28上層
102	4	SK511	C13i4	3.4	—	13~17歳	—	(21.0)	—	(11.0)	(23.0)	—	—	(30.0)	(30.0)	—	(26.0)	(28.0)	—	
103	4	SK512	C13i4	3.4	男カ	熟年	—	(28.0)	(29.0)	(26.0)	(25.0)	(26.0)	(25.0)	(28.2)	(26.5)	(21.5)	(15.4)	(21.6)	(15.0)	
104	4	SK515	D13a2	3.0	女	壮年	—	(27.0)	(24.5)	(13.0)	(9.7)	(24.5)	—	(34.5)	(25.0)	(24.0)	(18.0)	(25.0)	(25.5)	
105	4	SK518	C13g2	3.1	男	老年	158	(26.5)	(18.5)	23.0	(22.0)	(24.0)	(20.9)	(33.3)	(35.9)	(29.7)	(32.0)	(30.0)	(31.3)	
106	4	SK519	D13e2	3.0	—	12~13歳	—	(20.0)	(18.0)	—	—	(15.5)	(8.6)	—	—	—	—	—	—	
107	4	SK521	E12g0	4.0	—	6ヶ月頃	—	(9.0)	(9.0)	(7.0)	(6.0)	(7.5)	(7.0)	—	10.0	—	(9.0)	—	(6.0)	SI15下層
108	4	SK522	E13c4	4.2	—	3~4歳	—	(10.8)	—	—	—	(9.3)	(9.5)	(13.8)	(12.8)	(12.1)	—	(6.3)	(8.1)	
109	2	HK1	F11j4	3.7	女	熟年	147	(12.4)	26.5	(17.5)	(17.0)	(16.0)	(9.0)	—	—	—	—	—	—	
人骨1	4	SH5	G12f6	8.5	—		—	(10.0)	—	—	—	—	—	(17.6)	(36.5)	—	—	(14.2)	(14.5)	
人骨2	4	SH5	G12e6	8.5	男カ	熟年	—	(16.2)	(21.8)	—	—	(20.9)	(8.5)	(24.0)	(15.9)	(22.7)	—	(21.9)	(17.4)	
—	4	SN8	G12h7	8.2	女	熟年	142	26.5	(23.9)	20.3	20.4	21.5	21.6	35.5	36.5	(27.0)	28.5	(25.0)	(16.0)	
—	4	SN21	G12c0	8.9	—	15~16歳	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	

番号	区	遺構番号	位置	標高	性別	推定死亡年齢	推定身長	各四肢骨の長さ (cm)												備考
								上腕骨		橈骨		尺骨		大腿骨		脛骨		腓骨		
								右	左	右	左	右	左	右	左	右	左	右	左	
—	4	SN21	G12c0	8.9	女	老年	—	26.5	26.5	—	(21.5)	—	(20.5)	(25.0)	38.0	(27.0)	31.0	(26.5)	30.5	
SH6	2	SN4	H13a4	8.8	—	6ヶ月～1歳	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
HK33	3	SX3	B13f2	5.6	—	幼児	—	—	13.6	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
—	3	—	B13g3	—	—	5歳頃	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
—	4	—	F13i1	5.0	—	熟年	—	29.2	—	22.0	—	24.7	—	40.5	40.0	32.3	32.5	31.7	31.3	
—	4	—	F13i1	5.0	—	1歳半頃	—	—	10.6	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
—	4	—	G13e9	—	男	老年	—	—	32.0	23.8	24.0	25.0	25.5	—	—	—	—	—	—	
—	2	—	—	—	—	6ヶ月～1歳	—	7.2	7.2	5.7	5.8	6.4	6.5	8.8	8.5	7.2	7.0	7.0	6.9	
—	4	—	—	—	男	20歳以降	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
—	4	—	—	—	—	新生児	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	

表10 土壙一覧表

番号	区	遺構番号	位置	標高	動物名	雌雄	推定死亡年齢	推定体高	確認された骨格	備考
1	2	SK267	H13c5	7.6	馬	雄	5～6歳	120前後	1 個体分	犬歯あり
2	4	SK97	F12b7	4.2	馬	雄	17～18歳	134	1 個体分	犬歯あり
3	4	SK407	C13e5	3.6	馬	雄	18～19歳	124	1 個体分	犬歯あり
4	4	SK455	C13j4	3.6	馬	雄	6～7歳	115	1 個体分	犬歯あり
5	4	SK517	D13e2	3.1	馬	雄	7～8歳	121	1 個体分	犬歯あり
6	3	SK44	B13g3	4.1	犬	雌カ	成犬	—	1 個体分	
—	4	SN168	F13f2	5.3	犬	雄	成犬	44	1 個体分	陰茎骨あり
—	4	SI20	C12h0	3.3	馬	—	死産児	—	1 個体分	S120下層

4 畝状遺構

当初、整地面（HK-10）として調査を開始したが、平行する畝状の高まりが確認されたため、畝状遺構として捉え、この項で報告する。

畝状遺構 2区HK-10（第438・439図）

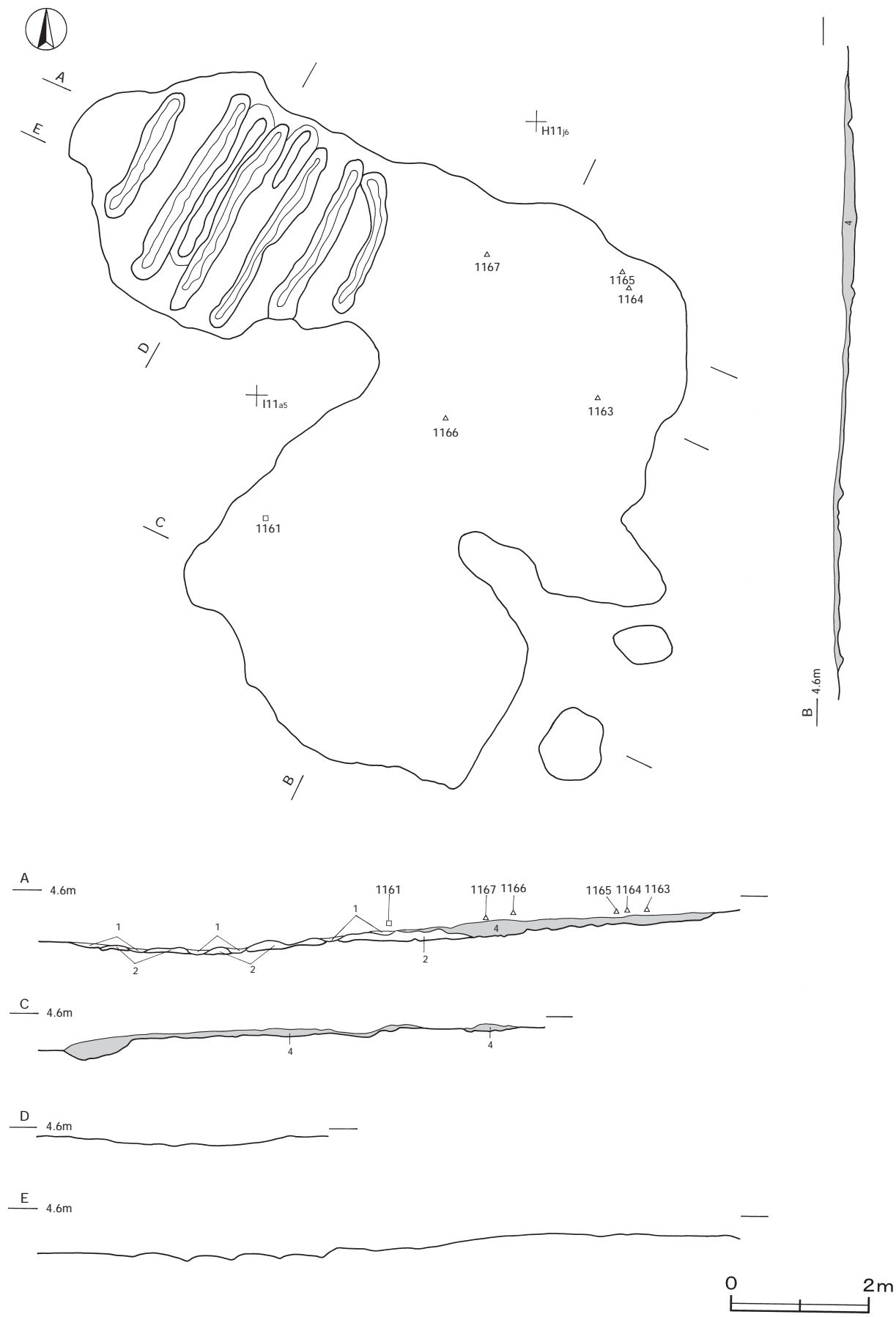
位置 調査区中央部 H11j4～H11b5区に位置している。

確認状況 表砂を3m除去し、標高約4.2～4.4mから黒色土面を確認した。さらに、黒色土面を除去すると標高約3.9～4.4mから、長さ約9.5mの平行する5本の畝と4本の畝間の畝状遺構が確認された。畝は、西に向かって緩やかに傾斜している。

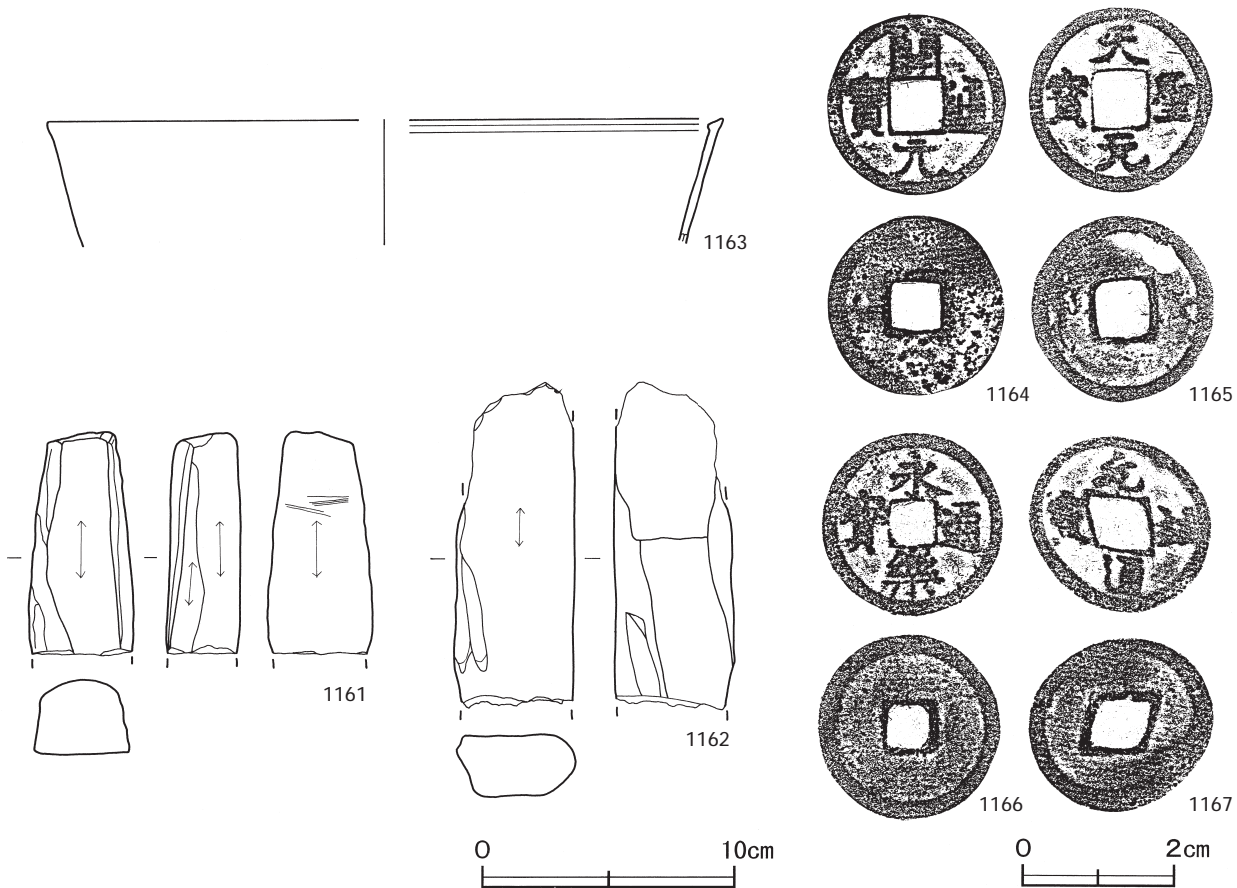
規模と施設 黒色土の範囲は、南北8.5m、東西5m、畝状遺構の位置する範囲は、南北3.5m、東西5mである。畝幅は12～40cm、畝間幅は30～40cmで、長さは最大3.1m、畝高は10cmである。

堆積状況 主体となる第2層は、厚さ約10cmの黒色土混じりの砂層である。第1層は飛砂により畝間に堆積した砂A層、第4層は整地面を構成する黒色土B層である。

遺物出土状況 土師質土器片14点（皿12、内耳鍋2）、陶器片2点（皿）、石器2点（砥石）、金属製品5点（鉄鍋1、古銭4）が出土している。1163～1165・1167は北部の覆土中から出土しており、1163は口縁部のみである。1161は西部の黒色土中、1166は中央部の黒色土面から出土している。古銭のうち、1164の「永樂通寶」が最新銭である。その他の土師質土器片は細片のため、図示できなかった。



第438図 畝状遺構実測図



第439図 畝状遺構出土遺物実測図

畝状遺構出土遺物観察表（第439図）

番号	器種	長さ(口径)	幅(器高)	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
1161	砥石	(8.9)	4.2	2.9	(176.9)	凝灰岩	砥面4面, 調整面あり	西部黒色土中	
1162	砥石	(13.0)	4.8	2.5	(213.0)	泥岩	砥面1面, 調整面あり	覆土中	
1163	鉄鍋カ	[26.8]	(5.0)	0.3	(37.7)	鉄	口縁部内面に稜あり	北部覆土中	5%

番号	銭名	径	孔径	厚さ	重さ	初鑄年	材質	特徴	出土位置	備考
1164	開元通寶	2.42	0.66	0.09	3.08	621	銅	真書	北部覆土中	
1165	天聖元寶	2.50	0.71	0.12	(3.46)	1023	銅	真書	北部覆土中	
1166	永樂通寶	2.48	0.50	0.13	4.24	1408	銅	真書	中部黒色土面	
1167	元祐通寶	—	0.65	0.11	2.94	1086	銅	行書, ゆがみ有り	北部黒色土面	

所見 プラント・オパール分析では、イネ科の植物が栽培されていた可能性が指摘された。東部の黒色土面は、畝を形成するための土壌を保管しておいた可能性がある。

表11 畝状遺構一覧表

番号	旧遺構番号	位置	長軸方向	標高	畝				畝幅 (cm)	畝間幅 (cm)	畝高 (cm)	備考
					範囲(最大値)		形状	厚さ (cm)				
					長軸 (m)	短軸 (m)						
1	2区HK10	H11j4~H11j5	N-25°-W	3.8~4.4	5.0	3.5	不定形	4~18	12~40	30~40	10	

茨城県教育財団文化財調査報告第250集

村松白根遺跡 1

大強度陽子加速器施設事業に伴う
埋蔵文化財調査報告書 1

(上巻)

平成17(2005)年3月22日 印刷
平成17(2005)年3月25日 発行

発行 財団法人 茨城県教育財団
〒310-0911 水戸市見和1丁目356番の2
茨城県水戸生涯学習センター分館内
T E L 029-225-6587

印刷 株式会社 イセブ
〒305-0005 茨城県つくば市天久保2丁目11-20
T E L 029-851-2515